

東谷・中島地区遺跡群 10

—都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

権現山遺跡北部・杉村遺跡

(2～4区・SG1区) (GN1区)

(第2分冊)

2010.3

栃 木 県 教 育 委 員 会
(財)とちぎ生涯学習文化財団

とうや なかじま
東谷・中島地区遺跡群 10

—都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

ごんげんやま すぎむら
権現山遺跡北部・杉村遺跡
(2～4区・SG1区) (GN1区)
(第2分冊)

2010. 3

栃 木 県 教 育 委 員 会
(財)とちぎ生涯学習文化財団

総目次

〔第1分冊〕

序

目次・検索表・例言

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

第2節 調査の方法

第3節 調査の経過

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

第2節 歴史的環境

第3章 調査区の配置と標準土層

第1節 杉村遺跡における調査区の配置と概要

第3節 権現山遺跡・杉村遺跡と周辺の上層

第2節 権現山遺跡における調査区の配置と概要

第4章 杉村遺跡 GN1 区

第1節 縄文時代の遺物

第4節 古墳時代の土坑

第7節 時期不明の溝状遺構

第2節 弥生時代の遺構と遺物

第5節 遺構外出土の古墳時代遺物

第8節 時期不明の土坑

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

第6節 奈良時代の竪穴建物跡

第5章 権現山遺跡各調査区の旧石器・縄文・弥生時代遺物

第1節 権現山遺跡 SG1 区の旧石器時代遺物

第3節 権現山遺跡各地区の縄文土器

第5節 権現山遺跡各地区の弥生土器

第2節 縄文時代の遺物出土状況

第4節 弥生時代の遺物出土状況

第6節 権現山遺跡各地区の石器

第6章 権現山遺跡 2 区

第1節 古墳時代の竪穴建物跡

第5節 中世の井戸跡

第9節 時期不明の竪穴建物跡

第2節 古墳時代の竪穴建物跡

第6節 遺構外出土の中世遺物

第10節 時期不明の井戸跡

第3節 古墳時代の柱穴状土坑

第7節 近世の溝状遺構

第11節 時期不明の土坑

第4節 古墳時代の遺物集中地点

第8節 時期不明の溝状遺構

第7章 権現山遺跡 2 区・杉村遺跡 GN1 区・磯岡遺跡 3 区の古環境

第1節 分析結果の概要と考古学的評価

第4節 権現山遺跡 2 区と杉村遺跡 GN1 区の植物性炭素分析

第7節 権現山遺跡 2 区出土木材の樹種同定

第2節 権現山遺跡 2 区と杉村遺跡 GN1 区のテフラ分析

第5節 権現山遺跡 2 区と磯岡遺跡 3 区における花粉分析

第3節 権現山遺跡 2 区と磯岡遺跡 3 区の放射性炭素年代測定結果

第6節 権現山遺跡 2 区における種実同定

第8章 権現山遺跡 3 区

第9章 権現山遺跡 4 区

第1節 古墳時代の竪穴建物跡

第6節 古墳時代の柱穴状土坑

第11節 時期不明の柱穴状土坑

第2節 古墳時代の竪穴建物跡

第7節 時期不明の竪穴建物跡

第12節 4 区の遺構外出土遺物

第3節 古墳時代の方形溝溝状遺構

第8節 時期不明の井戸跡

第13節 4 区東側低地の調査

第4節 古墳時代の溝

第9節 時期不明の溝状遺構

第14節 権現山遺跡 4 区に埋没谷と井戸跡 SE72 におけるテフラと古環境

第5節 古墳時代の土坑

第10節 時期不明の土坑

〔第2分冊〕

第10章 権現山遺跡 SG1 区

第1節 縄文時代の土坑

第7節 古墳時代の遺構外出土遺物

第15節 時期不明の集落遺構

第2節 古墳時代の豪族居館（首長邸宅・方形区画遺構）

第8節 古代の溝状遺構

第16節 時期不明の井戸跡

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

第9節 中世の溝状遺構

第17節 時期不明の溝状遺構

第4節 古墳時代の竪穴遺構

第10節 中世の竪穴遺構

第18節 時期不明の土坑

第5節 古墳時代の土坑・円筒形土坑・墓域

第11節 中世の井戸跡

第19節 時期不明の柱穴状土坑群

第6節 権現山遺跡 SG1 区における古墳時代土坑の土壌理化学分析

第12節 中世井戸跡の木質遺物と昆虫遺体

第20節 SG1 区東側低地の調査

第13節 中世の土坑

第21節 権現山遺跡 SG1 区におけるテフラと遺構の年代・古環境

第14節 中世～近代の遺構外出土遺物

第11章 権現山遺跡・杉村遺跡出土の鉄関連遺物

第1節 両遺跡の調査区と鉄関連遺物

第3節 金属学的分析対象資料と考古学的所見

第4節 権現山遺跡・杉村遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査

第2節 各遺構出土の鉄関連遺物

第5節 鉄関連遺構・遺物のまとめ

第12章 まとめ

第1節 旧石器・縄文・弥生時代

第2節 古墳時代

第3節 古代・中世・近世

参考文献・写真図版

第2分冊 目次

目次	i
権現山遺跡北部 遺構一覧・検索表 (第2分冊)	xiv
第10章 権現山遺跡 SG1 区	333
第1節 縄文時代の土坑	333
第2節 古墳時代の豪族居館 (首長居宅・方形区画遺構)	333
10.2.1. 居館の区画溝	337
10.2.2. 居館の堀・柵列	340
10.2.3. 居館の掘立柱建物跡	346
10.2.4. 居館の性格不明遺構 (掘立柱建物跡または柵列)	346
10.2.5. 居館の内部に所在する柱穴状土坑群	349
10.2.6. 居館周辺の出土遺物	351
第3節 古墳時代の竪穴建物跡	351
第4節 古墳時代の竪穴竊治遺構	433
第5節 古墳時代の土坑・円筒形土坑・墓壇	437
第6節 権現山遺跡 SG1 区における古墳時代土坑の土壌理化学分析 … 株式会社 古環境研究所	440
第7節 古墳時代の遺構外出土遺物	441
第8節 古代の溝状遺構	442
第9節 中世の溝状遺構	442
第10節 中世の竪穴遺構	445
第11節 中世の井戸跡	447
第12節 中世井戸跡の木質遺物と昆虫遺体 … バリノ・サーヴェイ株式会社	449
第13節 中世の土坑	451
第14節 中世～近代の遺構外出土遺物	451
第15節 時期不明の集積遺構	453
第16節 時期不明の井戸跡	453
第17節 時期不明の溝状遺構	455
第18節 時期不明の土坑	457
第19節 時期不明の柱穴状土坑群	462
10.19.1. SG1 区中央部の柱穴状土坑群	462
10.19.2. SG1 区南部の柱穴状土坑群	462
第20節 SG1 区東側低地部の調査	468
第21節 権現山遺跡 SG1 区におけるテフラと遺構の年代・古環境	470
10.21.1. 分析結果の概要と考古学的評価	470
10.21.2. 権現山遺跡 SG1 区における土層とテフラ … 株式会社 古環境研究所	471
10.21.3. 権現山遺跡 SG1 区低地における放射性炭素年代測定 … 株式会社 古環境研究所	475
10.21.4. 権現山遺跡 SG1 区低地における珪藻分析 … 株式会社 古環境研究所	476
10.21.5. 権現山遺跡 SG1 区低地と SG2 区における植物珪酸体分析 … 株式会社 古環境研究所	481
10.21.6. 権現山遺跡 SG1 区低地における花粉分析 … 株式会社 古環境研究所	487
10.21.7. 権現山遺跡 SG1 区低地における種実同定 … 株式会社 古環境研究所	489

第 11 章	権現山遺跡・杉村遺跡出土の鉄関連遺物	490
第 1 節	両遺跡の調査区と鉄関連遺構	490
第 2 節	各遺構出土の鉄関連遺物	490
第 3 節	金属学的分析対象資料と考古学的所見	498
第 4 節	権現山遺跡・杉村遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査 九州テクノリサーチ・TAC センター 大澤正己	507
第 5 節	鉄関連遺構・遺物のまとめ	534
第 12 章	まとめ	537
第 1 節	旧石器・縄文・弥生時代	537
12.1.1.	旧石器時代	537
12.1.2.	縄文時代	537
12.1.3.	弥生時代	537
第 2 節	古墳時代	538
12.2.1.	古墳時代～古代の土器変遷	538
12.2.2.	古墳時代の集落変遷	543
12.2.3.	古墳時代集落・居館の各遺構	547
12.2.4.	古墳時代の出土遺物	550
第 3 節	古代・中世・近世	554
参考文献		557
写真図版		559
報告書抄録		巻

挿図目次

第 188 図	梅現山道跡 SG1 区 縄文時代の土坑 SK-125 道構・遺物	333	第 250 図	梅現山道跡 SG1 区 古墳時代の土坑 (2) 遺物	440
第 189 図	梅現山道跡 SG1 区 全体図 (1/1,000・等高線主曲線 20m)	334	第 251 図	梅現山道跡 SG1 区 古墳時代の土坑 (3) SK-128 道構・遺物	440
第 190 図	梅現山道跡 SG1 区 北半部全体図 (1/500・等高線主曲線 20m)	335	第 252 図	梅現山道跡 SG1 区 古墳時代の道構外出土遺物	441
第 191 図	梅現山道跡 SG1 区 南半部全体図 (1/500・等高線主曲線 20m)	336	第 253 図	梅現山道跡 SG1 区 SD-31・37 道構	443
第 192 図	梅現山道跡 SG1 区 南半部土坑集中部拡大図 (1/250・等高線主曲線 20m)	337	第 254 図	梅現山道跡 SG1 区 SD-37 遺物	444
第 193 図	梅現山道跡 SG1 区 SD-95 (1) 道構	338	第 255 図	梅現山道跡 SG1 区 中世の竪穴道構 SI-155 道構・遺物	445
第 194 図	梅現山道跡 SG1 区 SD-95 (2) 遺物	340	第 256 図	梅現山道跡 SG1 区 中世の竪穴道構 SI-296 道構・遺物	446
第 195 図	梅現山道跡 SG1 区 SA-103 (1) 北辺道構	341	第 257 図	梅現山道跡 SG1 区 中世の井戸 SE-169 道構・遺物	447
第 196 図	梅現山道跡 SG1 区 SA-103 (2) 東辺道構	342	第 258 図	梅現山道跡 SG1 区 SE-169 の木材	450
第 197 図	梅現山道跡 SG1 区 SA-103 (3) 断面図・遺物	343	第 259 図	梅現山道跡 SG1 区 SD-45、SK-137・172 道構・遺物	452
第 198 図	梅現山道跡 SG1 区 SA-132 道構	344	第 260 図	梅現山道跡 SG1 区 中世・近代の道構外出土遺物	453
第 199 図	梅現山道跡 SG1 区 SB-106 道構	345	第 261 図	梅現山道跡 SG1 区 SX-131 道構	454
第 200 図	梅現山道跡 SG1 区 S-129 道構・遺物	347	第 262 図	梅現山道跡 SG1 区 時期不明の井戸 SE-113・178 道構	454
第 201 図	梅現山道跡 SG1 区 居館内柱穴状土坑群北半部 (1) 平面図	348	第 263 図	梅現山道跡 SG1 区 SD-4 道構	455
第 202 図	梅現山道跡 SG1 区 居館内柱穴状土坑群北半部 (2) 断面図	349	第 264 図	梅現山道跡 SG1 区 SD-65・67・175	456
第 203 図	梅現山道跡 SG1 区 居館内柱穴状土坑群南半部 道構	350	第 265 図	梅現山道跡 SG1 区 時期不明の土坑 (1) 道構	458
第 204 図	梅現山道跡 SG1 区 居館周辺瓦葺 出土遺物	351	第 266 図	梅現山道跡 SG1 区 時期不明の土坑 (2) 道構	460
第 205 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-1 道構・遺物	352	第 267 図	梅現山道跡 SG1 区 時期不明の土坑 (3) 道構・遺物	461
第 206 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-2 道構・遺物	354	第 268 図	梅現山道跡 SG1 区 中央部柱穴状土坑群 P-58・60・61・64・202～214 道構	463
第 207 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-3 道構・遺物	356	第 269 図	梅現山道跡 SG1 区 南部柱穴状土坑群 (1) P-221～251 道構・遺物	465
第 208 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-5 道構・遺物	359	第 270 図	梅現山道跡 SG1 区 南部柱穴状土坑群 (2) P-193～197・252～294 道構	466
第 209 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-6 道構・遺物	361	第 271 図	梅現山道跡 SG1 区 南部柱穴状土坑群 (3) P-144・215・295～303 道構	467
第 210 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-7 (1) 道構・遺物	363	第 272 図	梅現山道跡 SG1 区 南部柱穴状土坑群 (4) P-150a・160a・216～220 道構	467
第 211 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-7 (2) 遺物	364	第 273 図	梅現山道跡 SG1 区 東側地 土層断面図・遺物	469
第 212 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-8-a・b (1) 道構	368	第 274 図	梅現山道跡 SG1 区 土層状況図とテラフラ分析試料	472
第 213 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-8-a・b (2) 遺物	369	第 275 図	梅現山道跡 SG1 区 低地 B-B セクション台地寄り地点 (①地点) の土層化石分布図 (全分類群を表示)	477
第 214 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-8-a・b (3) 遺物	370	第 276 図	梅現山道跡 SG1 区 低地 B-B セクション台地寄り地点 (②地点) の土層化石分布図 (1%以上の分類群を表示)	478
第 215 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-10 (1) 道構	373	第 277 図	梅現山道跡 SG1 区 低地 C-C セクション台地寄り地点 (③地点) の土層化石分布図 (全分類群を表示)	478
第 216 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-10 (2) 遺物	374	第 278 図	梅現山道跡 SG1 区 土層化石の顕微鏡写真	480
第 217 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-11 道構・遺物	376	第 279 図	梅現山道跡 SG1 区 低地 B-B セクション台地寄り地点における植物性炭素分析結果	485
第 218 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-12 道構・遺物	378	第 280 図	梅現山道跡 SG1 区 低地 B-B セクション台地寄り地点における植物性炭素分析結果	485
第 219 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-13 (1) 道構	380	第 281 図	梅現山道跡 SG1 区 低地 C-C セクション台地寄り地点における植物性炭素分析結果	485
第 220 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-13 (2) 南東部拡大図	381	第 282 図	梅現山道跡 SG2 K の C 区から出土した須臾器内部の植物性炭素分析結果	485
第 221 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-13 (3) 遺物	382	第 283 図	梅現山道跡 SG1 区 植物性炭素の顕微鏡写真	486
第 222 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-14 道構・遺物	384	第 284 図	梅現山道跡 SG1 区の花殻・磨子遺体	487
第 223 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-17 (1) 道構	385	第 285 図	梅現山道跡 SG1 区の花殻・磨子の構成	489
第 224 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-17 (2) 遺物	386	第 286 図	梅現山道跡・杉村道跡 鉄関連遺物出土道構	491
第 225 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-18 道構・遺物	390	第 287 図	梅現山道跡・杉村道跡 鉄関連遺物構成図	492
第 226 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-32 道構・遺物	392	第 288 図	梅現山道跡・杉村道跡各地区の鉄関連遺物 (1)	493
第 227 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-34 道構・遺物	393	第 289 図	梅現山道跡・杉村道跡各地区の鉄関連遺物 (2)	494
第 228 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-35 道構	395	第 290 図	梅現山道跡北部・杉村道跡 GN1 区出土土器の	540
第 229 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-40 道構・遺物	397	変遷 (1) 土師器・高杯		
第 230 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-62 道構・遺物	399	第 291 図	梅現山道跡北部・杉村道跡 GN1 区出土土器の	541
第 231 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-66 道構・遺物	400	変遷 (2) 土師器・小形甕と須臾器		
第 232 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-69 道構・遺物	402	第 292 図	梅現山道跡北部・杉村道跡 GN1 区出土土器の	542
第 233 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-70 道構・遺物	404	変遷 (3) 土師器大形甕・甕・甔		
第 234 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-71 (1) 道構	406	第 293 図	梅現山道跡北部・杉村道跡の変遷 (1) 古墳中期	544
第 235 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-71 (2) 遺物	407	第 294 図	梅現山道跡北部・杉村道跡の変遷 (2) 古墳中期末	545
第 236 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-84 道構・遺物	410	第 295 図	梅現山道跡北部・杉村道跡の変遷 (3) 古墳後期末	546
第 237 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-85 道構・遺物	413	第 296 図	梅現山道跡北部・杉村道跡の円筒形土坑	546
第 238 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-86・87 道構・遺物	414			
第 239 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-88 道構・遺物	416			
第 240 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-89 (1) 道構・遺物	418			
第 241 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-89 (2) 遺物	419			
第 242 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-90 道構	422			
第 243 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-126・127・136 道構・遺物	424			
第 244 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-174 (1) 道構	427			
第 245 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-174 (2) 遺物	428			
第 246 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-179 道構・遺物	431			
第 247 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-33 (1) 道構	433			
第 248 図	梅現山道跡 SG1 区 SI-33 (2) 遺物	434			
第 249 図	梅現山道跡 SG1 区 古墳時代の土坑 (1) 道構	439			

第 297 図	権現山道跡北部・杉村道跡の他地域出土物	551	第 301 図	権現山道跡北部・杉村道跡の変遷 (4) 奈良・平安時代と中世	555
第 298 図	権現山道跡 SG1 区屋敷の両面器台と銅網	552	第 302 図	権現山道跡 SG1 区 SD-37 と北岡東自動車道跡調査 A 区 (1/500)	556
第 299 図	補修・亀裂のある土師器	553			
第 300 図	権現山道跡 4 区出土の埴輪車	553			

表 目 次

第 98 表	権現山道跡 SG1 区 SD-95 出土遺物	339-340	第 138 表	権現山道跡 SG1 区 古墳時代の土坑 出土遺物	440
第 99 表	権現山道跡 SG1 区 SA-103 出土遺物	343	第 139 表	権現山道跡 SG1 区 SK-128 出土遺物	440
第 100 表	権現山道跡 SG1 区 S-129 出土遺物	346	第 140 表	権現山道跡 SG1 区 古墳時代の遺構外出土遺物	441-442
第 101 表	権現山道跡 SG1 区 屋敷跡内の柱穴状土坑	349	第 141 表	権現山道跡 SG1 区 SD-37 出土遺物	444
第 102 表	権現山道跡 SG1 区 屋敷跡周辺の土坑 出土遺物	351	第 142 表	権現山道跡 SG1 区 SD-45 出土遺物	445
第 103 表	権現山道跡 SG1 区 SI-1 出土遺物	353	第 143 表	権現山道跡 SG1 区 SI-155 出土遺物	446
第 104 表	権現山道跡 SG1 区 SI-2 出土遺物	355-356	第 144 表	権現山道跡 SG1 区 SI-296 出土遺物	446
第 105 表	権現山道跡 SG1 区 SI-3 出土遺物	357	第 145 表	権現山道跡 SG1 区 SE-169 出土遺物	448
第 106 表	権現山道跡 SG1 区 SI-5 出土遺物	360-361	第 146 表	権現山道跡 SG1 区 SE-169 樹種判定結果	449
第 107 表	権現山道跡 SG1 区 SI-6 出土遺物	362	第 147 表	権現山道跡 SG1 区 中世の土坑 出土遺物	451
第 108 表	権現山道跡 SG1 区 SI-7 出土遺物	365 ~ 367	第 148 表	権現山道跡 SG1 区 中世・近世の遺構外出土遺物	453
第 109 表	権現山道跡 SG1 区 SI-8a+b 出土遺物	371-372	第 149 表	権現山道跡 SG1 区 時期不明の土坑 出土遺物	457 ~ 461
第 110 表	権現山道跡 SG1 区 SI-10 出土遺物	373 ~ 375	第 150 表	権現山道跡 SG1 区 時期不明の土坑 出土遺物	462
第 111 表	権現山道跡 SG1 区 SI-11 出土遺物	377	第 151 表	権現山道跡 SG1 区 調査区中央部の柱穴状土坑	462
第 112 表	権現山道跡 SG1 区 SI-12 出土遺物	378-379	第 152 表	権現山道跡 SG1 区 調査区南部の柱穴状土坑	464-465
第 113 表	権現山道跡 SG1 区 SI-13 出土遺物	383	第 153 表	権現山道跡 SG1 区 P-231 出土遺物	465
第 114 表	権現山道跡 SG1 区 SI-14 出土遺物	384	第 154 表	権現山道跡 SG1 区 東側開地 出土遺物	468
第 115 表	権現山道跡 SG1 区 SI-17 出土遺物	387 ~ 389	第 155 表	権現山道跡 SG1 区 デフラ検出分析結果 (1)	475
第 116 表	権現山道跡 SG1 区 SI-18 出土遺物	389 ~ 391	第 156 表	権現山道跡 SG1 区 デフラ検出分析結果 (2)	475
第 117 表	権現山道跡 SG1 区 SI-32 出土遺物	392-393	第 157 表	権現山道跡 SG1 区 放射性炭素年代測定試料と方法	475
第 118 表	権現山道跡 SG1 区 SI-34 出土遺物	394	第 158 表	権現山道跡 SG1 区 放射性炭素年代測定結果	475
第 119 表	権現山道跡 SG1 区 SI-40 出土遺物	397	第 159 表	権現山道跡 SG1 区 珪藻化石産出表	479
第 120 表	権現山道跡 SG1 区 SI-62 出土遺物	398	第 160 表	権現山道跡 SG1 区 植物性遺体分析結果	482
第 121 表	権現山道跡 SG1 区 SI-66 出土遺物	401	第 161 表	権現山道跡 SG2 区 C 区から出土した気象器内部の植物性遺体分析結果	483
第 122 表	権現山道跡 SG1 区 SI-69 出土遺物	403	第 162 表	権現山道跡 SG1 区 花粉分析結果	488
第 123 表	権現山道跡 SG1 区 SI-70 出土遺物	405	第 163 表	権現山道跡・杉村道跡 鉄同位素分析結果	495 ~ 498
第 124 表	権現山道跡 SG1 区 SI-71 出土遺物	407 ~ 409	第 164 表	権現山道跡・杉村道跡 分析資料詳細表	499 ~ 506
第 125 表	権現山道跡 SG1 区 SI-84 出土遺物	411-412	第 165 表	権現山道跡・杉村道跡の主要要素一覧表 (まとめ表)	534-535
第 126 表	権現山道跡 SG1 区 SI-85 出土遺物	413	第 166 表	権現山道跡・杉村道跡 調査区遺物数量組成	536
第 127 表	権現山道跡 SG1 区 SI-86 出土遺物	415	第 167 表	権現山道跡北部と杉村道跡 GNI 区における古墳時代・古代・中世遺構と時期区分	539
第 128 表	権現山道跡 SG1 区 SI-87 出土遺物	415	第 168 表	権現山道跡北部と杉村道跡 GNI 区におけるカマドの位置	548
第 129 表	権現山道跡 SG1 区 SI-88 出土遺物	416	第 169 表	各調査区の古墳時代集落における竪穴建物と円筒形土坑	548
第 130 表	権現山道跡 SG1 区 SI-89 出土遺物	420-421			
第 131 表	権現山道跡 SG1 区 SI-136 出土遺物	422			
第 132 表	権現山道跡 SG1 区 SI-127 出土遺物	425			
第 133 表	権現山道跡 SG1 区 SI-136 出土遺物	426			
第 134 表	権現山道跡 SG1 区 SI-174 出土遺物	429-430			
第 135 表	権現山道跡 SG1 区 SI-179 出土遺物	432			
第 136 表	権現山道跡 SG1 区 SI-33 出土遺物	436-437			
第 137 表	権現山道跡 SG1 区 古墳時代の土坑	438			

写真図版目次

図版一	航空写真 杉村道跡 GNI 区 GNI 区全景 (南上空から) GNI 区全景 (東上空から)	図版五	GNI 区 SI-3 カマド遺物出土状況 (東から) 杉村道跡 GNI 区 古墳時代の竪穴建物跡 GNI 区 SI-3 カマド遺物出土状況 (南東から) GNI 区 SI-3 南町蔵穴 P5 上層遺物出土状況 (南から) GNI 区 SI-3 南町蔵穴 P6 下層遺物出土状況 (南から) GNI 区 SI-3 北西町蔵穴 P5 (南から) GNI 区 SI-4 遺物出土状況 (南から) GNI 区 SI-4 掘方 (南から) GNI 区 SI-4 北西部遺物流入状況 (南西から) GNI 区 SI-4 カマド (南から)
図版二	航空写真 杉村道跡 GNI 区 GNI 区全景 (西上空から) GNI 区全景 (北東上空から)	図版六	杉村道跡 GNI 区 古墳時代の竪穴建物跡 GNI 区 SI-4 北西町蔵穴 P6 (南から) GNI 区 SI-4 北西柱穴 石出土状況 (南から) GNI 区 SI-4 南町蔵穴 P5 (南から) GNI 区 SI-5 全景 (南から) GNI 区 SI-5 遺物出土状況 (南から・遺物盗難前) GNI 区 SI-5 掘方 (南から) GNI 区 SI-5 カマド遺物出土状況 (南から) GNI 区 SI-5 カマド掘方 (南から)
図版三	杉村道跡 GNI 区 弥生時代の土坑、古墳時代の竪穴建物跡 GNI 区 SK-57 遺物出土状況 (南から) GNI 区 SI-1 全景 (東から) GNI 区 SI-1 遺物出土状況 (南から) GNI 区 SI-1 掘方 (南から) GNI 区 SI-1 伊 (東から) GNI 区 SI-1 町蔵穴 P5 遺物出土状況 (南から) GNI 区 SI-2 遺物出土状況 (南東から) GNI 区 SI-2 掘方 (南東から)	図版七	杉村道跡 GNI 区 古墳時代の竪穴建物跡・土坑 GNI 区 SI-5 カマド・町蔵穴 (南東から) GNI 区 SI-5 北町蔵穴 P5 遺物出土状況 (南上から) GNI 区 SI-5 南町蔵穴 P6 遺物出土状況 (南上から) GNI 区 SI-5 北東柱穴周辺 遺物出土状況 (西から)
図版四	杉村道跡 GNI 区 古墳時代の竪穴建物跡 GNI 区 SI-2 北東部出土確認状況 (南から) GNI 区 SI-2 町蔵穴 P5 遺物出土状況 (南東から) GNI 区 SI-3 遺物出土状況 (南から) GNI 区 SI-3 掘方 (南から) GNI 区 SI-3 カマド西側土層断面 (南西から) GNI 区 SI-3 カマド南北土層断面 (南東から) GNI 区 SI-3 カマド遺物出土状況 (西から)		

	GN1 区 SI-5 盗難により消失した遺物 (左から中央北東部、中央南部、カマド西より出土)		2 区 SI-1 c 期掘方 (南から)
	GN1 区 SI-5 カマド南東部の遺物 (西から)		2 区 SI-1 c 期北西部貯蔵穴 P17・P18 (南から、左上は b 期と a 期の貯蔵穴)
	左上は盗難で消失		2 区 SI-1 c 期カマド掘方 (東から)
	GN1 区 SK-53 遺物出土状況 (南から)		2 区 SI-1 c 期カマド (北から)
図版八	杉村遺跡 GN1 区 古墳時代の土坑、奈良時代の竪穴建物	図版一六	2 区 SI-1 c 期カマドおよび貯蔵穴 (南西から)
	GN1 区 SK-53 全量 (南東から)		権現山遺跡 2 区 古墳時代の竪穴建物
	GN1 区 SI-6 全量 (南から)		2 区 SI-98 遺物出土状況 (南から)
	GN1 区 SI-6 遺物出土状況 (南から)		2 区 SI-98 全量 (南から)
	GN1 区 SI-6 掘方 (南から)		2 区 SI-98 掘方 (南から)
	GN1 区 SI-6 カマド上部断面 (南東から)		2 区 SI-98 カマド全量 (南から)
	GN1 区 SI-6 カマド全量 (南から)		2 区 SI-98 カマド掘方 (南から)
	GN1 区 SI-6 南部遺物出土状況 (南から)		2 区 SI-98 P1 土層断面 (南から)
	GN1 区 SI-6 南西部遺物出土状況 (南から)		2 区 SI-98 P2 土層断面 (南から)
図版九	杉村遺跡 GN1 区 奈良時代の竪穴建物、時期不明の溝状遺構・土坑	図版一七	2 区 SI-99 a 期全量 (南から)
	GN1 区 SI-6 P2 (南東から)		権現山遺跡 2 区 古墳時代の竪穴建物
	GN1 区 SD-8 (南から)		2 区 SI-99 a 期遺物出土状況 (南から)
	GN1 区 SD-8 土層断面 (南東から)		2 区 SI-99 a 期貯蔵穴 (北から)
	GN1 区 SD-8 土層断面 (南から)		2 区 SI-99 a 期貯蔵穴 (南から)
	GN1 区 SD-24 (南西から)		2 区 SI-99 a 期カマド (南から)
	GN1 区 SD-24 土層断面 (南東から、右は SI-6)		2 区 SI-99 a 期カマド北袖土層断面 (南から)
	GN1 区 SD-64+SK-45 (南から)		2 区 SI-99 a 期カマド掘方 (南から)
	GN1 区 SK-9-10-14 ~ 19 (南から)		2 区 SI-99 a 期掘方および b 期全量 (南から)
図版一〇	杉村遺跡 GN1 区 時期不明の土坑	図版一八	2 区 SI-99 b 期掘方 (南から)
	GN1 区 SK-9 (南西から)		権現山遺跡 2 区 古墳時代の竪穴建物・掘立柱建物
	GN1 区 SK-13 土層断面 (南から)		2 区 SI-99 b 期 P11 遺物出土状況 (南から)
	GN1 区 SK-17 (西から)		2 区 SI-99 a 期 P1 (南から)
	GN1 区 SK-14 土層断面 (南西から)		2 区 SB-3 全量 (南から)
	GN1 区 SK-16 土層断面 (南西から)		2 区 SB-3 P8 土層断面 (南東から)
	GN1 区 SK-19 (東から)		2 区 SB-3 P10 遺物出土状況 (南東から)
	GN1 区 SK-18-19 (南西から)		2 区 SB-4 (南西から)
	GN1 区 SK-20 土層断面 (南西から)		2 区 SB-121 (南から)
	GN1 区 SK-23 (北東から)		2 区 SB-121 (奥)・122 (手前) (東から)
	GN1 区 中央部土坑群 (南から)	図版一九	権現山遺跡 2 区 古墳時代の掘立柱建物・柱・遺物集中地点
	GN1 区 SK-29-30-31 (西から)		2 区 SB-122 (南から)
図版一一	杉村遺跡 GN1 区 中世以降・時期不明の土坑		2 区 P-127 (南から)
	GN1 区 SK-25 (手前)・26 (西から)		2 区 P-128 (南から)
	GN1 区 SK-27 (手前)・32 (奥) (東から)		2 区 P-134 (南から)
	GN1 区 SK-28 (東から)		2 区 SX-94 全量および遺物出土状況 (西上から)
	GN1 区 SK-33 (東から)		2 区 SX-94 遺物出土状況 (南から)
	GN1 区 SK-42 ~ 44 (南から)		2 区 SX-94 遺物出土状況 (南西から)
	GN1 区 SK-50 土層断面 (南から)	図版二〇	2 区 SX-94 遺物出土状況 (東から)
	GN1 区 SK-60 (南から)		権現山遺跡 2 区 中世の井戸跡、近世の溝状遺構
	GN1 区 SK-61 (南から)		2 区 SE-63 (南から)
	GN1 区 SK-62 (南から)		2 区 SD-5a 南西部 (南から)
	GN1 区 SK-63 (南から)		2 区 SD-5a 南部 (西から)
図版一二	GN1 区 南西部低地 (北東から)		2 区 SD-5a (右)・5b (左奥) (西から)
	航空写真 権現山遺跡 2 区		2 区 SD-5b 東部 (南から)
	2 区全量 (北上空から)		2 区 SD-5b 北東部 (東から)
	2 区全量 (南上空から)		2 区 SD-5b 北部土層断面 (南から)
	2 区全量 (東上空から)	図版二一	2 区 SD-51 (南西から)
図版一三	権現山遺跡 2 区 航空写真、古墳時代の竪穴建物		権現山遺跡 2 区 近世および時期不明の溝状遺構
	2 区北半部 (西上空から)		2 区 SD-51 中央部土層断面 (北東から)
	2 区 SI-1 a 期全量 (南から)		2 区 SD-118 全量 (西から)
	2 区 SI-1 a 期遺物出土状況 (南から)		2 区 SD-118 中央部土層断面 (東から)
	2 区 SI-1 a 期南部遺物出土状況 (南から)		2 区 SD-118 東部土層断面 (東から)
	2 区 SI-1 a 期南側貯蔵穴 (南から)		2 区 SD-2 (東から)
図版一四	権現山遺跡 2 区 古墳時代の竪穴建物		2 区 SD-44 (南から)
	2 区 SI-1 a 期カマド (南から)		2 区 SD-68 全量 (北西から)
	2 区 SI-1 a 期カマド掘方 (南から)	図版二二	2 区 SD-68 南部土層断面 (東から)
	2 区 SI-1 a 期カマド周辺遺物出土状況 (南から)		権現山遺跡 2 区 時期不明の溝状遺構・掘立柱建物、井戸跡
	2 区 SI-1 a 期カマド周辺掘方 (南から)		2 区 SD-68 北部土層断面 (東から)
	2 区 SI-1 b 期全量および遺物出土状況 (南から)		2 区 SD-75 (北から)
	2 区 SI-1 a 期掘方および b 期南西部 (西から)		2 区 SD-78 (南から)
	2 区 SI-1 b 期カマド掘方 (南から)		2 区 SD-120 (南から)
	2 区 SI-1 b 期カマド全量 (南から)		2 区 SB-126 (南から)
図版一五	権現山遺跡 2 区 古墳時代の竪穴建物		2 区 SE-46 (南から)
	2 区 SI-1 b 期カマド上部 (東から)		2 区 SE-73 (南東から)
	2 区 SI-1 b 期東部周溝 (南から)		2 区 SE-88 土層断面 (南東から)
	2 区 SI-1 b 期東部周溝土層断面 (北から)		

図版二五 権現山遺跡 2 区 時期不明の土坑
2 区 SK-6 (南から、天井部崩落後)
2 区 SK-7 (南から)
2 区 SK-8 (南から)
2 区 SK-9 (南から)
2 区 SK-10 (南から)
2 区 SK-12 (南から)
2 区 SK-13 (南から)
2 区 SK-11 (東から)
2 区 SK-14 (南から)
2 区 SK-15 (南から)
2 区 SK-16 (南から)

図版二六 権現山遺跡 2 区 時期不明の土坑
2 区 SK-17 (南から)
2 区 SK-18 (南から)
2 区 SK-19 (南から)
2 区 SK-20 (南から)
2 区 SK-21 (南から)
2 区 SK-22 (南から)
2 区 SK-23 (南から)
2 区 SK-24 (南から)
2 区 SK-25 (南から)

図版二七 権現山遺跡 2 区 時期不明の土坑
2 区 SK-26 (南から)
2 区 SK-27 (南から)
2 区 SK-28 (南から)
2 区 SK-29 (南から)
2 区 SK-30 (南から)
2 区 SK-30-31 (南から)
2 区 SK-32 (南から)
2 区 SK-33 全景 (南から)
2 区 SK-33 土層断面 (北東から)

図版二八 権現山遺跡 2 区 時期不明の土坑
2 区 SK-34 (東から)
2 区 SK-35 (南から)
2 区 SK-36 (南から)
2 区 SK-37 (東から)
2 区 SK-38 (南から)
2 区 SK-39 (南から)
2 区 SK-40 (南から)
2 区 SK-41 (南から)
2 区 SK-42 (南から)
2 区 SK-43 (南から)
2 区 SK-45 (南から)

図版二九 権現山遺跡 2 区 時期不明の土坑
2 区 SK-47・48 (西から)
2 区 SK-49-50 (南から)
2 区 SK-52 (南から)
2 区 SK-53 (南から)
2 区 SK-54 (南から)
2 区 SK-55 (南から)
2 区 SK-56・57・58 (南から)
2 区 SK-59 (南から)
2 区 SK-60 (南から)
2 区 SK-61・62 (南から)

図版三〇 権現山遺跡 2 区 時期不明の土坑
2 区 SK-64 (南から)
2 区 SK-65・66 (南西から)
2 区 SK-67 (南から)
2 区 SK-70 (西から)
2 区 SK-71・72 (南から)
2 区 SK-74 (南から)
2 区 SK-76・77 (西から)
2 区 SK-80 (南から)
図版三一 権現山遺跡 2 区 時期不明の土坑
2 区 SK-96 (東から)
2 区 SK-97 (南から)
2 区 SK-100 (南から)
2 区 SK-102 (南から)
2 区 SK-103 (南から)
2 区 SK-104 (南から)
2 区 SK-103-104 (北東から)

図版三二 権現山遺跡 2 区 時期不明の土坑
2 区 SK-105 (南から)
2 区 SK-106 (南から)
図版三三 権現山遺跡 2 区 時期不明の土坑
2 区 SK-107 (南から)
2 区 SK-108 (南から)
2 区 SK-109 (南から)
2 区 SK-110・111 (南から)
2 区 SK-112 (南から)
2 区 SK-113 (南から)
2 区 SK-114 (南から)
2 区 SK-116 (南から)
2 区 SK-117 (南から)

図版三四 権現山遺跡 2 区 時期不明の土坑
2 区 SK-119 (南から)
2 区 SK-123 (南から)
2 区 SK-124 (南から)
2 区 SK-125 (南から)
2 区 SK-129 (南から)
2 区 SK-130 (南から)
2 区 SK-131 (南から)
2 区 SK-132 (南から)
2 区 SK-133 (南から)

図版三五 権現山遺跡 4 区 航空写真
4 区 全景 (北上空から)
4 区 全景 (東上空から)
図版三六 権現山遺跡 4 区 古墳時代の竪穴建物跡
4 区 SI-1 遺物出土状況 (南から)
4 区 SI-1 掘方 (南から)
4 区 SI-1 P3 遺物出土状況 (北から)
4 区 SI-2 遺物出土状況 (西から)
4 区 SI-2 掘方 (西から)
4 区 SI-2 カマド遺物出土状況 (西から)
4 区 SI-2 東側遺物出土状況 (西から)
4 区 SI-2 南側遺物出土状況 (北から)

図版三七 権現山遺跡 4 区 古墳時代の竪穴建物跡
4 区 SI-2 貯蔵穴 (南から)
4 区 SI-3(手前)・4(奥) 遺物出土状況 (南から)
4 区 SI-3 遺物出土状況 (南から)
4 区 SI-3(左)・4(右) 掘方 (南東から、手前は SI-11)
4 区 SI-3 カマド遺物出土状況 (南から)
4 区 SI-3 カマドおよび土層断面 (南から)
4 区 SI-3 北東部遺物出土状況および土層断面 (南東から)

図版三八 権現山遺跡 4 区 古墳時代の竪穴建物跡
4 区 SI-3 南東部 杯(1) 出土状況 (南から)
図版三九 権現山遺跡 4 区 古墳時代の竪穴建物跡
4 区 SI-3 南東部柱穴 P4 土層断面 (南から)
4 区 SI-4 遺物出土状況 (南から)
4 区 SI-4 掘方 (西から)
4 区 SI-4 カマド遺物出土状況 (西から)
4 区 SI-4 順(5)と貯蔵穴の関係 (西から)
4 区 SI-4 北東部遺物出土状況 (東から)
4 区 SI-4 北西部遺物出土状況 (北から)
4 区 SI-5 遺物出土状況 (南から)

図版四〇 権現山遺跡 4 区 古墳時代の竪穴建物跡
4 区 SI-5 掘方 (南から)
4 区 SI-5 貯蔵穴 (南から)
4 区 SI-6 全景 (東から、手前は SI-7)
4 区 SI-6 掘方 (東から)
4 区 SI-7 遺物出土状況 (南から、手前は SI-9)
4 区 SI-7 全景 (南西から)
4 区 SI-7 カマド (北から)

図版四一 権現山遺跡 4 区 古墳時代の竪穴建物跡
4 区 SI-7 貯蔵穴 P5 と人ロビット P7 (北から)
図版四二 権現山遺跡 4 区 古墳時代の竪穴建物跡
4 区 SI-7 北東部壁上 (東から)
4 区 SI-7・8(奥) 掘方 (南から、手前は SI-9)
4 区 SI-8 全景 (南西から)
4 区 SI-9 遺物出土状況 (南から)
4 区 SI-9 掘方 (南から、手前は SK-104)
4 区 SI-9 カマド遺物出土状況 (南から)
4 区 SI-9 北西部遺物出土状況 (南から)
4 区 SI-10 遺物出土状況 (南から)

図版三八 権現山遺跡 4区 古墳時代の竪穴建物跡
4区 SI-10 FA テフラ上面の遺物出土状況 (南から)
4区 SI-10 南東部 FA テフラ上面の遺物 (南西から)
4区 SI-10 掘方 (南から)
4区 SI-10 カマド遺物出土状況 (西から)
4区 SI-10 カマド掘方 (西から)
4区 SI-10 貯蔵穴および遺物出土状況 (南から)
4区 SI-10 南部盛土 (南から)
4区 SI-10 砂 (南から)

図版三九 権現山遺跡 4区 古墳時代の竪穴建物跡
4区 SI-10 北西部 FA テフラ上面の遺物 (南から)
4区 SI-10 南西土柱と遺物 (西から)
4区 SI-11 遺物出土状況 (南から、手前は SK-48)
4区 SI-11 掘方 (東から、門間形土坑は SK-49)
4区 SI-11 カマド (南から)
4区 SI-11 貯蔵穴 (粘土入) (北から)
4区 SI-11 北東部遺物出土状況 (南から)
4区 SI-11 北西部遺物出土状況 (南から)

図版四〇 権現山遺跡 4区 古墳時代の竪穴建物跡
4区 SI-11 西部遺物出土状況 (東から)
4区 SI-11 南部遺物出土状況 (南から)
4区 SI-12 (奥)・13 (手前) 全量 (南から)
4区 SI-12・54 (手前)・13 (奥) 掘方 (北東から)
4区 SI-12・13・54 掘方 (南西から)
4区 SI-12 カマド遺物出土状況 (西から)
4区 SI-12 カマド遺物出土状況 (南から)
4区 SI-13 遺物出土状況 (南西から)

図版四一 権現山遺跡 4区 古墳時代の竪穴建物跡
4区 SI-13 遺物出土状況 (北東から)
4区 SI-13 掘方 (南東から)
4区 SI-13 カマド遺物出土状況 (西から)
4区 SI-13 カマド遺物出土状況 (南から)
4区 SI-13 新貯蔵穴 P4 (南西から)
4区 SI-14 遺物出土状況 (南から)
4区 SI-14 掘方 (南から)
4区 SI-14 カマド遺物出土状況 (北から)

図版四二 権現山遺跡 4区 古墳時代の竪穴建物跡
4区 SI-14 カマド遺物出土状況 (南から)
4区 SI-14 カマド掘方 (東から)
4区 SI-14 カマド全量 (南から)
4区 SI-14 貯蔵穴 (南から)
4区 SI-15 (奥)・16 (手前) 全量 (南西から)
4区 SI-15 (奥)・16 (手前) 掘方 (南西から)
4区 SI-15 カマド全量 (南から)
4区 SI-16 貯蔵穴遺物出土状況 (東から)

図版四三 権現山遺跡 4区 古墳時代の竪穴建物跡
4区 SI-16 砂 (南から)
4区 SI-16 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)
4区 SI-16 南東部 高杯 (南) 出土状況 (南から)
4区 SI-16 東部 小形竪 (20) 出土状況 (南から)
4区 SI-17 全量 (南から)
4区 SI-17 カマド (南から)
4区 SI-17・18・19 掘方 (南東から)
4区 SI-18 全量 (南から)

図版四四 権現山遺跡 4区 古墳時代の竪穴建物跡
4区 SI-18 カマド (南から)
4区 SI-18 貯蔵穴 (東から)
4区 SI-18 遺物 (15・16) 出土状況 (南から)
4区 SI-17 (奥)・19 (手前) 全量 (南東から)
4区 SI-20 全量 (南東から)
4区 SI-20 掘方 (南から)
4区 SI-20 貯蔵穴 (南から)
4区 SI-20 砂 1 (南から)

図版四五 権現山遺跡 4区 古墳時代の竪穴建物跡
4区 SI-20 砂 2 (南東から)
4区 SI-20 砂 3 (南から)
4区 SI-21 遺物出土状況 (南東から)
4区 SI-21 カマド (南から)
4区 SI-21 南部遺物出土状況 (北東から)
4区 SI-21 掘出ピット P5 (北から)
4区 SI-22 遺物 (5) 出土状況 (北東から)
4区 SI-24 遺物出土状況 (南から)

図版四六 権現山遺跡 4区 古墳時代の竪穴建物跡
4区 SI-24・76 全量 (南から)
4区 SI-24 カマド遺物出土状況 (南から)
4区 SI-24 カマド遺物出土状況 (北から)
4区 SI-24 西部遺物出土状況 (南から)
4区 SI-24 北東部遺物出土状況 (北から)
4区 SI-24 南東部遺物出土状況 (北から)
4区 SI-24 西部遺物出土状況 (南西から)
4区 SI-25 遺物出土状況 (南西から)

図版四七 権現山遺跡 4区 古墳時代の竪穴建物跡
4区 SI-25 掘方 (南西から)
4区 SI-25 南東部遺物出土状況 (南東から)
4区 SI-25 南東部遺物出土状況 (北西から)
4区 SI-25 貯蔵穴周辺 (南から)
4区 SI-26 遺物出土状況 (南から)
4区 SI-26 掘方 (南から)
4区 SI-26 カマド遺物出土状況 (南から)
4区 SI-26 カマド掘方 (南から)

図版四八 権現山遺跡 4区 古墳時代の竪穴建物跡
4区 SI-26 貯蔵穴 (東から)
4区 SI-26 奥 (10) 出土状況 (南から)
4区 SI-26 北西部 石 出土状況 (南東から)
4区 SI-27 遺物出土状況 (南から)
4区 SI-27 掘方 (南から)
4区 SI-27 砂埋込遺物出土状況 (南東から)
4区 SI-27 北西部貯蔵穴 P7 (南東から)
4区 SI-27 南東部貯蔵穴 P6 (南から)

図版四九 権現山遺跡 4区 古墳時代の竪穴建物跡
4区 SI-27 北西部遺物出土状況 (西から)
4区 SI-27 南西部遺物出土状況 (西から)
4区 SI-28 遺物出土状況 (西から)
4区 SI-28 掘方 (東から)
4区 SI-28 カマド遺物出土状況 (西から)
4区 SI-28 カマド掘方 (西から)
4区 SI-28 貯蔵穴 (南から)
4区 SI-28 南東部 奥 (10) 出土状況 (西から)

図版五〇 権現山遺跡 4区 古墳時代の竪穴建物跡
4区 SI-28 紡錘車 (13～15) 出土状況 (南から)
4区 SI-29 全量および遺物出土状況 (南から)
4区 SI-29 掘方 (南から)
4区 SI-29 北東部遺物出土状況 (南西から)
4区 SI-29 北東部貯蔵穴 P5 (南から)
4区 SI-29 南東部貯蔵穴 P6 (南から)
4区 SI-29 北西部貯蔵穴 P7 (東から)
4区 SI-29 砂 (南から)

図版五一 権現山遺跡 4区 古墳時代の竪穴建物跡
4区 SI-29 小形竪 (8) と炭化材 出土状況 (東から)
4区 SI-30 a 期遺物出土状況 (南から)
4区 SI-30 a 期カマド遺物出土状況 (南から)
4区 SI-30 a 期貯蔵穴 P5 (南から)
4区 SI-30 a 期掘方・b 期全量 (南から)
4区 SI-30 b 期カマド (南から)
4区 SI-30 b 期北西部貯蔵穴 P12 (南から)
4区 SI-30 b 期南東部貯蔵穴 P11 (南から)

図版五二 権現山遺跡 4区 古墳時代の竪穴建物跡
4区 SI-31 遺物出土状況 (南から)
4区 SI-31 掘方 (南から)
4区 SI-31 南東部遺物出土状況 (東から)
4区 SI-31 南東部遺物出土状況 (北から)
4区 SI-31 北部 小形竪 (13) 出土状況 (東から)
4区 SI-32 掘方 (東から)
4区 SI-32 全量および遺物出土状況 (南から)
4区 SI-32 新貯蔵穴 P5・P6 土層断面 (南から)

図版五三 権現山遺跡 4区 古墳時代の竪穴建物跡
4区 SI-33 遺物出土状況 (南から)
4区 SI-33 掘方 (東から)
4区 SI-33 カマド遺物出土状況 (北から)
4区 SI-33 カマド遺物出土状況 (南から)
4区 SI-34 掘方 (南から)
4区 SI-34 (奥)・SK-35 (手前) (南から)
4区 SI-54 全量 (南から、手前は SI-12・13)
4区 SI-59 遺物出土状況 (南から、右手前は SI-27)

図版五四	権現山遺跡 4 区 古墳時代の竪穴建物跡	4 区 SK-109 (南東から)
	4 区 SI-59 掘方 (南から)	4 区 SK-113 (南から)
	4 区 SI-59 カマド (南から)	4 区 SK-120 (東から)
	4 区 SI-59 南西部遺物出土状況 (東から)	図版六二 権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑
	4 区 SI-59 南部遺物出土状況 (南西から)	4 区 SK-123 遺物出土状況 (南東から)
図版五五	権現山遺跡 4 区 古墳時代の竪穴建物跡	4 区 SK-123 遺物出土状況 (北から)
	4 区 SI-59 北西部遺物出土状況 (西から)	4 区 SK-125 土層断面 (東から)
	4 区 SI-59 南部盛上 (北から)	4 区 SK-127 (南から)
	4 区 SI-59 カマドおよび奥 (41) 出土状況 (南東から)	4 区 SK-129 (南西から)
	4 区 SI-74 遺物出土状況 (南から)	4 区 SK-129 (南から)
図版五六	権現山遺跡 4 区 古墳時代の竪穴建物跡	4 区 SK-133 (南から)
	4 区 SI-74 掘方 (東から)	4 区 SK-135 (南東から)
	4 区 SI-74 カマド遺物出土状況 (南から)	図版六三 権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑、時期不明の掘立柱建物跡・井戸跡
	4 区 SI-74 カマド遺物出土状況 (南東から)	4 区 SK-135 (南から)
	4 区 SI-74 カマド掘方 (南から)	4 区 SK-132 (南から)
図版五七	権現山遺跡 4 区 古墳時代の掘立柱建物跡・溝状遺構・円形鹿溝遺構・柱穴・土坑	4 区 SB-153 (東から)
	4 区 SB-62 (南東から、人物入)	4 区 SB-153 (南から)
	4 区 SB-63 (南東から)	4 区 SB-155 (南から)
	4 区 SD-143 (南西から)	4 区 SE-72 土層断面 (南から)
	4 区 SD-143 (南から)	4 区 SE-73 土層断面 (北から)
図版五八	権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑	図版六四 権現山遺跡 4 区 時期不明の土坑
	4 区 SK-48 (北から)	4 区 SK-36 (南から)
	4 区 SK-52 (南から)	4 区 SK-50 (南東から)
	4 区 SK-53 (南西から)	4 区 SK-51 (南東から)
	4 区 SK-58 (南東から)	4 区 SK-68 (南東から)
図版五九	権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑	4 区 SK-69 (南東から)
	4 区 SK-60 (南から)	4 区 SK-70 (南から)
	4 区 SK-64 (南東から)	4 区 SK-80 (南から)
	4 区 SK-65 (南から)	4 区 SK-83 (西から)
	4 区 SK-71 (南東から)	図版六五 権現山遺跡 4 区 時期不明の土坑
図版六〇	権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑	4 区 SK-88 (南西から)
	4 区 SK-75 (南から)	4 区 SK-89 (南東から)
	4 区 SK-77 (東から)	4 区 SK-91 (東から)
	4 区 SK-79 (北から)	4 区 SK-106 (北から)
	4 区 SK-82 (東から)	4 区 SK-111 (東から)
図版六一	権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑	4 区 SK-112 (北から)
	4 区 SK-82(左) (南から、中央は手前から P.148・149・150)	4 区 SK-118 (西から)
	4 区 SK-84 (南東から)	4 区 SK-119 (西から、手前は SK-142)
	4 区 SK-85 (南東から)	図版六六 権現山遺跡 4 区 時期不明の土坑・柱穴
	4 区 SK-86 遺物出土状況 (南から)	4 区 SK-121 (南東から)
図版六二	権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑	4 区 SK-122 (南から)
	4 区 SK-87 (南から)	4 区 SK-128(手前)・134(奥) (南から)
	4 区 SK-94 (東から)	4 区 SK-146 (南東から)
	4 区 SK-94 土層断面 (東から)	4 区 SK-147 (南東から)
	4 区 SK-95 (東から)	4 区 P-150 (東から)
図版六三	権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑	4 区 P-149 (東から)
	4 区 SK-96 遺物出土状況 (西から)	4 区 P-148 (南から)
	4 区 SK-97(左)・137(右) (南東から)	4 区 P-151(手前)・152(奥) (東から)
	4 区 SK-98(右)・99(左) (東から)	図版六七 権現山遺跡 SG1 区 航空写真
	4 区 SK-99 (南東から)	SG1 区全景 (東上空から)
図版六四	権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑	SG1 区全景 (南上空から)
	4 区 SK-100 (南から)	図版六八 権現山遺跡 SG1 区 航空写真
	4 区 SK-101 (南東から)	SG1 区全景 (南東上空から)
	4 区 SK-102 (東から)	SG1 区全景 (北上空から)
	4 区 SK-104 (南西から)	図版六九 権現山遺跡 SG1 区 家族居跡跡
図版六五	権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑	SG1 区家族居跡跡全景 (北東から)
	4 区 SK-105 (北から)	SG1 区家族居跡跡北部 (北から)
		SG1 区 SB-106 (北から)
		SG1 区 SB-106 柱穴 P11 土層断面 (東から)
		図版七〇 権現山遺跡 SG1 区 家族居跡跡
図版六六	権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑	SG1 区家族居跡跡全景 (北から)
	4 区 SK-109 (南東から)	SG1 区 SB-106 周辺 柱配置復原 (北から)
	4 区 SK-113 (南から)	SG1 区 SB-106 付近 (南西から)
	4 区 SK-120 (東から)	SG1 区 SB-106 付近 (東から)
	4 区 SK-123 遺物出土状況 (南東から)	SG1 区 SA-103-S-129-SD-95 (南から)
図版六七	権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑	SG1 区 SA-103-S-129 柱配置復原 (南から)
	4 区 SK-123 遺物出土状況 (北から)	SG1 区 SA-103-SA-132 柱配置復原 (北西から)
	4 区 SK-125 土層断面 (東から)	SG1 区 SA-103-SB-106 調査風景 (南東から)
	4 区 SK-127 (南から)	
	4 区 SK-129 (南西から)	
図版六八	権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑	
	4 区 SK-129 (南から)	
	4 区 SK-133 (南から)	
	4 区 SK-135 (南東から)	
	図版六三 権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑、時期不明の掘立柱建物跡・井戸跡	
図版六九	権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑	
	4 区 SK-135 (南から)	
	4 区 SK-132 (南から)	
	4 区 SB-153 (東から)	
	4 区 SB-153 (南から)	
図版七〇	権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑	
	4 区 SB-155 (南から)	
	4 区 SE-72 土層断面 (南から)	
	4 区 SE-73 土層断面 (北から)	
	図版六四 権現山遺跡 4 区 時期不明の土坑	

図版七一 梅理山遺跡 SG1 区 縄文時代の土坑、古墳時代の竪穴建物跡

SG1 区 SK-125 遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-1 遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-1 掘方 (南から)
SG1 区 SI-1 南東部遺物出土状況 (北から)
SG1 区 SI-1 伊1 土層断面 (南から)
SG1 区 SI-1 伊2 (南から)
SG1 区 SI-1 伊2 土層断面 (南から)
SG1 区 SI-2 遺物出土状況 (南から)

図版七二 梅理山遺跡 SG1 区 古墳時代の竪穴建物跡

SG1 区 SI-2 掘方 (南から)
SG1 区 SI-2 カマド遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-2 カマド (南西から)
SG1 区 SI-2 カマド掘方 (南から)
SG1 区 SI-3 遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-3 掘方 (南から)
SG1 区 SI-3 カマド (南から)
SG1 区 SI-5 遺物出土状況 (南から)

図版七三 梅理山遺跡 SG1 区 古墳時代の竪穴建物跡

SG1 区 SI-5 掘方 (西から)
SG1 区 SI-5 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-6 全景 (南から)
SG1 区 SI-6 遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-6 掘方 (南から)
SG1 区 SI-6 南東部遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-6 北部遺物出土状況 (西から)
SG1 区 SI-6 盛土状況 (東から)

図版七四 梅理山遺跡 SG1 区 古墳時代の竪穴建物跡

SG1 区 SI-6 小形遺物出土状況 (北西から)
SG1 区 SI-7 全景 (東から)
SG1 区 SI-7 掘方 (東から)
SG1 区 SI-7 遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-7 西部部掘形盛土 (北から)
SG1 区 SI-7 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-7 貯蔵穴西側の出土遺物 (西から)
SG1 区 SI-7 北東柱穴・小形築土状況 (北東から)

図版七五 梅理山遺跡 SG1 区 古墳時代の竪穴建物跡

SG1 区 SI-7 東部遺物出土状況 (北から)
SG1 区 SI-8 a 附全景 (西から)
SG1 区 SI-8 a 附遺物出土状況 (北から)
SG1 区 SI-8 a 附・掘方 (西から)
SG1 区 SI-8 a 附カマド遺物出土状況 (西から)
SG1 区 SI-8 a 附貯蔵穴 (右)・b 附貯蔵穴 (左) (南から)
SG1 区 SI-10 遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-10 掘方 (南から)

図版七六 梅理山遺跡 SG1 区 古墳時代の竪穴建物跡

SG1 区 SI-10 カマド遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-10 北東部遺物出土状況 (南西から)
SG1 区 SI-10 カマド周辺遺物出土状況 (南東から)
SG1 区 SI-10 カマド支脚現存状況 (南から)
SG1 区 SI-10 貯蔵穴遺物出土状況 (北から)
SG1 区 SI-11 遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-11 掘方 (南から)
SG1 区 SI-12 全景 (南西から)

図版七七 梅理山遺跡 SG1 区 古墳時代の竪穴建物跡

SG1 区 SI-12 遺物出土状況 (南西から)
SG1 区 SI-12 貯蔵穴 (南から)
SG1 区 SI-12 伊 (南西から)
SG1 区 SI-13 遺物出土状況 (西から)
SG1 区 SI-13 盛土上層断面 (東から)
SG1 区 SI-13 南東部遺物出土状況 (西から)
SG1 区 SI-13 カマド遺物出土状況 (西から)
SG1 区 SI-13 石敷部遺物出土状況 (南東から)

図版七八 梅理山遺跡 SG1 区 古墳時代の竪穴建物跡

SG1 区 SI-13 石敷部遺物出土状況 (北から)
SG1 区 SI-14 遺物出土状況 (東から)
SG1 区 SI-14 全景 (南から)
SG1 区 SI-14 貯蔵穴上層断面 (南から)
SG1 区 SI-14 貯蔵穴 (南から)
SG1 区 SI-17 全景 (南から)
SG1 区 SI-17 遺物出土状況 (南から)

図版七九

SG1 区 SI-17 掘方 (南から)
梅理山遺跡 SG1 区 古墳時代の竪穴建物跡

SG1 区 SI-17 掘方石出土状況 (南から)
SG1 区 SI-17 貯蔵穴遺物出土状況 (北から)
SG1 区 SI-17 カマドおよび掘方 (南から)
SG1 区 SI-18 遺物出土状況 (南から、奥は SI-17)
SG1 区 SI-18 掘方 (南から)
SG1 区 SI-18 カマド (東から)
SG1 区 SI-18 カマド (南から)
SG1 区 SI-18 掘出ビット P5 土層断面 (南から)

図版八〇

梅理山遺跡 SG1 区 古墳時代の竪穴建物跡・竊盗遺構

SG1 区 SI-32 遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-32 掘方 (南から)
SG1 区 SI-32 カマド痕跡 (南から)
SG1 区 SI-32 南部遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-32 貯蔵穴 P5 土層断面 (南から)
SG1 区 SI-33 遺物出土状況 (西から)
SG1 区 SI-33 掘方 (西から)
SG1 区 SI-33 遺物出土状況 (南から)

図版八一

梅理山遺跡 SG1 区 古墳時代の竪穴建物跡・竊盗遺構

SG1 区 SI-33 伊1 (掘方、西から)
SG1 区 SI-33 伊2 (東から)
SG1 区 SI-33 掘方土層断面 (東から)
SG1 区 SI-34 全景 (西から、左は SI-33・右は SI-35)
SG1 区 SI-34 遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-34 掘方 (西から)
SG1 区 SI-34 カマド (南から)
SG1 区 SI-34 北東部遺物出土状況 (南から)

図版八二

梅理山遺跡 SG1 区 古墳時代の竪穴建物跡

SG1 区 SI-35 全景 (南から)
SG1 区 SI-35 掘方 (南から)
SG1 区 SI-35 カマド (西から)
SG1 区 SI-35 南東入口部 (西から)
SG1 区 SI-40 遺物出土状況 (南から、手前は SD-31・37)
SG1 区 SI-40 掘方 (南から)
SG1 区 SI-40 北東部掘出切り溝 (北から)
SG1 区 SI-40 遺物出土状況 (南から)

図版八三

梅理山遺跡 SG1 区 古墳時代の竪穴建物跡

SG1 区 SI-62 掘方 (南から)
SG1 区 SI-62 カマド (南東から)
SG1 区 SI-62 遺物出土状況 (南東から)
SG1 区 SI-66 遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-66 掘方 (南から)
SG1 区 SI-66 貯蔵穴遺物出土状況 (東から)
SG1 区 SI-66 北部遺物出土状況 (南東から)
SG1 区 SI-66 北部遺物出土状況 (南西から)

図版八四

梅理山遺跡 SG1 区 古墳時代の竪穴建物跡

SG1 区 SI-66 伊1 土層断面 (南東から)
SG1 区 SI-69 全景 (南から)
SG1 区 SI-69 遺物出土状況 (南東から)
SG1 区 SI-69 掘方 (南から)
SG1 区 SI-69 西部部遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-70 遺物出土状況 (東から)
SG1 区 SI-70 掘方 (南から)
SG1 区 SI-70 西部部遺物出土状況 (西から)

図版八五

梅理山遺跡 SG1 区 古墳時代の竪穴建物跡

SG1 区 SI-70 貯蔵穴 (北西から)
SG1 区 SI-71 遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-71 掘方 (南から)
SG1 区 SI-71 カマド土層断面 (東から)
SG1 区 SI-71 カマド遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-71 カマド西側遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-71 掘出ビット P5 遺物出土状況 (東から)
SG1 区 SI-84 遺物出土状況 (東から)

図版八六

梅理山遺跡 SG1 区 古墳時代の竪穴建物跡

SG1 区 SI-84 遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-84 土層断面 (南西から)
SG1 区 SI-85 全景および遺物出土状況 (南から)
SG1 区 SI-85 貯蔵穴遺物出土状況 (南東から)
SG1 区 SI-86 (中央)・87 (右奥) 掘方 (東から、周囲は SI-84)

図版八七	SG1区SI-88 遺物出土状況 (南から)
	SG1区SI-88 掘方 (南から)
	SG1区SI-88 東部遺物出土状況 (南から)
	梅現山遺跡 SG1区 古墳時代の竪穴建物跡
	SG1区SI-88 北部遺物出土状況 (南西から)
	SG1区SI-89 遺物出土状況 (南から)
	SG1区SI-89 掘方 (南から)
	SG1区SI-89 カマド西側の遺物 (北西から)
	SG1区SI-89 カマド西側の遺物 (南から)
	SG1区SI-89 カマド (南から)
図版八八	SG1区SI-89 東平とSK-128(黒色部) (南から)
	SG1区SI-89 南西隅と貯蔵穴 (南から)
	梅現山遺跡 SG1区 古墳時代の竪穴建物跡
	SG1区SI-89 南部盛土 (南から)
	SG1区SI-89 カマド西側の2枚重ねた杯 (西から)
	SG1区SI-90 遺物出土状況 (南から)
	SG1区SI-90 掘方 (南から)
	SG1区SI-90 カマド (南から)
	SG1区SI-90 南東隅と貯蔵穴 (南から)
	SG1区SI-126 全貌 (南から)
図版八九	SG1区SI-126 掘方 (南から)
	梅現山遺跡 SG1区 古墳時代の竪穴建物跡
	SG1区SI-127 遺物出土状況 (南から)
	SG1区SI-127 掘方 (南から)
	SG1区SI-127 杯出土状況 (南東から)
	SG1区SI-127 北西柱状遺物出土状況 (南東から)
	SG1区SI-136 遺物出土状況 (南西から)
	SG1区SI-136 掘方 (南から)
	SG1区SI-174 遺物出土状況 (西から)
	SG1区SI-174 掘方 (南から)
図版九〇	梅現山遺跡 SG1区 古墳時代の竪穴建物跡
	SG1区SI-174 カマド (南から)
	SG1区SI-174 掘出ビットP5 遺物出土状況 (北東から)
	SG1区SI-174(手前)・179(奥) 遺物出土状況 (南から)
	SG1区SI-179 遺物出土状況 (西から)
	SG1区SI-179 掘方 (北から)
	SG1区SI-179 カマド遺物出土状況 (西から)
	SG1区SI-179 カマド遺物出土状況 (西から)
	SG1区SI-179 カマド支脚出土状況 (西から)
	梅現山遺跡 SG1区 古代～中世の竪穴遺構・井戸跡・溝状遺構
図版九一	SG1区SK-53 (南東から)
	SG1区SK-55 (東から)
	SG1区SK-56 (東から)
	SG1区SK-104 遺物出土状況 (東から)
	SG1区SK-128 土層断面 (南東から)
	SG1区SK-128 耳環出土状況 (南から、周囲はSI-89)
	SG1区SI-155 遺物出土状況 (東から)
	SG1区SI-155 遺物出土状況 (南から)
	梅現山遺跡 SG1区 古代～中世の竪穴遺構・井戸跡・溝状遺構
	SG1区SI-155 土層断面 (南西から)
図版九二	SG1区SE-169 (南から、左はSK-167)
	SG1区SE-169 土層断面 (南東から)
	SG1区SE-169 石炭入状況 (南東から)
	SG1区SE-169 遺物出土状況 (北から)
	SG1区SE-169 木製品と竹の出土状況 (北から)
	SG1区SD-31 土層断面 (東から)
	SG1区SD-31・37 (東から)
	梅現山遺跡 SG1区 古代～中世の溝状遺構・土坑
	SG1区SD-31・37 (西から)
	SG1区SD-31・37 土層断面 (南東から)
図版九三	SG1区SD-31・37 土層断面 (北東から)
	SG1区SD-37 (南から)
	SG1区SD-37 (南から)
	SG1区SD-37 土層断面 (南から)
	SG1区SD-45・SK-172 遺物出土状況 (南東から)
	SG1区SD-45 (南から、手前はSK-172)
	梅現山遺跡 SG1区 中世の溝状遺構・集積遺構、時期不明の井戸跡・溝状遺構
	SG1区SD-45 C-C' 土層断面 (南から)
	SG1区SK-131 西側土坑 (北東から、右はSI-12柱穴)

図版九五	SG1区SK-131 東側土坑 (南東から)
	SG1区SE-113 土層断面 (南から)
	SG1区SE-178 土層断面 (南から)
	SG1区SD-65 (南から、周囲はSI-62)
	SG1区SD-175 (東から、奥はSK-176)
	SG1区SD-175 土層断面 (東から、右はSK-176)
	梅現山遺跡 SG1区 時期不明の土坑
	SG1区SK-21 (南西から)
	SG1区SK-23～28 (北から)
	SG1区SK-29 (南から)
図版九六	SG1区SK-30 (南から)
	SG1区SK-73(左)・74(中央)・75(右) (西から)
	SG1区SK-77 (南から)
	SG1区SK-78(奥)・79(手前) (南から)
	SG1区SK-81(奥)・82(手前) (南から)
	梅現山遺跡 SG1区 時期不明の土坑
	SG1区SK-105 (南から)
	SG1区SK-140 土層断面 (南から)
	SG1区SK-141(手前)・142(奥) 土層断面 (南から)
	SG1区SK-142 (南から)
図版九七	SG1区SK-143 土層断面 (南から、奥はSI-18)
	SG1区SK-151 土層断面 (南から)
	SG1区SK-152 (南から)
	SG1区SK-154 (南から)
	梅現山遺跡 SG1区 時期不明の土坑・柱穴
	SG1区SK-156 (南から)
	SG1区SK-157 (南から)
	SG1区SK-158 (南から、奥はSK-146・147・157)
	SG1区P-160a・SK-160b (南から)
	SG1区SK-161 (南から)
図版九八	SG1区SK-162 (南から)
	SG1区SK-163 (南から)
	SG1区SK-164 (南から)
	梅現山遺跡 SG1区 時期不明の土坑
	SG1区SK-165 (南から)
	SG1区SK-166 (南から)
	SG1区SK-167 (南西から)
	SG1区SK-168 (南西から、左はSK-183・右はSK-173)
	SG1区SK-181 (南から)
	SG1区SK-182 (南から)
図版九九	SG1区SK-183 (南西から)
	SG1区SK-185(右)・186(左)・187(奥) (南から)
	SG1区SK-187 (南から)
	梅現山遺跡各地区 旧石器・縄文・弥生時代の石器
	梅現山遺跡 SG1区出土の旧石器(尖頭器)
	梅現山遺跡各地区出土の石礫
	梅現山遺跡各地区出土の片打石器・スクレイパー
	梅現山遺跡各地区出土の剥片・石核
	梅現山遺跡各地区出土の礫器
	梅現山遺跡各地区 旧石器・縄文・弥生時代の石器
図版一〇〇	梅現山遺跡各地区出土の打製石斧
	梅現山遺跡各地区出土の磨石・石皿
	杉村遺跡 GN1区 縄文・弥生時代の遺物・古墳時代の鉄斧・鉄製品
	GN1区 遺構外出土の縄文土器・石器
	GN1区 遺構外出土の弥生土器
	GN1区SK-57 弥生土器
	GN1区SI-3 鉄斧
	GN1区SI-5 鉄鋸 (右はX線写真)
	梅現山遺跡各地区 遺構外出土の縄文土器
	縄文土器 第1群～第2群1類
図版一〇一	縄文土器 第2群2類1種～3種
	梅現山遺跡各地区 遺構外出土の縄文土器
	縄文土器 第2群2類4種～第2群4類
	縄文土器 第3群～第4群1類
	梅現山遺跡各地区 遺構外出土の縄文土器
	縄文土器 第5群～第7群5類
	縄文土器 第7群6類～第8群
	梅現山遺跡各地区 遺構外出土の縄文土器
	縄文土器 第9群～第11群2類

図版一〇七	縄文土器 第11類3類～7類	4区SI-1-12 下面	4区SI-4-5
	権現山遺跡各地区 遺構外出土の縄文土器	4区SI-2-1	4区SI-4-9
	縄文土器 第12群～第13群7類	4区SI-2-2	4区SI-4-11～13
図版一〇八	縄文土器 第13群8類～15類	4区SI-2-3	4区SI-6-1
	権現山遺跡各地区 遺構外出土の弥生土器	4区SI-2-7	4区SI-7-2
	弥生土器 第1群～第5群	4区SI-2-10	4区SI-7-3
図版一〇九	弥生土器 第6群～第9群2類	4区SI-2-11	4区SI-7-15
	権現山遺跡各地区 遺構外出土の弥生土器	4区SI-2-24-1・2	
	弥生土器 第9群2類～3類	図版一一八 権現山遺跡4区 土師器・石製品	
図版一一〇	弥生土器 第9群4類～第11群	4区SI-7-27～42	4区SI-10-12
	権現山遺跡各地区 古墳時代の鉄関連遺物	4区SI-9-6	4区SI-10-14
	SG1区鉄関連遺物(数字は構成番号)	4区SI-10-1	4区SI-10-35
図版一一一	SG5区鉄関連遺物(数字は構成番号)	4区SI-10-2	4区SI-10-41 内面
	SG5区鉄関連遺物(数字は構成番号)	4区SI-10-3	4区SI-10-41
	SG10区鉄関連遺物(数字は構成番号)	4区SI-10-4	4区SI-11-2
図版一一二	杉村遺跡GN1区・権現山遺跡各地区 古墳時代の鉄関連遺物・中世の鉄滓	4区SI-10-5	4区SI-11-3
	4区鉄関連遺物(数字は構成番号)	4区SI-10-9	4区SI-11-5
	SG10区の中世鉄滓	4区SI-10-10	4区SI-11-7
図版一一三	GN1区鉄関連遺物(数字は構成番号)	4区SI-10-11	
	SG1区鉄製品(下段はX線写真)	図版一一九 権現山遺跡4区 土師器・須恵器	
	SG10区鉄製品(下段はX線写真)	4区SI-11-9	4区SI-12-3
図版一一四	SG10区SI-36 金床石(構成番号60)	4区SI-11-11	4区SI-12-11
	権現山遺跡4区・SG1区 古墳時代および中世の金属製品	4区SI-11-13	4区SI-13-1
	4区鉄製品(下段はX線写真)	4区SI-11-21	4区SI-13-2
図版一一五	SG1区金属製品(右はX線写真)	4区SI-11-28	4区SI-13-3
	杉村遺跡GN1区 土師器・石製品・土製品	4区SI-11-37	4区SI-13-5
	GN1区SI-2-1	4区SI-12-1	4区SI-13-14
図版一一六	GN1区SI-2-11・12	4区SI-12-1 底面	4区SI-13-15
	GN1区SI-3-1	4区SI-12-2	4区SI-13-16
	GN1区SI-3-3	4区SI-12-2 底面	
図版一一七	GN1区SI-3-4	図版一二〇 権現山遺跡4区 土師器・土製品	
	GN1区SI-3-5	4区SI-14-1	4区SI-15-1
	GN1区SI-3-6	4区SI-14-2	4区SI-15-2
図版一一八	GN1区SI-3-7	4区SI-14-5	4区SI-16-6
	GN1区SI-3-8	4区SI-14-15	4区SI-16-8
	GN1区SI-3-9	4区SI-14-19	4区SI-16-10
図版一一九	GN1区SI-4-3	4区SI-14-23	4区SI-16-18
	杉村遺跡GN1区 土師器・須恵器・石製品	4区SI-14-26	4区SI-16-20
	GN1区SI-4-8	4区SI-14-27	4区SI-16-21
図版一二〇	GN1区SI-5-1	4区SI-14-33	4区SI-16-22
	GN1区SI-5-2	4区SI-14-43	
	GN1区SI-5-3	図版一二一 権現山遺跡4区 土師器・須恵器・石製品	
図版一二一	GN1区SI-5-10	4区SI-16-26～28	4区SI-22-2
	GN1区SI-5-11	4区SI-17-11	4区SI-24-1
	GN1区SI-5-14	4区SI-18-15	4区SI-24-3
図版一二二	GN1区SI-5-16	4区SI-18-17	4区SI-24-4
	GN1区SI-5-20	4区SI-20-1	4区SI-24-5
	GN1区SD-24-1	4区SI-20-2	4区SI-24-11
図版一二三	2区SI-1a-1	4区SI-21-2	4区SI-24-13
	2区SI-1a-1 底面	4区SI-21-4	4区SI-24-29
	2区SI-1a-3	4区SI-21-5	4区SI-24-30
図版一二四	2区SI-1a-4	図版一二二 権現山遺跡4区 土師器・石製品	
	2区SI-1a-6	4区SI-24-77 上面	4区SI-25-15
	2区SI-1a-8	4区SI-24-77 下面	4区SI-26-1
図版一二五	2区SI-1a-24・25	4区SI-24-81	4区SI-26-8
	2区SI-1a-10	4区SI-25-1	4区SI-26-7
	2区SI-1a-11	4区SI-25-5	4区SI-26-9
図版一二六	2区SI-99a-1 内面	4区SI-25-7	4区SI-26-10
	2区SI-99a-2 内面	4区SI-25-9	4区SI-27-1
	2区SI-99a-2 内面	4区SI-25-13	4区SI-27-6
図版一二七	2区SI-99a-3 内面	図版一二三 権現山遺跡4区 土師器・石製品	
	2区SI-99a-4 内面	4区SI-27-10	4区SI-28-14 上面
	2区SI-99a-5 内面	4区SI-27-11	4区SI-28-14 下面
図版一二八	2区SI-99a-5 内面	4区SI-27-12	4区SI-28-15 上面
	2区SI-99a-5 内面	4区SI-27-21	4区SI-28-15 下面
	2区SI-99a-5 内面	4区SI-27-23	4区SI-29-1
図版一二九	2区SI-99a-5 内面	4区SI-27-29	4区SI-29-2
	2区SI-99a-5 内面	4区SI-27-41	4区SI-29-8
	2区SI-99a-5 内面	4区SI-27-49	4区SI-29-9
図版一三〇	2区SI-99a-5 内面	4区SI-28-13 上面	4区SI-29-13
	2区SI-99a-5 内面	4区SI-28-13 下面	4区SI-29-22
	2区SI-99a-5 内面	図版一二四 権現山遺跡4区 土師器・石製品	

4区 SI-30a-2	4区 SI-33-7
4区 SI-31-2	4区 SI-33-11
4区 SI-31-5	4区 SI-59-2
4区 SI-31-15	4区 SI-59-3
4区 SI-31-16	4区 SI-59-4
4区 SI-31-21	4区 SI-59-5
4区 SI-32-1	4区 SI-59-7
4区 SI-33-3	4区 SI-59-12
4区 SI-33-5	4区 SI-59-14
図版一二五 梅現山遺跡 4区 土師器・石製品	
4区 SI-59-15	4区 SI-59-59
4区 SI-59-19	4区 SI-59-60 ~ 62
4区 SI-59-25	4区 SI-74-1
4区 SI-59-26	4区 SI-74-2
4区 SI-59-34	4区 SI-74-3
4区 SI-59-40	4区 SI-74-4
4区 SI-59-41	4区 SI-74-5
4区 SI-59-44	4区 SI-74-6
4区 SI-59-50	4区 SI-74-7
図版一二六 梅現山遺跡 4区 土師器・須恵器・石製品	
4区 SI-74-8	4区 SD-143-5 内面
4区 SI-74-11	4区 SD-143-5
4区 SI-74-12	4区 SK-104-4
4区 SI-74-14	4区 SK-84-4
4区 SI-74-17	4区 SE-72-1
4区 SI-76-1	4区 道構外-1
4区 SI-130-4	4区 道構外-2
4区 SI-130-5	4区 道構外-4
4区 SX-23-1	4区 道構外-5
4区 SD-143-4	
図版一二七 梅現山遺跡 SG1区 縄文土器・居館出土遺物・土師器・須恵器・石製品・土製品	
SG1区 SK-125-1	SG1区 SI-5-5
SG1区 SD-95-10 ~ 12	SG1区 SI-5-12 ~ 15
SG1区 居館周辺根瓦-1	SG1区 SI-5-18・19
SG1区 SI-1-2	SG1区 SI-6-3
SG1区 SI-1-4	SG1区 SI-6-5
SG1区 SI-1-5	SG1区 SI-6-6
SG1区 SI-1-6	SG1区 SI-6-10
SG1区 SI-1-10	SG1区 SI-6-15
SG1区 SI-3-4	SG1区 SI-7-39 肩部
SG1区 SI-5-1	
図版一二八 梅現山遺跡 SG1区 土師器・石製品・土製品	
SG1区 SI-7-44・45	SG1区 SI-13-5
SG1区 SI-8a-b-3	SG1区 SI-13-11
SG1区 SI-8a-b-23	SG1区 SI-13-12
SG1区 SI-8a-b-24 ~ 27	SG1区 SI-13-15
SG1区 SI-10-13	SG1区 SI-17-1
SG1区 SI-10-20	SG1区 SI-18-8
SG1区 SI-10-14	SG1区 SI-32-2
SG1区 SI-12-6	SG1区 SI-32-8
SG1区 SI-13-1	SG1区 SI-34-7・8
SG1区 SI-13-4	

図版一二九 梅現山遺跡 SG1区 土師器	
SG1区 SI-34-1	SG1区 SI-71-9
SG1区 SI-66-1	SG1区 SI-71-10
SG1区 SI-66-2	SG1区 SI-71-11
SG1区 SI-66-3	SG1区 SI-71-14
SG1区 SI-66-4	SG1区 SI-71-15
SG1区 SI-66-7	SG1区 SI-71-16
SG1区 SI-69-1	SG1区 SI-71-17
SG1区 SI-71-1	SG1区 SI-71-18
SG1区 SI-71-3	SG1区 SI-71-20
SG1区 SI-71-7	SG1区 SI-71-20 底面
図版一三〇 梅現山遺跡 SG1区 土師器・石製品・土製品	
SG1区 SI-71-30	SG1区 SI-89-19
SG1区 SI-84-10 ~ 12	SG1区 SI-127-1
SG1区 SI-85-1	SG1区 SI-174-1
SG1区 SI-88-1	SG1区 SI-174-9
SG1区 SI-89-2	SG1区 SI-174-12
SG1区 SI-89-4	SG1区 SI-174-30
SG1区 SI-89-7	SG1区 SI-174-31
SG1区 SI-89-8	SG1区 SI-179-1
SG1区 SI-89-14	SG1区 SI-179-4
図版一三一 梅現山遺跡 SG1区 土師器・須恵器・土製品および中世の出土遺物	
SG1区 SI-179-4 底面	SG1区 SE-296-2
SG1区 SK-104-2	SG1区 SE-169-1
SG1区 古墳時代の道構外-6	SG1区 SE-169-2
SG1区 古墳時代の道構外-7	SG1区 SE-169-3
SG1区 古墳時代の道構外-8	SG1区 SE-169-4・5
SG1区 SD-37-2	SG1区 SE-169-6
SG1区 SD-37-6	SG1区 SK-172-1
SG1区 SD-37-7	SG1区 東側低地-3
SG1区 SD-37-9	SG1区 東側低地-4
SG1区 SI-155-1	SG1区 東側低地-5・6
SG1区 SI-296-1	
図版一三二 梅現山遺跡 SG1区 および北関東自動車道路調査 A区 豪族居館跡	
右上部: SG1区 1997年9月30日撮影	
右下部: 北関東自動車道路調査 A区 1997年10月2日撮影	
右下部: 北関東自動車道路調査 A区 1997年5月29日撮影	

権現山遺跡北部 遺構一覧・検索表（第2分冊）

権現山遺跡 SG1 区

縄文時代の土坑

	グリッド	形状	垂直関係	径 (m)	深さ (m)	記載ページ
SK-125	300-130	円形	SI90 より古	1.00 × 0.95	0.10	333

古墳時代の豪族居館（首長居宅・方形区画遺構）

居館の区画溝

	グリッド	形状・距離	垂直関係	幅 (m)	深さ (m)	記載ページ
SD-95	230 ~ 310-125, 305-310-120	方形 東西 97.8m 北辺 10 間以上	SK-94 → SD-95 → SD-4-67	0.9 ~ 1.7	0.19 ~ 0.34	337 ~ 340

居館の堀・櫓列

	グリッド	距離 (m)	垂直関係	深さ (m)	その他	記載ページ
SA-103	280 ~ 305-120, 310-120	東西 49 ~ 50 間 (92.31m) 北辺 10 間以上	P-108-SK-99-102 と重複 SK-115-137-SD-67 より古、 SE-113 より古?	0.3 ~ 0.7	北側東自動車道沿道調査区(A) A15 SA-226 に連続	340 ~ 344
SA-132	305-120 × 12.5	3 間 (10.35m)	SK-100 より古	0.18 ~ 0.82	SD-95 北辺 → SA-103 がほぼ平行	344

居館の堀立柱建物跡

	グリッド	形状	垂直関係	長さ	幅	記載ページ
SB-106	300-120 × 12.5, 305-120 × 12.5	長方形		東西 6 間 (10.62m)	南北 5 間 (8.72m)	345 ~ 346

居館の性格不明遺構

	グリッド	形状	垂直関係	距離	深さ (m)	記載ページ
S-129	28.5-12.5 29.0-12.0 × 12.5	堀・櫓の北東隅部?	SB-113 より古?	東西 2 間 (3.10m) 以上 × 南北 4 間 (14.50m) 以上	0.12 ~ 0.55	346 ~ 347

居館跡内の柱穴状土坑群 61 基 (P-1 ~ 11-13 ~ 19-21 ~ 34-36 ~ 40-42 ~ 50-53-107 ~ 110-116 ~ 122-130-133-201)

は第 101 表 (p.349) を参照。

古墳時代の竪穴建物跡

	グリッド	距離 (m)	垂直関係	穴径	付属施設	記載ページ
SI-1	280-140	東西 4.76 × 南北 4.75		φ12 (北・東)	人・土施設?	351 ~ 353
SI-2	295-130 × 13.5, 290-130 × 13.5	東西 5.62 × 南北 5.92	SI-3 → SI-2 → SI-35	カマド 1 (北)	石蔵穴 2, 墓土坑 1	353 ~ 356
SI-3	285-130 × 13.5, 290-130 × 13.5	東西 5.78 × 南北 5.76	SI-2-SI-4 より古	カマド 1 (東)	石蔵穴 1	356 ~ 358
SI-5	27.5-12.5, 28.0-12.5 × 13.0	東西 4.65 × 南北 5.33	SD-4 より古	φ11 (北)	石蔵穴 1	358 ~ 361
SI-6	28.0-130 × 13.5	東西 2.98 × 南北 3.65		不明		361 ~ 362
SI-7	26.0-130 × 13.5	東西 3.50 以上 × 南北 3.20		不明	石蔵穴 1	363 ~ 367
SI-8a	25.5-135, 26.0-135	東西 5.83 × 南北 5.23	SI-40 → SI-8a → 8a → SD-37	カマド 1 (東)	石蔵穴 1	367 ~ 372
SI-8b	25.5-135, 26.0-135	東西 4.93 × 南北 4.58	SI-40 → SI-8b → 8a → SD-37	φ11 (北)	石蔵穴 1	368 ~ 372
SI-10	25.5-140, 26.0-140	東西 5.51 × 南北 5.80	SI-40 より新	カマド 1 (北)	石蔵穴 1	372 ~ 375
SI-11	25.0-135, 25.5-135	東西 4.12 以上 × 南北 6.60	SI-12-85 → SI-11 → SD-31	不明	石蔵穴 1	376 ~ 377
SI-12	25.0-135 × 14.0	東西 4.74 × 南北 4.61	SI-11-13-SI-131 より古	φ11 (北)	石蔵穴 1	377 ~ 379
SI-13	25.0-135 × 14.0	東西 6.67 × 南北 6.74	SI-12 → SI-13 → SD-31	カマド 1 (東)	石蔵穴 1, 人・土施設	379 ~ 383
SI-14	245-135 × 14.0	東西 3.30 以上 × 南北 3.35	SI-71 より新, SK-30 と重複?	不明	石蔵穴 1	384
SI-17	245-140 × 14.5	東西 4.80 × 南北 4.68	SI-18-80-45 より古	カマド 1 (北)	石蔵穴 1, 人・土施設	384 ~ 389
SI-18	240-140 × 14.5, 245-140 × 14.5	東西 6.98 × 南北 7.22	SI-17 → SI-18 → SD-45, SK-143 と重複	カマド 1 (北)	墓土坑 1 (推定)	389 ~ 391
SI-32	29.5-130 × 13.5, 30.0-130 × 13.5	東西 5.42 × 南北 5.04	SD-67 より古, SK-57 と重複	カマド 1 (北)	石蔵穴 1	391 ~ 393
SI-34	29.0-130 × 13.5, 29.5-130 × 13.5	東西 4.20 ~ 4.48 × 南北 2.35 (推定 4.10)	SI-33 → SI-34 → SI-35	カマド 1 (北)		393 ~ 394
SI-35	29.0-130 × 13.5, 29.5-135	東西 5.40 × 南北 5.42	SI-2-34 より新	カマド 1 (東)	石蔵穴 1, 人・土施設	395 ~ 396
SI-40	25.5-135 × 14.0	東西 5.43 × 南北 5.46	SD-31-37-SI-8a-8b-10 より古	φ11 (北)	石蔵穴 1	396 ~ 397
SI-62	23.0-150 × 15.5, 23.5-150 × 15.5	東西 6.50 × 南北 5.93	SD-65 より古, SK-186 と重複	カマド 1 (北)	石蔵穴 1	398 ~ 400
SI-66	27.5-130	東西 2.92 × 南北 2.62		φ11 (中央)	石蔵穴 1	400 ~ 401
SI-69	28.5-125 × 13.0	東西 4.78 × 南北 4.80	SD-4 より古	φ12 (東・東)	石蔵穴 1, 人・土施設	401 ~ 403
SI-70	26.0-135, 26.5-130 × 13.5	東西 5.50 × 南北 5.05		カマド 1 (東)	石蔵穴 1, 人・土施設	403 ~ 405
SI-71	24.5-135 × 14.0, 25.0-135 × 14.0	東西 7.38 × 南北 7.39	SI-14-88-SK-21 ~ 26-28-30-72 より古	カマド 1 (北)	墓土坑 1	405 ~ 409
SI-84	24.0-135 × 14.0, 24.5-135 × 14.0	東西 5.48 以上 × 南北 5.78	SI-86 → SI-84 → SI-87-296	φ11 (北)	石蔵穴 1	409 ~ 412

SR 85	25.0-13.5, 25.5-13.5	東西 3.35 以上 × 南北 2.5 以上	SR 11-SD-31-37 より古	不明	新蔵穴 1	412 ~ 414
SR 86	24.0-13.5-14.0, 24.5-13.5-14.0	東西 2.36 × 南北 4.00	SR 84-87-296 より古	不明	新蔵穴 1	414 ~ 415
SR 87	24.0-13.5, 24.5-13.5	東西 3.60 以上 × 南北 2.25 以上	SR 84-86 より新	不明		414 ~ 415
SR 88	24.5-14.0-14.5, 25.0-14.0-14.5	東西 5.56 以上 × 南北 4.87	SR 71 ~ SR 88 ~ SD 45	不明		415 ~ 416
SR 89	29.0-13.0, 29.5-12.5-13.0	東西 6.38 × 南北 5.96	SR 136 ~ SR 89 ~ SR 91-92-93-111-128	カマド 1 (北)	新蔵穴 1	416 ~ 421
SR 90	30.0-13.0, 30.5-13.0	東西 4.50 × 南北 4.48	SR 114-125 より新	カマド 1 (北)	新蔵穴 1	421 ~ 423
SR 126	29.5-13.0, 30.0-13.0	東西 5.66 × 南北 5.86	SR 136 ~ SR 126 ~ SD 67	不明	新蔵穴 1	423 ~ 424
SR 127	25.5-14.0, 25.5-14.5	東西 5.85 × 南北 5.83	SD 31-37 より古	カマド 1 (北)	新蔵穴 1	423 ~ 425
SR 136	29.5-12.5-13.0	東西 4.31 × 南北 2.50	SR 89-126-SD-67 より古	不明		424 ~ 426
SR 174	23.5-14.0-14.5, 24.0-14.0-14.5	東西 9.14 × 南北 8.84	SR 179 ~ SR 174 ~ SR 178-SD 141	カマド 1 (北)	新蔵土坑 1	426 ~ 430
SR 179	24.0-14.0	東西 6.21 × 南北 6.26	SR 174 より古	カマド 1 (東)	新蔵穴 1	431 ~ 432

古墳時代の竪穴式石室遺構

グリッド	規模 (m)	方位関係	火坑	付随施設	附属ページ
SI 33	29.5-13.0-13.5	東西 5.38 × 南北 5.18	SI 34, SK 73-74-75 より古	竪穴 1 (中央), 竪 1 (東)	新蔵穴 1 433 ~ 437

古墳時代の土坑 25 基 (SR-41・42・46 ~ 49・53 ~ 57・91 ~ 94・104・114・128・145 ~ 149・150b・171) は第 137 表 (p.438) を参照。

古代の溝状遺構

グリッド	方位関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	附属ページ
SD 31	SR 11-13-40-85-127 より新, SR 37-42 より古	2.07 ~ 2.85	0.48 ~ 0.60	北側東内面東道路調査区の A 区 SD 107 に連続	442 ~ 443

中世の溝状遺構

	グリッド	方位関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	附属ページ
SD 37	23.0-13.5 ~ 16.0, 24.0-13.5 ~ 16.0, 25.5-13.5 ~ 14.5	SR 8-40-127-SD 31 より新	2.34 ~ 3.41	0.55 ~ 0.70	北側東内面東道路調査区の A 区 SD 097 に連続	442 ~ 444・556
SD 45	23.0-14.5, 23.5-14.5, 24.0-14.5, 24.5-14.5, 25.0-14.0-14.5	SD 31-58-172 より新, SR 79-231-255-300 と重なり	0.84 ~ 1.03	0.25 ~ 0.33		445 ~ 452・556

中世の竪穴式石室遺構

	グリッド	規模 (m)	方位関係	火坑	付随施設	附属ページ
S155	24.0-15.0	東西 6.94 × 南北 3.20	SD 65 より古	不明		445 ~ 446
S196	24.0-13.5-14.0, 24.5-13.5-14.0	長径 3.90 × 短径 2.78	S184-86 ~ S1290 ~ SD 65-P 241	不明		446 ~ 447

中世の井戸跡

グリッド	形状	方位関係	1 径 (m)	深さ (m)	附属ページ
SR 160	円形	SR 167 より古	東西 3.30 × 南北 3.53	2.97	447 ~ 451

中世の土坑

	グリッド	形状	方位関係	規模 (m)	深さ (m)	附属ページ
SR 137	28.0-12.5	竪穴形	SA 103 の P30 より新	長径 1.17 × 短径 1.12	0.15	451 ~ 452
SR 172	23.5-14.5	はけ跡形	SR 171 → SR 172 → SD 45	長径 3.34 × 短径 3.04	0.24	451 ~ 452

時期不明の集積遺構

グリッド	形状	方位関係	規模 (cm)	深さ (cm)	掲載ページ	
SX-131	25.0・13.5・14.0	横の入り土坑2基	SX-12より新	西側径30・東側径25	10	453～454

時期不明の井戸跡

グリッド	形状	方位関係	1径 (m)	深さ (m)	附属ページ	
SE 113	28.5-12.5	長い楕円形	SA 103-129 より新	2.53 × 2.17	1.50 以上	453 ~ 454
SE 178	23.5-14.0	円形	SE 174 より新	1.26 × 1.21	2.42	454

時期不明の溝状遺構

グリッド	方位関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	附属ページ
SD 4	27.5-12.5, 28.0-12.5, 28.5-12.5 ~ 13.5	SR 3-9-49-SD 95 より新	0.92 ~ 1.48	0.33 ~ 0.43	455
SD 65	23.0-15.0, 23.5-15.0, 24.5-15.0	SR 62-155-SR 186 より新, P 27 跡と重なり	0.48 ~ 1.54	0.38 ~ 0.52	455 ~ 456
SD 67	29.0-12.0, 29.5-12.0 ~ 14.0, 30.0-13.0 ~ 14.0	SR 32-128-136-SD 95- SA 103P30 より新, SR 96-P 53-116 と重なり	1.88 ~ 3.28	0.33	456 ~ 457
SD 175	23.0-14.0-14.5	SR 176 より新	0.63 ~ 0.76	0.14 ~ 0.17	456 ~ 457

時期不明の土坑 59 基 (SR 21 ~ 26・28 ~ 30・43・44・59・72 ~ 75・77 ~ 79・81・82・96・99 ~ 102・105・111・112・115・138・140 ~ 143・151・152・154・156 ~ 158・160b・161 ~ 168・173・176・177・181 ~ 183・185 ~ 187) は第 149 表 (p.457 ~ 461) を参照。

時期不明の柱穴状土坑群

SG1 区調査区中央部の柱穴状土坑群 17 基 (P-58-60・61・64・202 ~ 214) は第 151 表 (p.462) を参照。

SG1 区調査区南部の柱穴状土坑群 97 基 (P-144・150a・160a・193 ~ 197・215 ~ 303) は第 152 表 (p.464 ~ 465) を参照。

第10章 権現山遺跡 SG1 区

権現山遺跡 SG1 区は、宇都宮市東谷町字杉村、砂田町字原田に所在し、「西谷田」の低地を東側に望む低台地の東端に立地する。権現山遺跡の中心部と考えられる居館跡とその南に続く遺構集中地区である。SG1 区の位置は北緯 36° 29' 01"、東経 139° 54' 17"（世界測地系）、発掘調査前の現況地形は低地部標高 80.40～80.65m・台地部標高 80.99～81.17m、低地との比高が約 0.5m である。SG1 区の範囲は南北 210×東西 90m。

権現山遺跡 SG1 区の北側は、4 区の南部が谷状にやや低くなる部分を隔てて、4 区北半部の遺構集中地区が存在する。SG1 区の南側には権現山遺跡 SG10 区の集落中心部と SG5 区の古墳時代居館が連続する。ただし、SG1 区南端部から SG10 区北西部にかけての部分は、地山ローム層までおよぶ土取痕で攪乱されていて、遺構のほとんどが消滅している。SG1 区の東西両側には、権現山遺跡の北関東自動車道路建設に伴う調査区（谷中・大島編 2001）が接続する。

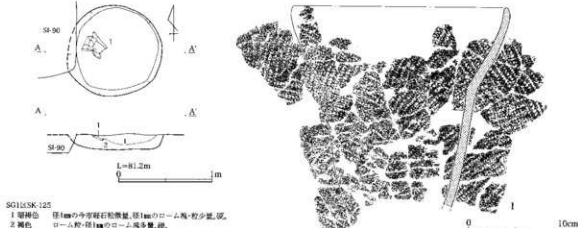
第1節 縄文時代の土坑

SG1 区の縄文時代遺構は、前期黒浜式期の土坑が 1 基だけある。

SG1 区 SK-125（第 188 図、写真図版 71・127）

SG1 区北部の 30.0-13.0 グリッド所在。古墳時代の SI-90 に切られる。1.00×0.95m の円形で深さ 0.16m。覆土は 2 層で自然埋没と見られる。土層断面図に示したように、覆土 2 層上面付近で縄文前期の黒浜式土器が 1 個体出土した。

口縁部で 1/12 周、頸部で 1/2 周が残る深鉢で、残存器高 21.2cm、復原口径 22.6cm、復原最大径 23.2cm。内面頸部に明瞭な稜を持つ。文様は菱形状に配置する羽状縄文で、原体は 2 段 RL と LR を使い、すべて横回転で器面が比較的軟らかいうちに施文する。頸部の屈曲部を境に上下で原体を替え、口縁部と頸部の境でも原体を替える。同じ縄文帯の中でも約 1/4 周ごとに原体を替えて、上下方向に 3 段と横方向に推定約 4 分割の羽状縄文としている。内面は丁寧なナデ調整だが、繊維の脱痕が目立つ。にぶい黄褐色（10YR5/4）で、下半部の外面が被熱して明黄褐色に変色し、対応する内面は少し黒色化している。やや軟質で、黒・透明砂～細砂と繊維が多く、黒・透明礫と灰色砂・白細砂も含む。



第188図 権現山遺跡 SG1 区 縄文時代の土坑 SK-125 遺構・遺物

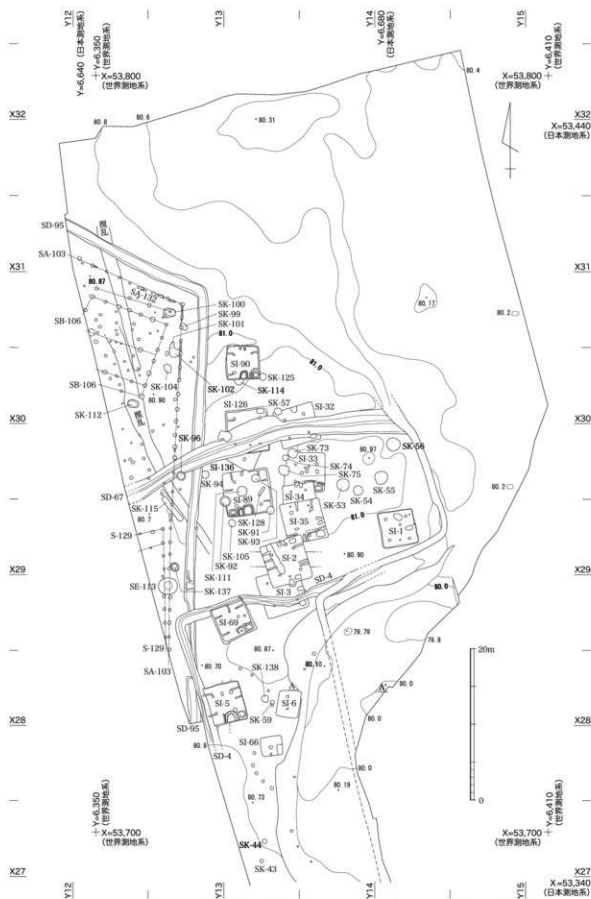
第2節 古墳時代の豪族居館（首長居宅・方形区画遺構）

SG1 区では古墳時代中期のいわゆる「豪族居館」を調査した。この居館を構成する区画溝・堀または柵列・掘立柱建物跡と、居館内に所在するピットを本節で報告する。

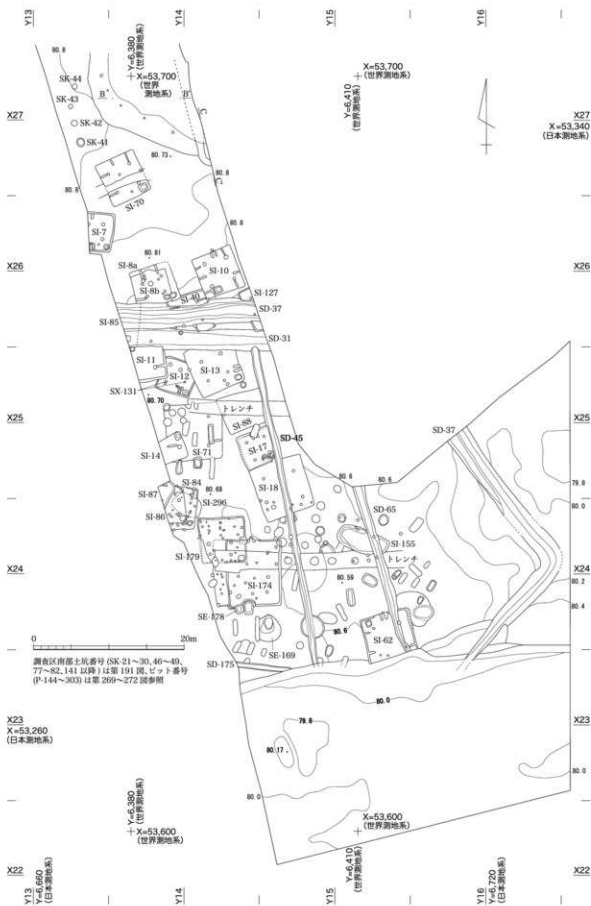
第 10 章 権現山遺跡 SG1 区



第 189 図 権現山遺跡 SG1 区 全体図 (1/1,000・等高線主曲線 20cm)



第190図 権現山遺跡SG1区 北半部全体図 (1/500・等高線主曲線 20cm)



第 191 図 権現山遺跡 SG1 区 南半部全体図 (1/500・等高線主曲線 20cm)



第 192 図 権現山遺跡 SG1 区 南半部土坑集中部拡大図 (1/250・等高線主曲線 20cm)

10.2.1. 居館の区画溝

SG1 区 SD-95 (第 193·194 图、写真图版 69·70·127)

【位置】 居館跡の外縁を囲む溝で、23～31・12.5、30.5・31・12 グリッド所在。溝北辺から南 2.35～2.50m、東辺から西 2.15～2.90m には居館の塼 SA-103 がおおそ平行してある。ただし、本遺構と SA-103 との距離は、西に行くほど少しずつ広くなる。南側は北関東自動車道路調査 A 区 SD-225 へ続く。古墳時代の円筒形土坑 SK-94 を切り、時期不明の SD-4・67 に切られる。西側と南側は調査区外である。

〔規模と形状〕逆L字状の溝で、北辺部分の中軸はN-62°-W、長さ19.8m、東辺の中軸はN-1°-E、長さ57.5mで、北辺と東辺のなす角度は117°。断面は逆台形、底面はほぼ平坦である。立ち上りは居館跡内側のSA-103に面する方がやや急で、外側は緩やかな部分が多い。確認面の幅は0.9～1.7m、底面幅は0.4～1.1m、深さ0.19～0.34m。調査区内の南端から北へ約5～15mの範囲では、幅1m弱に狭くなる。

北関東自動車道路建設に伴う調査区（権現山遺跡A区）のSD-225がこの区画溝に連続する。このA区では区画の南東隅を確認し、SG1区で確認した北東隅から南側へ97.8mの位置にある。つまり、方形区画の東辺長は溝外側で計測して97.8m、溝内側では95.1mである。

〔覆土〕各地点とも3～4層のレンズ状自然堆積。居館跡側から流れ込んだ層にロームが多く、外側からの流入土には、まったくといって良いほどロームを含まない。また、最上層の1層はHr-FA火山灰を多く含み、その降下時には溝が機能していないと言える。これらの堆積状況は北関東自動車道路建設に伴う権現山遺跡A区SD-225とほぼ同様で、SG1区SD-95とA区SD-225が連続する溝であることを示す。

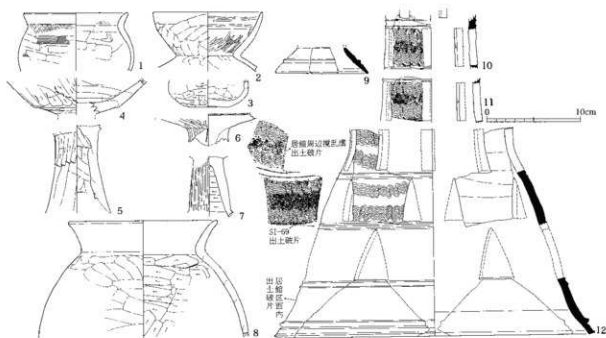
〔遺物出土状況〕この溝の北半部では、1区～6区の区画に分割して遺物の取り上げを行った。溝の南半部では遺物取り上げの地区割りをしていなかった。4区は、溝北辺の土層断面D-D'付近に該当する。他の各地区の厳密な位置は不明だが、「1区」～「3区」が溝東辺北半から北東隅部にかけて、「5区」・「6区」が溝北辺に相当する可能性がある。SD-95で地区割の注記がない遺物は溝南部で出土した可能性がある。溝内の遺物は覆土中位で出土したものが多く、Hr-FAテフラが混じる溝最上層よりは下位といえる。

〔出土遺物〕遺物は少なく、図示した以外の土師器192片（1,711g）の内訳は杯56片（220g）、高杯30片（242g）、小形壺3片（55g）、壺蓋類100片（1,153g）、甗3片（41g）。不掲載の破片を見ると、杯類は口が開いた形の内斜口縁杯形が多く、底部は平底または上げ底が主体で、初期の模倣杯は見られない。高杯は余り長くない柱状脚が多く、小形壺の口縁部もあり長くない。高杯（6）は杯底の突出部に脚部をつなぐ接合沈線が見られる。

脚部に突線のある須恵器高杯は、脚柱→裾部境から裾部へ突線が下がりながら退化するので（植野2002,p.233）、TK216～TK208型式の幅に入る（9）。筒形器台の10と11は、SG1区SI-69・居館区画内・居館周辺掘乱掘出土の器台脚部（12）と同個体と見られるので、まとめて図示した。北関東自動車道路調査A区SI-141の器台片とは別個体である（谷中・大島編2001,p.214）。透窓は交互配置で、筒部は推定六方の長方形、脚部は推定十方の三角・長方形透窓。千鳥に配置する透窓は川上古墳例の脚部や東上野芝例の筒部、脚下部が三角透で脚上部が長方形透になる例は羽根戸古墳・金崎1号墳にある（第298図）。

第98表 権現山遺跡 SG1区 SD-95 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・釉薬 (または素材)	出土状態 残存状態 目録
1 土師器 杯	口 径 11.5 高 径 6.1 最大 径 12.3	外面は肩部に横→斜色のハケ度ヘラナデ。頸部タテハケ後に口縁部ヨコナデ。内面は体部ヨコヘラナデ。頸部ナメハケ後に口縁部ヨコナデ。外面口縁部に僅か付着するで、小形壺の口部に一致した可能性もある。	7.5YR4/2 灰褐 やや粗い、白濁→細粒多 透明粒→細粒と黒細粒少 破片	口1/6周 目録6区
2 土師器 小形壺	口 径 11.6 高 径 6.2	外面は肩部ナメヘラナデ、口縁部ヨコナデ後に縦→斜色ヘラナデ。ヘラナデは平直でややギザギザに近い。内面は肩部にやや横な粘土層を残し、口→頸部ヨコナデ後頸部に縦→斜色と口縁部に横位のヘラミガキ。	7.5YR6/6 緑 やや粗い、白→透明粒→細 粒と赤・灰色細粒と黒細粒 少 やや破片	口1/3周、頸1/2周 目録4区、5区
3 土師器 小形壺	高 径 2.8 最大 径 8.5	外面は底部をナデで平直にし、体部ヨコヘラナデ。内面は丁寧なナデで、底部外周にはナメヘラナデも行う。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや粗い、赤粒→細粒やや多、黒・透明細粒やや多 やや破片	底全周 目録1区
4 土師器 高杯	高 径 3.8 最大 径 14.8	杯部外面は粘土成形時のひび割れを少し残したままナメヘラナデ。杯底面は円筒方向のナデ。杯内面はナメヘラナデ。	7.5YR6/4 に近い黄褐色 やや粗い、白濁→赤粒やや多、白・赤・黒・透明細粒少 破片	杯底1/3周 目録4区
5 土師器 高杯	脚柱 径 4.4 高 径 9.3	残存上部は杯底面から創製した接合面。脚柱部上半は杯底面に横み上げられた粘土を少し絞って細くした後に内面をナメヘラナデしながら成形。脚外面はタテヘラナデ後に上部をタテヘラナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや粗い、赤・白細粒多 黒と黒・透明細粒少 破片	脚土端全周 目録5区
6 土師器 高杯	高 径 3.9	杯部下面に突出部を作って放射状の接合沈線を残した後に、側立状態で脚部を積み上げたかまたは接合したと見られる。外面部→杯底面にタテヘラナデ。内面杯底面に密な1方向ヘラミガキ。	5YR7/6 緑 やや粗い、黒・白細粒多 白濁→細粒多 破片	脚土端全周 目録5区
7 土師器 高杯	高 径 6.3 最大 径 4.8	やや短脚型で、脚柱部から縦が明確に外へ折れる。外面はタテヘラナデ後にやや密なタテヘラミガキ。内面は丁寧なヨコヘラナデ。	7.5YR5/6 黄褐色 やや粗い、黒・白・透明細粒やや多、赤・黒細粒少 破片	脚柱全周 目録3区



第194図 権現山遺跡 SG1区 SD-95(2)遺物

8 土師器 高杯?	口 径 15.7 高 残 12.3 最大 径 22.2	外面同部ナメヘラナ後、口へ頸部ヨコナ。内面制部に斜へ左方向ヘラナ後、斜部を右方向ヘラナ。口へ頸部ヨコナ。	10Y86/4 に黄い黄 やや粗い 白・透明粗～細 粒や中多、赤粒・黒粒 少 や中粒質	口 1/8 周、径 1/4 周 5区
9 土師器 高杯?	高 残 2.7 口 径 9.6 最大 径 10.0	底などの口縁部の可能性もある。陶灰～緑色の薄い自然釉が外面に付着する状況から 判断と推定した。外面の斜から1.5cm上方に断面三角形の突縁を持つ。内面の破片上端 にも自然釉が付くので、上部に透窓か孔を持っていたと思われる。脚を上に向けた上端 に突縁でコウロ石面貼(筒状張り)の可能性あり。	N7/(B) 灰白 硬質 白磁粒少 硬質	口 1/12 周
10 土師器 高台	高 残 5.7 最大 径 9.7	上下を2本1組の突縁で区画した中に波状文を8箇の土段で右から左へ置く。約4× 1cmの長方形透孔を上下段で平並に配置し、各段に6方向程度の可能性あり。SG1区 SI-69、SD-95、居館跡出土土の器台片と同一個体。	5Y5/1 灰 やや硬質 白磁～細粒と黒 色濁り磁粒や中多 硬質	1/8 周
11 土師器 高台	高 残 4.6 最大 径 10.4	上部に区画突縁が1条残る。波状文を8～9箇の土段で右から左へ置く。長4cmの長 方形透孔が上の側縁が破片の左右に残り、6方向程度の可能性あり。外面に黒～黄色の 薄い自然釉。SG1区 SI-69、SD-95、居館跡出土土の器台片と同一個体。	N3/1 陶灰 やや硬質 白磁～細粒と黒 色濁り磁粒少 硬質	1/12 周
12 土師器 高台	高 残 22.0 口 径 34.0 最大 径 34.0	脚部は無文で、その上段には透窓の下辺が残るので波状文が上に乗ると推定され る。無文部の下縁に高い突縁1条と、上縁に低い突縁2条あり。脚部外面を外側へ むきになり、脚上端部は内縁で接合する。セラミックス方向は不明だが、SI-69 および 居館跡出土破片は波状文を右から左へ置くので左向き。無文部の厚は8～10cm。突 縁2本1組の区画内に三角形および長方形の透窓を10方向程度ずつ平並に配置する。 外面全体に自然釉が薄く付き、部分的に緑色～黄色に発色する。	5Y5/1 灰 やや硬質 白磁～細粒と黒 色濁り磁粒少 硬質	居館の区画内で出土 脚部 1/8 周 SI-69 3、SD-36 4

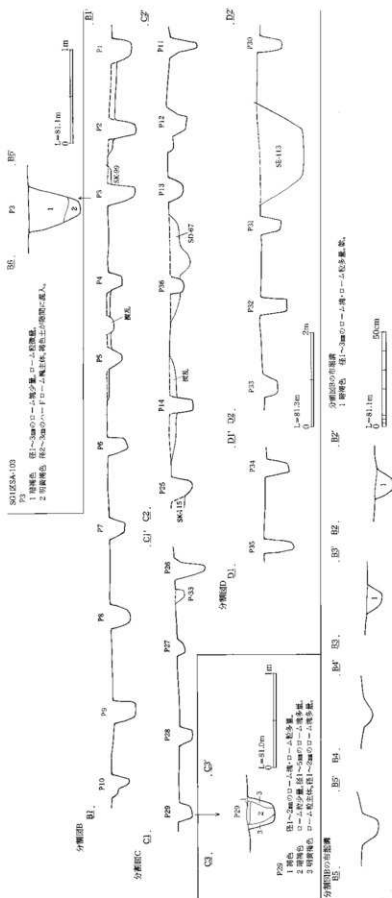
10.2.2. 居館の塼・欄列

SG1区 SA-103 (第195～197図、写真図版70)

【位置】東辺及び北辺の塼跡で、X28～30.5-Y12、X31-Y12 グリッド所在。北辺と東辺の1.3～1.5m外側にSD-95が、北辺の3.0～3.6m南にはSB-106の北辺が主軸をほぼ揃えてある。居館跡東辺塼の南半部(北関東自動車道路調査A区のSA-226)に連続する。北辺のP19が時期不明のP-108と、東辺のP3とP5が時期不明のSK-99・102と、それぞれ重複するが前後関係は不詳。東辺中央のP25・36が時期不明のSK-115とSD-67に、東辺南部のP30が中世のSK-137に、それぞれ切られる。また、P30・31の間に推定される柱穴を、時期不明(中世?)のSE-113が切る可能性がある。

【規模と形状】調査部分は北辺が10間(19.5m)。東辺は25間(45.6m)であるが、本来はP30・31の間(SE-113重複部)にもピットが存在し、26間と思われる。北関東自動車道路調査A区のSA-226と合わせた東辺の長さは92.31m(推定49～50間)。

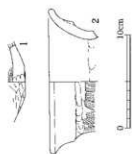
北辺と東辺の角度は123°である。北辺の中軸線はN-68°-Wで、11本の柱穴を直線的に配置する。柱間は0.7m(P15-16間)～2.0m(P23-24間)で、1.8m前後が多い。東辺の中軸線はN-1°-Wで、27本(北



第197圖 檳現山遺跡SG1區 SA-103(3)断面図・遺物

第99表 權現山遺跡SG1区SA-103出土遺物

種別・種類	大きさ	特徴	飼育環境	飼育方法
高脚上座鹿	高 1.8 重 1.8	外見は充分発達、角は長いヘラタビ型で、角は雄に「1」角と雌に外見に類似のヘラタビ型。内見は雄は多量のヘラタビ型。	色別飼育 動物育成	自然放牧
鹿	高 15.3 重 5.3	内見は雄はタカタカ、口は雄は雄に「く」のトコをユビナす、上座ユビコナナす。内見は雄に「く」のトコをユビナす、口は雄に「く」のトコをユビコナナす。	色別飼育 動物育成	自然放牧



第10章 権現山遺跡 SG1区

端の1本は北辺と重複を直線的に配置する。柱間は1.4m (P2-3間)～2.5m (P13-P36間)で、1.5～2.0mのものが多く。柱穴は径40～50cm、深さ30～50cmのものが多く、北辺のP16～18・24は70cm以上の深さである。

東辺のP1-2、P4-7間には幅9～18cm、深さ4～20cmの溝が連結する。東辺P2・P12の南側と、北辺P15・17・23の東側にも短い溝がある。柱列の間に板材などの壁構造を設置していたことをこの溝が示しているとすれば、柱列に横材を組み合わせる「柵列」よりも、「塀」構造の区画施設と考えるほうがよい。(この点について、奈良文化財研究所の箱崎和久氏から御指摘をいただいた。)

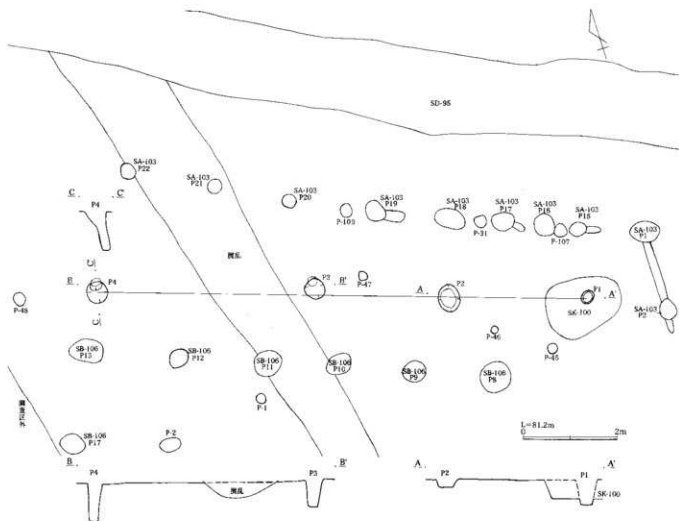
【出土遺物】遺物はわずかで、図示した貼付口縁壺と平底杯の他は、土師器12片・263g (高杯3片・102g、小形壺1片・25g、壺甕類8片・136g)しかない。

SG1区 SA-132 (第198図、写真図版70)

【位置】居館北東辺の30.5・12.0・12.5グリッドに位置する。北には約4mにSD-95の北辺が、1.3～2mにSA-103がほぼ平行する。東端のP1が時期不明のSK-100に切られる。

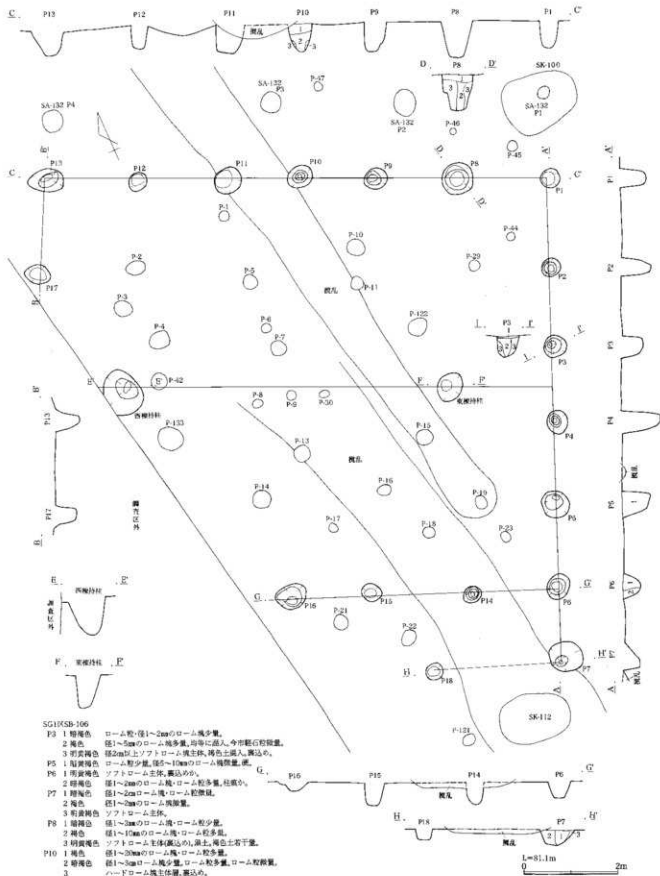
【規模と形状】4本の柱穴を直線的に配置する3間(10.35m)の柵列(または塀)で、中軸線はN-8°-E。P1は径30×24×推定深さ54cm、P2は径58×46×深さ18cm、P3は径46×42×深さ60cm、P4は径47×45×深さ82cm。P2は他より浅く、P3・P4はやや斜めに掘られている。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。



第198図 権現山遺跡 SG1区 SA-132 遺構

第2節 古墳時代の豪族居館（首長居宅・方形区画遺構）



10.2.3. 居館の掘立柱建物跡

SG1区 SB-106 (第199図、写真図版69・70)

【位置】居館跡の区画溝 SD-95 と堀・柵列 SA-103・132 に囲まれた 30-12・12.5 と 30.5-12・12.5 グリッド所在。北辺より北 1.0 m に主軸方位の近い SA-132 がある。周辺にピット群 (P-1 ～ 30.44 ～ 46.121.133) が分布する。重複する遺構はない。P7・10・11・14 は掘乱溝で上面が削られる。南西が調査区外となる。

【規模と形状】東西 6 間 (10.62m)、南北 5 間 (8.72m) の側柱建物である。南北の中軸は N-21°-E、東西は N-101°-E で、東西に長い長方形。柱間は 1.5 ～ 2.0m。柱穴は径 40 ～ 60cm・深さ 40 ～ 60cm の規模が多く、P3・P8 では柱痕が確認された。また、南辺に平行した P7・P18 を南東隅に確認し、底と考えることもできるが、柱穴 2 本だけの調査なので確実ではない。P7・P18 の柱間は 2.8m と広い。建物内には、東西の棟持柱の柱穴が認められた。東棟持柱 (調査時名称 P-12) は径 50 × 62 × 深さ 70cm、西棟持柱 (調査時名称 SK-134) は径 95 × 68 × 深さ 80cm、両棟持柱の間隔は 6.7m。北側にある柵列 SA-132 が SB-106 の北側壁になると考えることもできるが、柱間は SB-106 と一致せず、方位も僅かに西へ振れる。

【遺物および出土状況】遺物は北西隅柱 P13 だけから出土した。土師器小破片 124 点 (954g) で、内訳は杯 38 片 (213g)、高杯 2 片 (22g)、壺・甕類 78 片 (628g)、甕 6 片 (90g)。図示できるものはないが、SD-95 と同時期 (中期後葉) の遺物と判断される。

10.2.4. 居館の性格不明遺構 (掘立柱建物跡または柵列)

SG1区 S-129 (第200図、写真図版70)

【位置】居館跡調査範囲内の南側、28.5-12.5、29.0-12.0・12.5 グリッド所在。東辺から東 0.3 ～ 0.9m に居館跡の東辺堀 SA-103 がほぼ平行し、細かくみると SA-103 東辺よりも S-129 が僅かに西へ振れる。東辺に重複して時期不明 (おそらく中世以降) の井戸 SE-113 が位置する。P6・P7 間に存在したと推定される柱穴を SE-113 が切る可能性が高い。

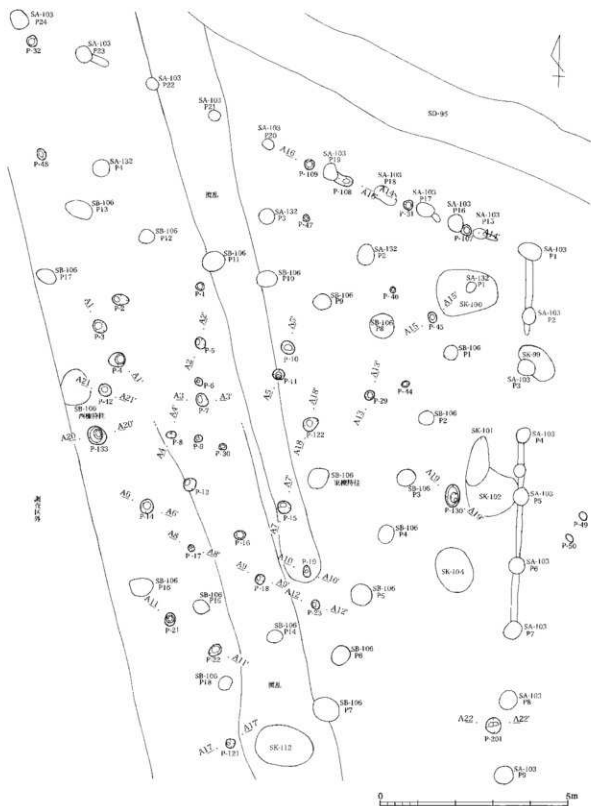
【規模と形状】東西 2 間 (3.10m)、南北推定 8 間 (14.50m) の範囲を確認したが、それぞれ西側、南側の調査区外に延びると思われる。東辺部の方位は N-1°-W で柱穴は 8 本確認したが、P6・P7 間に SE-113 と重複してもう 1 本存在していたと思われる。柱間は 1.75 ～ 1.85m である。北辺の柱穴は 3 本確認され、方位は N-74°-E。柱間は 1.40 ～ 1.60m である。東辺と北辺の角度は北東隅で 76°でやや鋭角なので、掘立柱建物跡 (SB) よりも堀・柵などの区画施設 (SA) である可能性の方がやや高い。北辺は 2 重で、P4 と P11 を結ぶラインが内側にあると考えられている。ただし、外側列の P3 と内側列の P11 が、他の柱穴よりも浅いことが注意される。P2・P3・P11 が S-129 東辺と同一構造物を構成するかどうかは、調査区西側の状況を確認しないと確定しにくい部分もある。

P1 は 40 × 36 × 深さ 46cm、P2 は 50 × 38 × 深さ 42cm、P3 は 22 × 18 × 深さ 22cm、P4 は 42 × 40 × 深さ 55cm、P5 は 34 × 29 × 深さ 45cm、P6 は 34 × 34 × 深さ 50cm、P7 は 44 × 40 × 深さ 38cm、P8 は 44 × 40 × 深さ 36cm、P9 は 40 × 39 × 深さ 42cm、P10 は 37 × 34 × 深さ 34cm、P11 は 32 × 26 × 深さ 12cm である。P3・P11 がやや浅いほかは、34 ～ 55cm の深さである。

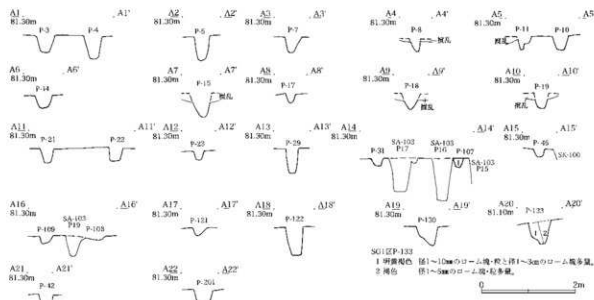
S-129 の P1 ～ P10 が、居館の東辺堀 SA-103 の柱穴とよく対応した配置をとるので、同時期またはごく近い時期の遺構であろう。南部では SA-103 と S-129 が非常に接近するので、同時存在と考えるよりは、僅かな時期差を持ちながら一方から他方へ建て替えた可能性の方が高いかもしれない (この点について、奈良文化財研究所の箱崎和久氏から御教示をいただいた)。

第100表 権現山遺跡 SG1区 S-129 出土遺物

番号 種類 図版	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 釉上・焼成 (または素材)	出土状況 発掘位置 目録
I 土師器 杯	口 径 12.9 高 径 3.5	頸部内面の縁がやや明瞭。外面体部ヨコヘラケズリ。内面体部は平滑でおそらくヨコヘラケズリ。内外面口縁部にヨコナデ。	10YR8/2 灰白 やや暗黒 黒・白磁粉と赤 釉・磁粉少 やや硬質	11/8 周 P7



第201図 権現山遺跡SG1区 居館内柱穴状土坑群北半部(1)平面図



第202図 権現山遺跡SG1区 居館内柱穴状土坑群北半部(2)断面図

第101表 権現山遺跡SG1区 居館跡内の柱穴状土坑群

番号	長径	短径	深さ	備考	番号	長径	短径	深さ	備考
P-1	24	22	—	SB-106 内部に所在	P-29	38	36	14	SB-106 南方に所在
P-2	44	30	—	SB-106 内部に所在	P-40	33	31	12	SB-106 南方に所在
P-3	40	32	36	SB-106 内部に所在	P-42	36	32	—	SB-106 内部に所在
P-4	46	38	50	SB-106 内部に所在	P-43	25	23	28	SB-106 南方に所在
P-5	34	30	52	SB-106 内部に所在	P-44	20	18	—	SB-106 内部に所在
P-6	24	21	—	SB-106 内部に所在	P-45	28	22	16	SB-106 と SA-132 の間に所在 SA-132 平面図参照
P-7	34	32	34	SB-106 内部に所在	P-46	16	14	—	SB-106 と SA-132 の間に所在 SA-132 平面図参照
P-8	14	19	26	SB-106 内部に所在	P-47	20	18	—	居館の SA-132 の北側に所在 SA-132 平面図参照
P-9	22	20	—	SB-106 内部に所在	P-48	30	24	—	居館の SA-132 の西側に所在 SA-132 平面図参照
P-10	38	33	30	SB-106 内部に所在	P-49	26	20	—	SB-106 東方に所在
P-11	30	30	26	SB-106 内部に所在	P-50	26	16	—	SB-106 東方に所在
P-13	34	32	—	SB-106 内部に所在	P-53	30	19	32	S-129 北方に所在 時期不明の溝 SD-67 および堀尻と重複
P-14	40	36	28	SB-106 内部に所在	P-107	22	20	13	居館の南 SA-103 北辺の柱穴の可能性もあるが浅い 重複なし SA-103 北辺図参照
P-15	36	34	50	SB-106 内部に所在	P-108	42	26	10	居館の南 SA-103 北辺の柱穴の可能性もあるが浅い SA-103 の P19 と重複し新旧関係は不明 SA-103 北辺図参照
P-16	30	24	—	SB-106 内部に所在	P-109	30	26	14	居館の南 SA-103 北辺の柱穴の可能性もあるが浅い 重複なし SA-103 北辺図参照
P-17	20	18	20	SB-106 内部に所在	P-110	48	42	—	SB-106 南方に所在
P-18	28	24	34	SB-106 内部に所在 土師器小片 5 点あるが図示できない	P-116	30	24	48	SB-106 南方に所在 時期不明の溝 SD-67 と重複し新旧関係は不明
P-19	30	22	32	SB-106 内部に所在	P-117	38	36	20	SB-106 南方に所在
P-21	34	30	30	SB-106 南方に所在	P-118	46	42	22	SB-106 南方に所在
P-22	36	22	28	SB-106 南方に所在	P-119	20	18	26	SB-106 南方に所在
P-23	26	22	20	SB-106 内部に所在	P-120	18	17	22	SB-106 南方に所在
P-24	22	20	16	SB-106 南方に所在	P-121	28	25	16	SB-106 南方に所在
P-25	38	26	34	S-129 北方に所在	P-122	42	36	62	SB-106 内部に所在
P-26	38	36	18	SB-106 南方に所在	P-130	60	40	40	SB-106 東方に所在
P-27	34	29	34	S-129 北方に所在	P-133	56	48	49	SB-106 内部に所在
P-28	26	24	54	SB-106 内部に所在	P-201	43	42	26	居館の南 SA-103 東辺の P8・P9 西側に所在 SA-103 東辺図参照
P-29	26	24	54	SB-106 内部に所在					
P-30	20	16	—	SB-106 内部に所在					
P-31	26	24	16	居館の南 SA-103 北辺の柱穴の可能性もあるが浅い SA-103 北辺図参照					
P-32	30	28	—	居館の南 SA-103 北辺付辺に所在 SA-103 北辺図参照					
P-33	34	30	20	S-129 北方に所在					
P-34	36	34	50	居館の南 SA-103 東辺の P8・P9 西側に所在					
P-36	28	24	26	SB-106 南方に所在					
P-37	34	30	13	SB-106 南方に所在					
P-38	24	20	28	SB-106 南方に所在					

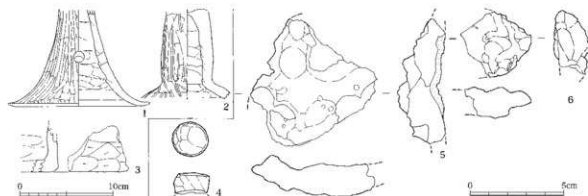
※ P-20・35・41・51・52 は欠番 P-12 と P-134 は SB-106 に属し 単位は cm

10.2.5. 居館の内部に所在する柱穴状土坑群（居館 201～203 図、写真図版 69～70）

居館区画溝よりも内側に所在する小ピット 61 基を第 101 表にまとめた。居館に伴う古墳時代遺構かどうかは不明である。遺物を出土したのは P-18 だけで、土師器 5 片・36g（杯口縁部 1 片・3g、小形壺底部

10.2.6. 居館周辺の出土遺物 (第204図、写真図版127)

居館跡付近を南北に通る擾乱溝 (第190図左上、現地調査時の旧名称SD-36) から出土した遺物をここで掲載する。この溝は古墳中期のSI-5.69と居館 (SD-95・SB-106 南東隅のP13と14・SA-103 東辺中央のP14) を切り、また居館区画内ビット群と時期不明のSD-4.67とSK-112も切る。近世・近代以降の溝と思われる、底面に砂利が入る。古墳時代遺構から混入した中期後葉の土師器を中心とする遺物の量が多く、小破片が目立つ。高杯は脚部中位がふくらむ2や、1孔を穿つ1がある。4はつまみかもしれないが不明確。土師器の蓋だとすれば珍しい遺物。須恵器は器種不明の小片2点と後期の裏腹部1片が計47gある。鉄滓が2点あり (5・6)、この付近で鉄滓を出土した遺構は他にSI-3と鍛冶遺構SI-33がある (第286図)。



第204図 権現山遺跡SG1区 居館周辺掘乱出土遺物

第102表 権現山遺跡SG1区 居館周辺掘乱出土遺物

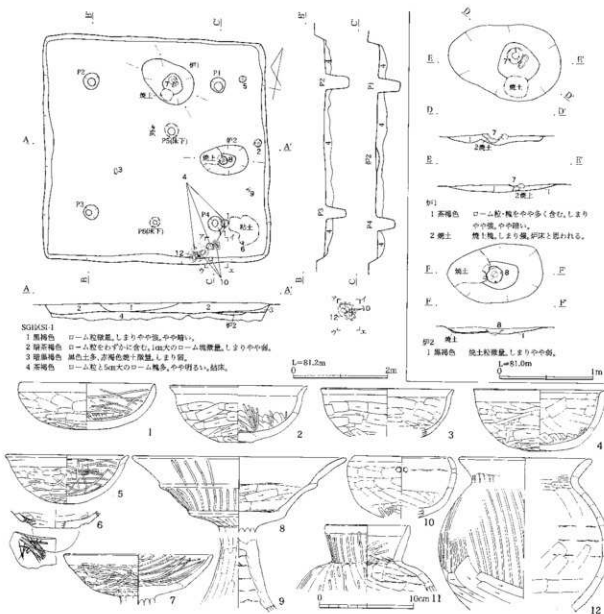
番号 種類 図解	大きさ (cm/g)	特 徴	色調 胎土・構成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土師器 高杯	高 10.2 底 14.9	倒立状態で反時計方向に粘土紐を積み上げる。外面は上部を上向き、中部を下向きに傾いてナデで、底部はナデとヨコナデ。脚部中位に1孔だけ円孔を持ち、外面で径11mm、内面で径9～10mm。粘土がやや硬く破ってから丸棒を使って外面から穿孔。	10YR7/4 に近い暗 やや粗い 白・透明細粒～細 粒多、白微と黒・赤細粒少 硬質	居館周辺の掘乱溝中 部柱2根、第1市街 SD-36一括
2 土師器 高杯	高 9.6 脚柱 44～55	脚部は倒立状態で反時計回りに粘土紐を積み上げる。外面はタテヘラナデと脚部ヨコナデ (7) の後にタテヘラミガキ。内面は脚部柱部に積み上げ痕をよく残す程度のユビオサス。脚部柱部ヨコヘラナデとヨコナデ。	5YR6/8 粗 微密 黒・透明細粒と赤粗 ～細粒やや多、白細粒少 やや硬質	31.5-12.0グリッドの 掘乱溝中 部柱2根 SD-36 プレハブ
3 土師器 不明	底 12～14	内面ヨコナデと外面のナメ～ヨコヘラズリがやや粗粒。外面はやや丁寧で 鋭い凹凸を残す。	5YR6/6 粗 やや粗い 透明微と白微～ 細粒やや多、黒細粒少 やや硬質	SD-36
4 土師器 土製品?	径 1.8～1.9 厚 1.1 重 3.8	地製品に彫り付けた粘土部品が焼成後に割れたもの。上面に1方向と側面に右下打のヘラナデ。蓋のつまみの可能性もあるが詳細は不明。	7.5YR6/6 粗 やや粗密 黒・透明細粒と 赤粗～細粒少 やや硬質	SD-36
5 砂眼 (鏡の付 浮き)	長 6.7 幅 6.6 重 2.5 重 54.3	内面が黒色ガラス質に浮化した鏡治の砂眼内面破片。脚部3面と外面全体が破面となっており下手側の破面が上方に反り返る。破面は下手側の破面が部分的に鏡治の浮きとなる以外は粘土質主体となる。外面には木炭屑など混入した浮きが露出する鏡治の砂眼土が見える。鏡治関連遺物構成No.24。	表 に近い黄褐色 地 黄灰 鏡治面 1 メタル度 なし	鏡面3面 居館周辺掘乱
6 権現山遺跡 (砂小)	長 3.4 幅 3.7 厚 1.9 重 18.0	左側面2箇所が破面となった極小の板形鏡治の背面破片。上面は平坦気味で右側面から上面は板形に立ち上がる。浮質はやや粗密。鏡治関連遺物構成No.25。	表 明暗 地 オリーブ黒 鏡治面 1 メタル度 なし	鏡面2面 居館周辺掘乱

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

SG1区SI-1 (第205図、写真図版71・127)

【位置】SG1区北部の東に突出する台地先端の29.0-14.0グリッドで、居館跡北半東側の建物群の東端にある。古墳中期のSI-3・33が西方にある。北3mに古墳時代のSK-54・55がある。他遺構との重複はない。

【規模と形状】東西長4.76m、南北長4.75mの方形で、南北の中軸はN-10°-W。残存壁高は0.15～0.25m。北壁以外は外傾する部分が多い。南東隅のほぼ床面にある粘土は70×60cmの不定形で厚さ1～3cmあり、粘土中に土器片と炭化材が混入していた。掘方底は細かな凹凸が著しく、床面から深さ5～20cm。ローム



第205図 権現山遺跡SG1区 SI-1 遺構・遺物

粒・塊の多い4層で全体を貼床する。主柱穴は4本(P1～P4)。P1は径33×36×深さ50cm、P4は径32×30×深さ43cm、P3は径32×30×深さ41cm、P4は径32×30×深さ48cm。径はほぼ同じで、北側のP1・4は南側のP2・3よりやや深い。柱間はP1-P4間2.69m、P2-P3間2.68m、P2-P1間2.74m、P3-P4間2.89mで東西間がやや狭いが、ほぼ方形配置。

貼床除去時に、中央やや北東寄りでもP5、南側主柱穴の中央でP6を確認した。P5は径30cm、P6は径20cmで、深さは記録がなく不明。P5・P6は写真で確認し、航空写真測量図から図に記入した。P6は入口ピットの可能性がある。

【炉】2箇所あるが、それぞれ高杯の杯部を置く。複数の炉を持つ建物は、SG1区SI-1・69と鍛冶遺構SI-33、4区ではSI-20などがある。炉1は楕円形で120×82×深さ約8cm、主軸はN-65°-W。ローム塊が多い1層を充填する。長約15cmの細長い河原石と高杯杯部を正位に中央に設置し、下部の焼土化が著しい。炉2は楕円形で100×62×深さ約8cm、主軸はN-78°-E。覆土の焼土粒は微量。底面に接して有段高杯杯部を正位に設置する。西側底面の焼土化が著しいので、建物中央方向からさし木をしたと想定され

る。高杯杯部は被熱・劣化・磨滅する。

〔覆土〕 レンズ状の自然堆積である。南東部床面に粘土がある。

〔遺物出土状況〕 貯蔵穴を持つ建物と同様、南東部に遺物が多い。10・12の上に4・11が載る。炉周辺にも遺物があり、炉2の東では伏せた杯が床からわずかに浮く。

〔出土遺物〕 高杯や小形壺はミガキが比較的目立つ。椀形杯が広く開き丸底を含む点や小形壺の頸部が小さい点は新しい要素。2は焼成前の亀裂をミガキで補修した可能性もある。4は被熱して外面に煤が付く杯。6は焼成後の平行刻線がある。10は1対の焼成前穿孔が口縁部にある鉢で、4区SI-27や、近辺では成願寺遺跡38・88号住居跡にある（篠原編2000）。図示した以外に土師器が300片（2,199g）あるが小破片ばかりで、内訳は杯63片（322g）、高杯28片（319g）、甕壺類209片（1,558g）。

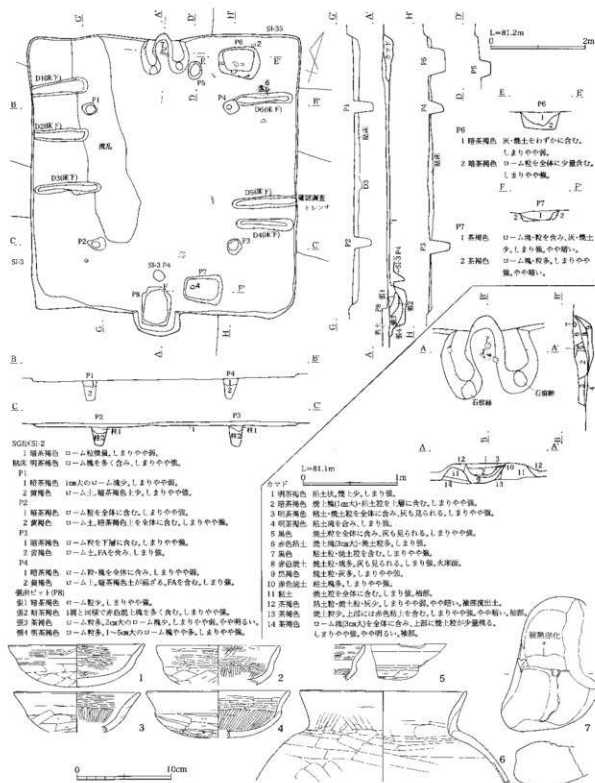
第103表 梅現山遺跡SG1区SI-1 出土遺物

番号 種類 図解	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土位置 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 14.3 高 4.9 最大 14.5	下部が厚く重い。外面は体部ナデ後に中位ヘラナデ。底部1～2方向ヘラナデ。内 面は体部ヘラナデと底部多方向ヘラナデ後に残るナメヘラミガキ。内外面口縁部 ヨココナデ。	7.5YR7/6 暗 やや粗い 赤・白・透明肌 ～細粒多、黒・灰色細粒少 やや乾肌	伊2床1.7m 口7/12間 3
2 土師器 杯	口 14.6 高 6.1 底 3.5 重 213	外面は体部に横位と底部に1方向のヘラナデで凹み底。内面は下平に多方向ヘラナ デ後、やや不規則なヘラミガキを行い、焼成前に生じた亀裂をミガキで補修した可 能性もある。内外面の口縁部にヨココナデ。	2.5YR6/8 暗 やや粗い 白・灰色細粒～細 粒多、赤・黒・透明細粒少 やや乾肌	床土6cm はばり型 7
3 土師器 杯	口 14.0 高 5.0	外面は外面ヨコヘラナデ。内面ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にやや狭いヨココナデ。	5YR5/6 明赤肌 やや粗い、赤黒～細粒多、白・ 黒・透明肌～細粒やや多 やや乾肌	床土5cm 口1/6間 14
4 土師器 杯	口 14.0 高 6.5 底 2.9 重 270	外底面はナデでわずかな凹み底。外面は体部ヘラナデ後に下平ヨコヘラナデ。上 平に残るヘラミガキ。内面は体部ヘラナデ後に下平多方向ヘラナデ。内外面 の口縁部をヨココナデして端部が短く外へ折れる。外面の体部に煤が多く、底部は被熱 赤化する。	5YR6/6 暗 やや粗い、灰色細粒と透明 肌～細粒やや多、白・赤肌 ～細粒と黒細粒少 やや乾肌	床土6～17cmが境合 口15/6間、体全周 3、4、8
5 土師器 杯	口 13.0 高 5.2 重 189	外面は体部にユビオサセとヘラナデ後、底部多方向ヘラナデ。体部に残るヘラミ ガキ。内面体部ヨコヘラナデ後に多方向ヘラミガキ。内外面口縁部ヨココナデ。外面に 9×6cmの黒斑1箇所。	2.5YR6/8 暗 やや乾肌 白・灰色細粒多、 白・黒・透明細粒と白・ 透明・灰色細粒少 やや乾肌	床土8cm はばり型 口11/2間 1
6 土師器 杯	高 1.9 底 5.0 最大 寛9.4	平底で外底面と外面体部ヘラナデ。内面ヨコヘラナデ。外面の体～底部にかけて、狭 い刀先を用いて焼成後の平行刻線を刻む。	5YR6/6 暗 やや乾肌 赤細粒やや多、 白・黒・透明細粒と赤細粒 少 やや乾肌	床土1cm 底1/4間 27
7 土師器 高杯	口 15.8 高 5.2	杯底部と杯体部に粘土の色調がやや異なる。外面は脚一帯杯底面に横位と底外面に横位。 杯体部に斜位のヘラナデ。口縁部ヨココナデ。体部ヨコヘラミガキ。内面は体部ナメ ナデと底部ナメヘラナデ。口縁部ヨココナデ後、杯体部ナメヘラミガキ。	5YR6/6 暗 やや粗い 白濁～細粒やや 多、透明細粒と赤細粒少 やや乾肌	伊1掘方底土6cmに 埋没 杯土はばり全周 伊1-1
8 土師器 高杯	口 寛22.6 高 8.0	脚1縁の成形面を廻り見て外面を突っ張り付または有段状にする。外面は杯底部タテヘ ラナデと杯体～口縁部ヨココナデ後タテヘラミガキ。内面はヨコヘラナデ後に横位の ナデおよびヘラナデ。杯底部内面ヨコヘラミガキ。内面口縁部のヨコヘラミガキは有 無不詳。	7.5YR6/4 にぶい やや粗い 白・透明肌～細 粒やや多、黒細粒と灰色細 粒少 やや乾肌	伊2底面～底土1cm 口1/3間、杯底全周 伊2-1, 伊2-3、5
9 土師器 高杯	高 7.8 最大 寛7.5	倒立状態で反時計回りに粘土を巻いて成形し、内面ユビオサセと樽なヨココナデ。外 面はタテヘラナデと見られるが明確な意味で、ミガキの有無が不明瞭。	10YR7/4 にぶい黄赤 やや粗い、白細粒と赤・灰 色細粒少 乾肌	床土約10cm 脚柱全周2
10 土師器 鉢	口 10.0 高 6.5 最大 11.6 口 0.5	内外面体部ナデ後、口縁部に狭いヨココナデ。外面は下部ヘラナデ後に底部多方向ヘ ラナデ。内面は下部に斜位～横位ヘラナデ。焼成前穿孔が口縁部に2個1対、向かい合 う位置にある。	7.5YR6/4 にぶい暗 やや粗い 透明細粒多、赤・白 肌～細粒と黒細粒 少 乾肌	床土17～20cmが境合 口1/2間、体全周 5、8、9、10、一連
11 土師器 小形壺	口 9.0 高 7.0 最大 14.8	外面は体部タテヘラナデ・頸部ナデ・口縁部ヨココナデの順に、頸部に密で体部に疎ら なタテヘラミガキ。内面口縁部ナデ、頸部ナメヘラナデ～不明瞭なナメヘラナデ。	5YR6/6 暗 やや乾肌 白・赤肌～細粒 と黒・透明細粒少 やや乾肌	床土6～20cmが境合 口3、5
12 土師器 小形甕	口 14.0 高 12.9 最大 寛18.0	外面は頸部に斜位の粗いツケメ後、胴部ナメヘラナデ。口縁部ヨココナデ。内 面は胴部に横位の粗いツケメ後、口縁部ヨコヘラミガキ。内面口縁部ヨココナデ。外 面胴部～口縁部に煤多量。内面胴位以下にコグ直り明瞭。	7.5YR6/4 にぶい暗 やや粗い、白細粒～細粒多、 黒・透明・赤細粒やや多 やや乾肌	床土13～10cmが境合 口1/8間、脚1/2間、 脚1/3間 6、8、19、20、一括

SG1区SI-2（第206図、写真図版71・72）

〔位置〕 SG1区北部の28.5-13.0・13.5、29.0-13.0・13.5グリッド。古墳後期のSI-89が北4mにある。中
期の居館外郭溝SD-95から8m離れる。南西部で古墳中期のSI-3を切り、北東部が古墳後期のSI-35に切
られる。東西軸の確認調査トレンチで中央部を掘方底面まで失う。

〔規模と形状〕 東西長5.62m、南北長5.92mの方形で中軸はN-18°-W。確認面が低かったためか残存壁高
は0.05～0.11mで浅い。壁は外傾する。確認調査トレンチとSI-35に切られて不明な部分が多いが、残存



第206図 権現山遺跡 SG1区 SI-2 遺構・遺物

する床はほぼ平坦で傾斜しない。掘方は床面下2〜15cmで底に細かな凹凸が目立ち、ローム塊の多い暗茶褐色土で貼床する。西半にある掘り込み(南北長430×東西幅80cm・掘方面から深さ5cm前後)は、新旧関係が不鮮明だが、北壁を掘り、床面で確認できるので本建物より新しい痕跡と判断した。

主柱穴は4本。P1は径32×25×深さ43cm、P2は径38×25×深さ39cm、P3は径33×30×

深さ 43cm、P4 は径 33 × 29 × 深さ 43cm。P2 がやや浅いのは床面が他に比べ低いためで、底面の深さはほぼ同じである。柱間がほぼ同一な方形配置で、P1-P4 間 2.92m、P2-P3 間 2.89m、P2-P1 間 2.81m、P4-P3 間 2.91m。カマドに近い北東部にある P5 は径 37 × 29 × 深さ 24cm。

貯蔵穴は北東側の P6 と南壁際東部の P7 があり、P6 は床付近が SI-35 にわずかに切られる。P6 は東西軸の不整形長方形で長 87 × 幅 60 (西部) ～ 68cm (東部)、床面から深さ 39cm。P6 は SI-35 に伴う可能性もあるが、カマドから流出した灰と焼土を上層に含むので本建物のカマド東側に伴うであろう。P7 も南壁とほぼ平行する長方形 (80 × 62 × 床面から深さ 23cm) で、底面は西へわずかに傾くがほぼ平坦。上層に微量の灰と焼土、下層はローム粒・塊を含む。

張出ピット P8 が南壁際はほぼ中央にある。張出部は隅丸方形で、南壁から南端まで 47cm、幅は壁付近で 97cm、南端で約 90cm。張出部内に、床と同じ高さの幅約 10cm の平坦面があり、蓋受けとも考えられる。北側は SI-3 の北東柱穴が重複し、南側と対応する段の有無は不明確。ピットは南北に長い方形で 82 × 60cm、床面から深さ 36cm。北側両隅が内側に方形に突出するため幅が狭い。底面は緩い凹凸を持ち、壁は直線的に外傾する。覆土 2 層に焼土塊、4 層にローム塊が多い。南壁に張出ピットを持つ建物は SG1 区 SI-2・18・71・174、4 区 SI-7 などがある。間仕切溝 D1 ～ D6 を掘方底面で確認した。東西壁際に各 3 本あり、東西の溝が相対する配置ではない。北東部の D6 のみ主柱穴に付随する位置にある。6 本とも断面「U」字状で長さ 120 ～ 140cm、幅 20 ～ 30cm、深さは掘方底面から 8cm、床面から 18cm。

南東貯蔵穴 P7 と南中央の張出土坑 P8 は、遺物出土状況写真には写らず、張床除去後の掘方写真で確認できる。先行する SI-3 がこの部分にあるので遺構周囲の地山や竪穴床面が黒色で、貯蔵穴や張出土坑を検出できなかったと思われる。複数貯蔵穴を持つ建物は、隣接する 4 区の SI-27 など若干みられる。

【カマド】カマドが北壁際中央にある。天井は崩れる。両袖幅 100cm、煙道先端から焚口部まで 85cm。粘土主体の 11 層で袖を構築し、左袖下にはローム塊を含む 14 層を 7 ～ 8cm 厚で敷く。火床はほぼ平坦で、床面より約 14cm 下がる。燃焼部には、流入土の 9 層、天井内面が焼土化・崩落した 8 層、天井粘土の崩れた 1・2・6 層などが堆積する。黒色の 5 層は掛口からの流入土と考えられ、直下に支脚と思われる石がある。煙道は北壁を約 16cm「U」字状に掘り、直線的に外傾する。

焚口は自然石で組むが、表土除去作業時に動いてしまい、東西両袖端に石の基部痕跡だけが残る。床面で確認しても深くは見えないが、かなり深く大きな掘方を用意し、埋め戻して石を設置したことが写真でわかる。東袖の石の一部は欠損する不定形の安山岩礫で、長 15.0 × 幅 14.5 × 厚 9.4cm、2.094g。西袖または焚口天井とみられる石はほぼ完形の棒状礫で、長 39.5 × 幅 13.4 × 厚 10.7cm、7.460g。カマド内にも上半が被熱変化した石があり、支脚の可能性もある。

【覆土】ローム粒を僅かに含む単層。

【遺物出土状況】遺物は少なく、カマドと P6・P7 付近にある。土師器は P6 周辺にまとまり、P7 でも杯 (4) が出土した。

【出土遺物】1 ～ 3 は口縁部上半が内彎する。2 は焼成前の浅いキズ状平行線が内面にある。4 は黄白色軟質胎土で漆仕上げの杯。図示した以外の土師器 184 片 (1,514g) の内訳は甕 102 片 (1,019g)、杯 76 片 (382g)、高杯 6 片 (113g)。

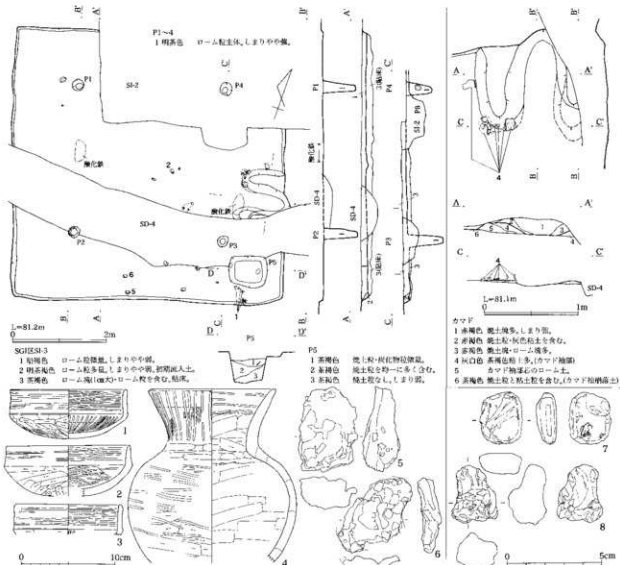
第 104 表 権現山遺跡 SG1 区 SI-2 出土遺物

番号 種類 図解	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態
土師器 杯	口 径 14.4 高 4.5	口縁部下半が外反し、上半が内彎する。外面の口～体部境の境は不明確。外面は体部に軽いヘラナデ後、底面にやや鋭な 1 方向ヘラナデ、口縁部ヨコナデ後にやや鋭なヨコヘラミガキ。内面は体部ナデ後にやや鋭な 1 方向ヘラミガキ、口縁部に密なヨコヘラミガキ。	2.5YR4/0 赤地 やや粗い。赤地～細粒多。 白・黒・透明細粒少 やや軟質	北東貯蔵穴 (P6) の 底土 9cm 口 1/12 間、体 1/3 間 貯蔵穴之
土師器 杯	口 径 13.0 高 4.2	口縁部は下半が外反し、上半が内彎する。外面の口～体部境に境あり。外面は口縁部ヨコナデ後にやや鋭な 1 方向ヘラミガキ。内面は体部に密な 1 方向ヘラミガキ。内面口縁部に体部に焼成前の浅い「U」字状 (平行線 3 本) あり。	2.5YR5/0 明赤地 やや粗い。赤地～細粒多。 白・黒・透明細粒少 やや軟質	P6 付近の床床中 口 1/4 間 10、床下

3 土師器 杯	口 径 13.4 高 4.2	外面口縁部に強い稜あり。外面は口縁部ヨコナデで横み上げ痕も少し残し。体部ヨコヘラズリ。内面は口縁部横位の後に体部放射状の密なヘラミガキ。	5YR6/6 暗 褐色 透明細粒と白・ 黒細粒少 やや軟質	カマドや貯蔵穴以外 から出土 口1/5 周 仕舞
4 土師器 杯	口 径 15.2 高 5.0	外面の口縁部横に強い稜あり。外面は口縁部ヨコナデ後。体部に横位と底部に1〜2方向のヘラズリ。内面は体部に放射状の後、口縁部に横位の密なヘラミガキ。外面中位以上と内面に達仕上げ。	7.5YR7/4 にぶい暗 褐色 黒・透明細粒少 軟質	南東貯蔵穴 (P7) 底面 口1/4 周 12
5 土師器 杯	口 径 15〜16 高 3.8	口縁部は下平が外反し。上平が内彎する。外面の口縁部横に放射状と口縁部に横位のヘラミガキ。達仕上げは見られない。	7.5YR5/4 にぶい暗 褐色 赤細粒と白・透明細 粒少 軟質	貯蔵穴 口1/8 周 野
6 土師器 大甕	口 径 17.7 高 残 0.6 最大 残 26.8	内外面ともに口縁部ヨコナデ後。頸部ナデ。外面は胴部ナデ。胴部ヘラナデ。頸部 内面は胴部と横位のヘラナデ。内面胴部ナデ。頸部ヨコヘラナデ。	2.5YR5/6 明赤褐 褐色 赤細・黒細粒多。白細 粒と黒・透明細粒少 やや軟質	床土 5cm 口1/4 周 7
7 支脚	長 14.2 幅 10.2 厚 4.9	自然の円礫をそのまま利用し。図の上平部全体が強く被熱赤化した後に右上部が破損 欠落している。カマド内で出土しているので支脚の可能性あり。残存重量 698.6g。	10YR6/3 にぶい黄褐 2〜3mmの石灰石品が多い。 硬質細密な火山岩	カマド内 1/4 欠

SG1区 SI-3 (第207図、写真図版72・127)

【位置】 SG1区北部の28.5-13.0・13.5、29.0-13.0・13.5グリッド。居館跡の外郭溝SD-95から東へ8m離れる。
古墳中期のSI-6とSI-69が南と西にある。古墳後期のSI-2と時期不明のSD-4に北東部と南部を切られる。
【規模と形状】 東西長5.78m、南北長5.76mの方形で、南北方向の中軸はN-18°-W。壁は外傾し、残存高0.03〜0.15m。床面は平坦で傾斜はない。掘方底面は小さな凹凸があり、床面から深さ6〜16cmで、ロー



第207図 権現山遺跡 SG1区 SI-3 遺構・遺物

ム粒・塊の多い明褐色土で全体を貼床する。

主柱穴は4本（P1～P4）。P4は上部を切るSI-2の掘方底で確認した。P1は径26×25×深さ70cm、P2は径26×25×深さ72cm、P3は径24×22cmでSD-4底面から深さ53cm、床面からの深さ76cm、P4は径28×26cmでSI-2掘方底面での深さ49cm、床面からの深さ約54cmである。4本とも径が小さくP4はやや浅く、P2は中位に段を持つ。柱間がほぼ等間隔の方形配置で、P1-P4間が3.09m、P2-P3間が3.15m、P2-P1間が3.06m、P3-P4間が3.19m。P1に自然石が入れられていた。南東隅にある貯蔵穴P5は東西軸の長方形（80×58×床面から深さ65cm）で、底面は西へわずかに傾き、壁は直線的で、上・中層に炭や焼土を含む。

〔カマド〕カマドが東壁際中央やや南寄りにある。天井が崩れて右袖南半はSD-4に切られ、残りは悪い。規模は114×81cmである。建物貼床上にローム主体の5層と灰白色粘土で袖部を作る。火床はほぼ平坦で、床面よりわずかに下がる。天井内面が焼土化して崩れた1～3層が燃焼層に堆積する。煙道は東壁を約20cm「U」字状に掘り、火床面から緩く上がる。右袖先端に倒立設置した壺（4）の体部が壊れて散乱し、一部接合できた。

〔覆土〕壁際の初期流入土にローム粒が多い。

〔遺物出土状況〕遺物は少ない。SI-2やSD-4に切られずに残っている建物部分全体で出土し、東壁際カマド周辺や南壁際などに比較的多い。鉄滓は、建物の南壁付近で2点出土した。カマド北袖先端部に壺が倒立していた。

第105表 権現山遺跡SG1区 SI-3 出土遺物

番号 種類 説明	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状況 (寸法)
1 土師器 杯	口 12.3 高 5.2 最大 12.6	やや薄い。外面の口・体部境に浅くで明瞭な段あり。外面体部上唇ナデ後、底面に多方向と体部に横色のヘラズリ。内外面口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部はナデとヨコナデ後放射状ヘラミガキ。外面体部の1/4程度、焼成後の割け方および平行割あり。	5YR4/6 赤黒 やや暗褐色 赤黒～細粒多、 白粒～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	床土3～12cmと貯蔵穴内・表土が接合 口2/3残 6、7、8、9、貯蔵穴、表土
2 土師器 杯	口 径 13.0 高 5.4 最大 径 13.6	外面の口・体部境に明瞭な段あり。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面は底面に多方向と体部に横色のヘラズリ。内面体部はヨコヘラナデ後にナメヘラミガキ。	5YR4/6 赤黒 やや暗褐色 白・透明細粒多、 赤黒～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	床土11cm 口1/6残 12
3 土師器 杯	口 径 11.3 高 5.3 最大 径 11.7	外面の口・体部境に明瞭な段あり。口縁部内外面にヨコナデ後、やや密なヨコヘラミガキ。体部は外面ヨコヘラズリ、内面ヨコナデ後に放射状ヘラミガキ。	5YR4/6 赤黒 暗褐色 赤黒と黒・白・透明細粒後 やや硬質	口1/6残
4 土師器 壺	口 13.4 高 17.3 最大 径 17.8	外面は胴部上唇ナデと下唇ヨコヘラズリの後、ヨコヘラミガキ。胴部に浅いタテハケ、基部ナデ、口縁部ヨコナデ、口～胴部にやや疎なタテヘラミガキ。内面は胴部ヨコヘラナデと基部ナデ。頸部ヘラナデと胴下縁ヨコヘラズリ。口縁部ヨコナデと疎なヨコヘラミガキ。胴部内面に黒褐色の付着物が散見残存。	7.5YR5/4 白・透明細粒多、 赤黒～細粒と黒・透明細粒少 やや軟質	カマド床面～土2cm が接合 口7/12残。頸合部、 第1/2層 K、K1、K2、K3、K4、 K5、K6
5 鉄滓 焼土・焼灰 (小、含鉄)	長 9.0 幅 6.2 厚 3.9 重 171.3	平面、本型割形ないしは不整五角形をした完形の焼土・焼灰。重量的には小形の焼土・焼灰に属し、含鉄率を持っている。左右の側部と下側の側部が直線状に伸びる形で、上側の側部が直線の焼土・焼灰と似た徐々に薄くなる形を示す。そのため、厚みも下側の側部から上側の側部に向って薄くなる。上縁は上側の側部の中央が浅く窪んでおり、下側の側部から胴部にかけては湾曲の流動性が低いためか、本底面や大形の気孔が閉じている。下縁は上側の側部に向かい緩やかにせり上がる形で、側部を含めて表面にほぼ平面状の湾曲の深さ約1cm以下の木炭面が点々と残されている。湾曲は密度が低く、表面だけでなく、内面にも微細な凹凸が立つ。含鉄率は下縁の中央付近が主体で、部分的に強く磁石に反応する。色調は表面の焼土土が黄褐色から茶褐色で、底は茶褐色から黒褐色となる。分析資料No.3。鑑定標準遺物構成No.14。	表 暗褐色 裏 茶褐色 磁石度 3 メタル度 弱化(△)	床土8cm 完形 鉄No.1
6 鉄滓 焼土・焼灰 (小、含鉄)	長 8.0 幅 7.3 厚 2.9 重 61.4	全体に扁平で左右方向に長手の焼土・焼灰。左側部と下側の側部が欠けている。上面は中央部が凹み、下縁は逆に凹みの突出部となっている。上面の一部と下縁右側には木炭面あり。下縁には点々と褐色に焼土の付着が認められる。前号(5)より厚みも薄く形も異なるが、同一遺構出土品としては良好な焼土・焼灰である。鑑定標準遺物構成No.15。	表 暗褐色 裏 茶褐色 磁石度 2 メタル度 なし	床土3cm 焼土2面 鉄No.2
7 土師質 粘粘土 土塊	長 2.7 幅 2.2 厚 1.1 重 4.8	扁平でつぶした形の粘粘土塊が焼成された状態。表面の凹凸は少ない。左側の面の右端や、側面に開示した縦長い凹みは、不確定だが草本植物の圧痕かもしれない。	10YR7/4 に近い黄褐色 微細 白微粒後 軟質	完形
8 土師質 粘粘土 土塊	長 3.1 幅 2.4 厚 2.1 重 7.1	不定形にこねた粘粘土塊がそのまま焼成された状態。表面に皺状の凹凸が多い。左側中央下部に示した草本植物の圧痕が1箇所だけ認められる。	10YR7/4 に近い黄褐色 微細 白微粒後 軟質	完形

床面に酸化鉄集中部が2箇所ある。P1の南約1mにある径約45cmの範囲と、またカマド西側にもあるが範囲は不明確。調査時には「砂鉄がさびたもの」と記録されている。砂鉄は黒色で鉄錆色にはならないので、それ以外の鉄に由来する酸化鉄混じり土層かと見られるが、その周辺では鉄製品や鉄滓は出土していない。範囲内はやや硬化しているがほぼ平坦で、炉と考える要素は少ない。

【出土遺物】1は体部外面に焼成後の平行刻線がある。4は外面を磨く特徴的な壺。図示した遺物以外の土師器314片(2,211g)の内訳は壺276片(2,029g)と杯38片(182g)で、明確な甕・甕・高杯片がない。杯は直立口縁が最多で、半球状杯も数片ある。鉄滓は鍛錬鍛冶滓が2点あり、そのうち1点(5)は金属学的分析を実施した(第11章)。焼粘土塊は図示した2点以外に8点(20,27g)がある。

SG1 区 SI-5 (第208図、写真図版72・73・127)

【位置】SG1区北部の台地平坦面の、27.5・12.5、28.0・12.5・13.0グリッド。居館跡東側の建物群中で、居館中央(東辺溝SD-95の南端)に最も近い。古墳中期のSI-6・66・69が東にある。東ないし北東2～3mに時期不明の土坑(SK-58～61・64・138)やピットがある。時期不明のSD-4が西辺を切る。南北方向の攪乱溝(調査時名称SD-36)にも切られる。

【規模と形状】主柱穴4本の配置と建物平面形が相似形と仮定するとほぼ方形で、南北の中軸はN-13°-Wである。南北長は5.33m。東西の残存長4.65mで、主柱穴から東西両壁までの距離が同一であれば推定長5.15mとなる。壁は垂直気味で、残存高0.20～0.42m。

床面はほぼ平坦で傾斜しない。入口施設関連と考えられる半円形の堤状の高まりが南壁際東寄りにある。ローム塊の多い褐色土で作り、高まりの内側は外側と変わらない平坦面。範囲は東西187×南北140cm、高まりの幅30～60cm、床面から高さ10～14cmで、西より東側が高い。掘方は南東隅と壁際を深く掘り、床面からの深さは2～20cm。南東隅のほか壁から1～1.5mの溝状部のみをローム主体の褐色土で貼床し、中央部はロームをそのまま床面とする。

主柱穴は4本(P1～P4)。P1は径48×45×深さ25cm、P2は径35×28×深さ45cm、P3は径39×25×深さ40cm、P4は径55×50×深さ51cm。P2～P4よりP1が浅く、P4は中位に段を持つ。P1～P3は上半の一方に緩い傾斜部があり、抜き取り痕とも考えられる。柱間はP1-P2間2.54m、P3-P4間2.56m、P1-P4間2.46m、P2-P3間2.35mで、南北柱穴間がわずかに狭いが、ほぼ方形配置である。南壁際の高まり西側にあるP6は径28×21×深さ23cm。

間仕切溝は西壁際でD2・D3、南壁際でD4、東壁際でD5・D1の計5本を掘方底面で確認した。D2・D3の西側をSD-4が切る。主柱穴に付随するような溝はD1～3で、D4はP6につながる。長さはD1=124cm、D2=130cm、D3=100cm、D4=110cm、D5=70cm。すべて断面「U」字状で幅11～26cm、掘方底から深さ5～8cm、床面から深さ6～10cm。

貯蔵穴P5が南東隅にあり、西側は堤状の高まりに接する。南壁とほぼ平行する東西軸の長方形で100×80cm、床面から深さ24cm。底面は上端形と異なりほぼ方形で緩い凹凸を持ち、南北壁が垂直気味で、東西壁は緩く傾く。1層は微量の炭化物を含み、2層上面付近に薄い層状粘土がある。粘土はP5内南東部のほか、P5北側床面とP5南東の床上約5cmにある。P5内と壁際壁際の粘土が浮くので、廃絶後一定期間経過後に堆積している。

【炉】北部中央、P1とP2の中間にある。不整楕円形で53×38cm、深さ2～3cm。断面は浅い皿状で底面は平坦で、被熱痕はあまりなく、硬化赤変部もない。炉の覆土の特徴は不明だが、壁・壁・覆土より焼土が多い。中央底面直上に長さ19cmの鏝を置く。なお炉の西側40～50cmにも床面直上で焼土が確認されたが、炉とは考えにくい。

第10章 権現山遺跡 SG1区

1は外面に煤(?)が付く杯。5は折れた後に被熱した高杯。7は粗製の小形壺。土師器破片を転用した研磨具(12～15)はSI-6にもある。8は外面をよく磨く裏で、雲母を含む土器はSG1区SI-89や4区SI-24などにある。8と11は胎土に混入した稲稈圧痕が1箇所ある(断面図)。土師器の稈痕はSG1区SI-10・69・84や4区SI-4などにある。9は口頸部が完存するので、転用器台かもしれない。剣形石製模造品と有孔円板は、この時期の遺物としてはかなり粗雑。SG1区ではSI-5・7・8・10・34・69・174と低地(27-13グリッド)に石製模造品があり、SI-10・174は粘板岩製品。北方の権現山遺跡4区SI-4等にも模造品がある。

第106表 権現山遺跡 SG1区 SI-5 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師杯	口 14.5 高 6.5 底 5.3 最大 14.7	外面は浅い湾曲状注痕(木目?)。外面体部ナデ後ヨコヘラケズリ。内面体部は上部ヨコヘラナデ。下部に光沢のあるヨコヘラナデ。内底面は光沢のある1方向ヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面は底面以外に黒色物(煤か糊粉)が広く付着。	2.5YR4/6 赤褐色 破片 白・黒細粒と透明細粒 破片 白・黒・赤細粒少	南部床土9～12cmと 貯蔵穴底土3～7cm が混合 口11/12周。底全周 24、25、38、39
2 土師杯	口 15.5 高 15.5 最大 15.8	内外面の口縁部端に稈痕。外面体部ナデ後ヨコヘラケズリ。内面ヨコヘラナデ。口縁部は内外面ヨコナデ後。内面に横～斜位ヘラミガキ。外面と内面内面も磨いていた可能性はあるが現状では確認できない。	5YR6/6 橙 やや黄緑 白・透明細粒～黄 粘土白・赤・灰色細粒少 破片 白・黒・赤細粒少	貯蔵穴底土1cm 口1/6周 33
3 土師高杯	口 18.4 高 9.6 最大 18.4	外面体部ヨコヘラケズリ後に口縁部面をナメヘラナデ。杯底部に放射状ヘラケズリ。口縁部内外面のヨコナデ。内面に横～斜位ヘラミガキ。外面と内面内面も磨いていた可能性はあるが現状では確認できない。	7.5Y7/6 橙 やや黄緑 白・黒・赤細粒 少。灰色と赤細粒 やや黄緑	床土3cm(貯蔵穴上 方) 口7/12周 26
4 土師高杯	高 9.2 最大 9.2	倒立した状態で左回り(?)に巻き絡みした痕あり。外面に密なタテヘラミガキ。内面はタテヘラミガキ。	5YR5/6 明赤 やや黄緑 赤・白粒～微粒 多。黒・透明細粒～微粒 破片 白・黒・赤細粒少	脚柱全周
5 土師高杯	口 19.3 高 17.7 脚縁 15.7	外面は杯体部にヘラナデまたはナデの後。杯底部に放射状ヘラケズリと口縁部ヨコナデ。脚縁部内外面のヨコナデ。脚内面ヨコヘラケズリ。脚内面はナデヘラナデ。特に杯底は磨滅してミガキの有無が不明。脚上端部が折れた後に杯底と脚部が被熱し、杯外底と脚部にも煤が付着。	7.5YR8/4 浅黄緑 やや黄緑 赤・黒細粒～微粒 と透明細粒少 破片 白・黒・赤細粒少	貯蔵穴底面 No.31 脚部は横位 口全周。脚柱全周。脚 底 31、32
6 土師高杯	高 7.1 最大 7.1 最大 6.6	倒立状態で土器を左回りに巻き絡みし、脱った時の稈が内面に残る。外面は磨きよく微位のナデ。内面は上部の腹をそのまま残し、下部は横位のナデ。	7.5YR6/6 橙 やや黄緑 白・赤細粒～微粒 と透明細粒少 破片 白・黒・赤細粒少	南部床土上 23 脚柱全周
7 土師小形壺	高 6.0 最大 6.0 最大 7.8	小形粗製品で、手捏でなく粘土貼土後に成形。外面は肩部ハケメ後に中位ナデと内面1方向ヘラナデ。内面はやや黄緑。	10YR6/2 灰黄緑 破片 白・赤・黒細粒少	中央部床土3cm 口全周。面1/2周 9
8 土師壺	口 17.3 高 28.4 最大 26.8	外面側部は1平上、下平下ヘラケズリ後に横～斜位ヘラミガキ。内外面の頸部をヨコナデ後。外面下部に横位のヘラナデとヘラケズリ。内面側部はナメヘラケズリ(一部にヘラナデ)で、胴部下平には胎土に混入していた稲稈痕が1箇所あり。	2.5Y4/1 黄灰 粗粒。白粒と白・透明細粒 ～微粒多。黒・灰色細粒と 赤細粒少 破片 白・黒・赤細粒少	床面～床土7cmと貯蔵 穴底土14cmが同一 側面。腹見通SD-36の 破片も混合 口7/12周 3、4、38、SD-36 4、SD-36一括
9 土師壺	口 19.2 高 16.8 最大 16.8	外面は肩部～頸部下平にナメヘラナデ後。口～頸部ヨコナデ。内面は肩部に横～斜位ヘラナデと頸部下平ヨコヘラナデの後。口～頸部ヨコナデ。肩部より上だけの全周が残っている。転用器台の可能性もある。	7.5YR7/6 橙 やや黄緑 白粒～微粒。黒 細粒～微粒。透明微粒。赤 細粒少 破片 白・黒・赤細粒少	貯蔵穴底土3cmで正位 口～頸全周 42
10 土師壺	口 16.2 高 14.9 最大 14.9	外面は胴部ヨコヘラケズリと頸部～肩部タテヘラナデ。内面は胴部タテナデ。内外面の口縁～頸部ヨコナデ。	5YR5/6 明赤 粗粒。白・灰色微粒～微粒多。 黒・半透明細粒～微粒 破片 白・黒・赤細粒少	北部床土直上。縦見通 SD-36の2片も同一 側面 口1/6周。面1/3周 11、52、56
11 土師壺	高 3.2 最大 7.8 最大 13.4	底面の粘土貼付けを中央だけ行わず、凹み底状。外面底面は稈を模する多量な雲母と稲稈圧痕(2箇所)を残し、無調整。内面底部に1方向と内外面胴部に斜位のナデ。	5YR6/6 橙 粗粒。白・赤細粒～微粒多。 黒細粒～微粒少 破片 白・黒・赤細粒少	中央部床土直上 面7/12周 7
12 土師研鉢具	長 5.6 幅 2.9 重 17.2	土師器模製破片を転用し、2辺がよく磨滅している。もとの土器は外面ナメヘラケズリ。内面ヨコヘラナデ。	10YR7/4 白～黄緑 やや黄緑 赤細粒～微粒と白・ 透明細粒少 破片 白・黒・赤細粒少	貯蔵穴底土2cm 37
13 土師研鉢具	長 5.4 幅 2.5 重 10.7	土師器模製破片を転用し、3辺がよく磨滅している。もとの土器は外面ヨコヘラケズリ。内面ヨコヘラナデ。	10YR7/4 白～黄緑 やや黄緑 白・黒・透明細 粒～微粒と白粒少 破片 白・黒・赤細粒少	貯蔵穴底土4cm 36
14 土師研鉢具	長 5.2 幅 3.9 重 18.0	土師器模製破片を転用し、1辺がよく磨滅している。もとの土器は内外面ヘラナデ後に外面下位ナメヘラケズリ。	10YR5/3 白～黄緑 やや黄緑 白・黒・透明細 粒～微粒と赤細粒少 破片 白・黒・赤細粒少	盛土直上直 22
15 土師研鉢具	長 3.6 幅 2.5 重 6.3	土師器模製破片(?)を転用し、2辺がよく磨滅している。もとの土器は内外面ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 破片 赤細粒～微粒少。白・ 黒細粒～微粒多 破片 白・黒・赤細粒少	貯蔵穴底土9cm 41
16 磨または 研物石	長 14.2 幅 5.6 厚 3.4	稈状の自然の河原石。加工・使用痕や被熱痕は見られない。重量392.0g。	5Y6/2 灰オリーブ 破片で破片は均一な砂岩	定形
17 磨または 研物石	長 19.0 幅 6.3 厚 5.0	稈の自然の河原石をそのまま利用。全面が強く被熱して薄褐色に変色する。磨物石の可能性もある。加工痕や使用痕は見られない。重量873.6g。	10YR5/2 灰黄緑 破片で破片は均一な砂岩	定形 29

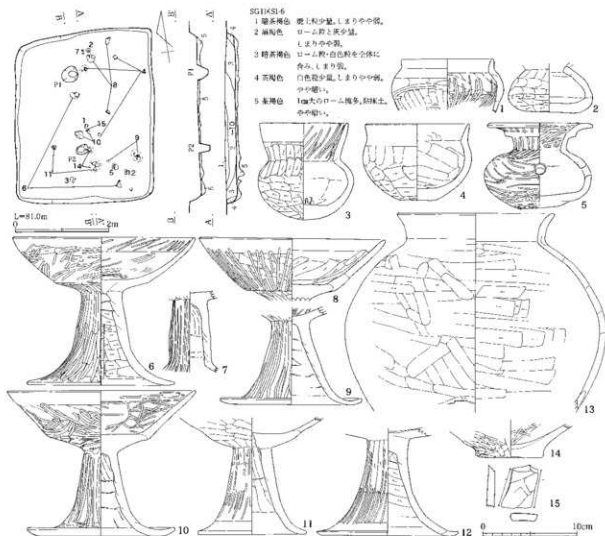
18 石製地品 有孔門板	長 2.0 幅 1.8 厚 0.3 重 2.0	明確な断面を残すほぼ1方向の研削を表面に行った後、片面から穿孔する。初孔径1.57mmで、終孔径は穿孔側面が生じているため不明瞭だがほぼ同くらいの径と見られる。側面は横方向(穿孔と同方向)に粗く研削し、外形の約半周が多角形になるように磨く。全周の約半周はきちんと磨かず、側面成形時の切削面を残す。	7.5GY5/1 緑灰 滑石片岩	北東部床土9cm 穴形 2(北)
19 石製地品 側面品	長 4.5 幅 2.4 厚 0.4 重 5.5	断面がやや不明瞭で弱い光沢のある1方向の研削を表面に行った後、片面から穿孔する。初孔径1.65mm、終孔径1.40mmで、表面に穿孔側面あり。側面は横方向に研削し、右表面に比べて断面が明確。上平部の側面は成形時の切削面も残す。	7.5Y2/1 黒 緑色片岩	床土7cm(南東柱穴の 上方) 穴形 1(南)

SG1区 SI-6 (第209図、写真図版73・74・127)

[位置] SG1区北部に入り込む低地に面する台地縁辺の28.0-13.0・13.5グリッド。居館跡東辺中央の溝SD-95から東に10m離れる。古墳中期の建物は南にSI-66、北にSI-3・69、西にSI-5がある。西に時期不明のP-58やSK-59がある。他遺構との重複はない。

[規模と形状] 東西長2.98m、南北長3.65m。西辺より東辺が約40cm長く、北西隅がやや丸い不整形長方形。中軸はN-10°-E。長方形建物は、SG1区ではSI-6・14(?)・66・88・136(?)、4区ではSI-25などがある。壁は外傾し、残存高0.14~0.24m。床面はほぼ平坦で傾斜しない。掘方底面は細かな凹凸が著しく、床から深さ3~18cmで、ローム粒・塊の多い5層で貼床する。低地に近い位置なので、西半の掘方底面はロームだが東半は黒色土である。

主柱穴は2本。P1は径37×33×深さ21cm、P2は径26×19×深さ23cmで、ともに微量のローム粒を含む暗褐色土で埋まる。P1-P2間隔は1.60m。がなどは認められなかった。



第209図 権現山遺跡 SG1区 SI-6 遺構・遺物

【覆土】レンズ状の自然堆積で1層に微量の焼土を含む。白色粒が3層に多く、4層にも含むが、火山灰かどうかは確認していない。

【遺物出土状況】遺物は多く、西壁際を除く全体から出土する。大半は床面からかなり浮いた状態で出土し、竈(5)だけは床面に近い。

【出土遺物】図示した以外の土師器207片(3,371g)の内訳は杯107片(938g)・高杯27片(308g)・壺・甕類73片(2,125g)。甕と杯は小破片ばかりで、甕底部は図示以外に4個体分ある。硬質焼成の土師器大形壺破片が多数あるが、接合・図示はできなかった。深い平底の鉢は、杯と呼ぶにはやや厚く重い(4)。須恵器を模倣した土師器竈が珍しい(5)。高杯は器高15.5cmで、最も高い中期前葉(17～19cm)より少し低く、中期前葉の新相。土師器破片を転用した磨研具(15)はSI-5にもある。

第107表 権現山遺跡 SG1区 SI-6 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 新土・焼成 (または素材)	出土状態 現状・位置 注記
1 土師器 杯	口 径 9.6 高 径 5.7 最大 径 12.0	薄く軽い。外面は下位にタテヘラナデと中位ヨコヘラミガキ。内面は胴部に斜位のコビオサエの後、体部にヨコヘラナデと、横位後縦位のヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐 或る 赤・黒細粒と透明 鉄多。灰色鉄 或る	床土 8cm 口5/12 周 17
2 土師器 小形壺	口 径 5.0 最大 径 9.0	底が底面に對してやや傾く。内外面ナデ後、体部下位から外延面外縁にかけてヨコヘラナデ。	7.5YR7/6 暗 やや暗い 黒・細粒多。 黒・透明細粒少 或る	床土 23cm 口1/4 周、底全 体
3 土師器 小形壺	口 径 9.2 高 径 10.2 最大 径 10.1 重 337.0	厚く重い。外面ナデ後、胴部に斜位、体部中位に横位、底部に多方向のヘラナデ。内面体部ヨコヘラナデ、内面胴部はヘラナデとヨコナデの後にナメヘラミガキ。	10YR7/3 に近い黄褐 やや暗い 白・透明細粒や やや多。赤・黒細粒・黒細 粒少	床土 9cm 口1/4 周、底全 体
4 土師器 鉢	口 径 11.0 高 径 8.0 底 径 3.6 最大 径 11.5	外面は体部ナデ後に下平部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ。外底面は1方向ヘラナデ。内面は体部ナメヘラナデ、口縁部はヨコナデと下平部中心のヨコヘラナデ。	7.5YR6/4 に近い暗 やや暗い 赤・黒細粒多。 赤・黒・透明細粒やや多。 黒・透明細粒少 或る	床土 7～17cmが接合 口1/4 周、底全 体 21, 25, 31
5 土師器 竈	口 径 11.2 高 径 9.1 底 径 4.0 最大 径 11.3 重 356.0	外面は底部に多方向と体部下位に横方向のヘラナデ。胴部に横・斜位ヘラナデ。体部ヨコヘラミガキ。口～胴部は外面ヨコナデ後タテヘラミガキ。内面はヨコナデと胴部ナメヘラナデ後、横・斜位ヘラミガキ。体部内面はナデで、器面の割傷が目立つ。内外面の口～胴部は薄く赤味を帯びるが、赤彩ではなく焼成時と思われる。	7.5YR6/4 に近い暗 やや暗い 黒・透明細粒一 體多。赤・白細・黒細少 或る	床土 1cm 口7/12 周、胴以下全 体
6 土師器 高杯	口 径 19.3 高 径 15.6 底 径 15.6	杯底部を粘土で重たい底に、倒立状態で器を置き積む可能性がある。外面は倒立杯底部に縦位のヘラナデ後ヘラミガキ。杯体部に横位のヘラナデ後ヘラミガキ。胴内面はヨコヘラナデと、ヘラミガキによる縦位2本以上。杯内面はナデ後、底部1方向と体部に斜位のヘラミガキ。	7.5YR6/6 暗 やや暗い 赤・白細粒と黒・ 透明細粒。白・灰色鉄少 或る	床土 8～12cmが接合 口1/12 周、胴1/3 周 4, 22
7 土師器 高杯	高 径 8.6 最大 径 4.2	外面胴部は上ヘラナデとヘラナデの後にタテヘラミガキ。胴内面はコビナデとコビオサエで構成し1方向を残す。杯部の内面はヘラナデ後に割っているかもしれないが不明。	5YR6/6 暗 或る 赤・黒細粒と透明 鉄多。赤・黒・白細粒少 或る	床土 22cm 胴部全周 29
8 土師器 高杯	口 径 19.7 高 径 6.6	外面は杯底部に放射状ヘラナデ後ヘラミガキ。杯体部はナメナデと口縁部ヨコナデ後、タテヘラミガキ。内面はナデと口縁部ヨコナデ後、杯体部ナメヘラナデ。外面は少し焼熱・赤味。	10YR7/4 に近い黄褐 やや暗い 灰色鉄・透明 鉄多。赤・黒・白・黒細 粒少	床土 15～20cmが接合 口2/3 周、胴 28, 30, 39
9 土師器 高杯	口 径 10.4 高 径 14.9	胴部は倒立状態で反時計方向に巻き積みし、内外面胴部ヨコナデ、外面タテヘラナデと上と下平にタテヘラミガキ。杯底部外面タテヘラナデ、内面1方向ヘラミガキ。	5YR6/6 暗 やや暗い 赤・黒細粒多。 白・黒・透明細粒少 或る	床土 3～6cmが接合 胴部全周、胴部1/4 周 5, 8
10 土師器 高杯	口 径 20.0 高 径 15.4 最大 径 15.7	胴部は倒立状態で反時計方向に巻き積み成形。内面は胴上部にナメナデ。胴付近にヨコナデ。内外面胴部ヨコナデ。内外面の口縁部にヨコナデと杯部全面にヘラミガキ。外面の杯底部～胴部ナデ後、胴に縦位と杯底に斜位のヘラミガキ。	10YR7/3 に近い黄褐 やや暗い 白・透明細粒一 體多。赤・黒・透明細粒や や多。赤・灰色鉄少 或る	床土 6～9cmが接合 口7/12 周、胴部1/4 周 やや多 15, 18
11 土師器 高杯	口 径 11.2 高 径 11.5	胴上下は内面に斜り目と外面にタテヘラナデ。下平は内外ナデと胴部ヨコナデ。外面タテヘラミガキ。杯部外面は底部に縦位と体部に横位のヘラナデ。杯部内面は磨減して調整不明。	7.5YR6/6 暗 やや暗い 黒・透明細粒や や多。赤・白細粒と灰色鉄 少	床土 8～17cmが接合 胴部1/6 周 9, 12
12 土師器 高杯	口 径 11.3 高 径 15.0	胴内面は上端ヨコナデ。中位ナメヘラナデ。下位ナデ後胴部ヨコナデ。外面はタテヘラナデと胴部ヨコナデ。下平にタテヘラミガキ。杯部は磨減して調整不明。	10YR6/4 に近い黄褐 やや暗い 赤・黒細粒と 透明細粒多。白・黒細粒少 或る	床土 23cm 口5/12 周 6
13 土師器 磨	口 径 16.6 高 径 21.1 最大 径 27.6	やや強い。胴部下位に積み上げ休止面。内外面ともに胴部ヨコヘラナデ、内面中位と外面胴部はヘラナデに近い仕上げ。内外面の口～胴部にヨコナデ。口～胴部は破片が小さいので復原しにくく、口底はもう少し広い可能性もある。	10YR6/6 明黄褐 やや暗い 白・透明細多。赤 粒と赤・白・透明細粒や や多。赤・灰色鉄少 或る	試掘トレンチ出土土 層と接合 口1/12 周、胴7/12 周 28-13北トレンチ
14 土師器 磨	口 径 3.6 底 径 6.9	外底面は多方向の小形なヘラナデ。内外面胴部に横位の斜位ナメヘラナデ。外面が弱く焼熱赤化する。	10YR6/4 に近い黄褐 やや暗い 白・平・透明細粒多。 黒・透明細粒一 體多	床土 16～17cmが接合 口全周 9, 13
15 土師器 磨研具	高 径 4.5	土師器模倣の磨研具を転用。内外面ヘラナデ。両の両側縁を磨減し、丸みを持った磨耗面になる。	2.5Y3/1 黒褐 やや暗い 白・黒・透明 鉄多 或る	床土 5cm 20

SG1区 SI-7 (第210・211図、写真図版74・75・127・128)

【位置】SG1区中央部の台地平坦面、26.0・13.0・13.5グリッド。居館跡南東隅の東側に相当し、居館の溝から約10m離れる。古墳中期のSI-8が南東にある。北東に後期のSI-70が近接する。重複する遺構はない。西半は調査区外。

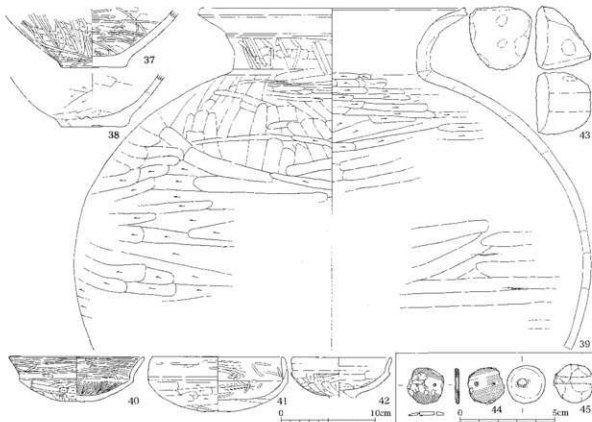
【規模と形状】主柱穴配置から方形と推定され、中軸はN-2°-E。南北長5.20mである。東西長は3.50m以上で、仮に4本の主柱穴から東西両壁までの距離が同一とすると、東西推定長5.2mとなる。壁はやや外傾し、残存高0.34～0.38m。床面はほぼ平坦で傾斜しない。入口関連と考えられる堤状の高まりをローム塊の多い土で南壁際に作る。西半が調査区外で全形不明だが方形か半円形で、南北110cm、東西80cm以上、高まりの幅20～40cm、床面から高さ2～3cm。内側平坦面と周囲床面の比高や、高まり部分の土層は記録不備のため不明。掘方底は緩い凹凸を持ち、床面から深さ3～12cm。ローム粒・塊の多い暗黄褐色の8層で全体を貼床する。

主柱穴はP1～P3で、本来は4本主柱と推定される。P1は径47×44×深さ68cm、P2は南北41×東西29cm以上で深さ不明(断面図なし)、P3は径45×44×深さ68cmで、ほぼ同じ大きさと思われる。柱間はP1-P2間2.09m、P3-P2間2.00m。各柱穴とも壁から1m以上離れる。P3南西の掘方底面で確認したP5は径28×22cm、掘方底面から深さ10cm。

壁溝D1が調査部分の壁際を全周する。断面「U」字状で幅12～25cm、床面から深さ4～9cm。間仕切溝はD2とD3が南北相対し、掘方底面で確認した。長さはD2が78cm、D3が100cm。ともに断面「U」字形で幅27～36cm、掘方底から深さ6～10cm。南東隅の貯蔵穴P4は方形で68×60×深さ51cm。平底で東壁は垂直気味、西壁はやや外傾し直線的。1・2層に炭化物、4層にローム塊を含む。

【火処】確認されなかった。

【覆土とテフラ】覆土1・2層に含む白色粒は、分析していないが古墳後期初頭のHr-FAテフラの可能性はある。



第211図 権現山遺跡 SG1区 SI-7 (2) 遺物

ローム粒が4・7層に多い。

〔遺物出土状況〕全域に遺物が極めて多い。床面からかなり浮き、東・南側で高い傾向がある。底部を失った小形甕が北東柱穴で出土した(29)。40～42は混入品の可能性がある。

〔出土遺物〕図化以外の土師器1180片(13,692g)の内訳は壺・甕類745片(9,293g)、杯249片(1,984g)、高杯186片(2,415g)。他に焼粘土塊が5点ある。杯は椀形品が主体。模倣杯は不掲載の破片もわずかで、40・41は混入品であろう。高杯は図化品も含め杯・脚部とも15個体分以上あり、有稜杯部と「ハ」の字状脚部が主体で、柱状脚も5点ある。杯部底面の突出部に脚を接合する破片がある。42は古墳後期の須恵器模倣高杯が混入したのか、または高杯蓋の模倣品。鉢(25・26)と甕は図化品のみ出土した。甕(27・28)は単孔の小形甕で、4区SI-3などに例がある。壺は図化以外に底部4個体以上あり、小中形が主体で、大形壺は単孔の39だけである。甕類は図化以外に底部が7個体あり、胴部は薄い。43は軽石製の砥石。粗雑な有孔円板(44)はSG1区SI-5、土玉(45)はSG1区SI-178・SD-37にある。

第108表 権現山遺跡SG1区SI-7 出土遺物

番号 種類 図化	大きさ (cm・g)	特 徴	色澤 胎土・顔料 (塗土は素材)	出土状態 現存位置 目録
1 土師器 杯	口 径 10.6 高 6.3 最大 径 11.0	非常に薄く軽い。外面は体部ヨコヘラナデ後底部ヨコヘラナデ。内面は体部ヨコヘラナデ。下平に施すヘラミナギ(7)。口縁部内外面ヨコナデ。	10YR8/4 浅黄緑 やや暗黒 赤黒・黒粒多。白 細粒と黒・透明細粒少 微質	南部床1 24cm 口15/12周 教習2
2 土師器 杯	口 径 11.0 高 4.7 最大 径 11.4	外面は体部ナデ後に中位以下ヨコヘラナデ。内面は体部ヨコナデ後に前部ヨコヘラナデ。内面口縁部ヨコヘラナデ後。内外面口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/6 暗 やや暗黒 赤黒・黒粒多。 白・透明細粒と灰色微粒 粒少 やや微質	口1/6周、体1/3周
3 土師器 杯	口 径 12.2 高 7.1	底部は欠損しているが丸底だった可能性あり。外面は口縁部ヨコナデ後、体部ヨコヘラナデ。内面の大半は断面割落のため調整不明で、下位にヘラミナギが存在する。	5YR5/8 明赤褐 やや粗い 赤・白・透明細 粒多。赤黒・粗粒少 教習	北部床4 4cmと東部床 1 23cmが同一個体。北 西柱穴でも1片出土 7. 53, 87, 北西柱穴
4 土師器 杯	口 径 11.3 高 6.3 最大 径 3.5	薄く軽い。外面はヘラナデで凹面状。外面体部ヘラナデ。口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミナギ。内面は断面割落のため調整不明の部分が多く、ヨコヘラミナギが部分のみに残る。	2.5Y/2.2 暗灰黄 やや粗い 赤・白・透明細 粒多。赤・白・灰色微粒 やや微質	東部床1 17cm 口11/12周、体1/6周、 底全周 79
5 土師器 杯	口 径 11.0 高 5.4 最大 径 11.8	外面は口縁部ヘラナデ、下平部ヘラナデ。内面は体部ナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	10YR7/4 に近い黄緑 やや暗黒 白・透明・灰色細 粒と赤・黒微粒少 やや微質	口1/8周
6 土師器 杯	口 径 12.9 高 5.0	外面体部は上平ナデ後に下平ヘラナデ。一部のみにヘラミナギ。内面体部はナメナデ後にタチヘラミナギ。内外面口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/4 に近い暗 褐色 白・赤・透明細・粗 粒少 やや微質	口1/6周
7 土師器 杯	口 径 17.7 高 8.5	底部を欠くが丸底の可能性あり。非常に大形。外面は体部ヨコヘラナデ。底付近ヘラナデまたはヘラナデ。内面は割落して調整不明で、下位にヘラミナギの可能性あり。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR7/6 暗 やや暗黒 白・透明細・粗粒 多。黒・赤微粒少 やや微質	口1/18周、頸1/8周
8 土師器 杯	口 径 2.4 底 4.0 最大 径 10.6	外面は1方向ヘラナデで平底。外面体部ヨコヘラナデ。内面は多方向のヘラナデとヘラミナギ。	7.5YR5/4 に近い暗 やや暗黒 白・灰色微粒・ 粗粒と赤・透明微粒多。平通 明細粒少 微質	南部床1 13cm 口2/3周、底全周
9 土師器 高杯	口 径 18.8 高 5.7	外面は杯体ナメナデと下端・杯底・頸にナメナデナデ。杯部中位ヘラミナギ。内面は底部に放射状と多方向のヘラナデ後、ヨコヘラミナギ。	7.5YR7/4 に近い暗 やや暗黒 赤・白・灰色微粒 やや多。黒微粒少 やや微質	北部床1付近の床土 5cmと臥床中央で接合 口11/3周、55, 床土
10 土師器 高杯	口 径 13.5 最大 径 13.9	外面は杯底部に縦位と杯底部に横位のヘラナデ。脚部底面内外面ヨコナデ後、脚外面に赤なタチヘラミナギ。脚部は倒伏状態で反時計回りに巻き縮みして内面タチナデ。杯部内面は多方向のヘラミナギで、やや微塵が多く残って暗褐色。	7.5YR5/4 に近い暗 褐色 赤黒・粗粒と透明細 粒多。赤・黒微粒少 やや微質	脚柱1周、脚底1/4周
11 土師器 高杯	口 径 16.6 高 6.1	外面は杯体・底部ナデ後、体部下端と杯底外周に横いヘラナデ。体部外面ヨコヘラミナギ。内面はヘラナデ後、下平～底部に多方向ヘラナデと中位以下平通のヘラミナギ。内外面口縁部にヨコナデ。杯底部は丸く盛り上がる面の中央に径7mm・高さ2mmの凹みを刻みつけた後に、脚部を接合または成形する。	10YR7/3 に近い黄緑 やや暗黒 赤黒・粗粒やや 多。赤・透明細粒少 やや微質	北東柱穴内床土19cm 口1/3周、68, 床土埋土
12 土師器 高杯	口 径 5.5	外面タチヘラナデ。脚部内面は横み上げ板を残し、軽いナデ。杯部内面は多方向ヘラナデ。	10YR7/4 に近い黄緑 やや暗黒 赤・灰色微粒・粗 粒やや多。黒・白・透明細 粒少 微質	中央部床土7cm 脚柱1/2周 26
13 土師器 高杯	口 径 6.1 最大 径 5.6	外面は脚部に縦位と杯底部付近に横～斜位のヘラナデ。脚部内面は倒伏状態で時計回りに巻き縮み後、蓋ナデ。杯内面底部はヘラナデ後に多方向の赤なヘラミナギ。	10YR7/4 に近い黄緑 やや暗黒 赤・灰色微粒・粗 粒やや多。黒・白・透明細 粒少 微質	脚柱2/3周
14 土師器 高杯	口 径 3.4	脚上端をやや斜る前。外面は脚～縦位ヘラナデ。杯内面は多方向ヘラナデで丁寧に仕上げられ、杯底部の丸く盛り上げる面の中央に径6mmの凹みを刻みつけた後に、脚部を接合または成形する。	10YR7/4 に近い黄緑 やや暗黒 赤・白・灰色細 粒少 微質	脚柱2/3周
15 土師器 高杯	口 径 15.0 高 4.8	脚部内面は中空部の上端が残る。外面は脚部に縦位と杯底～杯底部に斜位のヘラナデ。内面は底部に多方向と体部に斜位の丁寧なヘラナデでミナギに近い平滑な仕上げ。内外面口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/4 に近い暗 やや暗黒 赤黒・粗粒と白・ 灰色微粒やや多。黒・透明 細粒少 やや微質	野塚穴底土10cm 口11/6周、杯底全周 白・透明細粒と白・3
16 土師器 高杯	口 径 18.0 高 4.8	外面は杯体・底部ナメナデ後に体部下端に横いヘラナデ。内面はヘラナデ後、底面ヨコヘラナデ。中位に軽いヘラミナギ。内外面口縁部ヨコナデ。	10YR8/4 浅黄緑 やや暗黒 赤黒・粗粒と白・ 灰色微粒やや多。黒・透明 細粒少 やや微質	臥床土 口1/3周 床土埋土

第 10 章 権現山遺跡 SG1 区

17 土師器 高杯	高 3.2 底 14.4	脚部は倒立状態で反時計回り(7)に巻き込み、外面タテヘラズリ、内面ヨコヘラズリ後に脚部を縦～斜位ナデ。内外面の脚部底にヨコナデ。	2.5X7/3 浅黄 やや暗黒 白・透明～黒 粒やや多。赤・灰色粗粒と 黒細粒少 やや硬質	北西柱の内 脚部2/3周 北西柱付
18 土師器 小皿	口 径 13.0 高 4.5	口縁部が薄く内側する。頸部につながるカーブが破片下端に残る。外面に縦位のヘラズリがヘラナデ。内面にナメヘラズリ、内外面口縁部ヨコナデ。外面に縦位と内面に斜位～縦位のヘラミガキ。	7.5YR6/4 に近い暗 やや暗黒 赤粒～黒粒多。 白・黒・透明細粒少 やや硬質	北東柱付付足の床上 12cm 口1/4周 70
19 土師器 小皿	高 8.4 底 最大 13.1	体部中位に横み上げ休表面。外面は縦部にヘラナデと中位以下にヘラズリ。内面は上位にヘラナデと中位にナデ。	7.5YR7/6 暗 やや暗黒 白・灰色・透明 粒～黒粒多。赤粗粒と黒細 粒少 軟質	北東部床上7cm 体1/2周 92
20 土師器 小皿	高 4.5 底 3.4 底 8.5	外底面は1方向ヘラズリでわずかに凹面。外面体部は丁寧で平滑なヘラナデ。内面は底面ヘラナデ。体部ナデ。	7.5YR6/6 暗 やや暗黒 白・黒細粒と透 明粒多。赤・灰色粗粒少 やや硬質	体5/12周。底全周
21 土師器 小皿	高 2.9 底 3.8	薄く軽いので杯の可能性もある。外底面は多方向ヘラズリ。外面体部は丁寧なメヘラナデ。内面は少し粗な多方向ヘラナデ。	2.5YR6/0 暗 緑黄 透明・黒細～黒粒多。 赤細粒少 やや軟質	東部床上15cm 底全周 22
22 土師器 小皿	高 3.9 底 3.6～7 底 9.2	外底面中央の上げ底と底面外周は丁寧ナデ。外面体部はやや硬なナデ。内面は多方向ヘラナデ。	10YR6/4 に近い黄粉 やや暗黒 赤粒～黒粒と黒 透明細粒多。白細粒少 やや軟質	北部床上3cmと船床 中が接合 底5/12周 62。床下
23 土師器 小皿	高 2.1 底 4.7～8	外面外面はナメナデで粘土に生じた皺状の亀裂が多い。外底面は中央が凹み、ナデ後に外周部ヘラズリ。体部内面は多方向ヘラナデ。	7.5YR6/6 暗 やや暗黒 赤粗粒と白・赤・黒 透明細粒と白細粒少 やや軟質	中央部床上17cm 底全周 27
24 土師器 小皿	高 3.3 底 5.0 底 最大 12.0	外底面は多方向ヘラナデ。体部外面は斜位～縦位のヘラナデ後ヘラズリ。内面は底面に多方向と体部底面横位のヘラナデ。	7.5YR6/6 暗 やや暗黒 赤粗粒と白・黒・ 透明細粒多。やや軟質	中央部床上21cm 底全周 44
25 土師器 鉢	口 径 20.2 高 4.6	外面にナメヘラズリ。内面に横～斜位ナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	2.5Y5/2 暗灰黄 やや暗黒 白・赤粗～黒粗 多。白微・透明細粒・黒細 粒少 やや硬質	口1/12周。体1/4周
26 土師器 鉢	口 径 17.6 高 4.9 底 最大 17.9	外面ナメナデと内面ナメヘラズリ後、内外面の口縁部にヨコナデ。	10YR6/3 に近い黄粉 やや暗黒 白・黒・赤・透 明細～黒粒少 硬質	中央部床上7～21cm が接合 口5/12周 24。26
27 土師器 小皿	高 2.6 底 5.6 底 1.6	外面は体部タテヘラズリと底面に横なナデ。内面は多方向ヘラナデ。孔端面を最後にヨコヘラナデ。	7.5YR7/4 に近い暗 緑黄 白・黒・透明細 粒少 やや軟質	底1/3周
28 土師器 小皿	高 3.1 底 6.4 底 最大 12.4 底 2.2	頸部は外面タテヘラズリ後に下縁を横なナデ。内面はナデ後に底面周を1方向ヘラズリ。外底面は横なナデで、乾燥時の植物茎痕を残す。孔端面を最後にヨコナデ調整。	7.5YR6/4 に近い暗 やや暗黒 白・赤・透明細 粒やや多。灰色粗粒と 透明細粒少 やや硬質	底5/12周
29 土師器 小皿	口 径 12.0 高 14.5 底 最大 14.5	底の厚く、やや歪む。外面口縁～頸部ヨコナデ後、体部ナメヘラズリ。内面は体部ヨコヘラズリ後下平をヨコヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。頸部ヨコヘラズリ後にヨコヘラミガキ。被熱使用～コグはない。	5YR5/4 暗灰黄 やや暗黒 透明・白粗～黒粗 多。灰色粗粒と赤・黒細 粒少 硬質	北東柱付付下12cm 口5/12周。体一全体 周 68
30 土師器 鉢	口 径 15.6 高 5.9	薄く軽い。外面頸部は縦～斜位ハケメ後、頸部ナデ。内面頸部はナメナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面口縁部全体に保付。	7.5YR6/4 に近い暗 やや暗黒 白粗～黒粗と黒・ 透明細粒少 やや硬質	南東部床上9cm 口1/3周
31 土師器 鉢	高 2.3 底 7.0	薄く軽い。外面頸部はヘラナデ後に下頸部ヨコヘラズリ。外底面は横な1方向ヘラズリ。内面は丁寧なタテヘラナデ。外面に僅少な凹み。	10YR6/3 に近い黄粉 やや暗黒 透明・白粗～黒粗 粒やや多。灰色粗粒と黒・ 赤細粒少 硬質	北部床上10cm 底1/3周 40
32 土師器 鉢	高 2.2 底 7.6	薄く軽い。外底面に多方向と外面頸部に斜位のヘラズリ。内面底面は多方向ヘラナデ。外面頸部と底面に保付。内面底面にコグ付。外底面がわずかに変熱する。	10YR6/4 に近い黄粉 粗粒 白・透明細粒～黒粒 多 硬質	船床中 底7/12周 床下埋土
33 土師器 鉢	口 径 17.0 高 12.9	外面は肩部ヘラナデと頸部に浅いヨコハケ。内面は横～縦位のヨコハケ。内外面の口縁部にヨコナデ。	2.5Y6/2 灰黄 やや暗黒 白粗～黒粗と黒・ 透明細粒多。赤・灰色粗粒 少 やや軟質	口1/4周
34 土師器 鉢	口 径 21.2 高 10.6	頸部は内外面に斜位ヘラナデ後、内面肩部ヨコヘラズリ。口縁部内外面ヨコナデ。外面の腹表は黒褐色だが横は不明。	7.5YR5/4 に近い暗 粗粒 白・透明細粒多。白・ 透明・灰色粗粒と赤粗～黒粗 粒やや多。黒細粒と金色部 母磁粒少 硬質	船腹穴上方で床より 上20cm 頸1/8周。口1/72周 5
35 土師器 鉢	口 径 17.0 高 8.1	薄く軽い。頸部内外面ヨコヘラナデと頸部外面ナデの後、口縁部内外面ヨコナデ。外面全体に保付ヤリ。	2.5Y5/2 暗灰黄 やや暗黒 白粗～黒粗と黒・ 透明細粒多。赤・灰色粗粒 少 やや硬質	中央部床上6cm 底39
36 土師器 鉢	口 径 16.6 底 25.5 底 6.4 底 最大 21.2	残存部が少ないので器底は推定。外面は下位に横なナデ。中位以下にヘラズリ。外底面は丁寧なナデで、中央部が凹面に凹む。内面は中にヨコヘラミガキで、頸部中位にある横み上げ休表面付近にヨコナデ。内外面口縁部ヨコナデ。被熱使用～コグ・保は見られない。	10YR7/4 に近い黄粉 粗粒 白・透明細粒～黒粒多。 赤・透明細粒多。赤・灰色粗粒 少 軟質	中央部床上6～16cm 口1/8周。頸5/12周。底全周 9, 12, 13, 21, 25, 31, 32
37 土師器 鉢	高 6.0 底 6.8	外面は底面に1方向と頸部に斜位のヘラズリ後、頸部に縦～斜位の密なヘラミガキ。内面は底面に多方向と頸部に斜位のヘラズリ後、頸部に1方向と頸部に横位のヘラミガキ。大形器の可能性もある。被熱使用～コグは見られない。	10YR7/4 に近い黄粉 粗粒 白・透明細粒多。黒・ 透明細粒多。灰色・透明細 粒少 硬質	北部床上20cm 底全周 52
38 土師器 鉢	高 5.5 底 6.9	外面は底面に円筒方向と頸部に斜位のヘラズリ。胴下縁にナデまたはヘラナデ。内面は横～斜位のヘラナデ。外面頸部と外底面に保付。	10YR6/4 に近い黄粉 やや暗黒 透明細粒多。黒・ 白細粒と赤粗粒少 やや軟質	底全周
39 土師器 大形器	口 径 28.0 高 35.8 底 最大 54.0	頸中位外面に横い段があり、口縁部上端の内外面に凹む。外面は頸部に縦位(一部横位)のヘラナデ後、中位ヨコヘラズリ。頸部下後タテヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。内面は頸部にヨコヘラナデと頸部ヨコナデ後、肩部ヨコヘラズリ。頸外面のミガキはやや明暗を空け、全周の半分程度で認められる。	7.5YR8/4 浅黄粉 やや暗黒 白・黒・透明細 粒やや多。灰色・透明細 粒少 硬質	中央部床上10～23cm と東部床上23～32cm 口一環全周。頸1/3周 6, 7, 8, 11, 42, 47, 67, 77, 81, 85

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

40 土師器 杯	口 復 14.3 高 4.7	内外面の白粉地にヨコナデ後ヨコナデミナギ。外面底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面体部に赤な炭粉ヘラミナギ。古墳前期下の遺物が混入。	2.5YR5/6 明赤褐色・黒・白・細粒と透明微粒やや多 やや破損	中央部床土 21cm 口 1/3 周 29
41 土師器 杯	口 復 13.7 高 推 5.8 最大 復 14.8	体部と底部が接合しないので断面は推定。外面口～体部間にたいへん凹線あり。外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面白粉地ヨコナデと内面体部ヨコナデの痕、主に横位のヘラミナギ。古墳中期末の遺物が混入。	2.5YR6/6 暗褐色・白・細粒多、黒微粒少 やや破損	南部床土 15cm 口 1/4 周 12
42 土師器 高杯	口 10.6 高 復 4.3	古墳後期の遺入した品と思われるが、中期の須恵系有蓋高杯面を模倣した可能性もある。外面底部横位と体部横位ヘラケズリ。内面は底部多方向と体部横位のヘラナデ後、内外面に緑色ヨコナデ。	2.5YR6/6 暗褐色・透明微粒やや多、白・黒・赤微粒少 破損	中央部床土 26cm 口 1/2 周、体全周 23
43 土師器 碗	長 5.7 幅 6.7 厚 6.6	輪めて多角形で、いわゆる「解石」状の石材を使用。水には浮かない。碗の上面と底面に使用され、粗い石材なので研磨面等は不明。他の面もそれぞれ少し使用した可能性あり。重量 165.2g。	5Y4/1 灰褐色・多孔質山吹色の滑石 完形 やや破損	
44 石製模造品 有孔円板	長 1.9 幅 1.9 厚 0.2 重 1.6	形跡時の新磨面が、特に左側の面に多く残る。両面ともに1方向の横位の研磨面。側面は全周の2/3が横方向（穿孔と同じ方向）のやや粗い研磨面で、残り1/3は側面調整時の切削面を残す。2孔とも裏面に穿孔の跡を生じ、左が穿孔径0.92mm・穿孔径0.85mm。右が穿孔径1.02mm・穿孔径0.88mm。	10Y3/1 オリーブ黒滑石片質	完形
45 土師器 瓦	径 2.0 高 2.1 重 7.7	外面ナデ調整後に碗の上側から穿孔し、内口上側へ棒を引き抜いたと思われる。棒を抜いた粘土のバリを残したまま焼成。孔径 4.9 × 5.7mm。	2.5YR4/6 暗赤褐色・白・細粒と黒・透明微粒少 やや破損	完形

SG1 区 SI-8a (第212～214図、写真図版75)

【位置】SG1 区中央部の台地平坦面、25.5-13.5、26.0-13.5 グリッド。古墳中期の建物は南西に SI-85、北西 4m に SI-7 がある。古墳中期の SI-40 を南東部で切り、南辺が中世の SD-37 に切られる。確認調査トレンチで北東隅を床付近まで失うが、ほぼ全体に施される貼床から建物範囲を確定できる。柱穴、貯蔵穴、火処を作り替えて、b 期から a 期へ拡張建替している。

【規模と形状】東西長 5.83m、南北長 5.23m の長方形と考えられ、中軸は N-15°-W、東西軸は N-75°-E。壁は外傾し、残存高 0.18～0.41m。a 期床面は平坦で傾斜しない。中央部で b 期の坪を確認できるので、b 期と床面を共有する。北・東壁拡張部も b 期床面と同レベル。範囲を特定できないが、中央部、南壁際中央、南東部カマド前面、貯蔵穴周辺が硬化する。南東部は堤状に高まるが、図に記載がなく写真で判断したため範囲は不明確で計測値も不明。カマド右袖から P5 北側を通り南壁に達する部分が最も高く、西へ低く派生して南壁際中央を半円形に囲む。b 期貯蔵穴 (P10) 南西部も小さく高まる。北東柱穴付近の床面に焼土 (20×13cm) と粘土 (50×18cm) が集中する。床面から掘方底までの深さは、b 期が 10～17cm で、貼床の 3 層で全体を埋め戻す。a 期拡張部は 3～5cm でやや浅い。拡張部を薄く貼床する別の層があるはずだが、土層観察では 3 層と区別できない。

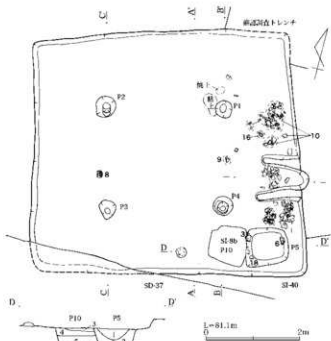
主柱穴は 4 本 (P1～P4)。P1 は径 36×34×深さ 59cm、P2 は径 48×41×深さ 56cm、P3 は径 38×34×深さ 64cm、P4 は径 43×41×深さ 52cm で、深さは 4 本ともほぼ同様。柱間間は P1-P2 間 2.46m、P3-P4 間 2.45m、P1-P4 間 2.11m、P2-P3 間 2.22m で、東西間がやや長い。a 期主柱穴は、b 期の北東へ移す。b 期主柱穴 P6～P9 との距離は、P1-P6 間 58cm、P2-P7 間 54cm、P3-P8 間 20cm、P4-P9 間 40cm。

間仕切溝は D1～D3 の 3 本を掘方底で確認した。D3 は b 期の可能性もある。3 本とも主柱穴に付随する位置で、D1-D2 間は 185cm。長さは D1 と D2 が 118cm、D3 が 125cm。断面「U」字状で幅 18～24cm。深さは掘方底から 3～5cm、床から 5～7cm。貯蔵穴 P5 が南東隅にあり、埋め戻した b 期貯蔵穴 P10 の東に接する。東西軸の長方形で 89×68cm、床面から深さ 35cm。ほぼ平床で、壁は直線的に外傾する。上下層ともにローム塊と焼土を含む。

【カマド】東壁南部にある。天井は崩れ、規模は 114×98cm。竪穴貼床と同一の 8 層上に 7 層を敷き、6 層の粘土で袖を作る。粘土塊の多い 5 層が天井崩落土ならばその下面が火床であるが、床レベルまで 5 層で埋め戻して火床を作った可能性もある。燃焼部には、流入土の 4 層、内壁の焼土が崩れた 2 層、天井粘土の崩れた 3 層が堆積する。煙道は北壁を約 15cm「U」字状に掘り、5 層を貼る可能性もある。

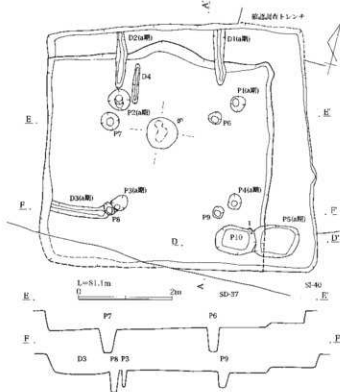
【覆土とテフラ】覆土上層は白色土粒を含むが、火山灰かどうかは確認できていない。

【出土遺物】SG1 区 SI-8b の説明後に記述する。

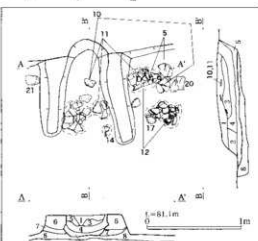
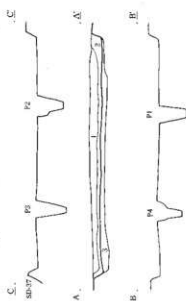


SG1区SI-a

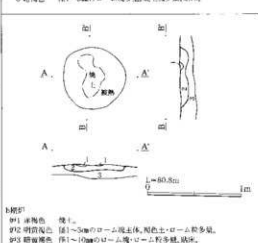
- 1 暗褐色 ローム粒・白色粒・地上物遺物、灰。
- 2 暗褐色 径1~5mmのローム小塊・地上物遺物、灰。
- 3 暗褐色 径1~5mmのソフトローム大塊、ローム粒、径1~10mmのソフトローム小塊多、灰。
- a層断面 P5
P5 暗褐色 ローム粒と径1~3mmのローム塊と径1~3mmの灰土少量、硬質2層より成す。
- b層断面 P10
P10 暗褐色 径1~3mmのローム粒・径1mmの地上物遺物、灰。
- c層断面 P10
P10 暗褐色 径5mmのローム大塊・径1~3mmのローム粒多、硬、新築物とする際、旧層断面を壊した跡。
- d層断面 P10
P10 暗褐色 径1~3mmのローム塊・ローム粒少量、灰。
- e層断面 P10
P10 暗褐色 径1~3mmのローム塊多量、硬質2層より成す。



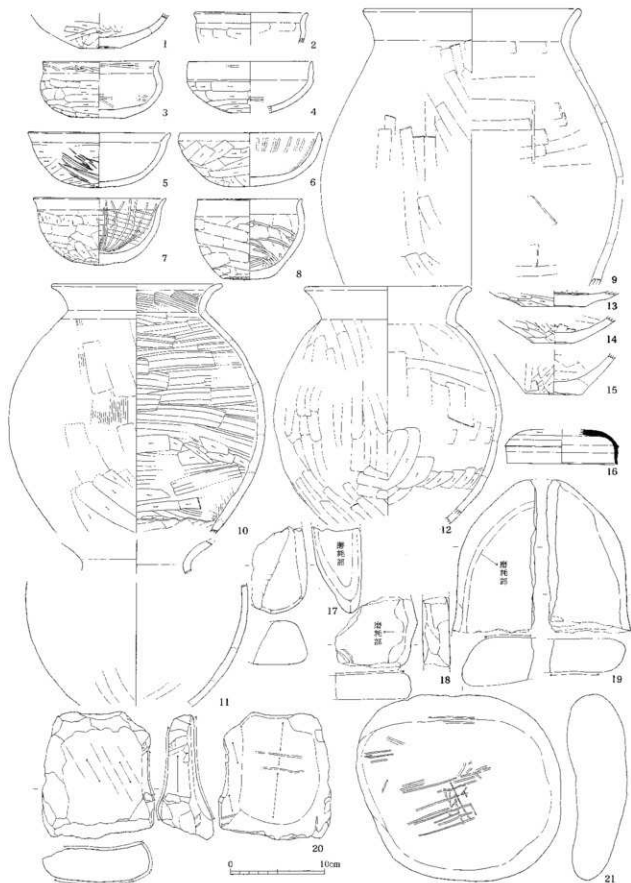
第212図 権現山遺跡SG1区 SI-8a-b (1) 遺構



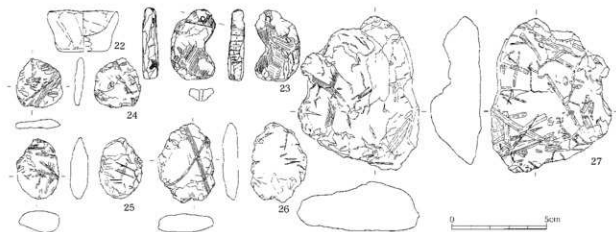
- 1 褐色 径1~2mmの地上物少量、径1~3mmの灰土塊多量、灰。
- 2 暗褐色 径1~3mmの地上物少量、灰。
- 3 灰色粘土 硬、天井部遺物。
- 4 暗褐色 径1mmの地上物・ローム粒少量、灰土塊少量、灰。
- 5 灰褐色 灰土塊多量、灰土塊少量、硬、天井部遺物。
- 6 黄褐色粘土 カット跡。
- 7 褐色 径1~2mmの灰土塊・ローム粒少量、灰、ソデの下に敷いた敷物。
- 8 暗褐色 径1~3mmのローム塊多量、灰土塊少量、硬質。



- b層断面 P10
P10 暗褐色 径1~3mmのローム塊多量、灰土塊少量、灰。
- c層断面 P10
P10 暗褐色 径1~3mmのローム塊多量、灰土塊少量、灰。



第213図 権現山遺跡SG1区 SI-8a・b(2)遺物



第214図 権現山遺跡 SG1区 SI-8a-b (3) 遺物

SG1区 SI-8b (第212～214図、写真図版75)

SI-8aへ拡張する前の建物である。

【規模と形状】掘方底が一段低い部分がb期建物を示す。南西部が不明で、北壁中央がやや外へ出るのが本来の形か不詳だが、東西長4.93m、南北長4.58mのほぼ方形。中軸はN-15°-W。南・西壁はa期と同一で、北・東壁はa期より内側となる。北東隅の突出部は、掘りすぎの可能性もある。南壁と西壁は外傾し、残存高0.09～0.12m。床面はほぼ平坦で傾斜しない。a期と床面を共有すると考えられるが、a期床面南東部の高まりや硬化面がb期にも伴うかどうかは確認できない。床面から掘方底までの深さは8～16cmで、3層で全体を貼床する。3層とa期拡張部貼床とは分層できない。

主柱穴は4本で(P6～P9)、南西柱穴がa期柱穴に切られる。P6・7・9は床面で確認したが、a期に伴う堤状高まりの下になるP8は掘方底で確認した。P6は29×26×深さ53cm、P7は39×38×深さ53cm、P8は28×20×深さ48cm、P9は26×23×深さ33cm。4本とも規模はほぼ同様で、a期柱穴よりやや小さい。北側のP6・7がわずかに深い。柱間はP6-P7間2.21m、P8-P9間2.28m、P6-P9間1.98m、P7-P8間1.92m。南北の柱間がやや狭い。掘方底面で確認した間仕切溝D4は長さ85cm、断面「U」字状で幅10～13cm、深さは掘方底面から3～7cm、床面から8～11cm。南東隅にある貯蔵穴P10は、a期貯蔵穴P5に東辺を少し切られる。85×53×床面から深さ54cmで上面不整形、底面は平坦な長方形、壁は直線的。長軸は南壁と平行する。各層にローム塊が多く、人為的に埋め戻したと考えられるが、最上層は自然堆積の可能性はある。

【炉】中央部北寄りにあるがは掘り込みがなく床面と同高で、67×66cmの円形範囲が被熱・硬化する。中央部は44×27cmの不整形範囲が赤変する。

【出土遺物】次項で説明する。

SG1区 SI-8a・8b 出土遺物 (第213・214図、写真図版128)

【遺物出土状況】遺物は比較的多く、SI-8aのカマド周辺に集中する。小形壺(1)は旧建物SI-8bの貯蔵穴P10で出土した。これ以外にもb期の遺物を含む可能性はあるが、特定できない。

【出土遺物】須恵器蓋はTK-23型式で、水平な天井はTK-208型式にも近い。土師器杯は丸底化し、平底も少し残る(3)。模倣杯は蓋模倣形(4)があり、身模倣形は破片もない。図示以外の土師器512片(4.911g)の内訳は裏342片(3.558g)、高杯23片(184g)、杯147片(1,169g)。破片は裏が多く、個体数は杯が多い。9～12の裏は砂が多い胎土が類似する。外面ハケ調整裏は10以外に数点ある。大形の石皿と砥石が目につく。滑石製勾玉(23)は仕上げが非常に粗雑。石製模造品はSG1区SI-5などにある。粘土塊は図化以外に22点(102g)ある。覆土に弥生土器片を少量含む。

第109表 権現山遺跡 SG1区 SI-8a・b 出土土物

番号 種類	大きさ (cm・g)	特 徴	胎土・焼成 (または材質)	出土状態 保存状態 注記
土師器 小形壺	高 残 3.5 底 4.2	外底面は円筒方向へラズリで凹底。外面は底部下端にナメハラナデ後、体部ナメハラケズリ。内面はナメハラナデ。	5YR5/4 に近い赤褐色 やや粗い 白細粒多、灰色 粒と透明細粒少 破質	旧跡破穴底上 24cm 底全周 9、新破穴
2 土師器	口 残 12.0 高 残 3.3	内面体部ヨコナデ後、内外面口縁部ヨコナデ。外面体部ヨコハラケズリ。	7.5YR7/6 粗 破質 赤細粒と黒細粒少 やや破質	口 7/12 周
3 土師器 杯	口 12.3 高 5.9 底 5.6 最大 12.9 重 残 27.4	外面は底部に横なナデと口縁部ヨコナデ後、体部ヨコハラケズリ。口へ頸部にナメハラミガキ。内面は磨削して不詳だが、底部に多方向、体部と口縁部に横位のハラミガキ。	5YR6/6 粗 やや粗い 赤細粒やや多、 白・黒・透明細粒少、 やや破質	床土 9cm (新跡破穴上) ほぼ完全 口 11/12 周、底全周 17
4 土師器 杯	口 残 13.2 高 残 4.5	外面体部ヨコハラケズリ。内外面口縁部と内面体部は磨面が荒れて不明瞭だが、ヨコハラミガキの可能性ある。	2.5YR6/7 粗 やや粗い 赤細・黒・ 透明細粒少 やや破質	口 5/12 周
5 土師器 杯	口 15.0 高 5.8	外面は底部に 1～2 方向と体部に横位のハラケズリ後、口縁部ヨコナデ。内面調整は磨面が荒れて不明。外面に焼成後の深い平行刻線がある。	7.5YR7/6 粗 やや粗い 黒・透明細粒多、 白・灰色粒と白細粒少 破質	カマド南床土 5cm 口 2/3 周、 底 2、29
6 土師器 杯	口 14.8 高 5.7 最大 15.1	外面は口縁部ヨコナデ。底部に 1 方向と体部に横位のハラケズリ。内面は放射状のやや緩やかなハラミガキで、磨面が荒れているため詳細は不明。	5YR6/6 粗 やや粗い 黒細・白細粒と透明 細粒多、赤・白細粒と透明 細粒少 やや破質	新跡破穴底上 10cm 口 1/2 周、底 1/2 周 10
7 土師器 杯	口 残 14.0 高 7.1	外面は体部上位が横なナデで粒上の亀裂を現し、中位ヨコハラナデ。底部多方向へラズリ。内面は体部に粗く浅いヨコハラと底部ヨコハラナデの後に縦・斜位ハラミガキ。内外面口縁部はヨコナデ。外面底部に 11cm 大の黒炭あり。	2.5YR5/6 明赤黒 やや粗い 白・黒・透明明 細・黒粒と赤細・黒粒と やや破質	口 1/2 周
8 土師器 鉢	口 残 11.0 高 8.5 底 5.1 最大 11.6	外面は体部ナメハラナデ後に底部を円筒方向の横なハラケズリ。内面は体部ナメハラとヨコハラナデ後に下平部を中心にナメハラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/6 粗 やや粗い 白・黒・透明明 細・黒粒と赤細・黒粒と 破質	床土 1cm 口 1/2 周、底全周 8
9 土師器 鉢	口 残 22.5 高 残 29.1 最大 残 31.8	外面は胴部タテハラナデと下位ナメハラケズリ。内面胴部ヨコハラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。焼熱傷や炭は見られない。内面内側の有無も不明瞭。	5YR5/6 明赤黒 粗い 白粒・黒粒と透明・ 半透明細・黒粒多、黒細粒 少 破質	床土 9cm 口 1/6 周、底 1/4 周 7
10 土師器 鉢	口 残 18.1 高 残 26.3 最大 残 27.1	外面はタテハラ後タテハラナデ、下位ハラケズリ。口へ頸部ヨコナデ。内面は胴部下位の横なナデと上体部上より中位がハラナデ。上位が浅く粗いヨコハラ。胴部がやや粗いヨコハラ。口縁部ヨコナデ。外面は口縁部から下 9cm 以上ハミガキより下の胴全体に横が付着し、残部下部付着が焼熱変色。内面の内れやコグは不明。	7.5YR5/4 に近い暗 粗い 白・透明明細粒と 黒細粒多、赤細・黒細粒 少 破質	床土 1～4cm とマ カド床土 18cm 口 1/2 周、底 1/2 周 2、3、4、5、22、25
11 土師器 鉢	高 残 16.5 底 残 23.5	胴部上は破片が不足して接合できない。胴部下位は内外面に強く焼熱して赤色化。内外面の磨面は劣化して調整不詳で、一部に横位のハラナデが認められる。	7.5YR5/4 に近い暗 粗い 白・透明明細・黒 細多、白・黒炭少 破質	カマド南床土 9cm と 火床面上 11～12cm 第 1/4 周、第 3/4 周 18、22、28
12 土師器 鉢	口 残 17.6 高 残 24.2 最大 24.2	胴部は外面にハラナデ。内面は上に横位のハラナデ後、中位下平部にナメハラケズリ。内外面の口へ頸部ヨコナデ。胴部中位以下は、外面に横付着。内面に内れ付着。	7.5YR7/6 粗 粗い 白・透明明細・黒 細多、赤細・黒細粒少 破質	カマド南床土 7～9 cm 口へ肩全周 24、28、8
13 土師器 鉢	高 残 1.7 底 7.0	外底面は多方向ハラケズリで凹底。外面胴部ナメハラケズリ。内面底部は多方向ハラケズリ。	10YR5/4 に近い暗 粗い 白・透明明細・黒 細・黒粒と赤細・黒粒と 破質	底 2/3 周
14 土師器 鉢	高 残 2.9 底 4.3	外面は底面に 1 方向ハラケズリで平直状にし、胴部ナメハラケズリ。内面は底部に多方向と胴部に横位のハラナデ。焼熱傷は見られない。	7.5YR6/4 に近い暗 粗い 黒・白・透明明 明細・黒粒と赤細・黒 粒少 破質	カマド火床土 10cm 底全周 20
15 土師器 鉢	高 残 5.5	外面は底面に 1 方向ハラケズリでわずかに凹底状にし、胴部ナメハラケズリ。内面は底部に多方向と胴部に斜位のハラナデ。焼熱傷は見られない。	10YR6/6 明赤黒 やや粗い 透明明細と黒 細多、赤細・黒細粒少 やや破質	底全周
16 土師器 鉢	口 残 11.6 高 残 3.6	内外面クロコナデで、上を土に向けた状態でクロは左回転（反時計方向）。外面は円筒方向の回転ハラケズリ。自然熱のため不明瞭。口縁部は明瞭な斜面あり。外面全体に広く黒色の自然熱が付着。火床部では黒色が欠け発色する。	7.5Y4/1 灰 やや破質 白・半透明明 細・黒粒と赤細・黒粒 少 破質	床土 4cm、SD-31 の 1 片も接合 口 5/12 周 1
17 土師器 鉢	長 残 9.1 幅 残 5.9 厚 残 5.3	自然熱をそのまま利用し、開示した胴面部分だけが平直に磨面する。胴の上部が破損する前に破石として用いたと思われる。残存重量 331g。	7.5Y3/1 灰 破損で破質なホルンブル ス	カマド南床土 4cm 一部残 23
18 土師器 鉢	長 残 7.5 幅 残 8.6 厚 2.9	磨面に沿って板状に割れた石材の一面を磨面に使用して、平直に磨面する。反対面は平直に割れているだけで、磨面はしていない。使用後に割れて破片化したものと考えられる。残存重量 316g。	5Y6/2 灰オリーブ 破損で破質な流紋岩	新跡破穴底上 20cm 一部残 11
19 土師器 鉢	長 残 16.1 幅 残 9.0 厚 残 5.3 重 1007	自然石の平坦な面をそのまま利用し、開示した範囲が平直に磨面する。反対面は自然のままで、胴の下部側が厚くなる。2 側面が破面で、破面後にも砥面を使用していた可能性があるが、断定できない。	5Y6/1 灰 破損で破質な安山岩	一部残
20 土師器 鉢	長 残 13.4 幅 残 11.9 厚 6.1 重 605	上部が下部のように厚くならないので、上部を欠損した可能性もあるが、新しい面ではないという形状のまま使い続けられていると見られる。表面と右側面を磨いたの上下方向に磨面してよく磨面する。表面は斜方向に磨面した浅い凹面も生じる。裏面は開示した浅い凹が 2 箇所に生じている。全面が焼熱赤化している。	10YR6/4 に近い暗 粗い 多孔隙安山岩	カマド南床土 4cm 完全 26
21 土師器 鉢	長 残 21.4 幅 残 19.7 厚 6.6 重 306.4	中央の凹面が外側に向かって凹む。3 方に縁を持つ形状とも言えるが、明瞭なものではない。磨面はあまり見られず、むしろ鋭い工具の先でけずり状の凹面に残るもので、切削作業のやり直しに用いた可能性がある。裏面に使用痕等は見られない。	5Y7/2 灰白 多孔隙安山岩	カマド北床土 4cm 16

第10章 権現山遺跡 SG1区

22 土師器 小形土器	口 径 3.5 底 径 2.6 最大 径 3.8	内外面の底部にやや窪みナデ。外面の体部はユビオサエで指紋が残る。内面体部ナメナデ。	75YR7/4 に近い橙褐色・白細粒少 やや軟質	カマド内 口1/4 底 底 1/2 厚 カマド
23 石炭灰 勾玉	長 3.8 幅 2.3 厚 0.7 重 0.1	左四面の上部と右四面の下部に工具刻部の加工痕。また、形割時の削離痕も多く残す。片面は1方向、他面は2方向の研削痕。側面は断面と上に向けて工具の刃先で削るよう加工する。断面研削は横方向（穿孔と同じ方向）だが、断面の断面は縦削。左四面の面から穿孔し、約孔径2.20mm、軸孔径1.80～1.85mm。	75Y4/1 灰 緑色片岩	完形
24 土師器 植粘土土	長 2.5 幅 2.5 厚 0.5 重 2.2	薄く扁平。両面に高集中度で草植物の圧痕が付く。特に左四面の面は、成焼しなかった植種（しいな）と思われる圧痕を含む。粘土の内部に植物が入ってゆくことはない。	75YR6/6 橙 褐色・赤黒・細粒と白・透 明細粒少 やや軟質	完形
25 土師器 植粘土土	長 3.2 幅 2.2 厚 1.1 重 4.9	両面は少し丸みがあり、片側縁が厚くなる。草植物の圧痕が両面と側縁に多く付き、特に左四面の面に目立つ。粘土の内部に植物が入ってゆくことはない。	5YR6/6 橙 褐色・赤・白・透明細粒少 やや軟質	完形
26 土師器 植粘土土	長 4.2 幅 3.0 厚 1.0 重 8.1	両面ともに凹凸の少ない緩い凸面。草植物の圧痕が表面に付き、左四面の面に長く見られる。粘土の内部に植物が入ってゆくことはない。	5YR6/6 橙 褐色・赤黒粒と白・透 明細粒少 軟質	完形
27 土師器 植粘土土	長 8.1 幅 6.4 厚 2.7 重 83.3	右四面の面を平坦な面に押し付けて平らにし、対面はかなり凹凸を残す。草植物の葉や茎と思われる緩い圧痕が表面に付く。特に右四面の面に多く、植種の可能性があるものは1箇所ある。粘土の内部に植物が入ってゆく状況はない。	5YR6/6 橙 褐色・赤黒粒やや多、白・ 透明細粒少 軟質	ほぼ完形

SG1区 SI-10 (第215・216図、写真図版75・76・128)

【位置】 SG1区中央部の台地平坦面、25.5-14.0、26.0-14.0 グリッド。南東に古墳後期の SI-127 が近接する。北西10mに後期の SI-70、西3mと南7mに中期の SI-8・13、南に中世の SD-37 がある。南西部で古墳中期の SI-40 を切る。北西隅は、確認調査トレンチで壁が床付近まで失われる。

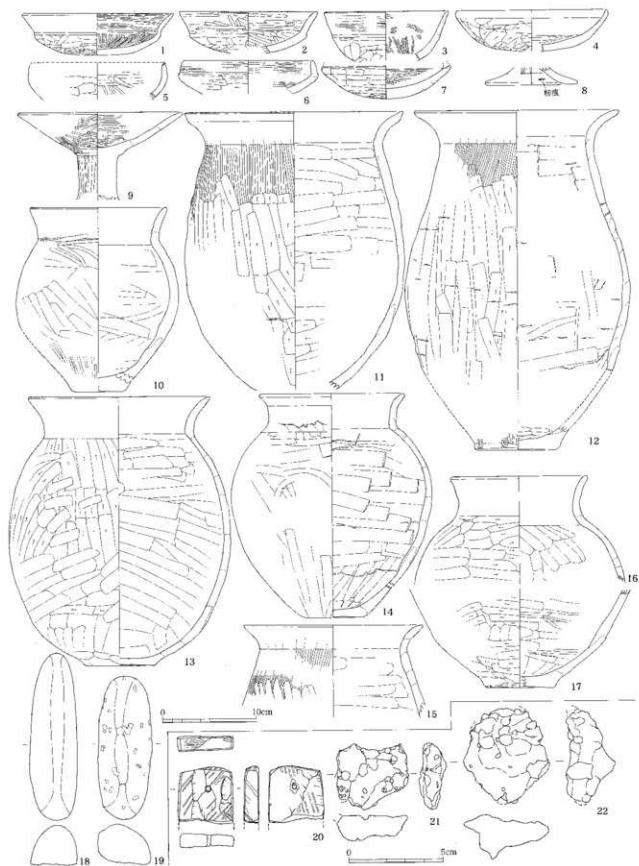
【規模と形状】 整った方形で、南北の中軸は N-20°-W。東西長 5.51m、南北長 5.80m。壁は外傾し、残存高 0.03～0.16m。床面はほぼ平坦で傾斜しない。掘方底面は緩い凹凸があり、床面から深さ 2～16cm。ローム粒・塊の多い暗黄褐色の 4 層でほぼ全体を貼床する。主柱穴は 4 本 (P1～P4)。P1 は径 52×49×深さ 70cm、P2 は径 47×39×深さ 60cm、P3 は径 50×48×深さ 35cm、P4 は径 39×36×深さ 54cm で、北側柱穴が深い。柱間はほぼ等しく整った方形配置で、東壁との距離がやや狭く、P1-P2 間 3.13m、P3-P4 間 3.16m、P1-P4 間 3.15m、P2-P3 間 3.19m。間仕切溝は D1～D7 の計 7 本が東西南北の各壁際にあり、D3・7 以外は主柱穴に付随する位置にある。D6 は床面、他は掘方底で確認した。断面「U」字状で幅 14～28cm、深さは掘方底から 5～11cm、床面から約 8～15cm。貯蔵穴 P5 が南西部にある。東西軸の長方形で 103×88cm、床面からの深さ 45cm。床面から約 10cm 下に全周する幅 4～8cm の平坦面より内側の規模は 87×76cm。ほぼ平坦な長方形の底面から、壁がやや外傾して平坦面となり、やや急に上がって床面に至る。下層ほどロームが多く、ローム塊を 2・3 層に含む。1 層は微量の焼土粒を含み、2・3 層より硬い。

【カマド】 北壁東部にある。袖上部と天井は削平されている。両袖幅 82cm、煙道先端から袖先端まで 95cm。建物貼床の 8 層上に粘土の 1 層で袖を作り、下層には粘土と焼土・ロームの混じる 2 層もある。袖先端の焚口に土師器甕 (16) と (15) を倒立設置していた。火床面付近は、東西 70×南北 50×床面より深さ約 15cm の不整形に掘ったのち 6 層でほぼ平坦に埋め戻す。壁から 15cm 内側に細い河原石の支脚 2 個を接して立て、大形壺底部片 (17) を被せる。天井内面が焼土化して落ちた 3 層などが燃焼部に堆積する。煙道は北壁を約 20cm「U」字状に掘り、緩く上がる。

【覆土】 覆土は 3 層あり、ローム粒は覆土上層に多く中層に少ない。壁際堆積土に焼土と炭を含む。

【遺物出土状況】 遺物は北東部に集中し、11 の甕胴下部破片が北東主柱穴に流入する。カマドと貯蔵穴周辺でも遺物が少量出土した。

【出土遺物】 遺物はそれほど多くない。図示以外の土師器 268 片 (2.663g) の内訳は、杯 58 片 (414g)、高杯 5 片 (59g)、甕 205 片 (2.190g)。破片量は甕が多く、個体数では杯が主体。杯は多様で、口縁部は外傾・内傾・直立と半球状がある。6 と 7 はヘラミガキと炭素吸着処理を行う。高杯は短脚の破片のみ出土し、



第216図 権現山遺跡 SG1区 SI-10(2)遺物

第3節 古墳時代の堅穴建物跡

4 土師器 杯	口 径 15.9 高 径 4.3 最大 径 16.1	外面の口・体部端に強い輪あり。外面は体部ナデ後、体・底部に多方向ヘラズリ。内面は胴部と内面口・体部ヨコナデ。外面上位と内面に磨いた上。	10Y87/3 にぶい・黄褐色 やや硬質 透明・白微細顆 粒多 やや軟質	床土 11cmと試掘トレンチ内砂層合 口3/4周 7. UT-TN-SG TX26-14カ所
5 土師器 杯	口 径 14.1 高 径 3.8 最大 径 14.7	口縁部はわずかに内彎意味で、先端を欠く。外面は体部ヨコヘラズリ。口縁部ヨコナデ。内面は横・斜位ヘラミガキ。	10Y87/4 にぶい・黄褐色 やや硬質 白・黒・透明顆 粒多 白粗粒少 やや軟質	口1/6周 口1/6周 口1/6周 口1/6周
6 土師器 杯	口 径 13.3 高 径 3.2 最大 径 14.2	外面は体部上端ナデ後に体部ヨコヘラズリ。外面口縁部と内面全体に密なヨコナデミガキを行い、内外面ともに炭素を吸着して黒色・濃褐色に処理する。	5Y3/1 オリーブ黒 やや硬質 白・灰色・透明 細・微粒多 やや軟質	溝底穴 口1/6周 溝底穴
7 土師器 杯	高 径 3.5 最大 径 13.6	外面の口・体部端に明瞭な段あり。外面は底部に1方向と体部に横位のヘラズリ。内面体部は多方向ヘラズリの後に、横・斜位の密なヘラミガキと炭素吸着の黒色処理。	25Y4/1 黄灰 やや硬質 白・黒・透明顆 粒多 やや軟質	床土 2～4cmが接合 体1/3周 22. 25
8 土師器 杯	高 径 1.9 最大 径 9.8	内外面の胴部ヨコナデ。胴中位にタテヘラミガキ。内面に屈折直線1箇所あり。	10Y86/6 明黄褐色 微細・白微粒と赤・黒粗 粒多 やや軟質	床土 7cm 膠粉 1/6周 13
9 土師器 高杯	口 径 17.5 高 径 9.3	外面は杯底部に段を持ち、杯部下平に縦位と上平に横位のヘラミガキ。胴柱部タテヘラズリ。内面は底部に1方向と杯部に横位のヘラミガキ。胴部にヘラズリまたはナデ。柱状部に粘土が付着するので支脚に使用?	5Y82/6 明赤褐色 硬質・透明顆粒と赤・白粗 粒多 やや軟質	カマド周辺と試掘トレンチが接合 口1/4周 カマド周辺。 UT-TN-SG TX26-14カ所
10 土師器 小形甕	口 径 14.6 高 径 19.4 底 径 5.8 最大 径 17.0	胴部下に横み上げ体止部あり。外底面は横なヘラズリでやや凹み。外面胴部はタテヘラズリで、胴部1位の横み上げ体止部付はヨコヘラズリを行う。口縁部は内外面ヨコナデで、外面胴部は長い外側部。焼成は不明。塗膜は白色・金色ともに全く含まない。	75Y86/6 緑 硬質・赤粗・黒粗粒多・黒・白・透明細粒少 やや軟質	床土 4cm 口1/2周、底1/4周、頸全周 1. UT-TN-SG TX25-14, UT-TN-SG TX26-14カ所
11 土師器 甕	口 径 23.2 高 径 20.4 最大 径 23.3	胴部外面は7本/2cmの粗いタテヘラ後、中位以下ヘラズリ。胴部内面はヨコヘラズリで、胴部1位の横み上げ体止部付はヨコヘラズリを行う。口縁部は内外面ヨコナデ。胴部以下は外面がやや硬質。胴部中位内面にやや凹みあり。	10Y87/3 にぶい・黄褐色 粗い・白微粒と赤・灰色粗 粒多 透明細・粗粒と黒粗粒少 軟質	柱状上部→床土 8cm 口1/2周、底1/4周、頸全周 3/7/12周、頸全周 5. 6
12 土師器 甕	口 径 21.8 高 径 29.9 底 径 9.0 最大 径 23.9	胴部は外面に7本/2cmの粗いタテヘラ後、胴部と胴下部以外をヘラズリ。外底面に横なナデ。胴部内面はヨコヘラズリで、胴部1位の横み上げ体止部を境にして下位はナメミガキ。上位はヨコヘラズリ。外面は底部から高さ約4cmまでが焼成熱化し、高さ約6～11cmまでには炭素分が吸着する。内面の汚れは不明。	10Y87/4 にぶい・黄褐色 粗い・白微粒と透明・白・黒・透明細・粗粒と赤・灰色粗粒少 軟質	床土 10cm 口1/2周、底3/4周 3
13 土師器 甕	口 径 19.3 高 径 28.4 底 径 7.5 最大 径 23.5	外底面は1方向ヘラズリでわずかに凹み。胴部下に横み上げる横み上げ体止部よりも上位をタテナデとヨコヘラズリ。それよりも上位をタテヘラズリ後ナメミガキ。内面は全体横・斜位ヘラズリ。内外面の口・胴部ヨコナデ。明瞭な炭化や焼成の痕はない。	75Y85/4 にぶい・黄褐色 やや硬質 白粗粒と赤・灰色粗粒少 やや軟質	床土 4～10cmと試掘トレンチが接合 口3/4周、底1/2周 1. 4. UT-TN-SG TX26-14カ所
14 土師器 甕	口 径 15.4 高 径 23.6 底 径 6.2 最大 径 21.3	外底面は横なナデ。外面胴部に縦位と肩部に横位のヘラズリ。外面胴部のヨコナデはやや硬質で、粘土接合を現す。内面は胴部下部の横み上げ体止部を境にして下位はナメミガキ。上位はヨコヘラズリ。外面は底部から高さ約4cmまでが焼成熱化し、高さ約6～11cmまでには炭素分が吸着する。内面の汚れは不明。	5Y82/6 明赤褐色 やや硬質 白粗粒と透明・白・黒・透明細・粗粒と赤・灰色粗粒少 軟質	床土 4cm 口→胴1/3周、底1/2周 1. 2
15 土師器 甕	口 径 18.9 高 径 9.7	外面は7本/2cmの粗いタテヘラ後、胴部中位以下にタテヘラズリ。口縁部内外面にヨコナデ。内面は胴部にヨコヘラズリ。	10Y86/3 にぶい・黄褐色 やや硬質 白・黒・透明顆 粒多 白粗少 硬質	カマド東端先端に倒立 口3/4周 K29, カマド周辺。 UT-TN-SG TX26-14カ所
16 土師器 甕	口 径 14.5 高 径 11.3 最大 径 22.3	断面が磨耗して形状が不明瞭。外面胴部ヨコヘラズリ。内面ナメミガキまたはナメヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ。	5Y82/6 明赤褐色 やや硬質 白・赤・透明細・粗粒と黒粗粒少 やや軟質	カマド西端先端に倒立。試掘トレンチの破片が接合 口1/2周、頸全周 28. UT-TN-SG TX26-14カ所
17 土師器 大形甕	高 径 10.4 底 径 7.2 最大 径 23.4	外底面は多方向ヘラズリでわずかに凹み。外面胴部タテナデ後にヨコヘラズリ。内面は底部に多方向と胴部に横位のヘラズリ後、残るはヨコヘラミガキ。	75Y85/4 にぶい・黄褐色 やや硬質 赤粗粒少・赤・白・透明細・微粒少 やや軟質	支脚の上に載せた状態 底1/4周 8
18 石製 磨石片	長 17.1 幅 5.7 厚 4.5	細長い自然の河原石をそのまま利用。両側の反対面は、自然に風化した古い表面。加工・使用痕や付着物は見られない。重量 562.3g。	75Y85/1 灰 細面・硬質な安山岩	完形
19 石製 磨石片	長 15.2 幅 5.6 厚 4.5	細長い自然の河原石をそのまま利用。両側の反対面は、自然に風化した古い表面。加工・使用痕や付着物は見られない。重量 466.6g。	5Y6/1 灰 やや多孔質で硬質な安山岩	完形
20 石製 磨石片	長 3.5 幅 0.7 厚 10.5	両端の折れ面を除く側面3面は自然の風化面をかなり現し、一部に研削痕あり。表面は磨削によって微かに磨かれた面。やや粗い1～2方向の磨削も加えられている。左端の面から穿孔して右側の面に穿孔磨削を生じる。穿孔径2.8mm、穿孔径2.3mm、砥石の未使用品と考える余地もある。	75Y84/1 灰 磨削が促進した面と軟質	下部欠
21 粘土製の 磨石片 (断片)	長 3.8 幅 1.4 厚 18.4	胴部2箇所が小断面となった厚さ11mm程度の細長い板状磨石。表面・裏面の一部が粘土質塗膜に覆われているが、下の9割方は内部となる。また左下側胴部の小断面は引口の強部と接した状態に似る。磨石関連遺物構成No.13。	灰 暗緑灰 硬・高粘 炭素分・2 メタル度 なし	ほぼ完形
22 粘土製の 磨石片	長 5.0 幅 4.4 厚 26.7	全体が磨石の断面が磨石面に貼った粘土質磨石。上面は浅く凹み、6mm前後の突出部が見られ、胴部2箇所が小断面となる。断面から断面は板状で、全体の7割方が表面に粉状の残る黒褐色の面に覆われている。形状から見るとか磨表面が磨石や中に散在して軟質磨石のように断面の粉状層で生成されたものである。磨石関連遺物構成No.12。	灰 暗黄灰 硬・高粘 炭素分・2 メタル度 なし	一部欠

SG1区 SI-11 (第217図、写真図版76)

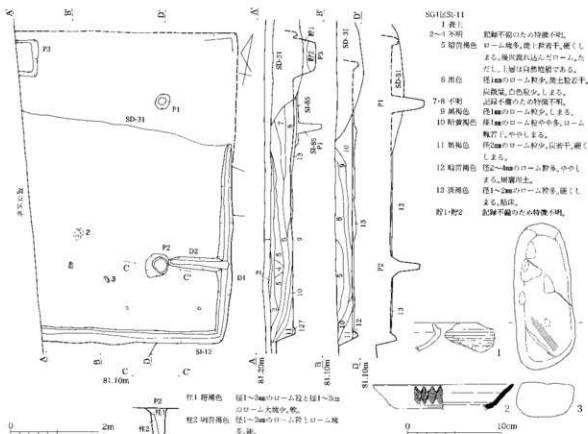
【位置】 SG1区中央部台地平坦面の25.0-13.5、25.5-13.5グリッド。西半は調査区外。古墳後期のSI-71が南東3.5mにあり、北から東に古墳中期のSI-8・13・40がある。古墳中期のSI-85とSI-12を切り、古代のSD-31に北側を切られる。SI-11の貼床下層にSI-85の貯蔵穴P1が残存することを調査区西壁の土層断面で確認でき、断面図A-A'ではP1の隅を通るので柱穴状に描かれている。

【規模と形状】 南東と北東の残存部から推定してほぼ方形で、南北の中軸はN-10°-W。南北長6.60m。東西長は不明だが、調査した部分は4.12mである。壁は外傾し、残存高0.38～0.42m。床面はほぼ平坦で傾斜しない。掘方の深さは床面から2～9cmで、2～4cmほどの部分が多い。掘方底面はほぼ平坦で、ローム粒の多い褐色土で貼床する。主柱穴はP1・P2の2本。方形建物とすれば、4本主柱穴の可能性が高い。P1は径33×30cm、SD-31底面から深さ46cm(床面から深さ推定67cm)、P2は径55×48×深さ61cmで、北側のP1が深い。P1-P2間は3.46m。確認した壁際を全周する壁溝D1は、断面逆台形で幅27～32cm、床面から深さ5～12cm。主柱穴P2と壁溝に繋がる間仕切溝D2は、断面「U」字状で、幅14～29cm、床面から深さ9～15cm。

貯蔵穴P3は北西部にある。竪穴の東西長と南北長がほぼ同一で、カマドが北壁中央にあるとすると、P3は北壁際でカマド左側に近接する位置に作られたものとなる。上半がSD-31に切られる西半が調査区外だが、方形または東西軸の長方形で、南北77cm、東西の調査部分は40cm、残存する深さ28cm、床面からの深さは推定45cm。ほぼ平底で壁は直線的。上下2層に分層できた覆土層の詳細は不明。

【火処】 北壁際にカマドがあったと考えられるが、SD-31に切られるため不明である。

【覆土】 覆土は自然埋没。微量の炭粒や焼土粒を含む層もある。中位の6層は少量の白色土粒を含むが、火山灰かどうかは確認していない。ローム塊の多い5層よりも上部は土層の特徴が不詳。



第217図 権現山遺跡SG1区 SI-11 遺構・遺物

【遺物および出土状況】遺物はごくわずかで、南部で散漫に出土する。図示以外の土師器 184 片 (1,250g) の内訳は、杯 35 片 (211g)、高杯 3 片 (16g)、甕蓋類 146 片 (1,023g)。須恵器は口縁にも波状文を描く。土師器杯は口縁が短く退化する。3 は編物石・台石・磨石の可能性がある。粘土塊も 1 点あるが、重さ 3.8g の小形品なので図示していない。図化以外の土師器片には赤彩した杯など本建物より古いものもあり、重複する SI-12・85 の遺物が混入したと考えられる。

第 111 表 梅現山遺跡 SG1 区 SI-11 出土遺物

番号 種類 図様	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・構成 (または素材)	出土状態 保存状況 注記
1 土師器 杯	口 径 14～16 高 径 3.1 最大 径 16～ 18	外面口縁部と内面全体にヨコナデ、外面体部ヨコヘラケズリ。外面中位以上と内面に 漆仕上げ。破片が小さいので復原性は参考値。	10YR6/2 灰黄褐 織物 透明微粒 やや軟質	口 1/18 程
2 須恵器 甕	口 径 14.7 高 径 2.7	口～甕部の間に凹線 2 本。約 20 箇の工具で器面に向かって右から左へ縞描状文。外 面に薄黄色の自然釉が少量残存する。	2.5YR/1 灰白 やや粗い 白・灰色細粒少 軟質	床土 30cm 口 1/4 程 1
3 石磨 編物石?	長 15.3 幅 6.5 厚 4.4	断面が四角形気味の細長い河原石をそのまま利用。図示した面の下平部に浅い平行 細線の溝面があるので、編物石ではなくて磨石や台石等の加工具に使った可能性もある。 炭素層は認められない。重量 589.4g。	2.5YR/1 灰白 薄緑色帯びた織物で硬質 な火山灰	床土 3cm 口 1/4 程 3

SG1 区 SI-12 (第 218 図、写真図版 76・77・128)

【位置】SG1 区中央部の台地平坦面、25.0・13.5・14.0 グリッド。古墳中期の SI-40・88 が北西と南東にある。南に古墳後期の SI-71 が近接する。古墳後期の SI-11 と中期の SI-13 に切られる。中央部南寄りの一部は時期・性格不明の遺構 SX-131 が重複する。これは SI-12 の床面を僅かに掘り込んで、その中に円礫をまとめて入れた 2 箇所の集糞土坑で、SI-12 を切ると考えられる。

【規模と形状】西辺と北東隅は不明だが、方形と考えられる。南北の中軸は N-20°・E。東西長 4.74m、南北長 4.61m である。壁は外傾し、残存高 0.18～0.27m。SI-11・13、SX-131 に切られる部分以外、床はほぼ平坦で傾斜しない。南壁際はほぼ中央に、南に開く「コ」の字状の高まりがある。高まりの範囲は 200×132cm で東西に長く、幅は 28～38cm、高さは床面から 2～3cm で、東西両端は壁溝に接する。掘方底面は緩い凹凸があり、床面から深さ 3～10cm。ローム粒・塊を少量含む暗黄褐色土でほぼ全体を貼床する。

主柱穴は 4 本 (P1～P4)。東半が SI-13 に切られる P1 は径 47×38×深さ 53cm、P2 は径 47×38×深さ 54cm、P3 は径 30×25×深さ 38cm、P4 は径 38×28×深さ 44cm で、南側の P3・4 より北側の P1・2 が深い。柱間がほぼ等間隔の方形配置で、P1-P2 間 2.60m、P3-P4 間 2.39m、P1-P4 間 2.55m、P2-P3 間 2.56m。壁溝が全周する。断面逆台形で幅 13～17cm、床面から深さ 6～12cm。

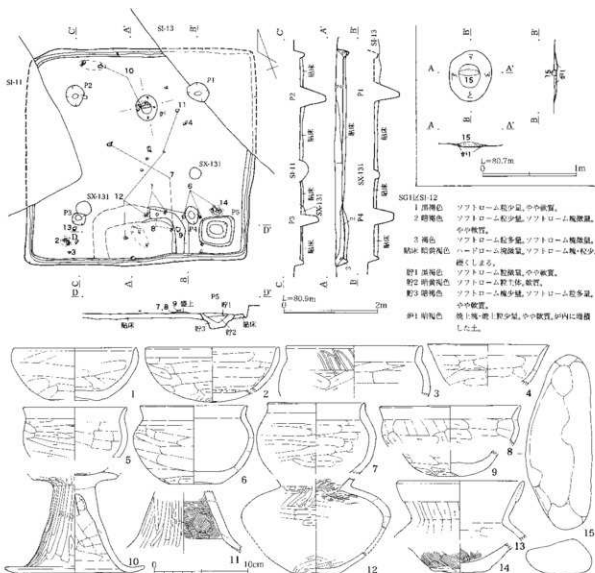
貯蔵穴 P5 が南東隅にある。東西軸の長方形で 73×55cm、床面から深さ 33cm。底面はやや丸みを持つ長方形。壁は外傾したのち傾斜が緩くなり、床面までやや急に上がる。緩傾斜部は床面下 6～16cm の全周にあり、幅 6～13cm、緩傾斜面内側での規模は 42×37cm。下層ほどロームが多く、ローム塊を 3 層に少量含む。

【炉】中央部北寄り、やや P1 に寄る。54×44cm の楕円形で深さ約 5cm。断面は浅い皿状で底は緩い凹凸があり、全体が被熱・硬化・変色する。北寄りの底面に被熱した自然礫 (15) を置く。炉の内部ではなく、炉の上方で土器片が少量出土した。焼土粒・塊を少量含む暗褐色土で埋まった上に高杯 (10) の破片が載る。

【覆土】覆土はローム塊を中・下層に含み、下層ほどローム粒が多い。

【遺物および出土状況】各所で破片が少量出土し、集中しない。図化以外の土師器 307 片 (2,444g) の内訳は、杯 167 片 (1,015g)、甕蓋類 140 片 (1,429g)。破片は甕蓋類が多く、個体数は杯に次いで中・小形壺 (12・13) が多い。口が外反する杯 (5～8) は口径 10～11cm 程が主体で、半球形の杯 (1・2) は口径 12～14cm 程が多い。杯は丸底よりも凹底が主流 (1・6・9)。貼付口縁の壺 (13) は、本遺跡の SG1 区 SI-33・69、4 区 SX-23、北関東自動車道路調査 A 区 SI-34・229 (谷中・大島 2001) などにある。凝灰岩細片が

2点(7.5g)あるが、本遺構に係わるかは不明。縄文時代の礫器が2点混入していた。



第218図 権現山遺跡 SG1区 SI-12 遺構・遺物

第112表 権現山遺跡 SG1区 SI-12 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	土質 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 13.2 高 5.6 底 径 5.2 最大 径 13.4	平床状で外底面は幾何学的なナデ。内外面ともに体部ヨコヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。	10YR7/3 に近い黄褐色 やや緻密 赤粒・微粒多 黒・白・透明細粒少 やや軟質	床上 2 ~ 4cm/幅合 底 1/2 周 21, 23
2 土師器 杯	口 径 14.0 高 5.8 (4.5-1.2)	外面は底部ナデでほぼ丸底にし。体部ヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面は底部に1方ヨコヘラナデ。体部ヨコヘラナデ。外面に少量の微(7)が付着。体部と底部の接合がないので高は推定。	10YR6/3 に近い黄褐色 やや粗い 白・黒粒・微粒多 やや軟質	床上 20cm 口 3/4 周 15
3 土師器 杯	口 径 14.3 高 推 5.3 最大 径 16.0	外面は体部ヨコヘラナデ。口~頸部ヨコナデ後ナメヘラミガキ。内面は体部ヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ。外面に微少量付着。	10YR7/2 に近い黄褐色 緻密・白・黒粒・微粒と透明微粒多。赤細粒少 やや軟質	床上 5cm 口 1/6 周 16
4 土師器 杯	口 径 12.8 高 4.3	薄く、口縁部がわずかに外反する。内外面ともに体部ナデ後口縁部ヨコナデ。	10YR6/4 に近い黄褐色 緻密 赤・白細粒多 やや軟質	床上 5cm 口 1/4 周 8
5 土師器 杯	口 径 11.1 高 5.3 最大 11.1	内外面口縁部ヨコナデ。体部は外面ヨコヘラナデ。内面ヨコヘラナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粒・灰褐色 と白粒・微粒少 やや軟質	口 1/12 周、底 1/4 周

6 土師器 杯	口 11.2 高 8.4 底 5.0 最大 12.7 最小 3.4	外面は体部に横位のヘラズリかヘラナデ（磨減し不明）、体部下端ヨコヘラズリ。外底面は多方向ヘラズリで、やや凹底。内外面の口縁部にヨコナデ、内面体部は磨面が荒れて調整不明。体部下は径11cmの黒炭。	2.5YR/3 淡黄 やや粗い・黒・灰色粗～細 粒と白・透明細粒少 やや軟質	床土2～3cmが場合 ば完全 口全周、底全周 1.24, 30
7 土師器 杯	口 10.2 高 7.5 最大 12.5	内外面ともに胴部ナデ後、体部中位以下にヨコヘラナデ。外面の口～胴部と内面口縁部にヨコナデ。	10YR/7.4 に近い黄褐色 やや粗い・赤・白粗～細粒 少 やや軟質	床土1cm 口1/4周 13, 26
8 土師器 杯	口 14.9 高 7.3	薄く、頸部の横は内面側がやや明脱。外面胴部ナメナデ後、体部ヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部は磨減しているがむすくナメヘラズリ。	5YR/5.6 明赤褐色 やや粗い・赤粗～細粒多 白・黒・透明細粒少 やや軟質	床土1～4cm 口1/3周 22, 26
9 土師器 杯	高 2.8 最大 10.1	底部外面中央に径2.0cm、深さ0.5cmの凹みあり。凹み部は浅くようなヘラナデ。外面は体部ナデ後、底部に円筒方向ヘラズリ。内面は磨面が荒れて調整不明。	5YR/5.8 明赤褐色 やや粗い・赤粗～細粒多 白・黒・透明細粒少 やや軟質	床土3cm 底全周 25
10 土師器 高杯	高 10.8 脚部 14.8	外面は杯底部と脚部タテヘラズリと脚部底にヨコナデおよびタテヘラナデ。脚内面は上部タテコビナデと全体に横～斜位ヘラナデ後、脚部ヨコナデ。脚内面底部に1方向のヘラミガキ。	10YR/7.6 明黄褐色 やや粗い・黒粗粒多、白・黒・透明細粒と赤粗粒少 硬質	床土6cmと杯上方が 場合 脚部全周、脚部1/12周 2, 6
11 土師器 高杯	高 6.5 最大 12.2	外面は軸の狭いタテヘラズリ。内面は横～斜位の粗いハケ調整後、胴部にヨコナデ。	2.5YR/5.6 明赤褐色 やや粗い・赤粗～細粒と白 粗粒多、黒・透明細粒少 やや軟質	床土6cm 脚部3/4周 7
12 土師器 小形壺	高 8.0 底 3.8 最大 15.8	外面底部は3方向ヘラズリで凹底にする。外面体部に横～斜位ヘラズリ、頸部ヨコナデ。内面は底部ヘラズリまたは強いヘラナデ。体部ナデ。胴部ヨコナデ。頸部に横～斜位ヘラミガキ。破片が不足し、体部下位は接合できない。	7.5YR/5.6 暗 やや粗い・赤粗～細粒多 黒粗粒と白・透明細粒少 やや軟質	床土4～17cmが場合 別1/3周、底全周 7, 9, 18, 21
13 土師器 壺	口 13.4 高 13.4 最大 15.8	外面は頸部タテヘラズリと胴部タテヘラナデ（またはミガキ）の後に貼付した横を作りヨコナデ。内面は胴部ヨコヘラナデで、口～頸部は磨面が荒れて調整不明。	5YR/4.8 赤褐色 やや粗い・黒・赤粗～細粒 多、白粗～細粒少 硬質	床土6cm 口1/3周 14
14 土師器 壺	高 7.1 底 6.0	外底面はハケミ後に多方向ヘラズリで強く突出する。底面外面ヨコナデ。外面胴部ナメナデ。内面底部は縦・新・横方向のハケ。内面は焼熱赤化。	10YR/6.4 に近い黄褐色 やや粗い・透明・白粗～細 粒と黒粗粒多、半透明細粒 少 軟質	床土2cm 底1/2周 1
15 土師器 壺	長 18.5 高 7.0 最大 4.5	自然の河原石で、全面が焼熱する。加工痕や使用痕は見られない。重量737.9g。	2.5YR/2.6 灰黄 緻密で硬質な石質表面	杯内より出土 完全 断面

SG1区 SI-13（第219～221図、写真図版77・78・128）

〔位置〕SG1区中央部の台地平坦面、25.0・13.5・14.0グリッド。古墳中期のSI-40が北2mにある。南に後期のSI-71・88と時期不明のSK-29、西と北東に後期のSI-11・127がある。西辺で古墳中期のSI-12を切り、北東部が古代のSD-31に切られる。

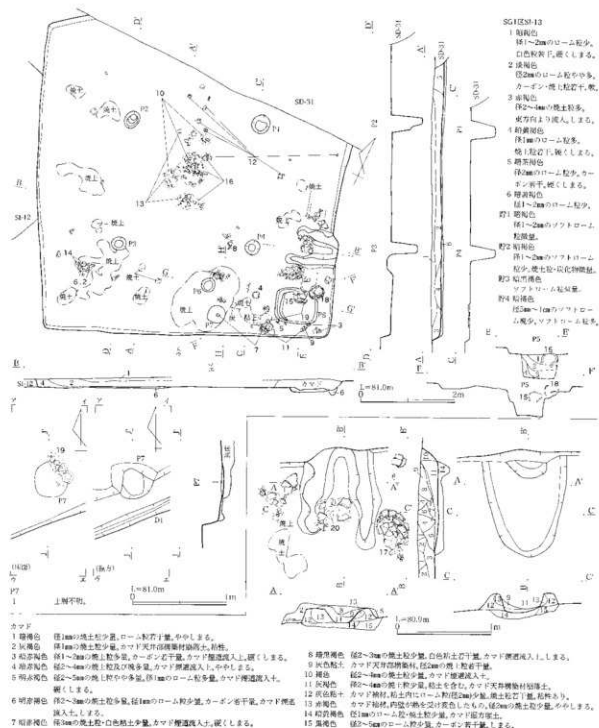
〔規模と形状〕少し南北に長い方形で、東西長6.67m、南北長6.74m。中軸はN-25°-W。壁は外傾し、残存高0.10～0.18m。

主柱穴は4本（P1～P4）。P1は径40×38×深さ53cm、P2は径39×31×深さ66cm、P3は径31×28×深さ56cm、P4は径33×31×深さ55cm。径はほぼ同様で、北西のP2が他より深い。柱間はP1-P2間2.70m、P3-P4間2.82m、P1-P4間2.59m、P2-P3間2.70m。南北間がやや狭いが、ほぼ同じ方形配置。南部にあるP6が柱穴状の入口ピットで、径30×28×深さ15cm。底にやや凹みがあり、壁は垂直気味。覆土は不明。P6南の掘方底で確認した柱穴状のP7（径38×34cm、掘方底面から深さ2cm）は、P6南側床面で確認した窪みとほぼ同位置でその掘方とも見られ、これも入口関連施設であろう。

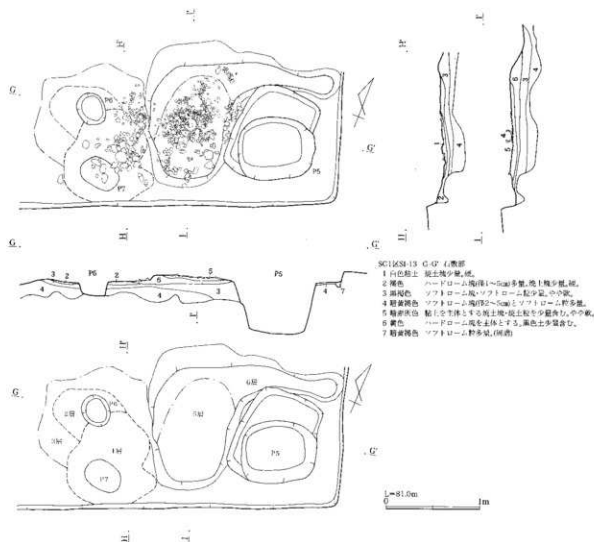
床面の南東隅から南部中央で、河原石を敷いた高まりが貯蔵穴P5と入口ピットP6を囲む。P5の北～西～南の「コ」字状部と、そこから派生しP6北側を巡る半円形部からなる。全体は155×75cm。P5周辺の高まりは100×75cm、高さは床から4～5cm。P5西側の高まり上面は幅広い平坦面で、中央の浅く窪む面に130×80cmの範囲で河原石を敷く。「コ」字状部の北西から西へ続くP6周辺の高まりは100×65cmの範囲で、P5周辺よりやや低い。確認したのは半円形部分のみだが、P6西側から南壁へ続いていた可能性がある。P6南側は42×30cmの範囲で不整形に窪み、ここにも石を敷く。北方の砂田遺跡1区SI-6も貯蔵穴周辺に円礫を敷いている（藤田・田代2002）。

掘方は床から深さ2～5cmで底に凹凸があり、暗黄褐色の6層で薄く貼床する。南東部の高まりは、この貼床上に、下から順に黒褐色土・ローム主体土・粘土層を貼って盛り上げている。

壁溝D1が、カマド南側から南壁中央部までの壁際にあり、これ以外の部分にはなかったと考えられる。



土層断面図J-J'でわかるように、この溝は貼床土で埋め戻され、掘方面で確認された。断面「U」字状の部分が多く、幅14cm、深さは床面から2～9cmである。貯蔵穴P5が南東隅にあり、西と北に高まりがある。90×74cmの不整形で西と北は床面下18～25cmに平坦面を設ける。南部は一段深く、床面から深さ57cmで、やや凹凸がある80×65cmの底面になる。覆土2層は微量の焼土と炭、4層はローム粒・塊を含む。【覆土】焼土を含む覆土層が多い。4層の焼土堆積は、平面・断面図でわかるように壁際に多い。2・5層に炭も含む。1層に白色粒を含むが、火山灰分析は実施していない。



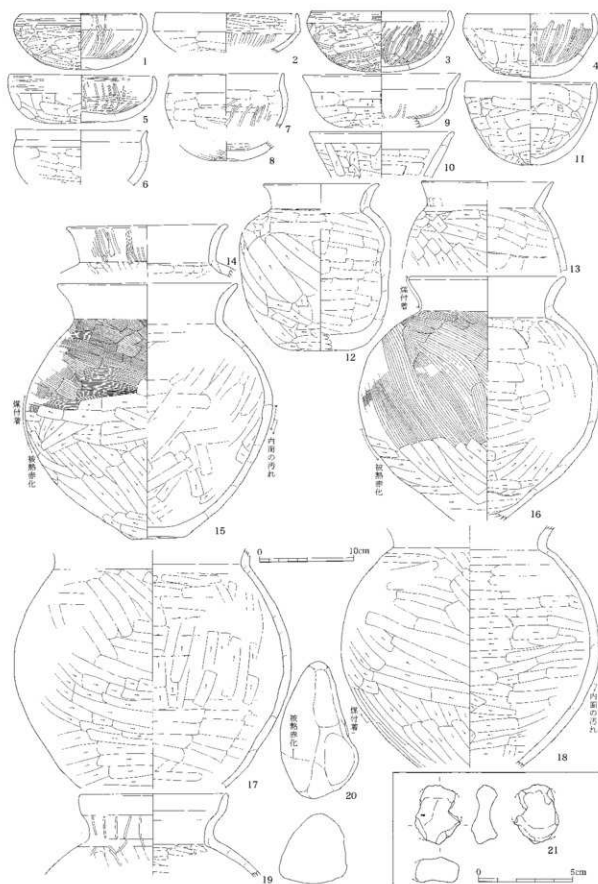
第220図 権現山遺跡SG1区 SI-13(2)南東部拡大図

〔カマド〕南東部にある。天井は崩れる。両袖幅85cm、煙道先端から袖先端まで105cm。竪穴貼床と同じ14・15層上に灰色粘土主体の12・13層で袖を作り、内側の13層は被熱で変色が著しい。14層上面の火床はほぼ平坦で、床よりわずかに下がる。天井内面の焼土化崩落土や流入土と思われる4～7層や、灰色粘土主体の1・9・11層などが燃焼部に堆積する。煙道は北壁をほとんど掘らず、火床から緩く上がる。

〔遺物出土状況〕遺物は多く、南東隅のカマド・貯蔵穴周辺に完形に近く復元できる土器が集中し、中央部と南西隅にも土器片がある。カマド南側の床付近に甕が3個あり、18は埋まりかけた貯蔵穴へ転落した状況。貯蔵穴の西と南に完形に近い杯が正立する。

〔出土遺物〕小形深身の椀形杯(6～9)以外に、大形の初期模倣杯(1～5)も出現している。15・16・18は、炉で使ったような煤が外面に付く甕。受口状口縁の大形壺(19)は、4区SI-5などに例がある。

図化以外に土器器片568片(6.140g)と粘土塊6点(12.9g)がある。内訳は杯244片(1.458g)、高杯14片(188g)、壺甕類310片(4.494g)。杯底部は凹底が3点、丸味を持つ平底が1点ある。高杯は小片ばかりで、杯底に稜を持ち脚が「ハ」の字状に開く。壺は、口縁部で見ると、大形壺3個体(複合口縁状は1個体)、中形壺1～2個体、小形壺1～2個体がある。



第 221 図 権現山遺跡 SG1 区 SI-13 (3) 遺物

第113表 権現山遺跡 SG1区 SI-13 出土遺物

番号 種類 図解	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 保存状態 位置
1 土師器 鉢	口 12.8 高 6.0 底径 3.5 最大径 14.2 重 27.4	外底面は1方向へラケズリで凹み底。外面土手ナデと下平ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデの後、上へ中位にヨコヘラミガキ。内面ヨコナデ後。放射状ヘラミガキ。内外底面に5～9cmの黒痕。	7.5YR7/6 褐色 やや粗い、赤・白粒～細粒 やや多、白粒と黒・透明細粒 やや破片 やや破片	床土6cmで直立 ほぼ方形 口5/6周、底全周3
2 土師器 杯	口 15.0 高 15.4 底径 4.2 最大径 15.4	外面は底部に光沢のある丁寧なヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面は口縁部に横位と体部に放射状のやや密なヘラミガキ。	7.5YR5/4 に近い黄褐色 やや破片、白・透明細粒～微粒と黒細粒 やや破片	床土7cm 口1/6周 25
3 土師器 鉢	口 14.7 高 6.5 底径 15.5	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ後。底部に多方向と体部に横～斜位のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は多方向へラケズリ後に口縁部ヨコナデ。体部に放射状のやや密なヘラミガキ。	5YR6/6 褐色 やや粗い、白・透明細粒と赤粒～細粒 やや破片	床直上へ床土7cm ほぼ方形 口5/6周 口11/12周 5, 7, 8, 9
4 土師器 鉢	口 13.4 高 6.9 底径 14.3 重 28.4	外面体部にタテおよびヨコナデ後。体部上位ヨコヘラナデ。底部に1方向と体部下位に横位のヘラケズリ。外面口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ後。密な放射状ヘラミガキ。外底面に6×9cmの黒痕。	7.5YR6/6 褐色 やや粗い、白・透明細粒多。 白粒～粗粒少 やや破片	床面に直立 ほぼ方形 口11/12周 2
5 土師器 鉢	口 15.3 高 5.3 底径 15.6	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面はヨコナデ後放射状ヘラミガキで、上平はヨコヘラミガキも行う。	5YR5/6 明赤褐色 やや粗い、白・透明細粒～微粒と黒・灰色細粒 やや多 破片	床土の床土2cm 口7/12周 56
6 土師器 鉢	口 14.0 高 5.8 底径 14.3	頸部内外面に強い横を付す。外面は体部ヨコナデ後。下位ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面ヨコナデ。	7.5YR6/6 褐色 やや破片、赤粒と赤・白細粒少 破片	床土7cmの3片と焼土10、13の片が接合 口1/3周 25, 焼土上
7 土師器 鉢	口 12.2 高 5.7 底径 12.9	外面は頸部ナデ後に体部ヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラナデとタテヘラミガキ。	10YR5/4 に近い黄褐色 やや破片、白・黒・透明細粒少 破片	床土5cmと敷土上 口1/3周 53, 59
8 土師器 鉢	口 13.1 高 5.3 底径 10.0	外面底部と体部はヨコヘラケズリで凹み底。内面は底部に1方向へラケズリ。体部ヨコヘラナデ。	10YR5/4 に近い黄褐色 やや粗い、白・黒・透明細粒多。 白・灰色細粒と赤細粒少 破片	床土3cm 底全周 23
9 土師器 鉢	口 16.6 高 5.7	外面体部上位は斜位ナデで粘土ひび割れを現し、中位以下ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面にヨコナデ。内面体部に疎な放射状ヘラミガキ。	5YR5/6 明赤褐色 やや粗い、赤粒～細粒と赤・黒・透明細粒少 やや破片	床土5cm 口1/4周 6
10 土師器 鉢	口 15.3 高 4.9	外面へラケズリと内面ヨコヘラナデの後に内外表面ヨコナデ。小形皿の可能性もある。	5YR5/8 明赤褐色 やや粗い、白・透明細粒～微粒と赤・赤細粒少 破片	床土1～5cm 口12, 13
11 土師器 鉢	口 13.8 高 8.8 底径 14.0	内外面ともに口縁部ヨコナデ後。体部に横位と底部に多方向のヘラケズリ。	7.5YR6/6 褐色 やや粗い、赤・白粒～細粒多。 白粒と黒・透明細粒少 破片	床土5cm, SD31も1片出土 口5/6周 6, 53, SD31
12 土師器 小形鉢	口 12.2 高 12.7 底径 15.8	外面は底部と頸部にヘラナデ後。底外周～体部に横～斜位ヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデで、頸位には横み1片と体部の凹み1枚を現す。内外面の口～頸部ヨコナデ。使用痕は不明確で、外面底部付近に数箇所の縦(?)あり。	7.5YR5/6 明赤褐色 やや粗い、白粒～細粒多。 白粒と赤粒～細粒と黒細粒少 破片	床直上～床土10cm 口全周、口5/6周、11, 16, 17, 18, 19, 21, 30
13 土師器 小形鉢	口 14.0 高 9.6 底径 17.4	胴部は外面ナメヘラケズリ。内面横～斜位ヘラナデ。口～頸部内外表面ヨコナデ。	10YR6/4 に近い黄褐色 微細、白・黒・透明細粒少 破片	床土1～5cm 口7/12周 8, 9, 15
14 土師器 鉢	口 17.0 高 5.6	外面は胴部ナメヘラナデ後に口～頸部ヨコナデと斜～縦位ヘラミガキ。内面は胴部ナデと胴部ナメヘラナデ。口～頸部ヨコナデ。	2.5YR4/6 赤褐色 やや粗い、白・黒粒～細粒多。 赤粒～細粒少 破片	南西部床土5cm 口1/36周、頸1/6周 27, 28
15 土師器 鉢	口 19.2 高 27.1 底径 5.7 最大径 26.2 重 2005	外面胴部は横～斜位ヘラミガキ後に下平をヘラケズリ。外底面は凹み。外周をヨコヘラケズリ。内面は底部多方向ヘラナデ。下位ナメヘラケズリ。上～中位ナメヘラナデ。内外面の口～頸部ヨコナデ。胴4位は外面に横、内面に付付着。胴下位外面が焼熟赤化。	7.5YR6/6 褐色 粗い、白・黒・透明細粒～微粒多。 白・黒微少 破片	床から約6cm内へ転落 ほぼ方形 口11/12周、底全周4
16 土師器 鉢	口 16.6 高 25.8 底径 25.6	外面胴部は横～斜位ヘラミガキ後に、中位に斜位。下位に横位のヘラケズリ。内面は胴部赤ビナデ。胴4位付ナデ。胴下位の横み1片と体部にヘラケズリ。内外面の口～頸部にヨコナデ。外面の胴下下が焼熟赤化し、口～頸部に侵食する。	7.5YR5/4 に近い黄褐色 粗い、黒・白粒～細粒多。 赤・灰色、透明細粒～微粒と古破片 やや破片	中央部床土3～5cm 南西部床土6cm 口全周、口5/6周、8, 10, 11, 頸底穴3
17 土師器 鉢	口 25.4 高 29.4	外面は上部ナメヘラナデ後に下部ヨコヘラケズリ。内面は胴下位の横み1片と体部付着の接合痕を付ナデで消して、上位にヘラナデと中位にタテヘラケズリ。内外面頸部ヨコナデ。焼熟痕はなく、焼成時の黒痕もよく残す。	10YR5/4 に近い黄褐色 やや粗い、白・黒・透明細粒多。 赤粒～細粒多 破片	カマド南側床土1cm 頸1/4周 41
18 土師器 鉢	口 25.6 高 27.4	外面胴部は下位ナメヘラケズリと中位ヨコヘラケズリの後に上位ヨコヘラナデ。内面胴部は上位ヨコヘラナデ後に中位以下ヨコヘラケズリ。内外面の胴部にヨコナデ。中位以上の外面に横が多く、下位の内面に調理の汚染あり。	7.5YR5/4 に近い黄褐色 粗い、白・黒・透明細粒～微粒と赤・灰色微多。 赤粒～微粒少 やや破片	折敷穴北東の床付足 19cmと口内ピット 底1/8cmが接合 口2/3周 54, 57, 62, 折敷穴
19 土師器 大形鉢	口 15.3 高 8.8	外面は胴部ナメヘラナデ後に、口～頸部にヨコナデして受口部にしほらなタテナデミガキ。内面は胴部に横～斜位ナデの後に、胴部ヨコヘラナデ。口～頸部ヨコナデ。	7.5YR6/4 に近い黄褐色 やや破片、白・黒粒～細粒と赤細粒多 破片	床土4cmと折敷穴底 19cmと口内ピット 底1/8cmが接合 口2/3周 54, 57, 62, 折敷穴
20 土師器 鉢	長 14.5 幅 8.2 底径 8.3	自然破で、加工・使用痕は見られない。陶の下部を除いて焼熟している。支脚に使用した可能性あり。重量966.9g。	2.5YR2/2 灰白 石灰質品が立っつて微細で硬質を呈出	カマド内床土2cm 口径42
21 土師器 模範土塊	長 3.1 幅 2.3 厚 1.4 重 5.8	縦断面に示したように、中央部を両面から押しつぶしたような形状。右側の左半に開示した植物茎(?)の圧痕が1箇所あり。これ以外の圧痕は見られない。	10YR6/3 に近い黄褐色 微細、赤・白細粒少 破片	カマド下土より出土 断面2面 K粘土2層内から

SG1区 SI-14 (第222図、写真図版78)

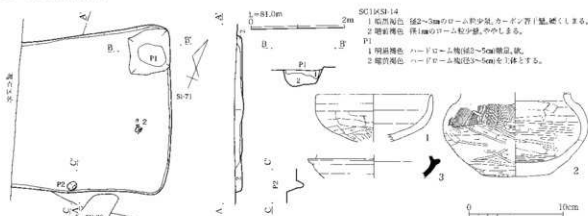
【位置】SG1区中央部の台地平坦面、24.5-13.5・14.0グリッド。西半は調査区外。古墳後期のSI-17・88と終末期のSI-87が東と南西にある。時期不明のSK-30・72が南と北東に近接する。北と南に古墳中期のSI-12・13とSI-84・86がある。東半で古墳後期のSI-71を切る。南側にある時期不明のSK-30と重複する可能性がある。

【規模と形状】西半が調査区外だが、方形または東西に長い長方形であろう。南北の中軸はN-23°-W。長方形建物は、SG1区SI-6などがある。南北長3.35mで、東西長は3.30m以上。壁は外傾し、残存高0.10～0.35m前後。床面は緩い凹凸があり、東から西へ比高約5cmでわずかに傾斜する。貼床はなく、ほぼ全体がローンをそのまま床面とする。南壁際にある柱穴状のP2は入口ピットの可能性があり、楕円形で径22×17cm、深さ14cmである。貯蔵穴P1が北東隅にあり、東壁に接する。不整形で94×84cm、床面から深さ35cm。底面はやや凹凸があり、壁は外傾する。覆土はローン塊が多く、人為的に埋め戻した可能性がある。ただし、貯蔵穴ではなく掘方の窪みの疑いもある。

【火処】なし。

【覆土】覆土は自然埋没で少量のローン粒を含む。

【遺物および出土状況】遺物はごくわずかで集中部もない。東部で出土した2の鉢は、先行するSI-71の主柱穴の真上で出土し、SI-71の遺物の可能性もある。図化以外の土師器は杯18片(117g)と甕45片(295g)があり、計63片(412g)。土師器杯は口縁部外面が浅い有段状。須恵器杯はTK-209型式。土師器鉢は外面ハケ調整が特徴。



第222図 権現山遺跡 SG1区 SI-14 遺構・遺物

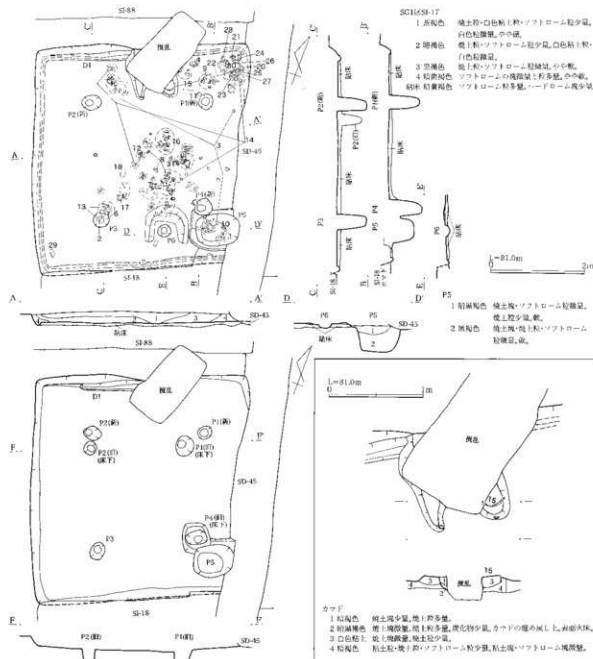
第114表 権現山遺跡 SG1区 SI-14 出土遺物

番号 種類 図番	大きさ (m・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素地)	出土状態 現存状態 注記
土師器 杯	口 径 12.3 高 残 5.0 最大 径 12.5	外面は体部ヘラナデ後、底部に1方向と体部下位に横方向のヘラケズリ。外面口縁部と内面口へ体部にヨコナデ。外面口縁部中位にごく浅い段あり。漆仕上げ等は見られない。	10YR7/3 に近い黄褐色 緻密 赤褐色と黒・透明 細粒少 硬質	口1/4周
2 土師器 鉢	高 残 8.7 底 7.4 最大 径 15.3	外面は1方向ヘラケズリで弱い凹面状。外面肩部タテハケ後、中位位に横位のヘラケズリとヘラミガキ。内面は横位のヘラナデとナデの後、底部に1方向と中位以下に横方向のヘラミガキ。	10YR5/4 に近い黄褐色 やや粗い 白・透明細粒多。 白磁と黒・白磁粒少 硬質	床土4cm 頸 1/4周、底全周 1
3 須恵器 杯	高 残 2.4 最大 径 14.0	内外面口ロナデで、口口は右回転(時計回り)の可能性あり。少し歪むので、復原性は参考値。	2.5Y5/1 黄灰 緻密 白磁と透明細 粒多 硬質	体1/6周

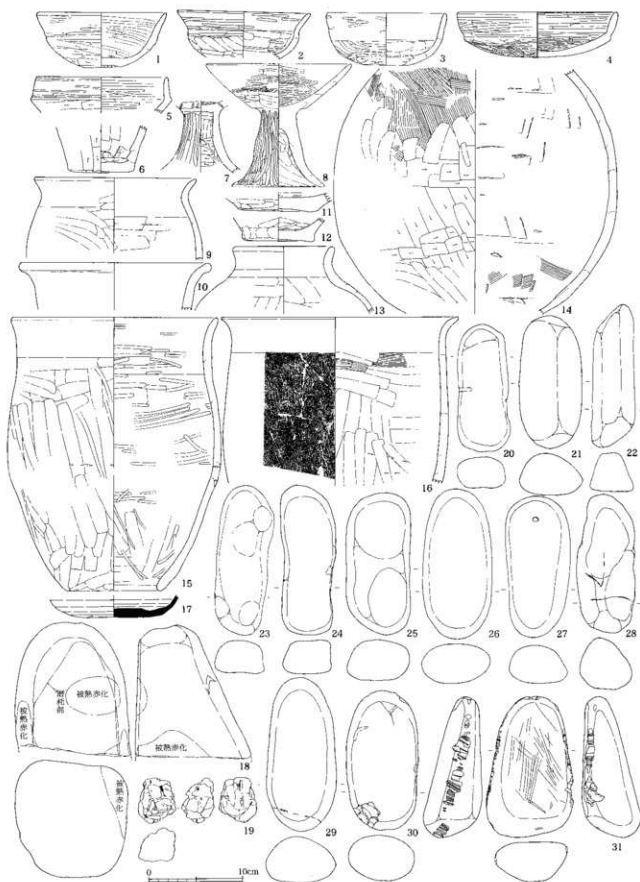
SG1区 SI-17 (第223・224図、写真図版78・79・128)

【位置】SG1区中央部の台地平坦面、24.5-14.0・14.5グリッド。古墳後期のSI-14・71・84・88が、西側から北側にある。南東部が後期初期のSI-18のカマドに、東辺が中世のSD-45に切られる。北壁中央が大きく掘乱される。主柱穴は作り替えているが、その他の改築痕はない。

〔規模と形状〕東壁は不明部分が多いが、方形と考えられる。中軸はN-23°-W。南北長4.68m、東西長は推定4.80m。壁は外傾し、残存高0.23～0.25m。床面はほぼ平坦で、傾斜しない。掘方は床から深さ4～10cmで底に緩い凹凸があり、ローム塊と粒を含む暗黄褐色土で貼床する。主柱穴は7本（P1～P4、P1旧・P2旧・P4旧）。床面で確認した穴がP1～4、掘方底で確認した穴がP1旧・P2旧・P4旧である。P1旧・P2旧・P3・P4旧の4本からP1～P4の4本へ作り替え、南西のP3は新旧共有と考えられる。柱間は北と東へ抜けるが、北・東壁に拡張痕はない。P1は径34×28×深さ63cm、P2は径41×32×深さ63cm、P3は径34×33×深さ63cm、P4は径38×36×深さ69cm。南東のP4が若干深いがほぼ同じ深さである。柱間はP1-P2間2.46m、P3-P4間2.14m、P1-P4間2.25m、P2-P3間2.48mで、やや不整方形配置。P1旧は径41×47×掘方底から深さ40cm、P2旧は径30×27×掘方底から深さ43cm、P4



第223図 権現山遺跡SG1区 SI-17(Ⅰ)遺構



第224図 権現山遺跡 SG1区 SI-17(2) 遺物

旧は径68×69×掘方底から深さ69cm。柱間はP1旧-P2旧が1.92m、P3-P4旧が2.13m、P1旧-P4旧が2.04m、P2旧-P3が2.14mで、ほぼ方形配置。南部中央にある柱穴状の入口ピットP6は径28×27×深さ9cm。ピット周囲にある馬蹄形の高まりは、東西90×南北80cmの南に開く形で、南壁から50cmの間隔をあける。高まりの幅は20～36cm、高さは床面から2～4cm。壁溝D1はカマド部以外を全周すると思われる、幅20×深さ約8cm。北西壁側にある壁溝は、壁の上端よりも少し南に離れる。竪穴掘張前の溝の位置を引き継いだのだろうか。南東隅にある貯蔵穴P5は北西部でP4と重複し、東がSD-45に切られる。東西軸の長方形で床から約6cm下に幅4～12cmの平坦面が全周する。南北77×東西残存108cm(推定120cm前後)、床から深さ56cm。ほぼ平底で、外傾する壁上部の平坦面から短く急に床に至る。平坦面内側は南北68×東西92cm。覆土中の焼土は上層に多い。

【カマド】北壁中央にある。天井は崩れ、地山ローム層に達する攪乱のため残りは悪い。両袖幅105cm、北壁から袖先端まで108cm。白色粘土の3層で袖を構築し、東袖は倒立した土器器轆を埋設する。また、平面図に記入した土器片が両袖先端に残る。僅かに残る覆土は、焼土化した1層が天井内面崩落土、焼土と炭の多い2層が流入土と思われる。

【覆土】壁際の4層以外に焼土粒を含む。1・2層中の白色土粒が火山灰かどうかは確認できていない。

【遺物出土状況】遺物は多く、中央・カマド周辺・北東隅にまとも。中央では床からやや浮くものが多い。須恵器杯(17)だけが20cm浮くので混入の疑いもある。新期北東柱穴(P1新)の北東40cmの床面に流紋岩質凝灰岩の板石がある。軟質で大半が風化するが表面を加工した切石だったと見られ、煤が少量付くのでカマド構築材であろう。カマドの東側にも同質の凝灰岩片が分布し、廃絶前にカマドを破壊したことを示す。北東部床面に編物石がまとも。貯蔵穴は底付近と、底から少し浮いた雑物で、円筒形土製品や支脚かもしれない。

【出土遺物】4は焼成前に底面を補修した可能性がある。6は内面調整が難物で、円筒形土製品や支脚かもしれない。外面ハケ調整の甕(16)は、鹿沼市西山遺跡などにある(池田・篠原1998)。須恵器杯はやや大形で、混入の疑いもある。18は被熱した台石で、金床石のような鍛造剥片や鉄片はない。31と同じく非常に硬質のホルンフェルス製磨石・砥石・敲石は、SG1区SI-89、4区SI-15・31や立野遺跡5区SI-7など周辺集落にもある。編物石が多い。図化以外に土器器402片(5.419g)と焼粘土塊3点(69g)がある。内訳は杯58片(379g)、高杯3片(84g)、甕・甕341片(4.956g)で、甕はほとんどない。内面を磨く杯と磨かない杯があり、漆仕上げの杯片はない。凝灰岩片は全部で6点(769g)出土している。

第115表 権現山遺跡SG1区SI-17 出土遺物

番号 種類 部材	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土器 杯	口 13.7 高 5.7 底 3.9 重 現 233	外底面は1方向ヘラケズリで凹底状。外面は体部ヨコヘラケズリ、外面口縁部から内面体部までヨコナデ後に密なヨコヘラミガキ。内面底面は1～2方向の密なヘラミガキ。	5YR5/6 明赤釉 やや密な 赤釉～細粒やや 多 やや軟質	断面径上2cm 口11/12周 64
2 土器 杯	口 度 14.0 高 度 5.0	外面は体部上位ナメナデ後に下位ヨコヘラケズリ。内面体部はナデ後にヨコヘラミガキ。内外口縁部はヨコナデ後に密なヨコヘラミガキ。	5YR5/6 暗 密な 赤釉～細粒と黒・白 細粒少 やや軟質	柱穴内(床下2cm) 口1/3周 37
3 土器 杯	口 度 12.4 高 5.5 底 度 4.4 最大 度 12.7	外底面はヘラナデで不明瞭な平底。外面は体部下平ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。体部上位ヨコヘラミガキ。内面は体部にナデかヘラナデ。口縁部ヨコナデ。	5YR5/6 暗 密な 赤釉と黒・白・ 赤細粒多 やや軟質	床直上と貯蔵穴底上 50cmの幅合 口1/3周、底1/3周 33、41、62、貯穴
4 土器 杯	口 度 17.0 高 4.9	外面体部ナメヘラナデと底部1方向ヘラケズリの後、体一部に多方向ヘラミガキ。内面体部多方向ヘラナデの後、体部に横位と底面に1方向の密なヘラミガキ。内外口縁部はヨコナデ後に密なヨコヘラミガキ。内面底部中央はヘラミガキの間に1.5×3.0mmの粘土を貼り付け(ヒビの補修)する。	5YR5/6 明赤釉 やや密な 白・透明細粒と 半透明粗粒 やや軟質	床下4cmで正立 口1/2周 40
5 土器 杯	口 度 13.9 高 度 3.8 最大 度 15.0	外面体部は上部の段より下をヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面全体をヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	5YR5/6 暗 密な 白・黒・透明細～微 粒と灰色粗粒少 やや軟質	柱穴内 口1/6周 柱穴
6 土器 杯	高 度 5.1 底 度 7.0 最大 度 9.6	内面調整が粗雑なので、円筒形土製品や支脚の可能性もある。外面は体部タテヘラケズリ後に底面を多方向ヘラケズリ。内面は密なヘラナデとヒビオサエで粘土繕み1層を貼る。外面はヒビ、体部の中心部ではヨコヘラナデ。	7.5YR5/6 暗 密な 黒・白粗～細粒と 透明粗少 硬質	床下7cm 底1/2周 36

31 石垣 積石垣 石	長 14.9 幅 9.2 厚 5.6 重 1035	段の下部が厚い自然石、平面面を研削に使用、浅い階段が上に長軸方向およびやや斜方向に残存。両側壁は直壁が連続し、特に左側の面は直線的な平行壁が連続する。右側壁は直壁の対称物を載せた痕跡と見られる。小断面も生じている。	7.5Y4/1 焼 非常に緻密で硬質なホルン フェルス	床土 7cm 宍形 54
----------------------	------------------------------------	---	-----------------------------------	--------------------

SG1 区 SI-18 (第225図、写真図版 79・128)

【位置】SG1 区中央部の台地平坦面、24.0-14.0・14.5、24.5-14.0・14.5 グリッド。古墳後期の SI-71 が北に接する。中期の SI-17・84 が北と西、SI-174・179 が南西にある。古墳時代の SK-46～49 などが南側に集中する。カマド煙道で北側の SI-17 を切り、中央が中世の南北溝 SD-45 に切られる。南辺西部で重複する時期不明の SK-143 との新旧関係は不明。

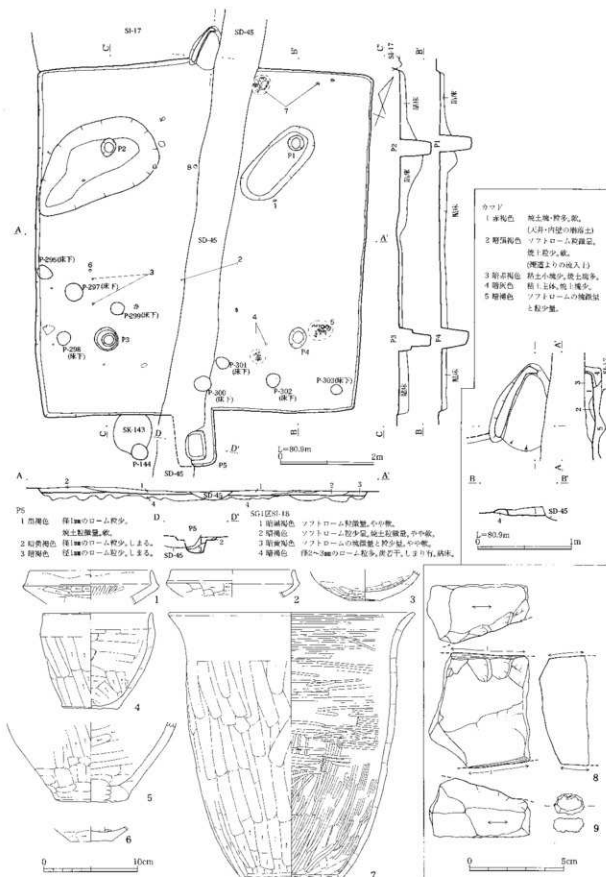
【規模と形状】方形で中軸は N-19°-W。東西長 6.98m、南北長 7.22m。壁は外傾し、残存高 0.04～0.10m。床面は緩い凹凸があるがほぼ平坦で、傾斜はない。掘方底は凹凸が目立ち、床面から深さ 2～16cm。ローム粒の多い暗褐色の 4 層で貼床する。堅穴北半の主柱穴 P1 と P2 の周辺には、掘方底面で確認した土坑状掘り込みが各々ある。P1 周辺のものは楕円形で 195×84cm、掘方底面から深さ 14cm。P2 周辺のものは不整形楕円形で 286×160cm、掘方底面から深さ 36cm。これらの掘り込みは床面で不鮮明な黒色部として認められるが、覆土を観察していないため本建物より先行する土坑か、あるいは建物に伴う土坑か不明確である。主柱穴は 4 本 (P1～P4)。P1 は径 36×32×深さ 33cm、P2 は径 38×31×深さ 65cm、P3 は径 52×47×深さ 67cm、P4 は径 44×34×深さ 57cm。P1 がやや浅い以外は 3 本ともほぼ同様の深さ。P3 は床面下約 30cm に平坦面が全周する。柱間は P1-P2 間 4.03m、P3-P4 間 4.00m、P2-P3 間 4.40m、P1-P4 間 3.75m。P1-P4 間がやや狭いが柱間はほぼ同じ。南半の掘方底面で小穴 8 本 (P-296～P-303) を確認した。東西に並ぶので本建物と重複する柱穴列とも思われるが、覆土を観察していないため不明である。南壁中央の P5 は、カマドに相対する位置と形態から張出ビットの可能性が高いが、SD-45 に切られる単独土坑 (旧名称 SK-125) として調査したため、堅穴壁や床との繋がり、西半の構造など不明な点が多い。推定方形張出部は南壁から長約 95×残存幅 55cm・復原幅約 85cm。ビットは長方形で 60×42cm、確認面から深さ 55cm。底面はやや彎曲し、壁は外傾する。ビットの周囲は床面から約 6cm 低く、幅 10cm 前後の平坦面で、内側へわずかに傾く。平坦面から底まで深さ 28cm。覆土 1 層に焼土粒を含む。張出ビットは SG1 区 SI-2 などにある。

【カマド】北壁際中央にある。天井が崩れ、右袖が SD-45 に切れ、残りは悪い。東西推定幅 90cm (残 50cm)、煙道先端から焚口まで 95cm で、建物より主軸は若干東に振れる。煙道は北壁を約 70cm 「V」字状に掘って周囲に粘土主体の 4 層を貼り、内側は被熱で赤変して (3 層)、煙道先端は垂直気味に上がる。火床は平坦で、床面より緩く下がる。火床中央に流入した 2 層上に堆積する 1 層は、赤変部が極めて多く、強く被熱した焼土で、天井内面の崩れた土である。

【覆土】自然埋没で各層はさほど続かない。東壁際の 3 層は微量のローム塊、2 層は微量の焼土塊を含む。【遺物および出土状況】遺物は少なく、集中しない。図化以外の土師器 404 片 (2,255g) の内訳は杯 46 片 (412g)、高杯 6 片 (51g)、壺蓋類 352 片 (1,792g)。壺蓋類に中・小形蓋は含まない。蓋は球胴が大半で、胴は長胴・無底式のみ。図示しなかった器は不定形のものが多く、安山岩と流紋岩のみで重さ 250～760g である。南西部壁近くの床面から約 5cm 浮いて出土した 22×19×厚 10cm の大きな自然石は、少し被熱するが、加工・使用痕はない。掲載した 8 は、これは別の被熱した砂岩製砥石。鍛冶滓は細片 1 点で、この建物に伴うとはいえない (9)。北方の SI-10・71 も時期が近い建物で鉄滓を出土し、SI-71 に多い。

第 116 表 権現山遺跡 SG1 区 SI-18 出土遺物

遺物 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
土師器 杯	口 径 13.0 底 径 3.6 最大 径 14.4	外面口縁部にコナデと体部ナデの痕。体部上端に浅いコナヘラケズリ。内面は口縁部コナデ後、体部上段にかなり密な放射状ヘラミガシ。内外面の口縁部に塗土が認められる。	10YR5/3 に近い黄褐色 やや緻密 白・黒褐色～黒褐色 少 やや硬質	床土 2cm 口 1.6 程度 14



第225図 権現山遺跡 SG1区 SI-18 遺構・遺物

2 土師器 杯	口 径 12.8 高 径 2.9 最大 径 14.0	外面は口縁部と内面はヨコナデで、ヨコヘミガナを施しているかもしれないが不確定。外面はヨコヘミガナ。外面の中心位以上に部仕上げ痕が残る。	10YB6/4 にぶい・黄褐色 やや暗い 白・黒點～細粒 やや多、透明・灰色細粒少 やや破損	床面上～床上 9cm 口 1/6 周 15, 24
3 土師器 杯	口 径 3.3 底 径 3.2 最大 径 11.5	外底面を浅く削って凹込にする。外面は口縁部と斜～横位ヘラズリ。内面底部に多方向ナデ。	10YB7/4 にぶい・黄褐色 やや暗い 白・赤・透明～細粒と黒細粒少 やや破損	床上 4～5cm 口 1/2 周 5, 6
4 土師器 鉢	口 径 11.6 高 10.0 底 径 5.9 最大 径 12.2	薄く軽い。外底面は中央を1方向の後に外周を挟くヘラズリ。外面は口縁部と斜～横位ヘラズリ。内面は口縁部と斜～横位ヘラズリ。口縁部ヨコナデ。内面は口縁部と斜～横位ヘラズリ。口縁部ヨコナデ。被熱面や汚れは見られない。	10YB7/4 にぶい・黄褐色 やや暗い 白・赤・透明～細粒と黒細粒少 やや破損	床上 6cm、1片のみ床 1.4cm 口 7/12 周、底 1/2 周 17, 18
5 土師器 鉢	高 径 8.4 底 径 7.6 最大 径 18.0	外底面は外周に粘土を塗り付けて中凹みにし、横なナデ。外面は口縁部と斜～横位ヘラズリ。内面は口縁部と斜～横位ヘラズリ。口縁部ヨコナデ。被熱面や汚れは見られない。	7YB6/4 にぶい・黄褐色 やや暗い 白・赤・透明～細粒と黒細粒少 やや破損	床上 8cm 底 全周 16
6 土師器 鉢	高 径 1.6 底 径 4.4 最大 径 8.0	外底面に1方向ヘラズリ。外面は口縁部とおそらくヨコヘミガナ。内面は口縁部と斜～横位ヘラズリ。外周が少し被熱面化する。	7YB5/4 にぶい・黄褐色 やや暗い 白・赤・透明～細粒と灰色細粒少 破損	床上 8cm 底 2/3 周 4
7 土師器 鉢	口 径 26.2 高 28.2 底 径 10.2	外面は口縁部と斜～横位ヘラズリ。内面は口縁部と斜～横位ヘラズリ。口縁部ヨコナデ。内面は口縁部と斜～横位ヘラズリ。口縁部ヨコナデ。被熱面や汚れは見られない。	10YB6/4 にぶい・黄褐色 やや暗い 白・赤・透明～細粒と黒細粒少 やや破損	床上 5～8cm が接合 口 1/6 周、底 1/2 周 12, 13
8 石 礎石	長 径 5.4 幅 径 6.0 厚 径 3.0 重 径 126.6	隅の南側面を縦面に利用して、やや平滑に磨耗する。隅の正面は使用していない。以上の3面は被熱面化している。これ以外の面は被熱面で、この石が被熱した後に割れている。	7YB6/3 にぶい・黄褐色 やや暗い 白・赤・透明～細粒と黒細粒少 破損	床面上～床上 2部残 一部残 2
9 甕 貯	口 径 1.1 高 1.6 底 径 0.8 重 0.9	側面4面が被熱面となった厚さ7mm程度の貯物小甕片。2片が接合した状態で、甕口の半壁表面からの脱落品か。甕貯関連遺物構成 No.16。	表 明黄褐色 底 灰褐色 断面 褐色 1 メタル度 なし	小破片

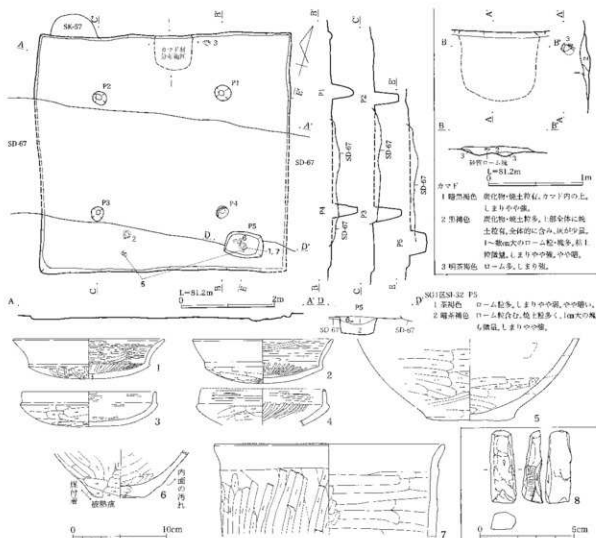
SG1 区 SI-32 (第226図、写真図版80・128)

【位置】SG1 区北部の 29.5-13.0・13.5 と 30.0-13.0・13.5 グリッド。中期の居館跡北半から東へ9mの建物群中にある。古墳後期の SI-89・90 が西にあり、中～後期の SI-126・136 が東にある。南に古墳中期の SI-33 と時期不明の SK-73・74 がある。時期不明の SD-67 に中央を切られる。古墳時代の SK-57 が北西隅を切る可能性もあるが確実な関係は不明である。南東隅は確認調査トレンチで掘方下まで削られている。

【規模と形状】東西にわずかに長い長方形で、南北の中軸は N-16°-W。東西長 5.42m、南北長 5.04m。壁は外傾し、残存高 0.03～0.08m。床面はほぼ平坦で傾斜しない。確認調査時に掘方底面下まで南東隅が削られ、記録も不備のため詳細不明だが、掘方は四隅が深く、それ以外の全体に薄く貼床したと推定される。床からの深さは不明。主柱穴は P1～P4 で、南側の P3・P4 上面が SD-67 に切られる。4 本とも規模はほぼ同様で、P1 は径 35×31×深さ 44cm、P2 は径 31×21×深さ 51cm、P3 は径 31×23cm で SD-67 底面から深さ 54cm (床面から約 60cm)、P4 は径 27×22cm で SD-67 底面から深さ 42cm (床面から約 55cm)。柱間は P1-P4 間 2.49m、P2-P3 間 2.43m、P2-P1 間 2.61m、P3-P4 間 2.62m。建物平面形と同様、南北間より東西間がわずかに長い。東壁北半の壁際が溝状にわずかに低いことが掘方底面写真で判断され、壁溝の可能性がある (D1)。断面は「U」字状で、図面がなく幅や深さは不明。間仕切溝は掘方全景写真で 3 本を確認した。南壁際中央西寄りでは D2、東壁際中央北寄りでは D3・D4 がある。D2 北端と D3 の一部は SD-67 に切られる。D3・D4 は周溝と思われる壁際の溝 D1 に接する。D2 は少なくとも掘方底面では壁に達しない。断面は 3 本とも「U」字状で、図面がないため詳細は不明。貯蔵穴 P5 は南東隅にあり、北半が SD-67 で、上半は確認調査トレンチで削られる。ほぼ平床で、壁が直線的な東西軸の長方形で 81×48cm、床面から深さ 38cm。P5 上層にローム粒、下層に焼土が多い。

【カマド】北壁中央にあったと思われる。東西 80×南北 70cm の範囲に粘土粒・ローム塊・炭化物・焼土を含む土が残る。十字にベルトを設けて掘り下げたが、明瞭な袖や焚口等は確認できず、範囲のみを図示した。火床面と思われる部分は若干窪む。煙道は壁外に出ない。調査時の写真はカマドの袖状をなすが、カマド土層断面図と対照して判断するとカマドの残骸 (焼土・粘土・炭化物粒が多い範囲) を掘り残した形状とみられる。

【覆土】特徴は不明である。



第226図 権現山遺跡 SG1区 SI-32 遺構・遺物

〔遺物および出土状況〕 遺物は極めて少ない。カマド周辺、貯蔵穴P5、南西部で土師器片が出土した。図化以外の土師器70片（369g）の内訳は、杯6片（30g）、甕63片（328g）、甕1片（11g）。杯は橙色（1・2）、炭素吸着（3）、漆仕上げ（4）がある。8は古墳中期の滑石製品素材が破熟して後期前葉の建物に流入したものであろうか。縄文時代の磨製石斧片や厚手のホルンフェルス刮片も混入していた。

第117表 権現山遺跡 SG1区 SI-32 出土遺物

番号 種類 図様	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 粘土・灰成 (または素材)	出土状態 現存状態 位置
1 土師器 杯	口 径 16.0 高 4.2	口縁上部内面が少し肥厚する。外面は口縁部ヨコナデ後、体部を主にヨコヘラケズリ。内面はヨコナデ後、口縁部に横位と体部に放射状の密なヘラミガキ。漆仕上げは見られない。	5YR6/8 暗 褐色 透明・白磁・細粒と 黒陶粒少 やや硬質	床土 6cm 口 3/4 周 1, 貯
2 土師器 杯	口 径 14.8 高 4.7 重 198	群々薄。外面は体部上位にナデ後、底部に多方向ヘラケズリ。外底面に多方向ヘラケズリ。内外面は口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部はヨコナデ後に放射状ヘラミガキ。漆仕上げは見られない。	5YR5/8 明赤褐 褐色 白・透明細粒少 やや硬質	床土上～床土 4cm ほぼ完形 口全周 4, 貯
3 土師器 杯	口 径 14.2 高 4.7 最大 径 14.5	外面底部に多方向ヘラケズリ、体部に光沢のあるヨコヘラケズリ。内外面は口縁部ヨコナデ。内面の口縁部はヘラミガキを施していると思われるが、断面が欠けているため詳細は不明。内外面の全体が炭素を吸着して黒色。漆仕上げは見られない。	2.5Y3/1 黒褐 やや細粒 白・透明細粒多 白・灰成少 硬質	床土 4cm 口 1/6 周 5
4 土師器 杯	口 径 13.2 高 3.9 最大 径 14.1	外面体部ヨコヘラケズリ。内外面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部放射状ヘラミガキ。内外面に漆仕上げが残り、内面全面と外面土上で特に白立つ。	10YR4/2 灰黄褐 やや細粒 白・黒・赤・透 明細粒微 やや硬質	貯蔵穴 口 1/6 周 貯

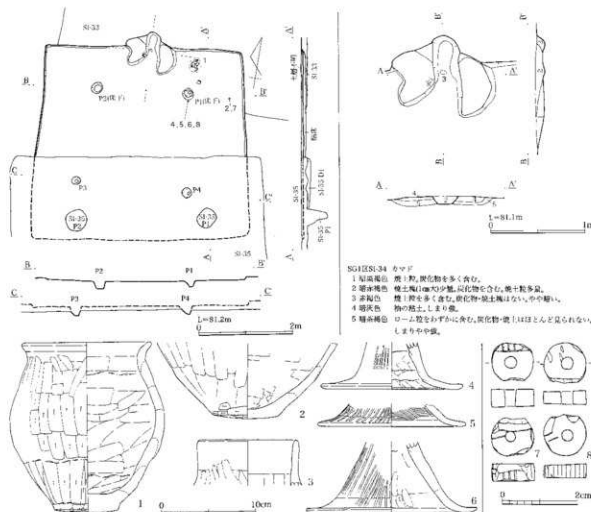
5 土師器 甕	高 残 8.6 底 9.4 最大 残 23.0	外面は胴部ヨコヘラズリと胴下端部ナデ・ヘラナデ。外底面はおそらくヘラズリ後ナデで丁寧な凸面に仕上げる。内面はヨコヘラナデで、粘土積み上げ休止部を際くする ためのヨコヘラズリも帯状に見られる。被熱痕や汚れ・変等は見られない。	2.5Y8/3 に近い黄 やや粗い 白粒粒多、白・ 灰色緑と白・黒・透明細粒 少や軟質	床直上と貯蔵穴直上 20～26cm 底 5/6 周 1. 3. 貯
6 土師器 甕	高 残 5.1 底 4.6～5.2 最大 残 14.2	外面は胴部タテヘラズリ後、胴下端と外底面にヨコヘラズリ。内面は底部に多方向 と体部に縦位のヘラナデ。外底面は被熱し、胴部に縦付着痕。内面胴部にコガね付 着。	1.0Y8/3 に近い黄緑 粗い 白・灰色緑と白・黒・ 透明細粒少や軟質	貯蔵穴直上 23～30cm 底全周 2 周
7 土師器 甕	口 残 24.2 高 残 8.6 最大 残 24.4	胴部外面ナデ後にタテヘラズリ、胴部内面ヨコヘラナデ。口・胴部内外面にヨコナ デ。	2.5Y8/5 明赤黒 やや粗い 赤黒粒と赤・白・ 透明細粒少 やや軟質	貯蔵穴直上 20～26cm 口 1/6 周 1
8 磨石片	長 3.8 幅 1.3 厚 1.0 重 7.8	右側面に開示した切磨面は、発掘時に生じた可能性が高い。その脇にある平行線状の 傷は、加工時の刃先痕で、発掘時のものではないと見られる。他の面もそれぞれ工 で多少の加工を行っている。両の下端は自然面。全体が被熱して褐色化している。古 墳中期の遺物と推定 (7)。	1.0Y8/6 明赤黒 緻密で軟質な磨石	貯蔵穴 貯蔵穴

SG1 区 SI-33 → 本章第4節(古墳時代の竪穴鍛冶遺構)を参照

SG1 区 SI-34 (第227図、写真図版 81・128・129)

[位置] SG1 区北寄りの 29.0-13.0・13.5、29.5-13.0・13.5 グリッド。古墳後期の SI-32・89 が北 5m と西 1m に、中～後期の SI-136 が北西 4m にある。中期の居館の外郭溝 SD-95 から東へ 11m 離れる。北半で古墳中期の鍛冶遺構 SI-33 を切り、南半が後期の SI-35 に切られる。

[規模と形状] 南半が SI-35 に切られて不明だが、4 本の主柱穴から各壁までの距離が同様とするとほぼ方形と推定できる。中軸は N-10°・W。西辺の南側が西にそれる。東西長は 4.20m (北辺)～4.48m (SI-35



第227図 権現山遺跡 SG1 区 SI-34 遺構・遺物

第10章 権現山遺跡 SG1 区

に接する付近)。南北長は残存値が 2.35m で、推定長は 4.1m 程度。壁は短く外傾し、残存高 0.03 ～ 0.06m。床面はほぼ平坦で、傾斜しない。掘方は床面から深さ 4 ～ 7cm で、全体を貼床すると思われるが、土層の詳細は観察記録がないため不明。

主柱穴は P1 ～ P4 で、径や深さはほぼ同じである。南側の P3・P4 は下半だけを SI-35 貼床下で確認した。P1 は径 25 × 23 × 深さ 12cm、P2 は径 25 × 23 × 深さ 19cm、P3 は径 19 × 13 × 深さ 11cm で床面から深さ約 19cm、P4 は径 21 × 19 × 深さ 10cm で床面から深さ約 17cm。柱間は P1-P4 間 2.12m、P2-P3 間 1.99m、P2-P1 間 1.94m、P3-P4 間 2.37m。P1・3・4 の配置は整うが P3 は約 30cm 西にずれ、南辺が長い台形状に配置する。

貯蔵穴が南辺にあった可能性はあるが、確認できていない。

【カマド】北壁際中央にある。天井が崩れ、確認面が低い。両袖の基底だけが残る。両袖幅 103cm、煙道先端から袖先端まで 84cm。床を 10cm ほど掘り下げ、3 ～ 5cm ほど暗茶褐色土の 5 層で埋め戻した上に、暗灰色粘土の 4 層で袖を作る。火床は掘方底を平坦にし、床面よりわずかに低い。焼土・炭の多い 1 層が焚口からの流入土、焼土塊・粒の多い 2・3 層が天井内壁の崩落土であろう。煙道は北壁を約 40cm 「U」字状に掘り、先端はなだらかなのである。

【覆土】単層で、断面写真や記録が不備のため、特徴は不明である。

【遺物出土状況】遺物はわずかで、北東部やカマド周辺で土師器片がややまとまる。鉄滓 1 片や土師器（高杯など）が SI-33 から混入したとみられる。

【出土遺物】図示した以外の土師器 226 片 (2,268g) の内訳は、高杯 55 片 (528g) と壺・甕類 171 片 (1,740g)。高杯は重複する SI-33 からの混入と見られ、脚部片主体で図化以外に 3 個体分の破片があり、高杯の杯部破片はごく少ない。壺・甕類も SI-33 の混入と見られる遺物が多い。杯・甕の破片はない。

小形甕 (1) と壺 (3) が SI-34 に伴うと見られる。白玉 (7・8) の材質が、4 区 SI-7 のような滑石ではなく、権現山 SG1 区 SI-34・権現山 4 区 SI-59・杉村遺跡 GN1 区 SI-5 のような粘板岩に転換しているため、古墳後期であろう。時期を決める要素が少ないが、後期初め頃の可能性がある。

第118表 権現山遺跡 SG1 区 SI-34 出土遺物

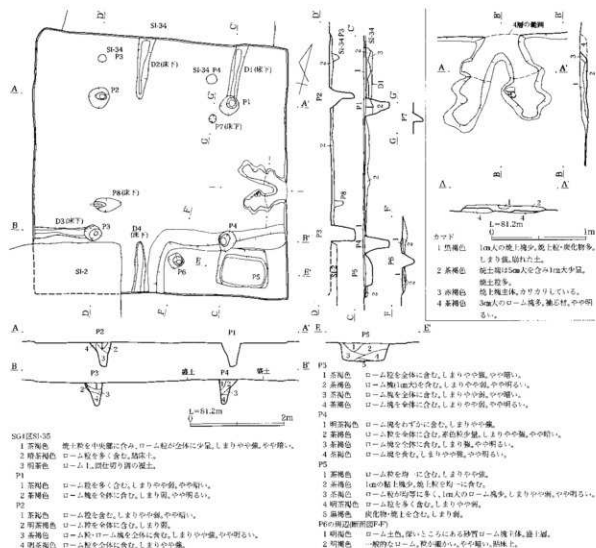
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土位置 残存状態 注記
1 土師器 小甕	口 径 13.6 高 17.9 底 6.5 最大 径 16.3	胴下に横み上げ伏止部あり。外底面に多方向と斜横に下段外面タテヘラズリ後、胴部タテヘラズリ。内面は斜横位のヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。焼成・使用面は見られない。	2.5Y5/2 暗灰黄 緑色 白・黒・赤・透明 ～細粒と灰色燐少 やや軟質	床直上～床下 2cm と カマド周辺が接合 3, K, 表層, SI-33 18
2 土師器 甕	高 径 7.9 底 6.7	外底面と外面下縁にヘラズリ。外面に縦位と内面に横位のヘラナデ。外面胴下縁から高さ 3cm まで焼成。内底面から高さ 3cm 以上内面に汚れ付着。	10YR4/2 灰黄 やや粗い 白粒～細粒多、 白・灰色燐少 やや軟質	底 1/2 層 I
3 土師器 甕	口 径 10.4 高 径 4.8	内面胴部ヨコヘラナデ後、内外面口縁部ヨコナデ、外面胴部タテヘラナデ。	2.5YR3/3 浅黄 やや粗い 赤・白・灰色・ 透明～細粒と黒燐少 やや軟質	カマド大床面直上 口 1/4 周 6, K
4 土師器 高杯	高 径 4.9 脚部 径 15.0	外面は脚部ヨコナデと脚柱部タテヘラミガキ。内面は脚柱部に横位のヘラナデまたはヨビオサセ、脚部部にヨコヘラナデ後ヨコナデ。SI-33 から混入した可能性あり。	2.5YR6/6 暗 やや粗い 黒・白・透明 細粒と赤燐少 やや軟質	脚部 3/12 周 Z
5 土師器 高杯	高 径 2.4 脚部 径 15.6	内面脚部に浅いヨコヘラ後、内外面の脚部にヨコナデ。外面脚柱部タテヘラズリ後、脚部タテヘラミガキ。SI-33 から混入した可能性あり。	7.5YR5/4 に近い やや粗い 赤・白・透明 ～細粒ややや多、黒燐少 硬質	脚部 1/2 周 Z
6 土師器 高杯	高 径 7.5 脚部 径 18.0	外面は脚柱部ナデと脚部ヨコナデの境に下から上方へのタテヘラミガキ。内面は脚柱部ヨコヘラナデ後ナデ、脚部ヨコナデ。SI-33 から混入した可能性あり。	7.5YR5/4 に近い やや粗い 赤・白・透明 ～細粒と赤燐少 やや軟質	脚部 1/4 周 Z
7 石製物品 白玉	径 10.0 ～ 11.4mm 高 4.8～5.0mm	側面は穿孔と同一方向に粗い研磨。上・下面は穿孔後に分割して白玉を磨いた時の側面磨き、研磨痕はなく、分割した時に側面状の割痕が両面に大きく生じている。そのうち 1 箇所には工具の片で 3 条の筋が生じた切磨痕を残す。初孔径 3.00mm、終孔径 2.55mm、重量 0.73g。	5Y3/1 オリーブ黒 軟質で磨痕の発達した粘板 岩	床直上、 完形 I
8 石製物品 白玉	径 10.7 ～ 11.2mm 高 3.1～3.8mm	側面は穿孔と同一方向に粗い研磨。上・下面は穿孔後に分割した面で研磨なし。分割時に生じた側面状の割痕が片面から側面にかけて大きく生じている。初孔径 3.10mm、終孔径 2.80mm、重量 0.62g。	5Y3/1 オリーブ黒 軟質で磨痕の発達した粘板 岩	床直上、 完形 Z

SG1区 SI-35 (第228図、写真図版82)

【位置】SG1区北部の29.0-13.0・13.5、29.5-13.5グリッド。古墳後期のSI-89と円筒形土坑SK-91が北西に近接する。中期の居館の溝SD-95から11m離れ、東・南・北側に中期のSI-1・3・33がある。古墳後期のSI-2・34を南西部と北部で切る。SI-35も古墳後期と考えられる。

【規模と形状】方形で中軸はN-15°-W。東西長5.40m、南北長5.42m。壁は外傾すると推定され、残存高0.02～0.03m。床はほぼ平坦で、傾斜しない。南壁中央から南東隅まで堤状の高まりが長方形に囲む。貯蔵穴P5と入口ピットP6を囲み、東壁際からP4を通して西に延び、ほぼ直角に屈曲して南壁に接する。高まりの範囲は295×140cm、内側の範囲は160×95cm。高まりの幅32～45cm。高さ2～4cmだが、南辺は特に確認面が低いため高まり上面が削られた可能性が高く、本来はより高いと考えられる。高まりは貼床上に砂質ローム主体の明褐色土を盛る(断面図F-F')。同じ土を底面で確認できる貯蔵穴の掘削排水を主体に作ったと考えられる。P5・6間にも南北の直線的な高まりがあったとも推定されるが、確認面が低いため詳細不明。掘方は床面から深さ3～12cmで底に緩い凹凸があり、ローム粒が多い2層でほぼ全体を貼床する。

主柱穴はP1～P4の4本。P1は径41×36×深さ51cm、P2は径46×44×深さ58cm、P3は径38×34×深さ48cm、P4は径45×36×深さ53cm。4本とも径はほぼ同様で上半に段を持つ。柱間



第228図 権現山遺跡SG1区 SI-35 遺構

P1-P4 間 2.92m、P2-P3 間 2.90m、P2-P1 間 2.75m、P3-P4 間 2.70m。南北間が東西間よりやや広いが、ほぼ方形配置。掘方底で P7 (径 18 × 16 × 掘方底面から深さ 21cm) と P8 (径 60 × 30 × 掘方底面から深さ 20cm) を確認した。南部の高まり内にある入口ピット P6 は、中位に段がある円形柱穴状で径 32 × 29 × 床から深さ 25cm で覆土は不明。

掘方で確認した 4 本の間仕切溝 D1 ~ D4 が壁に接し、D1・D3 は主柱穴 P1・P3 へ結ぶ。断面「U」字状で長 105 ~ 128 × 幅 25 ~ 30 × 深さは掘方底から 5 ~ 7cm、床から 12 ~ 18cm。D1-D2 間 170cm、D4-西壁間 210cm。P1 北側の断面 C-C' から、貼床と 3 層で埋め戻したことがわかる。貯蔵穴 P5 が南東部にあり、周囲は堤状に高い。東西軸の方形で 110 × 81 × 床から深さ 39cm。平坦な底から壁が垂直気味に上がり、南辺以外は床面下約 10cm で緩斜面 (北辺で幅約 10cm) になり、緩斜面内側は 98 × 67cm。P5 覆土下層にロームが多く、底面の 5 層はロームをほとんど含まない黒褐色土で、炭・焼土を少し含む。

【カマド】東壁の南部にある。天井は崩れ、確認面が低いいため袖は基部だけが残る。規模は 112 × 102cm。壁穴外に続く煙道は消滅し、その下部にローム塊の混じる整地層が残る (4 層)。この 4 層に続いて西側につくられた袖部も、4 層を床に置いて基礎とする。壁内で袖が連結し、先端は被熱で焼土化が著しい。ほぼ平坦で床面よりわずかに低い火床の上に、焼土塊・粒の多い 2 層と、焼土粒・炭の多い 1 層が堆積する。

【覆土】焼土・ローム粒を含む茶褐色土で、床付近の厚さ 2 ~ 5cm 程だけが残る。

【遺物および出土状況】図示できる遺物はない。遺物はごくわずかで、土師器甕 40 片 (320g) と杯 14 片 (50g) の合計 54 片 (370g) しかない。

SG1 区 SI-40 (第 229 図、写真図版 82)

【位置】SG1 区中央部の台地平坦面、25.5-13.5-14.0 グリッド。古墳中期の SI-12・13・85 が南と西にある。南西と東には古墳後期の SI-11・127 がある。南辺と中央部を古代の SD-31 と中世の SD-37 に、北東部を古墳後期の SI-10 に、北西部を中期の SI-8a・8b に切られる。

【規模と形状】SI-8a・8b・10、SD-31・37 に切られて不明部分が多い。数少ない残存部からほぼ方形と推定され、東西 5.43 × 南北 5.46m、中軸は N-19°-W。壁は外傾し、残存高 0.06 ~ 0.30m。床面はほぼ平坦で傾斜しない。掘方は床面から深さ 4 ~ 13cm で底に小凹凸が目立つ。貼床はローム粒の多い黄褐色の 6 層。

主柱穴 4 本 (P1 ~ P4) のうち P1 を除く 3 本は SD-37 で上半を失う。P1 は径 32 × 31 × 深さ 40cm、P2 は径 23 × 22 × 深さ 30cm で床から深さ約 40cm、P3 は径 41 × 33 × 深さ 74cm、P4 は径 29 × 25 × 深さ 57cm で床から深さ約 75cm。南側 2 本が北側 2 本より 30cm 以上深い。柱間は P1-P2 間 2.65m、P3-P4 間 2.62m、P1-P4 間 2.54m、P2-P3 間 2.49m で、南北間がわずかに狭い。南壁際中央の掘方底で確認した入口ピット P6 は径 42 × 39cm の円形柱穴状で、深さや覆土は不明だが、写真では P3・P4 より浅い。

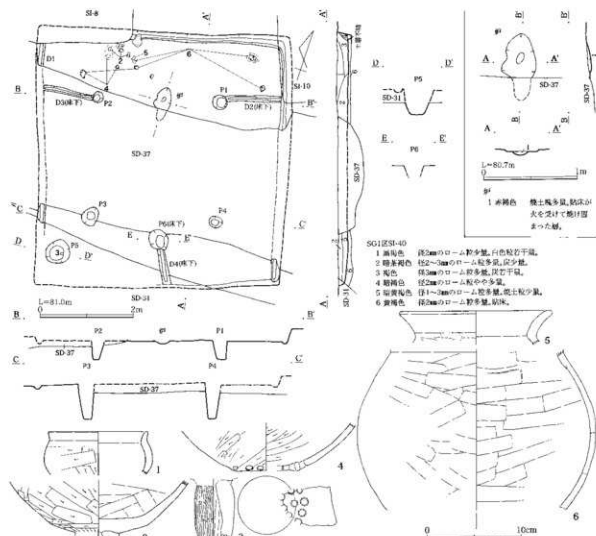
床面で確認した壁溝 D1 は幅 15 ~ 24 × 深さ約 4 ~ 9cm で全周すると思われる。掘方底で確認した間仕切溝 D2 ~ D4 の 3 本が P1・P2・P6 と壁溝に接する。断面「U」字状で幅 10 ~ 18cm、深さは不明だが、壁溝よりも明瞭に深い。上半が SD-31 に切られる貯蔵穴 P5 が南西隅にあり、径 53 × 48cm で残存する深さは 25cm・床面からの深さ約 54cm。円形平底で、壁は直線的。P5 の覆土は不明。

【炉】北側主柱穴間にある。南半は SD-37 に切られるが、被熱で硬化・赤変する貼床の範囲がわかる (破線で図示)。硬化・赤変範囲は 70 × 33cm で、掘り込みがほとんどなく周囲の床面と同じか、写真で確認するとわずかにくぼむ程度。

【覆土とテフラ】覆土は 1 層以外にローム粒が比較的多い。2・3 層に炭、5 層に焼土を含む。1 層中の白色粒は古墳後期初頭の Hr-FA 火山灰かもしれないが、不明である。

【遺物および出土状況】重複遺構が多いので、本建物に確実に伴う遺物は少ない。覆土に残る北・南辺付近に土師器片がある。図化以外の土師器 36 片 (416g) の内訳は、杯 8 片 (44g)、高杯 5 片 (45g)、甕 23 片 (327g)。4 は初現期の大型甕。古墳時代の多孔大形甕は珍しく、今回報告資料では唯一である。北壁際

で出土した流紋岩の扁平な河原石は、一部を欠く礫で長22×幅14×厚4.3cm、重さ1.460g（図示は省略）。



第229図 梅現山遺跡SG1区 SI-40 遺構・遺物

第119表 梅現山遺跡SG1区 SI-40 出土遺物

番号 種類 図種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・構成 (または素材)	出土位置 保存状況 注記
1 土師器 杯	口 径 10.3 高 径 4.6 最大 径 11.5	頸部の横は内面でやや強い。外面は下平に斜位 (?) と上平に横位のヘラケズリ後、口へ肩部ヨコナデ。内面調整は面が完れて不明瞭。	7.5YR5/6 明赤 やや粗い 白・赤釉・磁粒 多、白・灰色 透明硝と黒 磁粒 少や軟質	口1/36周、体1/4周
2 土師器 高杯	高 径 5.5 最大 径 19.0	杯底部が非常に厚く重い。頸部の内面上端の一部が現存。外面は杯底部に求心状と底外周に横位のヘラケズリ。外面杯体部に斜位と内面杯底部に多方向のヘラケズリ。内面杯体部ナメヘラナデ。	5YR5/6 明赤 やや粗い 白磁粒多、赤・ 白磁粒少 やや軟質	床土11～17cm (SI-8 とSD-37に各1片混 入) 杯底11/12周 2、5、6、SI-8附? SD-37
3 土師器 高杯	高 径 6.5	頸部は強く絞り、内面に縦皺が強く生じる。脚土端は意いっていた粘土塊が割落した。外面は密なタテヘミガキ。	7.5YR5/4 に赤・黒 やや粗い 赤・白磁粒と黒・ 透明磁粒少 硬質	ビッド5の底土11cm 脚柱全周
4 土師器 甕	高 径 5.1 底 径 6.3	外底面に1方向 (?) のヘラケズリと内外面胴部にナメヘラケズリの後に、底面から胴部下部にかけて径6.5mmの丸線を内外に通して近円形の孔を多数開ける。残存する破片が少ないので復原形状は参考程度。	10YR3/1 黒陶 粗い 赤・白磁粒多、白・ 透明・赤磁粒やや多 硬質	床土3～11cm 底1/6周 1、2、3、SI-8
5 土師器 甕	口 径 16.2 高 径 3.6	外面頸部にナデまたはヘラナデの後、外面口縁部と内面口へ肩部ヨコナデ。腹等は認められない。	2.5Y3/2 暗灰青 やや粗い 白・灰色・透明 粒～磁粒と白磁多。黒磁粒 少 硬質	床土13cm 口1/6周 7
6 土師器 甕	高 径 17.0 最大 径 25.2	外面は下平部ナデと上平部ヨコヘラナデ。内面はヨコヘラナデ。外面全体に少量の礫と、内面の肩部以下に不明瞭な窪み・凹れが散在。	2.5Y3/1 黒陶 やや粗い 白・灰色粒～磁 粒多。灰色硝と黒・透明硝 粒少 やや軟質	床土3～15cm 胴1/4周、底1/24周 1、8、9、11、12

SG1 区 SI-62 (第230図、写真図版 82・83)

【位置】SG1 区中央部の台地平坦面、23.0-15.0・15.5、23.5-15.0・15.5 グリッド。古墳後期の SI-174・179 が北西にある。SK-78・182 など時期不明の長方形・楕円形土坑が周囲に多い。時期不明の SD-65 が東半を切る。北東隅で重複する時期不明の SK-186 との新旧関係は不明で、先に調査した本建物の方が新しい可能性もある。南側は遺構確認面下 50cm まで大規模に攪乱される。

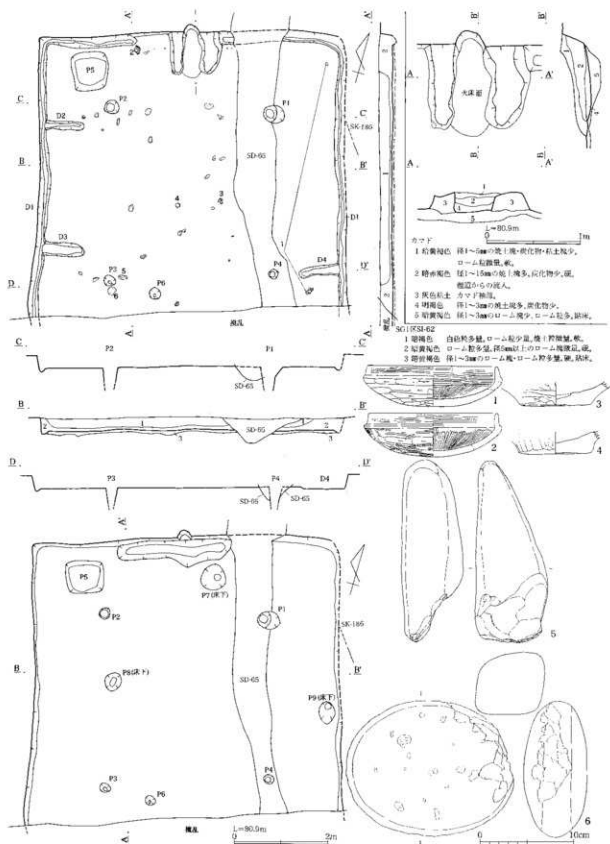
【規模と形状】南半は破壊され不明だが、ほぼ方形の支柱穴配置と壁面が同様の例が多いので方形と推定できる。中軸は N-15°-W。東西長 6.50m。南北長は残存 5.93m で、本来は東西長とほぼ同規模と思われる。壁は外傾し、残存高 0.32～0.35m。床面は緩い凹凸があるが、傾斜はない。掘方は床面から深さ 3～7cm で底に緩い凹凸があり、ローム塊・粒を含む 3 層でほぼ全体を貼床する。支柱穴 4 本 (P1～P4) のうち P4 全周と P1 西半は SD-65 に切られる。P1 は径 46×35cm、P2 は径 31×29cm、P3 は径 26×21cm、P4 は径 21×20cm。深さは 4 本とも不明だが、写真から P4 は SD-65 底面より約 20cm 深いと思われる。床面から深さ 50cm 前後と推定される。これ以外の 3 本は根拠がないが、P3 とほぼ同様の可能性は高い。柱間は P1-P2 間 3.37m、P3-P4 間 3.44m、P1-P4 間 3.39m、P2-P3 間が 3.69m で、P2-P3 間がわずかに広いがほぼ方形配置。掘方底で確認した柱穴 3 本は、P7 が径 55×50cm、P8 が 40×34cm、P9 が 47×24cm で、ともに深さは不明。南辺中央西寄りにある円形柱穴状の P6 が入口ビットと推定され、径 25×23cm、深さは不明である。確認した範囲では、カマドがある北壁際中央以外の壁隙を壁溝 D1 が全周する。断面逆台形で幅 17～27cm、床面から深さ 5～6cm。間仕切溝は D2～D4 の 3 本を床面で確認した。壁溝に接し、D4 は支柱穴 P4 に向かう。断面「U」字状で長さ 80～85cm、幅 15～29cm、深さは不明。北壁から D2 まで 180cm、D2・D3 間は 235cm。P8 西側の掘方底は溝状にやや深いのが、間仕切溝かどうかは不明。北西隅にある貯蔵穴 P5 は 81×78cm の方形。底面は平坦で、東西壁がやや急で、南北壁が直線的に外傾する。深さや覆土は不明。

【カマド】北壁際中央にある。天井は崩れ、両袖幅 118cm、煙道先端から袖先端まで 105cm。掘方埋土 5 層上面に 3 層の白色粘土で袖を作る。袖から煙道まで被熱痕が顕著で赤変部も多い。火床はほぼ平坦で、床面よりわずかに下がる。燃焼部には、流入土の 4 層と、天井部の崩れた 2 層が堆積する。灰褐色粘土と焼土塊が混在する 1 層付近が天井下面だったと考えられる。煙道は北壁を約 15cm 「U」字状に掘り、火床から先端が垂直気味に上がる。

【覆土とテフラ】覆土上層は微量の焼土粒を含み、下層より軟弱である。上層に白色土粒が多いが、火山灰かどうかは確認していない。

第120表 権現山遺跡 SG1 区 SI-62 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 ・文様 (または素材)	出土状態 ・現状
1 土師器 杯	口 径 13.6 高 径 4.3 最大 径 14.7	外面は底部に 1 方向と体部に縦位のヘラケズリ。内面体部は密な放射状ヘラミガキで、底部は 1 方向 (?) のミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後コヘラミガキ。内面全面に炭素吸着の黒色処理を行い、外面の肩部まで黒くなる。	10YR8/4 浅黄緑 やや暗黒 黒・白・透明 粒と赤・白粗粒や少 量	東部床土 3～7cm が 接合 口 1/4 径、体 1/2 周、 2・4
2 土師器 杯	口 径 13.6 高 4.6 最大 径 14.6	外面は底部に多方向と体部に縦位のヘラケズリ後ヘラミガキ。内面体部は密な放射状ヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後コヘラミガキ。内面全面に炭素吸着の黒色処理を行い、外面の肩部まで黒くなる。	7.5YR5/6 明黄 やや暗黒 白・黒・透明 粒多、赤粒・細粒と白粗粒 少 やや破損	北西部床土 1cm 口 1/4 径、体 1/2 周、 1
3 土師器 盛	高 径 2.4 底 径 2	外面側部はヨコヘラケズリ後に横へ斜位の細いヘラミガキ。外底面は多方向ヘラナデ。内面は剥落して調整不明。被熱痕や付着物は見られない。	7.5YR5/4 に近い やや暗い 白・透明 粒と黒粗粒多、灰褐色 少 やや破損	中央部床土 1cm 底 2/3 周、 3
4 土師器 大形壺	高 径 2.4 底 径 7.8	外面側部下端タテヘラケズリ。外底面は中西み状で、外側に 1 方向ヘラナデ。内面は器面剥落のため調整不明。被熱痕や付着物は見られない。	7.5YR6/6 暗 やや暗い 白・透明 粒多、白粗粒と黒粗粒 少 やや破損	中央部床土 9cm 底全周、 5
5 石 器 磨器	長 18.9 幅 最大 7.6 厚 6.5 重 1251.1	断面四角形状で円の手側が斜面状に破損した後に磨滅している自然の河原石をそのまま利用。両下縁の縁部を使用して小割縁が生じている。意図的な加工ではなく、使用による破損と見られる。	5Y7/2 灰白 密でやや軟質な多乳質火山 岩	南西部床土 7cm 底全周、 26
6 石 器 打石	長 17.7 幅 14.3 厚 6.7	かなり重く大形。両の下縁部は不規則な衝撃による破損が見られるので、敲石としても使用したと見られる。多乳質で割いたため、傷等の使用痕は確認できない。重量 1980.2g。	7.5Y4/1 灰 粗くやや軟質な多乳質火山 岩	南西部床土 2cm 底 2/3 周、 27



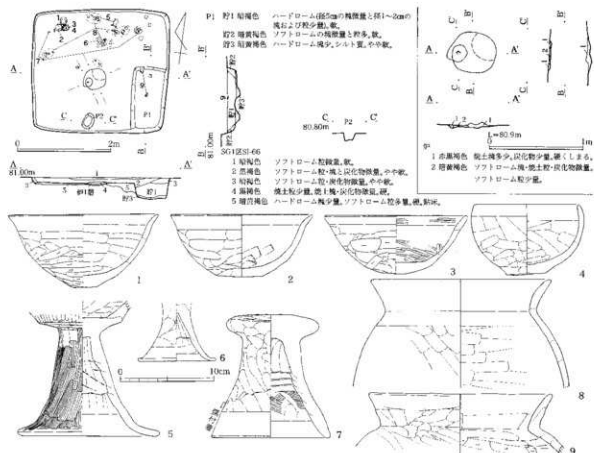
第230図 権現山遺跡SG1区 SI-62 遺構・遺物

【遺物および出土状況】遺物は極めて少ない。中央～西壁際付近に礫があり、土師器片が床付近で少量出土した。土師器杯はミガキが密で外面にも及ぶ。図化以外の土師器 10 片（174g）の内訳は杯 5 片（97g）と壺 5 片（77g）である。石器は礫器と敲石兼台石がある。他に流紋岩、安山岩、ホルンフェルスなどの礫が 23 点出土したが、長さ 5.2～18.9cm・重さ 41～2,216g で、大きさと形に統一性がなく、編物石などとは考えられない。

SG1区 SI-66（第231図、写真図版 83・84・129）

【位置】SG1区北部の27.5-13.0グリッド。入り込む低地に面した建物群の1棟で、居館跡東辺中央の外郭溝SD-95から東へ8m離れる。古墳中期のSI-5と6が北西3mと北2mにある。重複する遺構はない。

【規模と形状】東西にわずかに長い方形で中軸はN-8°-W。東西長2.92m、南北長2.62m。壁はやや外傾し、残存高0.11～0.12m。床面はほぼ平坦で、傾斜しない。東壁付近は掘方が深く、中央～西側は浅く平坦。床面からの深さは4～21cm。貯蔵穴P1のある南東隅方形部が特に深い。台地東縁にあるためローム上面は東側で低く、この傾斜に沿って掘ったために東壁寄りの掘方底面が深い。軟質な地山黒色土を除去して床面を構築するためであろうか。ローム粒・塊を含む暗黄褐色の5層を全体に貼床する。主柱穴と推定されるものはない。南壁際中央の掘方底面で確認したP2は径34×23cm、掘方底面からの深さ16cmで、入口ピットの可能性もあろう。南東隅にある貯蔵穴P1は南北軸の方形で、70×142×深さ28cm。東・南辺は堅穴東・南壁と共有する。底面はほぼ平坦だが径約25×深さ8cmの浅い円形ピット状部分が2箇所あり（断面図B-B'）、この部分の貯蔵穴3層はローム塊を含む粘質土で人為的に埋め戻した貼床の一部か、地山黒色土の可能性もある。貯蔵穴壁は直線的に外傾する。貯蔵穴1・2層は微量のローム塊を含む。



第231図 権現山遺跡 SG1区 SI-66 遺構・遺物

〔炉〕中央にある。貼床土が被熱で硬化・赤変した炉1層の範囲は50×43cmのほぼ円形。掘り込みはほとんどなく周囲の床面と面一で、小さな凹凸が著しい。炉内は北東部が最も硬化・赤変し、南西部で径17cmの範囲が被熱していない。

〔覆土〕2・3層に微量の炭粒を含む。

〔遺物出土状況〕遺物は少なく、ほとんどが北半で出土し、特に北壁寄りに多い。北西部で床面に正立した杯が4個あり(1～4)、3の上に4を重ねていた。南部では貯蔵穴上面付近に破片がある(9)。

〔出土遺物〕器高が高い初期の埴形杯がある。6は高杯としては小形品。7は類例の少ない支脚または器台で、炉から1m離れて出土した。図化以外の土師器54片(558g)の内訳は杯1片(7g)、壺1片(19g)、高杯23片(166g)、甕29片(366g)。甕片は外面ハケ調整も見られる。

第121表 権現山遺跡SG1区SI-66 出土遺物

番号 種類 図版	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 粘土・釉薬 (または素材)	出土状態 現状/収蔵 状況
1 土師器 杯	口 15.8 高 7.7 底 2.4	外面は上平ナデ後、下平部に横位と底面に1方向のヘラケズリ。内面は底面に多方向ナデと体部にヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや粗い 白・透明釉～黒粒多、赤粒～細粒と黒粒少 やや軟質	北西部床土3cm 口5/6周、底全周1
2 土師器 杯	口 15.0 高 6.6 底 4.7	外面は体部と底面をナデ後、体部上端に斜いヘラナデ。内面は体部に斜位と底面に多方向のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤・黒・白・透明釉～細粒少 やや軟質	北西部床土2cmと貯蔵穴 口5/6周、底全周2、4、貯穴、北西
3 土師器 杯	口 14.8 高 6.1 底 3.0	外面面は小さな平砥。外面は底面と体部にヘラナデ。体部中位ヨコヘラケズリ。内面口～体部にヨコナデ後、内面ヨコヘラミガキ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・赤・透明釉～細粒多、黒粒少 やや軟質	床土2cm(2枚重ねた杯のうち上側) 口1/2周、底全周3、4、北西隅
4 土師器 杯	口 10.9 高 7.5 底 4.3 最大 11.7	突出する外面部の外周部をナデ後、その中央は径1.5cmの凹みにする。外面体部上平ナデ後、下平にユビオサエとユビナデ。内面は底面に多方向と体部に斜位のナデ。内外面口縁部にヨコナデ。	7.5YR6/4 に近い黄褐色 やや粗い 白・赤・透明釉～細粒多、赤粒～細粒少 やや軟質	北西部床土4cm(2枚重ねた杯のうち上側) 口1/2周、底全周3、北西
5 土師器 高杯	口 径 14.2 脚 径 15.1	外面は杯底部にナデとヘラケズリ後、脚部タテハケ、杯体部タテハケミガキ。杯内面は底面に1方向(?)と体部に横～斜位のヘラナデ。脚内面は粘土積み上げ板を残し、軽く絞ったと思われる縦線と横線タテナデ。脚部内外面ヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・灰色・透明釉～細粒多、白・灰色粒と赤粒少 やや軟質	床土1～2cmが接合 脚部1/2周、杯底2/3周 15、16
6 土師器 高杯	口 径 9.2 高 径 6.1	高杯としては小形品。脚部の外面にナデと内面に横なタテナデ後、脚部部の内外面にヨコナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや粗い 透明釉細粒多、黒・白細粒と赤粒少 やや軟質	床土4cm 脚部全周、脚部1/4周12
7 土師器 支脚	口 9.8 高 13.1 脚 径 12.4 重 600.1	厚く重い。上面は多方向の横なナデ。上面外面は上平にユビオサエを多く残しながら全体を横ナデ。内面は上部がタテユビナデ、中部がナメハケナデ。内外外面の脚部部はやや横なヨコナデ。外面下位に少量付着。被熱痕はない。支脚または器台の可能性がある。	5YR7/6 橙 やや粗い 白・赤粒～細粒多、透明・灰色粒～細粒と黒粒少 やや軟質	床土1cm、床直上～床土4cmの破片も接合 尻形 5、8、19
8 土師器 甕	口 径 19.0 高 径 11.5 最大 径 22.8	内外面の胴部に横位と斜位のヘラナデ後、口～頸部の内外面に丁寧なヨコナデ。外面胴部はやや被熱赤化し、内外面ともに付着物は見られない。	7.5YR5/4 に近い黄褐色 やや粗い 白・赤粒～細粒多、黒・透明釉細粒と灰色粒少 やや軟質	床土2～3cmが接合 口5/6周 7、11、15、18
9 土師器 甕	口 径 19.3 高 径 6.3 最大 径 22.0	口縁部の高さに至りあがり(3.8～4.4cm)。胴部外面ナメヘラナデと内面ナメヘラケズリ、頸部外面に横なナデと内面にヨコヘラナデ。口縁部内外面のヨコナデが頸部まで及ぼす。粘土積み上げ板を外面に残す。外面胴部に少量付着。	7.5YR5/4 に近い黄褐色 やや粗い 赤・白粒～細粒と黒・透明釉細粒やや多、灰色粒少 細質	貯蔵穴底土13～23cmが接合 口1/4周 23、25

SG1区SI-69 (第232図、写真図版84・129)

〔位置〕SG1区北部の28.5-12.5・13.0グリッド。居館跡北半東側の外郭溝SD-95から約2m東で、SI-5に次いで居館に近い。古墳中期のSI-3・5・6が東・南・南東にある。建物北辺が時期不明のSD-4に切られる。平面的には確認していないが、南西隅～北東隅にかけて溝状の攪乱がある。

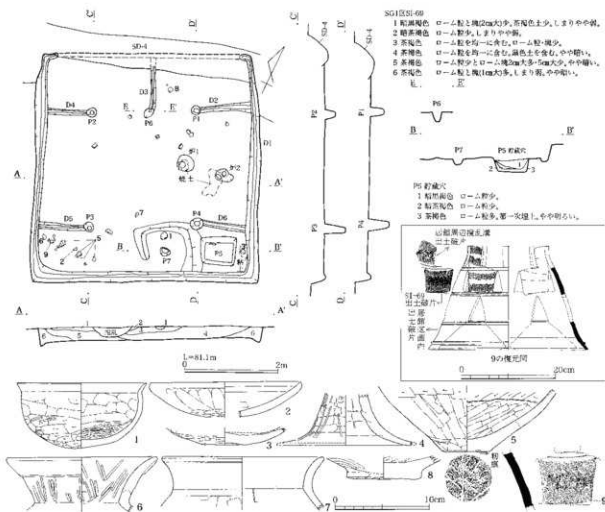
〔規模と形状〕SD-4底面は掘方底面下に達するが、壁溝が残るため規模・形状がわかる。方形で中軸はN-26°-W。東西長4.78m、南北長4.80m。壁はやや外傾し、残存高0.31～0.37m。床は緩い凹凸があり、傾斜はない。南壁中央の東半に、入口ピットP7を方形に囲む堤状の高まりがある。高まり南東部は南側壁溝に接するが、南西部は壁溝まで約25cmの間を空ける。高まりの範囲は140×107cm、内側の範囲は80×88cm。高まりは地山ローンを掘り残して作り、幅17～40cm、高さ2～4cmで東側ほど高く幅広い。貼床・掘方断面図はないが、写真とレベル計測値をみると、中央付近は地山ローンを床面とし、壁際だけに床から2～5cmの厚さで7層を貼床している。主柱穴は4本(P1～P4)。P1は径21×20×深さ

29cm、P2は径22×19×深さ21cm、P3は径22×15×深さ44cm、P4は径28×21×深さ45cm。径は同様だが、北側のP1・2より南側のP3・4が深い。東西より南北の柱間がやや広く、P1-P4間2.38m、P2-P3間2.43m、P2-P1間2.21m、P3-P4間2.28m。P1・2の中間にある補助柱穴P6は径26×17cm、深さは20cmで主柱穴よりやや浅い。南東部の高まりに囲まれてある入口ピットP7は平面楕円形の柱穴状で、径20×12cm、床面からの深さ10cm、覆土は不明。SD-4重複部以外を全周する壁溝D1は断面逆台形で幅9～26cm、床面から深さ7～9cm。D2～6の5本の間仕切溝が、SD-4に切られるD3以外は主柱穴および補助柱穴P6と壁溝を結ぶ。断面「U」字状で長さ82～110cm、幅9～13cm、床面から深さ1～8cm。南東隅にある貯蔵穴P5は西側が堤状の高まりに接する長方形で75×55cm、床面から深さ27cm。平底で、南東壁はやや急で北西壁はやや外傾し、自然埋没で最下層にローム粒が多い。

【**炉**】東壁寄りに2箇所ある炉の深さや埋土の特徴は記録不備のため不明。炉1はP1・4間よりやや内側にある。径27×30cmの浅い皿状に窪み、最深部で24×20cmの不整形範囲が熱で硬化赤変する。炉2は炉1の東35cmで、P1・4間より南東に寄る。東西に長い40×26cmの不整形楕円形で、浅い皿状に掘り、底面は西端と北側が最も深い。炉南半から南へ続く58×30cmの不整形範囲が熱で硬化赤変する。複数の炉はSG1区SI-1や4区SI-20等にある。

【**覆土**】自然埋没状で、ローム塊が5・6層に多い。

【**遺物出土状況**】各所で土師器片などが少量出土した。南東隅床面直上に18×27cmの範囲で粘土があり、



第232図 権現山遺跡SG1区 SI-69 遺構・遺物

その上面に3の杯片がある。入口部に完形の杯(1)が伏せてある。床上10cmで出土した器台片(9)が居館の外郭溝SD-95と遺構間接合し、この建物と同時に開口・埋没していたことがわかる。

【出土遺物】2は7世紀の土師器杯に似た形だが、胎土・色調からみて古墳中期中～後葉の遺物であろう。5は木葉底で、稲稈痕はSG1区SI-5などにもある。6は4区SX-23の貼付口縁蓋とはやや異なる。9は、居館跡外郭溝SD-95の器台筒部や、居館区画内と攪乱溝出土の脚部破片と同一個体である。振幅が少ない脚部波状文はI型式2～3段階にあり(中村2001, pp.65-83)、振幅の広いI型式4段階までは下がらないと思われる。図化以外の土師器74片(785g)の内訳は杯18片(85g)、高杯10片(84g)、甕33片(197g)、壺13片(419g)。壺底部は図化品を含め4個体分ある。流紋岩の河原石が3点あるが、形態の統一性や使用痕は見られない。縄文時代石鏝と旧石器時代の水晶製尖頭器が各1点出土した。

第122表 権現山遺跡SG1区SI-69 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・構成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.7 高 6.9 重 260	内外面ともに体部上半ナデ。ト平ヨコヘラズリ後に覆らなヘラミガキ。内面底部は1方向ヘラズリ後に多方向ヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。内面大部分と外面上半に覆付着。	5YR5/6 明赤褐色 やや粗い。白・透明細～粗粒多。黒細砂・灰色細粒・白微少。やや破損	南部床土2cmで底位はほぼ円形 4
2 土師器 杯	口 径 15.8 高 残 3.7 最大 径 13.8	外面は体部ナデ後に底部ナメヘラズリ。内面は体部ヨコヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR5/8 明赤褐色 やや粗い。赤・透明細～粗粒多。白・灰色微と白・黒・透明細粒少。やや破損	南西部床土15cm 口1/6 残 10
3 土師器 杯	高 残 1.8 底 4.0 最大 径 12.4	外面は凹底でナデ後に外周を狭くヘラズリ。外面体部ヨコヘラズリ。内面底部は多方向ナデ。	7.5YR5/6 暗赤 やや粗い。赤細～粗粒多。赤・白・灰色微と白・黒・透明細粒少。やや破損	床土5cm(南東隅貼土) 底3/4 残 23
4 土師器 高杯	高 残 5.4 底 径 約 1.5	倒立状態で反時計方向に巻き絡みし、脚部外面ナデと内面ユビオササの痕に縦部ヨコナデ。外面タテヘラミガキ。	5YR5/6 明赤褐色 やや破損。白・透明・黒細～粗粒と赤細～粗粒少。破損	脚柱全周
5 土師器 杯	高 残 7.0 底 4.8	外面は木葉底の後に稲稈に痕が1箇所付着。木葉は稲の葉の裏面の基部寄りと思われる。外面底部は縦～斜位のヘラナデ後、縦み上げ休止部付近にヨコヘラズリ。内面胴部はナメヘラズリ後、上部を縦み上げてナメヘラズリ。破片の上部は縦部が水平に揃うので、貼土に転用した疑いもある。	7.5YR7/6 暗赤 やや粗い。白微と赤細～粗粒少。やや破損	南西部床土9～17cm が縦部全周 1/2 残。底全周 8, 11, 13, 28
6 土師器 蓋	口 径 15.8 高 残 5.9	口縁部外面に薄く貼土部を付けて貼付口縁状にする。内外面の口縁部ヨコナデ。外面頸部タテヘラミガキ。内面口縁部縦～斜位ヘラミガキ。	5YR7/6 暗赤 やや破損。白・赤・灰色微～粗粒と黒・透明細粒少。破損	南西部床土16cm 口1/6 残 5
7 土師器 杯	口 径 17.1 高 残 5.6	胴部は外面タテナデ。内面ヨコヘラズリ。口縁部内外面をヨコナデし、口縁部外面は浅い段状に仕上げる。外面にやや多量の覆付着。	7.5YR5/6 明赤褐色 やや破損。黒・透明細～粗粒やや多。白・赤・黒細少。やや破損	南部床土18cm 口1/6 残 14
8 土師器 大形壺	高 残 2.5 底 7.8	円板状に突出した外底面に1方向ヘラズリ。外面胴部下端に揃なナデ後、胴部ナメヘラミガキ。内面底部に1方向ヘラズリ。被熱痕や付着物は見られない。	10YR5/2 土色(黄褐色) 粗い。白・透明細～粗粒多。黒細～粗粒少。やや破損	北部床土2cm 底全周 22
9 須恵器 脚付	脚 径 約 22 高 残 5.9	高さ1mm程の突縁を2本1組でつまみ出して水平に区画した1段の内面に横波状文を右から左へ2段階、千鳥脚文に似た透部の割線と下縁が破片の両側縁と土間に残る。外面に薄く自然釉が付着。SD-95および居館区画の遺構外遺物と同一個体。	N6/(B) 灰褐色 白・黒細粒少。破損	南西部床土10cm 脚1/12 残 3

SG1区SI-70 (第233図・写真図版84・85)

【位置】SG1区中央部。方形に入り込む低地を北東に望む台地縁辺の26.0-13.5および26.5-13.0・13.5グリッド。居館跡南東隅の溝から東へ約12m離れる。古墳中期のSI-7・8・10が南側にある。他遺構とは重複しない。東西に延びる溝状攪乱が中央を切る。この溝状攪乱は、北関東自動車道路調査A区SD-187またはSD-221に続く可能性もある(谷中・大島編2001, p.486)。

【規模と形状】南北にわずかに長い方形で中軸はN-25°-W。東西長5.50m、南北長5.95m。壁は外傾し、残存高1.10～0.16m。床面はほぼ平坦で、傾斜しない。掘方は床面から深さ2～10cmで底に細かな凹凸が目立ち、ローム粒が多い暗黄褐色土でほぼ全体を貼床する。主柱穴は4本(P1～P4)。P1は径41×38×深さ65cm、P2は径37×34×深さ64cm、P3は径41×38×深さ72cm、P4は径44×38×深さ72cm。径はほぼ同じだが、北側より南側がやや深い。柱間はP1-P4間2.78m、P2-P3間2.63m、P2-P1間3.12m、P3-P4間3.14mで、東西に長い。中央部の掘方底面で確認したP6は、径24×21cm、掘方底面から深さ19cm。南部の掘方底で確認した入口ピットP7は径26×22cm、掘方底面から深さ12cm、床

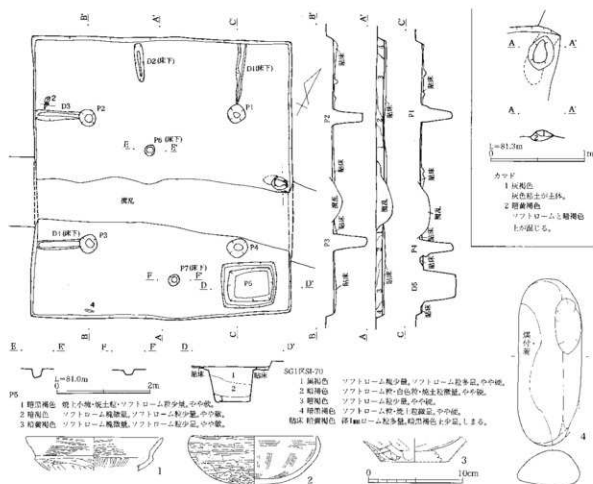
面から深さ約16cmで覆土は不明。間仕切溝D1～D4を掘方底で確認した。D1・D3・D4は主柱穴と壁に接する。短いD2は用途不明の柱穴P6に向かう。断面「U」字状で長90～120cm、幅12～20cm、掘方底から深さ6～11cm。距離はD1-2間200cm、D3-4間250cm、D2-西壁間210cm。南東隅にある貯蔵穴P5は東西軸の長方形で118×95×床面から深さ74cm。床下3～8cmにはわずかに内傾する幅2～10cmの平坦面が全周し、平坦面内側は98×70cm。P5の1層に焼土、2・3層にローム塊を含む。

【カマド】東壁南部にある。天井が崩れて南半が攪乱溝に切れ、36×28cmの左軸の一部が残る。堅穴貼床土に、暗黄褐色土と灰色粘土で袖を構築する。床に残る袖土の状況から東壁から長約55cm、床面から高さ7cm分が確認できる。火床や燃焼部、煙道部などは不明。

【覆土とテフラ】覆土は自然堆積で、1層にローム塊、2・4層に焼土粒を含む。2層中の白色土粒が火山灰かどうかは確認できていない。

【遺物および出土状況】集中せずに全域で土師器片が少量出土した。図化以外の土師器298片(2,047g)の内訳は、杯29片(191g)、高杯5片(26g)、壺7片(93g)、甕248片(1,662g)、甕9片(75g)。杯は外傾する口縁部内外面を磨く破片が主体で、直立口縁や内外面ミガキ後赤彩の模倣杯小片も各1点含む。外面貼付口縁や二重口縁状の大形壺口縁部、組積み接合面に刻みを施す甕胴部片もある。

図示できた杯のうち2は古墳中期後葉まで遡る可能性もあるが、図示以外の破片には1のような杯が多いので中期末と考えられる。



第233図 権現山遺跡 SG1区 SI-70 遺構・遺物

第123表 権現山遺跡 SG1 区 SI-70 出土遺物

番号 種類 部位	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 記
1 土師器 杯	口 径 14.4 高 3.6	内外面の口縁部にコナダ後ヨコヘラミガキ。外面体部ヨコヘラケズリ。内面体部ヨコナダ後、放射状ヘラミガキ。	2.5YR5/8 明黄褐色・白・赤・透 明細粒少 やや破損	口 1/8 割
2 土師器 杯	口 径 13.4 高 3.2	内面の口・体部端にごく弱い稜を持って口縁部が内彎する。外面は口縁部ヨコナダ後に密なヨコヘラミガキ。底部 1 方向ヘラケズリ。体部に横位のヘラケズリがヘラミガキ。内面は体部に放射状の磨面ヘラミガキ。口縁部におそらくヨコヘラミガキ。	10YR7/6 明黄褐色・赤・透明細粒少 やや破損	床土 7cm 口 5/12 割
3 土師器 蓋	高 径 2.8 底 径 7.2	外底面は外現をヘラケズリ。胴部外面はナデ後ナメヘラケズリ。内面は多方向ヘラナデ。	2.5YR5/8 明黄褐色・白・赤・透明細粒少 やや破損	底 1/4 割 SI-70 付近散見
4 鏡	長 17.7 幅 6.7 厚 4.3	自然磨で、表面の各所が非常に強く磨滅して假が広範囲に薄く付着する。また熱に熟と思われる銅が因の右と右下に各 1 箇所ある。重量 715.0g。	2.5Y7/1 灰白 緻密で破損安山岩	床直上 一部欠 石 6/1

SG1 区 SI-71 (第 234・235 図、写真図版 85・129・130)

【位置】SG1 区中央の台地平坦面、24.5・13.5・14.0 および 25.0・13.5・14.0 グリッド。古墳後期の SI-10・11・17・18 が北と南東にある。中期の SI-12・13・84・86 や終末期の SI-87 も周辺にある。後期の SI-14・88 が隅部を切り、時期不明の SK-21・26・28・30・72 と中央の長方形掘残が各所を切る。試掘トレンチで北東隅を掘方底付近まで失い、SI-88 との新旧を掴みにくいが、わずかに残る貼床の状況から判断した。

【規模と形状】竪穴や土坑と重複して壁が不明な部分もあるが東西 7.38 × 南北 7.39m のほぼ方形であろう。中軸は N-2°-W。壁は短く外傾し、確認目が低いため残存高 0.04 ~ 0.16m。床は緩い凹凸があるが傾斜しない。掘方は床から深さ 3 ~ 16cm で底に緩い凹凸があり、ローム主体の暗黄褐色土でほぼ全体を貼床する。

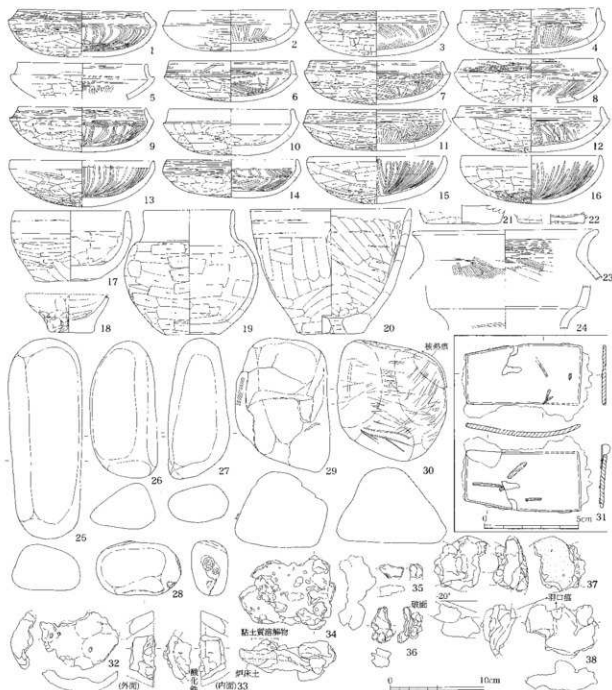
主柱穴は 4 本 (P1 ~ P4) で、P3 上半を SI-14 が切る。P1 は径 35 × 30 × 深さ 68cm、P2 は径 54 × 49 × 深さ 69cm、P3 は径 53 × 47cm で深さは床から推定 45cm (SI-14 掘方底から 30cm)、P4 は径 43 × 36 × 深さ 64cm。南側より北側が深い。おおむね等間隔の方形配置で、P1-P2 間 4.02m、P3-P4 間 3.91m、P1-P4 間 3.89m、P2-P3 間 3.96m。張出ビット P5 が南壁中央にある。張出部は方形で、南壁 ~ 南端が 108cm、壁付近幅 104cm、南端幅約 100cm。P5 は 146 × 117 × 床から深さ 46cm で、底面は平坦な長方形、壁面は急傾斜で床面下 6 ~ 8cm にある幅 4 ~ 14cm の平坦面から短く上がる。東西両壁の半筒形持ち込みは、東側が幅 28cm × 確認面から深さ 30cm、西側は同様に幅 17cm × 深さ 36cm。P5 上部は竪穴と一連の土で埋まる。張出ビットは SG1 区 SI-2 などにある。間仕切り溝は 2 本ある (D1・D2)。南西主柱穴の西にある D1 は SI-14 に上半が切られるが、壁に達すると推定される。断面「U」字状で、長 140 × 幅 16 ~ 21 × 残存深さ 7 ~ 9cm (床から推定すると 18cm)。掘方写真から、D2 が P4 に付随して存在したように見える。

【カマド】北壁中央にある。天井が崩れ、西袖以外を確認トレンチに削られる。両袖幅 156cm、煙道先端から焚口まで 102cm。床面 (10 層上面) に 9 層を置いて基礎とした上に白色粘土の 7b 層で袖を作る。東袖は幅広い。7b 層とともに袖を形成する 7a 層も白色粘土と思われるが、不明確。袖から煙道まで被熱痕が顕著である。火床は掘方を 8 層で平坦に埋め戻し、床面よりわずかに低い。燃焼部は、天井が崩れた焼土塊の 5 層、焼土の多い 2・6 層などが堆積する。煙道は北壁を約 28cm 「U」字状に掘る。

【覆土とテフラ】自然埋没状の覆土で、少し含む白色土粒は FA 火山灰かもしれないが未確認。

【遺物出土状況】比較的多く、張出ビットとカマド周辺にまとまる。カマド東側では鉢 19 と小形甕 20 を床面付近に置いたとみられる。カマド西側と燃焼部内では完形に近い杯類が床面から浮く。張出ビット北側に鉄滓と羽口があるが (32 ~ 38)、SI-71 には鍛冶炉がないので南側から流入した遺物と考えられる。北 14m の SI-10 や南東 4m の SI-18 も時期が近い建物で、少量の鉄滓を含む。

【出土遺物】図化以外の土師器 165 片 (1,276g) の内訳は杯 40 片 (358g) と壺・甕類 125 片 (918g) で、高杯はない。径 5cm 以下の礫が数点ある。杯は図化遺物も含め有縁で内傾口縁と半球形だけが、図化



第 235 図 権現山遺跡 SG1 区 SI-71 (2) 遺物

第 124 表 権現山遺跡 SG1 区 SI-71 出土遺物

番号 種類 時期	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 (注記)
1 土師器 杯	口 13.6 高 4.9 最大 15.3 重 278	外面は底部に多方向ヘラケズリ。体部に横位のヘラケズリ後ヘラミガキ。内面は底部放射状と体部1位に斜方向のヘラミガキ。内面口縁部上下と外面口縁部にヨコヘラミガキ。内面全面に炭素吸着の黒色処理。	10YR7/6 粉 やや破砕 白・透明・赤黒 ～細粒やや多。白磁と黒磁 粉少 やや破質	貯蔵が直上 10cm 完形 口 3/4 程度
2 土師器 杯	口 徑 14.4 高 4.3 最大 14.3	外面は底部に多方向ヘラケズリ。体部に横位のヘラケズリ後ヘラミガキ。内外面の口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面底部に1方向と体部に放射状のヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。	7.5YR6/6 粉 やや破砕 赤・白・透明細 粒多。赤・白細粒やや多 やや破質	口 1/6 程度
3 土師器 杯	口 13.9 高 4.8 最大 15.1	外面は体部上位ヨコナデ後に部分的なミガキ。口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。底部に1方向と体部下位に横方向のヘラケズリ。内面は底部に1方向。体部に斜位。口縁部に横位のヘラミガキ。外面の上位と内面全面に漆仕上げ。	5YR6/6 粉 やや破砕 透明・赤黒～細 粒多。黒・白細～細粒少 やや破質	南東部床面直上 口 3/4 程度 40, 41

第 10 章 権現山遺跡 SG1 区

4	土師器 杯	口 径 14.4 高 4.7 最大 15.7	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後に密なヨコヘラミガキ。外面上と内面全面に漆仕上げ。	7.5YR6/8 橙 やや暗赤 赤黒～細粒と白・黒・透明細粒やや多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	西部直上 口 1/8 周、体 5/12 周 13
5	土師器 杯	口 径 13.8 高 4.8 最大 15.3	外面外面は上位ヨコヘラナデ後に中位をヨコヘラケズリ。口縁部は内外面ヨコナデ後に内面を少しヨコヘラミガキ。体部内面は放射状の後に上端部に横位のヘラミガキ。外面口縁部と内面全面に漆仕上げ。	7.5YR6/6 橙 やや暗赤 白・黒・透明細粒と黒・透明細粒と黒細粒と黒細粒少 やや硬質	床土 6cm (2 枚重の杯付直上) 口 1/12 周 13
6	土師器 杯	口 径 13.2 高 4.4 最大 14.0	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部は多方向のヘラナデ後ヘラミガキ。外面上と内面全面に漆仕上げ。	5YR6/6 橙 やや暗赤 白・黒・透明細粒～細粒やや多、赤・白・黒少 やや硬質	床土 7cm (2 枚重の土層) 口 7/12 周 34
7	土師器 杯	口 径 14.0 高 4.6 最大 15.4 重 259	外面体部は底に多方向と中位に横方向のヘラケズリ。上位に平直なヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ後、外面に密で内面に疎なヨコヘラミガキ。内面底部に多方向と体部に横位のヘラミガキ。外面上と内面全面に漆仕上げ。	7.5YR7/6 橙 やや暗赤 白・黒・黒～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 3cm 底直上 5
8	土師器 杯	口 径 14.3 高 4.7 最大 16.2	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。口縁部ヨコナデ後のヨコヘラミガキは外面側に強い。内面は下位に放射状と上位に横方向のヘラミガキ。外面上位と内面全面に漆仕上げ。内面外と面に黒点を吸着して黄色化している部分が多い。	7.5YR6/8 橙 やや暗赤 白・透明細粒多、赤黒～細粒と黒細粒少 やや硬質	カマド内床土 5～8cm 口 1/4 周 23、24
9	土師器 杯	口 径 13.6 高 4.7 最大 15.3 重 257	外面は底部に 1 方向の。体部に横位のヘラケズリ。体部内面は放射状の後に上部を斜位のヘラミガキ。内外面口縁部をヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面上位と内面に漆仕上げ。	5YR6/6 橙 やや暗赤 透明細粒多、黒・白・赤～細粒少 やや硬質	P5 内面 ほぼ直上 ハナ目付 P4
10	土師器 杯	口 径 13.0 高 4.9 最大 14.2 重 293	外面体部上位ナデ。底部多方向ヘラケズリ。体部下位ヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向ヘラナデ。(一部ヘラケズリ)。体部口縁部ヨコナデ。外面上と内面全面に漆仕上げ。	5YR6/6 橙 やや暗赤 白・透明細粒～細粒多、白・黒～細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 7cm ほぼ直上 4
11	土師器 杯	口 径 14.5 高 4.5 最大 15.7	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後に密なヨコヘラミガキ。内外面上と内面に漆仕上げが薄く残存。	7.5YR6/5 黄褐色 やや暗赤 赤・黒～細粒と黒・透明細粒と黒細粒少 やや硬質	床土 6cm (2 枚重の下層) 口 1/2 周 33
12	土師器 杯	口 径 15.1 高 4.8 最大 16.6	外面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部をヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は底部に 1 方向。体部に斜位。体部上位に横位のヘラミガキ。漆仕上げは確認できない。	5YR6/8 橙 暗赤 透明細粒多、黒・赤・黒～細粒と黒・透明細粒と黒細粒少 やや硬質	火床土 10cm (カマド内 1 層目) 口 1/4 周 32
13	土師器 杯	口 径 15.3 高 4.9 最大 15.5	外面は体部上位ヨコヘラナデで部分的にミガキ状。中位に横方向。下位に 1 方向のヘラケズリ。内面は体部ヘラナデと口・体部ヨコナデの後に放射状ヘラミガキ。外面上と内面全面に漆仕上げ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや暗赤 白・黒・透明細粒と黒・透明細粒と黒細粒少 やや硬質	P5 出土 口 1/12 周 張出ビット
14	土師器 杯	口 径 14.0 高 4.6 最大 14.6	内外面の口・体部間に強い。外面は体部ヨコヘラナデと底部多方向ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ後に密なヨコヘラミガキ。内面は底部に 1 方向と体部に斜位のヘラミガキ。内面が同様に、漆仕上げの可能性もあるが不確定。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや暗赤 白・透明細粒～細粒と黒・透明細粒と黒細粒少 やや硬質	カマド内床土 8cm、P5 内 1 層目も混合 口 5/6 周 26、30
15	土師器 杯	口 径 14.4 高 5.0 最大 14.9 重 344	外面は体部上位ヘラナデとナデの。底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面体部は多方向ヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ後、内面放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面全面に漆仕上げ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや暗赤 白・黒・透明細粒多、灰色細粒と白・黒～細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 24cm ほぼ直上 2
16	土師器 杯	口 径 14.6 高 5.1 最大 15.1 重 284	外面は底部に多方向のヘラケズリと強いハケメの後。体部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後、内面に密な放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面全面に漆仕上げ。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや暗赤 白・黒・透明細粒多、灰色細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 8cm ほぼ直上 4
17	土師器 杯	口 径 12.0 高 7.5 底 6.9 最大 12.8 重 435	内外面の口・体部間に明確な段は持たない。外底面は無調整で外側に粘土を貼り付ける。内外面体部はナデで、外面は幅の狭いヨコナデも行う。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや暗赤 赤黒～細粒と白・黒細粒多、黒・透明細粒～細粒と黒細粒少 やや硬質	カマド内床土(床土 8cm)に伏せる 形状 27
18	土師器 小形土師	口 径 約 9 高 4.0 底 4.4 最大 4.8	厚い粘土板の底から手摺まで内面を留めて、体部の高さが必要な部分だけに粘土を追加で積み上げ形成。外面体部に粗粒をコビオサセ。外底面に「X」状の群いヘラナデ。内面に多方向のヘラナデ。	5YR5/6 明赤 やや暗赤 白・黒・透明細粒と黒・透明細粒と黒細粒少 やや硬質	張出ビット北東床土 5cm 底全周 12
19	土師器 具	口 径 9.3 高 13.2 底 5.8 最大 14.0	底部以外が薄くて軽い。外底面は横な多方向ナデ。外面体部は上～中位を左方向の後に下位を右方向ヘラケズリ。内面は円筒方向の 1 層なヘラナデ。内外面の口・体部にヨコナデ。内面全体が吸着して黒色。	2.5Y7/4 浅黄 やや暗赤 白・透明細粒～細粒多、黒・透明細粒と黒細粒と黒細粒少 やや硬質	カマド東床土 2.5cm 口 1/4 周、底 1/2 周 17
20	土師器 小形器	口 径 16.8 高 13.2 底 7.0 最大 13.2	外底面はナデで、横断面に平行線状の強い傷が生じる。孔断面はヨコヘラケズリ。外面体部タヘヘラナデ後、内外面口縁部ヨコナデ。内面は下と底面にヨコヘラナデ。上と上斜位のヘラナデ(一部はヘラケズリ)。	7.5YR6/6 橙 やや暗赤 白・黒・透明細粒多、黒細粒と白・灰色細粒少 やや硬質	カマド東床土 1cm と試掘トレンチ面が混合 口 2/3 周、底全周 38、UT TNSG TX25-14、UT TNSG TX25-14S1
21	土師器 器	高 2.0 底 7.8	外底面は中央が凹み状でナデ。外周がやや高く 1 方向ヘラケズリ。外面側面下側に縦～斜位ヘラナデ。内底面は多方向のナデまたはヘラナデ。外面全体が焼色して白色粘土状。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや暗赤 白・白・透明細粒～細粒と黒・透明細粒と黒細粒少 やや硬質	カマド 2 層土面(火床土 8cm) 口 1/12 周 30
22	土師器 器	高 1.2 底 7.0	外底面は不定方向の強いヘラケズリで少し中直になる。外面側面に縦位と内面底部に多方向のヘラケズリ。	7.5YR6/6 橙 やや暗赤 白・透明細粒～細粒多、灰色細粒～細粒少 やや硬質	カマド内床土 8cm 底全周 25
23	土師器 器	高 10.7 底 14.3	外面側面と内面口縁部中位～底部上位に横～斜位の強いハケメの後、内外面側面と内面口縁部ナデナデ。外面側面～内面口縁部にヨコナデ。古墳中期の遺物が入る。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや暗赤 白・黒・透明細粒と黒・透明細粒と黒細粒少 やや硬質	北東床直上 口 1/12 周、底 1/6 周 18
24	土師器 大形器	高 4.7 最大 18.0	二面に横状で、外面の粘土貼りは行わない。内面の口・体部間に 1mm の平面を持つ。内外面ヨコナデ。外面側面下側に斜位のヘラミガキまたはヘラナデ上員の粗粒面。古墳中期の遺物が入る。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや暗赤 白・透明細粒～細粒と黒・透明細粒と黒細粒少 やや硬質	カマド内床土 5cm 底 1/8 周 28

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

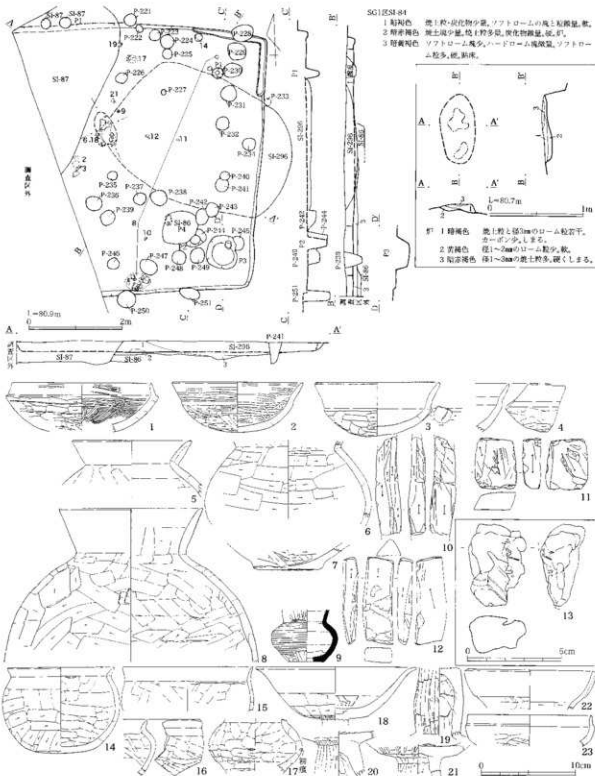
25	長 21.3 幅 7.9 厚 5.3	縦長くて断面が隅丸四角形の自然石。加工・使用痕や付着物は見られない。重量 1340g。	2.5Y/6 1 黄灰 やや緻密で硬質な火山岩	北部床上 8cm 完形 15
26	長 14.5 幅 7.2 厚 5.0	自然の細長い塊。加工・使用痕や焼熱痕は見られない。表面全体に数分(7)が薄く付着するが、人為的なものとは考えられない。重量 628g。	2.5Y/6 4 にぶい黄 やや緻密で硬質な流紋岩	中央部床上 5cm 完形 19
27	長 14.5 幅 7.2 厚 5.0	自然の細長い塊。加工・使用痕や焼熱痕は見られない。重量 605g。	5C3/5 1 オリーブ灰 緻密で硬質な閃緑岩質	南部床上 6cm 完形 22
28	長 9.1 幅 5.8 厚 3.9	自然の円盤をそのまま利用。一方の小さい部分に縦打痕が見える。加工痕や焼熱痕は見られない。重量 280g。	2.5Y/7 3 浅黄 緻密で硬質な石英	床上 8cm 完形 柱穴 P3
29	長 14.3 幅 10.0 厚 8.5	自然産で、西の左側部に幅約 6mm の狭い範囲で浅い凹痕が見られる。焼熱痕・加工痕や付着物は見られない。重量 1579g。	5Y7/2 灰白 緻密でやや軟質な石英質岩	北部床上 8cm 完形 16
30	長 12.9 幅 11.6 厚 8.1	自然の円盤をそのまま利用。外面の全面に茶褐色の磨痕が明瞭に見られる。図示した一部部分が焼熱して褐色になる。重量 15170g。	2.5Y7/2 灰黄 緻密でやや軟質なデライト	南部床上 8cm 完形 21
31	板状製品 長 6.1 幅 3.2 厚 0.2 重 23.8	長軸方向に屈く薄い鉄板。短軸方向の断面形状は直線状。両面に植物の葉状の細い線痕が少量ずつ跡着する。短軸方向の断面図 2 箇中 1 箇所を図示したように、表面に薄い有機物が残っている状況が図部で 1 箇所認められる。	鍛造品	完形
32	長 6.0 幅 8.3 厚 1.6 重 47.5	内面が浮化して部分的に粘土質の垂れを生じている龍造津の砂埋内面破片。一見すると焼形龍造津に似ているが、内面の垂れから見ると羽田龍造津の砂埋表面破片であることがわかる。側部には薄皮状になって存在し、外面全体に龍造津の砂土が薄く覆われている。内面の浮化の状況は右側が粘土質龍造津の盛り上がりとなっており、左手側では徐々に薄くなって淡茶色から黒褐色の浮き面となる。砂埋内面の破片とはいえず、断面形状が上と左右方向ともきれいな丸味を持った板形で、龍造津自体が上と左右ともきれいとまってきたのがゆがみであることが推定される。もし専用引口が嵌入するものならば、右上方からの可能性が強い。分析資料№ 4、龍造津関連遺物構成№ 17。	表 灰褐色～淡緑色 地 暗褐色～黒褐色 磁石 2 メタル度 なし	床直上 断面 3 面 8 1 希薄
33	板状 板約 8 高 2.6 厚 2.0 重 2.6	表面全体がイガイガした浮化に覆われた専用引口または高杯形の土器破片。母体としては側部にかつらッパ状にあり、右寄りの側部 3 面が破面と見られる。最大厚味は側部破面の破面で 1.7cm を測る。表面が龍造津に覆われている点や厚味に加えて形状から専用引口の基部破片の可能性がやや強い。龍造津関連遺物構成№ 18。	表 暗褐色～黒褐色 地 暗褐色 2 磁石 2 メタル度 なし 浮のため粘土は不明	床直上 断面 1 希薄 7
34	長 7.9 幅 10.3 厚 4.4 重 205.4	側部中段に全周にわたり不規則な段を生じている小形の焼形龍造津。上面は右方向に向く浅い桶状で、下手側の肩部には粘土質龍造津がコブ状に載っている。下手の面は、こうした特色は似るため、雑草中に突き動かされた焼形または以前の浮を取り除いた状態で龍造津の破片をいったん段状の浮の破片と見られる。上面はやや平手の桶形で、木根による凹凸を生じており、左側端部には龍造津の砂土が認められる。龍造津関連遺物構成№ 19。	表 灰褐色～黄褐色 地 黄灰色 磁石 2 メタル度 なし	床直上 完形 9
35	長 1.5 幅 2.6 厚 1.4 重 2.9	下手側の側部が破面となった極小の焼形龍造津の基部小破片。上面は平坦気味で上面は木根痕を呈す突出部となる。浮置はやや粘土質気味。同一段中に小破片が 1 点あり、図示した個体の重量は 2.9g、小破片 2 点を含めると 4.0g。龍造津関連遺物構成№ 20。	表 褐色～黒褐色 地 灰褐色 磁石 2 メタル度 なし	床直上 一部現 10 現
36	長 3.9 幅 2.1 厚 2.0 重 9.2	側部中段に隙間があり、2 段気味の焼形龍造津基部小破片。上面は桶状に凹み右側から左側部上手側の破面となっている。接合はしないが 34 の基部破片の可能性もあり、図示した個体の重量は 9.2g、小破片 2 点を含めると 9.8g。龍造津関連遺物構成№ 21。	表 褐色～黒褐色 地 灰褐色 磁石 2 メタル度 なし	床面 一部現 床面一括
37	長 5.6 幅 5.6 厚 3.7 重 73.5	上面左側の肩部に細味の専用または私用引口の先端部が傾斜位置で残されている極小の焼形龍造津破片。浮置は右寄りの側部 3 面が破面となっており、最大厚味が 2cm 近い密度の高い層部となる。上面は浅く凹み、側部から下面が破面となる。引口部分は肉厚が 1.4cm 程度で上面には径 1.8cm を測る通風孔部が露出する。表層厚度はメリス 20 度前後から、龍造津関連遺物構成№ 22。	表 褐色～黄灰色 地 黄灰色～黒褐色 磁石 2 メタル度 なし	床 2cm 1 2 現 11
38	長 5.0 幅 7.5 厚 3.1 重 85.0	平面、不整多面形をした灰鉄で極小の焼形龍造津破片。左側部から上手側の側部と右側の側部が欠け落ちている。左側の 1/3 は一段低くなった状態で、上面表皮が剥落してしまっている。正面中央部は 4cm×2.3cm の部分が不整凹凸の小塊状に盛り上がり、上手側の側部には引口跡に似た小破片が露出する。但し、盛り上がり部分そのものが破片でなく、引口跡部の一部がその崩れにより損壊したものと見られる。盛り上がり部分はやや磁気気味で、龍造津材の崩下物が芯部となる可能性を有す。側部から上面は左右方向に長手の舟状で、表面にはわずかな木根痕とが木根に似た痕跡が見られる。浮置はやや軟弱で、破面の各所に中小の気泡が点状に点在している。気泡部の全体は右下手側の側部から下面にかけての一部と推定される。色調は表面の酸化土が茶褐色で、浮置は灰褐色から淡緑色となり、地は黒褐色となる。分析資料№ 5、龍造津関連遺物構成№ 23。	表 茶褐色～淡緑色 地 灰褐色～黒褐色 磁石 2 メタル度 弱 (+)	床 1cm 断面 4 面 6

SG1 区 SI-84 (第 236 図、写真図版 85・86・130)

[位置] SG1 区中央部の台地平坦面、24.0・13.5・14.0、24.5・13.5・14.0 グリッド。中期の SI-14・71 が北にあり、東と南東に後期の SI-18・179 が近接する。西半は調査区外。古墳中期の SI-86 の上部を切る。古墳終末期の SI-87 と中世の竪穴遺構 SI-296 に、北西部と中央～東辺をそれぞれ掘方下面下まで切られる。南東部に浅い傾乱状の掘り込みがあるらしく、南東隅から南辺付近で壁が確認できない。周辺にはビット群が存在する。土層断面を観察できたのは本建物と中世竪穴遺構を切る各 1 本のみだが (P-239 と 241)、各ビットと

も本建物を切る可能性が高い。なお本建物と SI-86 は、建物中軸に 9° の差があり、共通点や共有部がないので、拡張建替ではないと考えている。

【規模と形状】 壁を確認できない部分も多いが、わずかに残る壁と貼床から方形に近いと推定され、中軸は N- 9° -E。南北長 5.78m。東西長は 5.48m 以上で、本来は南北とほぼ同規模であろうと思われる。壁は外傾し、



第236図 権現山遺跡 SG1区 SI-84 遺構・遺物

残存高 0.05～0.21m。床面が確認できる部分はわずかなが、残存部で見るとほぼ平坦で傾斜もない。掘方は床面から深さ 2～11cm で底に緩い凹凸があり、ローム粒と塊を含む暗黄褐色の 3 層で調査部分全体を貼床する。主柱穴は東壁際の P1・P2 と推定したが、ビット群の各ビットとの明確な差は見出せず、ビット群内のいずれかが本建物の柱穴となる可能性はある。本来は 4 本の主柱穴を持つと考えるが、西側 2 本は SI-87 との重複や調査区外となることなどにより不明。P1 は北東部がビット群の P-230 と接し、P2 は北西部で SI-86 貯蔵穴を切り、北東部がビット群の P-244 に切られる。P1 は径 24 × 23 × 深さ 29cm、P2 は径 24 × 21 × 深さ 40cm で、南側の P2 はやや深い。P1-P2 間は 3.54m。壁溝は北東隅の壁際だけで確認した。これ以外にも存在した可能性はある。断面「U」字状で幅 15～18cm、深さは床面から 4cm。貯蔵穴 P3 が南東隅にある。70 × 60cm のやや不整形円形で、床面から深さ 28cm。底面は楕円形でわずかに丸味を持ち、壁は外傾する。覆土は不明である。

【炉】中央部やや北寄りであるが、重複する SI-86 と同時に調査したため不明な部分もある。被熱した床面と焼土の散布状況から 73 × 37cm の楕円形と考えられ、床面を 2～7cm 掘る。被熱で硬化・変色するのは炉の長軸に沿った 2ヶ所で、範囲は北側が 25 × 22cm、南側が 18 × 10cm。炉の大きさや掘り込みの有無など詳細は不明。

【覆土】覆土の多くは単層。床直上に堆積する 2 層は炉から流出した焼土が多い。

【遺物出土状況】他の遺構に切られるためか遺物は少なく、集中せず各所で出土する。同時に調査した古い重複遺構 (SI-86) の遺物を含むと思われる。また、この建物の上部を切る中世の SI-296 で出土した遺物には、この建物から遺物が混入している可能性がある。

【出土遺物】1 は炭素吸着の黒色処理。2 に漆仕上げの可能性があると不確定。3 は焼成前に生じた亀裂を粘土で補修してから焼成している。土師器の残片 (17) は、SG1 区 SI-5 などにある。須恵器小形壺 (9) は平底で頸部と体部下端を削る点の特徴。図示しなかった須恵器小片は、内面同心円文で外面平行叩きの胴部 1 片 (30g) と、杯体部 4 片 (38g) がある。10～12 は重複する SI-84・86・296 (古墳中期・古墳後期・中世) で出土した同質の砥石で、この石質の砥石片を複数出土した SI-84 の遺物と推定してここに掲載した。

図化以外の土師器 689 片 (5,248g) の内訳は、杯 120 片 (676g)、高杯 37 片 (472g)、壺・甕類 532 片 (4,100g)。中形の壺は破片もない。古墳中期中葉の遺物 (14～22) は、先行する SI-86 から混入した可能性がある。22 は外面に粘土を貼り付けた複合口縁壺。23 は古墳終末期の混入品。

第 125 表 権現山遺跡 SG1 区 SI-84 出土遺物

番号 種類 説明	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態
1 土師器 杯	口 径 14.7 高 残 5.1 最大 径 16.2	外面は体部ヨコヘラズリで、上部に横溝 1 枚を有す。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラズリ。内面体部に上半に横溝と下半に放射状のヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 白・透明細砂多 赤黒・黒細砂 少 やや硬質	SI-84 と 86 の重複部分 口 1/24 周、体 1/6 周 SI-84、SI-86
2 土師器 杯	口 径 13.8 高 5.3	外面は底部に多方向 (7) と体部に横溝のヘラズリ後、体部ヨコヘラミガキ。内面体部ヘラナデ後、底部に多方向と体部に横溝の密なヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外面の器面に薄く褐色の付着物あり。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・赤黒・細砂 赤黒・黒細砂 少 やや硬質	注記 SI-86 だがレベ ルから SI-84 の床付近 口 1/3 周 SI-86.7
3 土師器 杯	口 径 13.2 高 5.6 底 3.3	外面底部は不明な平底。内外面とも磨耗しているため、ミガキの有無は不明。内外面口縁部ヨコナデ後、外底面に 1 方向と体部に横溝のヘラズリ。体部上位に、焼成前の亀裂を粘土で塞いだ部分 (断面図)。破片破損後に数箇所付着している。	5YR5/8 明黄褐 やや緻密 白・黒・透明細 砂と赤黒・黒細砂 少 やや硬質	注記 SI-86 だがレ ベルから SI-84 の床 付近 口 5/12 周、底全周 SI-86.7
4 土師器 杯	口 径 13.1-14 高 残 5.1	外面体部は上位に軽いヘラナデ、下位にヨコヘラズリ。外面口縁部～内面全面にヨコナデ。	7.5YR7/6 暗 やや緻密 赤黒細砂多、白細 砂と赤黒細砂 少 やや軟質	口 1/12 周
5 土師器 甕・ 甕か	口 径 12.6 高 残 6.0	胴部は外面に斜紋と内面に横溝のヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・赤黒・細砂 やや多、黒・透明細砂少 軟質	SI-84 と 86 の重複部分 および SI-84 口 1/4 周 SI-84、SI-86
6 土師器 甕	高 残 8.3 最大 径 17.6	外面は胴部ヨコヘラナデ後に胴部ヨコヘラズリ。外面胴部ナメナデ。内面は胴部と頸部にヨコヘラズリ。7 と同一個体の可能性あり。	5YR6/6 暗 やや粗い 灰色微多、赤・ 黒・白・灰黒細・細砂と赤 多、黒・透明細砂少 硬質	注記 SI-86 が多いが、 レベルから見て SI-84 の床付近出土 第 5/12 周 SI-84、SI-86.6

第10章 権現山遺跡 SG1区

7 土師器 甕	高 残 2.2 底 残 6.6	外面は中央が様々な方向ナデで凹み、外周に軽いナデ。外面傾面に斜～横位ヘラケズリ。内面に多方向ヘラケズリ。6と同一個体の可能性あり。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・灰色・透明 細粒～細砂や多、白・黒・透明 粗粒～細砂 やや軟質	SI 84と86の重畳部分 底1/2周 SI 84、SI 86
8 土師器 甕	口 残 15.2 底 残 15.0 最大 残 26.5	外面は肩部ヨコヘラケナデと胴部ヨコヘラケズリ。内面はヘラナデ後に横ミナデ休止部をナメヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。	10YR7/6 明黄褐色 やや粗い 白・灰色と赤 粗粒や多、白・黒・透明 粗粒～細砂 やや軟質	北東部床土 9cmと南 部床土 18cmの接合 口1/3周、底5/12周 4、5
9 土師器 小甕	高 残 5.5 最大 7.1	外面はおそらくロクロ右回転でカキメ後、胴部タテヘラケズリを左から右へ進行する。肩部のカキメは内側にナデで削れている。体部下端に横位の非回転ヘラケズリ。外表面は切らないでロクロから外して軽いナデ。内面は回転ヨコナデ。	5Y4/1 灰 やや粗密 白細粒少 硬質	注記はSI 86だが、レ ベルから見てSI 84 内の遺構土面付近 底1/2周、底5/12周 SI 86 4
10 土師器 碗	口 残 10.1 底 残 4.6 厚 1.7 最大 残 5.5	平皿に良く張ぎべりして細くなり、断面三角形の形状。表面四角面の狭い縦理に自然面を残す。裏面周で記入したやや強い凹状の痕跡がある。	2.5Y7/2 灰黄 細密で軟質の緑色黄灰質	SI 84の1片とSI 86 南部の2片が接合 両面平 SI 84、SI 86 12
11 土師器 碗	口 残 5.3 底 残 4.5 厚 1.9 最大 残 6.7	上下の小口端は使用しないで、表裏面と両側面の計4面を破面に使う。横断面が平行四辺形。外面はやや斜方向に使用し、断面状の傷が所々に残る。	2.5Y8/3 淡黄 細密で軟質の緑色黄灰質	中世のSI 296へ混入 (注記はSI 86) 完形 SI 86 10
12 土師器 碗	口 残 9.2 底 残 3.1 厚 1.6 最大 残 6.7	上下端面は使用しないで、表裏面と両側面の計4面を破面に使う。両側面は中央が弱く凹んで、それぞれ裏面の芝面などに分けて使われている。図の表面は使用度が高い。断面からあった凹点が下部を中心として広く残る。	2.5Y8/3 淡黄 細密で軟質の緑色黄灰質	中世のSI 296へ混入 (注記はSI 86) 完形 SI 86 9
13 土師器 模粒土甕	口 残 4.4 底 残 3.0 厚 2.1 最大 残 6.6	表面は割れている部分が多い。残存する表面には、図示の通り平行線状の植物葉状痕が残る。粘土中に草木植物の葉が入る状態が破面に見られる。破面で示した部分は、横断面図に示したように、やや深くまで葉が入り込んでいる。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・細粒少 軟質	模粒土 表面の大半が割裂 上カケラン
14 土師器 杯	口 残 11.3 底 残 9.1 最大 残 12.4	外面は体部ナデナデ後、底部に多方向と体部下平に横～斜位のヘラケズリ。内面は肩部ナデナデ。底部は多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部と外面肩部にヨコナデ。胴下半外面は黒泥。SI 86の遺物が混入？	2.5YR7/3 淡黄 やや粗い 白・透明細 粒や白小礫や多 やや軟質	北部床土 7cm 口1/6周、底全周 3
15 土師器 杯	口 残 13.8 底 残 4.7 最大 残 14.0	薄く軽い。体部の厚さは2～3mm。体部は内外面に不明瞭なヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。SI 86の遺物が混入？	10YR7/4 にぶい黄緑 やや粗密 白・黒・透明 粗粒や多、赤細粒 やや軟質	口1/8周
16 土師器 杯	口 残 10～12 底 残 5.9	外面中位ナデ後、下にヘラナデ。内面体部に横～斜位ヘラナデ。内外面の口～胴部にヨコナデ。SI 86の遺物が混入？	5YR6/8 橙 やや粗密 白・灰色～粗 粒多、灰色と黒細粒少 やや軟質	口1/12周
17 土師器 小甕	高 残 5.8 最大 残 9.9	仕上げが割れ。外面体部ナデ後、体部下平ヨコヘラケズリ。内面体部ナデ。内外面口縁部ナデ。外面体部口縁に縦理が深くあり込んでいる。粘土中に盛っていた粉がヘラケズリで現れたものと見られる。SI 86の遺物が混入？	7.5YR6/6 橙 やや粗密 白・黒・透明 粗粒～細砂や多、白細粒 やや軟質	北部床土 12cm 口1/3周 2
18 土師器 高杯	口 残 17.0 底 残 5.7	外面は杯底部～胴部をタテヘラケズリ後に杯底部外周と杯体部下位をヨコヘラケズリ。内外面の杯体部をヨコヘラケナデした後に口縁部ヨコナデ。口縁部外面に優存？。SI 86の遺物が混入？	5YR5/8 明赤褐色 やや粗密 白・黒・透明 粗粒や多、赤細粒少 やや軟質	注記はSI 86だがレ ベルからSI 84の床 付近 口1/8周、杯底1/3周 SI 86 6
19 土師器 高杯	高 残 7.2 最大 残 5.2	外面はタテヘラケズリ後に軽くヘラミギキ。内面はエビオサエ後に軽ミ。SI 86の遺物が混入？	5YR5/6 明赤褐色 やや粗密 赤粗粒～細 砂や多、白・黒・透明 粗粒少 硬質	北部床土 1cm 脚柱全周 1
20 土師器 高杯	口 残 4.3 底 残 4.9	外面は杯底部の外周ナデ後に内周を放射状・求心タテヘラケズリ。胴部タテヘラケズリ。杯内面は多方向ヘラナデ。脚内面は片断状態でタテナデ仕上げ。SI 86の遺物の可能性あり。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 灰色と白・赤 黒・透明粗粒や多 硬質	SI 84と86の重畳部分 脚柱全周 SI 84、SI 86
21 土師器 高杯	高 残 3.0	外面は脚部に縦位と杯底部～杯体部に横位のヘラケズリ後、杯体部に様々なタテヘラミギキ。杯内面は多方向の密なヘラミギキで、ターム状物質が付着。脚内面はユビナデ。SI 86の遺物が混入？	5YR7/6 橙 やや粗い 赤細粒多、黒・ 白細粒と黒・赤粗粒少 やや軟質	注記はSI 86だがレ ベルからSI 84出土 脚柱全周、杯底1/2周 SI 86 3
22 土師器 甕	口 残 14.0 底 残 4.2	外面傾面に斜位と横位のナデ後に、口縁部外面に粘土貼付して複合口縁状にする。口縁部内外面ヨコナデ後、胴部内面ヨコヘラケズリ。SI 86の遺物が混入？	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 黒・白・赤粗 粒や多 やや軟質	出土地不明の6片と 上部履取中の1片が 接合 口1/2周 上カケラン
23 土師器 杯	口 残 13.0 底 残 3.2 最大 残 13.7	外面は体部ナデナデまたはヨコヘラケナデの後、体部下平ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面全面にヨコナデ。現状で漆仕上げは認められない。古墳時代終末期の遺物が混入。	7.5YR7/6 橙 やや粗密 赤・透明・灰 色～細粒と黒・白細粒少 やや軟質	SI 84と86の重畳部分 口1/6周 SI 84、SI 86

SG1区 SI-85 (第237図、写真図版 86・130)

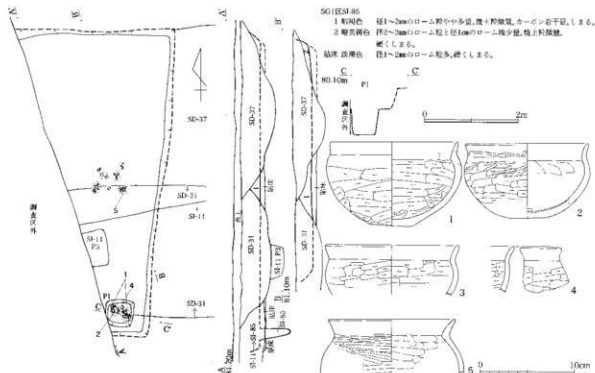
〔位置〕SG1区中央部の台地平坦面、25.0-13.5、25.5-13.5 グリッド。北東と東に古墳中期のSI-8・40がある。中央から西半部は調査区外。確認部分の大半が古代・中世のSD-31・37に、南東隅が古墳後期のSI-11に切られる。調査区西壁の土層断面図A-A'でSI-11の貼床の下層にSI-85の貯蔵穴が残っている。

〔規模と形状〕SD-31・37に大きく切られるが北壁と東壁中央がわずかに残り、SI-11に切れる南東隅で

は掘方底面の壁をかりうじて確認した。平面方形と推定され、中軸はN-10°-E。北壁の位置はあまり明確でない。平面図の北壁推定位置に、断面図A-A'ではSI-85の床や壁が見られないので、破線で記入した。この付近ではSI-85の床面がやや浅くてSD-37に壊されてしまったのであろうか。南北長は推定6.51m。東西長は不明だが、3.35m以上。確認できる部分では壁はほとんど残存しない。残存部分の床は平坦で、傾斜しない。調査区西壁の土層断面の検討結果から、貼床が存在した可能性を指摘できる。ただし確実ではない。床面からの深さは10～12cm程度かと想定される。貯蔵穴P1が南東隅にあり、南西部上端が調査区外に出る。東西にやや長い方形で59×53cm、確認面であるSI-11掘方底面からの深さは54cm。底面はほぼ平坦で、壁は直線的でわずかに外傾する。覆土の特徴は不明である。

〔火処〕火処は確認されなかった。

〔覆土とテフラ〕大部分を失うが、SD-31・37間で1層、北壁際で2層が確認できる。両層とも微量の焼土粒を含み、2層はローム塊も少し含む。



第237図 梅現山遺跡SG1区 SI-85 遺構・遺物

第126表 梅現山遺跡SG1区 SI-85 出土遺物

番号 種類 図解	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 保存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.5 高 8.8 底 4.4 最大 14.3	外面は口～頸部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。外底面に多方向ヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部にヨコヘラケズリ。口縁部ヨコヘラケズリ後ヨコナデ。外面は底部付近以外の全体に皮付着。	5YR5/8 明赤褐色 やや粗い 赤粗粒と赤・白 細粒多。黒・透明細粒少 やや破損	甕縁が直上10～14 cmが接合 口全周、底全周 1, 3
2 土師器 杯	口 13.0 高 7.9 底 3.7	外面は強い平底。外底面は磨滅しているがむしろヘラケズリ。外面口縁部ヨコナデと体部ヨコヘラケズリの後に口～頸部ヨコヘラミガキ。内面は体～底部にヘラナデ。口縁部ヨコナデ。	2.5Y7/3 黄褐色 やや粗い 白・赤粗～細粒 やや多。黒・透明細粒と 白粉少 やや破損	甕縁が直上2cm 口1/2周、底3/4周 2
3 土師器 杯	口 14.1 高 5.4	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面も体部ヨコヘラケズリで、口縁部ヨコナデとの先後は不明。	10YR6/1 灰褐色 やや破損 白・透明細粒 やや多。赤・黒細粒少 やや破損	詳細な出土状況が不明 口1/6周 出土不明
4 土師器 杯	口 11～14 高 4.9	口縁部の内外面にヨコナデ。外面は体部下段に縦～斜位ヘラナデ後、体部上段にヨコヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラケズリ。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや破損 赤・透明・灰色 粗～細粒と白・黒細粒少 やや破損	直床上 口1/2周 4
5 土師器 小形器	口 13.3 高 5.9 最大 15.1	外面は口～頸部ヨコナデ後に体部を密なヨコヘラミガキ。内面は口～頸部ヨコナデ後に体部を丁寧なヨコヘラナデ。外面全体が炭素を吸着して黒色になるが、意図的かどうかは不明。被熱赤化面は見られない。	2.5Y4/1 黄褐色 やや粗い 白・透明細粒 やや多。白粗粒と黒細粒少 やや破損	直床上～床土3cmが 接合 口5/12周 9, 10

【遺物および出土状況】ごく少ない。南東隅の貯蔵穴内と床面が残る東壁際中央で出土した。図化以外の土師器小破片 21 点 (185g) の内訳は杯 6 片 (38g)、高杯 12 片 (32g)、甕 3 片 (115g) である。杯は深手で内斜口縁の椀形杯。

SG1区 SI-86 (第238図、写真図版 86)

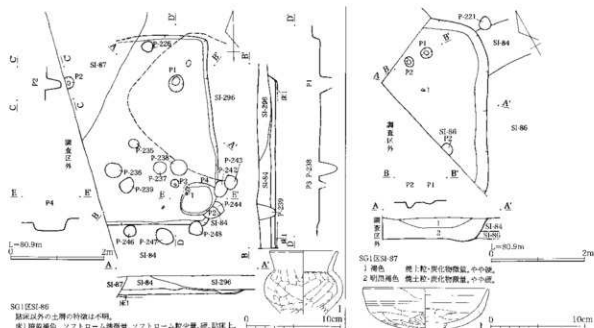
【位置】SG1区中央部の台地平坦面、24.0・13.5・14.0、24.5・13.5・14.0 グリッド。古墳中期の SI-12 は北へ 13m 離れる。南東の SI-179 や北の SI-14・71 など周囲の建物は後期。西半は調査区外。遺構上部全体を古墳中期の SI-84 に、北西部を後期の SI-87 に切れ、中央から東部を中世の SI-296 に切られる。SI-87 が SI-86 の掘方底面下まで破壊し、SI-86 の掘方も残っていない。覆土の大半と貼床上面は SI-84・296 により失われ、床と壁を確認できない。周辺にある P-226～248 のうち SI-86 との前後を土層断面で確認したのは P-239 だけだが、各ピットとも SI-86 を切る可能性が高い。なお、SI-84 から拡張したとは思われない (SI-84 の項で記述)。

【規模と形状】壁は残らないが、深い掘方から平面は方形に近いと推定され、中軸は N-0°-E。南北長 4.00m。東西長 2.36m 以上で、本来は南北長と同程度と思われる。壁は外傾し、残存高 0.06～0.16m。床面は SI-84 と中世竪穴 SI-296 で失われて不明。調査部分で見ると掘方は中央が浅く、壁際を溝状に深く掘り、確認できる深さは 2～4cm。床面からの深さはこれと同じか、あるいはやや深かったと思われる。ローム粒・塊を含む暗黄褐色土でほぼ全体を貼床する。主柱穴は 3 本 (P1～P3) と推定したが、重複しているピット群との明確な差異は見出せず、他のピットが本建物の柱穴となる可能性はある。本来は主柱穴 4 本と考えられるが、南西部の 1 本は調査区外で不明。P1 は径 35×32cm で深さ不明、P2 は径 24×18cm で深さは SI-87 床面から 34cm (SI-86 床面レベルから 42cm 程度)、P3 は径約 18cm で深さ不明。P1-P2 間 2.27m、P1-P3 間 2.19m。南東隅にある貯蔵穴 P4 は 74×65cm、床面から深さ 28cm の不整丸方形または楕円形で、壁は外傾し、覆土の特徴は不明である。

【火処】なし。

【覆土】SI-84 と SI-296 により失われた部分が多い。僅かに残った覆土の特徴も記録不備のため不明。

【遺物および出土状況】SI-86 に確実に伴う遺物はごく少ない。南東隅の貯蔵穴から出土した小形破片 (1)



第238図 権現山遺跡 SG1区 SI-86・87 遺構・遺物

がこの建物に伴うであろう。SI-86 出土として取り上げた砥石が 1 片あるが、同質の砥石片を複数出土した SI-84 の破片と接合したので、SI-84 の遺物として扱った。他に、この建物を切る古墳時代の SI-84・87 や中世の SI-296 出土遺物には、SI-86 の遺物が混入している可能性がある。特に古墳後期の SI-84 には中期中頃の土師器が混入するので、その可能性が高い（第 236 図 14～22）。

第 127 表 権現山遺跡 SG1 区 SI-86 出土遺物

番号 種類 図種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 小形壺	口 径 7.2 高 径 6.7 底 径 8.3	体部内外面に丁寧なナデ。外面体部下端へラケズリ。口縁部内外面ヨコナデ。	5YR6/6 緑 やや緻密 白・透明感～細 粒と黒・赤褐色少 やや硬質	形成が底土 11cm 口 5/12 割 11

SG1 区 SI-87（第 238 図、写真図版 86）

【位置】SG1 区中央部の台地平坦面、24.0-13.5、24.5-13.5 グリッド。古墳後期の SI-14・71・179 が北 2～3m と南東 4m にある。東側には中世の竪穴遺構 SI-296 とピット群 P-221・226 などが近接する。古墳中期の SI-84・86 を切る。東側にあるピット群が本建物にも重複していた可能性はあるが、確認されていない。西半は調査区外。

【規模と形状】調査区外部分が多いため不明確だが、方形に近い平面と推定され、中軸は N-27°-E。調査時には性格不明遺構としたが、平面形・底面の状況・遺物から竪穴建物の可能性が高いと判断した。調査部分の計測値から、東西長 3.69m 以上、南北長 2.25m 以上。壁は外傾し、残存高 0.47m。床面は東壁際にやや低い部分があるがおおむね平坦で、傾斜もない。貼床はなく、調査部分全面がロームをそのまま床面としている。調査部分北寄りに P1 と P2 があるが、本建物に伴うかどうかは不確実で、後世のピット群に含まれる可能性もある。P1 は径 22×20×深さ 5cm、P2 は径 25×24×深さ 14cm。

【火処】なし。

【覆土】1・2 層ともに焼土と炭を含む。

【遺物および出土状況】ごくわずかである。図示した古墳終末期の土師器杯 1 点が、調査部分の中央で床から 17cm 浮いていた。これ以外の遺物は東壁際の土師器甕 2 片（154g）しかない。

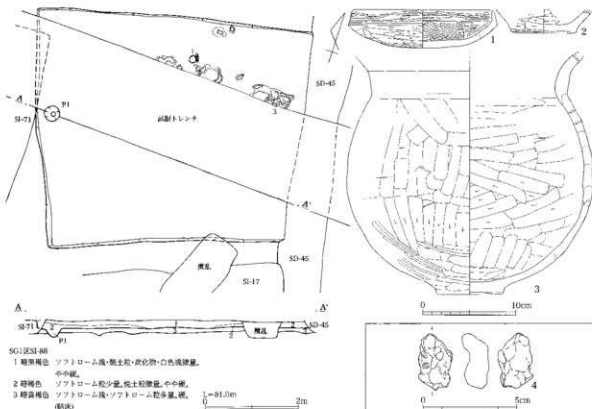
第 128 表 権現山遺跡 SG1 区 SI-87 出土遺物

番号 種類 図種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 13.2 高 径 4.3	外面の口へ体部端に残る細い段あり。外面は体部上位ナデ後に下位を多方向へラケズリ。内面は体部下位に多方向へラケナデ後、内面全体をヨコナデ。内面全面と外面口縁部の一部に塗仕上げ。	7.5YR6/4 に近い白 やや緻密 赤・白・透明感 粘微 やや硬質	床土 17cm 口 1/5 割 1

SG1 区 SI-88（第 239 図、写真図版 86・87・130）

【位置】SG1 区中央部の台地平坦面、24.5-14.0・14.5、25.0-14.0・14.5 グリッド。古墳後期の建物は西と南に SI-14・18 がある。北に中期の SI-12・13 と時期不明の SK-29 がある。古墳後期の SI-71 を北西部で切り、中世の SD-45 に東辺を切られる。中央の幅 2m は確認調査トレンチで掘方底付近まで失われて、北西部で重複する SI-71 との新旧関係を掴みにくいが、わずかに残る貼床の状況から判断した。南壁際は長方形攪乱坑が地山ローム層に達する。

【規模と形状】東西に長い長方形で、南北の中軸は N-18°-W。SG1 区の長方形建物は SI-6 などがある。南北長は 4.87m。東西長は SD-45 に切られて不明だが、5.56m 以上である。壁は外傾し、残存高 0.09～0.17m。掘方底面は細かい凹凸があり、床面からの深さは 8～14cm。ローム粒・塊の多い暗黄褐色の 3 層でほぼ全体を貼床する。主柱穴と推定されるものはない。径 33×深さ 19cm の P1 が西壁際中央付近にある。掘方底面の写真では他に窪みがあるが、現地調査時の所見では柱穴と認定できなかった。貯蔵穴は不明で、カマドとともに東壁際にあった可能性がある。



第239図 権現山遺跡 SG1区 SI-88 遺構・遺物

【火処】不明である。SD-45に破壊された東壁際にカマドがあった可能性がある。また、土師器杯(1)の南東に、被熱で床面が赤変した40×50cmの楕円形部分があるが、被熱の度合いは小さく、如とは考えにくい。

【覆土】自然埋没状で、焼土や炭を含む。

【遺物および出土状況】ごくわずかで、主に北半で出土した。古墳後期中葉の浅い土師器杯があり(1)、口縁部内外面までよく磨く点は少し古い要素。図化以外の土師器128片(614g)の内訳は杯28片(140g)、高杯2片(28g)、甕98片(446g)。高杯は短脚の脚部上半の破片である。明確な飯椀片はないが、甕片の中に含む可能性はある。焼粘土塊は図示以外に1点ある(2.8g)。

第129表 権現山遺跡 SG1区 SI-88 出土遺物

番号 種類 図種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 保存状態 注記
1 土師器 杯	口 14.8 高 4.1 最大 15.8 重 257	外面は底部に1方向の浅い、体部に傾位のヘラケズリ。内外面口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は底部に1方向と体部に傾位の密なヘラミガキ。内外全面に塗付上げ。	2.5Y4/1 黄灰 やや粗い 白・透明細～細 粒やや多、黒細粒少 やや軟質	床土1cmに正立 ほぼ定形 口11/12周 1
2 土師器 甕	高 残2.5 底 残6.8	外面の外面と外面体部にやや粗いヘラケズリ。内面の底部に多方向と体部に傾位のナデ。残存部の過半が被熱赤化。	7.5YR6/4 に近い やや粗い 白・透明細粒多 黒細粒と白・透明・灰色粗 粒少 やや軟質	底1/4周
3 土師器 甕	高 残25.4 底 残6.8 最大 残25.8	頸部破片が少なく、胴部の根元もないので、頸部の形と頸高は不確定要素を含む。外底面は外面を高くして円筒状にヘラケズリ。中央部1方向ヘラケズリ。内外面は胴部をヘラナデ後に胴部下位を削って他部分の厚さに揃えて、外面下位にナメヘラミガキ。内外面の胴部をヨコナデ。外面胴部下位は被熱していると思われ、更に被熱後の焼物と推定される。	10YR6/2 灰黄黒 粗い 白焼と白・赤・透明 粗～細粒やや多 やや軟質	北東部床土1～2cm が被熱 頸1/8周、底全周 2, 3
4 土師質 焼粘土塊	長 3.0 幅 2.8 厚 1.4 重 3.8	不定形に歪んだ粘土が焼成された状態。草木植物の茎または葉が内部に入り込んでいた痕と見られる細い凹が表面に点在する。付着物は見られない。SI-88で2点出土した焼粘土塊のうち大きい方の1点を図示した。	7.5YR8/0 浅黄褐色 細粒 赤粒～細粒やや少 軟質	定形

SG1区SI-89 (第240・241図、写真図版87・88・130)

【位置】SG1区北部、29.0-13.0、29.5-12.5・13.0グリッド。古墳後期の建物、SI-32が北東、SI-2・34・35が南東にある。北に中～後期のSI-126、西に中期の居館跡の外郭溝SD-95、南西に時期不明のSK-105、

東に中期のSI-33がある。北部で古墳中期(?)のSI-136を切り、古墳時代のSK-91・92・93や時期不明のSK-111に切られる。東半部を切るSK-128は、耳環を出した古墳後期の土坑または墓域である。

【規模と形状】東西にやや長い方形で中軸はN-9°-W。東西長6.38m、南北長5.96m。壁は外傾し、残存高0.11～0.19m。床面は緩い凹凸があり、傾斜はない。南西部の貼床上にローム塊主体の黄褐色土で堤状の高まりを作る。南に開く半円を2つ繋げた形で範囲は225×145cm、東側の半円形は160×140×幅32～42×高6cmで、内側は方形に近い92×100cmの平坦面になり、写真によると北東部に入口ピットが存在した可能性もある。西側の半円形は、東側の半円形の西に派生するやや低い高まりで、95×110×幅25～38×高さ3～5cmで、内側平坦面は26×70cmの楕円形。掘方底に細かい凹凸があり、床面からの深さは4～12cm。ローム粒・塊の多い暗黄褐色土でほぼ全体を貼床する。

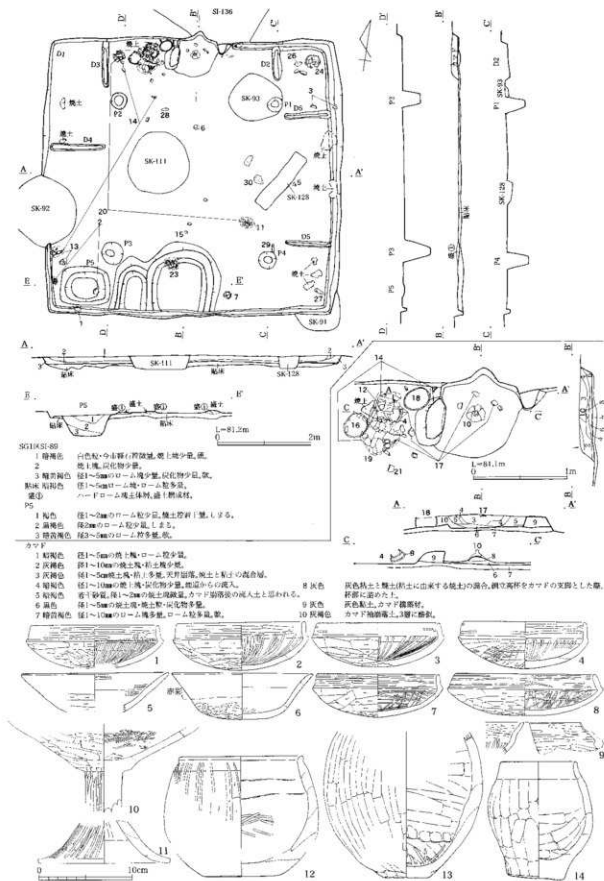
主柱穴はP1～P4の4本で、SK-93に上半を切られるP1は径33×30×深さ35cm(床面から深さ42cm)、P2は径35×33×深さ39cm、P3は径48×45×深さ57cm、P4は径38×36×深さ46cm。南側のP3・4が北側よりやや大きく深い。柱間はP1-P4間3.29m、P2-P3間3.23m、P2-P1間3.30m、P3-P4間3.34mで、建物平面形と同じく東西にわずかに長い方形配置。確実な補助柱穴は記録されていない。掘方写真を観察すると、P1とP4、P2とP3の中間付近から少し床面中央に寄った位置がそれぞれ凹むので、ここに補助柱穴が存在していた可能性もある。確実な入口ピットはない。掘方写真を観察すると、南壁際中央にある堤状の高まりに囲まれた部分に、柱穴状の凹みが存在していた可能性もある。北西部以外を全周する壁溝D1は断面逆台形で幅11～20cm、床面から深さ2～11cm。間仕切溝はD2～D6の計5本あり、掘方写真を見ると南西柱穴P3の北西にも存在した疑いがある。D3は掘方底面で、それ以外は床面で確認した。D4以外は主柱穴に付随し、D2・D5・D6は壁溝、D3は壁に接する。D4は壁との間にわずかに隙間がある。断面「U」字状が多く、長さ70～115×幅12～20cm、床面から深さ5～10cm。南西隅にある貯蔵穴P5は107×78×床面から深さ46cmの隅丸長方形で、ほぼ平坦な底から壁が大きく外傾したのち、緩傾斜で床に至る幅8～12cmの部分が床面下12～17cmの全周にあり、緩斜面より内側は85×62cm。貯蔵穴下層にローム粒が多い。

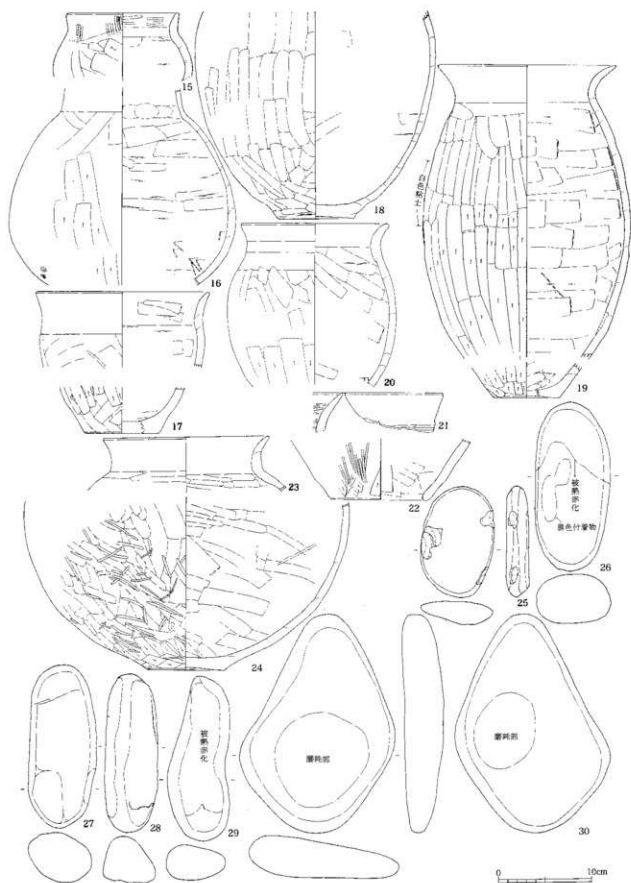
【カマド】北壁中央にある。天井部は崩れ、袖が確認できない部分も多い。両袖幅137cm、煙道先端から焚口まで95cm。貼床の7層上に9層の灰色粘土で袖を作る。火床は6層をほぼ平坦にし、焼土塊と炭が多い。中央には、粘土上に棒状脚の高杯を逆位に置き支脚とする。燃焼部には、煙道から流入した4層、焼土化が著しい天井が崩れた灰褐色土の2・3層が堆積する。煙道は北壁を約40cm「V」字状に掘り、火床面から続く6層を壁立ち上りに貼る。西袖の基部が壊れた部分に土師器片や崩壊した粘土が見られた。この部分のすぐ西側に18の胴部が正立し、さらに西の床面に16の壺胴部上半が倒立していた。

【覆土】覆土3層は軟質で1層が硬い。3層上の壁際に堆積する2層は多量の焼土塊層で、特に焼土が集中する部分を図示した。1層は焼土塊少量のほか微量の白色土粒も含むが、火山灰かどうかは確認できていない。

【遺物出土状況】遺物が比較的多く全域で出土した。北東隅に大形壺がある(24)。カマド西側に土師器が多い。そのうち18は喪胴部が床面に正立、壺16は床面に倒立していた。2枚重ねた上向きの杯もある(4と8)。10は支脚に転用した高杯。

【出土遺物】杯類は漆仕上げが主体で、7と8は炭素吸着による内外面黒色処理。6は赤彩。杯1～3と喪17は白色や金色の雲母を含む茨城県産の製品で、SG1区SI-5などに例がある。4は胎土に骨針(白色針状物質)を含む可能性もある。小形鉢12は内面口縁部が磨耗し、小形甕などを受ける器や台に用いた可能性もある(岡田2003,p.92)。14は異形の鉢。15は漆仕上げの可能性もある。16は壺の器形だが、甕のように薄い。図化以外の土師器397片(3.229g)の内訳は杯69片(493g)、高杯31片(420g)、甕290片(2,024g)、壺2片(41g)、甕5片(251g)である。敲石(25)・磨石(26)・編物石(27～29)・台石(30)があり、





第241図 権現山遺跡 SG1 区 SI-89(2) 遺物

第10章 権現山遺跡 SG1 区

25は硬質のホルンフェルス。ホルンフェルス製磨石・砥石・礮石は、周辺でよくみられる(SG1区 SI-17など)。

図示以外に 22 × 13 × 8cm の被熱した自然礫 1 点と 4 ~ 7cm 大の粘板岩 2 片、陶器 1 片がある。

第130表 権現山遺跡 SG1 区 SI-89 出土遺物

番号 種類 品名	大きさ (m/g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 保存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 13.6 高 4.6 最大 径 14.6	外面は底部に斜～横位のヘラケズリ。内面底部に密な放射状ヘラミガキ。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外全面に漆仕上げを施し、外面の底近くと体部外周は使用によると見られる磨減・割傷が目立つ。変域城域産。	10YR6/4 にぶい黄褐色。白雲母細片多、金色雲母細片多、やや軟質	南西側床直上 [1]1/3 周 45
2 土師器 杯	口 径 13.6 高 5.0 最大 径 14.3	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。口縁部内外面ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部ナデ後放射状ヘラミガキ。変域城域産。	10YR6/3 にぶい黄褐色。白雲母細片多、やや軟質 白・金色雲母細片多	南西側床直上 1cm と野 蔵/底上 1.4cm が接合 底 1/2 周 44, 46
3 土師器 杯	口 径 12.9 高 4.6 最大 径 14.0	外面体部ヨコヘラケズリ。内面体部に放射状ヘラミガキ。口縁部はヨコナデ後に内外面ともに磨減なヘラミガキを行う可能性があるが、残存数が少ないので不確実。内外全面を漆仕上げ。変域城域産。	10YR7/3 にぶい黄褐色。白雲母細片多、金色雲母細片と白・黒・赤細片少 やや軟質	北東部床直上 4 ~ 5cm [1]1/12 周、体 1/4 周 6, 7
4 土師器 杯	口 径 13.0 高 4.9 最大 径 13.7	外面は底部に多方向ヘラケズリ。体部はヨコヘラケズリ後に磨減なナメヘラミガキ。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部は放射状ヘラミガキ。内面全面と外面の大半に漆仕上げ。磨減は強くないので不確実。	10YR7/3 にぶい黄褐色。白・黒微粒と青針(?) 少 軟質	カマド西床直上 7cm (2 枚重なる下側) [1]1/2 周 12
5 土師器 杯	口 径 15.6 高 3.9	外面は口縁部ヨコナデ後、体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコナデ後ヨコヘラミガキと思われるが、磨減して不明瞭。赤彩はない。高杯の可能性もある。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤褐色～細粒多、白・黒・透明細粒少 やや軟質	東部床直上 9cm [1]1/6 周 8
6 土師器 杯	口 径 15.0 高 4.9	内外面口縁部ヨコナデ後、外面は底部に多方向と体部に横～斜位のヘラケズリ。内面底部はナデで。放射状ヘラミガキの可能性もあるが不確実。外面上半と内面全面を赤彩。	2.5YR6/6 橙 やや粗い 赤褐色～細粒多、白・透明細粒～細粒やや多、黒細粒少 やや軟質	北部床直上 2cm [1]3/3 周 10
7 土師器 杯	口 径 12.8 高 4.5 最大 径 13.7	外面は底部に 1 方向の後、体部に横位のヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に斜～横位のヘラミガキ。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外全面に炭素着色の黒色処理。	2.5YR2/1 黒 白・透明細粒～細粒やや多、白細粒少 やや軟質	南部床直上 2cm [1]3/4 周 40
8 土師器 杯	口 径 14.8 高 4.3 最大 径 16.4	外面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。口縁部は内外面にヨコナデ後、外面ヨコヘラミガキ。内面は横～斜位ヘラミガキ。内面体部は多方向の後に横位のヘラミガキ。内外全面に炭素着色の黒色処理。	7.5YR3/1 黒 やや粗い 白・透明細粒～細粒少 やや軟質	カマド西床直上 6cm (2 枚重なる下側) [1]1/2 周 28
9 土師器 杯	口 径 16 ~ 18 高 3.3	口～体部間は内外面ともに炭が不明瞭な縦い段。外面は体部ナデ(?) と口縁部ヨコナデ後に全体をヨコヘラミガキ。内面は体部に放射状と口縁部に横位のヘラミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐色 赤褐色～細粒少 やや軟質	口 1/12 周
10 土師器 高杯	高 径 9.5 最大 径 20	外面は杯底部分に放射状ヘラケズリ。杯体部はヨコヘラケズリ、脚部タテヘラケズリ後タテヘラミガキ。杯部の内面は下位にヘラナデ、体部はヨコヘラミガキ。脚部は中実で、やや粗粒と見られる。	2.5YR6/8 明赤褐色 やや粗い 白・透明細粒と赤細粒多、赤細粒少 やや軟質	大穴直上で支脚に使用 脚部全周 53
11 土師器 高杯	高 径 4.5 脚部 径 14.0	脚部外面は外面にナデ後タテヘラケズリ。内面にヨコヘラナデ。脚部内外面のヨコナデ後、脚部外面にやや磨減なタテヘラミガキ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤褐色～細粒やや多、白・黒・透明細粒少 やや軟質	南東部床直上 3cm 脚部 3/4 周 9, 一括
12 土師器 鉢	口 径 13.0 高 径 約 13 底 径 約 8	全体が磨減して面割が不明瞭。底部断面を体部に接合できないので器高は想定。外面は体～底部ヘラケズリ後に口縁部ヨコナデ、体部タテヘラミガキ。内面はヨコナデで、上半は粘土の積み上げ痕を残し、下半は横～斜位ヘラミガキ。内面口縁部上端の磨減が目立つので、器口部の用途にも使っていた可能性がある。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤褐色～細粒多、白・黒・透明微粒少 軟質	カマド西床直上 5cm [5]1/12 周、底 1/4 周 11
13 土師器 鉢	高 径 15.7 底 径 16.8	外面底部は強く割出気味で、外底面ナデ(?)。外面体部タテヘラナデ。内面は底部ナデ後に多方向の磨減なヘラミガキ。体部は粘土接合部に黒いコサエとそれより上に横～斜位のヘラナデ。熱熱がなく、胎土も磨減なので小形器ではない。	2.5YR5/6 明赤褐色 赤褐色～細粒やや多、赤細粒少	カマド西床直上 1 ~ 2cm が接合 底全周 42, 43
14 土師器 鉢	口 径 8.1 高 12.3 底 径 5.6 最大 径 10.9	外面底部は小さく多方向(?) のヘラナデ。体部は外面タテヘラナデ、内面ヨコヘラナデ。内外面の口縁部はヨコナデ。	5YR6/6 橙 微細 赤褐色～細粒多、白細粒と黒・透明微粒少 軟質	カマド西床直上 2 ~ 8cm [4]7/8 周、底全周 11, 13, 20, 22, 24, 25, 26, 42, 49, 一括 カマド西
15 土師器 壺	口 径 12.0 高 径 7.2 最大 径 14.8	体部に外面に斜～縦位ヘラケズリ。内面ヨコナデまたはヨコヘラナデ。口縁部の内外面が濃褐色で漆仕上げの可能性あり。	5YR7/6 橙 微細 赤褐色～細粒やや多、白・黒細粒少 やや軟質	南部床直上 [1]3/3 周 41, 一括
16 土師器 壺	高 径 20.7 最大 径 25.4	器形は壺状で薄く軽い点に壺に似る。頸～胴部間に強い稜あり。外面は胴部下位がタテヘラケズリで、少しハケメも残る。胴部上位にヘラナデ。内面胴部は下部に斜位と上部に横位のヘラナデ。頸部は内外面ともに縦～斜位のナデで、内面の頸下部はコビオサエ状。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・透明細粒～細粒やや多、黒細粒少 やや軟質	カマド西床直上 3cm に傾 倒 底全周 14, カマド
17 土師器 壺	口 径 18.2 高 径 13.0 底 径 8.0	頸部の外周が強い。胴部細片が不足して接合できない。胴部外面はヘラナデとタテヘラケズリ。胴部内面はヨコヘラナデ。口縁部はヨコナデが薄く、前脚部のヨコヘラナデで内面の一部に残す。黒雲母が金色に色づく。変域城域からの輸入品。	7.5YR6/6 橙 粗い 白・透明細粒～細粒と金色雲母細片多 やや軟質	床直上 6 ~ 8cm [5]2/12 周、底 1/4 周 13, 16, 17, 18, 51, 52, カマド
18 土師器 壺	高 径 22.0 底 径 8.0 最大 径 25.4	外底面は 1 方向ナデで、少し凹む。外面は胴部下位ヨコナデ。胴部は下方向のタテヘラケズリ。内面は 1 方向ナデ。外面と内面の両面にカマド固定用の白い粘土が薄く付着。底から高さ 1.3cm 位までが少し磨減する。	5YR4/6 赤褐色 粗い 白・透明細粒～細粒多 やや軟質	カマド西床直上 2cm 底全周 47

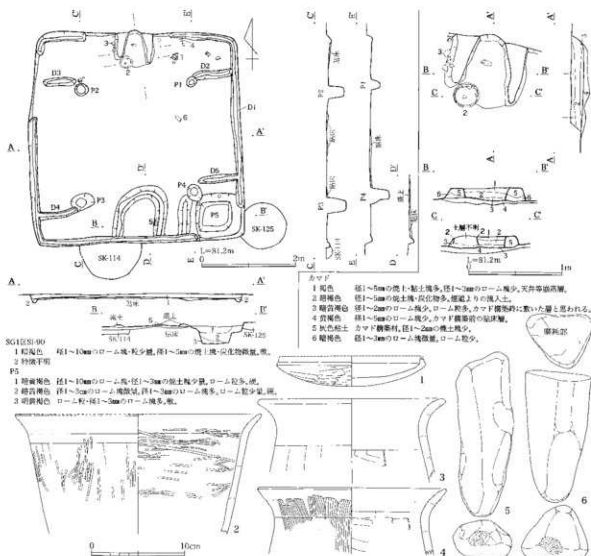
第3節 古墳時代の堅穴建物跡

19 土師器 甕	口 18.8 高 約35 底 6.7 最大 22.0	底から1.8～8cm付近に積み上げ土部あり。外底面は1方向ヘラケズリで凹む。外面側部はタテヘラケズリで後に中心以下タテヘラケズリ。内面は底部に多方向と側部に横位のヘラナデ。内外面の口へ端部にヨコナデ。側部外面にカマド固定用の白色粘土が少量残る。内外面の下平は黒味を帯びていて、焼熟化痕は不明。	10YR5/3 にぶい黄褐色 やや粗い 白・灰白色～黒 粘と赤・赤・透明～黒 粘多、黒粘粒少 やや軟質	カマド西床に6～7cmが接合 口11/12周、底3/4周 13
20 土師器 小形甕	口 15.6 高 17.3 最大 17.8	外面は体部下平が強く焼熟化して表面調整が不明瞭だが、ヘラケズリの可能性あり。体部上平はヘラナデで、口へ端部のヨコナデ後に少し追加して行く。内面は体部タテヘラナデの後に孔縁部ヨコナデ。内面にはっきりした調整時の汚れは見られない。	2.5YR5/6 明赤褐色 やや粗い 白・透明～黒 粘多、黒粘粒少 やや軟質	床土3～4cmが接合 口11/12周、底3/4周 9、15
21 土師器 甕	口 22～26 高 13.8	口縁部が内面に強く凹む。内面ヨコナデ後ヨコナデミガキ。外面ヨコナデ後、側部に縦ならヨコナデミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐色 赤褐色 赤粘 やや軟質	カマド西床に13cm 口1/8周、底3/4周 23
22 土師器 甕	高 16.5 底 9.8 口 8.8	外面は縦～横位ヘラケズリ後にタテヘラミガキ。内面は底部に縦～横位と孔縁部に横位のヘラナデまたは傾いたヘラケズリ。内面も削れているかもしれないが、表面全体が焼熟気味で不詳。	5YR6/6 赤 やや粗い 赤粘～黒粘 やや軟質	底1/6周
23 土師器 大形甕	口 17.5 高 5.9	側部の外面にナデまたはヘラナデ。内面にヘラナデ。口へ端部の内外面にヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐色 やや粗い 白・透明の硬少 粘と粘～黒粘多 やや軟質	南床土2cm 口3/4周 39
24 土師器 大形甕	高 17.8 底 8.3 最大 34.5	外底面は主に円筒方向のヘラケズリで凹ませる。外面側部タテヘラナデ後に側部タテヘラナデケズリ。外面全体に縦ならナデミガキ。内面は底部に多方向と側部に横～斜位のヘラナデ。焼熟痕や付着物は少ない。	10YR6/6 明黄褐色 やや粗い 白・透明～黒 粘多、透明粘と黒粘少 やや軟質	北東床土2cm 底全周 3
25 石器 磨石	長 11.7 幅 7.8 厚 2.6	楕円形で板状の自然石を利用。両縁部に割線あり。外側の側面を使用したと見られる。重量 350.6g。	7.5Y5/1 灰 やや粗理が発達した緻密で 硬質なホルンフェルス	完形
26 石器 磨石	長 17.8 幅 7.9 厚 3.2	自然の河原石で、加工痕や使用痕は見られない。表面全体が強く焼熟して赤色化し、両端には黒色の付着物が認められる。重量 1055.3g。	5Y6/1 灰 硬質でやや多孔質の火山岩	北東床土2cm 完形 34
27 石器 磨石	長 17.2 幅 7.3 厚 5.5	細長い自然の河原石をそのまま利用。加工痕や使用痕は見られない。表面全体が強く焼熟している可能性もあるが不明瞭。重量 1051.1g。	N5/(B) 灰 緻密でやや多孔質の火山岩	南東床直上 完形 38
28 石器 磨石	長 16.7 幅 5.6 厚 5.1	細長い自然の河原石をそのまま利用。加工痕や使用痕は見られない。表面全体がわずかに焼熟している可能性もある。重量 635.4g。	2.5Y6/2 灰黄 緻密で硬質な礫石	北東床土2cm 完形 30
29 石器 磨石	長 17.4 幅 6.7 厚 4.2	弱いS字状の自然の河原石をそのまま利用。加工痕や使用痕は見られない。全面が強く焼熟し、赤色化している。重量 588.8g。	10YR7/3 にぶい黄褐色 緻密で硬質な石灰岩	南東床土2cm 完形 37
30 石器 磨石	長 23.2 幅 16.4 厚 4.5	扁平な自然の河原石をそのまま利用。明確な凹面はない。両面の中央付近がやや平滑に磨耗する。重量 2223.4g。	N7/(B) 灰白 緻密で硬質な火山岩	東部床土3cm 完形 32

SG1区 SI-90 (第242図、写真図版88)

【位置】SG1区北部の30.0-13.0と30.5-13.0グリッドにあり、台地東端の建物群の北端部。南東に古墳後期のSI-32と古墳時代の円筒形土坑SK-57、南に中～後期のSI-126、西に中期の居跡跡がある。古墳時代の円筒形土坑SK-114の上部と、縄文時代のSK-125を南部で切る。

【規模と形状】西辺が東辺より約20cm長い方形で、中軸はN-2°-W。東西長4.50m、南北長4.48m。壁は外傾し、確認面が低いので残存高は0.09～0.18m。床面はほぼ平坦で傾斜しない。南壁際中央と貯蔵穴西側に、それぞれ半円状と直線状の高まりがある。半円状高まりは110×108cm(内側平坦面は62×80cm)で、幅20～30cm×高さ2～3cmの盛土を、ローム塊主体の黄褐色土で貼床土に作る。東側の直線状高まりは長84×幅25×高さ2cmほどである。主柱穴4本が囲む範囲と南壁際中央付近の床面が硬化していた。掘方底面は床面から深さ2～7cmで、壁際が深く、主柱穴が囲む範囲は浅い。ローム粒・塊が多い暗黄褐色土でほぼ全体を貼床する。主柱穴は4本(P1～P4)。P1は径29×26×深さ33cm、P2は径24×20×深さ31cm、P3は径38×30×深さ40cm、P4は径50×30×深さ43cm。北側のP1・P2より南側のP3・P4が大きく深い。柱間がおおむね等間隔の方形配置で、P1-P4間2.34m、P2-P3間2.41m、P2-P1間2.40m、P3-P4間2.31m。北壁中央のカマド周辺と西壁際北半を除き、壁溝D1が全周する。断面「U」字状で幅11～20cm、深さは床から2～10cm。間仕切溝4本(D2～D5)が主柱穴に付随し、D3以外は壁溝に繋がる。断面「U」字状で長70～85cm、幅15～19cm、床から深さ2～10cm、D3-D2間2.65m、D4-D5間2.05m。貯蔵穴P5は南東主柱穴と隅が重複し、西側に高まり、北側に間仕切溝がある方形区画内にある。南・東辺を壁下端と共有する形で97×94cm、床から深さ38cm。整った平底で、壁は垂直気味で、



第242図 権現山遺跡 SG1区 SI-90 遺構・遺物

第131表 権現山遺跡 SG1区 SI-90 出土遺物

番号 種類 図記	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 保存状態
1 土師器 杯	口 径 15 高 残 3.1 最大 径 15.7	外面は底部に1方向の、体部に横位のへうけズリ。内面体部は断面磨滅のため調整不詳。内外面の口縁部にヨコナデ。内外全面に炭素吸着の黒色処理。	2.5Y3/1 黒 やや粗い 白・透明細粒や やど、白輝少 やや破	北部床土10cm 残 1/18 周 6
2 土師器 甕	口 径 26.2 高 残 13.1	口~頸部境の縁は外面で鋭く、内面ではほとんど鈍なし。外面体部タテナデ後に内外面に細部ヨコナデ。胴部は外面に縦なタヘラミガキ、内面に断なヨコヘラミガキ。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・細粒や やど、黒・白細粒や やや破	カマド西端先端に倒 立 1/18 周 1
3 土師器 甕	口 径 20.0 高 残 8.9	胴部は外面にタテナデまたはタヘラナデ。内面にヨコヘラナデ。内外面の口~頸部にヨコナデ。	2.5Y7/3 浅黄 やや粗い 白・黒・透明 粒ややど、黒・白細粒 やや破	カマド西床土6cm 口 1/6 周 4, 8
4 土師器 甕	口 径 20.0 高 残 7.0	外面は胴部に7~8cm/2cmの粗いタヘハケ後、口~頸部のヨコナデが斜いのでハバミが口縁部近くまでよく残る。内面は胴部にヨコヘラナデ。内外面の口~頸部ヨコナデ。	2.5Y7/2 灰黄 やや粗い 白・白・黒・ 透明細粒ややど、赤 粒少 破	北部床土5cm 口 1/4 周 8
5 石製 磨石	長 17.1 幅 5.8 厚 4.4 重 622.2	細長い自然の河原石をそのまま利用。同の下部で磨打した痕跡が明瞭。	5Y5/1 灰 非常に緻密で硬質な砂質 岩。石英微晶と雲母多	土師器内床土3cm 残 12 形 12
6 石製 磨石	長 13.8 幅 7.0 厚 5.7 重 632.7	断面形が概ね三角形の自然の河原石で、同の上端は折れているが打撃により折った様子ではない。同の下部で磨打した痕跡が明瞭。同の上端の折れ面は3辺のうち1辺に沿って断面に磨耗している。	5Y7/2 灰白 緻密で硬質な石英質岩	東部床土2cm 一部欠 11

床面下 10～15cm で傾斜を緩くして床に至る。傾斜が変わる部分は 70×62cm の整った方形。覆土上層に焼土塊を少量含み、ローム粒・塊は 3 層に最も多い。

【カマド】北壁中央にある。天井や袖上半は崩れ、両袖幅 85cm、煙道から袖先端まで 70cm。暗褐色の 6 層と灰色粘土の 5 層で袖を貼床土に作る。袖内面は被熱赤変部が多い。火床はロームの多い暗黄褐色の 3 層を 3～4cm の厚さでほぼ平坦に貼床土に敷く。中央にある細長い折れた河原石が支脚であろう。甕をカマド西袖先端に倒立していた。焼土と炭の多い 2 層が煙道から燃焼部に流入した上に、天井の崩れた 1 層が堆積する。煙道は北壁を僅かに掘り、緩く上がる。

【覆土】覆土 1 層にローム塊を少量含む。壁溝内の 2 層は、土層断面図作成時に掘ってないので特徴が不詳。

【遺物および出土状況】遺物はごくわずかで主に壁際にあり、カマド周辺に最も多い。杯 (1) は炭素吸着で内外面黒色。甕 (2) をカマド西袖先端に倒立していた。外面を磨く甕は後期中葉的だが、杯が浅いので後期末と考えられる。甕 (4) は頸部ヨコナデ前のハケ調整がよく残る。敲石が 2 点ある。図化以外の土師器 93 片 (1,376g) の内訳は杯 8 片 (103g)、甕 43 片 (820g)、壺 33 片 (362g)、甕 9 片 (91g) で、高杯はない。また、被熱後に上端の折れた楕円形の自然礫がある (12.5×6.6×厚さ 4.8cm、重さ 613g)。

SG1 区 SI-126 (第 243 図、写真図版 88)

【位置】SG1 区北部、29.5-13.0、30.0-13.0 グリッド。居館跡北半の東側外郭溝 SD-95 から 2m 離れる。東・南・北に古墳後期の SI-32・89・90 があり、南東 2.5m に古墳中期の SI-33 がある。南部で古墳中期 (?) の SI-136 を切ると思われる。南西隅を含む建物中央の大部分が時期不明の SD-67 に切られる。西壁際には地山ローム層に達する擾乱が、北東隅は浅い溝状の擾乱がある。

【規模と形状】ほぼ方形と考えられ中軸は N-6°-W。東西長 5.66m、南北長 5.86m である。壁は 0.05～0.09m しか残存していない。残存部の床はほぼ平坦で傾斜しない。確認面が床面とほぼ同じなので、部分的に削られた可能性もある。掘方底面に細かな凹凸があり、床面からの深さは 3～5cm。北東隅などはロームをそのまま床面とし、その他の大部分はおそらくローム混じりの土で貼床をしていたと推定される。主柱穴 4 本 (P1～P4) のうち、P3・4 と P1 南側上半が SD-67 に切られる。P1 は径 37×33×深さ 62cm、P2 は径 33×29×深さ 45cm、P3 は径 23×21×深さ 45cm で床面から深さ約 70cm、P4 は径 27×25×深さ 33cm で床面から深さ約 56cm。径はほぼ同じで P1・3 が深い。柱間はほぼ同一で P1-P4 間 3.38m、P2-P3 間 3.30m、P2-P1 間 3.32m、P3-P4 間 3.37m。壁溝 D1 が残存部の壁際を全周する。断面が開いた「U」字状の部分が長く、幅 13～26cm、床面から深さ 8～12cm。北西部の掘方底で確認した D2 は主柱穴 P2 と壁溝を結ぶ断面「U」字状の間仕切溝で、幅 13～14cm、深さは掘方底面から 8～12cm、床面から 13～14cm。北東隅にある貯蔵穴 P5 は 98×65×床面から深さ 19cm の長方形で、平底で壁が直線的に外傾する。

【火処】確認できていないが、SD-67 に切られる部分にカマドか炉があったと推定される。

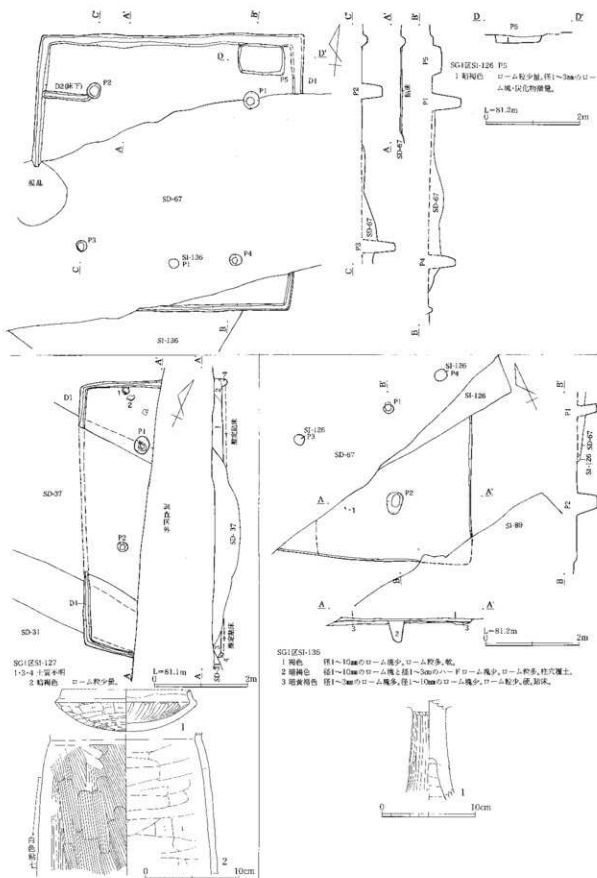
【覆土】特徴は不明である。

【遺物および出土状況】出土遺物はない。

SG1 区 SI-127 (第 243 図、写真図版 89・130)

【位置】SG1 区中央部の台地平坦面、25.5-14.0、25.5-14.5 グリッド。古墳中～後期の SI-10 が北西に近接し、南西と西に古墳中期の SI-13・40 がある。東側の北関東自動車道路調査 A 区で SI-168 として全体が調査されている (谷中・大島 2001)。建物の大部分が古代・中世の SD-31・37 に切れ、南西隅と北西隅が残る。

【規模と形状】西辺しか確認できないが、方形かそれに近い形と推定され、中軸は N-25°-W。南北長 5.83m で、東西長は 5.85m (A 区)。壁は垂直気味で残存高 0.12～0.27m。残存部の床は平坦で傾斜しない。掘



第243図 権現山遺跡 SG1区 SI-126・127・136 遺構・遺物

方は床から深さ5～8cmで底面に細かな凹凸がある。残存部全体を貼床するが、貼床土の詳細は不明。P1が主柱穴4本中の1本で、径38×31cm、深さは床面から55cm。SD-37底面にある用途不明のP2が本建物に確実に伴うとは言えないが、SD-37底面に類似する掘り込みがないので、本建物のビットの可能性はある。径23×20cm、深さは床面から約45cm。残存部の壁際を全周する壁溝D1は断面「U」字状で幅10～15cm、床面から深さ4～10cm。貯蔵穴はA区で北東隅に1箇所確認されている。

【カマド】北関東自動車道路調査A区で北壁にカマドが確認された。図示した土師器長胴甕は、外面に白色粘土が残るのでカマドで使ったと考えられる。

【覆土】1～4層の自然埋没状で、土質の詳細は不明。

【遺物出土状況】極めて少なく、北西部の土師器片や柱穴P1内の礫程度である。北壁付近で床面から6cm浮いて杯(1)が正立する。東側の大きい礫がP1底から38cm浮き、西側の小さな礫は44cm浮いていた。

【出土遺物】1は残存度が高い後期後葉の杯。2はハケ調整裏でカマド固定用の白色粘土が付く。図化以外の土師器小片は杯6片(38g)と甕13片(220g)で計19片(258g)。P1出土の礫は2点ともに一部を欠く。東側の大きい礫は表面に煤が付着して被熱痕がある珒岩で長11.9cm・1.280g。西側の礫は流紋岩で長8.8cm・298g。

第132表 梅山遺跡SG1区 SI-127 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 残存状態 目録
1 土師器 杯	口 13.6 高 現 4.5 最大 15.0 重 現 289	外面は底面に1方向の残に体部に横位のヘラケズリ。内面体部に密な放射状ヘラミギナ。内外面口縁部コナデ。外面上半と内面口縁部に塗仕上げ。	5YR4/6 赤褐 やや粗い。白・黒・透明顆 ～細粒やや多。 研質	床土6cmで正立 口5/6現、体11/12 現1
2 土師器 甕	高 現 15.0 最大 現 19.2	外面は8本/2mmの粗いタテハケを下から上へ施した後に頸部コナデ。内面は一部タテヘラケズリを残し、胴部コナデ後に頸部コナデ。外面の肩部以下に白色粘土付着。	7.5YR6/6 暗 粗い。透明・白・灰色硬～ 粗粒と白・黒・透明細～微 粒多。やや軟質	床土出土 胴1/6現、頸1/8現 床土4

SG1区 SI-136 (第243図、写真図版89)

【位置】SG1区北部、29.5-12.5・13.0グリッドで、中期の居館跡の外郭溝SD-95から2.5m東側。東4mに古墳中期の鍛冶遺構SI-33がある。東と北にあるSI-32・34・90は古墳後期。南隅が後期初頭のSI-89に切られ、北半の大部分が中～後期のSI-126と時期不明の溝SD-67に切られると考えられる。

【規模と形状】確認した主柱穴2本を結ぶ方向の中軸はN-25°-E。南北方向の残存長は3.22mで、南壁・P2間と北壁・P1間の距離が同様と仮定すると、推定長約4.6m。図や写真では南壁がSD-67までまっすぐ伸び、東西方向の残存長4.11m。しかし、主柱穴2本との関係や写真を検討すると図の破線部分が西壁の可能性もある。その場合は長方形建物で短辺の東西長は3.26mになる。長方形建物は、SG1区ではSI-6などがある。確認面が低かったためか壁の残存高は0.05～0.06mで、短く外傾する。残存する床面はほぼ平坦で、傾斜しない。掘方底は細かな凹凸があり、床から深さ3～10cm。床面確認部の北東端(SI-136東辺の中央と推定される東壁際付近)はほとんど貼床せずロームのまま床にする。ここ以外はローム粒・塊を含む暗黄褐色の3層で貼床する。

主柱穴と推定されるものはP1・P2の2本。上半をSD-67に切られるP1は、当初はSI-126の柱穴と考えたが、建物形状などの検討から本建物の主柱穴の可能性が高いと考えた。深さはほぼ同様で、P1は径23×21×深さ21cm、床面からの深さは推定41cm、P2は径46×30×深さ44cm。柱間は1.98mである。

【火処】なし。

【覆土】単層である。

【遺物および出土状況】遺物は極めて少なく、土師器4点のみである。図示した後期前葉の土師器高杯脚は本建物に伴うかどうか疑問が残る、重複するSI-126から混入した可能性もある。図化以外の土師器3片(25g)は模倣杯体部1片(5g)、高杯脚部1片(13g)、甕(?)口縁部1片(7g)で、建物の時期を決めにくい。古墳後期初頭のSI-89よりは古いと考えられる。

第133表 権現山遺跡 SG1 区 SI-136 出土遺物

番号 種類 図号	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 保存状態 注記
土師器 高杯	高 残 10.6 底 残 5.0	外面は上から下方向へタテヘラズリの後に密なタテヘラミガキ。胴上端付近にはヨコヘラミガキも見られる。胴内面はほとんど残っていないが、密に磨いていたと思われる。出土状況の図面・写真に見る遺物と形状が違うので、SI-136で出土したものの複製もある。	25Y4/6 赤褐色 やや粗い 赤褐色 白・黒・透明釉→細粒や中粒 多・硬質	床面上 跡付全周 3

SG1 区 SI-174 (第244・245図、写真図版89・90・130)

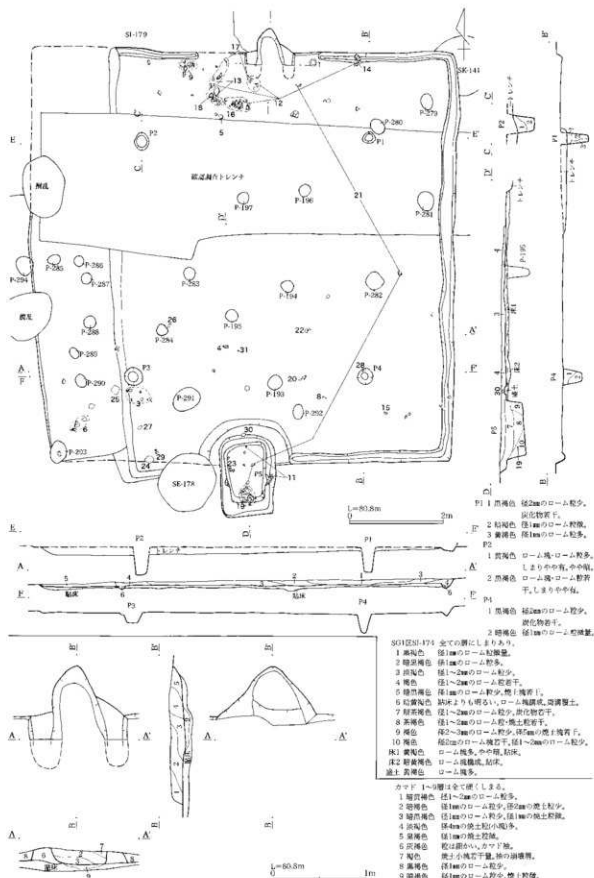
【位置】SG1 区中央部の台地平坦面、23.5-14.0・14.5、24.0-14.0・14.5 グリッド。古墳後期の SI-18・62 が北東と南東にある。南・東側に SK-140・166 をはじめ時期不明土坑が集中し、古墳時代の円筒形土坑 SK-145～150b も含む。西端の約 1/4 は、現地調査時には別の建物（旧名称 SI-180）と考えたが、この部分は SI-174 に含まれる。SI-174 と「SI-180」の遺物接合状況や建物内施設から 1 軒の建物と判断した。北西隅で後期前葉の SI-179 を切り、南壁西部と北東隅が時期不明の SE-178・SK-141 に切られる。中央部北半が東西方向の確認調査トレンチで掘方底面まで失われる。西壁には地山ローム層に達する攪乱が 2 箇所ある。SI-174 が SI-179 を切ることは、東西方向の土層断面で確認したが、断面観察位置が不明確なので、その図の掲載は断念した。

SI-174 と重複するピットが計 21 基あり (P-193～197・279～294)、SI-174 とは無関係のピット群として扱う。このうち SI-174 の床面で確認した P-193～195・282・283 は、SI-174 に伴う支柱穴の可能性も皆無ではないが、配置が不規則なので後世の遺構と判断した。P-195 の上部を土層断面で確認できなかった理由はよくわからない。SI-174 北部の確認調査トレンチ底面で確認した P-196・197・281 は、SI-174 との前後関係が不明である。残りの 13 基 (279・280・284～294) は現地調査時に遺構と認定していない穴を航空写真測量図から拾ったもので、時期の新しい攪乱を含む可能性がある。SI-179 と重複する北西部にも同様のピットがある。

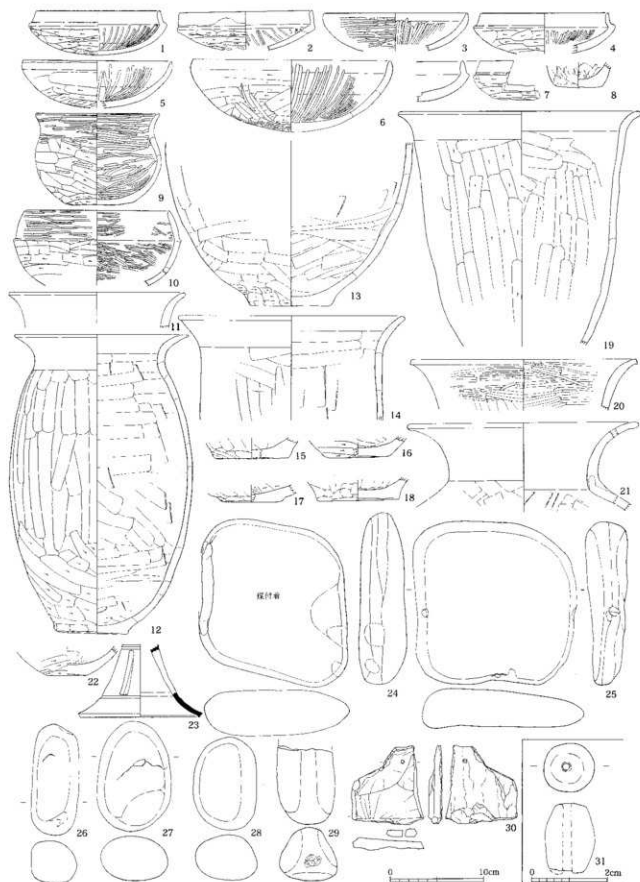
【規模と形状】方形で中軸は N-O⁺-W。東西長 9.14m、南北長 8.84m。壁は外傾し、残存高 0.04～0.20m。確認面が低い西壁が確認できない部分がある。床面は緩い凹凸があるがほぼ平坦で、北側がわずかに高く、比高約 5cm である。掘方底面は細かな凹凸があり、床から深さ 3～11cm。ローム粒・塊が多い 14・15 層でほぼ全体を貼床する。

支柱穴は P1～P4 で、P1・P2 上半が確認調査トレンチに切られる。P1 は径 28×25×深さ 46cm (床面からは推定 58cm)、P2 は径 38×30×深さ 46cm (床面からは推定 58cm)、P3 は径 39×37×深さ 22cm、P4 は径 37×32×深さ 40cm。径はほぼ同じだが、北側より南側はやや浅く、P3 は特に浅い。柱間は P1-P2 間 4.80m、P3-P4 間 4.90m、P1-P4 間 5.04m、P2-P3 間 4.98m でほぼ方形配置。このほか、竪穴内に 21 基のピットがあるが (P-193～197・279～294)、SI-174 と SI-179 周辺の各ピットがこの 2 棟と関連する可能性は低く、別のピット群として扱う。南壁中央にある張出ピット P5 は 118×90cm の長方形で、東西両壁の南部を半円形に掘り込む。方形張出部は南壁から南端まで 105cm、幅 105～115cm。ピットに向かってやや傾く周囲の平坦面からの深さは 43cm で、平坦面の高いところは床面とほぼ同じ高さである。ピットは平底で北端より南端が約 10cm 深く、壁は直線的。北側の床面に堤状の盛土を貼床と一連の工程で作成、その範囲は 198×97cm、幅 40～45cm、高さ 2～5cm。張出ピットは SG1 区 SI-2 などにある。

東壁際と南北両壁東半にある壁溝は幅 19～30×深さ 2～13cm の断面「U」字状で、本来は全周すると推定されるが西半では確認できなかった。西壁と平行して内側へ約 1.6m 離れた位置にある南北方向の溝は、西壁から離れ、支柱穴 P3 に重なるので、SI-174 の西壁溝とは考えにくい。東壁溝と同じローム質土が入る。SI-174 西部を拡張する時に埋め戻した古い壁溝かもしれないが、長方形竪穴の一边だけを拡張する例がないので、疑問が残る。調査時にはこの溝を SI-174 の西壁溝と認識し、その西側は先行する「SI-180」と考えたが、旧称「SI-180」は SI-174 の西端部と判断して統合した。



第244図 権現山遺跡SG1区 SI-174(1)遺構



第245図 権現山遺跡 SG1区 SI-174 (2) 遺物

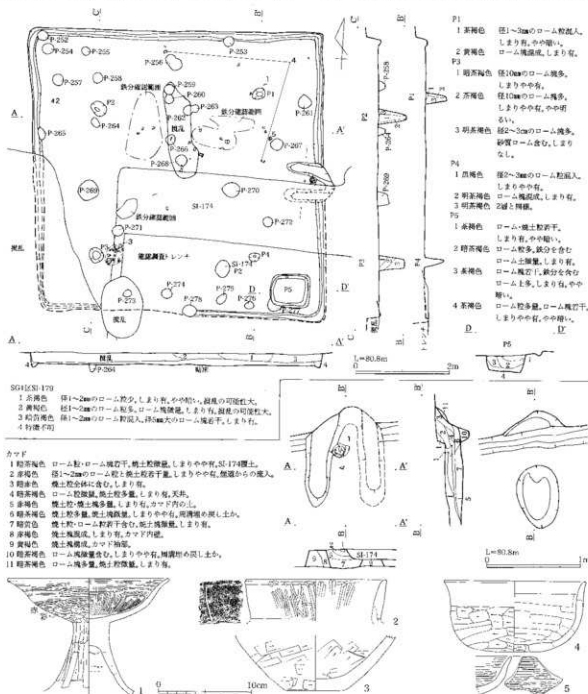
第10章 権現山遺跡 SG1区

12 土師器 甕	口 横 18.4 高 31.5 底 7.8 最大 底 10.4	外底面はやや上り坂で、その外周部を中心として円筒方向へラケズリ、中央は1方向へラケズリ。外周部はタテハラナデ後に下位をナメハラケズリ、内面ヨコハラナデ。内外面口縁部にココナデ。	10YR6/4 土に黄褐色 やや粗い 白・黒・透明細砂 や多・白・黒・透明細砂 やや硬質	床土1～7cmが埋合 口1/4周、底全周 38、41、43、48
13 土師器 甕	高 17.2 底 8.4 最大 底 25.6	外底面は多方向へラケズリ。外周部は中位に縦位と下位に横位のハラナデ。胴下位にヨコハラケズリ。内面は底部に多方向と縦位に横位のハラナデ。胴部下位の積み上げ体部分付近に横～斜位の強いハラナデ。外面全体がやや硬質。内面下位に少しだけ内れあり。	2.5Y7/6 明黄褐色 やや硬質 透明・白・黒・灰褐色 細砂・白粒多、赤・灰褐色少	カマド内側の床土7～9cmが埋合 底全周 40、41
14 土師器 甕	口 横 24.0 高 11.0	やや強い。外面は縦位に縦位と縦位に横～斜位のハラナデ。内面は縦位ヨコハラナデ。胴部ナデ。内外面の口縁部にココナデ。	5YR6/6 緑 やや粗い 白・赤・黒・透明細砂・白粒多、白粒少	北壁溝底土1cm 口1/4周 43
15 土師器 甕	高 2.2 底 7.8	外底面はおそらく多方向へラケズリ。外周部はナメハラナデと胴下端ナデ。内面は底部に多方向と縦位に斜位のハラナデ。外面が硬質赤化。	10YR6/4 土に黄褐色 やや粗い 白・黒・透明細砂・白粒多 硬質	南壁部の床土8cm 口1/4周 19
16 土師器 甕	高 2.1 底 6.4	外底面は多方向へラケズリでやや上り坂。外周部ヨコハラケズリ。外面底部に多方向へラケズリ。	10YR6/4 土に黄褐色 やや粗い 白・黒・透明細砂・白粒多 硬質	カマド南側の床土2cm 口1/4周 38
17 土師器 甕	高 1.9 底 6.4	外底面は円板状に突出し、底面多方向へラケズリ。胴部小片が7点あるが埋合できない。	5YR6/6 緑 やや硬質 黒・白・透明細砂・灰褐色・白粒多、赤・灰褐色少	カマド南側の床土5～7cmが埋合 底1/4周 41、48、カマド
18 土師器 甕	高 2.3 底 8.6	外底面は外周に粘土を薄く貼ってハラケズリで整え、やや上り坂にする。外周部下位はユビオサエナデ。内面底部は多方向へラケズリ。	10YR6/4 土に黄褐色 やや粗い 白・黒・透明細砂・白粒多 硬質	カマド内側の床土12cm 底全周 39
19 土師器 甕	口 横 25.8 高 24.8	外面は胴部タテハラナデ後に口～胴部ヨコナデ。内面は胴下位に横に横ならぬハラナデ調整を胴部で縦位。胴部で縦位に施して口縁部ヨコナデ。裏を作るのに用いる粗い粘土で作られている。	10YR2/4 土に黄褐色 粗い 白・黒・透明細砂・白粒多、白・灰褐色や多 硬質	引出口底土1cm 口1/4周 4
20 土師器 甕	口 横約 24 高 5.5	外面は胴部タテハラナデ後、口縁部をおそらくココナデしてから密なヨコハラミガキ。内面は胴部ヨコハラケズリと口縁部ヨコナデ後に全面を密なヨコハラミガキ。	10YR2/4 土に黄褐色 やや硬質 黒・白・透明細砂ややや やや硬質	カマド内側の床土1cmと西側 床土7cmと引出口 口1/4周 22、ハダシビット、SL-180.3
21 土師器 大形甕	口 横約 24 高 6.4	口縁部部の1片は埋合できない小片で、口縁部の長さや厚さは不確か。内外面の肩部に斜位のハラナデ後、口～胴部にココナデ。胴部は灰白色粘土で、肩部は褐色粘土で製作するので、その境界が明瞭（断面の破綻）。	5YR7/6 緑 やや粗い 白・黒・灰褐色 細砂多 やや硬質	引出口底土13～14cmが埋合、北壁部の床土2～3cmにも埋合あり 口1/24周、床1/6周 7、9、27、46
22 土師器 杯	高 3.1 底 4.3	外底面は1方向へラケズリでやや上り坂。外面は横～斜位へラケズリ。内面は多方向ナデ。古墳中期以降の遺物が混入。	2.5YR6/8 緑 やや粗い 透明・黒・赤・透明細砂 細砂や少 やや硬質	中央部床土3cm 底全周 28
23 須石器 高杯	胴 横 12.5 高 7.8	胴部外面は縦位に2条と下位に1条の凹線あり。二角二方通と鑑定されるが、上位の透眼は見つけない。内外面全体に10G2/1・緑黒の自然釉が付着。外面は黒色釉が強い。胴立状態でロウロ回転（時計回り）の可能性あり。	N7/（YR）灰白 硬質 白粒・黒粒・黒色濁粒 硬質	胴底穴土17cm 底1/2周、蓋1/12周 13
24 石 石 台石	長 18.1 幅 15.6 厚 5.1	図示した面のはうが裏面よりもわずかに凹み気味。ただし明確な横線や縦線は認められない。全面に釉が薄く付着する。硬質赤化は認められない。隣の左端部は、縦付の面に割れた破綻面で、人為的な割線というよりも破綻面と思われる。現存重量2205.2g。	2.5Y6/2 灰黄 硬質で硬質な表面	南西部床面 （一部） 31
25 石 石 台石	長 17.2 幅 17.4 厚 4.4	扁平な自然の河原石をそのまま利用。図示した面のはうが裏面に比べて平滑なので、おそらくこの面を作業に用いたと思われる。明確な横線や縦線は認められない。重量2175.5g。	5Y7/1 灰白 硬質でやや硬質な安山岩	西部床土4cm 底全周 SL180.4
26 石 石 胎石？	長 11.8 幅 5.0 厚 4.6	断面が隅丸方形で縦長自然の河原石をそのまま利用。加工痕や付着物は見られない。ごく弱く硬質しているかもしれないが不明確。重量439.5g。	2.5Y7/6 明黄褐色 硬質で硬質な石	南西部床土1cm 底全周 34
27 石 胎石？	長 11.6 幅 16.6 厚 17.8	丸縁のある自然の河原石をそのまま利用。図示した面の下平部はやや斜状に薄くなる。全体がやややや硬質気味なので磨石の可能性もある。重量586.1g。	2.5Y6/2 灰黄 硬質で硬質な花崗岩	南西部床面 （一部） 33
28 石 胎石？	長 9.8 幅 6.7 厚 4.9	丸縁のある自然の河原石をそのまま利用。全体がやややや硬質気味なので、磨石の可能性もある。重量468.5g。	N7/（G）灰白 わずかに多孔質気味でやや硬質な安山岩	床土37cm 底全周 35
29 石 胎石？	長 8.4 幅 6.1 厚 5.7	断面が隅丸三角形の細長い自然産物をそのまま利用し、小口面の中央に磨打痕あり。現存重量405.5g。	10Y6/1 灰 やや多孔質で硬質な石	南西部床面 （一部） 32
30 石 胎石？	長 8.2 幅 7.6 厚 9.2	不定形の磨石に片面から穿孔したもので、磨石は行わない。右側の面の中央部は磨石に当たった自然の凹凸が残り、図の上下方向に斜に磨石しているかもしれないが不明確。他の磨石面は磨石に当たった平坦な面による。全周の磨石面は表面材削片の剥離で形成。左側の面から穿孔し、右側の面に穿孔跡を引く。穿孔径3.55～3.60mm、穿孔深2.60～3.20mm。	7.5Y4/1 灰 硬質で磨石の発達した粘板岩	引出口底土1cmと床土2cm 底全周 2
31 土製品 甕	高 18.2mm 最大 13.3mm 底 2.96	側面中央にくぼく、横が浅く、横成面穿孔し、孔は図の上部で1.75mm、下部で2.00mm。表面に欠けがあるので磨いていると思われるが、ミガキの単位は不明確。表面を炭素炭着磨していると思われる。	2.5Y3/1 黒褐色 やや硬質 白粒多 やや硬質	中央部床土4cm （ほぼ） 1

SG1 区 SI-179 (第246図、写真図版90・130・131)

【位置】SG1 区中央部の台地平坦面、24.0-14.0 グリッド。古墳後期の SI-18 が北東にあり、北西に中期の SI-84・86 と終末期の SI-87 がある。南東部が古墳後期の SI-174 に切られ、南壁寄りには確認調査トレンチにも切られる。南西部の掘乱は地山ローム層に達する。SI-174 が SI-179 を切ることを東西方向の土層断面で確認したが、断面を観察した位置が明確でないで、その図を掲載することは断念した。

【規模と形状】掘乱などで南半の多くを失うが、部分的に残る掘方から方形と考えられ、中軸は N-4°-W。東西長 6.21m、南北長 6.26m。壁は外傾し、残存高は 0.09 ~ 0.31m。床面は緩い凹凸があるが、傾斜しない。掘方底面には細かな凹凸がある。不明部分も多いが、ローム粒・塊を含む黄褐色土でほぼ全体を貼床したと



推定される。

主柱穴は4本（P1～P4）。P4上半が確認調査トレンチとSI-174に切られる。P1は径27×24×深さ53cm、P2は径31×26×深さ61cm、P3は径30×25×深さ63cm、P4は径33×24×深さ49cmで床面からの深さは推定54cm。規模はほぼ同じで、西側のP2・3はやや深い。柱間はP1-P2間3.47m、P3-P4間3.36m、P1-P4間3.45m、P2-P3間3.06mで、東西間はほぼ同様だが、南北間はカマドの位置関係から東側が40cmほど広く、不整形配置である。

建物内と周辺には多数の時期不明ピットがある。床面で確認したものはなく、掘方底面で19本（P-252～269）、南東部のSI-174掘方底面で2本（P-270～272）、同じく南東部の確認調査トレンチ底面で6本（P-273～278）の計27本を確認した。貼床除去後に確認した壁溝が壁際を全周し、断面逆台形で幅12～22cm、掘方底面から深さ3～9cm（床面から推定8～14cm）。南東隅にある貯蔵穴P5は長方形で73×69×深さ39cm（トレンチとSI-174に上面を切られるので床面からの深さは推定約55cm）。底面東端がやや深い他はほぼ平底で、壁は直線的に外傾し、P5覆土の下層にロームが多い。

【カマド】東壁中央南部にある。天井が崩れ、右袖上方はSI-174で失われる。両袖幅84cm、煙道先端から袖先端まで104cm。粘土主体の9層で構築した袖の内側が熱で焼土化・赤変する。火床は床面と同じ高さで平坦。煙道は東壁の周溝を埋め、床上約10cmから壁外へ約20cm掘り、ロームの11層を貼って傾斜を整える。SI-174に破壊された南袖を構築した粘土が床下に続く範囲を平面図に破線で示した。1～5層が層状に燃焼部に堆積し、3～6層に焼土の混入が著しい。5層上面のレベルに倒立してある高杯は、被熱していないのでカマド廃絶後に置いた可能性がある。

【覆土】西半部の擾乱土との関係から、1・2層も擾乱されている可能性が高い。中央部北寄りでほぼ床直上に酸化鉄分と思われる明褐色土が集中する理由は不明で、鍛冶関連の痕跡や遺物も認められない。

【遺物出土状況】遺物は少ないがカマド周辺や中央部にあり、壁際で少ない。SI-179を切るSI-174の遺物が調査時に混入した可能性もある。小形甕（4）は破片の約半が重複するSI-174で出土した。高杯（1）はカマド内に倒立していた。

【出土遺物】1は杯部内外面赤彩。2は外面に刻線がある。4は鉢の器形で、焼成前に穿孔している。図化以外の土師器288片（1,997g）の内訳は杯44片（279g）、高杯10片（113g）、壺4片（43g）、甕230片（1,562g）。5は混入品の可能性がある。

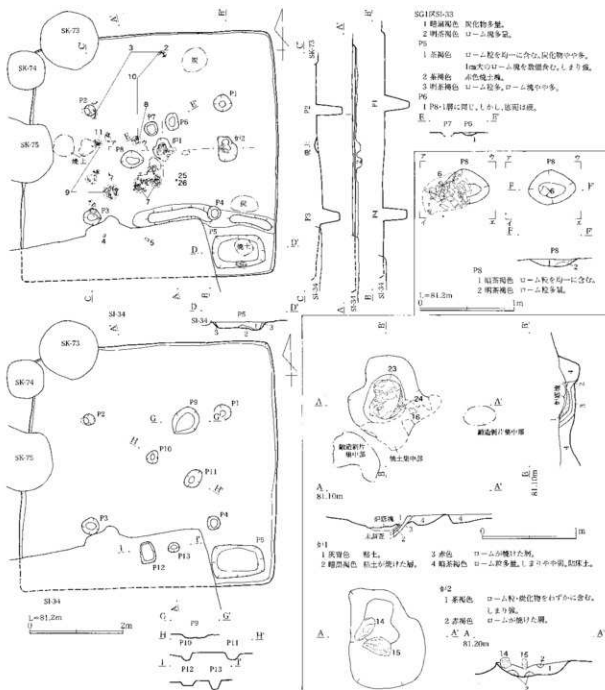
第135表 権現山遺跡 SG1区 SI-179 出土遺物

番号 種類 品名	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 (胎土・焼成 または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高杯	口 径 17.1 高 径 12.5	内外面の口縁部と脚部部にヨコナデ後、脚部部と杯底部にヘラケズリ。杯部上半ヨコナデヘラミガキ。杯部内面は放射状と口縁部に横位の線なへミガキ。脚部内面は登き上げ方向不詳の横み1枚痕を少し現してヨコミナデの後に、脚部ヨコナデ。杯部の外面中位以上と内面全面を赤彩。	2.5YR5/8 明赤彩 やや細粒 白・黒細粒と白 粗粒やや多、赤・灰色粗粒 少 やや軟質	床土2cm（杯部）とカ マド火床直上4cm（脚 部） 口5/6周、脚柱全周 2、30
2 土師器 甕	口 径 14.6 高 径 4.4 最大 径 15.0	口縁部内外面をヨコナデし、外面口縁部下側に強く凹む。内外面ともに上に横位のヘラミガキ。口縁部外面に焼成前の縦位浅線が1箇所ある。口縁部外面に薄く傷が付着する。	5YR6/6 暗 やや細粒 白・黒・透明細 粒と赤粗粒少	北西部床土13cm 口1/4周 7
3 土師器 甕	高 径 5.9 底 径 6.6	外底面はおそらく多方向ヘラケズリで平底。外面はヨコヘラケズリ。内面はおそらく横～斜位のヘラナデ後に、残存する上部付近を横～斜位ヘラケズリ。外面は全体が被熱し、内面は黒褐色の汚れ（コゲ）が残る。	10YR7/6 明黄褐色 粗い 白・黒細粒多、白・ 透明、灰色粗粒やや多、赤 粗粒と透明細粒少 軟質	床土4cm 底2/3周 27
4 土師器 甕	口 径 15.0 高 径 7.6 口 径 3.3～3.4	底面は外面に多方向ヘラケズリと内面に1方向ナデの後に穿孔して、孔端面をヘラケズリ。外面口縁部ヨコナデ後に杯部ヨコヘラケズリ。内面は下位にヨコナデ、中位にヨコナデナデ、口縁部にヨコナデ。外面に焼成時の黒炭が広く付着する。全体の約半の破片は、SI-179を切るSI-174から出土した。	5YR6/6 暗 粗い 白・赤粗～細粒 と透明細粒やや多、黒細 粒 やや軟質	SI-179 東部床土3～ 4cmとSI-174カマド 内床土1～2cmが接 合 口2/3周、底全周 2床下、5、床下、SI 174中央、SI-174 56
5 土師器 杯	口 径 12～16 高 径 4.1	口～体部端の焼は内面でやや明瞭。外面底部ヘラケズリと外面体部から内面までのヨコナデの後、内外全面ヨコヘラミガキ。古墳中層後葉の土師器が混入（?）。	5YR6/6 暗 やや細粒 黒細粒やや多、 白・透明細粒少 やや軟質	北西部床土4cm 口1/40～1/50周 23

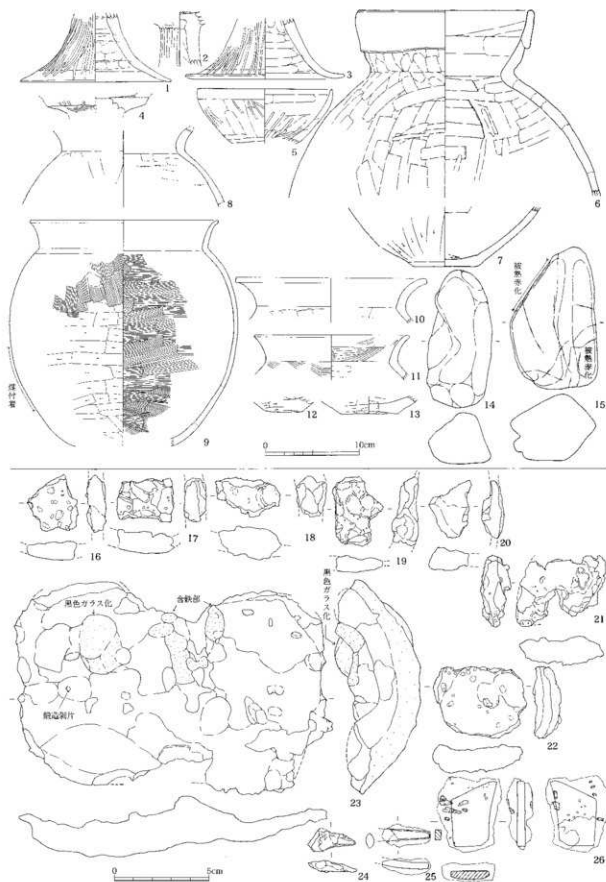
第4節 古墳時代の堅穴鍛冶遺構

SG1区 SI-33 (第247・248図、写真図版80・81)

[位置] SG1区北部の29.5・13.0・13.5グリッド。居館跡北半東側台地の建物群中で、居館外郭溝SI-95から11m離れる。古墳時代遺構は、後期のSI-32・35が北と南に近接し、北西と西に中～後期のSI-126・136、南西に後期のSI-89、東に円筒形土坑SK-53がある。南部が床面下で古墳後期のSI-34に切られる。北西部に重複する時期不明のSK-73・74・75を先に調査しているので、これらの土坑に切られていることがわかる。



第247図 権現山遺跡SG1区 SI-33 (1)遺構



第248図 権現山遺跡 SG1区 SI-33(2) 遺物

【規模と形状】東西にわずかに長い方形で、中軸はN-1°-E。中央に竈治炉を持つ竈治遺構である。東西長5.38m、南北長5.18m。残存壁高は0.04～0.06mで、ほとんど残っていない。床面はほぼ平坦で、傾斜しない。東壁の南部から西に堤状の高まりが延びる。高まりは東西305cm、幅30～40cm、高さ2～3cmで、東壁際からP4を通り中央まで直線的に続く。高まりの現存する西端付近から南へ続く可能性があるが、SI-34に切られて不明。掘方底面は緩い凹凸があり、ローム塊が多い明褐色の2層でほぼ全体を貼床する。床面からの深さは2～6cmで、中央より壁際がわずかに深い。主柱穴はP1～P4の4本。P1は径39×30×深さ54cm、P2は径24×23×深さ56cm、P3は径36×35×深さ41cm、P4は径29×28×深さ51cm。P3がやや浅い。柱間はP1-P4間2.32m、P2-P3間2.24m、P2-P1間2.90m、P3-P4間2.61mで、建物平面形と同じく東西に長い。掘方底では、中央部北東寄りP9～11、南壁際中央でP12・13の計5本を確認した。P10・11・13は柱穴状、P9は浅い楕円形、P12は浅い長方形である。規模と掘方底からの深さは、P9が径61×52×深さ9cm、P10は径29×24×深さ16cm、P11は径45×32×深さ15cm、P12は径45×29×深さ10cm、P13は径25×21×深さ18cm。入口施設は不明だが、南壁際の掘方底で確認したP12・13の一方か両方が入口ピットの可能性はある。貯蔵穴P5が南東部にある。東西軸の長方形で110×70cm、床面から深さ16cm。底は緩い凹凸があり、壁は直線的。底直上の2層は焼土塊で、1層は竈穴覆土1層と同様に炭が多い。現地調査時に「SK-52」と呼称し、整理作業時にSI-33の貯蔵穴に変更した。

【炉】中央に炉1、中央部東寄りに炉2がある。複数の炉はSG1区SI-1などにある。

炉1は竈治炉。使用時は南北に長い楕円形で50×44cm、浅い窪みのほぼ全面にある炉壁(23)上面までの深さ6cm。不整形形の掘方を竈穴床に掘り、底面は平坦で地山ローム上面になる。掘方内最下層は燃焼で硬化・赤変したローム(3層)で、上に暗黒褐色土(2層)を置き、さらに灰白色粘土(1層)で部分的に埋めて炉底とする。北側はこれらの土層が見られず貼床(4層)と同質の暗褐色土で埋め戻すが、炉形成後に掘り込んだようにも思われ、炉の一部と捉えられるかどうか定かでない。炉周辺に浅い皿状掘り込みが3箇所ある(P6～8)。北東部のP6は楕円形で37×29×深さ6cm。北西部のP7は30×29cmの円形でP6より少し浅い。南西部のP8は楕円形で50×37×深さ8cm。P6底面は硬化し、3箇所すべてかどうかは明確ではないが、フイゴ座の可能性もある。炉底塊23の上面の北西部と南西部にある黒色化部分で熔けた羽口の脱落痕とすれば、北から西側が羽口となる。炉周囲の床面で、南東部と南西部に鍛造剥片が集中し、鉄滓片が炉南側や南東側で出土した。

炉2は炉1の東約1mにある通常の地床炉で、竈治炉ではないと考えられる。南北に長い不整形円形で54×40×深さ6～7cm。床面から浅く皿状に掘り、底は緩い凹凸がある。掘り込み内は被熱して部分的に硬化・赤変する。覆土はローム・炭・焼土粒を微量に含む。底面南側と西側の壁に接して長15cmの棒状礫を置く。南側の礫は炉側面と南東隅が被熱・赤変する。

【覆土】覆土は炭化物の多い暗黒褐色土。北東部と南西部に示した範囲に5～8cm大の炭化物がみられた。西半部に示した焼土は高さ5～8cmで遺構確認面に及び、炭化物も認められた。貯蔵穴P5覆土の北壁際中央に多量の焼土が集中する。

【遺物出土状況】遺物は少なく、炉1西側に土師器片がまとまる。

【出土遺物】土師器高杯脚(1～3)は転用羽口の可能性もあるが、残存部に被熱痕が確認できない。高杯が長脚で、小形壺(5)の頸が長く、薄い甕(9)が少し長胴化するので、古墳中期中葉と見られる。貼付口縁の壺(6)はSG1区SI-12などにある。図化以外の土師器190片(1.378g)の内訳は杯8片(19g)、高杯脚部2片(79g)、壺甕類180片(1.280g)。

【竈治関連遺物】主に炉壁小片である。23は大きな炉壁で、発泡した比較軽い珪酸分が主である。酸化鉄を含む褐色の滓が中央部周辺にだけ載る。炉底部から羽口周辺の炉壁が熔解して生成し、残存する輪郭が鉄

第10章 権現山遺跡 SG1 区

れる付近が羽口の位置かもしれない。六澤義功氏の御指摘では、古墳中期には不純物の少ない鉄を鍛冶素材に用いるため滓があまり生成されず、炉底や珪酸分を主体としたこのような軽量の遺物が目立つという。炉壁片の外に、板状や棒状の鉄製品破片がある。

24 は一見して鉄滓ふうで、X線写真で内部に気孔が多く見られる。断面長方形の鉄棒片(25)は本来の長さが不明で、少量の木炭片が付着する。板状鉄製品(26)は、鉄製品を切断した鉄板片。廃鉄器の再利用や加工を意図して切断したものであろう。26の周囲に付着した鉄錆と酸化鉄混じり土には、鍛造剥片と木炭小片の付着が比較的に目立つので、鍛冶が周辺に保管し、最終的に遺棄したと見られる。炉壁(20)と板状鉄製品(26)の金属学的調査結果を実施し、20は低温型素延鍛錬鍛冶滓と考えられた(第11章)。

第136表 権現山遺跡 SG1 区 SI-33 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 保存状態 注記
1 土師器 高杯	高 残 7.3 脚底 残 16.0	外面ナデと内面ユビオサエの間に、内外面の脚部間にヨコナデ。外面に比較的に密なタテナツミミガキ。	5YR5/6 明赤褐色 やや強い 赤・白磁～細粒 と、透明細粒少 やや軟質	柱穴上方(床土13cm) 脚底 1/6 残 15
2 土師器 高杯	高 残 5.7 最大 残 5.4	脚内面上部が一度くびれた後、小さな空洞を上端に持つ。外面は杯底部ヘラナデ。脚部タテヘラミガキ。内面脚部はタテナデ。杯部内面は多方向のヘラミガキ。	5YR6/6 緑 緻密 黒・白細粒少 硬質	床土2cm 脚底 2/3 残 25
3 土師器 高杯	高 残 6.4 底 16.7	外面に横位ナデ。内面上部縦位の後に下部横位ナデ。脚部内外面ヨコナデ後、外面にタテヘラミガキ。	10YR6/6 明黄褐色 やや強い 赤・黒・細粒多。 白・黒・透明細粒少 やや軟質	床直上～床土2cmが 結合 脚底 5/6 残 2、25
4 土師器 高杯	高 残 1.7 最大 残 11.5	外面は杯底部と杯体部に放射状ヘラミガキ。内面は水平な横み上げ止面にて杯部を追加成形。磨滅のため内面のミガキの有無が不明。	5YR5/6 明赤褐色 やや強い 白・黒・細粒多 やや軟質 透明・赤細粒と灰色 塵少 やや硬質	SI 34の床土2cmに直入 杯底 1/4 残 16
5 土師器 小壺形	口 残 14.4 高 残 5.7	頸部が内彎する。内外面ナメナデ後に口縁部ヨコナデ。外面は頸部上端にやや強いナデと下にナメヘラミガキ。内面はナメヘラミガキで頸部下段に特に目立つ。	10YR7/4 に近い黄褐色 緻密 白・赤・細粒少 やや軟質	SI 34の床面～床土3 cmに直入 口 1/4 残 18、SI 34-3、SI 34-4
6 土師器 大形壺	口 18.1 高 残 19.7 最大 残 33.2	頸が内彎し、外面口縁部は屈折状。外面は頸部と頸部に縦位と斜位に斜位の斜いヘラナデ。内面頸部はヨコヘラナデに疎なタテナデ。被熱痕や付着物は見られない。7と同一個体の可能性あり。	7.5YR6/6 緑 やや強い 白・透明細粒～細 粒多、赤・灰・黒細粒少 やや軟質	SI 33床土7～9cmと SI 34床土2cmが結合 口 7/12 残。頸 3/4 残 7、8、29、SI 34-3
7 土師器 大形壺	高 残 6.3 底 残 6.6 最大 残 22.0	外面は多方向ヘラナデで、焼成後の磨耗が目立つ。外面頸部タテヘラナデ。内面は底部に多方向と頸部に横位のヘラナデ。6と同一個体の可能性あり。	7.5YR6/6 緑 やや強い 白・透明細粒～細 粒多、黒・赤・細粒少 やや軟質	床土2cm 底全周 20、22
8 土師器 壺	頸 残 13.0 高 残 8.3	外面頸部タテヘラナデと内面頸部ヨコヘラナデの後、内外面の口～頸部ヨコナデ。	7.5YR6/4 に近い黄褐色 やや強い 白・透明細粒多。 赤・透明細粒と黒細粒少 やや軟質	床土1cm 頸 5/12 残 6
9 土師器 壺	口 残 19.8 高 残 23.9 最大 残 24.2	頸部が薄手でわずかに縦長。頸部外面は下位ナデ、中位ヘラナデ、上位タテナデ。頸部内面はヨコナデ。口縁部内外面ヨコナデ。外面頸部中位の上下に屈折状。	2.5Y5/3 黄褐色 粗い 白磁～細粒多。透明・ 黒細粒と透明細粒少 やや軟質	床土4cm 口 1/12 残。頸 1/6 残 4、13
10 土師器 壺	口 残 21.0 高 残 4.7	外面頸部タテヘラナデ。内面頸部ヨコヘラナデ。口～頸部内外面ヨコナデ。口縁部外面に屈折状。	10YR6/6 明黄褐色 やや強い 白・黒・透明細 粒多、白・透明細粒少 硬質	床土1～2cmが結合 口 1/12 残。頸 1/3 残 6、25
11 土師器 壺	口 残 16.4 高 残 4.8	外面は頸部ナメナデ後に口～頸部ヨコナデ。内面は頸部ナデ。頸部ヨコナデとナメナデの間に口縁部ヨコナデ。外面に屈折状。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや強い 白・透明細粒多。 赤・赤細粒と黒細粒少 やや軟質	床土4cm 口 1/4 残。頸 1/3 残 4
12 土師器 壺	高 残 1.6 底 残 3.8	外底面の外端に薄く粘土を貼ってナデ、凹底状にする。外面側下縁ヨコヘラナデ。内底面に疎な多方向ヘラナデ。	10YR6/4 に近い黄褐色 粗い 白・透明細粒多。 赤・黒・灰色細粒少 硬質	底全周
13 土師器 壺	高 残 1.9 底 残 6.0	外底面は1方向ヘラナデで上げ底。側下縁外面ヨコヘラナデ。底面内面はおそらく多方向のヘラナデ。	2.5Y5/2 暗灰黄 粗い 白・透明細粒～細粒多 やや軟質	底 1/3 残
14 土師器 壺	長 15.0 幅 6.7 厚 5.8	自然窯の表面全体がごく弱く被熱する。加工・使用痕は見られない。重量 873.3g。	5Y5/2 灰オリーブ 非常に緻密で硬質なホルン フェルス	口2底土3cm 底面 31
15 土師器 壺	長 14.7 幅 9.0 厚 7.2	自然窯の全側面と裏面が弱く被熱し、同の上左と下右でやや軟質。加工・使用痕は見られない。重量 1177.3g。	2.5Y5/2 暗灰黄 緻密で硬質な黄灰色	口2底土5cm 底面 30
16 土師器 壺	長 残 3.0 幅 残 2.7 厚 残 1.1 底 残 4.9	頸部4面が破面となった鍛冶炉の叩面内面破片。厚さ1mmの薄い板状で内面側の表層が剥がれている。表面には小さな木炭屑と見難い気孔の破面が見える。外面にはきめの細かい砂・粘土が露出する。鍛冶関連遺物構成例2。	表 灰褐色 地 灰褐色 破面 灰褐色 メタル度 なし	全周が破面 24
17 土師器 壺	長 残 2.3 幅 残 1.2 厚 残 4.9	頸部4面が破面となった鍛冶炉の叩面内面破片。表層が剥がれるのは16と同様で、横断面が互角に露出する。内面には垂れと木炭屑あり。鍛冶関連遺物構成例2。	表 灰褐色 地 灰褐色 破面 灰褐色 メタル度 なし	全周が破面 28

18 伊野 (観治中)	長 現 2.1 幅 現 3.4 厚 現 1.6 重 現 5.6	側面 4 面が破面となった観治中内面破片。内面表皮は黒色のガラス質で厚さ 1cm 程度が剥離する。外面はわずかに砂土が残る。観治関連遺物構成 No. 3。	表 黒色 地 暗灰色～黒褐色 磁石度 1 メタル度 なし	SI 34 に流入 全周が破面
19 伊野 (観治中)	長 現 3.7 幅 現 2.7 厚 現 1.4 重 現 6.0	側面 5 面が破面となった薄板状の観治中内面破片。内面表皮は木炭痕による凹凸が生じ、下手側に凹凸が深くなっている。外面には灰黒色に焼熱した砂土が露出する。観治関連遺物構成 No. 4。	表 茶褐色 地 灰褐色～黒褐色 磁石度 1 メタル度 なし	全周が破面
20 伊野 (観治中、 押付き)	長 現 3.1 幅 現 2.2 厚 現 1.2 重 現 6.2	側面 3 面が破面となった観治中の伊野内面。小破片。内面は浮化して下手側に厚くなる。表層は発色灰味で、肥厚部の中間部は厚さ 5mm 程度の縦帯状の浮化となっている。外面は下手側に褐色で、下手側に向かう途中に灰黒色に焼熱した砂土が露出されている。砂土の部分の厚みは最大 2mm 程度と薄く、下手側では細かく凹凸が現れ、表面の質人が認められる。色調は内面が浮化しているため灰黒色から茶褐色で、下部は茶褐色となっている。結晶が発達するためか、下部の破面はやや光沢を持つ。分析資料 No. 1、観治関連遺物構成 No. 5。	表 茶褐色～暗灰色 地 灰褐色～黒色 磁石度 1 メタル度 なし	床面上 側面の 2 または 3 辺 が破面 27
21 伊野 (観治中)	長 現 3.7 幅 現 4.8 厚 現 1.6 重 現 10.2	側面 3 面が破面となった観治中内面破片。表層の 6mm 程度の厚き部分が浮化して腐食が顕在化したものに類似となる。内面には黒いと木炭痕が生じ、外面には粉末状の細粒物を含んだ砂土が露出する。他に 2 片あり。同寸の側片は重量 10.2g、小片を含めた合計は 17.7g。観治関連遺物構成 No. 6。	表 褐色～灰色 地 灰色 磁石度 1 メタル度 なし	左側以外が破面
22 伊野 (伊野、 重 現 13.8)	長 3.8 幅 4.7 厚 1.6 重 13.8	側面が全周にわたって小破面が連続する薄板状の観治中伊野内面破片。表層の 7mm 程度の厚き部分が浮化・発色している。外周部が反り返った面状となる。外面には前者と同様 13.8g。小破片多数を含めた合計は 45.7g。観治関連遺物構成 No. 7。	表 灰～灰褐色 地 灰色 磁石度 1 メタル度 なし	全周が破面
23 伊野 (伊野、 含鉄)	長 16.9 幅 現 11.3 厚 4.6 重 530.1	側面から下面が左右方向に長手の丸味を持った舟状化した観治中伊野内面破片。逆に内面は左右方向に長手の楕円で、中央部上手側には 4cm 程度の 2 箇所が鉄痕が露出する。この部分の鉄痕が強く、表層から濃茶褐色の鉄色となり、縦帯も強い。この部分は鉄痕と表層が伊野内面に結び付いてしまったものか、内面と上手側には 3cm 程度の粘土質のブロックが固着する。表面は黒色ガラス化しており、羽口先の破片の可能性もあり、伊野全体の側面は 3～1.2mm 程度の厚みを持った破面となっている。また表層が浮化・発色しており、一部に下手側に向かう重さが確認される。外面は灰色から暗褐色に焼熱した砂土が全面に固着しており、伊野表面の凹凸が現れ、網目状の浮入の質が生じている。羽口側中央が欠けたように凹んでいる状況を示すが、伊野本来の正位と見た場合、転用または専用の羽口先の挿入部となる可能性も残される。いずれにしても、本資料のような内面が浮化発色した伊野の生成は、3 世紀～6 世紀代前半の観治中に特有のあり方で、伊野のみならず出土土層の年代順で 5 世紀代の観治中の妥当性がある。観治関連遺物構成 No. 8。	表 黄褐色～茶褐色 地 灰色～黒褐色 磁石度 2 メタル度 顕化 (△)	伊 1 内 ほぼ伊 1 内
24 鉄製品 (観治中、 押付き)	長 2.5 幅 現 1.1 厚 0.7 重 現 1.5	表面が黒褐色で流動気味の浮に覆われた鉄製品破片または鉄塊。外観的には全くの浮に見えるが、縦帯が鉄製品と同様な傾向を持っており、構成上は鉄片として扱っている。透過 X 線像を見ると、内部に中小の気孔が密に分布する状態で溶解した状態の鉄部となっている。おそらく観治中の赤熱木炭層中に落下した鉄片または鉄塊が加熱の通り越して溶解してしまった資料の可能性が高い。さらに通常の鉄製品ではなく、重量の高い青銅品破片が母体となっていれば、より溶解した鉄塊になりやすいことも留意すべきであろう。観治関連遺物構成 No. 9。	N4 / (B) 灰 磁石度 2 メタル度 顕化 (△)	一部欠 26
25 特殊不明 鉄製品 (観治中)	長 現 2.5 幅 現 0.6 厚 0.35 重 現 2.2 (鉄を含む)	長さ 2.5cm 程度の特殊の鉄製品破片。下手側の端部は小破面になっており、短方向の横断面形状は台形を示す。右側の側面は平坦に成形された状態で生きている。透過 X 線像を見ると、右から左方向へ向かいわずかに広がりを持つ破面と確認できる。観治前はやや軽微な印象を受けるが、未成品または成製品の可能性を持つ。表面には酸化土砂がやや厚い。観治関連遺物構成 No. 10。	磁石度 3 メタル度 顕化 (△)	床土 1cm 一端を欠損 28
26 鉄製品 (観治中、 破面状、観 治中付)	長 3.4 幅 2.2 厚 約 0.4 重 20.7 (鉄を含む)	最大幅が 2.2cm の薄板状の鉄製品破片。表面はかなり厚い酸化土砂に覆われており、下面の下手側に鉄痕を吹いた地に近い部分が露出している。外周部の酸化土砂中には粒状の木炭と多量の観治中破片が含まれている。観治中破片は黒色から青灰色の土で、厚みは中厚から薄手である。透過 X 線像によると、内部に上手側がやや広く、直線状の鉄片が確認され、左右の側面は直線状に加工されている。下手側の端部はやや直線状に見えるが、破面かどうかは判断しにくい。一方、上手側の端部は斜め 75 度に向かい破面になっているようにも見える。この斜めの部分が生じているはずは、鋼の折り返し部の可能性も残るがこれらもはっきりしない。折れた鉄製品の破片かとも考えられない。直線の観治中は透過 X 線像上では読み取れず、透視のようなある平面的な面状となっているため、比較的低い鉄板と予想される。かすかに細い放射線も確認される。色調は表面の酸化土砂が茶褐色から濃茶褐色で、地は濃茶褐色となる。分析資料 No. 2、観治関連遺物構成 No. 11。	磁石度 5 メタル度 H (○)	床土 1cm 完形 28

第5節 古墳時代の土坑・円筒形土坑・墓壇 (第 249～251 図、写真図版 91・112・131)

遺物の特徴や火山灰などからみて古墳時代の土坑と判断または推定できたものが権現山遺跡 SG1 区に 25 基あり、この中には墓壇の可能性のある土坑 (SK-128) を 1 基含む。

SK-128 は斜地銀張・金鍍金の耳環一対を出土した長方形土坑で墓壇の可能性もある。土坑底面に凹凸が目立ち、耳環は底面でなく 2 層から出土した。この SK-128 は埋土の土壤理化学分析を行ない、耳環出土層

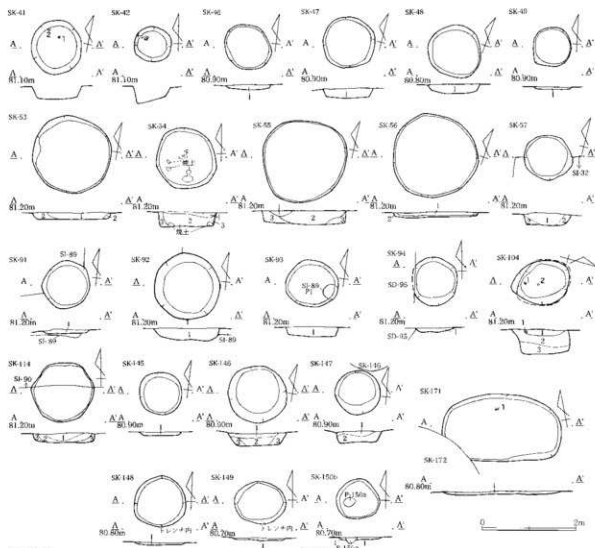
のリン酸含量が他層より多いかどうかを定量したが、両者の間に差異は認められなかった（本章次節）。

SK-42・104・149・171の4基は楕円形の土坑で、SK-42は底面が傾斜し、SK-171は広く浅い。SK-92・94は平面円形であるが底面があまり平坦ではない。以上の7基を除いた18基は平面円形で、古墳時代中・後期によくみられる円筒形土坑であろう。円筒形土坑とは、直径がおおむね1mを超える大形で、垂直に近い急傾斜の壁面と平坦な底面を持つ比較深い円筒形の土坑である。本遺跡では4区に多く、SG1区や、未報告分のSG10区にも見られる。

古墳時代と認定した土坑のうち、SK-46・48・49・57・94・114・145・146・147・148・149・150b・152は古墳時代と断定するには情報がやや乏しいが、形状・埋土や、古墳時代の円筒形土坑が一定区域に群集してつくられる状況からみて、古墳時代土坑の可能性が高いと推定した。

第137表 権現山遺跡 SG1区 古墳時代の土坑

遺構名	グリッド	形状	重複関係	長さ (m)	短径 (m)	深さ (m)	中軸線	覆土
SK-41	26.5-13.0	円筒形？	重複なし	1.15	1.06	0.27		特徴は不明
円筒形土坑か。北側にある古墳時代のSK-42や、時期不明のSK-43・44とも関連する可能性あり。縄文土器（無文深鉢底部）1片混入。								
SK-42	26.5-13.0	楕円形	重複なし	0.79	0.64	0.36		特徴は不明
底面は東西で15cmほどの比高差あり。西側が深い。古墳中期後葉の土師器高杯・杯・甕片あり。								
SK-46	24.5-14.5・15.0	円筒形？	重複なし	1.04	0.91	0.11		単層
遺物なし。周辺にSK-47・48など円筒形土坑が多く、覆土も硬いので古墳時代と推定した。								
SK-47	24.0-14.5	円筒形	重複なし	1.10	1.05	0.21		単層 硬く締まる
古墳中期の土師器高杯・甕・杯の小破片が多くあり、模倣杯片は含まない。								
SK-48	24.0-14.5	円筒形？	重複なし	1.17	1.11	0.21		単層 やや軟らかい
遺物は土師器杯体部1片のみで時期を限定できない。周辺に円筒形土坑が分布するので古墳時代と推定した。								
SK-49	24.0-14.5	円筒形？	重複なし	0.91	0.84	0.06		単層
遺物なし。覆土が硬く、周辺にSK-46～48と同じく古墳時代の可能性がある。								
SK-53	29.5-13.5	円筒形	重複なし	1.68	1.64	0.15		白色粒あり
土師器高杯・甕胴部3片出土。Hr-FAと推定される白色粒が入るので古墳後期か。								
SK-54	29.5-13.5	円筒形	重複なし	1.30	1.25	0.32		白色粒と白色土あり
土師器高杯・甕胴部1片と内傾口縁を含む杯5片出土。Hr-FAと推定される白色粒が均一に入り、底面には同様の白色粘質土が見られるので後期初葉か。								
SK-55	29.5-14.0	円筒形	重複なし	1.80	1.73	0.29		人為堆積か
古墳中期かと思われる土師器小破片が少量あり。周辺の円筒形土坑と同じく古墳時代とみられるが、白色テフラが入らないので中期に遡るか。								
SK-56	29.5-14.0	円筒形	重複なし	1.81	1.75	0.11		白色粒あり
遺物なし。Hr-FAと推定される白色粒が入るので古墳後期か。								
SK-57	30.0-13.0	円筒形？	SI-32と重複	1.03	0.95	0.23		
古墳後期のSI-32と重複し、SK-57のほうが新しい可能性もあるが不確定。遺物は確のみ。								
SK-91	29.0-13.0	円筒形？	SI-89を切る	1.03	0.95	0.07		
古墳後期のSI-89を切る。遺物は自然礫1点のみ。形状からみて周辺に分布する古墳時代の円筒形土坑群SK-91～93に含まれる可能性あり。								
SK-92	29.0-12.5・13.0、29.5-12.5・13.0	円形	SI-89を切る	1.41	1.37	0.27		
古墳後期のSI-89を切る。遺物なし。形状からみて周辺に分布する古墳時代の円筒形土坑群SK-91～93に含まれる可能性あり。								
SK-93	29.5-13.0	円筒形	SI-89を切る	1.12	1.00	0.20		
古墳後期のSI-89を切る。遺物なし。形状からみて周辺に分布する古墳時代の円筒形土坑群SK-91～93に含まれる可能性あり。								
SK-94	29.5-12.5	円形	SD-95より古	1.02	0.90	0.10		
古墳中期の豪族別館の溝SD-95に切られる。遺物なし。古墳中期の可能性あり。								
SK-104	30.0-12.5	楕円形	重複なし	1.28	0.98	0.52	N-68°・W	白色粒多量 自然埋没
図示した古墳中期の土師器2点出土。覆土上層にHr-FAと推定される白色粒が多量に見られ、中期後葉か。居館跡内に所在。								
SK-114	30.0-13.0	円筒形	SI-90より古	1.33	1.25	0.19		自然堆積か 硬く締まる
古墳後期のSI-90に伴う高まり上に覆われるので、それ以前と推定される。遺物なし。								
SK-128	29.0-13.0	長方形	SI-89を切る	1.40	0.29	0.11	N-58°・E	
古墳後期のSI-89内の床面で確認。SI-89を切る。銅地鍍金・金鍍金の耳環が1対出土。墓域の可能性ある。								
SK-145	24.0-14.5	円筒形	重複なし	0.93	0.89	0.09		単層
土師器は高杯片少量のみで時期を限定しにくい。古墳時代の円筒形土坑が周囲に多いので古墳時代か。								
SK-146	24.0-14.5	円筒形	重複なし	1.27	1.22	0.29		自然堆積か
遺物は土師器高杯類の胴部1片で時期を限定できない。円筒形土坑が周囲に多いので古墳時代か。								
SK-147	24.0-14.5	円筒形	重複なし	0.97	0.93	0.26		
遺物なし。円筒形土坑が周囲に多いので古墳時代か。								
SK-148	24.0-14.5	円筒形	重複なし	1.12	1.08	0.07		単層 やや硬い
遺物なし。確認調査トレンチで上面削平。円筒形土坑が周囲に多いので古墳時代か。								
SK-149	24.0-14.5	楕円形	重複なし	1.08	0.91	0.05	N-83°・E	単層 やや硬い
遺物なし。確認調査トレンチで上面削平。円筒形土坑が周囲に多いので古墳時代か。								
SK-150b	24.0-15.0	円筒形	P-150aより古	0.92	0.84	0.06		単層 やや硬い
時期不明の小ピットP-150aに切られる。遺物なし。円筒形土坑が周囲に多いので古墳時代か。								
SK-171	23.5-14.5・15.0	楕円形	SK-172より古	2.53	0.41	0.08	N-11°・E	単層
中世のSK-172に切られる。土師器高杯類の頸部片出土。								



SG1ZSK-46
1 堀削色 径1~2mのローム小坑・粒少量,径1mのローム大坑数個,壁。

SG1ZSK-47
1 堀削褐色 ローム粒少量,径1~3mのローム小坑少量,径1~2mのローム大坑数個,壁。

SG1ZSK-48
1 堀削色 ローム粒数個,径1~2mのローム小坑少量,今市新石粒数個,壁。

SG1ZSK-49
1 堀削褐色 ローム粒多量,径5~10mのローム坑少量,壁。

SG1ZSK-53
1 赤褐色 1m大のローム坑をわずかに含む,ローム坑と白色粒を均一に含む,しまりや中。

2 赤褐色 ローム粒を多く含む,白色粒をわずかに含む,しまり強,やや明るい。

SG1ZSK-54
1 赤褐色 ローム粒を多く含む,しまりやや強,やや明るい。

2 赤褐色 ローム粒をわずかに含む,白色粒を均一に含む,しまりやや中。

3 赤褐色 ローム粒を多く含む,1m大のローム坑を少量含む。

SG1ZSK-55
1 赤褐色 ローム粒を全体に多く含む,しまり強。

2 赤褐色 ローム粒が全体に含まれる,中程度のローム坑あり,しまり強。

3 赤褐色 ローム粒が多く含まれる,しまりやや中。

SG1ZSK-56
1 赤褐色 ローム粒・白色粒や全体に含む,壁面あり,しまり強,やや明るい。

2 赤褐色 ローム粒が多く含まれる,しまり強,やや明るい。

SG1ZSK-57
1 赤褐色 ローム粒をわずかに含む,しまり強。

2 赤褐色 ローム粒を多く含む,しまりやや強,やや明るい。

SG1ZSK-61
1 堀削色 径1~3mのローム坑数個,ローム粒少量,壁。

SG1ZSK-62
1 堀削褐色 埋人物数個,径1~10mのローム坑少量,ローム粒多量,壁。

SG1ZSK-43
1 堀削色 径1~2mのローム坑数個,ローム粒少量,径1mの堀土粒数個,埋人物数個,壁。

SG1ZSK-44
1 堀削色 ローム粒少量,今市新石粒数個,褐色土塊数個,壁。

SG1ZSK-104
1 褐色 ローム粒少量,白色粒多量,径1mのローム坑少量。

2 褐色 ローム粒少量,径1~3mのローム坑数個。

3 明褐色色 ソフトローム坑数個。

SG1ZSK-114
1 堀削色 ローム粒少量,七宝新石粒数個(径2~3m)とローム坑数個(径1~2m)数個,稀で壁。

2 褐色 径1~2mのローム坑・粒多量,径1mのローム坑少量。

3 明褐色色 径1~3mのローム坑とローム粒多量。

SG1ZSK-145
1 明褐色 径1mのローム坑数個。

SG1ZSK-146
1 明褐色 径3mのローム粒少量。

2 明褐色 径2~3mのローム粒多量。

3 明褐色 径2~3mのローム粒で構成。

SG1ZSK-147
1 明褐色 径1mのローム坑数個。

2 明褐色 径1~3mのローム粒多量。

SG1ZSK-148
1 明褐色 ソフトローム・堀土数個,ソフトローム粒少量,やや中。

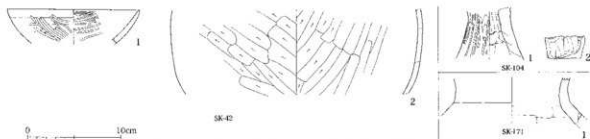
SG1ZSK-149
1 褐色 ソフトローム・粒数個,やや中。

SG1ZSK-150
1 明褐色 ソフトローム坑数個,ソフトローム粒少量,やや中。

SG1ZSK-171
1 明褐色 径1mのローム粒少量,やや中。

第 249 図 権現山遺跡 SG1 区 古墳時代の土坑 (1) 遺構

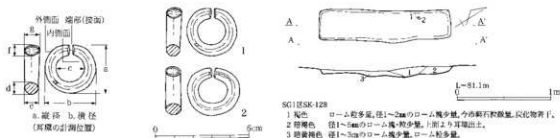
第 10 章 権現山遺跡 SG1 区



第 250 図 権現山遺跡 SG1 区 古墳時代の土坑 (2) 遺物

第 138 表 権現山遺跡 SG1 区 古墳時代の土坑 出土遺物

番号 層別 部材	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
SG1 区 SK-42				
1 土師器 高杯	口 径 14.0 高 径 3.6	外面はヨコヘナナデ後に口縁部ヨコナデ。全体をナメヘラミガキ。内面は密なヨコヘラミガキ。	5YR4/8 赤褐色 胎土・焼成 白・黒・透明細粒少 や中硬質	底上 2cm 口 1/8 周 1
2 土師器 甕	高 径 9.0 最大 径 26.4	胴部内外面ともナメヘラミガキ。胴外面に薄く焼く付く焼片を含むので、カマドではなく炉で用いた甕と見られる。	10YR4/2 灰青褐色 胎土・焼成 白・黒・透明細粒多、灰色・透明細粒と黒細粒少 や中硬質	底上 2cm 口 1/4 周 2
SG1 区 SK-104				
1 土師器 高杯	高 径 5.3	外面はヨコヘナナデ後にタテヘラミガキ。内面は密なヨコヘラミガキ。上縁部タテナデと中位以下にユビナデ。	5YR6/6 緑 胎土・焼成 白・黒・透明細粒多、赤・透明細粒と白微少 硬質	底上 21cm 口 1/8 全周 2
2 土師器 小形土器	口 径 3.5 ~ 4.2 高 径 1.9 ~ 2.4 底 径 3.4 ~ 3.6 重 量 22.1	外面はヨコヘラミガキで頸部が丸く成る。外底面は多方向ユビナデ。内面はナメヘラミガキで口縁部付近に微紋を残す。ヨコナデ仕上げをせず、口縁部が水平にならない。	5YR5/6 明赤褐色 胎土・焼成 白・透明細粒多、赤・透明細粒と黒細粒少 や中硬質	底上 45cm 口 5/6 周、底全周 1
SG1 区 SK-171				
1 土師器 甕	高 径 11.9 底 径 4.9	外面の頸・胴部境で明確に屈折する。外面ヨコナデ。内面は胴部ヨコヘナナデ。頸部ヨコナデ。	5YR6/6 緑 胎土・焼成 赤褐色・細粒多、白・黒・透明細粒と黒細粒と灰 色細粒少 硬質	底上 2cm 口 1/6 周 1



第 251 図 権現山遺跡 SG1 区 古墳時代の土坑 (3) SK-128 遺構・遺物

第 139 表 権現山遺跡 SG1 区 SK-128 出土遺物

番号 層別 部材	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
SG1 区 SK-128				
1 銅器 耳環	縦 25.0mm 横 26.8mm 重 11.9	縦着しないので鉄芯ではない。表面に磨きがあり、同左下の破面を見ても銅芯。2とセットで作られているので、鍍金した銅板で覆ったものと見られる。断面は楕円形で下部よりも上部のほうが楕円形の扁平度が低くなる。断面に丸味はなく、被覆材を折り込んで覆った跡が明確。内側面や外側面に被覆材の跡は全く見られない。計測値は a 25.0、b 26.8、c 13.1、d 5.7、e 7.8、f 4.8、g 8.5 (単位 mm)。	金色	土坑底面付近 完形 1
2 銅器 耳環	縦 25.4mm 横 27.6mm 重 9.2	1と特徴が同一で、セットで作られている。表面の被覆材が剥落した銅片を見ると表側が金色で裏側が銅色なので、鍍金した銅板で銅芯を覆ったことを確認できる。計測値は a 25.1、b 27.6、c 15.8、d 5.7、e 7.8、f 4.9、g 8.3 (単位 mm)。	金色	土坑底面付近 完形 2

第 6 節 権現山遺跡 SG1 区における古墳時代土坑の土壌理化学分析

株式会社 古環境研究所

1. 分析試料

試料は、SK-128 覆土の S-1 (暗褐色土) と S-2 (黒褐色土、耳環出土) の 2 点である。

2. 分析方法 (全リン酸含量)

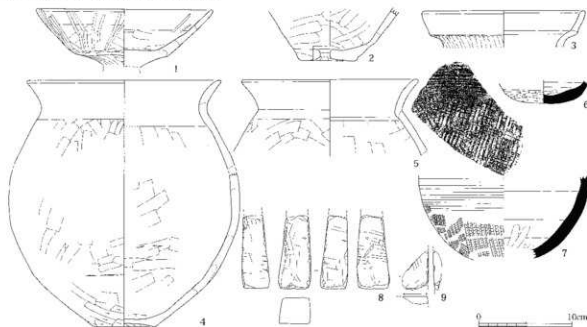
微粉砕試料 1.0g をテフロンビーカーにとり、過塩素酸と硝酸を加えてホットプレート上で加熱して有機物を分解し、過塩素酸、フッ酸・水素酸で鉱物を分解した。放冷後、塩酸と硝酸で内容物を溶解し、100ml に純水でフィルアップした。溶液中のリン酸含量はバナドモリブデン法で定量した。

3. 分析結果

風乾土壌の色は、S-1 と S-2 は共に 10YR3/2 (黒褐色) で、湿らした状態では S-1 が 7.5YR2/1 (黒)、S-2 が 7.5YR1.7/1 (黒) と S-2 の黒味がやや濃かった。全リン酸含量 (乾土%) は、S-1 が 0.26%、S-2 が 0.28% であり、両者の間に差違は認められなかった。

第7節 古墳時代の遺構外出土遺物 (第252図、写真図版131)

1～3 は 28-13 グリッドの出土遺物。このうち2の小形甕は 28-13 グリッドの確認調査トレンチで出土しているので、SG1 区 SI-5 か SI-6 の遺物かもしれない。4 は 25-14 グリッドに所在する竪穴建物 (SI) で確認調査時に出土したと注記されている甕で、SG1 区 SI-71 または SI-88 出土の可能性がある。6 は古墳時代終末期の杯で、外面の浅い段と底面の手持ヘラケズリが特徴。7 はカキメ調整後に底部を叩いて丸底化する甕または横瓶。8・9 の砥石は古墳時代遺物である確証がないが、遺構外遺物の多くは古墳時代集落関係の土器なので、砥石もここで図示した。



第252図 権現山遺跡 SG1 区 古墳時代の遺構外出土遺物

第140表 権現山遺跡 SG1 区 古墳時代の遺構外出土遺物

番号 種類 図号	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高杯	口 18.8 高 6.2	外面は林底部が放射状ヘラナデで、外壁に施合痕を残す。内外面杯体部ナデまたはヘラナデと口縁部ヨコナデの後、内外面に縦～斜位のヘラミガキ。ただし内面は残りが悪くて不明瞭。	5YR6/0 橙 織密 白・赤細粒と黒細粒 少 やや軟質	28-13 グリッド内 口 11/12 間 28-13
2 土師器 小形甕	高 5.7 口 6.0 口 1.0～1.2	底部中心から少しずれて一孔を開ける。底部の内面に多方向ナデと外面に2～3方向のヘラケズリ後、内面側から外面側へ穿孔する。内外面の体部にナメヘラナデ。	7.5YR7/6 橙 織密 白・透明細～微粒、 赤細粒、黒細粒少 やや軟質	28-13 グリッドの確認調査トレンチ 成今町 TX28-13 グリッド
3 土師器 甕	口 径 16.9 高 3.9 底径 17.3	内外面の口～頸部を丁寧にヨコナデし、外面頸部に幅広いタテヘラミガキ。	10YR6/3 に近い黄橙 やや粗い 黒・透明細～微 粒多、白細粒やや多 やや軟質	28-13 グリッド内 口 1/4 間 28-13

第10章 権現山遺跡 SG1区

4 土師器 甕	口 径 20.6 底 径 6.5 最大 径 24.5	胴部下に横み上げ体止面あり。底部は凹状で深い。外面胴部ヘラナデ。胴下部に斜位と外底面に1方向のヘラナデ。内外面の口へ一部にヨコナデ。明確な縦線やコナデ、汚れ等は無い。	10YR7/4 に近い黄褐色。白・透明則へ縦線多。黒・赤褐色と白・灰色産少。軟質	SI-71-88付近の確認調査トレンチ内の竪穴建物 口11/2層。竪13層。底3/4層 UT-TN-SG-TX25-14、 UT-TN-SG-TX25-14 SI
5 土師器 甕	口 径 18.6 底 径 8.1 最大 径 20.4	内外面ともに胴部ヨコヘラナデ。口へ一部にヨコナデ。外面全体に皮が強く付着する。	5YR4/4 に近い赤褐色。白・透明則へ縦線多。赤褐色と白・灰色産少。軟質	口5/12層 表層
6 土師器 鉢	高 径 2.4 最大 径 9.4	体部中位外面にごく浅い凹があり、それよりも上をロクロ右回転で回転ヨコナデ。下側を多方向の手持ちヘラナデ。内面は回転ヨコナデ後に底面中央に不定方向の線なナデ。	2.5Y7/2 灰黄褐色。黒・白・透明則へ縦線多。白・灰色産少。軟質	底11/12層
7 土師器 甕	高 径 8.9 最大 径 18.1	外面は中位にカキメの痕。底部に履格子目状タタキ。内面はロクロナデ後に底面に不定方向ナデ。ロクロは右回転（時計回り）。底の底部かまたは横線の胴部の端部付近。	N6/7 (R) 灰黄褐色。白・透明則へ縦線多。白・灰色産少。軟質	胴18層
8 土師器 甕	高 径 7.8 底 径 3.3 最大 径 11.9	胴面4面を砥面に用い、上端は砥面で、下底は浅く鋭い凹が少しあるが、砥面には使っていない。各面ともに長軸方向と、それに直交する方向の研削面および凹が見られる。砥面も含めて全体に砥屑の付れが付着する。	2.5Y7/2 灰黄褐色で軟質な緑色泥灰岩	表層一括
9 土師器 甕	高 径 3.7 底 径 2.7 最大 径 7.3	直交する2面の内面が残る破片で、広く残る1面だけを砥面に使用して平滑で少し丸みのある平坦面になっている。もう1面は平坦だが、明確な研削面は見られない。砥面を含めて全体が強く縦線化している。古墳時代より新しい遺物の可能性もある。	10YR6/3 に近い黄褐色。硬質で硬質な灰山岩	25-15 グリッドの確認調査トレンチ UT-TN-SG-TX25-15

第8節 古代の溝状遺構

SG1区 SD-31 (第253図上段、写真図版92・93)

SG1区のほぼ中央、25-14.5、25.5-13.5～14.5グリッド所在。東西両側は北関東自動車道路調査区の権現山遺跡A区SD-167へ続く。古墳時代のSI-11・13・40・85・127を切る。中世の溝SD-37に北側を切られ、中世のSD-45に南側を切られる。ほぼ東西に直線的に続き、確認できる長さは18.50m。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦。確認面で幅2.07～2.85m、底面幅0.94～1.87m、深さ0.48～0.60m。覆土は西側(A-A')で4層、中央(C-C')で7層に分層された。西側の覆土は竪穴建物SI-11・85を切るためか焼土粒を若干含む。溝跡の東側で、SD-45と重複する付近に、人頭大の河原石がまとまって見られる。覆土の上層に土師器片が多いが、流れ込みである。この溝に伴うと見られる遺物はない。古墳時代中期後半の土師器が主に表を中心として混入し、須恵器甕胴部1片や、少量の弥生土器も含む。中世の溝SD-37より古いことから、中世以前の溝と考えられる。1108年に降下したAs-Bテフラの濃集が最上層付近に見られるという分析結果を重視すると、12世紀以前に遡る可能性が高い(本章第21節)。

第9節 中世の溝状遺構

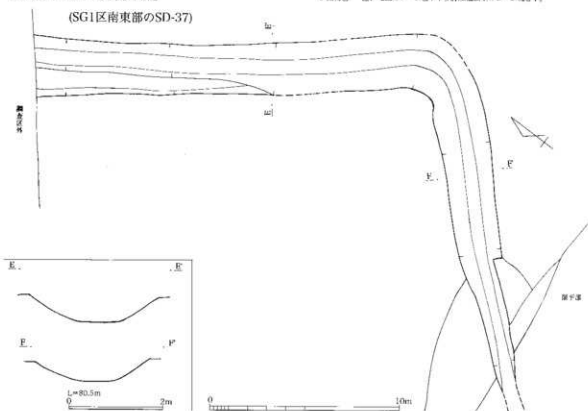
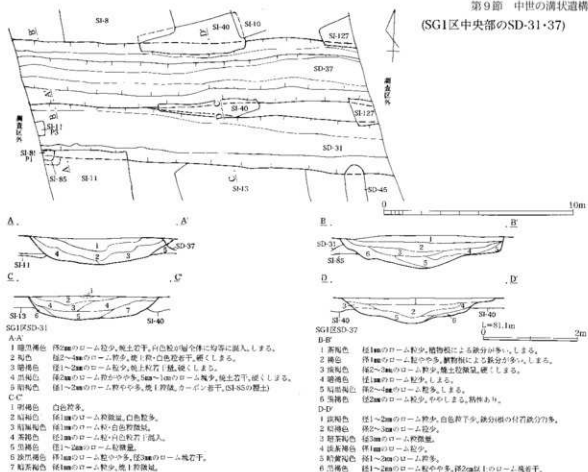
SG1区 SD-37 (第253・254・302図、写真図版92・93・131)

SG1区の中央(25.5-13.5～14.5グリッド、第253図上段)と南東部(23-15.5～16グリッドと24-15.5～16グリッド、第253図下段)で調査した。SG1区中央部から東西両側は北関東自動車道路調査区(谷中・大島編2001)のA区SD-097に続き、さらに東側はSG1区南東部へ連続する。南東部のSD-37は現地調査時の遺構番号(SD-188)から変更した。SG1区中央部で古墳時代のSI-8・40・127と、古代のSD-31の北側を切る。SG1区南東部では重複する遺構がなく、溝の南端が後世の削土で消滅している。

SG1区中央部ではほぼ東西に直線的に続き、中軸線はN-87°-E。確認できる長さは18.50m。断面は浅い皿状で、中央は段をもって深くなり、掘り返しているのかもしれない。底面は平坦部が少ない。確認面で幅2.34～3.41m、底面は段の部分で幅1.44～1.75m、底面幅0.55～1.34m、深さは0.55～0.70m。SG1区南東部では、この溝による区画がL字形に曲がる南東隅部を確認し、南側にある古代道路遺構(推定東山道)のルートを避けたようにも見える。確認面で幅2.48～3.24m、底面幅0.48～0.84m、深さ0.48～0.49m。溝南辺の方位はN-53°-Eである。覆土は6層で、自然堆積。

北関東自動車道路調査区の「権現山遺跡A区SD-097」と合わせた全体形状は、東西・南北60m四方程度の範囲を不整形形状に囲んでいる(第302図)。この区画内には中世の竪穴遺構SI-155・296や井戸SE-

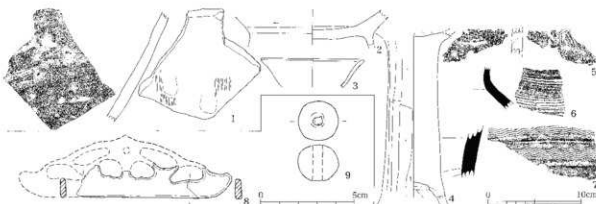
(SG1区中央部のSD-31・37)



第253図 権現山遺跡 SG1区 SD-31・37 遺構

169があり、また時期不明の調査区南部ビット群も所在する。これらの遺構群のうちのいくつかを囲む溝の可能性もある。

白磁口禿皿(3)は横田・森田分類(1978,p.9)の白磁IX類で、大宰府の磁器編年でF期(13世紀中頃から14世紀初頭:山本1995,p.481)に相当する。高台のあるこね鉢(2)は知多窯産の5~6型式で、同種のこね鉢は2区SE-63でも出土している。内面が磨耗した常滑産(1)は、SG1区SE-169でも複数破片が出土した。SE-169やSD-45と同一個体かどうかは不明。日光男体山頂遺跡例(佐野1963,p.219)よりも複雑化した三対透の火打金は(8)、栃木県市貝町仁王地遺跡H7・4号住居混入品に類似し(中村2009)、13世紀末から14世紀後半に例がある(鶴見2005の4類)。北方の中島塚塚遺跡7区SD-32(時期不明)に「三角形端部合わせ」型の火打金がある。弥生土器片、古墳中期の円筒埴輪片(5)、後~終末期の土師器(4)・須恵器(6・7)・土玉(9)も混入している。掲載した以外にも272片(3,356g)の遺物があるが、混入した古墳時代の土師器が主体である。



第254図 権現山遺跡 SG1区 SD-37 遺物

第141表 権現山遺跡 SG1区 SD-37 出土遺物

番号 種類 品名	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 陶器 鉢	高 残 11.5	外面はタタキ後ナデ。タタキはごく浅く残る。内面は製作時の凹凸が残るが、研削具に利用したためかなり平滑に磨滅している。検出しないが同一個体の可能性を持つもう1片があり、そちらも内面がよく磨滅する。いずれの破片も縦面の磨滅は見られない。常滑産。	2.5YR4/1 赤灰 細密・白・透明細粒多 破片	製1片 西半分
2 陶器 鉢	高 残 3.7 台径 残 13.0	外面は底部中央に1方向ヘラケズリ後、底部外周から体部を回転ヘラケズリ後、高台を斜り付けて回転コナデ。内面は回転コナデで、使用によりよく磨滅して平滑になる。内面にごく薄い緑色の自然釉あり。知多産。	2.5Y6/1 黄灰 やや細密 白・透明細粒 粘やや多、黒色剥出細粒少 破片	SD-37 南部底上 32cm 底 1/4 周 SD-188 5
3 白磁 皿	口 残 11.0 高 残 3.0	口縁端部と内面土端部を口禿にし、外面は残存する破片の下端まで磨滅が見られる。軸はやや厚く、空色を帯びた白色。	2.5GY7/1 オリーブ灰 緻密 破片	口 1/6 周
4 土師器 高杯	高 残 17.5 脚径 5.2 6.1	脚柱部は中央で長く、外面タタヘラケズリ。内面杯底部は1方向ナデ。内面脚部は粘土堀み上げ板を残す程度のナデ。古墳後期の遺物が混入。	10YR7/4 に近い黄橙 やや細密 白・黒・透明・ 赤細粒やや少、白・灰色細 と赤細粒少 やや軟質	脚柱全周 西半
5 埴輪 円筒埴輪	高 残 3.2	外面はタタキ後。破片右下にコナデがあり、この直下に突帯があったと見られる。内面は粘土接合板を残すナメナデ。ハケは4~5本/cm。古墳中期中葉の遺物が混入。	5YR7/6 橙 やや粗い 白・黒・赤・透 明細粒やや多 やや軟質	SD-37 南部底上 2cm SD-188 3
6 須恵器 皿	高 残 4.4	頸部径は推定 11~13cm前後。外面肩部にカキ、内面口クロナデ。古墳後~終末期の遺物が混入。	N4/(B) 灰 やや細密 白・粗粒やや 多、白濁少 破片	SD-37 南部 底 1/12 周 SD-188
7 須恵器 鉢	高 残 5.2	復原径 36~38cm前後。外面は浅い凹線を下部に1本と中部に2本入れて区画した後に6面の工具で波長の長い縞線状文。内面は口クロナデ後、下部にナデ。内外面に黒色の自然釉が薄く付着する。古墳後期~終末期の遺物が混入。	2.5Y5/1 黄灰 やや粗い 白・粗粒やや 少 破片	SD-37 南部底上 2cm 底 1/12 周 SD-188 1
8 鉄製品 火打金	長 残 82mm 幅 残 18mm 厚 2.5~2.9mm	復原径 113mm・縦定高約 32mm。全面に鉄が附着しているため、外形はX線写真から作図し、断面は断面で観察した。箸口部または雲形部の透が左右対称に3割(計6割)あり、両端は斜め反転する。頭部よりも打撃部がわずかに厚いが、打撃部の上辺と下辺では厚さに差がない。	鑑定品	約5割残 破片
9 土師器 丸玉	最大 19.2 最小 20.9 重 7.9	横断面の粘土に棒を通し、両断面の反対側へ引き込んで穿孔する。孔は上面径 3.5mm、下面径 4.6mm。表面はナデ。古墳時代の遺物が混入。	7.5YR5/4 に近い黄 やや細密 白・黒細粒 やや少、白濁少 破片	穴形 西半

SG1区 SD-45 (第259図、写真図版93・94)

SG1区の中央から南側、23-14.5、23.5-14.5、24-14.5、24.5-14.5、25-14・14.5グリッドに所在。古墳時代のSI-17・18・88と、古代のSD-31・中世のSK-172を切る。SD-45がSD-31を切ることは、南北方向の土層断面で確認した。時期不明の土坑SK-79、時期不明のピットP-215・295・300と重複するが新旧は不明。現地調査時にSD-45を先に掘っていることから見て、時期不明のSK-177を切る可能性もある。南北に延びる溝で、長さ42.8mを確認。中軸線はN-11°-Wである。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。幅0.84~1.03m、底面幅0.16~0.72m、深さ0.25~0.33m。覆土は3~4層に分層され、レンズ状自然堆積で、下層はどろみ粒の堆積が顕著である。内外面と破面を研磨に用いた常滑産甕片(1)は、SE-169・SD-37出土品と似るが同一個体かどうかは不明である。他に、古墳時代の土師器が少量に混入していた(壺・甕・高杯・杯など計187片・2.873g)。砥石の小破片1点(21g)も出土している。

第142表 権現山遺跡SG1区 SD-45 出土遺物

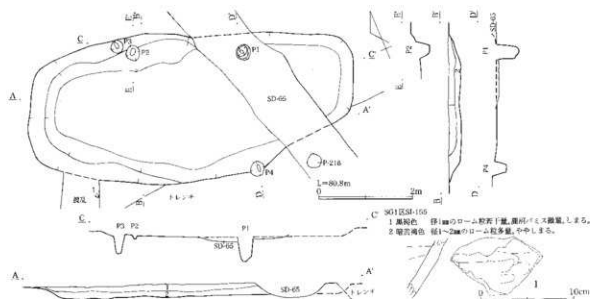
遺物の種類・図番	大きさ (cm・g)	特 徴	色調・胎土・焼成 (または素材)	出土状態・残存状態 (注記)
1 陶器 甕	高 残 8.3	外面タテヘラナデ。破片を研磨具に転用している。内面は製作時の凹凸を残すが、全面が使用により磨滅して平滑になる。外面も高い部分が少し平滑化している。破面面のうち少し磨滅に用いて磨滅している。常滑産。	2.5Y3/1 黄灰 やや粗い、白・黒點・細粒多。白硬少 硬質	
2 須恵器 鉢	高 残 3.2 最大 径 13.4	受部上面がやや長い。外面底部回転ヘラケズリ。回転ナデ・ヘラケズリともにクロコロ左回転の可能性はあるが確実ではない。	5Y5/3 灰 やや破面 白點・細粒少 硬質	体1/8 周
3 石器 砥石	長 残 9.8 幅 10.4 厚 4.7 重 残 681.1	図の下側面は破面で、上側面は使用の自然面。左右と表裏の4面を破面に使用する。左右側面は回転方向に使用した平滑な平面で、左側面には斜位の鋭い傷もある。表裏面は緩い凹凸を持つ破面で、図下側が破損した後もこの2面は使い続けた可能性がある。破面も含めて全面が焼成硬化する。	10YR5/3 に近い黄褐色 やや硬質な砂質	一部欠

第10節 中世の竪穴遺構

SG1区 SI-155 (第255図、写真図版91・92・131)

[位置] SG1区南部の台地平坦面、24.0-15.0グリッド。同じく中世の竪穴遺構SI-296が北西18mにある。時期不明のSD-65に東部を切られる。

[規模と形状] 東西6.94×南北3.20×深さ0.20~0.24mの楕円形で、中軸はN-24°-E。壁はなだらかに外傾し、床面は地山ルームをおおむね平坦にする。床面は全体に締まるが、特に硬化部はない。ピットはP1~P4があり、本遺構に伴うものかどうかは不明確。P1は径33×30cm、深さはSD-65の底面から



第255図 権現山遺跡SG1区 中世の竪穴遺構 SI-155 遺構・遺物

48cm (推定 52cm)。P2 は径 33 × 28 × 深さ 31cm, P3 は径 27 × 25 × 深さ 40cm, P4 は径 31 × 28 × 深さ 30cm。火処・掘方・貼床はない。

【覆土】1・2層はレンズ状の自然堆積で、1層にローム・鹿沼軽石粒を含み、2層にローム粒が多い。

【遺物および出土状況】南西の掘乱部から、中世土器と見られる須恵質の鉢が1片出土した(1)。こね鉢状の器形だが、焼成は軟質で内面磨耗痕もみられない。他に古墳時代の土師器6片が混入していた。

第143表 権現山遺跡 SG1 区 SI-155 出土遺物

番号 種類 図種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 現存状態 目録
1 須恵質 鉢	高 径 6.1 幅 1.4	残存部で後継径 20～24cm程度になると思われる。内面は非回転軌、または緩い回転軌によるヨコナデ。外面は非回転軌のナデ。裏面は灰白色で、内外面の表面が黒色。残存部では内面の使用磨耗痕は見られない。	10YR3/1 オリーブ黒 やや粗い、平透明～粗粒 やや多、白・透明細粒やや少 軟質	SK-183 掘乱内床土 2 cm 体部 1 片 SK-155 2

SG1 区 SI-296 (第256図、写真図版 131)

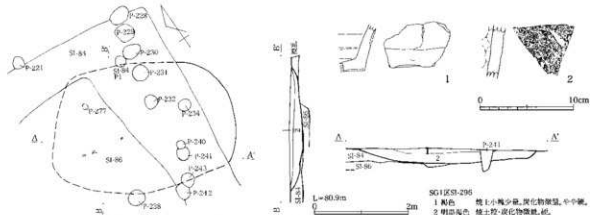
SI-296 は現地調査時には掘乱として扱い、整理作業時に遺構番号を与えたものである。

【位置】SG1 区南部の台地平坦面、24.0-13.5・14.0 と 24.5-13.5・14.0 グリッド所在。同じく中世の竪穴遺構 SI-155 が南東 18m にある。周辺には時期不明のビット群と古墳時代の竪穴建物が多い。南東壁を除く遺構の大部分で古墳時代の SI-84・86 を切る。時期不明の SD-65 と P-241 に切られ、中央部や北東部が時期不明のビット群 SK-225～243 のうちのいくつかに切られていたと見られる。新旧関係を土層で観察したのは P-241 のみだが、他の各ビットもこの竪穴遺構 SI-296 を切る可能性が高いだろう。

【規模と形状】重複する SI-84・86 と同時に掘り下げたため不明な部分が多いが、平面形は隅丸長方形と推定され、長径 3.90 × 短径 2.78 × 深さ 0.10～0.18m、中軸線は N-35°・E。壁は床面から緩く内彎する。床面は内彎気味に傾斜し、中央の平坦面が狭くて断面形は浅い皿状となる。貼床はなく、遺構掘り込み面をそのまま床面とする。柱穴はないが、重複するビット群とした SK-231～243 のうちいくつかが本遺構に伴う可能性も残る。貼床はなく、遺構掘り込み面をそのまま床面とする。

【覆土】自然埋没状で硬く締まり、焼土・炭粒を含む。

【遺物および出土状況】重複する古墳時代の SI-84 出土として取り上げた遺物中に中世土器と見られる土師質鉢 1 片と、常滑産大甕の胴部 1 片がある。これらが本遺構に伴う遺物であろう。土師質鉢(1)は硬質で



第256図 権現山遺跡 SG1 区 中世の竪穴遺構 SI-296 遺構・遺物

第144表 権現山遺跡 SG1 区 SI-296 出土遺物

番号 種類 図種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 現存状態 目録
1 土師質 鉢?	高 径 4.7 幅 22～26 厚 1.2	外面は全体が割断破面。外面体部も割断するが、ヨコヘラズリ後にヨコナデしていた可能性あり。内面は非回転軌のヨコナデ。	7.5YR5/6 明褐色 やや粗い 白・平透明～粗粒多 硬質	底 1/18 周 SI-84・85
2 陶器 大甕	高 径 5.6 厚 1.3	外面は右寄りの部分に叩き面が残る。内面は緩い凸面。7.5GY6/1・緑灰色の釉がごく薄く外周に見られる。常滑産。	2.5YR5/3 に近い赤褐色 やや粗い 白粒粒やや多 やや硬質	重複する SI-84 の 遺物として取り上げた 胴 1 片 SI-84

体部が急角度になる。

第11節 中世の井戸跡

SG1区 SE-169 (第257図、写真図版92・131)

[位置] SG1区中央部の台地平坦面、23.5・14.0・14.5 グリッド。北西に時期不明の井戸 SE-178 が近接する。時期不明の SK-167 に西側を切られる。

[規模と形状] 西側は明確でないが、確認面で東西約3.30m、南北3.53mのほぼ円形で深さ2.97m。断面形は確認面から南側で深さ1.6mまで緩やかに、北側で深さ1.0mまで急傾斜で漏斗状に細くなるが、それ以下は筒状になる。底面は若干鍋底状で、北側は底面から0.7mの高さまで50cmほどオーバーハングする。壁の傾斜が変わる部分の平面形は2.08×1.75mの楕円形である。

[覆土] 1～16層はローム混入の多少により互層をなす。中位の9～13層に礫の混入が顕著で、こぶし大



の石が多く見られた。

【遺物出土状況】瓦質鉢（2・3）は、A-A'断面図に投影すると13層に相当するレベルで出土した。この他に2片が平面図に描いてあるのは、混入した古墳時代の土師器である。最下層の16層では竹と曲物桶底板（4）が出土した。竹は平面図に記入したように4のすぐ南西で、それより約4cm下のレベルで出土した。木筒（7）の出土位置は不明だが、木がよく保存されていたので、帯水層である16層付近と推定される。

【出土遺物】常滑産裏は7片あり、内面が磨耗する6片は同一個体と見られる。このうち胴部下位の破片を図示した（1）。中世の溝SD-37・45で出土した裏片とよく似るが、同一個体かどうかは不明である。在地産の瓦質鉢2片（2・3）は遺構外出土の中世鉢（第260図2）と類似し、同一個体の可能性がある。在地産片口鉢の出現は13世紀後半頃（浅野2005,p.259）、あるいは断面三角形に肥厚する口縁部（2）は13世紀第二四半期～中葉（荒川1998,pp.260-264）とされる。木製品は、曲物桶の底板（4）と側板（5）各1片、溝状加工のある木製品1片（6）、「急急如律令」の呪符木簡1点（7）がある。呪符木簡は2003年頃から所在不明で、残念ながら遺物写真を掲載できず、厚さも確認できなかった。柃目の板材で上下両端は切断、右辺は折損。「急急如律令」の上方には符録。右端に一行9字分ほどが推定されるものの判読できない。裏面に文字は見えない。

自然遺物は少量の竹・細枝・木片と、破損変形した種子1片（桃の核か？）がある。竹は径1.6cmで、長さ約40cmが残っていた。曲物桶の底板1点と自然木片2点は、樹種の調査を行った。桶の底板は、板に加工が容易な針葉樹のモミ属であった。加工痕が認められない木片の樹種はクリとウツギ属で、周辺に生育していた樹木に由来する可能性がある。二次林（雑木林）または集落内にクリがあったことと、林縁部などの陽地に普通に生育する落葉低木であるウツギ属が周辺に生育していたことが推定された。この他に、コガネムシ類の羽2枚が認められている。

バリノ・サーヴェイ株式会社 に依頼して、SG1 区 SE-169 の木質遺物と昆虫遺物を同定した結果を次に示す。

第145表 権現山遺跡 SG1 区 SE-169 出土遺物

番号 種類 説明	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 新土・炭成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 陶器 裏	高 径 9.0	外面はナメヘラナデ。内面は粘土接合面を反映する段を少し残し、使用によって全体がよく磨滅して平滑になる。破面は磨滅しない。こね鉢に転用か？常滑産。	2.5Y5/2 暗灰青 やや軽い 白・半透明細粒 や黄褐色 白・黒・透明細粒 や多量 や黄褐色	体1/4 損 SK-169
2 瓦質土器 片口鉢	口 径 29.6 高 径 6.8	瓦質だがかなり硬質で、やや酸化臭気味。外面は体部ナメヘラナデ後に口縁部口クロナゲし。片口を作ったその両側にユビオサエ。内面は体部に「単なナメヘラ」の後に、口縁部を口クロナゲしてから片口を作る。内面に磨利痕は見られない。3および遺構外出土中世遺物の鉢底部と同一個体の可能性あり。	7.5YR5/4 に近い やや暗褐色 白・黒・透明細粒 や多量 や黄褐色	底土155cm 口1/9 損 SK-169 1
3 瓦質土器 鉢	高 径 3.4 底 径 14～19	底径は正確に算出できない。外底面は回転糸切り磨して1/3底灰味。体部外面は桶ナデ（7）による鋭い凹凸を残す。内面はほとんどが割落する。わずかに残る内面の断面は磨滅しているようで、こね鉢の可能性もある。2および遺構外出土中世遺物の鉢（第260図の2）と同一個体の可能性あり。	7.5Y7/1 灰白 緻密 白・黒・透明細粒 や多量 や黄褐色	底土150cm 底1/8 損 SK-169 2
4 木製品 桶底板	直径 19.8 厚 5.5	柃目の板を使用。片約1/3が破損し、その破片と見られる板は破片だけしかない。ここはおそらく板の接合部ではない。全質の縁辺はややつぶれて変形して、正確な断面の形は不明だが、両の反対面磨でわずかに角を落としていた可能性もある。釘や釘孔は認められない。両面ともに転用した痕跡等もない。	針葉樹（モミ属） 緻密 白・黒・透明細粒 や多量 や黄褐色	底土26～38cm 1/3 割欠 SK-169
5 木製品 桶の側板？	長 径 10.3 幅 径 1.6 厚 0.25	厚さが均一な柃目の薄板で疑く疑い。曲物桶の側板の土縁または下縁部の破片の可能性あり。同一個体と見られる破片は出土していない。	針葉樹材	SK-169
6 木製品 不明木製品	長 径 4.0 幅 径 1.2 厚 0.8	幅3mm・深さ4mm程度の溝を、図示した平面図の中央に持つ。現状で横断面は平円形だが、表面が割れているので本来の形かどうか疑問もある。	樹種不詳	SK-169

第12節 中世井戸跡の木質遺物と昆虫遺体

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

権現山遺跡 SG1 区で検出された、中世の井戸跡 (SE-169) からは、木質遺物 (曲物桶、自然木) や昆虫遺体が検出されている。

今回の分析調査では、井戸跡から出土した木質遺物の樹種同定と昆虫遺体の同定を行う。

2. 木材の樹種

(1) 試料

試料は、中世の井戸跡 (SE-169) から出土した曲物桶の底板 1 点 (試料番号 1) と木 2 点 (試料番号 2, 3) である。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の徒手切片を製作し、ガム・クロラル (抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液) で封入し、プレパラートを作成する。製作したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を第 146 表に示す。木製品は、針葉樹 1 種類 (モミ属) と広葉樹 2 種類 (クリ・ウツギ属) に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

第 146 表 権現山 SG1 区 SE-169 樹種同定結果

番号	遺構	位置	時期	種類	樹種
1	SE-169 (井戸跡)	底面	中世	曲物桶の底板	モミ属
2	SE-169 (井戸跡)	底面	中世	木 (加工なし) 大	クリ
3	SE-169 (井戸跡)	底面	中世	木 (加工なし) 小	ウツギ属

・モミ属 (*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。傷害樹脂道が認められる試料がある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で 1 分野に 1～4 個。放射組織は単列、1～20 細胞高。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は 1～4 列、孔圈外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15 細胞高。

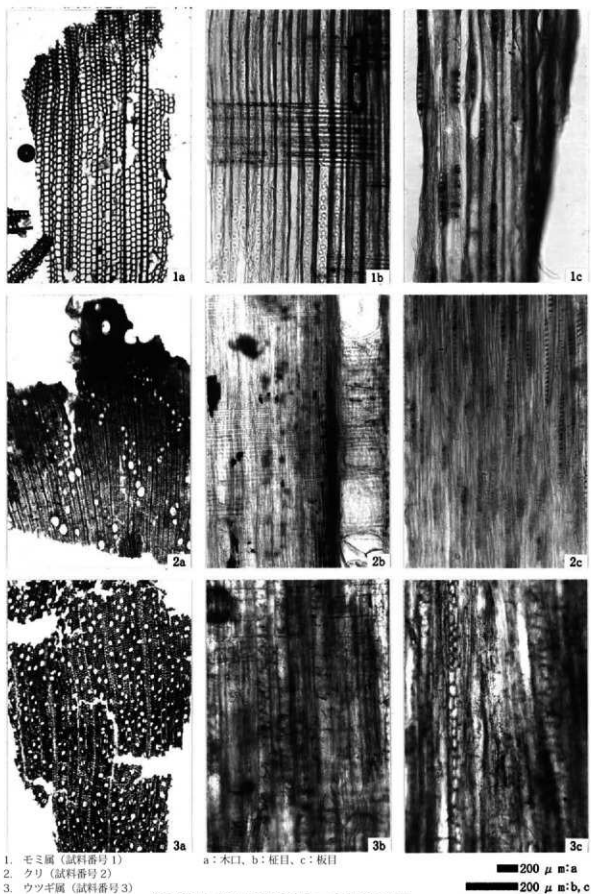
・ウツギ属 (*Deutzia*) ユキノシタ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独であるがまれに複合する。道管は階段穿孔を有し、段数は 20～30。放射組織は大型の異性で、1～4 細胞幅、鞘細胞が認められる。柔細胞はほとんど目立たない。

(4) 考察

曲物桶の底板は、針葉樹のモミ属であった。モミ属は、木理が通直で割裂性が高く、板の製作が容易である。民俗事例 (農商務省山林局, 1912) では、曲物の木材として、スギと共にヒノキに次ぐ良材とされる。このことから、板に加工が容易なモミ属を選択・使用したことが推定される。

木は、いずれも加工痕が認められないことから、周辺に生育していた樹木に由来する可能性がある。樹種は、クリとウツギ属であった。クリは、集落周辺にみられ、薪炭林として維持・管理もされる二次林 (雑木林) の中に生育し、実が食糧としても有用であることから時に栽培もされる。本遺跡でも集落周辺の二次林にクリが生育していたか、集落内でクリが栽培されていたことが推定される。一方、ウツギ属は、林縁部などの陽地に普通に生育する落葉低木であり、遺跡周辺に生育していたことが推定される。



第258図 権現山遺跡SG1区 SE-169の木材

[引用文献]

農商務省山林局編（1912）木材ノ工藝的利用。1308p. 大日本山林會。

3. 昆虫遺体の種類

（1）試料

試料は、中世の井戸跡（SE-169）から出土した昆虫遺体1点（試料番号4）である。

（2）方法

ルーペを用いて各部位の形態的特徴を観察し、現生標本と比較しながら種類を同定する。なお、同定は、藤山家徳先生にお願いした。

（3）結果

・コガネムシ類の一種。（Mimela? sp.）

前翅左右? 2枚。

光沢があり、微細の点刻のある羽だが、いずれも破片で形がわからない。

（4）考察

1試料のみで、しかも遺跡でよく見られるコガネムシ類で、特に古環境に関して有力な情報は期待できない。

第13節 中世の土坑

SG1区SK-137（第259図）

SG1区北部の29.0-12.5グリッド所在。古墳時代の居館内の柵列SA-103のP30を切ると思われる。楕円形で長径1.17×短径1.12m、残存する深さは0.15m。知多（常滑）6a型式期の鉢から、13世紀第3四半期頃と考えられる（中野1994）。礫は磨石に用いた可能性がある。

SG1区SK-172（第259図、写真図版93・131）

SG1区南部の23.5-14.5グリッド所在。中世の溝SD-45に切られ、古墳時代のSK-171を切る。長径3.34×短径3.04m、残存する深さ0.24mのほぼ円形で、壁面と底面の境が不明瞭な形。埋土は自然埋没状の堆積である。常滑産鉢片があり、中世の土坑と考えられる。

第147表 権現山遺跡 SG1区 中世の土坑 出土遺物

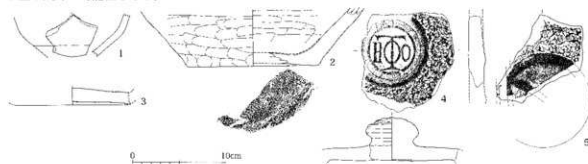
遺物 種類 器種	大きさ (m・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
SG1区SK-137				
1 陶器 鉢	口 径 26.3 底 径 19.8 台 径 13.5	口縁部下の外面を凹ませ、口縁部は少し膨らむ。口縁部には丸味を帯び、端面中央は平坦でごくわずかに凹む。外底面は無調整で、外面体部下部に線な凹みへラウズリ後、高台部分に、ロクロナデもケズリもすべてロクロ回転（時計回り）。内面下平は使用して平直に磨耗する。知多産。	7.5YR7/4 に5.5倍 やや暗褐色 白・透明釉～細 粒多、白・灰黄色少	底土21cm 口1/8周、底1/4周 1
2 石器 磨石	長 10.1 幅 7.5 厚 2.8	自然の扁平な河原石で、表面は磨痕を残さないが細かい凹みがつづれたような磨痕状態。側縁は磨痕していない。表面や破面に薄く鉄分が沈着する。残存重量254.9g。	5Y6/1 灰 緻密でやや硬質な山山岩	底土10cm 一部欠 3
SG1区SK-172				
1 陶器 鉢	口 径 7.5 底 径 16.8	外面は体部タテヘラナデ、外底面は無調整。内面は下位に凹凸を残すが、ほぼ全体を回転コナデ。常滑産。	10YR5/3 に5.5倍 やや暗褐色 白・透明釉～細 粒多	底土5cm 底1/6周 1

第14節 中世～近代の遺構外出土遺物（第260図）

1は近世、2～3は中世と考えられる遺物である。1は陶器の天目碗。X27ラインからX28ラインまでの南北幅20mの範囲を「中央低地」とし、その内部を「南・中央・北」の小地区に3分割してとりあげたうちの「中央低地南」で出土している。2は中世の井戸SE-169で出土した瓦質鉢2片と同一個体の可能性もある。3は鉢か壺で、金色雲母を多く含み、茨城県産品。

近代と推定される遺物は、同一個体ではないが、関連する同種製品と思われる2点を図示した。厚手の蓋

(4) と身 (5) が 1 片ずつあり、型作りで施文した地文や、蓋のアルファベット記号が特徴的である。火消し壺や火鉢の可能性もある。



第 260 図 権現山遺跡 SG1 区 中世～近代の遺構外出土遺物

第 148 表 権現山遺跡 SG1 区 中世～近代の遺構外出土遺物

番号 種類 図録	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土位置 保存状態 注記
1 陶器 大日輪	高 残 4.5	外面下位は回転ヨコヘラケズリ。外面中位以上と内面全面に厚い鉄軌。破面は黄灰色で胎土にやや緻密さを欠く。瀬戸窯登窯第 3 ～ 4 小期の近世遺物。	2.5Y3/2 黒 やや粗い 白・赤顔粒少 破面	X27 ラインから北側 6m までの低地包合層 1/6 頁 中央部破面
2 瓦質土器 鉢	高 残 6.1 底 残 14.0 最大 残 23.8	外底面は回転糸切り磨いで上げ底状。外面体部はナデで、下位ほど粗。内面はヨコナデで、下部は使用により磨滅する。内面最下部から底面にかけて器面が薄く剥落しているもの、こね跡として使用したためと思われる。SE-169 出土の瓦質鉢 2 片の 1 片または両方と同一個体の可能性あり。	10Y8/7.3 に近い黄粉 やや粗い 白・赤・透明 粒多 やや破面	掘込 (暗渠) 内 底 1/4 頁 破面
3 中世土器 不明	高 残 2.2	鉢または壺の破面。外底面は少し上げ底状で、切り磨し面は見られない。内面は中高状でナデまたは回転ナデ仕上げ。透明釉には赤褐色を帯びたものを含む。茨城県産。	7.5Y8/6 緑 やや粗い 金色黄母の粗い 細片と白・透明顔粒少 白・赤・透明顔粒少 やや軟質	表層
4 土師器 甕	口径 5.5 高 残 4.6 厚 1.3	外面の縦断面～断面と内面にロクロナデ。内面中央部に浅い凹みがあり、その周辺には 1 方向ナデ。胴の上面にアルファベット文字「TORO」または「THOO」(両方?) あり。この文字と蓋上面の不規則な文様は型作り。	5Y8/6 緑 やや緻密 白・透明～細 粒と黒黄母・白黄母細片少 破面	23-16 グリッドの確 定調査トレンチ 中央部破 UT-TN SG TX23-16
5 土師器 不明	胴 残 20～30 高 残 7.5 厚 1.8	胴部外面には不規則な地文と匱位の二本線と内底辺 4 区内に曲線を入れた文様が有り、すべて型作りで施文した後に軽ナデ。内面にロクロナデ面等は残していない。	2.5Y4/1 黄灰 やや緻密 白・透明～細 粒と黒黄母・白黄母細片少 破面	23-16 グリッドの確 定調査トレンチ 胴 1 片 UT-TN SG TX23-16

第 15 節 時期不明の集落遺構

時期・性格不明遺構として、SG1 区では SX-131 がある。2 孔 1 組の集落土坑である。

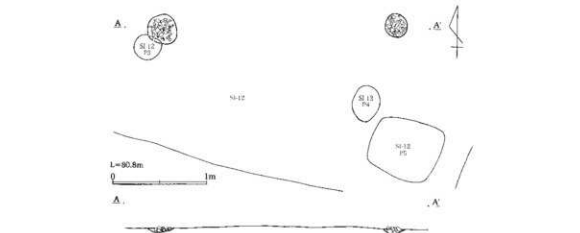
SG1 区 SX-131 (第 261 図、写真図版 94)

SG1 区中央部の台地平坦面の、25.0-13.5・14.0 グリッドにあり、古墳中期の SI-12 の南部に重複する。南と南東に古墳後期の SI-71・88、北に古墳中期の SI-40 がある。古墳中期の SI-12 を切るものとみられる。SI-12 の床面を僅かに掘り込んで、その中に円礫がまぎらまぎと入れられている 2 箇所の集落土坑である。西側土坑は SI-12 南西主柱穴と重複し、径 30cm・深さ 10cm。東側土坑は径 25cm・深さ 10cm。いずれも底面は椀状で、2 ～ 5cm 大の円礫を充填している。主軸はほぼ東西方向で、両土坑の距離は 2.21m である。礫以外の遺物は出土しなかった。

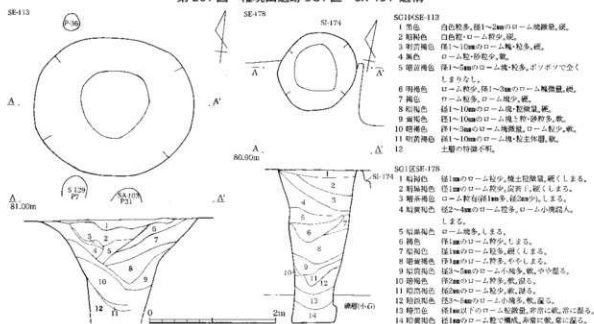
第 16 節 時期不明の井戸跡

SG1 区 SE-113 (第 262 図左、写真図版 94)

SG1 区内の北寄り、28.5-12.5 グリッドに位置する。古墳中期の居館の外郭溝 SD-95 の南側の内側にあたり、北東 1m に中世の SK-137 がある。古墳時代の柵列 SA-103・129 と重複する位置にあり、その柱穴を切ると思われる。下部は未調査。平面は東西に長い楕円形で、確認面で 2.53 × 2.17m、中軸は N-89°-E。



第261図 権現山遺跡 SG1区 SX-131 遺構



第262図 権現山遺跡 SG1区 時期不明の井戸 SE-113・178 遺構

深さは1.5m以上である。断面形は確認面から0.9mの深さまで漏斗状に細くなり、それ以下は円筒状に窄まると思われる。壁の傾斜が変わる部分の平面形は1.18×1.08mのほぼ円形である。黒色土主体の土にローム主体の土が薄く互層をなして堆積している。確認した覆土1~11層のうち、3・5・7・9・11層にロームが多い。遺物は古墳中期以降の土師器高杯が3片混入していただけで、この井戸の時期を示すものはない。正確な時期は不明だが、おそらく中世以降の井戸と推定される。

SG1区 SE-178 (第262図右、写真図版94)

SG1区中央部の台地平坦面、23.5-14.0グリッドに位置する。中世の井戸 SE-169 が南東に近接する。古墳時代の SI-174 の南壁を切る。確認面の平面形は円形で1.26×1.21m、深さ2.42m。確認面から深さ60cmの西側で緩く変換するが、断面形は緩やかに窄まるほぼ円筒形。底面は平坦で0.74×0.65mの円形である。東側底面から25cmほどの高さで若干オーバーハングするのは、地山の礫層が崩れた部分かもしれない。覆土1~14層はロームの混入の多少によりほぼ互層をなしている。この遺構に伴うとみられる遺物はなく、古墳時代の土師器が5片混入していた。正確な時期は不明だが、おそらく中世以降の井戸と推定される。

第17節 時期不明の溝状遺構

SG1区SD-4 (第263図)

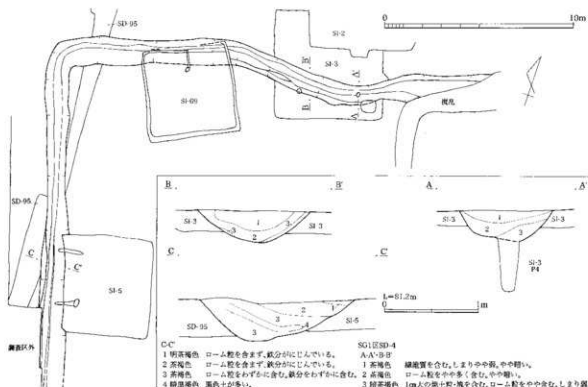
SG1区の北部、東側低地に突出する台地の南縁付近にあり、27.5-12.5、28-12.5、28.5-12.5～13.5グリッド所在。古墳中期のSI-3・5・69と、古墳中期の居館区画溝SD-95を切る。SG1区SI-5の土層断面図では視乱溝の上端をわずかにSD-4が切るので、SD-4も視乱と見なせる可能性が高い。

N-18°-Wの方で南北に18m伸び、ほぼ直角に折れて東西方向に23m確認された。SI-3の部分で若干南に彎曲する。東端は視乱溝に切られ、低地まで延びていたかは不明。南端は確認面よりも浅くなり消滅する。溝幅は確認面で0.92～1.48m、溝底で0.18～0.52m、深さ0.33～0.43m。断面は開いた逆台形ないし皿状で、南東側がなだらかで、北西側がやや急である。覆土は3～4層の自然堆積。遺物は古墳中期後半～末(本遺跡編年の3～4段階)の土師器が28片あり、混入品と見られる。長径2～7cm大の小礫が若干あるが、流水があったのか、または人為的に捨てられたものか、明らかでない。断面形状の類例からみて、近世以降の溝と推定される。

SG1区SD-65 (第264図右、写真図版94)

SG1区南側の23-15、23.5-15、24.5-15グリッドに位置する。古墳時代のSI-62を切る。中世の竪穴遺構SI-155と時期不明のSK-186を切ると推定される。時期不明のP-218との新旧は不明。南端は削平される。北端の先にある北関東自動車道路調査区で調査されていないのは、視乱溝と判断したのであろう。

南北に延びる溝で、長さ23.0mを確認。中軸はN-16°-W。断面形は南側は開いた逆台形で底面は狭くほぼ平坦である。中央から北側は底面から立ち上がり次第に緩く半円状になる。西壁がやや急で東壁がなだらかな断面形は、近世以降の溝によく見られる特徴である。確認面幅0.48～1.54m、底面幅0.28～0.90m、深さ0.38～0.52mである。覆土下層の2層にローム粒が多い。遺物は古墳時代の土師器を主体として混入品が24片ある。この溝の時期を示す遺物はない。



第263図 権現山遺跡SG1区 SD-4 遺構



SG1区 SD-67 (第264図左)

SG1区北部の29-12、29.5-12～14、30-13～14グリッド所在。古墳時代のSI-32・126・136を切る。古墳時代居宅の区画施設SD-95とSA-103・P36を切ると見られる。時期不明のSK-96や、古墳時代居館内の時期不明ビットP-53・116と重複するが、新旧は不明。東西方向にやや彎曲しつつ続き、中軸はN-75°-E、長さは確認できる部分で37.6m。断面は皿状で、底面は若干凹凸がある。東端は低地に入る部分で、遺構を確認できなかった。確認幅は1.88～3.28m、底面幅1.08～2.80m、深さは0.33m。

溝の南側法面に広い段を持ち、土層断面A-A'では4層が溝底に堆積した5層を切ることで、埋没しかけた溝を掘り返したことがわかる。その際に、旧期の溝底よりも新期の溝底が少し北側に移動している。土層断面A-A'の3層以上や、B-B'では旧期と新期の重複ラインを認められないので、2本の溝が重複しているというよりも、溝底堆積土をさった時に溝の南法面に段が形成されたと表現するのが適切である。覆土は4層に分層された。遺物は杯を主体とする古墳時代土師器が21片(99g)あり、混入品である。

SG1区 SD-175 (第264図上、写真図版94)

SG1区南側の23.0-14.0・14.5グリッドに位置する。時期不明のSK-176を切る。東西に延びる溝で、長さ6.71mを確認。東端は削平される。西側は調査区外。中軸はN-83°-Wである。幅が狭くて浅く、断面形は潰れた逆台形で、底面はほぼ平坦である。確認幅は0.63～0.76m、底面幅0.42～0.56m、深さ0.14～0.17m。覆土は2層に分層された。遺物は土師器壺類の胴部が1片混入していただけである。

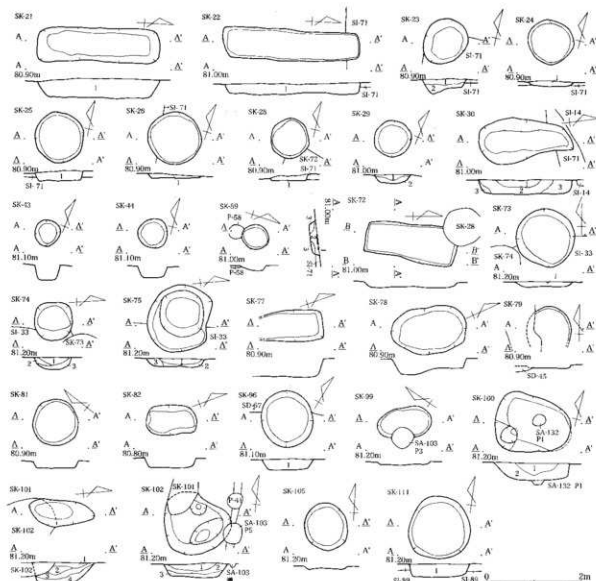
第18節 時期不明の土坑 (第265～267図、写真図版95～98)

遺物や火山灰(白色粒子)から時期を決定できなかった土坑は権現山遺跡SG1区に59基ある(第265～267図・第149表)。SK-21・22・72・115は長方形土坑で、「イモ穴」と通称されている近代以降の農業関連土坑かとみられる。ただし、SG1区には中世の遺構も存在するので中世の可能性もある。SK-142の磔1点は縄文時代の磨石の可能性があるが、断定はできない。

時期不明の土坑のうち、SK-96・99・100・101・102・112・115は古墳時代の居館内にある。しかしいずれも居館と関連する古墳時代遺構になる可能性は低い。SK-25・96・138・143・151・152・154・185・186も形状や埋土の特徴などから見て古墳時代土坑の可能性を持つが、確実ではない。この他にも、円形で平底の土坑がいくつか見られるので、古墳時代の円筒形土坑を含む可能性もある。SK-185・186は底面が平坦な大形土坑で、竪穴建物と考えることは形状からみて難しい。

第149表 権現山遺跡SG1区 時期不明の土坑

遺構名	グリッド	形状	重複関係	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	中軸線	覆土
SK-21	24.5-14.0	長方形	SI-71を切る	2.60	0.68	0.39	N-88°-E	単層
長方形土坑。古墳後期のSI-71より新しい。周辺のSK-22・72等とともに近代以降の農業関連土坑(イモ穴)か、または中世のものか。								
SK-22	24.5-14.0	長方形	SI-71を切る	2.89	0.55	0.25	N-88°-E	単層
長方形土坑。古墳後期のSI-71より新しい。周辺のSK-21・72とともに近代以降の農業関連土坑(イモ穴)か、または中世のものか。								
SK-23	25.0-13.5	楕円形	SI-71を切る	1.03	0.89	0.31	N-44°-E	単層
円形土坑。古墳後期のSI-71より新しい。周辺のSK-23～26・28は近い時期と見られる。								
SK-24	25.0-13.5	円形	SI-71を切る	0.98	0.92	0.10		単層
円形土坑。古墳後期のSI-71より新しい。周辺のSK-23～26・28は近い時期と見られる。								
SK-25	25.0-13.5	円形	SI-71を切る	1.05	1.02	0.21		単層
円形土坑。古墳後期のSI-71より新しい。SI-71からの混入と思われる椀形の手椀・鉢といった土師器片と磔1点出土。周辺のSK-23～26・28と近い時期と見られる。								
SK-26	24.5-13.5、25.0-13.5	円形	SI-71を切る	1.14	1.11	0.10		単層
円形土坑。古墳後期のSI-71より新しい。周辺のSK-23～26・28は近い時期と見られる。								
SK-28	24.5-13.5・14.0、25.0-13.5	円形	SI-71を切る	0.85	0.80	0.15		単層
円形土坑。古墳後期のSI-71より新しい。SI-71からの混入と思われる土師器片が出土。周辺のSK-23～26・28は近い時期と見られる。								
SK-29	25.0-14.0	円形	重複なし	0.80	0.75	0.18		自然堆積
円形土坑。付近には他に円形土坑はない。								



SG1区SK-21
1 暗褐色 径1~3cmのローム塊と粒・ハードローム塊少量, 破。

SG1区SK-22
1 暗褐色 径1~3cmのローム塊・ハードローム塊少量, ローム粒少量, 破。

SG1区SK-23
1 黒色 ローム粒少量, 破。
2 暗黄褐色 径1~3mmのローム塊少量, ローム粒少量, 破。

SG1区SK-24
1 暗褐色 今半粒石粒少量, ローム粒少量, 破。

SG1区SK-25
1 暗褐色 今半粒石粒・径1~5mmのローム塊少量, 破。

SG1区SK-26
1 暗褐色 径1~2mmのローム塊少量, ローム粒少量, 破。

SG1区SK-27
1 暗黄褐色 ローム粒少量, 破。1mmの今半粒石粒少量, 破。

SG1区SK-28
1 暗褐色 径1mmのローム塊少量, ローム粒少量, 破。

SG1区SK-29
1 暗褐色 径1mmのローム塊少量, ローム粒少量, 破。

SG1区SK-30
1 暗褐色 径1~10mmのローム塊少量, ローム粒少量, 破。

SG1区SK-31
1 暗褐色 径1~10mmのローム塊少量, 今半粒石粒少量, 破。

SG1区SK-32
1 暗褐色 径1mmのローム塊少量, 破。

SG1区SK-33
1 暗褐色 ローム粒をわずかに含む。しまりや中, やや明るい。

SG1区SK-34
1 明褐色 径1mmのローム粒少量, しまる。

SG1区SK-35
1 明褐色 径1~2mmのローム粒少量, しまる。

SG1区SK-36
1 明褐色 径1mmのローム粒若干, 径3~4mmのローム粒少量, しまる。

SG1区SK-37
1 暗褐色 ローム粒を全体に含む。しまり強。

SG1区SK-38
1 暗褐色 ローム粒を全体に含む。しまりや中。

SG1区SK-39
1 暗褐色 ローム粒を全体に含む。3mm大のローム塊を含む。しまりや中, やや明るい。

SG1区SK-40
1 暗褐色 ローム粒を全体に含む。3mm大のローム塊を下部に含む。しまり強, やや明るい。

SG1区SK-41
1 暗褐色 5mm大のローム塊を多く含む。しまり強。

SG1区SK-42
1 暗褐色 径1~6mmのローム塊・粒少量, 炭化物粒少量, 破。

SG1区SK-43
1 暗褐色 径1~2mmのローム塊・炭化物粒少量, ローム粒少量, 破。

SG1区SK-44
1 暗褐色 径1~10mmのローム塊・粒少量, 破。

SG1区SK-45
1 暗褐色 径1mmのローム塊少量, ローム粒少量, 破。

SG1区SK-46
1 暗褐色 径1~3mmのローム塊・粒少量, 破。

SG1区SK-47
1 暗褐色 径1~3mmのローム塊・粒少量, 破。

SG1区SK-48
1 暗褐色 径1~3mmのローム塊・粒少量, 破。

SG1区SK-49
1 暗褐色 径1~3mmのローム塊・粒少量, 破。

SG1区SK-50
1 暗褐色 径1~3mmのローム塊・粒少量, 破。

SG1区SK-51
1 暗褐色 径1~3mmのローム塊・粒少量, 破。

SG1区SK-52
1 暗褐色 径1~3mmのローム塊・粒少量, 破。

SG1区SK-53
1 暗褐色 径1~3mmのローム塊・粒少量, 破。

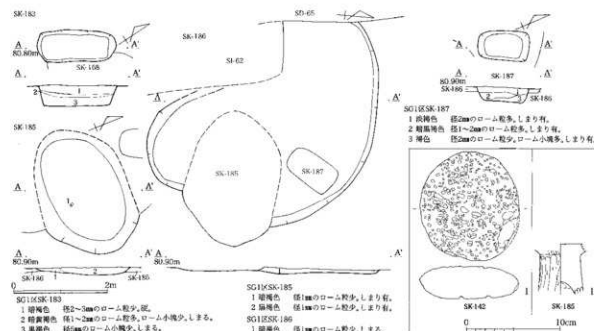
SG1区SK-54
1 暗褐色 径1~3mmのローム塊・粒少量, 破。

SG1区SK-55
1 暗褐色 径1~3mmのローム塊・粒少量, 破。

第265図 権現山遺跡SG1区 時期不明の土坑(1)遺構

SK 30	24.5-13.5	長橋円形	SI-71を切る	SI-14より新?	1.99	0.54	0.31	N 6° E	自然堆積
不整形門形だが、底面は整った長方形。SK 21 等と同様の土坑と見られる。古墳後期の SI 71 を切る。図面では重複しないが、写真から古墳後期の SI 14 を切る可能性が高い。									
SK 43	27.0-13.0	円形	重複なし		0.55	0.52	0.33		不明
円形土坑。古墳時代の土坑 SK 41・42 に近接するが、遺物がないため時期を断定できない。									
SK 44	27.0-13.0	円形	重複なし		0.63	0.61	0.24		不明
円形土坑。古墳時代の土坑 SK 41・42 に近接するが、遺物がないため時期を断定できない。									
SK 59	28.0-13.0	円形	P 58 を切る		0.59	0.53	0.10		不明
浅い円形土坑。時期不明の P 58 (中央部ビッド層) より新しい。									
SK 72	24.5-13.5・14.0	長方形	SI-71 を切る	SK 28 と新旧不明	1.95	0.65	0.22	N 78° W	不明
長方形土坑。SI 71 からの混入と思われる遺物が出た。SK 21・22 等と同様の可能性が高い。SK 28 と重複し新旧不明。									
SK 73	29.5-13.0	円形	SI-33 と重複		1.24	1.20	0.12		単層
円形土坑。古墳中期の SI 33 と重複するが、土坑を先に調査していることから SK 73 の方が新しい可能性がある。									
SK 74	29.5-13.0	円形	SI-33 と重複		0.87	0.80	0.25		不明
円形土坑。古墳中期の SI 33 と重複するが、土坑を先に調査していることから SK 74 の方が新しい可能性がある。									
SK 75	29.5-13.0	楕円形	SI-33 と重複		1.47	1.21	0.18		不明
円形土坑。古墳中期の SI 33 と重複するが、土坑を先に調査していることから SK 75 の方が新しい可能性がある。									
SK 77	23.0-15.0	長方形	重複なし		残 1.2	0.53	0.40	N 74° W	不明
長方形土坑。南側は削平される。									
SK 78	23.0-14.5, 23.5-14.5	楕円形	重複なし		1.58	0.94	0.47	N 68° W	不明
楕円形土坑。南側は削平される。									
SK 79	23.0-14.5	円形か	SD-45 と重複		残 0.8	1.00	0.07		不明
円形土坑か。南側は削平される。中身の SD-45 と重複するが新旧の関係は不明。									
SK 81	23.5-14.5	円形	重複なし		0.99	0.94	0.17		不明
円形土坑。									
SK 82	23.0-14.0・14.5	長方形	重複なし		1.06	0.58	0.22	N 68° W	不明
長橋円形または楕円長方形。									
SK 96	29.5-12.5	円形	SD-67 と重複		1.17	1.08	0.25		単層
円形土坑。図録内に存在。図録満 SD 95 より古い SK 94 に近接するため、SK 96 も図録以前の可能性がある。東側にある SI 89 を切る円形土坑 SK 91・92・93・111 等と関係する可能性もある。時期不明の SD 67 との新旧関係は不明。									
SK 99	30.5-12.5	楕円形	SA-103 と重複		1.16	0.65	0.10	N 44° W	不明
浅い楕円形土坑。図録内にあるが欄外 SA-103 と重複することから、関連はないと見られる。SA-103 との新旧は不明。									
SK 100	30.5-12.5	楕円形	SA-132 を切る		1.64	0.90	0.38	N 84° E	不明
楕円形土坑。図録内にあるが欄外 SA-132 を切ることで関連はないと見られる。土坑内西側にビッド状の掘り込みあり。									
SK 101	30.0-12.5, 30.5-12.5	長橋円形	SK 102 に切られる		1.68	0.50	0.43	N 77° W	不明
不整形土坑。時期不明の SK 102 より古い。									
SK 102	30.0-12.5	楕円形	SK 101 を切る	SA-103 との新旧不明	1.35	0.84	0.29	N 58° E	不明
楕円形土坑。図録内にあるが欄外 SA-103 と重複することから、関連はないと見られる。平面図にビッド状の掘り込みあり。									
SK 105	29.0-13.0	楕円形	重複なし		1.01	0.90	0.06		単層
円形土坑。近くには図録満より古い SK 94 や、古墳後期の SI 89 を切る SK 91・92・93 等の円形土坑が存在するが、これらとの時間的関係は不詳。									
SK 111	29.5-13.0	円形	SI 89 を切る		1.37	1.29	0.29		単層
円形土坑。古墳後期の SI 89 覆土上で確認しているものでそれよりも古い。									
SK 112	30.0-12.0	楕円形	重複なし		1.51	1.05	0.76	N 10° E	不明
楕円形土坑。図録内にあるが関連があるかは不明。									
SK 115	29.0-12.5, 29.5-12.5	長方形	SA-103 を切る		3.39	0.65	0.30	N 52° E	不明
長方形土坑。図録内に存在し、複凡満 SD 36 と平行する。近代以降の農業関連土坑 (イモカ) と見られる。									
SK 138	28.0-13.0	円形	重複なし		0.94	0.93	0.20		自然堆積
円形土坑。編まりがやや弱いものでそれほど古い時期の土坑ではないと見られる。									
SK 140	24.0-14.5	円形	ビッド重複		0.98	0.93	0.07		単層
円形土坑。北側にビッド状の掘り込みがあり別遺構の可能性もある。周辺の SK 141・142 等の円形土坑と近い時期の可能性もある。									
SK 141	24.0-14.5	円形	SI 174 を切る		1.35	1.23	0.11		自然堆積
円形土坑。出上した土師器・土師片は古墳後期の SI 174 から混入したと考えられる。周辺の SK 140・142 等の円形土坑と近い時期の可能性もある。									
SK 142	24.0-14.5	楕円形	重複なし		1.49	1.08	0.19	N 55° W	自然堆積
楕円形土坑。出上した層 1 点は縄文時代の磨石か。周辺にある SK 140・141 等の円形土坑と近い時期の可能性もある。									
SK 143	24.0-14.5	円形	P 144 に切られる	SI 18 より古? 残 0.96	0.80	0.08			単層
円形土坑。時期不明の P 144 (SG1 区南部ビッド層) よりも古い。古墳後期の SI 18 に切られる可能性もある。									
SK 151	24.0-15.0	円形	重複なし		1.16	1.07	0.28		不明
円形土坑。円形土坑集中部にある。相対する壁際から 2 基のビッドが確認されているが、本土坑に伴うかは不明。古墳時代の可能性もある。									
SK 152	24.0-15.0	円形 (直近不整)	重複なし		1.51	1.31	0.19	N 76° W	単層
円形土坑で底面は不整形。円形土坑集中部にある。古墳時代の可能性もある。									
SK 154	23.5-15.0	長橋円形	重複なし		2.14	1.33	0.19	N 28° E	単層
四隅のある楕円形土坑。									
SK 156	24.0-15.0・15.5	長方形	重複なし		2.14	0.99	0.10	N 40° E	単層
長方形土坑。									
SK 157	24.0-14.5	円形	SK 158 と重複		0.65	0.52	0.24		不明
小楕円形土坑。SK 158 と重複し新旧不明。									
SK 158	24.0-14.5	楕円形か	SK 157 と重複		2.04	残 1.31	0.22	N 12° W	重複あり?
2 つの土坑が重複しているように見える。土層断面図によると、SK 158・159 が重複しており、ここに土坑が 2 基存在する可能性がある。土師器・土師片が出上しているが、遺構の時期を示すものではないと思われる。土坑内にビッド状の掘り込みが 2 本あるが、遺構に伴うかは不明。南半は確認調査時のトレンチにより底面付近まで削られる。									

SK 160b	23.5-15.0、24.0-15.0 長方形土坑。土坑内ドビットが存在するため、土坑を SK 160b、ビットを P 160a と区分した。時期不明の P 160a (SG1 区南部ゾット群) よりも古い。		1.48	0.60	0.14	N 44° E	単層
SK 161	23.5-15.0、24.0-15.0 長方形土坑。周辺の長方形土坑と同時期か。	重複なし	1.68	0.51	0.08	N 55° W	単層
SK 162	23.0-15.5、23.5-15.5 長方形土坑。周辺の長方形土坑と同時期か。	重複なし	1.39	0.53	0.23	N 56° W	人為堆積
SK 163	23.5-15.5 長方形土坑。周辺の長方形土坑と同時期か。	重複なし	1.55	0.67	0.24	N 56° W	単層
SK 164	23.5-15.0・15.5、24.0-15.0・15.5 長方形土坑。周辺の長方形土坑と同時期か。北端が確認調査時のトレンチに切られる。	重複なし	1.96	0.66	0.23	N 48° W	単層
SK 165	24.0-15.5 長方形土坑。周辺の長方形土坑と同時期か。南端を除くほぼ全体が確認調査時のトレンチに切られる。	重複なし	1.09	0.38	0.14	N 53° W	単層
SK 166	23.5-14.0 長方形土坑。周辺の長方形土坑と同時期か。	重複なし	2.13	0.45	0.28	N 87° E	単層
SK 167	23.5-14.0 長方形土坑。周辺の長方形土坑と同時期か。中世の片打 SE-169 より新しい。出土した土師器壺が裏の胴部片は他遺構の混入物。覆土上位に根が見える。	SE-169 を切る	3.25	0.50	0.48	N 87° E	単層
SK 168	23.0-14.0、23.5-14.0 不整形土坑。SK 173・183 より古い。	SK 168 を切る	1.84	残 1.70	0.09		
SK 173	23.0-14.0、23.5-14.0 長方形土坑。SK 168 を切る。周辺の長方形土坑と同時期か。	SK 168 を切る	1.69	0.69	0.21	N 71° W	
SK 176	23.0-14.0 櫛門形土坑。形または櫛門形土坑。周辺の長方形土坑 SK 173・183 等と同時期か。	SD-175 に切られる	0.80	残 0.65	0.09	N 22° E	単層
SK 177	23.5-14.5、24.0-14.5 長方形土坑。出土した土師器壺が裏の胴部片は混入物と思われる。中世の溝 SD-45 を先に調査していることから、SD-45 に切られる可能性もある。	SD-45 より古?	2.42	0.63	0.14	N 12° E	単層
SK 181	23.5-14.5・15.0 長方形土坑。周辺の長方形土坑と同時期か。	重複なし	2.40	0.68	0.42	N 27° W	
SK 182	23.5-15.0 長方形土坑。周辺の長方形土坑と同時期か。	重複なし	2.32	0.96	0.15	N 7° W	
SK 183	23.0-14.0、23.5-14.0 長方形土坑。SK 168 を切る。周辺の長方形土坑と同時期か。	SK 168 を切る	1.67	0.58	0.45	N 52° W	
SK 185	23.5-15.5 櫛門形土坑。土師高杯と壺が裏の片が出土。遺物から見た古墳時代の可能性もあるが、出土遺物が少なく詳細不明なので時期は断定しにくい。	SK 186 を切る	2.86	2.00	0.16	N 6° W	
SK 186	23.5-15.0・15.5 不整形土坑。SK 185 より古。SG12 より新?	SK 185 より古 SG12 より新?	5.37	残 2.70	0.13		単層
SK 187	23.5-15.5 長方形土坑。SK 186 を切る。周辺の長方形土坑と同時期か。	SK 186 を切る	1.10	0.62	0.34	N 30° E	



第 267 図 権現山遺跡 SG1 区 時期不明の土坑 (3) 遺構・遺物

第150表 権現山遺跡 SG1区 時期不明の土坑 出土遺物

番号 種類	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 (胎土・焼成 または素地)	出土状態 保存状態 注記
SG1区 SK-142				
1 礎	径 11.5 幅 10.3 厚 3.6	多孔質であるが、孔部は外の表面は磨滅するので、縄文時代の磨石の可能性が高い。側面には軸のある面は形成されない。重量 526.6g。	5Y5/1 灰 多孔質安山岩	一部欠
SG1区 SK-185				
1 土師器 高杯	脚柱 4.2 高 残 5.3	外面は杯底部と脚柱部をタテヘラズリ。内面杯底部は磨滅して調整不詳。脚内面はやや粗なヨコナデ。	5YR6/8 緑 やや粗い 白・黒・透明細粒 と赤黒粒や少やや散見	底直上 脚柱全周 に赤黒粒

第19節 時期不明の柱穴状土坑群

10.19.1. SG1区中央部の柱穴状土坑群 (第268図)

SG1区中央部の台地東端斜面付近にある17基の柱穴状土坑群である(P-58・60・61・64および202～214)。26-13グリッドから28-13グリッドにかけて、X26.5～28.5、Y13.0～14.0ラインの間に分布する。古墳時代のSI-5・6・66の周辺にあり、南にSI-70が近接する。P-58は時期不明のSK-59に切られる可能性がある。P-204～208は弧状に並ぶ。土層断面を記録したのはP-58・60・61・64のみである。200番台以降の数字を持つ13基は、現地調査時には遺構番号を与えず、航空写真測量図に記録された小穴に整理作業時点で番号を与えたもので、断面図も作成していない。このような扱いをしているので、かなり新しい時期の擾乱とも考えられる。したがって、レベル計測値から断面図は作成せず、深さを第151表に示すだけとする。

第151表 権現山遺跡 SG1区 調査区中央部の柱穴状土坑群

番号	長さ	短径	深さ	備考
P-58	33	32	3	SK-59に切られると見られる
P-60	37	27	13	重複なし
P-61	39	30	27	重複なし
P-64	43	37	20	重複なし
P-202	50	40	61	重複なし 低地に向かう斜面
P-203	30	25	8	重複なし 低地に向かう斜面
P-204	40	40	21	重複なし P-204～208は弧状に並ぶ
P-205	50	45	31	重複なし P-204～208は弧状に並ぶ
P-206	40	40	32	重複なし P-204～208は弧状に並ぶ
P-207	45	40	27	重複なし P-204～208は弧状に並ぶ
P-208	50	40	36	重複なし P-204～208は弧状に並ぶ
P-209	30	20	20	重複なし 低地に向かう斜面
P-210	40	35	3	重複なし 低地に向かう斜面
P-211	25	20	2	重複なし 低地に向かう斜面
P-212	30	20	8	重複なし 低地に向かう斜面
P-213	30	25	2	重複なし 低地に向かう斜面
P-214	40	30	28	重複なし 低地に向かう斜面

(大きさの単位は cm)

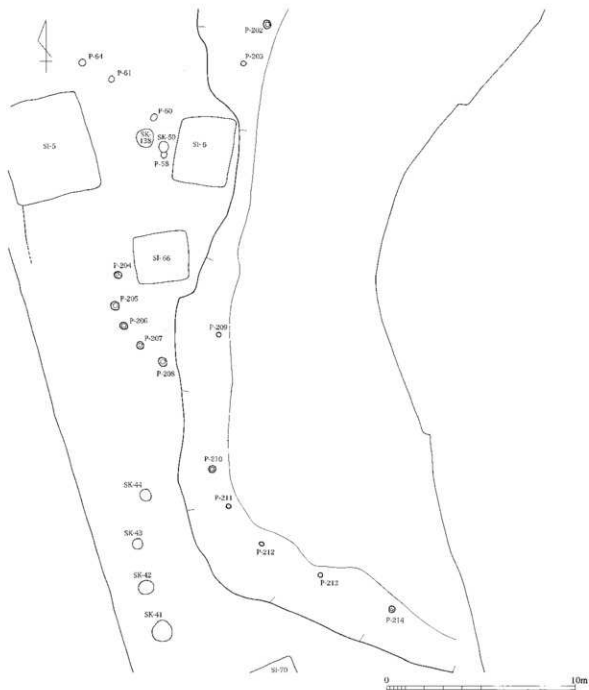
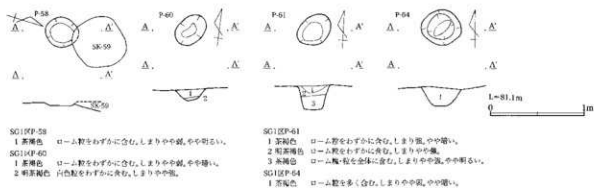
10.19.2. SG1区南部の柱穴状土坑群 (第269図)

SG1区南部の台地平坦面にあり、24.0-13.5・14.0、24.5-13.5・14.0グリッドに位置する。97基の柱穴状土坑群である。古墳時代の竪穴建物跡群(SI-18・84・86・87・174・179)や中世竪穴SI-296付近にあり、これらと重複するものが多い。柱穴状土坑群は西側調査区外へ広がるとも考えられる。周囲には古墳時代の竪穴建物跡として東にSI-18、北東にSI-17、北にSI-14・71がそれぞれある。

SI-84・86・87や中世竪穴SI-296付近にある31基(第269図)の中には、これら竪穴との前後関係が確認できるものを2基含む。P-239がSI-84・86を切り、P-241はSI-84と中世のSI-296を切る。これ以外はSI-84・86・296との新旧を確認できない時期不明遺構だが、平面的な位置がまとまることなどからすべて中世以降の可能性がある。なおSI-84・86・87の柱穴との区別は不明確で、これらの竪穴に伴うピットもあるかもしれない。P-231からは煤が付着する自然石が出土した(第269図下)。この他には、遺物は出土しなかった。

SI-174・179付近の48基(第270図)では、そのうちSI-174と重複する柱穴状土坑7基(P-193～

第 19 節 時期不明の柱穴状土坑群



第 268 図 権現山遺跡 SG1 区 中央部柱穴状土坑群 P-58・60・61・64・202 ~ 214 遺構

197・282・283)をSI-174の床面で確認・図化した。これ以外、航空写真測量図に記入されたピットに整理作業時点で番号を与えた遺構で、現地調査時には遺構としての番号を与えなかったもので、時期の新しい掘乱穴の可能性もある。遺物は出土しなかった。

SI-18周辺の11基(第271図上段)のうち、P-144以外の9基は、現地調査時には遺構としての番号を与えなかったもので、時期の新しい掘乱穴の可能性もある。遺物は出土しなかった。

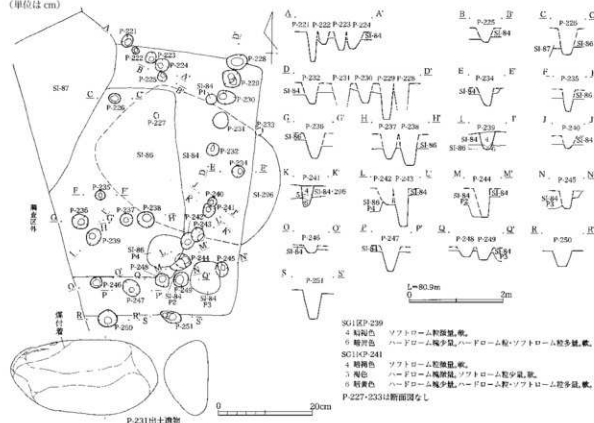
中世竪穴遺構SI-155の周辺の7基(第272図下段)のうちP-216～220の5基も、現地調査時には遺構としての番号を与えなかったもので、時期の新しい掘乱穴の可能性もある。遺物は出土しなかった。

第152表 権現山遺跡 SG1区 調査区南部の柱穴状土坑群

番号	長さ	短径	深さ	備考
P-144	37	33	26	SK-143を切る
P-150a	25	20	12	SK-150bを切る
P-160a	30	27	21	SK-160bを切る
P-193	31	30	39	SI-174床面で確認 SI-174と同時に掘かれた以降
P-194	26	24	48	SI-174床面で確認 SI-174と同時に掘かれた以降
P-195	27	24	65	SI-174床面で確認 SI-174と同時に掘かれた以降
P-196	27	24	52	SI-174床面で確認 SI-174と同時に掘かれた以降
P-197	25	23	64	SI-174床面で確認 SI-174と同時に掘かれた以降
P-215	44	37	—	SD-45と重複し新旧不明 断面図なし
P-216	36	29	36	重複なし
P-217	40	39	44	重複なし
P-218	32	30	34	SD-65と重複し新旧不明
P-219	38	27	18	重複なし
P-220	39	36	18	重複なし
P-221	29	24	63	SI-84を切る可能性あり
P-222	17	15	27	SI-84を切る可能性あり
P-223	25	22	39	SI-84を切る可能性あり
P-224	29	27	35	SI-84を切る可能性あり
P-225	20	19	30	SI-84と中世竪穴SI-296を切る可能性あり
P-226	25	22	56	SI-84・86を切る可能性あり
P-227	—	—	—	SI-84・86と中世竪穴SI-296を切る可能性あり 断面図なし
P-228	44	32	—	SI-84を切る可能性あり
P-229	43	36	76	SI-84を切る可能性あり
P-230	40	30	41	SI-84と中世竪穴SI-296を切る可能性あり
P-231	35	33	—	SI-84と中世竪穴SI-296を切る可能性あり
P-232	27	27	44	SI-84と中世竪穴SI-296を切る可能性あり
P-233	—	—	—	中世竪穴SI-296を切る可能性あり SI-84写真に撮影 断面図なし
P-234	28	25	38	SI-84と中世竪穴SI-296を切る可能性あり
P-235	22	20	47	SI-84・86を切る可能性あり
P-236	35	31	54	SI-84・86を切る可能性あり
P-237	27	25	53	SI-84・86を切る可能性あり
P-238	36	34	65	SI-84・86と中世竪穴SI-296を切る可能性あり
P-239	36	30	38	SI-84・86を切る重複関係が判明 自然堆積 P-241と覆土が同質(第269図)
P-240	20	18	27	SI-84と中世竪穴SI-296を切る可能性あり
P-241	30	25	46	SI-84と中世竪穴SI-296を切る重複関係が判明 自然堆積 P-239と覆土が同質
P-242	33	27	35	中世竪穴SI-296やSI-84・86・SI-86P4を切る可能性あり P-243と重複し新旧不明
P-243	30	25	81	中世竪穴SI-296やSI-84を切る可能性あり P-242と重複し新旧不明
P-244	29	不明	61	中世竪穴SI-296やSI-86P4・SI-84P2を切る可能性あり
P-245	31	不明	38	中世竪穴SI-296やSI-84・86やSI-84P3を切る可能性あり
P-246	25	23	15	SI-84を切る可能性あり
P-247	39	33	53	中世竪穴SI-296やSI-84を切る可能性あり
P-248	30	28	21	中世竪穴SI-296やSI-84・86を切る可能性あり
P-249	30	26	36	中世竪穴SI-296やSI-84を切る可能性あり
P-250	40	36	34	SI-84を切る可能性あり
P-251	45	25	61	中世竪穴遺構SI-296やSI-84を切る可能性あり
P-252	24	21	23	SI-179掘方面で確認 新旧は不明
P-253	23	21	11	SI-179掘方面で確認 新旧は不明
P-254	26	22	15	SI-179掘方面で確認 新旧は不明
P-255	19	16	23	SI-179掘方面で確認 新旧は不明
P-256	38	20	29	SI-179掘方面で確認 新旧は不明
P-257	24	24	14	SI-179掘方面で確認 新旧は不明
P-258	23	22	14	SI-179掘方面で確認 新旧は不明
P-259	22	21	13	SI-179やP-260と重複し新旧不明 SI-179掘方面で確認
P-260	19	19	11	SI-179やP-259と重複し新旧不明 SI-179掘方面で確認
P-261	28	27	26	SI-179掘方面で確認 新旧は不明
P-262	22	21	10	SI-179とP-263に重複し新旧不明 SI-179掘方面で確認
P-263	18	16	9	SI-179とP-262に重複し新旧不明 SI-179掘方面で確認
P-264	21	14	15	SI-179掘方面で確認 新旧は不明
P-265	25	17	13	SI-179掘方面で確認 新旧は不明
P-266	22	21	10	SI-179掘方面で確認 新旧は不明
P-267	27	25	14	SI-179掘方面で確認 新旧は不明
P-268	25	23	10	SI-179掘方面で確認 新旧は不明
P-269	43	42	23	SI-179掘方面で確認 新旧は不明
P-270	36	31	12	SI-174・179と重複し新旧不明 SI-174掘方面で確認
P-271	24	23	16	SI-179掘方面で確認 新旧は不明

P.272	21	19	13	SI.174・179と重複し新旧は不明	SI.174 掘方底面で確認
P.273	18	15	9	SI.174・179と重複し新旧は不明	試掘トレンチ底面で確認
P.274	23	20	18	SI.174・179と重複し新旧は不明	試掘トレンチ底面で確認
P.275	27	17	12	SI.174・179と重複し新旧は不明	試掘トレンチ底面で確認
P.276	21	16	11	SI.174・179と重複し新旧は不明	試掘トレンチ底面で確認
P.277	30	15	15	SI.174・179やSI.179P5と重複し新旧は不明	試掘トレンチ底面で確認
P.278	30	24	14	SI.174・179やSI.179P5と重複し新旧は不明	試掘トレンチ底面で確認
P.279	35	25	—	SI.174 掘方底面で確認	新旧は不明 断面図なし
P.280	34	29	—	SI.174 掘方底面で確認	新旧は不明 断面図なし
P.281	41	35	30	SI.174 掘方底面で確認	新旧は不明 断面図なし
P.282	39	36	23	SI.174 床面で確認	SI.174 と同時期かそれ以降
P.283	27	25	22	SI.174 床面で確認	SI.174 と同時期かそれ以降
P.284	24	23	—	SI.174 掘方底面で確認	新旧は不明 断面図なし
P.285	27	21	—	SI.174 掘方底面で確認	新旧は不明 断面図なし
P.286	23	20	—	SI.174 掘方底面で確認	新旧は不明 断面図なし
P.287	24	22	—	SI.174 掘方底面で確認	新旧は不明 断面図なし
P.288	26	25	35	SI.174 掘方底面で確認	新旧は不明 断面図なし
P.289	23	19	—	SI.174 掘方底面で確認	新旧は不明 断面図なし
P.290	28	22	—	SI.174 掘方底面で確認	新旧は不明 断面図なし
P.291	60	45	19	SI.174 掘方底面で確認	新旧は不明 断面図なし
P.292	31	21	—	SI.174 掘方底面で確認	新旧は不明 断面図なし
P.293	45	35	35	SI.174 掘方底面で確認	新旧は不明 断面図なし
P.294	40	35	26	SI.174 掘方底面で確認	新旧は不明 断面図なし
P.295	49	54	52	SD.45 と重複し新旧は不明	SD.45 と重複し新旧は不明
P.296	33	26	22	SI.18 掘方底面で確認	新旧は不明
P.297	39	38	38	SI.18 掘方底面で確認	新旧は不明
P.298	27	30	29	SI.18 掘方底面で確認	新旧は不明
P.299	29	28	38	SI.18 掘方底面で確認	新旧は不明
P.300	35	31	31	SI.18 掘方と SD.45 の底面で確認	新旧は不明
P.301	29	24	16	SI.18 掘方底面で確認	新旧は不明
P.302	31	28	22	SI.18 掘方底面で確認	新旧は不明
P.303	24	21	20	SI.18 掘方底面で確認	新旧は不明

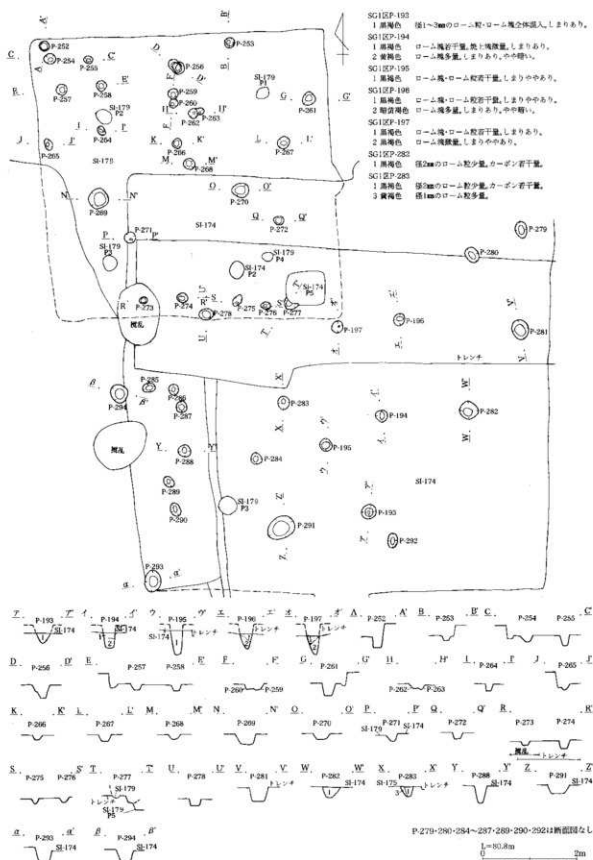
(単位: cm)



第 269 図 権現山遺跡 SG1 区 南部柱状土坑群 (1) P-221 ~ 251 遺構・遺物

第 153 表 権現山遺跡 SG1 区 P-231 出土遺物

番号 種類 図録	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・胎泥 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 硬 厚	31.2 15.8 10.1	自然の河原石で、加工・使用痕は見られない。片側端部の全周に鋭が深く付着している。重量 6950.0g。	5/6/1 灰 石英母岩	底土 34cm 底土 SI.84.7



第270図 権現山遺跡 SG1区 南部柱穴状土坑群 (2) P-193~197・252~294 遺構

— 467 —

第20節 SG1区東側低地部の調査(第273図、写真図版131)

古墳時代集落に係る遺構・遺物の有無を確認するために、SG1区の東側低地が集落に向かって増入する部分の調査をX27～X29ライン付近で実施した。また、ア・ア'とイ・イ'とウ・ウ'の3箇所の土層断面を図示した(第273図上段)。1層は表土で、近～現代の掘乱溝(溝1層～溝10層)より新しい。主に2層付近で古墳時代遺物が出土している。2層(明黒色土)に少量含まれる白色粒子は、次段落に述べる「低地B-B'」のテフラ分析と「低地C-C'」の土層観察結果を参考にすると、古墳後期初頭の極名ニツ岳沢川テフラ(Hr-FA)および1108年の浅間Bテフラ(As-B)と判断される。層状の堆積は確認できず、粒子だけが認められた。周辺遺跡で観察されるテフラとしては他に1128年の浅間柏川テフラ(As-Kk)もあるが(藤田2003,p.249)、この低地では確認されていない。

ア・ア'とイ・イ'とウ・ウ'の他に、低地B-B'および低地C-C'の土層断面で土壌を採取してテフラ分析を実施している(本章次節参照)。低地B-B'は29-14杭付近に所在した北西～南東方向の断面であり、低地C-C'はX28よりも北6m付近に所在した東西方向の断面である。両断面ともに土層図や写真などの調査記録が作成されていないので、土層柱状図を参照していただきたい(第274図)。

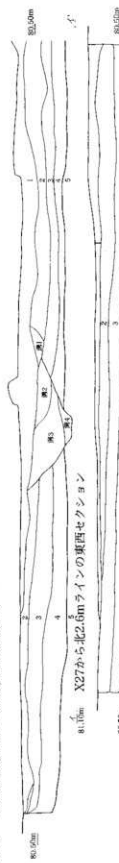
低地埋土の上部は、X28ラインより南側では2m四方の小グリッドを設けて掘り下げを行った(第273図左)。古墳中期の石製模造品や中期中～後葉(本遺跡編年の2～3段階)の土師器を中心とし、少量の古墳後期土師器・須臾器や中世こね鉢片も出土した。下部の埋土層は重機を用いて除去し、地山ローム層まで掘り下げた。

【出土遺物】低地部分で出土した遺物のうち、注意をひくものを図示した。3の砥石は、非常に硬質のホルンフェルスで、SG1区SI-17など東谷・中島地区の古墳時代集落でしばしば使われている石材である。4は土製丸玉。5は両面穿孔の可能性があり、6は剣形品。石製模造品はSG1区ではSI-5などにある。7は刀子かどうか不詳。有袋鉄斧(8)は本遺跡の北関東自動車道路調査A区SI-015にもあり、周辺遺跡では立野遺跡5区SK-162、磯岡北2号墳、西赤堀6号墳にある。

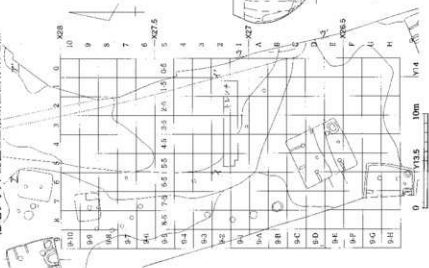
第154表 権現山遺跡 SG1区 東側低地 出土遺物

番号 種類 不明	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 新土・焼成 (または素材)	出土状態 現存/破損 記号
1 土師器 杯	口 径 12.8 高 8.7 底 径 6.4 最大 径 14.4	外底面は断面が欠けて調整不明。外面体部タテハラナデと内面体部ナメハラケズリ後に内外面口縁部ヨコナデ。	2.5Y4/2 暗灰黄 やや粗い 白・透明細～細 粒やや多。白・灰色礫と黒 細砂少 中や軟直	SG6東方の低地 口1/12間。底1/2間 28-13北トレンチ、北 トレンチ一括
2 土師器 杯	口 径 14.0 高 6.4 底 径 5.3 最大 径 14.3	外底面と外面体部上位にナデ、外面中～下位にヨコハラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部ナデ後、やや鋭なナメハラミ方式。	2.5Y4/4 白～白褐 やや粗密 白粗～細粒中 多。黒・透明細砂少 中や軟直	SG6東方の低地 口1/4間。底1/4間 28-13北トレンチ、北 トレンチ一括
3 石製 砥石	長 径 10.2 幅 径 9.9 厚 4.0	扁平な自然の河原石を利用し、右側の面を研削に用いて平潤に磨耗する。反対面は使用していない。隅の下の縁と1側縁は破損と見られる割傷痕。重量527.5g。	7.5Y5/1 灰 緻密で非常に硬質なホルン フェルス	小タグリッド3-3 下部欠 3-3
4 土製品 丸玉	径 12.8～ 13.2 厚 8.1 重 1.36g 孔 2.9×3.1	両面に円形の平面部を付す。焼成前に穿孔し、孔縁は両面ともほぼ円形。現状で述べ上げや黒色地埋は見えない。	7.5Y5/3 白～白褐 緻密 赤・黒・透明微粒微 中や軟直	小タグリッド3-4 完形 3-4
5 石製模造品 不明	長 径 2.0 幅 径 1.9 厚 0.5	左側の面は本来の表面を留めている可能性がある。研削痕は見られず、即座に百った跡はない。他の面はすべて破損面。孔は途中に最小径があり径3.20～3.50mm。両面穿孔かまたは穿孔時に溝の軸が曲った可能性あり。	10GY2/1 緑黒 緻密で磨削の発達した滑石 片岩	小破片 銘地No.1 960906
6 石製模造品 不明	長 径 42.5 幅 13.05 厚 4.5 重 4.27	孔縁は両面ともに1.50mmで、右側の面にわずかに穿孔割痕あり。左側の面は上部がやや斜めに薄くなり、または右下部に形制時の割痕面を残す。両面とも2～3方向にやや粗く研削する。側面は左右両面ともに粗い斜位の研削痕。	10Y2/1 黒 緻密で磨削の発達した滑石 片岩	小タグリッド4-7付近 1部欠 27-13 グリッド 9607.18
7 不明鉄製品	長 径 5.5 幅 1.8 厚 0.3 重 7.86	刀身の両部破片の可能性もあるが、左右どちら側にも刃部が認められない。刀子ではないか。または刀子の刃部が錆で隠れて厚くなり、確認できなくなったものかもしれない。木質や有機質は見えない。		29-14より6m西・ 6m南(南北溝のすぐ 南) 29-14 グリッド
8 鉄製品 鉄斧	長 11.9 幅 3.9 厚 約3 重 445.2	錆が厚く覆着しているため、X線写真から図を作成。刃部の合わせ目には3～4mmの間が空くと推定される。刃部断面形状は柳形かと思われるが不明確。刃部の底面がX線がよくわかるので、これから刃部側が急に厚くなっていると考えられる。		小タグリッド4-10 完形 4-10

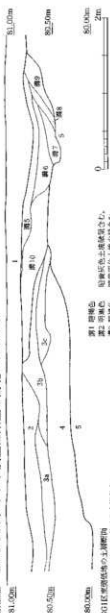
ア. X28から北4mラインの東西セクション



低地グリッド配置と土層断面図作成地点

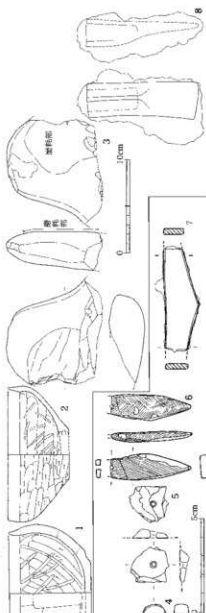


2. 26.5-14.0グリッド調査区東壁の南北セクション



第1 遺構色
第2 遺構色
第3 遺構色
第4 遺構色
第5 遺構色
第6 遺構色
第7 遺構色
第8 遺構色
第9 遺構色
第10 遺構色
第11 遺構色
第12 遺構色
第13 遺構色
第14 遺構色
第15 遺構色
第16 遺構色
第17 遺構色
第18 遺構色
第19 遺構色
第20 遺構色
第21 遺構色
第22 遺構色
第23 遺構色
第24 遺構色
第25 遺構色
第26 遺構色
第27 遺構色
第28 遺構色
第29 遺構色
第30 遺構色
第31 遺構色
第32 遺構色
第33 遺構色
第34 遺構色
第35 遺構色
第36 遺構色
第37 遺構色
第38 遺構色
第39 遺構色
第40 遺構色
第41 遺構色
第42 遺構色
第43 遺構色
第44 遺構色
第45 遺構色
第46 遺構色
第47 遺構色
第48 遺構色
第49 遺構色
第50 遺構色
第51 遺構色
第52 遺構色
第53 遺構色
第54 遺構色
第55 遺構色
第56 遺構色
第57 遺構色
第58 遺構色
第59 遺構色
第60 遺構色
第61 遺構色
第62 遺構色
第63 遺構色
第64 遺構色
第65 遺構色
第66 遺構色
第67 遺構色
第68 遺構色
第69 遺構色
第70 遺構色
第71 遺構色
第72 遺構色
第73 遺構色
第74 遺構色
第75 遺構色
第76 遺構色
第77 遺構色
第78 遺構色
第79 遺構色
第80 遺構色
第81 遺構色
第82 遺構色
第83 遺構色
第84 遺構色
第85 遺構色
第86 遺構色
第87 遺構色
第88 遺構色
第89 遺構色
第90 遺構色
第91 遺構色
第92 遺構色
第93 遺構色
第94 遺構色
第95 遺構色
第96 遺構色
第97 遺構色
第98 遺構色
第99 遺構色
第100 遺構色

基本図には黄色ローマ字で示す。土層は必ず黄色を示す。



第273図 権現山遺跡SG1区 東側低地 土層断面図・遺物

第21節 権現山遺跡 SG1区におけるテフラと遺構の年代・古環境

10.21.1. 分析結果の概要と考古学的評価

SG1区の台地上で確認した古墳時代中期の居館と、古墳中～後期・中世集落に関係する遺構・遺物を確認するため、SG1区の東側低地が集落側に隣入する部分の調査をX27～X29ライン付近で実施した。その際、低地B-B'と低地C-C'の断面で土壌を採取し、テフラ検出分析・¹⁴C年代測定、珪藻・植物珪酸体・花粉分析、種実同定を実施した。低地B-B'は29-14杭付近に所在した北西～南東方向の断面、低地C-C'はX28の北6m付近に所在した東西方向の断面である(第274図の土層柱状図)。B-B'とC-C'は土層断面図や写真などの記録がないが、少し南側で記録した低地の土層断面(第273図)に類似した堆積状況と考えられる。

【東側低地層のテフラ】古墳後期初頭に降下したHr-FAは、台地寄り地点では谷底(ローム層・砂礫層)から約90cm上位に、低地寄り地点では約20cm上位にある。第273図に対応させた場合、およそ2～3層が古墳前期(As-C)と後期(Hr-FA)から古代末(As-B)までに相当するのであろう。

As-C下位では、縄文早期のK-Ah由来の火山ガラスがごく少量認められた。SG1区の縄文早期土器は、熊糸文系と田戸下層式が各遺構に少量混入していた。縄文時代遺構は前期の土坑1基で、遺物包含層はない。

【東側低地層の堆積環境】Hr-FA直上層の樹木花粉はコナラ垂属の落葉広葉樹が認められ、権現山2区(第7章5節)と同様である。珪藻分析の結果は、B-B'セクションのII帯がHr-FA直下の古墳中期、それ以外が縄文～弥生時代に相当すると見られる。いずれの時期においても沼沢湿地環境が優勢で、大きな流れがない環境と推定された。花粉分析結果からみて、台地寄りの位置では乾湿を繰り返す環境も考えられた。

【東側低地層の植物珪酸体と古墳時代の稲作】古墳前期のAs-C上層では、イネの植物珪酸体が認められない。権現山SG1区で古墳前期の遺構・遺物が確認されないことに対応する。遺構が多い中～後期では、Hr-FA混層とHr-FA直下層でイネの植物珪酸体が認められた。周辺で稲作を行ったとも考えられるが、700～1,500個/gという低い値なので混入の疑いも残る。イネの植物珪酸体密度がより高い北方の杉村遺跡(第7章4節)や権現山4区(第9章15節)の方が、水田の候補地である。

【SG2区の須恵器蓋杯】次回報告書に掲載する権現山遺跡南部のSG2区では、中期後葉のTK-23型式の須恵器蓋杯が完形で出土した。この内部ではイネ植物珪酸体が、蓋接合部ではヒエ属型の植物珪酸体が認められた。密度はそれぞれ700個/g程度の低い値で、ヒエ属が栽培種なのか野生種かは不明である。完形の杯にイネ植物珪酸体が入る状況があったということができる。

【古墳時代中期居館のテフラ】居館の時期を推定するために、居館を構成する遺構(掘立柱建物SB-106の北辺柱穴P11、柵列SA-103の北辺柱穴P19と東辺柱穴P2、掘立柱建物または柵列S-129の柱穴P4、外郭溝SD-95)の覆土からテフラを検出した。SA-103のP19は、調査時名称「SK-108」として分析結果が報告されているが、深さやP-108(調査時名称SK-108)との関係から、SA-103のP19と推定した。

結果として、居館を構成する各遺構は古墳前期のAs-C降下後、後期初頭のHr-FA降下前と考えられた。外郭溝の出土土器が古墳中期中～後葉であることと矛盾しない。

【古代～中世溝のテフラ】出土遺物から中世の溝と考えられたSD-37と、それよりも先行する溝SD-31覆土のテフラ検出分析を実施した。SD-37が1108年に降下したAs-Bより新しいという結果は、考古学の所見と合致する。SD-31は最上層にAs-B起源の軽石が濃集するので、それより古い可能性が指摘された。この結果が妥当であれば、SD-31→As-B降下(1108年)→SD-37の順序が考えられる。この所見に従い、SG1区SD-31を古代の溝として扱うこととした。

10.21.2. 権現山遺跡 SG1 区における土層とテフラ

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

権現山遺跡 SG1 区の発掘調査では、構築年代や堆積年代の不明な遺構や土層が認められた。土層の中にはテフラ粒子の混入が認められたことから、地質調査を行い遺構覆土や土層の記載を行うとともに、採取された土壌試料についてテフラ検出分析を行い、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラの検出同定を行って、遺構の構築年代および土層の堆積年代に関する資料を収集することになった。

調査分析の対象となった地点は、SB-106 (P11)、SK-108 [編者註: SA-103 の P19 と考えられる]、S-129 (P4)、SA-103 (P2)、SD-95 (4 区)、SD-95 (D セクション)、SD-31、SD-37 の 8 遺構および低地 B-B' 台地寄りセクション、低地 B-B' 低地寄りセクション、C-C' セクションの 3 地点である。

2. 土層の層序

(1) SB-106 (P11)

掘立柱建物形成する P11 の覆土は、下位より灰色砂質土のブロックを多く含む暗褐色土 (層厚 7cm)、いわゆるロームのブロックを少量含む暗褐色土 (層厚 12cm)、ロームのブロックを多く含む暗褐色土 (層厚 10cm)、ローム粒子を含む暗褐色土 (層厚 24cm)、暗褐色土 (層厚 5cm) から構成されている (第 274 図 1)。

(2) SK-108 [編者註: これは SA-103 の北辺柱穴 P19 を指すと考えられる]

外側の柵列を形成する本遺構の覆土は、暗褐色土 (層厚 36cm) からなる (第 274 図 2)。

(3) S-129 (P4)

掘立柱建物 (?) の柱穴である本遺構の覆土は、ロームのブロックを少量含む暗褐色土 (層厚 40cm) からなる (第 274 図 4)。

(4) SA-103 (P2)

外側の柵列を形成する本遺構の覆土は、暗褐色土 (層厚 25cm) からなる (第 274 図 3)。

(5) SD-95 (4 区・A セクション)

古墳時代の居館に伴う溝と考えられているこの遺構の覆土は、下位よりロームのブロックを含む黒褐色土 (層厚 8cm)、ローム粒子混じり暗褐色土 (層厚 11cm)、暗褐色土 (層厚 6cm)、黒褐色土 (層厚 8cm) からなる (第 274 図 5)。

(6) SD-95 (D セクション)

この地点では、下位より暗褐色土 (層厚 9cm)、ロームブロックを少量含む暗褐色土 (層厚 14cm)、白色粗粒火山灰混じり黒褐色土 (層厚 7cm) が認められる (第 274 図 6)。

(7) SD-31

古墳時代中期の住居址を切って造られたこの溝の覆土は、下位よりローム粒子混じり暗褐色土 (層厚 17cm)、暗褐色土 (層厚 16cm)、灰色がかった暗褐色土 (層厚 5cm)、暗褐色土 (層厚 8cm)、白色粗粒火山灰混じり黒色土 (層厚 9cm)、灰褐色土 (層厚 13cm) からなる (第 274 図 7)。

(8) SD-37

奈良、平安時代に構築された可能性のあるこの溝の覆土は、下位よりロームブロックを少量含む暗灰色土 (層厚 12cm)、ローム粒子を多く含む暗褐色土 (層厚 7cm)、暗灰色土 (層厚 6cm)、灰色粗粒火山灰混じり暗灰色土 (層厚 7cm)、暗灰色土 (層厚 11cm)、暗褐色土 (層厚 15cm)、褐色土 (層厚 7cm)、灰褐色土 (層厚 11cm) から構成されている (第 274 図 8)。

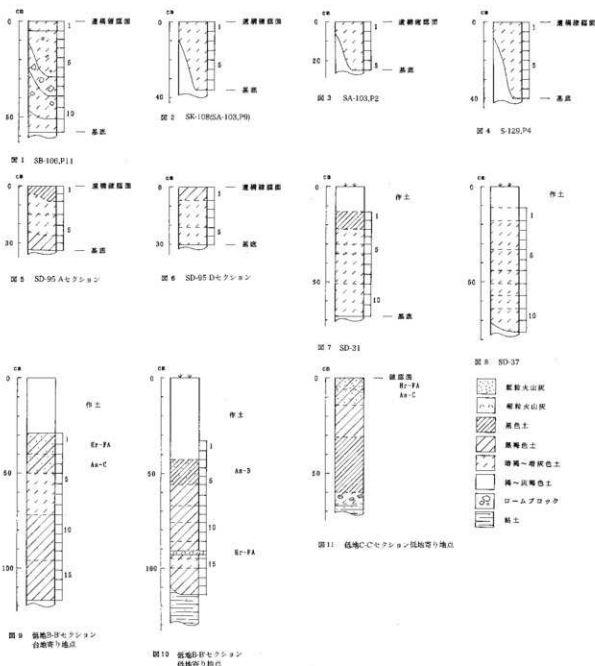
(9) 低地 B-B' 台地寄りセクション

ここでは、低地部の土層を構成する最下位の若干粘質を帯びた黒灰色土 (層厚 21cm) の上位に、下位よ

り黒灰色粘質土（層厚 21cm）、黒褐色土（層厚 24cm）、暗褐色土（層厚 22cm）、黄色粗粒火山灰に富む黒褐色土（層厚 10cm）、白色粗粒火山灰および黄色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚 11cm）、盛土（層厚 29cm）の連続が認められる（第 274 図 9）。

(10) 低地 B-B' 低地寄りセクション

ここでは、砂混じり灰色粘土層（層厚 15cm）の上位に、下位より黒灰色粘質土（層厚 14cm）、暗褐色粘質土（層厚 5cm）、黒灰色土（層厚 2cm）、黄灰色細粒火山灰層（層厚 2cm）、黒灰色土（層厚 5cm）、黒灰色土（層厚 10cm）、灰色粘土層のブロック混じり黒褐色土（層厚 9cm）、黒褐色土（層厚 11cm）、黄褐色粗粒火山灰混じり黒色土（層厚 13cm）、作土（層厚 43cm）の連続が認められる（第 274 図 10）。



第 274 図 権現山遺跡 SG1 区 土層柱状図とテフラ分析試料（数字はテフラ分析の試料番号）

(11) C-C' セクション

この地点では、砂混じり黄灰色粘土層（層厚 5cm 以上）の上位に、下位より灰色粘土層のブロック混じり暗灰色土（層厚 6cm）、黒色土（層厚 29cm）、黒褐色土（層厚 17cm）、黄色粗粒火山灰に富む黒褐色土（層厚 8cm）、白色粗粒火山灰及び黄色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚 6cm）が認められる（第 274 図 11）。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

上述 11 地点のうち、C-C' セクションを除く 10 地点において基本的に 5 cm ごとに採取された土壌試料の中から、5 cm おきの合計 55 点の試料を選択してテフラ検出分析を行った。分析は次の手順で行われた。

- 1) 試料 10g を秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第 155・156 表に示す。SB-106 (P11) では、試料番号 9 および 5 を除くいずれの試料からも、灰白色でスポンジ状によく発泡した軽石（最大径 1.2mm）が検出された。軽石の班品には斜方輝石と単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から 4 世紀初頭に浅間火山から噴出した浅間 C 軽石（As-C、新井、1979）に由来すると考えられる。

SK-108〔編者註：SA-103 の P19〕においても、いずれの試料からも灰白色でスポンジ状によく発泡した軽石（最大径 1.1mm）が認められた。軽石の班品には斜方輝石と単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から As-C に由来すると考えられる。

S-129 (P4) でも分析を行ったいずれの試料からも灰白色でスポンジ状によく発泡した軽石（最大径 1.2mm）が検出された。軽石の班品には斜方輝石と単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から As-C に由来すると考えられる。

さらに SA-103 (P2) でも、いずれの試料からも灰白色でスポンジ状によく発泡した軽石（最大径 1.2mm）が認められた。軽石の班品には斜方輝石と単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から As-C に由来すると考えられる。

SD-95 (4 区) では、試料番号 7、5、3 から灰白色でスポンジ状によく発泡した軽石（最大径 1.1mm）が認められた。軽石の班品には斜方輝石と単斜輝石が認められる。この軽石も、その特徴から As-C に由来すると考えられる。また試料番号 1 には、As-C 起源の軽石のほか、白色の発泡のあまりよくない軽石（最大径 0.8mm）が少量認められた。この軽石は、班品に角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その岩相やテフラの分布と本遺跡の位置の関係などから、6 世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳沢川テフラ層（Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）に由来すると考えられる。

SD-95 (D) においても、試料番号 5 および 3 から灰白色でスポンジ状によく発泡した軽石（最大径 1.1mm）が認められた。軽石の班品には斜方輝石と単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から As-C に由来すると考えられる。また試料番号 1 には、As-C 起源の軽石のほか、白色の発泡のあまりよくない軽石（最大径 1.0mm）が比較的多く認められた。この軽石は、班品に角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その岩相やテフラの分布と本遺跡の位置の関係などから、Hr-FA に由来すると考えられる。

SD-31 では、試料番号 11 から 3 にかけての試料に Hr-FA に由来する白色の発泡のあまりよくない軽石（最大径 1.7mm）が認められる。試料番号 1 には比較的多く発泡した淡褐色軽石（最大径 0.7mm）が多く含まれている。軽石の班品には、斜方輝石と単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から 1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間 B テフラ（As-B、新井、1979）に由来すると考えられる。

SD-37では、いずれの試料にも比較的多く発泡した淡褐色軽石（最大径0.8mm）が比較的多く含まれている。軽石の班晶には、斜方輝石と単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴からAs-Bに由来すると考えられる。またいずれの試料にも、Hr-FAに由来する白色軽石（最大径1.7mm）が少量認められる。

低地B-B' 台地寄りセクションでは、試料番号4にAs-Cに由来する灰白色でスポンジ状によく発泡した軽石（最大径1.1mm）が認められた。また試料番号2には、As-Cに由来する軽石のほかにHr-FAに由来する白色の発泡のあまりよくない軽石（最大径0.8mm）が少量含まれている。なお試料番号6には、淡褐色で平板状のいわゆるバブル型の火山ガラスがごく少量認められる。この火山ガラスは、その特徴から約6,300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、町田・新井、1978）に由来すると考えられる。

低地B-B' 低地寄りセクションでは、最下位の試料番号17にAs-Cに由来する灰白色でスポンジ状によく発泡した軽石（最大径0.8mm）が少量認められる。また試料番号13には、Hr-FAに由来する白色の発泡のあまりよくない軽石（最大径2.8mm）が多く認められる。さらに試料番号3および1には、As-Bに由来する淡褐色軽石（最大径1.3mm）が多く含まれている。

3. 考察—遺構の構築年代および土層の堆積年代について

SB-106 (P11)、SK-108 [= SA-103のP9]、S-129 (P4)、SA-103 (P2) の4遺構の覆土には、As-C起源の軽石が認められたものの、Hr-FA起源の軽石は検出されなかった。このことから、本遺構の構築年代についてはHr-FA降灰前で、As-C降灰後の可能性が考えられる。またSD-95 (4区) およびSD-95 (D) でも、分析の対象とした試料のいずれからもAs-C起源の軽石が検出された。また覆土中にHr-FAの降灰層準を示唆するHr-FA起源の軽石の濃集が認められた。したがって、SD-95の構築については、Hr-FA降灰前の可能性がきわめて高く、しかもAs-C降灰後と推定される。

SD-31では、分析対象となった最下位の試料中にHr-FAに由来する軽石が認められた。また試料番号1には、As-Bの降灰層準を示すAs-B起源の軽石の濃集も認められた。したがって、本遺構の構築は、As-B降灰前でHr-FA降灰後の可能性が考えられる。またSD-37では、いずれの試料にもAs-Bに由来すると考えられる軽石が認められた。このことから、本遺構の構築についてはAs-B降灰後の可能性が考えられる。

なお低地B-B' 台地寄りセクションでは、試料番号4にAs-Cの、また試料番号2にHr-FAの降灰層準があると考えられる。さらに試料番号6付近には、K-Ahの降灰層準のある可能性も考えられた。したがって、当初古墳時代の遺構の存在が考えられた低地構成層の基底の層位については、As-Cの下位にあることが明らかで、少なくともK-Ahの下位にある可能性も指摘された。

また低地B-B' 低地寄りセクションでは、分析試料中で最下位の試料番号にAs-Cに由来する軽石が認められた。したがって、この地点で認められた低地部構成層は、As-C降灰以降に形成されたと推定される。また試料番号13の火山灰層は、Hr-FAに同定された。さらに試料番号3付近には、As-Bの降灰層準のある可能性が考えられた。これら2地点の分析結果から、C-C' セクションにおいて、上位より2層目の黒褐色土中に多く含まれる黄色粗粒火山灰はAs-Cに、また最上位の黒褐色土中に多く含まれる白色粗粒火山灰はHr-FAに、各々由来すると考えられる。

4. 小結

権現山遺跡SG1区において地質調査とテフラ検出分析を合わせて行った。その結果、下位より鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約6,300年前）、浅間C軽石（As-C、4世紀中葉）、榛名ニツ岳渋川テフラ（Hr-FA、6世紀初頭）、浅間Bテフラ（As-B、1108年）の4層のテフラ層およびテフラ粒子を検出することができた。これらとの層位関係から、SB-106 (P11)、SK-108 [= SA-103のP9]、S-129 (P4)、SA-103 (P2)、SD-95の5遺構の構築についてはAs-C降灰後でHr-FA降灰前、またSD-31についてはHr-FA降灰後でAs-B降灰前、さらにSD-37についてはAs-B降灰後の可能性が考えられた。

なお今回の分析の対象となった試料の多くは遺構の覆土であり、遺構構築時のいわゆる旧表土についてはその検出認定ができなかった。したがって遺構構築年代の上限についての精度が若干低いことは否めない。旧表土の分析は構築年代の上限を知る上で重要なことから、発掘調査時に遺構構築に伴う盛り土などの検出に注意し、旧表土の分析を行って遺構構築前に降灰したテフラの降灰層厚を把握できると、遺構の構築年代をさらに精度よく推定できるようになる。

文献

- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラ起源の広域テフラ—アカホヤ火山灰。第四紀研究, 17, p.143-163.
町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
早田 勉 (1989) 6 世紀における榛名火山の 2 回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.

第 155 表 権現山遺跡 SG1 区
テフラ検出分析結果 (1)

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
SB-106 (P11)	1	++	灰白	0.9
	3	++	灰白	1.1
	5	—	—	—
	7	+	灰白	1.2
	9	+	—	—
	11	+	灰白	0.9
SK-108 [SA-103 の Pg]	1	+	灰白	0.9
	3	+	灰白	0.7
	5	++	灰白	1.1
	7	+	灰白	0.7
S-129 (P4)	2	+	灰白	1.2
	4	+	灰白	1.0
	6	+	灰白	1.2
	8	+	灰白	1.0
SA-103 (P2)	1	+	灰白	1.0
	3	+	灰白	1.1
	5	+	灰白	1.2
SD-95 (4 区)	1	++	灰白>白	1.0, 0.8
	3	+	灰白	0.9
	5	++	灰白	1.1
	7	+	灰白	0.8
SD-95 (D)	1	++	白>灰白	1.0, 1.0
	3	++	灰白	1.1
	5	+	灰白	1.0

++++: とくに多い, ++++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない。最大径の単位は, mm。

第 156 表 権現山遺跡 SG1 区
テフラ検出分析結果 (2)

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
SD-31	1	+++	淡褐	0.7
	3	+	淡褐>白	0.8, 1.7
	5	++	—	1.3
	7	+	—	1.2
	9	++	白>灰白	1.0, 1.0
	11	+	白	1.0
SD-37	1	++	淡褐>白	0.8, 1.7
	3	++	淡褐>白	0.7, 1.1
	5	++	淡褐>白	0.8, 1.9
	7	++	淡褐>白	0.8, 1.0
	9	++	淡褐>白	0.7, 1.0
	11	++	淡褐>白	0.8, 1.1
低地 B-B' 台地寄	2	++	灰白>白	0.6, 0.8
	4	+++	灰白	1.1
	6	—	—	—
	8	—	—	—
	10	—	—	—
低地 B-B' 低地寄	1	+	—	—
	3	+++	淡褐>白	0.8, 1.0
	5	++	淡褐>白	1.3, 1.0
	7	+	淡褐>白	0.9, 1.1
	9	+	白	1.7
	11	+	白	1.1
	12	+	白	0.8
	13	+++	白	0.7
	14	+	白	2.8
	15	—	—	0.8
	17	+	灰白	0.8

++++: とくに多い, ++++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない。最大径の単位は, mm。

10.21.3. 権現山遺跡 SG1 区低地における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

第 157 表 権現山遺跡 SG1 区 放射性炭素年代測定試料と方法

試料採取地点	試料	前処理・調整	測定法
B-B' セクション	1 (腐植質土壌)	酸洗浄, 低濃度処理 ベンゼン合成	β 線法

第 158 表 権現山遺跡 SG1 区 放射性炭素年代測定結果

試料	^{14}C 年代 (年 BP)	δ (^{13}C (‰))	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代	測定 No. beta
1	6420 $\pm$ 80	-18.4	6350 $\pm$ 80	交点: BC 5275 2SIGMA: BC 5435 ~ 5195 BC 5180 ~ 5085 1SIGMA: BC 5335 ~ 5240	100622

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (1950 年 AD) から何年前 (BP) かを計算した値。 ^{14}C の半減期は 5,568

年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、暦年代 (西暦) を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は 10,000 年 BP より古い試料には適用できない。

5) 測定 No.

Beta は、アメリカの β (ベータ) 社の測定番号を示す。

10.2.1.4. 権現山遺跡 SG1 区低地における珪藻分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

珪藻は、10 ～ 500 μm ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や模様などから多くの珪藻種が調べられている。また、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群も設定されている (小杉, 1988; 安藤, 1990)。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲におよび、コケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種 (陸生珪藻) も知られている。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質を利用して、過去の堆積物中の珪藻化石の解析から、堆積物の堆積環境について知ることが可能である。

2. 試料

分析試料は、低地 B-B' セクション台地寄り地点で 1 点、低地 B-B' セクション低地寄り地点で 3 点、低地 C-C' セクション低地寄り地点で 2 点の計 6 点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 処理方法

以下の方法で処理を行い、珪藻用プレパラートを作製した。

1) 試料から湿潤重量約 1 g 程度を取り出し、計量した後ピーカーに移し、蒸留水を加えた後懸濁液を回収する。放置後上澄み液を除去し、30% 過酸化水素を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行う。

2) 反応終了後水を加え、1 時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を上澄み液が透明になるまで繰り返す (7 回程度)。

3) ピーカーに残った残渣は、遠心管に細粒分のみ回収する。

4) マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下して乾燥させる。乾燥後は、マウントメディア (封入剤) で封入してプレパラートを作成する。

作成したプレパラートは、光学顕微鏡下 600 ～ 1000 倍で珪藻種を同定・計数した。

4. 珪藻化石の環境指標種群について

珪藻化石の環境指標種群は、安藤 (1990) が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明として扱った。以下に、安藤 (1990) が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。
[上流性河川指標種群 (J)]: 上流部の溪谷部に集中して出現する種群である。

[中～下流性河川指標種群 (K)]: 中～下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地および自然堤防、後

背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。

[最下流性河川指標種群 (L)]：最下流部の三角洲の部分に集中して出現する種群である。

[湖沼浮遊生指標種群 (M)]：水深が約 1.5m 以上で、水生植物は岸では見られるが、水底には生育していない湖沼である。

[湖沼沼沢湿地指標種群 (N)]：水深が 1m 内外で、一面に植物が繁殖しているところ、および湿地である。

[沼沢湿地付着生指標種群 (O)]：沼沢ならびに、前述した湿地で付着の状態が優勢な出現が見られる種群である。

[高層湿原指標種群 (P)]：ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群 (Q)]：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

5. 珪藻化石群集と堆積環境

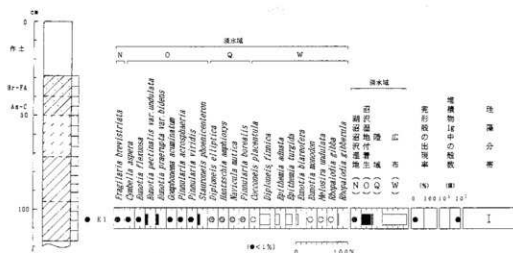
検出された珪藻化石は全体で 65 分類群で、淡水種が 22 属 48 種 5 亜種である。珪藻種の示す環境指標種群の特徴から、低地 B-B' セクション低地寄り地点および低地 C-C' セクション低地寄り地点についてそれぞれ 2 珪藻帯が設定される。以下では、各地点について珪藻化石の特徴と珪藻化石が示す環境について述べる。

(1) 低地 B-B' セクション台地寄り地点 (第 275 図)

1 帯 (試料 1)

堆積物は、黒色有機質粘土からなる。堆積物 1 g あたりの珪藻数数は 6.02×10^4 個で、完形殻の出現率は約 17% とかなり低い。検出される珪藻化石は、沼沢湿地付着生指標種群の *Eunotia pectinalis* var. *undulata* や *Eunotia praerupta* var. *bidens* あるいは *Stauroneis phoenicenteron* など、陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* や *Pinnularia borealis*、湖沼沼沢湿地指標種群の *Fragilaria brevistriata* などが随伴する。

以上のことから、ジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地環境が推定される。なお、湖沼沼沢湿地指標種群が出現することから、水深のある沼沢地も存在したと思われる。



第 275 図 権現山遺跡 SG1 区 低地 B-B' セクション台地寄り地点 (①地点) の珪藻化石分布図 (全分類群を表示)

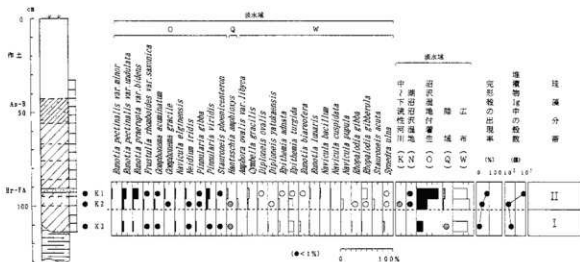
(2) 低地 B-B' セクション 低地寄り地点 (第276図)

I 帯 (試料3)

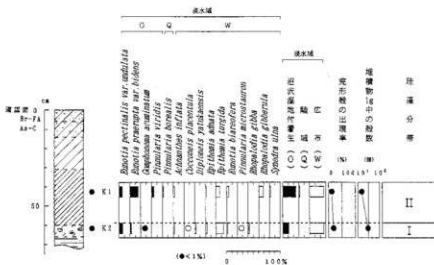
堆積物は、黒褐色の粘性のある有機質粘土からなる。堆積物 1g あたりの珪藻殻数は 4.01×10^5 個で、完形殻の出現率は約 12% となり低い。検出される珪藻化石は、沼沢湿地付着生指標群の *Eunotia pectinalis* var. *undulata* や *Eunotia praeurupta* var. *bidens* あるいは *Pinnularia gibba* などが特徴的に出現する。なお、少ないものの陸域指標群も随伴する。以上のことから、おおむね沼沢湿地環境が推定される。

II 帯 (試料1、2)

堆積物は、黒褐色の粘性のある有機質粘土からなる。堆積物 1g あたりの珪藻殻数は 6.06×10^5 個および 2.22×10^5 個で、完形殻の出現率は約 41% と約 22% である。検出される珪藻化石は、沼沢湿地付着生指標群の *Eunotia pectinalis* var. *undulata* や *Eunotia praeurupta* var. *bidens* あるいは *Pinnularia viridis* などが特徴的に出現し、陸域指標群の *Hantzschia amphioxys* が随伴する。また、湖沼沼沢湿地指標群の



第276図 権現山遺跡SG1区 低地 B-B' セクション 低地寄り地点 (②地点) の珪藻化石分布図 (1%以上の分類群を表示)



第277図 権現山遺跡SG1区 低地 C-C' セクション 低地寄り地点 (③地点) の珪藻化石分布図 (全分類群を表示)

第159表 権現山遺跡SG1区 珪藻化石産出表
(種群は、主に安藤(1990)が設定した環境指標種群による)

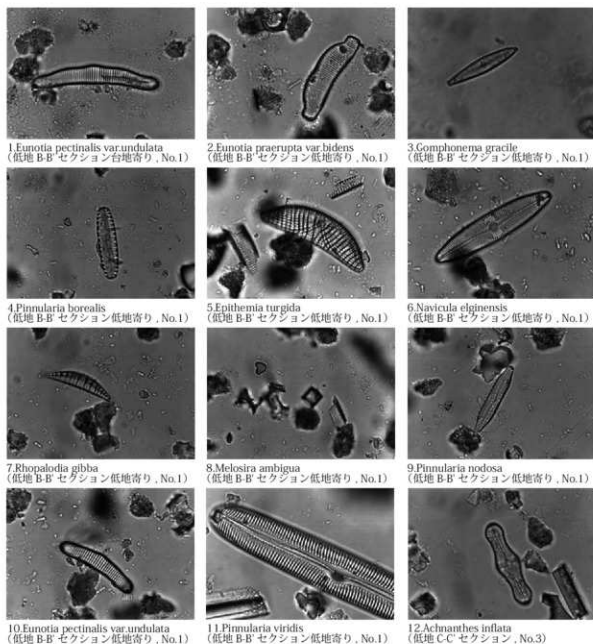
分類群	①地点 種群	②地点			③地点	
		K1	K1	K2	K1	K2
<i>Achnanthes inflata</i>	W	-	-	-	1	2
<i>A. lacerata</i>	E	-	-	1	-	-
<i>Aphoro ovalis</i> var. <i>libyca</i>	W	-	-	7	-	-
<i>Chionis laeta</i>	W	-	2	-	-	-
<i>Conoecis placentalis</i>	W	1	-	-	-	1
<i>Cymbella aspera</i>	O	1	-	-	-	-
<i>C. cuspidata</i>	W	-	1	1	-	-
<i>C. gracilis</i>	W	-	9	4	-	-
<i>C. sinota</i>	W	-	2	1	1	-
<i>C. turgidula</i>	X	-	-	1	-	-
<i>C. spp.</i>	?	14	-	14	19	1
<i>Diploneis elliptica</i>	Q	2	1	2	-	-
<i>D. flmsica</i>	W	42	-	-	1	-
<i>D. ovalis</i>	W	-	2	4	-	-
<i>D. yatsukaensis</i>	W	-	-	2	3	-
<i>D. spp.</i>	?	-	1	39	54	7
<i>Epithemia adusta</i>	W	17	1	8	9	1
<i>E. turgida</i>	W	25	1	18	20	4
<i>E. spp.</i>	?	-	-	-	9	2
<i>Eumetia biarcifera</i>	W	9	2	-	6	2
<i>E. flexuosa</i>	O	1	1	-	-	-
<i>E. lunaris</i>	W	-	4	-	-	-
<i>E. monodon</i>	W	2	-	1	-	-
<i>E. pectinatis</i> var. <i>minor</i>	O	-	5	-	-	-
<i>E. pectinatis</i> var. <i>undulata</i>	O	11	10	10	9	3
<i>E. praerupta</i> var. <i>bidenis</i>	O	12	24	5	4	3
<i>E. spp.</i>	?	11	15	15	14	9
<i>Fragilaria brevistriata</i>	N	1	-	-	-	-
<i>F. spp.</i>	?	-	-	1	-	-
<i>Frustulia rhomboides</i> var. <i>saxonica</i>	O	-	1	4	1	-
<i>Gomphonema acuminatum</i>	O	1	2	7	2	-
<i>G. gracile</i>	O	-	5	1	-	-
<i>G. spp.</i>	?	1	4	-	1	-
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Q	2	7	2	1	-
<i>Melosira ambigua</i>	N	-	2	1	-	-
<i>M. undulata</i>	W	1	-	-	-	-
<i>M. spp.</i>	?	7	2	-	2	-
<i>Navicula bacillum</i>	W	-	3	-	-	-
<i>N. cuspidata</i>	W	-	3	3	-	-
<i>N. elgionensis</i>	O	-	5	3	4	-
<i>N. mutica</i>	Q	2	2	-	-	-
<i>N. pupula</i>	W	-	-	11	-	-
<i>N. takyoensis</i>	W	-	-	-	2	-
<i>N. spp.</i>	?	3	4	-	-	-
<i>Neidium iridis</i>	O	-	6	1	1	-
<i>Nitzschia</i> spp.	?	-	3	-	-	-
<i>Pinnularia acropusaria</i>	O	1	1	2	-	-
<i>P. borealis</i>	Q	1	1	-	-	1
<i>P. braunii</i>	W	-	1	-	-	-
<i>P. divergens</i>	W	-	2	-	-	-
<i>P. gibba</i>	O	-	1	2	4	-
<i>P. hemiptera</i>	W	-	2	1	-	-
<i>P. microstauron</i>	W	-	-	1	-	1
<i>P. nodosa</i>	O	-	1	-	-	-
<i>P. viridis</i>	O	1	17	9	2	2
<i>P. spp.</i>	?	26	22	27	20	6
<i>Rhopalodia gibba</i>	W	1	-	2	4	-
<i>R. gibberula</i>	W	4	20	1	3	5
<i>Stauroneis acuta</i>	W	-	-	9	-	-
<i>S. phoenicenteron</i>	O	11	2	3	1	-
<i>S. spp.</i>	?	-	-	-	-	1
<i>Stephanodiscus astraea</i>	W	-	-	-	1	-
<i>Synedra ulna</i>	W	-	1	1	7	1
<i>S. spp.</i>	?	3	-	5	5	1
<i>Tabellaria fenestrata</i>	O	-	2	1	-	-
Unknown	?	1	1	-	-	2
中～下流性河川 (K)		-	-	2	-	-
潮沼沼沢環境 (N)		1	2	1	-	-
沼沢環境付着生 (O)		39	89	49	26	13
陸域 (Q)		7	11	4	1	1
広布 (W)		102	55	75	58	14
不明 (?)		66	52	101	122	26
珪藻総数		215	210	231	205	54

Melosira ambigua あるいは中〜下流性河川指標種群の *Cymbella turgidula* が少量ながら出現する。以上のことから、ジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地環境が推定される。なお、湖沼沼沢湿地指標種群が出現することから、水深のある沼沢地もあったものと思われる。

(3) 低地 C-C' セクション低地寄り地点 (第 277 図)

I 帯 (試料 2)

堆積物は、淡黒褐色の粘性のある有機質粘土からなる。堆積物 1g あたりの珪藻殻数は 8.59×10^4 個で、完形殻の出現率は約 13% とかなり低い。検出される珪藻化石は、沼沢湿地付着生指標種群の *Eunotia pectinalis* var. *undulata* や *Eunotia praeurupta* var. *bidens* などが特徴的に出現する。以上のことから、おおむね沼沢湿地環境が推定される。



第 278 図 権現山遺跡 SG1 区 珪藻化石の顕微鏡写真

II 帯(試料 1)

堆積物は、黒褐色の粘性のある有機質粘土からなる。堆積物 1g あたりの珪藻殻数は 2.23×10^4 個で、完形殻の出現率は約 19% である。検出される珪藻化石は、沼沢湿地付着生指標種群の *Eunotia pectinalis* var. *undulata* や *Eunotia praeurupta* var. *bidens* あるいは *Pinnularia viridis* などが特徴的に出現し、陸域指標種群の *Pinnularia borealis* が随伴する。以上のことから、ジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地環境が推定される。

6. まとめ

いずれの地点でも、沼沢湿地あるいはジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地環境が優勢であり、一部では水深ある場所を多少伴う環境も推定された。これらの地点では、大きな流れはなく、水生植物が繁茂する比較的静かな環境であったと推定される。

引用文献

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理。42: 273-88

小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究。27 (1): 1-20

10.21.5. 権現山遺跡 SG1 区低地と SG2 区における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 1987)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

試料は、SG1 区低地 B-B' 台地寄りセクションで 5 点、SG1 区低地 B-B' 低地寄りセクションで 8 点、SG1 区 C-C' セクションで 2 点、SG2 区の C 区出土須恵器で 2 点の計 17 点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾 ($105^\circ\text{C} \cdot 24$ 時間)
- 2) 試料約 1g を秤量、ガラスビーズ添加 (直径約 $40 \mu\text{m}$ ・約 0.02g)
※電子分析天秤により 1 万分の 1g の精度で秤量
- 3) 電気灰化法 ($550^\circ\text{C} \cdot 6$ 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 ($300\text{W} \cdot 42\text{KHz} \cdot 10$ 分間)
- 5) 沈底法による微粒子 ($20 \mu\text{m}$ 以下) 除去、乾燥
- 6) 封入剤 (オイルキット) 中に分散、プレバート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400 倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレバート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5}g) をかけて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤

米)の換算係数は2.94、ヒエ属型(ヒエ)は8.40、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属型(ススキ)は1.24、ネザサ属は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第160表、第161表および第279～282図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。〔イネ科〕

機動細胞由来:イネ、キビ族型、ジュズダマ属、ヨシ属、ススキ属型(ススキ属など)、ウシクサ族、ウシクサ族(大型)、Aタイプ(くさび型)、Bタイプ、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(おもにクマザサ属)、メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、メダケ属型(メダケ属、ホウライチク属)、タケ亜科(未分類等)

その他:表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、地下茎部起源、未分類等〔樹木〕

はめ絵バズル状(ブナ科ブナ属など)、多角形板状(ブナ科コナラ属など)、その他

5. イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめオムギ族(ムギ類が含まれる)、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、モロコシ属などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネ、ヒエ属型、ジュズダマ属が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

(1) イネ

イネは、低地B-B'台地寄りセクションのHr-FA混層(試料1)、低地B-B'低地寄りセクションのAs-B直下層(試料1)、As-Bの下層(試料3、4)、Hr-FAの下層(試料7)から検出された。密度はいずれも1,000個/g程度と低い値である。したがって、これらの層準で稲作が行われていた可能性は考えられるものの、

第160表 権現山遺跡 SG1区 植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		低地B-B'台地寄り					低地B-B'低地寄り					低地C-B'中層				
分類群	試料	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2
イネ科																
イネ		15					7						7			
キビ族型		30	14	14	7	22	29	60	22	15	7	7	22	60	23	23
ジュズダマ属									15							
ヨシ属		30	7	7	37	59	22	37	59	22	7	51	97	97	61	121
ススキ属型		114	63	14	56	176	88	127	89	50	22	65	87	104	182	46
ウシクサ属		213	271	157	304	542	221	276	214	271	282	348	612	507	636	402
ウシクサ族(大型)					7		7	15	7	7			15	7		8
Aタイプ(くさび型)						15	15	15	7				7	15	8	
Bタイプ		30		21	44	7	37	52	37	95		14	15	7	23	23
その他のイネ科																
ネササ節型		412	702	358	52	15	397	258	325	352	165	425	537	52	23	
クマザサ属型		15	21	72	37	22	29	7	15	15	22	22	30	46	66	23
メダケ節型		8	14	7	15											
メダケ属型							7									
未分類等		572	869	680	393	403	730	418	532	696	404	974	943	664	795	645
その他の植物																
表皮毛起源		30		28	15	29	15	52	7	51	22	14	7	22	8	38
棒状珪酸体		922	1050	945	778	902	1147	947	1094	1099	927	1065	1343	1096	1325	1085
茎部起源						7		15	15	7	7					
地下茎部起源											15		7			
未分類等		770	841	987	987	580	787	798	788	559	686	674	701	579	734	698
樹木																
はめ絵バズル状(ブナ属など)		8														
多角形板状(コナラ属など)			7													
その他								7		7				7		
(海綿骨針)									15	7	344	36	7	15		23
植物珪酸体総数		3170	3859	2991	2453	2479	3545	3169	3182	3376	2528	3377	4312	3963	3853	3111
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/㎡・cm)																
イネ		0.46					0.22			0.22	0.43		0.22			
ヨシ属		1.92	0.44	0.45	2.34	3.70	1.39	2.35	3.73	1.39	0.47	3.20	6.12	6.12	3.82	7.66
ススキ属型		1.42	0.78	0.18	1.19	2.18	1.09	1.57	1.10	0.73	0.28	0.81	0.83	1.29	2.05	0.56
ネササ節型		1.98	3.37	1.72	0.25	0.07	1.91	1.72	1.56	1.69	0.79	2.09	2.58	0.25	0.11	
クマザサ属型		0.11	0.16	0.54	0.28	0.17	0.22	0.06	0.11	0.11	0.17	0.16	0.22	0.34	0.51	0.17

※試料の検出量を1.0と仮定して算出。

第161表 権現山遺跡 SG2 区
C区から出土した須恵器
内部の植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: $\times 100$ 個/g)		54	55
分類群	試料	遺の融合部	須恵器内部
イネ科			
イネ			7
ヒエ属型		7	
キビ族型		52	15
ジュズダマ属			7
ヨシ属		30	81
ススキ属型		37	30
ウシクサ族		415	413
シバ属		7	
ヒタイブ		15	7
タケ亜科			
ネザサ節型		259	239
クマザサ属型		30	22
未分類等		934	945
その他のイネ科			
糸皮毛起草		15	44
棒状珪酸体		1460	1572
葉部断面		7	
未分類等		837	753
植物珪酸体総数		4075	4236

おもな分類群の推定生産量 (単位: $\text{kg}/\text{a} \cdot \text{cm}$)

イネ	0.62	0.22
ヒエ属型		
ヨシ属	1.87	5.12
ススキ属型	0.46	0.37
ネザサ節型	1.24	1.63
クマザサ属型	0.22	0.17

※試料の収分量を1.0と仮定して算出。

辺でハトムギが栽培されていた可能性は考えられるものの、野草のジュズダマに由来するものである可能性も否定できない。

(4) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。キビ族型にはヒエ属型やエノコログサ属型に近似したものが含まれており、ウシクサ族(大型)の中にはサトウキビ属に近似したものが含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

6. 植物珪酸体分析から推定される植生・環境

(1) イネ科栽培植物以外の植物珪酸体の検出状況

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。

1) 低地 B-F 台地寄りセクション (第279図) [権現山遺跡 SG1 区低地]

下位の試料4、5では、ウシクサ族やタケ亜科(未分類等)、棒状珪酸体が多量に検出され、ススキ属型も比較的多く検出された。また、ヨシ属、ネザサ節型なども少量検出された。棒状珪酸体はおもにイネ科植物の結合組織細胞に由来しているが、イネ科以外にもカヤツリグサ科やシダ類などでも形成される。棒状珪酸体の形態についてはこれまであまり検討がなされていないことから、その給源植物の究明については今後の課題としたい。As-C直下層(試料3)では、ネザサ節型やタケ亜科(未分類等)が大幅に増加している。Hr-FA 混層(試料1)にかけてもおおむね同様の結果である。

おもな分類群の推定生産量(図の右側)によると、下位の試料4、5ではヨシ属が卓越しススキ属型も多くなっているが、As-C直下層より上位ではネザサ節型が優勢となっていることが分かる。

上層もしくは他所からの混入の可能性も否定できない。

なお、SG2 区の C 区出土須恵器内部 (No.55) でもイネが 700 個/g と少量検出された。おそらく、当時は周辺で稲作が行われており、そこから須恵器に何らかの形でイネの植物珪酸体が混入したものと推定される。

(2) ヒエ属型

ヒエ属型が検出されたのは、SG2 区の C 区出土須恵器蓋の接合部 (No.54) である。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点ではこれらを明確に識別するには至っていない(杉山ほか, 1988)。これは、植物分類上でも両者の差異が不明確なためである。また、密度も 700 個/g と低い値であることから、周辺でヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

(3) ジュズダマ属

ジュズダマ属は、低地 B-F 低地寄りセクションの As-B 下層(試料3)および C 区出土の須恵器内部 (No.55) から検出された。ジュズダマ属には食用や薬用となるハトムギが含まれるが、現時点では栽培種と野草のジュズダマとを完全に識別するには至っていない。また、密度も 1,000 個/g 程度と低い値であることから、周

2) 低地 B-B' 低地寄りセクション (第 280 図) [権現山遺跡 SG1 区低地]

Hr-FA の下層 (試料 8) では、ウシクサ族やタケ亜科 (未分類等)、棒状珪酸体が多量に検出され、キビ族型やヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型なども検出された。Hr-FA 直下層 (試料 6、7) ではネザサ節型が大幅に増加しているが、試料 6 ではウシクサ族が減少している。Hr-FA 直上層 (試料 5) から As-B 直下層 (試料 1) にかけてもおおむね同様の結果である。なお、試料 5 では海綿骨針が多量に検出された。

おもな分類群の推定生産量 (図の右側) によると、全体的にヨシ属が優勢であり、ススキ属型やネザサ節型も多くなっていることが分かる。

3) C-C' セクション (第 281 図) [権現山遺跡 SG1 区低地]

下位の暗灰色土 (試料 2) では、ウシクサ族やタケ亜科 (未分類等)、棒状珪酸体が多量に検出され、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型なども検出された。黒色土 (試料 1) ではほとんどの分類群が増加している。

おもな分類群の推定生産量 (図の右側) によると、各層ともヨシ属が優勢であり、試料 1 ではススキ属型も多くなっていることが分かる。

4) C 区出土の須恵器 (第 282 図) [権現山遺跡 SG2 区低地出土遺物]

須恵器内部 (No.55) および蓋の接合部 (No.54) では、ウシクサ族、ネザサ節型、棒状珪酸体が多量に検出され、ヨシ属やススキ属型、クマザサ属型なども検出された。

おもな分類群の推定生産量 (図の右側) によると、ヨシ属が優勢であり、次いでネザサ節型が多くなっていることが分かる。

(2) 植生と環境の推定

以上の結果から、杉村遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

As-C より下位の暗褐色～黒色土の堆積当時は、ヨシ属などが多く生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺の台地部などではススキ属やネザサ節などが生育する草原的なところも見られたものと推定される。

As-C 混層から Hr-FA 混層にかけても、低地部ではヨシ属などが多く生育する湿地的な環境が継続されていたと考えられ、台地部ではネザサ節を主体としてススキ属なども見られる比較的乾燥した草原の状況になっていたものと推定される。

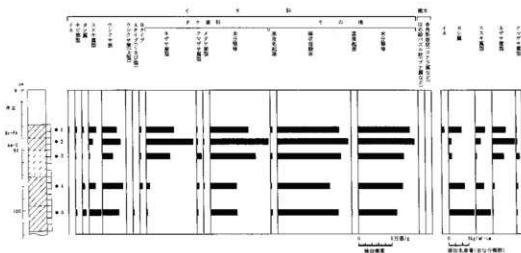
7. まとめ

浅間 C 軽石 (As-C, 4 世紀中葉) より下位の暗褐色～黒色土の堆積当時は、ヨシ属が多く生育する湿地的な環境であり、周辺の台地部ではススキ属やネザサ節なども見られたものと推定される。榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 6 世紀初頭) 混層にかけても、低地部では同様の湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていたものと推定される。また、台地部はネザサ節を主体としてススキ属なども見られる比較的乾燥した草原的な環境であったものと推定される。

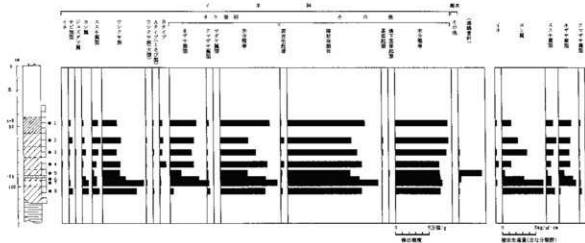
参考文献

- 杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点。植生史研究, 第 2 号, p.27-37。
杉山真二・松田隆二・藤原宏志 (1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—。考古学と自然科学, 20, p.81-92。
藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p.15-29。
藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) —プラント・オパール分析による水田址の探索—。考古学と自然科学, 17, p.73-85。

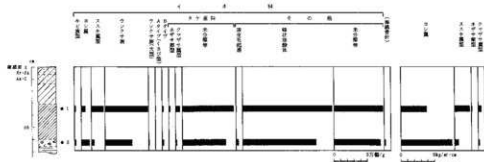
[報告書編者註: 「C 区出土の須恵器」は、次回報告予定の権現山遺跡南部にある SG2 区の資料を指す。それ以外は、SG1 区の結果である。]



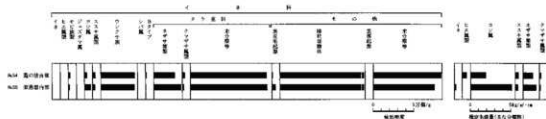
第 279 図 権現山遺跡 SG1 区 低地 B-B' セクション台地寄り地点における植物珪酸体分析結果



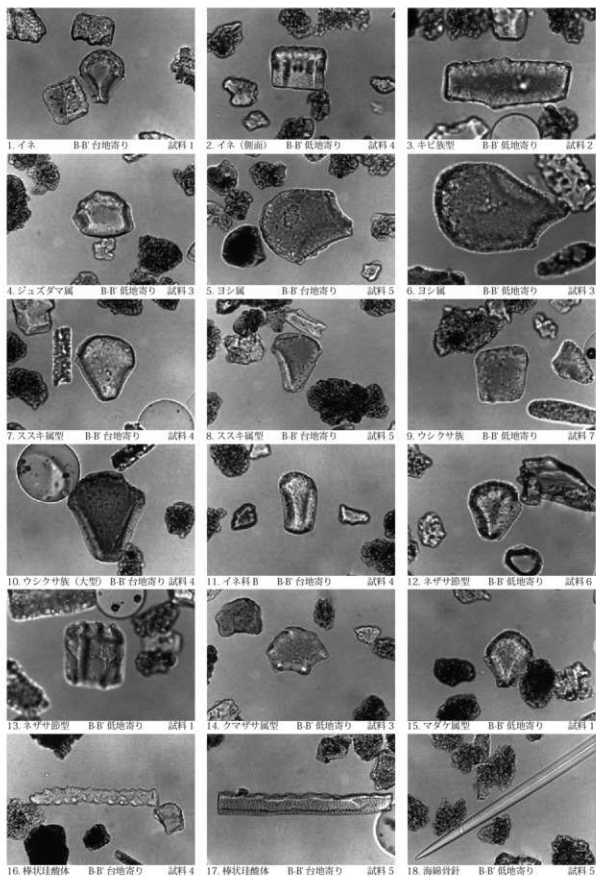
第 280 図 権現山遺跡 SG1 区 低地 B-B' セクション低地寄り地点における植物珪酸体分析結果



第 281 図 権現山遺跡 SG1 区 低地 C-C' セクション低地寄り地点における植物珪酸体分析結果



第 282 図 権現山遺跡 SG2 区の C 区から出土した須恵器内部の植物珪酸体分析結果



第 283 図 権現山遺跡 SG1 区 植物珪酸体の顕微鏡写真

10.21.6. 権現山遺跡 SG1 区低地における花粉分析

株式会社 古環境研究所

1. 試料

試料は、低地 B-B' セクション台地寄り地点の最下層（試料 1）、低地 B-B' セクション低地寄り地点の Hr-FA 直上層（試料 1）と下層（試料 2～4）、低地 C-C' セクション台地寄り地点の下位層（試料 1、2）の計 7 点である（第 274 図 9～11）。

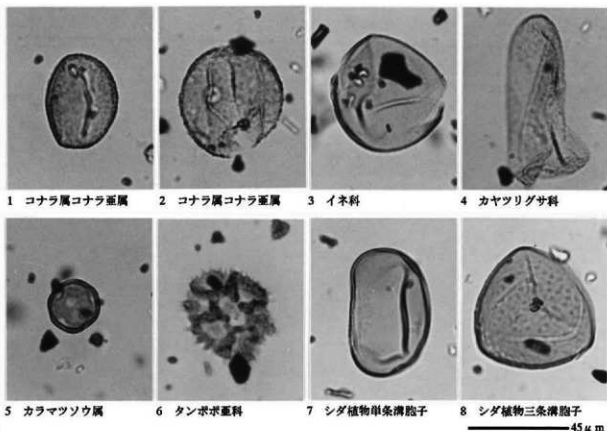
2. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え 15 分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9：1 濃硫酸のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2 分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるといふ操作を 3 回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の同定は、鳥倉(1973)および中村(1980)をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で



第 284 図 権現山遺跡 SG1 区 花粉・孢子遺体

結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

3. 結果

出現した分類群は、樹木花粉 3、草本花粉 7、シダ植物胞子 2 形態の計 12 である。これらの学名と和名および粒数を第 162 表に示す。主要な分類群を第 284 図の写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属・ケヤキ

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、カラマツソウ属、アブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

1) 低地 B-B' セクション台地寄り地点

花粉・胞子は検出されなかった。

2) 低地 B-B' セクション低地寄り地点

検出された花粉は少なく、下位は特に少ない。Hr-FA 直上層(試料 1)では樹木花粉のコナラ属コナラ亜属、草本花粉のカヤツリグサ科、ヨモギ属がやや多く、シダ植物単条溝胞子も多い。

3) 低地 C-C' セクション台地寄り地点

試料 1 は花粉が少なく、コナラ属コナラ亜属、キク亜科、シダ植物単条溝胞子が主に出現する。試料 2 は花粉が検出されない。

4. 花粉分析から推定される植生と環境

低地 B-B' セクション低地寄り地点の Hr-FA 直上層の堆積当時は、カヤツリグサ科などの水湿地性草本が生育する湿地的な環境であり、周囲にはヨモギ属などの乾燥を好む草本やシダ植物が生育するやや乾燥したところもみられたものと推定される。また、周辺にはナラ類(コナラ属コナラ亜属)などの森林が分布していたものと推定される。

低地 B-B' セクション台地寄り地点と低地 C-C' セクション台地寄り地点では、花粉がほとんど検出されないことから、植生を復元することは困難である。おそらく、乾湿を繰り返す環境下で花粉などの有機物が分

第 162 表 権現山遺跡 SG1 区 花粉分析結果

学名	和名	分属部	低地B-B'セクション				低地C-C'セクション			
		低地寄り地点	1	2	3	4	低地寄り地点	1	2	
Arboreal pollen										
<i>Quercus subgen. Lapidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属			20	3	1		8		
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属		1			1	1			
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属・ケヤキ							1		
Nonarboreal pollen										
	草本花粉									
Gramineae	イネ科			1	3					
Cyperaceae	カヤツリグサ科		11	1						
Thalictrum	カラマツソウ属		2							
Cruciferae	アブラナ科					1				
Lactucoidae	タンポポ亜科			1	1			1		
Asteroidae	キク亜科			2	4	1		6		
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属			6	3			2		
Fern spore										
	シダ植物胞子									
Monolete type spore	単条溝胞子		151	11	2		7			
Trilete type spore	三条溝胞子		6				3			
Arboreal pollen										
	樹木花粉	0	21	3	1	1	10		0	
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	23	12	1	1	9		0	
Total pollen	花粉粒数	0	44	15	2	2	19		0	
Unknown pollen	未同定花粉	0	1	0	0	0	0		0	
Fern spore	シダ植物胞子	0	157	11	2	0	9		0	

解されたものと推定される。

参考文献

- 中村純（1973）花粉分析，古今書院，p.82-110。
 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原，新版古代の日本第 10 巻 古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262。
 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態，大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集，60p。
 中村純（1980）日本産花粉の標徴，大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p。

10.21.7. 権現山遺跡 SG1 区低地における種実同定

株式会社 古環境研究所

1. 試料

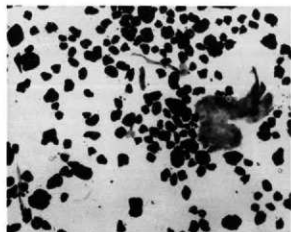
試料は、低地 B-B' セクション台地寄り地点の最下層（試料 1）と低地 B-B' セクション低地寄り地点の Hr-FA 下層（試料 1）の 2 点である（第 274 図）。

2. 方法

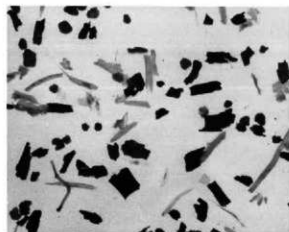
試料（堆植物）500cc を 0.25mm の篩を用いて水洗選別を行い、双眼実体顕微鏡下で観察を行った。

3. 結果と所見

種実として同定できる植物遺体は観察されなかった。おそらく、乾湿を繰り返す環境下で種実などの有機物が分解されたものと推定される。



1 B-B' セクション台地寄り地点



2 B-B' セクション低地寄り地点

第 285 図 権現山遺跡 SG1 区の種実

解されたものと推定される。

参考文献

- 中村純 (1973) 花粉分析, 古今書院, p.82-110.
 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本第 10 巻 古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集, 60p.
 中村純 (1980) 日本産花粉の標識, 大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集, 91p.

10.21.7. 権現山遺跡 SG1 区低地における種実同定

株式会社 古環境研究所

1. 試料

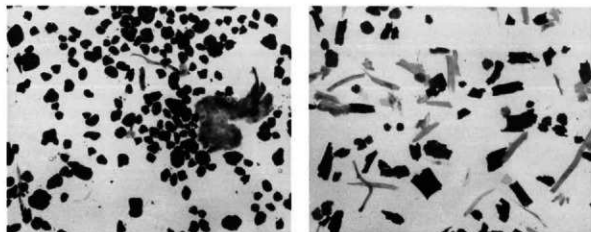
試料は、低地 B-B' セクション台地寄り地点の最下層 (試料 1) と低地 B-B' セクション低地寄り地点の Hr-FA 下層 (試料 1) の 2 点である (第 274 図)。

2. 方法

試料 (堆植物) 500cc を 0.25mm の篩を用いて水洗選別を行い、双眼実体顕微鏡下で観察を行った。

3. 結果と所見

種実として同定できる植物遺体は観察されなかった。おそらく、乾湿を繰り返す環境下で種実などの有機物が分解されたものと推定される。



1 B-B' セクション台地寄り地点

—— 1mm

2 B-B' セクション低地寄り地点

—— 1mm

第 285 図 権現山遺跡 SG1 区の種実

第11章 権現山遺跡・杉村遺跡出土の鉄関連遺物

第1節 両遺跡の調査区と鉄関連遺構

権現山遺跡の状況 権現山遺跡には古墳時代中期の竪穴式土坑を2棟含む。中期中葉のSG1区SI-33と、中期中葉を中心として中期後葉の土器も少量出土するSG10区SI-36である。SG1区SI-33は古墳中期中～後葉のSG1区居館跡の東側にある。SI-36は、SG5区の古墳中期居館跡から北側70mにある。SG10区SI-36の遺構は続刊の権現山遺跡南部の報告書に掲載する。今回は鉄関連遺物だけを図化・掲載した。

杉村遺跡の状況 今回報告する杉村遺跡GN1区に鉄関連遺構はないが、古墳後期後葉の竪穴式建物跡であるGN1区SI-3から椀形鉄治滓が3点出土した。すでに報告された杉村遺跡の北関東自動車道路調査区(第286図の杉村JH区)には、古墳時代中期後葉(本遺跡の第3段階・TK-208並行期)の113号竪穴鉄治滓遺構があり、中期の59・97号住居と66号土坑、後期の133号住居でも羽口・鉄滓が出土した(藤田・安藤編2000)。

第2節 各遺構出土の鉄関連遺物

鉄治滓2棟の資料以外にも、権現山遺跡北部と南部で、古墳時代の各遺構を中心として鉄関連遺物も出土した。今回、権現山遺跡北部の報告に際して、全体像を明らかにするため、南部出土の鉄関連遺物も掲載した(構成No.26～73・78)。南部で鉄関連遺物を出土した遺構の状況は、次の報告書で記述する。

鉄関連遺物の特徴を第163表に示す。この観察表の記述は、穴澤義功氏による。すべて鉄治滓関連遺物である。中世の遺物1点(構成No.78)以外は古墳時代遺構や周辺で出土し、古墳時代遺物とみられる。

権現山遺跡北部の状況 権現山遺跡SG1区と4区で鉄関連遺物が出土している。

権現山SG1区では、古墳中期中葉の鉄治滓遺構SG1区SI-33に鉄治滓と灰壁が多く、鉄製品も3点ある(構成No.1～11)。居館周辺の掘乱溝で出土した灰壁・鉄治滓(24～25)は、SG1区SI-33またはSI-3から混入した可能性がある。古墳後期中葉の竪穴式建物SG1区SI-71も鉄関連遺物がやや多い(17～23)。他に2棟の竪穴式建物で鉄治滓や粘土質溶解物が少量出土した(古墳中期末～後期初めのSG1区SI-3・10と後期後葉のSG1区SI-18、構成No.12～16)。SG1区SI-3・10・18・71の鉄関連遺物は、近辺に存在した鉄治滓遺構から廃棄または流入したと考えられる。SG1区SI-10・18・71は近い位置にあるので、同じ鉄治滓遺構から排出された可能性もある。

権現山遺跡4区では鉄滓2点と羽口片2点が出土した。古墳後期初頭の4区SI-18に専用羽口1点(構成No.74)、後期末の4区SI-30aに不定形滓1点(75)、後期中葉の4区SI-59に羽口と鉄治滓小片が各1点ある(76・77)。調査区外(?)に所在する後期の鉄治滓遺構から少量ずつ流入した遺物であろう。

権現山遺跡南部の状況 権現山遺跡SG5区とSG10区で鉄関連遺物が出土している。

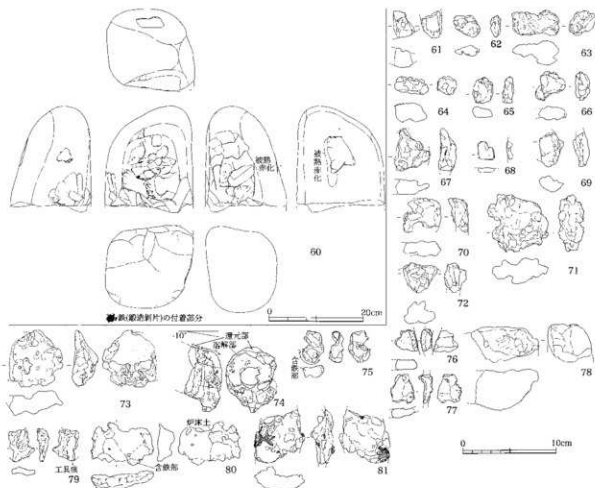
権現山SG5区では、古墳中期のSG5区SI-100に高杯転用羽口が2点ある(構成No.26・27)。鉄治滓小片(28)を1点出土したSG5区SD-42は、後述するSG10区SD-41・42と連続する古墳中期の溝である。

権現山遺跡SG10区では、古墳中期中～後葉の鉄治滓遺構SG10区SI-36に鉄治滓関連遺物が多い(構成No.29～60)。一般の転用羽口の他に、器壁が薄く外面ハケ調整の特徴的な羽口を含む(31・32・35)。高温作業ですぐ溶解してしまう薄さの専用羽口と考えることも疑問があり、名称は「転用羽口」とした。ハケ調整、器壁の薄さ、紐痕は土師器の製作法といえる。しかし、在地の土師器にこのような高杯が全くない点は注意が必要である。金床石(60)は向きを変えて複数面を使用した剥離痕がみられる。鉄製品は分析資料なので、次節でコメントする。構成No.43・44・46・50・55のようにやや重量感のある鉄治滓がみられる点は、大半が軽量の灰壁片・灰底片で鉄滓が少ないSG1区SI-33の組成と異なる。粒状滓と鉄治

[illegible]

第287圖 權現山遺跡・杉村遺跡 鉄関連遺物構成図

— 493 —



第289図 権現山遺跡・杉村遺跡各地区の鉄関連遺物(2)

剥片は床面覆土を水洗して抽出した。粒状滓はごく少量で、内部のガスが抜けた小孔が認められる。堅穴鍛冶遺構の残存が部分的なので断定はできないが、鍛冶剥片に対して粒状滓がごく少ないことはこの鍛冶遺構の作業内容を考える手がかりになる。鍛冶剥片は非常に厚いものが多いのが特徴で、大形の製品を加工したか、または不純物の多い鉄で鍛冶を行った可能性がある（穴沢義功氏の御指摘：p.505 参照）。

SG10区では他に堅穴建物4棟（古墳後期のSG10区SI-6・14、中期のSI-30、後期のSI-34a：構成No.61～67）と、古墳中～後期の溝SG10区SD-41・42、時期不明の土坑SG10区SK-77・317、確認調査トレンチTX23に小形の鍛冶滓や炉壁が少量ある（構成No.68～73）。SI-36以外の鉄関連遺物は少量の流入品と見られ、SI-36からの混入とみるには距離が遠い（最も近いSK-317でも18m）。SG10区SD-41・42は、SG5区SD-42に続く古墳中期の溝を、SG5区SD-41に続く古墳後期の溝として掘り直したと考えられる。SG5区の項で上述したとおり、SG5区SD-42にも鍛冶滓が1点ある。

中世の井戸SG10区SE-569の構成No.78だけが中世の埴形鍛冶滓で、古墳時代の滓と全く質が異なる。

権現山遺跡北関東自動車道路調査A区の状況（第286図左下）SI-231（中期中～後葉）、SI-060・063・193（後期前～中葉）、SI-032・267（後期末）に鉄滓や羽口がある。また、A区SI-073（中期の建物で後期遺物も出土）に羽口、溝SD-061・187に鉄滓がある。既に報告済で（谷中・大島2001）、鍛冶遺構は未検出。

杉村遺跡GN1区の状況 古墳後期後葉の堅穴建物跡であるGN1区SI-3から埴形鍛冶滓が3点出土した（構成No.79～81）。後期の鍛冶遺構から廃棄または流入した遺物と考えたいところである。ただし、周囲を広く調査したにもかかわらず、後期の鍛冶遺構は確認されていない。南側に続く北関東自動車道路調査区では、後期後葉の133号住居で羽口・鉄滓が出土している（第286図、藤田・安藤編2000）。

第 163 表 権現山遺跡・杉村遺跡 鉄関連遺物観察表

[illegible]

第 11 章 権現山遺跡・杉村遺跡出土の鉄関連遺物

[illegible]

第2節 各遺構出土の鉄器・漆器・土器

[illegible]

第164表 権現山遺跡・杉村遺跡 分析資料詳細観察表

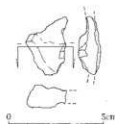
分析資料番号 1

遺跡名	権現山遺跡				遺物No.		5		項目	洋	胎土
出土状況	遺 跡 名		SG1区 SI33 No.27		時期：層位		5世紀前期：出土土層		分	マクロ	○
	出土位置										
試料記号	検 査： GON-1	計 測	長 径	3.1 cm	色 調	表：茶褐色～暗灰色	遺存度	破片	X線回折・ 化学 放射化	○	
	化 学： —		短 径	2.2 cm		地：灰褐色～黒色					
遺物種類 (名称)	放射化： —	測 厚	厚 さ	1.2 cm	断面形状	1	前含浸	—	析	X線回折・ 化学 放射化	
	遺物種類 (名称)		重 量	6.2 g		2					
観察所見	伊哩 (銅治炉、洋付き)	観 重	重 量	6.2 g	断面形状	1	前含浸	—	析	X線回折・ 化学 放射化	
	伊哩 (銅治炉、洋付き)					2					
分析部分	伊哩 (銅治炉、洋付き)	観 重	重 量	6.2 g	断面形状	1	前含浸	—	析	X線回折・ 化学 放射化	
	伊哩 (銅治炉、洋付き)					2					
備 考	伊哩 (銅治炉、洋付き)	観 重	重 量	6.2 g	断面形状	1	前含浸	—	析	X線回折・ 化学 放射化	
	伊哩 (銅治炉、洋付き)					2					

観察所見 側面3面が破面となった銅治炉の伊哩内面。小破片。内面は浮化して下手側が肥厚する。表面は発光面で、肥厚部の中間部は厚さ5mm程度の黒色な浮層となっている。外面は下手側が褐色で、上手側に向かい徐々に灰黒色に焼結した伊床土が残されている。伊床土の部分の厚さは最大2mm程度と薄く、下手側では細いひび割れに洋の貫入が認められる。色調は内面が浮化しているため灰黒色から茶褐色で、浮層は黒褐色となっている。結晶が発達するためか、浮層の表面はやや光沢を持つ。

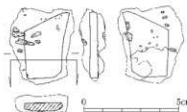
分析部分 長軸端部1/2を直線状に切断し、伊哩内面の浮層を中心に分析に用いる。残材返却。

備 考 SG1区のSI-33 8号住居址は1辺5m大の方形の遺構で、床面の中央付近に銅治炉を持ち、東側の壁寄りには地床炉が、さらに南東隅に貯蔵穴が検出されている。主柱は4本で、銅治炉周辺の床面1には伊哩破片と土層片が出土している。鉄製品も3点出土した。銅治関連遺物としては、構成No.1～11が相当する。分析資料No.1の伊哩は銅治が外周部の南西側から出土しており、構成された7片の伊哩破片の中では唯一、単位位置がわかる資料である。分析資料No.2とした伊哩の鉄製品破片とは500g程度しか離れていない位置から出土した。また、構成No.8とした500gを超える大型の銅治の伊哩破片は、伊哩の煎煎部に遺存していた資料である。良好な含鉄の伊哩資料で含鉄であることから、分析には最適な資料と判断されるが、保存・取扱いを優先した。権現山遺跡SG1区から検出された銅治関連遺物を出す土層は合わせて5基で、SI-10、SI-3、SI-18、SI-71と本遺構である。この5基のうちSI-33とSI-3は5世紀代で、SI-10とSI-71ならびにSI-18は6世紀代の遺構である。南北の2基から各々、銅治関連遺物出土しており、かつ時期が前後することがわかる。煎煎関連遺物の出土層にも個々の遺構で差がある。実際の銅治遺構は北側ではSI-33が相当し、南側では調査区外に主体がある可能性があると思われる。



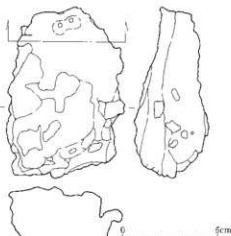
分析資料番号 2

出土状況	遺 跡 名		権現山遺跡		遺物No.		11		項目	洋	メタル
	出土位置		SG1区 SI-33 No.28		時期：板板		5世紀前期：出土土層				
試料記号	検 査： GON-2	計	長 径	3.4 cm	色 調	表：茶褐色～濃茶褐色	遺存度	破片	分	マクロ	○
	化学： —		短 径	2.2 cm		地：濃茶褐色				破面数	27
遺物種類 (名称)	放射化： GON-2	測 厚	厚 さ	0.4 cm	断面形状	5	前含浸	—	析	カワイロ	○
	鉄製品(鐵造品、厚板状、鐵造炉付付き)鎌?		重 量	20.7 g		メタル度				H (○)	断面形状
観察所見	最大幅が2.2mm程度の薄板状の鉄製品破片。表面はかなり厚い酸化土層に覆われており、下面の下手側に黒点を残している部分が目立っている。外周部の酸化土層中には粉状の木炭と多量の鐵屑が混入している。鐵屑破片は黒色から青灰色するものが主体で、厚みは中厚から薄手である。透過X線像によると、内部に上手側がやや広くなる形状の破片が確認され、左右の側面は直線状に加工されている。下手側の端部もやや直線状に見えるが、破面かどうかは判断しにくい。一方、上手側の端部は斜め上方に向いて湾曲しているようにも見える。この斜めの部分が生きているとすれば、鎌の折り返し部の可能性を残るがこれもはっきりしない。折れた鉄製品の破片かもしれない。形状の鐵屑破片は透過X線像像上で認められず、断面の上のうのある平らな面となっているため、比較的厚さ量の低い鉄板と予想される。かすかに細い放射線も確認される。色調は表面の酸化土層が茶褐色から濃茶褐色で、地は濃茶褐色となる。										
分析部分	短軸端部1/3を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面に観察後、残材返却。										
備 考	折れてしまった本製品または鉄製品破片として実測方向を決めているが、鎌と判断することができれば表面が逆で、右90°回転方向が正位となる可能性もある。SI-33からは銅治炉の伊哩破片に加えて構成No.9～11の3点の鉄製品を出土している。本資料の外周部に調査する酸化土層中の鐵屑破片は中厚から薄手で、鐵屑銅治としては後半段階を並列する資料である。同遺構は素材の來源と板鉄原料を用いた銅治かどうである。										



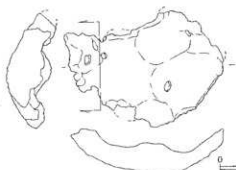
分析資料番号 3

遺跡名		権現山遺跡		遺物No.		14		項目		洋		メタル	
出土状況	遺跡名	SG1区 SI-3 No.1		時期・相	5世紀末：出土土源		分	マクロ	○	○	○	○	○
	出土位置			時期・相									
試料記号	横 鋳： GON-3	計	長 径	9.0 cm	色 調	表：黄褐色～茶褐色	遺存度	定形	マクロ	○	○	○	○
	化 学： GON-3					短 径							
遺物種類	放射化： —	間	厚 さ	3.9 cm	磁気度	3	前含浸	—	新	○	○	○	○
	遺物種類 (小、古貨)					重 量							
観察所見													
平面、不整楕円形ないしは不整五角形をした定形の楕形鋳造品。重量的には小型の楕形洋に属し、含鉄部を持っている。左右の側部と下手側の側部が直線状に伸びる形態で、上手側の通常の楕形鋳造品と似た形状に薄くなる形態を示す。そのため、厚みも下手側から上手側に向かって薄くなる。上面は上手側の中央部が深く窪んでおり、下手側の側部から側部にかけては浅い凹面性が低いたため、本製品や大型の製品が生じている。下面は上手側に向かって緩やかにせり上がる形態で、側部を含めて表面には平流鋳造の洋の端部と1cm以下の木炭層が点々と残されている。洋質は密度が低く、表面だけではなく、押内部にも隙間が目立つ。含鉄部は下面の中央付近が主体で、部分的に強く磁石に反応する。色調は表面の黄褐色土砂が黄褐色から茶褐色で、地は茶褐色から黒褐色となる。													
分析部分													
短軸端部 1/5 を直線状に切断し、洋部を分析に用いる。残材返却。													
備 考													
SI-3 型穴住居址から出土した鋳造関連遺物は、構成No.14～15の比較的小さな楕形鋳造品が2点のみである。他には鋳造関連遺物が確認されていない。SI-3はSI-33と同様の5m大の方形型穴住居址で、鋳造品がない代わりに東側の壁中央にカマドが設置されている遺構であるが、鋳造関連遺物が出土すること自体は原本遺構で鋳造を行っているとはいえない。また同期的にもSI-3はSI-33よりわずかに時期の下る遺構と考えられる。従って鋳造の主体は同期的に先行するSI-33または調査区外にある別の鋳造遺構からの複製の可能性が高い。													



分析資料番号 4

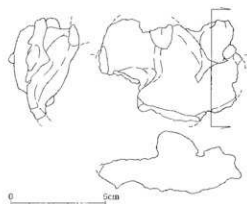
遺 跡 名		権現山遺跡		遺物No.		17		項 目		洋		胎土	
出土状況		出土位置		SG1区 S171 No.8		時期：根拠		6世紀中葉：出土土器		分		マクロ	
試料記号	検 査： GON-4		計	長 径 8.3 cm		色 調	表：灰褐色～淡緑色		遺存度	破片	X線回折・X線蛍光	○	X線回折・X線蛍光
	化 学： —			短 径 6.0 cm			地：暗褐色～黒褐色						
遺物種類 (名称)	放射化： —		測	厚 さ 1.6 cm		磁気度	2		前含浸	—	析	方孔型 一貫制	X線回折
	重 量 47.5 g			メタル度 な し			断面観察 —						
観察所見													
内面が浮化して部分的に粘土質の垂れを生じている観音社の炉内面破片。一見すると検形器跡洋に似ているが、内面の浮化から見てと頸口周辺の炉壁表面破片であることがわかる。側面は薄皮状になって収束し、外面全体に観音社の炉体土が薄く覆着する。内面の浮化の状況は右と手廻りが粘土質滑物の盛り上がり方と一致する。左下側では縁口で左右へと淡茶褐色から黒褐色の滑面となる。炉壁外面の破片としては、断面形状が上と左右方向ともいえない丸縁を持った碗形で、観音社の破片が上と左右へと小さくまとまったボウル状であることが確認できる。また専用羽口が装着されることとすれば、右上方からの可能性があらう。色調は表面が灰褐色から淡緑色で、地は暗褐色から黒褐色となる。													
分析部分													
長軸端部1/5を直線状に切断し、炉壁として分析に用いる。残材返却。													
備 考													
本資料を出土したSG1区S171は、北側にカマドを持つ7m大の6世紀代の炉付住居地である。南側の中央部に張り出した形で貯蔵庫が構築され、構築した7点の観音連座地は、北側の貯蔵庫の間に接した床状床からまよっている。遺物構成としては観音No.17～23が相当し、観音社の炉壁に加えて専用羽口、小型と極小の検形器破片など出土している。外に貯蔵庫では人口と共用という数説があり、むしろ住居の隅口部分からの遺物を出していることが、そのため、S171 炉付住居地から外に出る貯蔵庫のためには寄せ集められた可能性と、逆にS171の南側隅口部分から外部から投入されたという2つの可能性を持っている。南東部に数ヵ所離れて構築されているS18からも観音破片が1点出しており、両者が関係している可能性もある。													



分析資料番号 5

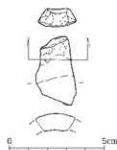
出土状況	遺 跡 名		発掘山道跡		遺物No.		23		項目	マクロ	洋	メタル
	出土位置		SGI K S171 No.8		時期：総概		6世紀中葉：出土土器					
試料記号	検 査： GON-5	計	長 径	7.5 cm	色 調	表：茶褐色～淡緑色	遺存度	破片	分	焼 成	○	
	化 学： GON-5		短 径	5.0 cm		地：灰褐色～黒褐色				X線回折・X線蛍光	○	
遺物種類 (名称)	放射化： GON-5	測	厚 さ	3.1 cm	磁石度	2	前含浸	—	析	カワバニ 一様粗孔	○	
	重 量		85.0 g	メタル度		鈍化 (△)	断面観察	○	X線顕微	○		
観察所見	平面、不整多面形をした含鉄で極小の焼形磁石薄片片。左側部から上側の側部と右側の端部が欠け落ちている。左側の1/3は一段低くなった状態で、上面及び側面には凹凸がある。正面中央部は4cm×2.3cmの部分で不整矩形の凹状に盛り上がり、上側の側部には引口跡土に似た土層が露出する。但し、盛り上がり部そのものは平坦ではなく、引口跡部への縁の盛り上がり部後に傾斜していたものと見られる。盛り上がり部や凹状状突起で、顕微鏡素材の落下物となる可能性がある。顕微鏡から見て左右方向に長手の角状突起で、表面にはわずかな木炭粒と灰床に付した鉄の屑が散らわっている。洋灰はやや硬度が低く、断面の各部に中心の気泡が互直に立っている。含鉄の主体は右下の断面と下面にかけての一部と左端部である。断面は上面を中心に茶褐色で、洋灰は灰褐色から淡緑色となり、底は黒褐色となる。											
分析部分	長軸端部1/3を全面観察に割出し、洋灰部を中心に分析に用いる。残材断面に横壁部残。残材取込。											
備 考	分析資料GON-4と同一のS171 9号住居跡の床面から出土品である。顕微鏡では含鉄の焼形土となることから、分析資料として選択した。洋灰部の突起部表面と分析資料GON-4の顕微鏡の凹部中央部の洋灰部表面の浮き高さの差がほぼ一致しており、また、床面同一連続での中壁部と洋灰部であるという可能性を持っている。なお、図面部2.2は焼形土遺物と杉材遺物の両面断面で同一のもの、断面位置で引口の先端部が既述の焼形土遺物である。											

第 11 章 権現山遺跡・杉村遺跡出土の鉄関連遺物



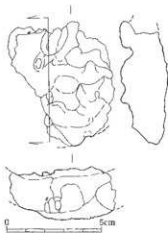
分析資料番号 6

遺 跡 名		権現山遺跡		遺物 No.		30		組	目	洋	散土
出土状況	遺 跡 名	SG10 区 SI36 1 層西区		時期：表掘	5 世紀前半～中葉：出土土層		分	マ	クロ	○	散
	出土位置										
試料記号	横 綫： GON-6	詳	長 径	3.6 cm	色 調	表：灰褐色～灰 色～淡紫紅色	遺存度	破 片	3	新	X線透 視 EPM
	化 学： —		短 径	2.1 cm		地：淡赤褐色～ 灰褐色					
放射化： —	—	精	厚 さ	0.8 cm	磁 透 度	I	前含浸	—	新	一 成 熟 化	X線透 視
			—	—							
遺物種類 (名称)	(土器) 転用羽口	破	重 量	53 g	メタル度	なし	断面観察	—	—	—	X線透 視
観察所見	高杯の胴部を転用した(土器)転用羽口の先端部小破片。最大長が3.6cm程の破片で、外面の上手側が薄皮状に浮化して発露している。下手側にかけては焼熱により灰色からくすんだ紫灰色、さらには褐色と熱変色している。内面の通風孔部は狭い範囲が残っている。上手側の羽口先端部はほぼ生きている。外面の発露状態が続く。羽口の厚さは約7mmを測る。高杯の胴部としては、体部が比較的に直筒状で基部がウツバ形に開く形を想定できる。散土は土層そのもので、キメが細かくわずかな軽石と赤色の塊状な面状物を含んでいる。色調は表面が前記の通りで、地は淡赤褐色から灰褐色となる。										
分析部分	先端部1/3を直線状に切断し、(土器)転用羽口として分析に用いる。残材返却。										
備 考	権現山遺跡のSG10区は遺跡内で最も遺構密度の高い、東側に低地を望む台地の縁部分である。豪族居館と想定される北北西の遺構と、南側に位置するもう一つの豪族居館と想定される南西の遺構との間に位置している。南北に長いSG10区の調査区のうち最も西側の中央部から平穴の状態で方形の窠穴の隅の部分が検出され、これをSI36 窠穴住居址としている。SG10区からは合わせて5軒の窠穴住居址(SI6・14・30・34・36)から竊穴遺物遺物が検出されている。他にSD-42とSK-77、ならびにSK-317からも若干の竊穴遺物遺物が検出された。SI36は住居址の隅の部分のみの調査となっているが、竊穴遺物遺物が最も集中して出土した遺構で、横成層29～60までの32点が含まれている。また、転用羽口や各種の埴形竊穴に加工して瓦製品や乾状埴・竊造割片、さらに大ぶりの金床石も出土している。その中から、分析資料として6点をセットで準備した。分析資料No.6～11がこれに相当する。SI36 窠穴住居址の時期は5世紀代でも中頃に位置するものと考えられる。なお、SG10区の8箇所にもよる竊穴遺物を出土した遺構と南北2箇所の豪族居館との間わりも注目されよう。										



分析資料番号 7

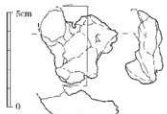
遺 跡 名		検取山遺跡		遺物 No.		46		項 目		洋		メタル		
出土状況	出土 位 置		SG10区 Ⅱ-36 No.61		時期：根拠		5世紀前期～中葉：出土土器		分	マクロ	○			
試料記号	検 査： GON-7		計 測	長 径	6.6 cm	色 調	表：茶褐色～濃茶褐色		遺存度	破片	X線回折 化学 耐光度	○		
	化 学： GON-7			短 径	5.6 cm		地：濃茶褐色～黒褐色							
遺物種類 (名 称)	放射化： GON-7		額 重 量	厚 さ	2.5 cm	磁気度	3	前含浸	—	析	方孔ロー 放射化	○		
	梃形銅治洋 (小、含鉄)			重 量	103.8 g		メタル度		誘化(△)		断面観察	○ <th>X線透過</th> <th>○</th> <th></th>	X線透過	○
観察所見														
上下面と下手側の側部の一部が生きている。厚さ2.5cmほどの小型の梃形銅治洋の平欠品。左側部が主面で、弧状に広がる右寄りの側部は全周が鋭い破面となっている。上面の中央寄りに含鉄部が残れているため、放射線が入り始めており、黒跡の跡も生じている。上面は全体的に平坦気味で、斜部に向かって木炭痕と洋の突出部が菊花状に広がる。下面は浅い梃形で全体が砂土との距離面となっており、2箇所に径1.2mm穴の粒状の洋が露を出す。洋質は中層を中心に磁気度で、上下面に当たった部分ではやや気孔が目立つ。左側部と下手側の酸化土砂中には青光りする銅造断片が1点含まれている。また、上手側の側部の窪みにも銅造断片らしき遺物が認められる。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、側部は濃茶褐色。地は濃茶褐色から黒褐色となる。														
分析部分														
長軸端部1/3を直線状に切断し、洋部を中心に分析に用いる。残材断面に観察塗布。残材返却。														
備 考														
SI-36 88穴住居跡から出土した鉄関連遺物構成% 29～60のうち1点である。分析資料No.6～11のうち本資料と分析資料No.8はいずれも含鉄の梃形銅治洋で、小型と極小という形態や重量差を検討するために分析資料として選択した。														



第11章 権現山遺跡・杉村遺跡出土の鉄関連遺物

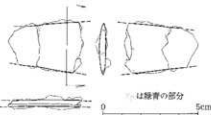
分析資料番号 8

出土状況	遺 跡 名		権現山遺跡		遺物No.		50		項 目	洋	メタル
	出 土 位 置		SG10区 SI36 №82		時期：推定		5世紀前後～中葉：出土土器				
試料記号	検 閲： GON-8	計 測	長 径	4.1 cm	色 調	表：茶褐色～濃茶褐色	遺 存 度	ほぼ定形	分	マクロ	○
	化 学： GON-8		短 径	3.9 cm		地：濃茶褐色～黒褐色		破断面		1	X線分析化学耐水度
遺物種類 (名称)	放射化： —	精 重 量	厚 さ	1.7 cm	組織度	3	前含浸	—	析	マイクロ	○
	検形鑑別済 (極小、含鉄)		27.2 g	メタル度		誘化(△)		断面観察		○	X線分析
観察所見	平面、不整多面形をした含鉄で極小の検形鑑別済。左上手側の端部が小塊状となり、上面が剥き出しの欠けとなっている。含鉄部はこの部分と、右側の小塊状の部分の2箇所に分かれている。そのため、全体の2/3の部分が含鉄部で、一見、側部から下面が段をなす検形になっているが、実際は径2cm大前後の小塊状の含鉄の洋が嵌った形もとれる。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、洋部が表面・地とも濃茶褐色から黒褐色となっている。										
分析部分	長軸端部2/3を直線状に切断し、洋部を中心に分析に用いる。残材断面上に縦割痕布。残材返却。										
備 考	SI-36 9号穴住居址の出土品から構成した7点の分析資料のうち1点である。含鉄部を持つ極小の検形鑑別済は構成№49～51の3点で、それぞれ形態を異にする。また、構成№45と46の小型の検形鑑別済も含鉄の資料で、出土した鑑別済の洋の中では含鉄の洋の比率が比較的高い。これは素材が鉄あるいは鉄であった場合に多い現象である。その他の構成された資料の全体でも、鉄を素材にした検形鑑別済の工部であった可能性が高い。										



分析資料番号 9

出土状況	遺 跡 名		権現山遺跡		遺物 No.		57		項 目	洋	メタル
	出土位置		SG10区 SI-36 №73-72		時期：根據		5世紀前半～中葉：出土土器				
試料記号	検 閲： GON-9	計 測	長 径	3.9 cm	色 調	表：茶褐色～緑青色	遺存度	破片	分	マクロ	○
	化 学： —		短 径	2.7 cm		地：濃茶褐色～黒褐色～緑青色					
放射化： GON-9	精 重 量	厚 さ	0.4 cm	組織度	6	前含浸	—	析	X線分析化学耐水度	○	
			鉄製品 (鉄地銅張り)								11.6 g
遺物種類 (名称)	断面観察										
最大幅が2.7cmを測る扁平な鉄製品破片。2片が接合しており、左右端部が破面となっている。見かけ上は酸化土砂のため8mm近い厚みを持つが、実際の鉄製品の厚みは3.5mm程度と見られる。破面の端部に3箇所、緑青が咲いた部分が小塊状で確認され、加えて右側の破面上手側の緑青に包まれて、淡い黄銅色の金箔の痕跡を持つ斑点状の発色部がある。表面とも剥き出しの酸化土砂により凹凸が生じているが、本体は上面の中央部がわずかに盛り上がった形の薄板状の金属製品である可能性が高い。破面の一部に黒褐色の酸化液が固化している。透過X線像では形状の鑑別面がほとんど確認できず、鉄部の程度が異なる状態の底層部の低い鉄板状である。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、鉄部は濃茶褐色から黒褐色。さらに剥部分の緑色は緑青色となる。											
分析部分											
長軸端部1/4を直線状に切断し、酸化したメタル部分を中心に分析に用いる。(鉄地銅張り部に特に留意) 残材断面上に縦割痕布。残材返却。											
備 考	SI-36 9号穴住居址は銅造関連資料が良好なセットをなして出土した遺構で、方形の銅の部分の調査により、まとまった多量の資料を出土している。鉄製品は構成№56と本資料のみで、一般図表で示しているように構成№56は本資料の表面から脱落した跡を示すの可能性がある。表面に緑青が確認されるが、古銅の主体部などで銅製品に施したために剥離が移行した資料とは考えにくく、むしろ鉄地銅張りの枚板が銅造工場の素材として持ち込まれている可能性が高い。加断としては大府交野市の森遺跡の銅造工部や千原型の土座矢根遺跡などがある。なお、5世紀中葉の鉄地銅張りの金属製品を想定した場合、馬具や頭飾の飾り金具などが予想されるが、形状的には馬具の可能性がより高いかもしれない。										



第3節 金属学的分析対象資料と考古学的所見

分析資料番号 10

遺 跡 名		亀島山遺跡		遺物 No.		58		項 目	詳	メタル
出土状況	出土位置	SG10区 SI-36		時期：粗推	5世紀前期～中葉：出土土器			マクロ	分析	
	検 査： GON-10	長 径	— cm	表：—	遺存度	—				
試料記号	化学： —	計 短 径	— cm	色 調				X線分析	○	
	放射化： —	測 厚 さ	— cm	地：—	磁面数	—	X線分析	化学	放射化	
遺物種類 (名称)	粒状赤 (2点)	測 重 量	— g	磁石度	—	前含浸	—	分析	一括測定	
				メタル度	なし	断面観察	—	X線分析		
観察所見	方形の堀状住居跡の隅の部分で長さ 4.4m・幅 2.4m の三角形に残った調査範囲から出土した資料である。発掘調査の直に覆土中から畿内遺物が多量に出ることから、中央に幅 30cm の南北方向の土手を残し、その左右と南北を 6 区分した上で、床面直上の土を採取して水洗した。畿内遺物の微細遺物としては粒状赤のいずれもが出土しているが、粒状赤の資料はきわめて少なく、またいびつだったり磁石度が高い粘土質の片が確認されている。分析資料としては構成No.60 とした安山岩の転石を用いた金床石の南西に位置する P1 としている窪み、および 3 区からの出土である。資料化に際しては水洗された畿内遺物の微細遺物を粒状赤の土と鐵造割片に分けた後に、分析資料の選択時に磁石の強弱でさらに二分した中から代表化している。粒状赤は母体の資料数が限られるため、2点を選択した。詳細は別表参照。									
分析部分	必要品を選択し、粒状赤として分析に用いる。残材返却。									
備 考	粒状赤の出土量の少なさは、素材の鉄塊または鉄片に対して酸化防止用の粘土質の塗布が少ないか、あるいは鍛打時の加熱状態が弱いことが想定される。									

分析資料No.10 粒状赤 (2点)

番号	出土位置	直径 (mm)	色調	形 状 及 び 表 面	磁石	気孔
10-1	SG10区 SI-36 P1	0.16	青灰色	表面平滑な楕圓形	やや弱	なし
10-2	SG10区 SI-36 3区	0.13	青灰色	表面にやや凹凸のある球形	やや強	あり

分析資料番号 11

遺 跡 名		亀島山遺跡		遺物 No.		59		項 目		詳		メタル		
出土状況	遺 跡 名		亀島山遺跡		遺物 No.		59		項 目		詳		メタル	
	出土位置		SG10区 SI-36		時期：概略		5世紀前期～中葉：出土土器		分		マクロ		メタル	
試料記号	検 査： GON-11	計 測	長 径	— cm	色 調	表：—	遺存度	—	マクロ	X線分析	化学	放射化	○	
	化 学： —		短 径	— cm		地：—								断面数
遺物種類 (名称)	放射化： —	測 厚	厚 さ	— cm	磁石度	—	前含浸	—	析 出	放射化	—	X線分析	—	
	遺物種類 (名称)		重 量	— g		メタル度								なし
観察所見		方形の堀状住居跡の隅の部分で長さ 4.4m・幅 2.4m の三角形に残った調査範囲から出土した資料である。畿内関連遺物が多量に出ることから、中央に幅 30cm の南北方向の土手を残し、その左右と南北を 6 区分した上で、床面直上の土を採取して水洗した。畿内遺物の微細遺物としては粒状赤・鐵造割片のいずれもが出土しているが、粒状赤の資料はきわめて少なく、またいびつだったり磁石度が高い粘土質の片が確認されている。分析資料としては構成No.60 とした安山岩の転石を用いた金床石の南西に位置する P1 としている窪み、および 3 区からの出土である。資料化に際しては水洗された畿内遺物の微細遺物を粒状赤の土と鐵造割片に分けた後に、分析資料の選択時に磁石の強弱でさらに二分した中から代表化している。鐵造割片は各区とも比較的出土量が多く、厚みも様々であることから、磁石の強弱で二分した上で代表的な厚み資料を合計 6 点選択している。詳細は別表参照。												
分析部分		必要品を選択し、鐵造割片として分析に用いる。残材返却。												
備 考		鐵造割片には厚いものから中厚、さらには 0.1mm 前後の表面面に光沢を持つ薄層のものも含まれている。水洗された土砂中から分離された資料は厚さ 1mm 程度の鐵造割片が主体で、極細鐵造割片に付着する微細遺物も同様の傾向を持っている。鉄素材の質がばらばらなことを物語るものであろうか。また、鉄片が素材となっているためにこうした現象が起こるのかどうかということも注目点である。加えて、鉄そのものは大判の鉄板石である可能性が高く、こうした影響の有無も検討課題と言えよう。												

分析資料No.11 鐵造割片 (6点)

番号	出土位置	計測値 (mm)			色調	表	裏	磁石	気孔
		長径	短径	厚さ					
11-イ-1	SG10区 SI-36 P1	5.4	3.9	0.46	(表) 暗褐色 (裏) 青灰色	平滑、光沢なし	ほぼ平滑、光沢なし	やや弱	なし
11-イ-2	SG10区 SI-36 P1	4.3	3.8	0.5	(表) 暗褐色 (裏) 青灰色	ほぼ平滑、光沢なし	平滑、光沢なし	やや弱	なし
11-イ-3	SG10区 SI-36 P1	2.7	1.9	0.1	(表) 暗褐色 (裏) 青灰色	平滑、光沢なし	平滑、光沢あり	やや弱	なし
11-ロ-1	SG10区 SI-36 P1	4.8	3.7	0.53	(表) 暗褐色 (裏) 青灰色	ほぼ平滑、光沢なし	平滑、光沢あり	やや強	なし
11-ロ-2	SG10区 SI-36 P1	3.9	3.0	0.2	(表) 青灰色 (裏) 青灰色	平滑、光沢なし	平滑、光沢あり	やや強	なし
11-ロ-3	SG10区 SI-36 P1	2.9	2.8	0.12	(表) 青灰色 (裏) 青灰色	平滑、光沢あり	平滑、光沢あり	やや強	なし

分析資料番号 12

[illegible]

第4節 権現山遺跡・杉村遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

九州テクノロジーサーチ・TACセンター

大澤正己

概要

5～6世紀が比定される権現山遺跡の4軒の竪穴住居跡及び杉村遺跡1軒の竪穴住居から出土した鍛冶関連遺物を調査して、次の点が明らかになった。

鍛冶は鉄鉱石（塊状鉱：磁鉄鉱）由来の棒・板状半製品を充当した鍛錬鍛冶が想定された。次に鍛冶技術を鉄滓の鉱物相で整理すれば、5世紀前葉のSG1区SI-33鍛冶遺構では、800℃前後で品出するファヤライト（Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）主体で占められる。赤熱鉄素材の目減り防止の粘土汁が溶融ガラス化した滓である。権現山遺跡では低温素延べ鍛錬鍛冶からの操業開始が指摘できよう。

僅かな時期差ながら5世紀前葉～中葉になるとSG10区SI-36鍛冶遺構では炉内温度が上昇し、ファヤライトにウスタイト（Wüstite: FeO ）が加わり、高温沸し鍛接の萌芽と読める。鍛打加工を実証する粒状滓や鍛造剥片も確認できた。更には別系統の滓もあり、高銅（0.69% Cu）小型含鉄碗形鍛冶滓の存在から、例えば古鉄（鉄地銅張り鉄片）を原料とした再生鍛冶（リサイクル鍛冶）が推定される。この実態を裏付ける共伴遺物として、銅粒（88.5% Cu-9.5% Fe）内蔵の鉄製品（刃物状）も検出できた。以上の如く当該遺構は、より本格鍛冶に近づぐが、専用羽口でなくて高炉脚転用であり、溶損を配慮すれば長時間をかける大型鉄器の製作技術までの展開は厳しい状況にある。まだ5世紀代前半は本格鍛冶の揺籃期と提起できる。この初期本格鍛冶操業は、5世紀末のSG1区SI-3（竪穴住居に鍛冶遺物）や6世紀中葉のSG1区SI-71（竪穴住居に鍛冶遺物廃棄）出土の小型碗形鍛冶滓組成まで引継がれる。一方、隣接する杉村遺跡（6世紀後葉）でも鍛冶技術は権現山遺跡の踏襲傾向にあるが、注目すべきは鍛冶原料産地の変更があったのか、滓の銅成分が権現山遺跡の0.01～0.02%から0.04%と跳ね上りをみる。この些細な成分変動が日本列島の鉄事情と海外政情と如何に絡み合うのか見定めるのも今後の検討課題であろう。

1 いささつ

権現山遺跡と杉村遺跡は、栃木県宇都宮市東谷町に所在する5～6世紀（古墳時代中期～後期）の集落跡である。前者は巨大集落で竪穴住居跡206棟が調査された。後者は隣接する遺跡で竪穴住居跡71棟と鍛冶遺構1棟（報告書刊行済み）の調査をみた。今回当該遺跡を通して当時の鉄器生産の実態を把握する目的から金属学的調査の運びとなった。

2 調査方法

2-1. 供試材

Table.1に示す。権現山遺跡出土遺物11点と杉村遺跡出土遺物1点の合計12点である。

2-2. 調査項目

(1) 肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を簡単に記載した。

(2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の5倍で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

滓中に品出する鉱物及び鉄部の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の #150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の 3μ と 1μ で順を追って研磨している。なお金属組織の調査では腐食 (Etching) 液に 5% ナイタル (硝酸アルコール液) を用いた。

(4) ビッカース断面硬度

鉄滓中の鉱物と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計 (Vickers Hardness Tester) を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に 136° の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(5) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定を目的とする。

分析の原理は、真空中で試料面 (顕微鏡試料併用) に電子線を照射し、発生する特性 X 線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料と X 線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

(6) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素 (SiO_2)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K_2O)、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO_2)、酸化クロム (Cr_2O_3)、五酸化燐 (P_2O_5)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム (ZrO_2) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

3 調査結果

3-1. SI-33 竪穴住居跡 (鍛冶遺構) 出土遺物 : 5 世紀前葉

GON-1 : 炉壁 (鍛冶炉、滓付き)

(1) 肉眼観察 : 鍛冶炉の炉壁で 6.2g と小破片である。内面は滓化し、下側は肥厚する。表層は発泡気味だが中間部は緻密な滓を形成する。滓部を鏡鏡の対象とした。

(2) 顕微鏡組織 : Photo.1 の①~④に示す。①は局部的に存在するガラス質の非晶質酸塩であり、気孔が多発する。②の鉱物相の大部分は、淡灰色長柱状結晶のファヤライト (Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) で占められて、③④はその拡大である。他の鉱物相は④にみられる極く微量の外周部が灰白色で縁取られて中核部が淡褐色多角形結晶のヘーシナイト (Hercynite : $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) がある。炉材粘土中のアルミナ (Al_2O_3) と鉄分 (Wüstite : FeO) の接触により、固相拡散から生じたと推定される。これらの鉱物相をもつ滓は、鍛冶原料に棒状・板状半製品を目減り防止に粘土汁やワラ灰など塗布して低温 (800°C 前後か) ^(注1) で素延べを加えて鉄器製作がなされた可能性が想定できる。滓はファヤライトを主要鉱物相を呈するところから低温型素延べ鍛錬鍛冶滓に分類される。

GON-2 : 鉄製品 (鍛造品)

(1) 肉眼観察 : 酸化土砂に厚く覆われた現存長さ 34mm、最大幅 22mm、最大厚み 4mm の鉄製品の破片である。酸化土砂中には、黒色から青灰色 (テンパーカラー) の薄手の鍛造剥片を混在させる。鏡鏡は短軸端部の切断面を観察した。

(2) マクロ組織：Photo.9 の上段に示す。金属鉄は遺存せず全面錆化鉄となる。断面は中核部がすかすかの一部空洞化気味で、これを灰白色の黒錆 (Magnetite: Fe_3O_4) が薄く取り囲む。この黒錆輪郭は、片刃状利器を写し出す。外周部は皮金で内部は心金の可能性をもつ鍛造鉄器の破片であることは確かであろう。

(3) 顕微鏡組織：Photo.1 の⑤～⑦に示す。⑤はマクロ組織で提示した刃先側の低倍率写真である。⑥⑦はその拡大で、灰白色の外周部が⑥、内部の黒色部が⑦である。前者は皮金のフェライト (Ferrite: 純鉄、もしくは α 鉄) 地に黒色層状結晶のパーライト (Pearlite: フェライトとセメントタイトが交互に重なり合って構成された層状組織) が晶出した亜共析鋼 (< 0.77% C)、後者はパーライト地に針状初析セメントタイト (Cementite: Fe_3C) を析出した過共析鋼 (> 0.77% C) の金属組織の痕跡である。軟・硬 2 種鋼板の合せ鍛え鉄器の可能性が窺えた。鉄の履歴は、鉄中の非金属介在物が錆化で剥落し、明言できないが低温還元直接製鋼法にもとづく塊煉鉄であろう。

故鉄原料の鍛冶作業に対する発言は、炉壁付着の滓がファヤライト主体の低温作業派生物であり、鍛冶炉壁との関係からみれば否定せざるを得ない。また付着鍛造薄片が鍛打作業の後半段階派生物であり、粒状滓が混在しないのは、これを補強する。

小結

5 世紀前葉の SI-33 鍛冶工跡跡は、鍛冶炉壁に付着したファヤライト鉱物相主体の滓から棒状・板状半製品を鍛冶原料として低温素延べを中心作業とした鉄器製作が想定される。共存遺物として破損鉄器片を故鉄としての鍛冶原料鉄に向けるには、作業温度や粒状滓不在からやや躊躇する。

3-2. SI-3 竪穴住居跡出土遺物：5 世紀末

GON-3：小型梔形鍛冶滓

(1) 肉眼観察：平面が不整楕円形状で、171g と小型の完形梔形鍛冶滓である。滓質は木炭痕や気孔の多発から密度は低く、内部に隙間が目立つ。短軸側の 1/5 を供試材とした。含鉄滓となっているが切断面からは金属鉄は捉えられなかった。

(2) 顕微鏡組織：Photo.2 の①～⑤に示す。①は低倍率 ($\times 15$) の組織であるが、ガラス地に気孔が多発するなかに、右手に白色粒状ウスタイトの島状凝集個所が目立つ。②は①左側の拡大、③は右側凝集ウスタイト近傍の拡大である。共にガラス地に少量のウスタイト晶出は明らかである。この組織は前述した GON-1 炉壁付着滓よりも高温側の鍛冶作業が想定される。 FeO-SiO_2 系平衡状態図から推定して 1,180°C 以下に収まろう。^(註2) ただし、加熱温度と共に雰囲気による組織変化が起こることは言うまでもない。

(3) ピッカース断面硬度：Photo.2 の⑤に白色粒状結晶の硬度測定印の圧痕を示す。値は 532Hv であった。ウスタイトの文献硬度値は 450 ～ 500Hv、マグネタイトが 500 ～ 600Hv である。^(註3) マグネタイトの可能性もありうる。

(4) 化学組成分析：Table2 に示す。ガラス成分が多くて鉄分低めの傾向をもつ。全鉄分 (Total Fe) は 37.24% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.13%、酸化第 1 鉄 (FeO) 32.05%、酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) 17.44% の割合であった。ガラス質：造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は 43.08% で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) を 9.69% と高値を含む。特に酸化カルシウム (CaO) の 8.44% は普段お目にかからぬ数値である。何に由来するのか気掛りを残す。脈石成分は少なくとも二酸化チタン (TiO_2) 0.39%、バナジウム (V) 0.01%、二酸化ジルコニウム (ZrO_2) <0.01%、酸化マンガン (MnO) 0.06% であるが、銅 (Cu) のみは僅かながら 0.02% が少々高め傾向をもつ。低温素延べ鍛錬鍛冶滓として粘土汁にもとづくガラス質成分であるが、鉄素材からの銅 (Cu) は注目しておくべきと考える。

小結

SI-3 堅穴住居跡にはカマドを付設して鍛冶炉がなく、2点の埴形鍛冶滓のみが出土した。別の鍛冶遺構からの投棄の可能性が指摘されている。SI-3はSI-33よりも時期の下る遺構と考えられ、鍛冶滓の鉱物相は少量のウスタイト品出ながら操業温度の差（ファヤライトのみで約800℃、後者はファヤライト+微小ウスタイトで1,100℃）があり、これが単なるバラツキか、それとも技術差なのか興味を覚える滓であった。

3-3. SI-71 堅穴住居跡出土遺物：6世紀中葉

GON-4：炉壁（鍛冶炉）

（1）肉眼観察：一見すると埴形鍛冶滓に近似するが、ガラス化した鍛冶炉の炉壁内面の破片で、47.5gを測る。色調は表面が灰褐色から淡緑色を呈し、地は暗褐色となる。長軸端部の約1/5を切断し供試材とした。

（2）顕微鏡組織：Photo.2の⑥～⑧に示す。⑥は低倍率（×15）の鉱物相で、多孔質のガラス地が目立つ。⑦の拡大組織から未発達微細ファヤライトの品出が観察される。⑧は非晶質珪酸塩部分の拡大組織を示した。粘土の低温溶融物である。

GON-5：埴形鍛冶滓（極小、含鉄）

（1）肉眼観察：平面が不整多角形をした含鉄で85gと極小埴形鍛冶滓の破片である。正面中央部に羽口頸部の一部と考えられる4cm×2.3cm程の小塊状盛り上がりをもち、滓質は全体がポーラス気味で中小の気孔が乱雑に散在する。色調は前述GON-4が壁によく似て灰褐色から淡緑色を呈す。滓の排出は、小物鉄器の製作から少量単位で、間歇的に流出した形跡が窺われる。

（2）顕微鏡組織：Photo.3の①～⑤に示す。①は赤熱鉄素材が鍛打により表面酸化膜が剥離飛散して、付着酸化膜に取り込まれた鍛造剥片である。表層ヘマタイト（Hematite：Fe₂O₃）が僅かに白く存在し、中間層のマグネタイト（Magnetite：Fe₃O₄）と内層ウスタイト（Wüstite：FeO）の鑑別はつけ難いが3層分離型剥片は確実である。0.02mm程度の超微厚で高平坦度を保つので鍛打加工の後半も仕上げ段階からの派生物と推定される。次に②は黒色ガラス地に淡灰色盤状結晶のファヤライト（Fayalite：2FeO・SiO₂）が品出する低温域の鉱物組成、③は滓の中核部で高温域に品出した成長白色粒状結晶のウスタイト（Wüstite：FeO）である。鍛冶作業は棒状・板状半製品を中心に低温素延べから一部沸し鍛接を交えた可能性を語る鉱物相と解釈できる。

（3）ビッカース断面硬度：Photo.3の④は淡灰色盤状結晶の硬度測定の圧痕である。値は663Hvでファヤライトに同定される。⑤は白色粒状結晶で硬度値は532Hvであり、ウスタイトもしくはマグネタイトが想定される。

（4）化学組成分析：Table2に示す。全鉄分（Total Fe）が48.90%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.12%、酸化第1鉄（FeO）37.36%、錆化鉄を若干含むのか酸化第二鉄（Fe₂O₃）28.22%と高めの割合であった。顕微鏡組織のウスタイトの増量は当然酸化第1鉄に反映される。脈石成分の二酸化チタン（TiO₂）0.26%、バナジウム（V）<0.01%、二酸化ジルコニウム（ZrO₂）<0.01%、酸化マンガン（MnO）0.05%など低めで始発原料は砂鉄ではなく鉄鉱石（岩鉄磁鉄鉱）であろう。造滓成分（SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O）は26.84%で、このうち塩基性成分（CaO+MgO）は3.28%を含む。沸し鍛接鍛錬鍛冶滓としての成分組成の整合性を保つ。また銅（Cu）は0.01%と低めであるが鉄に有害な五酸化燐（P₂O₅）が0.73%と高めにあるのは気掛りである。

小結

SI-71 遺構はカマドを設けた6世紀中葉の堅穴住居跡である。鍛冶炉壁や羽口、更には極小埴形鍛冶滓な

ど出土したが、鍛冶工房でなくて廃棄絡みで捉えている。何しろ6世紀代の鍛冶内容が窺える遺物であって、明らかに5世紀代のSI-33やSI-3出土遺物の炉壁や滓の低温域派生物(Fayalite主体)とは一線を画する高温操業(成長Wüstiteの増加)の相様が確認できた。

3-4. SI-36 堅穴住居跡(鍛冶遺構)出土遺物:5世紀前葉~中葉

GON-6: 土器転用羽口

(1) 肉眼観察: 身厚が約7mmを測る高環脚部を転用した羽口の先端部小破片である。外面の上手側が薄皮状に滓化して僅かに発泡する。短軸端部12mmを検鏡資料とした。

(2) 顕微鏡組織: Photo.3の⑥~⑧に示す。⑥は内面胎土の粘土鉱物セリサイト(Cerisite)である。微細な鱗片状粘土鉱物は加熱変化を受けてなく、低温使用が窺われる。また、石英・長石類にもクラックなどの変化がなく、これらも低温使用を裏付ける。⑦⑧は先端外面のガラス化部分を示す。⑦の白色微小結晶は少量のマグネタイト、黒色基底は拡大すれば僅かに未発達ファヤライト結晶が弱々しく晶出する。高環脚転用羽口で用立てられる鍛冶操業内容といえる。

GON-7: 椀形鍛冶滓(小、含鉄)

(1) 肉眼観察: 104g 弱で厚さ2.54cmの小型椀形鍛冶滓の半欠品である。上下面と側面の一部が生きる。上面の中央寄りに亀裂が走り、含鉄部の存在を黒錆からも察知できる。側面の酸化土砂中には、铸造剥片の噛み込みがある。長軸端部1/3を供試材とした。

(2) マクロ組織: Photo.9の下段に示す。断面は右端が椀形鍛冶滓の底部で、左側が上面に位置する。滓質は中層の下寄りにウスタイトが密に晶出し、その下部(右寄り)に中小の気孔が集中し、低温域ファヤライト単相域から最下層酸化土砂に連なる。以上の如く切り出し断面には金属鉄は遺存せず錆化鉄が上面(左寄り)黒色垢がりに観察される。

(3) 顕微鏡組織: Photo.4の①~⑤に示す。①~③は白色粒状結晶のウスタイトが密に晶出する組織であり、粒内に目立つ析出物は認められない。これに淡灰色長柱状結晶のファヤライトと共存する鉱物相は高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓の晶癖である。次に④は錆化鉄に残されたパーライト地に針状セメントタイトが析出した過共析鋼(>0.77% C)の痕跡である。その右側の表層側は加熱中に素地鉄が加熱酸化されてウスタイト化する状況が認められる。鍛冶滓の生因である。⑤は同じくウスタイトと錆化鉄の共存であるが、こちらには風化が進行して金属組織の痕跡を残さない。

(4) ピッカース断面硬度: Photo.4の①に白色粒状結晶の硬度測定印の圧痕を示す。値は465Hvでウスタイトに同定できる。

(5) EPMA調査: Photo.11に特性X線像と定量分析値を示す。反射電子像(COMP)にみられる微小金属鉄粒と白色粒状結晶などの鉱物相の分析である。まず注目すべきは分析点27の微小楕円形状金属鉄である。105% Fe-1.1% Cuで銅を固溶する。鍛冶鉄は高[Cu]材が想定できる。次に滓は特性X線像から白色粒状結晶には白色輝点が鉄(Fe)と酸素(O)に集中しウスタイトと判明した。分析点3と6の定量分析値は、前者で96.0% FeO、後者は98.0% FeOでこれを裏付けて両者は1.0% Al₂O₃を固溶する。また分析点5の淡灰色長柱状結晶は、定量分析値が54.3% FeO-31.2% SiO₂組成からファヤライト(Fayalite: 2FeO・SiO₂)が同定されて、分析域が狭小のため、周囲のガラス分の5.5% CaOや2.1% MgOと1.5% K₂O組成を拾う。更に分析点4は、素地ガラスで38.9% SiO₂-23.0% Al₂O₃-6.7% CaO-10.6% K₂O-1.8% Na₂Oから非晶質珪酸塩が同定されて、ここでは16.9% FeOの固溶である。

(6) 化学組成分析: Table2に示す。鉄分は高めで造滓成分が低め寄りの成分系である。すなわち、全鉄分(Total Fe)は52.68%に対して金属鉄(Metallic Fe)0.69%、酸化第1鉄(FeO)47.42%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)

21.63%の割合である。一方造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は22.17%とさほど高くなく、これに塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) を3.91%含む。脈石成分は二酸化チタン (TiO_2) 0.21%、バナジウム (V) <0.01%、二酸化ジルコニウム (ZrO_2) <0.01%、酸化マンガン (MnO) 0.08%など全て低めで、製鉄原料の砂鉄充当は否定される。注目すべきは鉄と親和力の高い元素の銅 (Cu) が0.69%と群を抜いて高い。恐らく含鉄部分のCuの固溶が分析値に強く効いた結果であろう。更に前述したEPMA調査で微小金属鉄粒に1.1% Cuの銅固溶のあったのと整合性を保つ。当梃形鍛冶滓は、鍛冶原料鉄に高Cu材を使用した可能性が頗る強く、その反映が鉄粒にも滓にも表われたと指摘できる。

GON-8：梃形鍛冶滓（極小、含鉄）

(1) 肉眼観察：平面が不整多面形を呈し、含鉄で27gと極小の梃形鍛冶滓である。小塊状の含鉄滓の寄り集まりが窺われる。上面端部には錆彫れて欠けた小塊状部をもつ。色調は酸化土砂に覆われてはいるが濃茶褐色から黒褐色となる。供試材は長軸端部の錆彫れ部を含めた2/3を当てた。

(2) マクロ組織：Photo.10の上段に示す。切断面は気孔以外はほぼ全面白色鉱物相と淡褐色錆化鉄の島状小域で占める。残念ながら金属鉄の遺存はなかった。

(3) 顕微鏡組織：Photo.4の⑥～⑧に示す。鉱物相は大きく成長した白色粒状結晶ウスタイトと極く僅少のガラス質珪酸塩が粒間隙を埋める。⑦は錆化鉄主体にウスタイト、⑧は逆にウスタイトが主体で錆化鉄従の組織を提示した。当組織は故鉄溶解滓か、鉄下げ滓の何れかの可能性が高い。貴重な情報となる金属鉄組織の痕跡は未検出に終わった。

(4) ピッカース断面硬度：Photo.4の⑥は成長白色粒状結晶の硬度測定の際の圧痕を示す。値は472Hvでウスタイト (Wüstite: FeO) に同定される。

(5) 化学組成分析：Table2に示す。鉄分が高く造滓成分が極端に低く、更に脈石成分も低減された組成である。全鉄分 (Total Fe) は64.22%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.27%、酸化第1鉄 (FeO) 48.43%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 37.31%は錆化鉄含みの割合となる。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は8.05%と低値となり塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) も0.90%に留まる。一方脈石成分の二酸化チタン (TiO_2) 0.10%、バナジウム (V) <0.01%、二酸化ジルコニウム (ZrO_2) <0.01%、酸化マンガン (MnO) 0.03%など前述してきた分析値の何れよりも少ない。また、酸化クロム (Cr_2O_3) 0.04%、五酸化燐 (P_2O_5) 0.08%、銅 (Cu) 0.01%などの低減は著しい。故鉄再溶解に際しての排出滓の様相は十分に汲み取れる。

GON-9：鉄製品（鉄地銅張り）

(1) 肉眼観察：残存長さ3.9cm、最大幅2.7cm、厚み4mm程度の板状鉄製品の破片で2片が接合する。破面の端部は3個所に緑青が咲いた部分が小範囲に観察された。これに接して青銅色の斑点状の発色部まで存在する。表裏面は酸化土砂や錆彫れから平坦度が損なわれるが、薄板状金属製品の可能性が窺われる。供試材は2片分れの内側の片方から採取した。

(2) マクロ組織：Photo.10の下段に示す。切断面は金属鉄無く黒錆化し、例えば鎌刃状の端部から峰部と刃先といった案配の断面で、実測図にみられた弱凸レンズ状の中央部の盛り上がりは認められない。なお、峰部には小さな別条材断面 (幅5mm×厚み2mm) が検出された。条材が意図するものか偶発的固着か決めかねる。なお、マクロ組織観察では緑青源は捉えきれなかった。

(3) 顕微鏡組織：Photo.5の①～⑨に示す。①にみられる峰部対応箇所から鉄中非金属介在物 (non-metallic inclusion: 鉄鋼中に介在する固形体の非金属性不純物、つまり鉄やマンガン、珪素および燐などの合金元素の酸化物、硫化物、珪酸塩などの総称) と、金属鉄組織の痕跡が観察できた。鍛造品であり②は珪酸塩系介在物で熱間加工により長く変形する。展伸中央の一部には白色粒状結晶のウスタイト品出が認めら

れる。沸し鍛接時に鉄肌を目減り防止に粘土汁を塗布したものがガラス化し、鍛接線として残ったと推定される。鍛打成形を証明する貴重な組織である。続いて③は巻込みスラグで、淡灰色長柱状結晶のファヤライト (Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) と白色粒状結晶ウスタイトの共存である。該品の製造履歴は大型共晶介在物の存在により低温還元直接製鋼法にもとづく塊鉄由来が想定できる。

④⑤の金属組織の痕跡は、フェライト (Ferrite : 純鉄、もしくは α 鉄) 地に僅かなパーライト痕跡が観察された。パーライトの面積比から炭素量が0.2%前後と推定できて極軟鋼寄りの素材であった。フェライト結晶粒は④で細粒、⑤は粗大粒で加熱時の温度ムラからか乱れている。しかし錆化鉄の中から局部的に遺存した非金属介在物と金属組織に遭遇できたのは倭倭の極みといっても過言ではなからう。

一方、緑青の起源組織を⑥～⑨に示す。⑥⑦は峰部相当部の厚み方向の内側であって、銅張り表層でなくて、鉄中深く取り込まれた $5 \mu\text{m}$ 以下の微細銅粒である。繰返すが鉄地銅張り品そのものではなくて、既に銅張り故鉄材料を溶融した後の転用再生鉄器と理解すべきであろう。前述したように断面形状も刃物と見做せるところを併せての発言となる。次に⑧⑨の銅粒はマクロ組織中央折れ口近くで、やはり厚み方向中程で風化銅粒が検出できた。こちらも表面張り込み銅ではなくて、鉄中取り込み状況にある。複数の銅粒取り込みはスクラップ鍛冶の実態に迫る組織に評価できる。

(4) EPMA 調査 : Photo.12 の上段4枚に微細銅粒の特性X線像と定量分析結果を示す。顕微鏡組織の⑥⑦と同一視野の反射電子像 (COMP) である。分析点28の銅粒は、特性X線像の銅 (Cu) に白色輝点が確りと集中し、定量分析値は88.5% Cu-9.5% Fe 組成の結果が得られた。銅粒に鉄が少量固溶している。この時の鉄素地は、分析点29で59.8% Fe-35.4% O 組成である。銅は粉れもなく鉄中に固溶することなく存在する状況が確かめられた。次に鉄中に巻込まれたスラグ、すなわち大型共晶介在物の分析結果をPhoto.12の下段5枚に反射電子像と特性X線像で示す。まず、分析点7の白色粒状結晶の定量分析値は、99.7% FeO からウスタイト (Wüstite : FeO)、分析点9の淡灰色長柱状結晶は63.2% FeO-32.1% SiO_2 組成でファヤライト (Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、更には暗黒色ガラス地の分析点8は23.8% SiO_2 -17.2% Al_2O_3 -3.3% CaO 組成であった。本来は珪酸塩となる筈が分析箇所が狭小のため47.1% FeO を有する。更には注目すべきは微量ながら1.1% Cu の溶け込みが確認された。

GON-10 : 粒状滓 (注4)

GON-10-1

(1) 肉眼観察 : 直径1.6mmの青灰色を呈する表面が平滑な偏球形の微細遺物である。気孔の発生はなく磁着はやや弱い。

(2) マクロ組織 : Photo.6 の①に示す。断面は大きく空洞化した球体で、極薄肉厚の白色鉱物相が辛うじて輪郭を支える。

(3) 顕微鏡組織 : Photo.6 の②③に示す。鉱物相は外層に不鮮明なヘマタイト (Hematite : Fe_2O_3) が見え隠れする程度に析出し、その内側に淡灰色多角形結晶のマグネタイト (Magnetite : Fe_3O_4) が埋める。通常の鍛打に伴う粒状滓としては、やや違和感がある組織である。

GON-10-2

(1) : 肉眼観察 : 直径1.3mmで青灰色を呈し、表面に凹凸をもつ球体の微細遺物である。気孔を発生し、やや磁着を強めに有する。

(2) マクロ組織 : Photo.6 の④に示す。断面内部が大きく空洞化し、輪郭を支える白色鉱物相は環状を失い滑らかに欠ける。

(3) 顕微鏡組織 : Photo.6 の⑤⑥に示す。外層の白色ヘマタイトは厚みが不均一ながら明瞭に観察され、

その内側のウスタイトが非晶質に凝集で晶出する。低温派生起因から外観の凹凸、更には断面組織の外周肌の波うちに連なるのだろう。

GON-11：鍛造剥片 (注 5)

GON-11-イ-1 5.4 × 3.9 × 0.46mm、磁着：やや弱

(1) 肉眼観察：表面は暗褐色、裏面が青灰色。両面共に無光沢のほぼ平坦度を保つ剥片である。

(2) 顕微鏡組織：Photo.6 の⑦に示す。肥大して平坦性を欠く白色外層のヘマタイト (Hematite : Fe_2O_3)、淡褐色でこちらも不均衡な中間層マグネタイト (Magnetite : Fe_3O_4)、その内側には不規則粒で凝集気味の内層ウスタイト (Wüstite : FeO) の 3 層で構成された鉱物相である。酸化膜構成は通常の鍛打による剥片よりも乱れがあり自然剥落皮膜かもしれない。

GON-11-イ-2 4.3 × 3.8 × 0.5mm、磁着：やや弱

(1) 肉眼観察：表は暗褐色、裏が青灰色、両面共に無光沢で平坦度を保つ剥片である。

(2) 顕微鏡組織：Photo.7 の①に示す。外層は白色微厚のヘマタイト、中間層は淡褐色連続性のあるマグネタイト、内層は非晶質のウスタイトで構成される。いわゆる 3 層分離型皮膜であり、仕上げ最終時の派生が想定される。

GON-11-イ-3 2.7 × 1.9 × 0.1mm、磁着：やや弱

(1) 肉眼観察：表は暗褐色で無光沢、裏面が青灰色に光沢質、表裏共に平坦度を保つ剥片である。

(2) 顕微鏡組織：Photo.7 の②に示す。3 層分離型の鍛造剥片であり、外層は白色微厚のヘマタイトで若干連続性を欠くが、その存在は確認できる。中間層のマグネタイトは薄手で、内層ウスタイトは非晶質。前述 11-イ-2 に準ずる皮膜である。

GON-11-ロ-1 4.8 × 3.7 × 0.53mm、磁着：やや強

(1) 肉眼観察：表面は暗褐色で無光沢、裏面が青灰色の光沢質で両面の平坦度は保たれた剥片である。

(2) 顕微鏡組織：Photo.7 の③に示す。3 層分離型の鍛造剥片で外層ヘマタイトは確り成長し、中間層マグネタイトは肥大気味、内層ウスタイトは非晶質である。

GON-11-ロ-2 3.9 × 3.0 × 0.2mm、磁着：やや強

(1) 肉眼観察：表裏共に青灰色で平坦度を保ち、表は無光沢、裏は光沢質の剥片である。

(2) 顕微鏡組織：Photo.7 の④に示す。3 層分離型被膜で外層ヘマタイト、中間層マグネタイト、内層ウスタイト共々健全である。

GON-11-ロ-3 2.9 × 2.8 × 0.12mm、磁着：やや強

(1) 肉眼観察：表裏共に青灰色、光沢質で平坦度を保つ剥片である。

(2) 顕微鏡組織：Photo.7 の⑤に示す。該品も 3 層分離型被膜で各層共健全であった。鍛造剥片として充分認知できる。

小結

5 世紀前葉～中葉に属する SI-36 竪穴住居跡は、半穴方形で竪穴の隅の部分から鍛冶関連遺物が集中的に出土した。高坏脚軒羽口は、胎土の粘土鉱物セリサイトの鱗片状組織に加熱変化が認められず、長時間の

高温作業は否定されよう。更に同伴焼形鍛冶滓の小型(104g)・極小(27g)滓は、共にウスタイト+ファヤライト鉱物相の晶出で、高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓はなされているが、排出量が少なく小型鉄器製作に留まる。しかし本格鍛冶の萌芽は十分に読み取れる。ここで注目すべきは、小型焼形鍛冶滓の方は、高銅(Cu)素材の処理から銅(Cu)が0.69%と高く、鉄地銅張りも古鉄あたりの再生鍛冶があった事を示唆する。これを実証するのが緑青吹き鉄製品である。銅板被覆痕跡はなく、鉄内に銅粒を内蔵するところから鉄地銅張り故鉄の再利用の可能性が指摘できよう。鉄中銅粒は88.5% Cu-9.5% Fe組成であった。銅板の始発原料は酸化銅鉱であろう^(註6)。銅・鉄共存ではなく鉄中への銅の固溶であるが拡大解釈も銅・鉄・硫黄三元状態図を採用すれば可能であろう。^(註7)

一方、鍛打作業を実証する粒状滓の出土量は少なく、その断面輪郭は歪で、表面張力にもとづく張りがなく、高温作業に覚え無い形状だった。後続作業の派生物である鍛造剥片は、内層ウスタイトが非晶質の3層分離型健全剥片であり、鍛打後半段階の作業が察知できた。SI-36 堅穴住居跡出土遺物は、前述した SI-33 鍛冶よりも高温化に移行した鍛冶内容である。根拠は滓の鉱物相がファヤライト主体からウスタイトへと移行しているところに基づく。

3-5. 杉村遺跡 SI-3 出土遺物：6世紀後葉

GON-12：焼形鍛冶滓(極小、含鉄)

(1) 肉眼観察：平面が不整形長方形で扁平な極小の完形焼形鍛冶滓である。片端部が羽口設置が想定されて表面に粘土溶融滓がある。反対側端部は含鉄部で黒錆も観察されて、こちらは供試材を採取した。

(2) 顕微鏡組織：Photo.8の①～⑨に示す。主要鉱物相は②③にある淡灰色長柱状結晶のファヤライトと白色粒状結晶のウスタイトが基地のガラスに晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖であり、④～⑦で観察されるファヤライト優先晶出個所もあり、高温沸し鍛接から低温素延べ作業のあいなかばする作業だろうか。含鉄は金属鉄に遭遇できず⑧⑨の錆化鉄抽出に留まった。金属鉄組織の痕跡は不明瞭で、どの程度の炭素含有量の素材が充たされたのか情報は得られていない。

(3) 化学組成分析：Table2に示す。全鉄分(Total Fe)は43.36%、造滓成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)が31.73%で、このうち塩基性成分($\text{CaO} + \text{MgO}$)は3.23%を含む。また脈石成分は低く、二酸化チタン(TiO_2)0.23%、バナジウム(V) < 0.01%など前述した権現山遺跡 SI-71 堅穴住居跡出土品(GON-5:極小、含鉄焼形鍛冶滓で6世紀中葉)の成分に酷似して、鍛冶作業条件は似通っている。しかし、鍛冶素材を配慮すると該品は銅(Cu)が0.04%と高め(SI-71は0.01% Cu)で、五酸化燐(P_2O_5)は逆に SI-71 は0.73%に対して0.33%と低い。鍛冶原料鉄の産地の違いが化学組成に如実に表れている。

小結

当遺跡は権現山遺跡と低地を挟んだ指呼の間に位置する。SI-3 堅穴住居跡はカマドと貯蔵穴をもつ5.2m大の方形を呈するもので、鍛冶関連遺物が壁沿いから出土した事実から鍛冶工房でなく投棄品ともいわれている。調査の極小焼形鍛冶滓は鉱物相が二分されてファヤライトの多い低温素延べ作業とウスタイトを交えた高温沸し鍛接の両者混じりの作業が想定される。鍛冶原料鉄は0.04% Cu素材で、権現山遺跡の低[Cu]材とは異なるものの搬入が指摘できる。同じ6世紀代でも複数の海外からの鉄交易ルートが存在した可能性が忍ばれる。もしくは生産地の複数も配慮すべきかも知れぬ。

まとめ

権現山遺跡と杉村遺跡から出土した5～6世紀の鍛冶関連遺物を調査して、羽口使用で排滓のある本格鍛冶の経時的発展の様相を窺うことができた。個々のまとめをTable3に示す。日本列島内の初期鉄器文化

は弥生時代中期初頭より始まる。中国東北部の燕で生産された二条凸帯鋳造鉄斧破片（焼なまし脱炭で軟質化した可鍛铸铁）の砥石研磨の転用鉄器から端を発し、棒状・板状焼なまし脱炭半製品の加熱軟化した素材の鋳切り成型、曲げ加工、砥石研磨による原始鍛冶へと展開される。铸铁脱炭鋼の採用で、これが弥生時代中期後半から後期である。羽口を使用し素材溶融で排滓を伴う本格鍛冶の始まりは古墳時代まで待たねばならぬ。^(注8) 古墳時代初頭の博多遺跡の突出した本格鍛冶は位置いて近年4世紀後半から5世紀代の鍛冶遺跡の調査事例が増えてきた。関東方面では4世紀後半に属する埼玉県宮代町の山崎山遺跡、茨城県土浦市の八幡脇遺跡、北陸側となるが新潟県長岡市五千石遺跡、5世紀中頃は群馬県富岡市丹生屋敷山遺跡がある。^(注9) このうち五千石遺跡と丹生屋敷山遺跡からはファヤライトを主要鉱物相とした低温素延べ鍛錬鍛冶滓が確認されている。大部分が現在報告書の印刷準備中であり、これらが刊行された時には、本格鍛冶の事始を論じてみたく思う次第である。いずれにしろ今回調査の権現山遺跡の5世紀前葉から中葉、更には5世紀末と小刻みのデータが得られて、6世紀中葉、後葉（杉村遺跡）までの経時的発展が俯瞰できたのは貴重である。

注

(1) ファヤライトの低温安定に関する実験論文と筆者（大澤）はホーロー焼成実験の体験から割り出した推定温度である。

(1) - 1 Wones, D.R. and Gilbert, M.C. (1969) The fayalite-magnetite-quartz assemblage between 600° and 800°C. American Journal of Science. Schairer Vol. 267-A, p. 480-488
水熱反応実験で600°のファヤライト生成を示す。

(1) - 2 O'Neill, H.S.T.C. (1987) Quartz-fayalite-iron and quartz-fayalite-magnetite equilibria and the free energy of formation of fayalite (Fe_2SiO_4) and magnetite (Fe_3O_4). American Mineralogist, Vol. 72, p. 67-75.

電気化学反応で1000K(700°C)前後のファヤライト生成を確認。

(1) - 3 Roedder, E. (1952) A reconnaissance of liquidus relations in the system $\text{K}_2\text{O} \cdot 2\text{SiO}_2\text{-FeO-SiO}_2$. Amer. Jour. Science. Bowen Volume, P. 435-456

金属鉄と平衡する条件下で、800°Cまでファヤライト生成が「推定」されている。（カリの存在でファヤライトの生成温度が低下する）

(2) 『鉄鋼便覧』第3版 第1巻 (1981) 丸善 P48

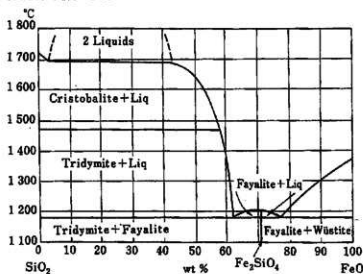


図4・13 FeO-SiO_2

(3) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968

ウスタイトは 450 ～ 500Hv、マグネタイトは 500 ～ 600Hv、ファヤライトは 600 ～ 700Hv の範囲が提示されている。ウルボスピネルの硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン (Ti) を固溶するので、600Hv 以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ (Al) が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため 700Hv を超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。

(4) 粒状滓とは鍛冶作業において凹凸を持つ鉄素材が鍛冶炉の中で赤熱状態に加熱されて、突起部が溶け落ちて酸化され、表面張力の関係から球状化したり、赤熱鉄塊に酸化防止を目的に塗布された粘土汁が酸化膜と反応して、これが鍛打の折に飛散して球状化した微細な遺物である。

(5) 鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌 (金肌) やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色 (光沢を発する) へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる^(注10)。

この鍛造剥片や粒状滓は極めて微細な鍛冶派生物であり、発掘調査中に土中から肉眼で識別するのは難しい。通常は鍛冶釜の床面の土砂を水洗することにより検出される。鍛冶工房の調査に当たっては、鍛冶炉を中心にメッシュを切って土砂を取り上げ、水洗選別、秤量により分布状態を把握できれば、工房内の作業空間配置の手がかりとなりうる重要な遺物である^(注11)。

鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト (Hematite: Fe_2O_3)、中間層マグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4)、大部分は内層ウスタイト (Wüstite: FeO) の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は 1450℃ を越えると存在しなく、ウスタイト相は 570℃ 以上で生成されるのは Fe-O 系平衡状態図から説明される。^(注12)

鍛造剥片を王水 (塩酸 3: 硝酸 1) で腐食すると、外層ヘマタイト (Hematite: Fe_2O_3) は腐食しても侵されず、中間層マグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) は黄変する。内層のウスタイト (Wüstite: FeO) は黒変する。

鍛打作業前半段階ではウスタイト (Wüstite: FeO) が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

(6) - 1 大澤正己「古代銅製錬復元実験から確認できた銅・鉄共存の様相」『古代銅製錬復元実験報告書』美東町教育委員会 2008

(6) - 2 大澤正己「長光遺跡出土銅製錬滓の分析調査」『長光遺跡 殿町山ノ方遺跡～福岡県田川郡香春町内所在遺跡の発掘調査報告書～』(香春町文化財調査報告書 第 17 集) 香春町教育委員会 2009

(7) Schlegel and Schuller 1952 Liquidus Surface of the iron-copper-sulfur system
Z・Metallkunde, 43: 421

(8) - 1 大澤正己「金属組織学からみた日本列島と朝鮮半島の鉄」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 110 集 2004.2 89 ～ 122 頁

(8) - 2 大澤正己「マクロ・ミクロの世界が捉えた弥生の鉄～可鍛鉄・铸铁脱炭鋼を中心に」『第 18 回フォーラム講演会「弥生時代の鉄文化— (1) —」～理系から見た鉄関連遺物の諸問題～』予稿集 (社) 日本鉄鋼協会 社会鉄鋼工学会部 2008

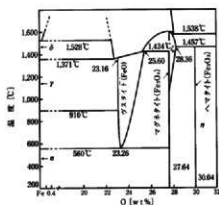
(8) - 3 大澤正己「九州の鉄生産遺跡」『九州地域の古代から近代の製鉄技術発達史』(社会鉄鋼工学会部 2008 年度秋季講演大会シンポジウム論文集) 社団法人日本鉄鋼協会 2008

(9) 大澤正己「上丹生屋敷山遺跡出土梃形鍛冶滓の金属学的調査」『丹生地区遺跡群— 一県営知地帯総合整備事業丹生地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— <本文編> (富岡市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 29 集) 富岡市教育委員会 2009

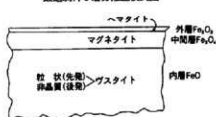
(10) 大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘 年報 15』(平成3年度)
千葉県房総風土記の丘 1992

(11) 大澤正己「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』（今宿バイパス関連埋蔵文化財調査報告書 第13集）福岡県教育委員会 1991

(12) 森岡進「鉄鋼腐食科学」『鉄鋼工学講座』11 朝倉書店 1975



Fe-O系平衡狀態圖



符号	遺跡名	出土 位置	構成 No.	遺物 名称	推定 年代	計測値		縦着 度	メタル	調査項目							備考	
						大きさ (mm)	重量 (g)			マクロ 顕微鏡	顕微鏡	ビジュアル 顕微鏡	X線 分析	EP MA	化学 分析	耐火 度		切
GON-1	梅田山 遺跡	SG 1区 SL33	5	伊模(銅造、 押付金)	5世紀	31 × 22 × 12	6.2	1	なし		○							
GON-2		SG 1区 SL33	11	鉄製品 (銅造品)	5世紀	34 × 22 × 4	20.7	5	H (△)	○	○	○						
GON-3		SG 1区 SL3	14	銅形鋸造押 (小、含鉄)	5世紀	90 × 62 × 39	171.3	3	銅化 (△)		○	○			○			
GON-4		SG 1区 SL71	17	伊模 (銅造品)	6世紀	83 × 60 × 16	47.5	2	なし									
GON-5		SG 1区 SL71	23	銅形鋸造押 (極小、含鉄)	6世紀	75 × 50 × 31	85.0	2	銅化 (△)						○			
GON-6		SG 10区 SL36	30	土器(用引口)	5世紀	36 × 21 × 8	5.3	1	なし									
GON-7		SG 10区 SL36	46	銅形鋸造押 (小、含鉄)	5世紀	66 × 56 × 25	103.8	3	銅化 (△)	○	○	○			○			
GON-8		SG 10区 SL36	50	銅形鋸造押 (極小、含鉄)	5世紀	41 × 39 × 17	27.2	4	銅化 (△)	○	○	○			○			
GON-9		SG 10区 SL36	57	鉄製品 (灰地銅造)	5世紀	39 × 27 × 4	11.6	6	銅化 (△)	○	○				○			
GON-10		SG 10区 SL36	58	粘土器 (2点)	5世紀	-	-	-	なし									
GON-11		SG 10区 SL36	59	銅造銅片 (2点)	5世紀	-	-	-	なし									
GON-12	杉村 遺跡	GN 1区 SL3	78	銅形鋸造押 (極小、含鉄)	6世紀	65 × 45 × 19	32.3	3	銅化 (△)	○	○			○				

Table2 供試材の組成

番号	遺跡名	出土位置	遺物名称	測定年代	全成分 (Total Fe)	金属分 (Metal Fe)	銅分 (Cu)	鉛分 (Pb)	錫分 (Sn)	亜鉛分 (Zn)	ニッケル分 (Ni)	クロム分 (Cr)	マンガン分 (Mn)	鉄分 (Fe)	炭素分 (C)	硫黄分 (S)	五酸化珪素分 (SiO ₂)	酸化チタン分 (TiO ₂)	酸化バナジウム分 (V ₂ O ₅)	酸化ニオブ分 (Nb ₂ O ₅)	酸化タングステン分 (Ta ₂ O ₅)	酸化モリブデン分 (MoO ₃)	酸化コバルト分 (CoO)	酸化ニッケル分 (NiO)	酸化マンガン分 (MnO)	酸化鉄分 (FeO)	酸化銅分 (Cu ₂ O)	酸化鉛分 (PbO)	酸化錫分 (SnO ₂)	酸化亜鉛分 (ZnO)	注	
GON-3	権現山遺跡	SG1区 SG3	銅製銅治 (小, 含鉄)	5世紀	37.24	0.13	32.05	17.44	21.88	8.11	8.44	1.25	2.90	0.50	0.06	0.39	0.03	0.027	0.29	0.17	0.01	0.02	<0.01	43.08	1.157	0.010						
GON-5		SG1区 SG7	銅製銅治 (小, 含鉄)	6世紀	48.90	0.12	37.36	28.22	16.30	5.94	2.51	0.77	1.05	0.27	0.03	0.26	0.03	0.047	0.73	0.19	<0.01	0.01	<0.01	26.84	0.549	0.005						
GON-7		SG10区 SG36	銅製銅治 (小, 含鉄)	5世紀	52.68	0.69	47.42	21.63	11.30	5.21	2.84	1.07	1.53	0.22	0.08	0.21	0.08	0.025	0.24	0.44	<0.01	0.09	<0.01	22.17	0.421	0.004						
GON-8		SG10区 SG36	銅製銅治 (小, 含鉄)	5世紀	64.22	0.69	48.43	37.61	4.86	2.07	0.25	0.65	0.19	0.03	0.03	0.10	0.04	0.042	0.08	0.20	<0.01	0.01	<0.01	8.05	0.125	0.002						
GON-12	杉村遺跡	GON1区 SG3	銅製銅治 (小, 含鉄)	6世紀	45.36	0.14	38.08	22.33	20.85	5.94	2.36	0.87	1.35	0.36	0.06	0.23	0.04	0.052	0.33	0.19	<0.01	0.04	<0.01	31.73	0.700	0.005						

Table3 出土遺物の調査結果のまとめ

番号	遺跡名	出土位置	遺物名称	測定年代	銅冶組成	化学組成 (%)							所見	
						Total Fe	Fe ₂ O ₃	電気性成分	TiO ₂	V	MoO ₃	ガラス質成分		Cu
GON-1	権現山遺跡	SG1区 SG33	銅製銅治 (小, 含鉄)	5世紀	Fe-Hg	-	-	-	-	-	-	-	-	低銅 (800℃前後) ガラス溶融物
GON-2		SG1区 SG33	銅製品 (銅製品)	5世紀	銅冶, 合金: Fe, 2金: Fe 地に Cu 組成	-	-	-	-	-	-	-	-	銅冶合金組成の内部の可塑性, 減少
GON-3		SG1区 SG3	銅製銅治 (小, 含鉄)	5世紀	G-W (少量)	37.24	17.44	9.69	0.39	0.01	0.06	43.08	0.02	低銅鉛石系銅冶材料の低銅鉛石組成を呈し、銅冶組成
GON-4		SG1区 SG7	銅製銅治 (小, 含鉄)	6世紀	G-F	-	-	-	-	-	-	-	-	低銅ガラス溶融物, 5世紀銅冶物と差をなし
GON-5		SG1区 SG7	銅製銅治 (小, 含鉄)	6世紀	W-F, 付着銅治	48.90	28.22	3.28	0.26	<0.01	0.05	26.84	0.01	低銅鉛石系銅冶材料の低銅鉛石組成を呈し、銅冶組成
GON-6		SG10区 SG36	銅製銅治 (小, 含鉄)	5世紀	銅上銅物 (セリサイト) の表面溶融物に M の混入	-	-	-	-	-	-	-	-	高銅量の銅冶は認められない, 上層の銅冶物で対比可能
GON-7		SG10区 SG36	銅製品 (小, 含鉄)	5世紀	W-F, 銅冶, 針状 Cu-鉛出部共存	52.68	21.63	3.91	0.21	<0.01	0.08	22.17	0.09	高銅量と銅冶, 銅冶は銅冶組成を呈し、銅冶組成
GON-8		SG10区 SG36	銅製銅治 (小, 含鉄)	5世紀	W-F, 銅冶, 針状 Cu-鉛出部共存	64.22	37.61	0.90	0.10	<0.01	0.03	8.05	0.01	高銅量と銅冶, 銅冶は銅冶組成を呈し、銅冶組成
GON-9		SG10区 SG36	銅製品 (小, 含鉄)	5世紀	針状 Cu-鉛出部共存	-	-	-	-	-	-	-	-	銅冶組成の銅冶は認められない, 上層の銅冶物で対比可能
GON-10		SG10区 SG36	銅製品 (小, 含鉄)	5世紀	GON-10-1: M, GON-10-2: W 組成	-	-	-	-	-	-	-	-	銅冶組成の銅冶は認められない, 上層の銅冶物で対比可能
GON-11		SG10区 SG36	銅製品 (小, 含鉄)	5世紀	GON-11-1: 4-1: M 主体, GON-11-1: 2-3, 1-1 ~ 3: 3-1 部分組成	-	-	-	-	-	-	-	-	銅冶組成の銅冶は認められない, 上層の銅冶物で対比可能 (銅冶組成減少)
GON-12	杉村遺跡	GON1区 SG3	銅製銅治 (小, 含鉄)	6世紀	W-W 銅冶合金	45.36	22.33	3.23	0.23	<0.01	0.06	31.73	0.04	低銅鉛石系銅冶材料の低銅鉛石組成を呈し、銅冶組成

F: Fayalite (2FeO・SiO₂), H: Hercynite (FeO・Al₂O₃), G: ガラス (非晶質), Fe: Ferrous (フェライト) と センテナイト (鉄鉱石)
 Ce: Cementine (Fe₂C), W: Wustite (FeO), M: Magnetite (Fe₃O₄), He: Hematite (Fe₂O₃), 銅冶: Goethite (α-FeO・OH)

Table4 古墳時代前・中期の鉱石系精錬・鍛錬鍛冶滓出土例

遺跡名	所在地	推定年代	持口出土 状況	鍛冶の 検出	鉱物組成	化学組成 (%)					注
						Total Fe	CaO	TiO ₂	Cu	V	
橋本礼川	鹿児島県指宿市	5C 中葉		有	Wüstite Fayalite	55.7	3.47	0.24	0.013	0.010	1
博多 59 次	福岡県福岡市城南区	4C 初	有	有	有	59.5	1.09	0.13	0.040	0.003	2
松 本	福岡県福岡市城南区	4C 中頃		有	有	48.8	3.95	0.11	0.004	0.001	3
松 本 A	福岡県宗像市	5C 前半		有	有	45.9	3.99	0.15	0.016	0.001	4
野取一町間	福岡県福岡市	5C 中頃		有	有	43.7	1.85	0.30	0.010	0.005	4
勝浦井ノ口	福岡県福岡市	4C 後半		有	有	50.34 ~ 54.09	1.29 ~ 1.39	0.31 ~ 0.38	0.010 ~ 0.020	0.01	5
重 留	福岡県北九州市	5C 中頃	専用羽口	有	有	49.9 ~ 55.0	1.24 ~ 1.92	0.32 ~ 0.41	0.010 ~ 0.025	< 0.01	6
扶 鶴	大分県日田市	5C 前半 ~ 中	高环脚 専用羽口	有	有	61.28	0.14	0.06	0.012	0.002	7
窪木薬師	岡山県総社市	5C 前半		有	有	45.10	1.99	0.36	0.012	0.012	8
小 戸	兵庫県川西市	4C 後半	有	有	有	41.3 ~ 54.3	0.7 ~ 1.37	0.15 ~ 0.24	0.016 ~ 0.079	0.003 ~ 0.006	9
南 流	兵庫県南あわじ市	5C 中葉	有	有	有	39.4 ~ 67.0	0.9 ~ 2.14	0.14 ~ 0.18	0.039 ~ 0.19	0.001 ~ 0.004	10
大 泉	大阪府柏原市	5C 末 ~ 7C 初	有	有	有	53 ~ 66	0.32 ~ 1.53	0.083 ~ 0.27	0.003 ~ 0.007	0.001 ~ 0.007	11
大和川今池 土師 27 - 1	大阪府松原市	5C 前半	有	有	有	47	1.14	0.84	0.005	0.040	12
陵 南 北	有	有	有	有	有	27.8 ~ 42.7	1.9 ~ 3.8	0.18 ~ 0.37	0.012 ~ 0.020	0.005 ~ 0.012	有
森	大阪府交野市	5C 後	有	有	有	46 ~ 55	0.59 ~ 2.0	0.23 ~ 2.1	0.019 ~ 0.043	0.001 ~ 0.005	13
田 屋	和歌山県和歌山市	5C 後半	有	有	有	43.0 ~ 56.6	1.8 ~ 3.34	0.14 ~ 0.25	0.001 ~ 0.016	0.002 ~ 0.003	14
長瀬 高浜	鳥取県湯梨浜町	4C 末 ~ 5C 初	有	有	有	33.6 ~ 53.1	1.19 ~ 3.61	0.24 ~ 1.09	0.030 ~ 0.24	0.004 ~ 0.020	15
吉田 奥	愛知県瀬戸市	5C 末	有	有	有	57.7	4.44	0.14	0.008	0.001	16
行 入 塚	埼玉県熊谷市	5C 初 ~ 中	高环脚 転用羽口	有	有	34.0 ~ 59.4	1.01 ~ 5.56	0.12 ~ 0.51	0.027 ~ 0.20	0.002 ~ 0.010	17
御 蔵 山 中	埼玉県さいたま市	5C 中葉	有	有	有	44.0 ~ 62.0	2.8 ~ 5.7	0.23 ~ 0.51	0.006 ~ 0.010	0.005 ~ 0.013	18
御 蔵 台	有	有	有	有	有	34.0 ~ 62.0	2.7 ~ 8.8	0.54 ~ 1.29	0.080 ~ 0.063	0.011 ~ 0.026	19
中 山	千葉県四街道市	5C 前半	高环脚 転用羽口	有	有	49.0 ~ 57.0	3.70 ~ 6.0	0.40 ~ 0.59	0.010 ~ 0.026	0.013 ~ 0.044	有
折 返 A	福島県いわき市	5C 末	高环脚 転用羽口	有	有	49.0 ~ 63.0	0.42 ~ 2.1	0.020 ~ 0.58	0.005 ~ 0.065	0.006 ~ 0.036	20
西 裏	栃木県小山市	5C 末	高环脚 転用羽口	有	有	43.23	3.05	0.40	0.010	0.01	21
新 郭	栃木県壬生町	5C 中葉	高环脚 専用羽口	有	有	42.5 ~ 46.0	3.3 ~ 7.02	0.51 ~ 0.52	0.010 ~ 0.025	0.01 ~ 0.02	22
永 作	福島県郡山市	5C 後半	有	有	有	38.28 ~ 51.33	0.73 ~ 1.77	0.44 ~ 0.68	0.010 ~ 0.020	0.01 ~ 0.020	23
南 山 田	福島県郡山市	5C	専用羽口	有	有	39.0 ~ 53.0	1.4 ~ 2.4	0.24 ~ 0.44	0.013 ~ 0.030	0.004 ~ 0.010	24
辰 巳 城	福島県石川郡 玉川村	有	有	有	有	54.09 ~ 61.71	0.71 ~ 1.88	0.20 ~ 1.44	0.008 ~ 0.010	0.01	25
南 小 泉	宮城県仙台市	5C 中頃	有	有	有	55.7	1.32	0.35	0.007		26
山 王	宮城県多賀城市	5C	高环脚 専用羽口	有	有	56.5	1.98	0.12	0.002	0.002	27
八 幡 橋	茨城県上浦市	4C 末 ~ 5C 初	有	有	有	34.8 ~ 51.5	1.62 ~ 5.85	0.15 ~ 0.31	0.025 ~ 0.045	0.01 ~ 0.045	28
畑 沢	千葉県市川市	5C 中葉	有	有	有	64.01	1.65	0.22	0.001	0.006	29
安 威	大阪府大阪市	5C 初 ~ 6C 前	有	有	有	33.08	4.84	0.69	0.016	0.021	30
下 城	大分県佐伯市	表掘り不明	有	有	有	61.9 ~ 67.7	0.17 ~ 0.30	0.17 ~ 0.24	0.004 ~ 0.009	0.006 ~ 0.010	31
古志本郷	島根県出雲市	4C 代	専用羽口	有	有	54.74	1.40	0.78	0.004	0.02	32
柳	島根県安来市	弥生時代終末期	有	有	有	50.09 ~ 60.85	1.97 ~ 2.74	0.08 ~ 0.29	< 0.01	< 0.01 ~ 0.01	33
笠見第 3	鳥取県琴浦町	5C 代	有	有	有	39.32	2.51	0.45	0.002	0.01	34
						37.30 ~ 36.73	1.20 ~ 2.06	0.19 ~ 0.37	0.02	< 0.01	35

第4節 樺見山遺跡・杉村遺跡出土土器関連遺物の金属学的調査

上丹生屋敷山	群馬県富岡市	5C 中頃			G(ガラス)+F	16.54	6.14	0.7	0.01	0.01	36
五石	新潟県長岡市	4C 後半	高環型	有	F+W	15.08 ~ 39.17	1.46 ~ 4.81	0.41 ~ 0.58	< 0.01	0.01 ~ 0.02	37
樺見山	栃木県宇都宮市	5C 前葉～中葉	高環型	有	F・W+F	53 ~ 64	0.25 ~ 2.8	0.03 ~ 0.08	0.01 ~ 0.09	< 0.01	38

H: Hercynite, FeO・Al₂O₃

Table 4 の注

1. 指宿市教育委員会発掘調査、報告書準備中
2. 大澤正己「鉄屑からみた古代の鉄生産」『特別考古学講座—鉄と考古学（第2回）』福岡市埋蔵文化財センター 1993.10.16
3. 大澤正己「松本遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『松本遺跡』（郡山町文化財調査報告書第11集）郡山町教育委員会 1984
4. 原俊一他「埋蔵文化財発掘調査報告書 1984年度（宗像市文化財調査報告書第9集）宗像市教育委員会 1985
5. 大澤正己「春日井の鉄の歴史」『春日井市史』1995.3.31
6. 大澤正己「勝浦井ノ口遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『勝浦北部丘陵遺跡群—勝浦井ノ口遺跡』（津屋崎町文化財調査報告書第13集）津屋崎町教育委員会 1998
7. 大澤正己「重留遺跡銅冶工所跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『重留遺跡第4地点』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第303集）（財）北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2002.3
8. 大澤正己「萩崎遺跡銅冶関連遺物の金属学的調査」『萩崎遺跡』（大分県日田市埋蔵文化財調査報告書第9集）日田市教育委員会 1995
9. 大澤正己「彦根遺跡銅冶関連遺物の金属学的調査」『彦根遺跡』（彦根市文化財調査報告書第76集）彦根市教育委員会 1990
10. 大澤正己「大瀬遺跡及び周辺遺跡出土鉄滓・鉄製品の金属学的調査」『大瀬・大瀬南遺跡—下永田宮聖地遺跡に於ける』大坂府柏原市教育委員会 1981
11. 大澤正己「大坂府所在土師遺跡 27-1 街区、大和川・今池・高師川遺跡出土鉄滓の調査」『大和川・今池遺跡』大和川・今池遺跡調査会 1981
12. 大澤正己「新日本製鉄研修センター内出土鉄滓・鉄製品の科学的分析調査」『土師遺跡発掘調査報告書その1』堺市教育委員会 1976
13. 大澤正己「新日本製鉄研修センター内出土鉄滓・鉄製品の科学的分析調査」『土師遺跡発掘調査報告書その1』堺市教育委員会 1976
14. 交野市教育委員会「森遺跡Ⅰ・Ⅱ」1989・1990
15. 大澤正己「交野市森遺跡とその周辺遺跡出土土器関連遺物の金属学的調査」『森遺跡Ⅰ』交野市教育委員会 1991
16. 大澤正己「田原遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『田原遺跡』（一般国道24号線敷設に伴う調査）（財）敷設敷地埋蔵文化財センター 1991
17. 鳥取県教育委員会提供資料、未発表
18. 大澤正己「吉田奥遺跡出土土器関連遺物の金属学的調査」『土上之山』～愛知県瀬戸市吉田、吉田奥遺跡群、広久手古窯跡発掘調査報告書～瀬戸市教育委員会 1992
19. 大澤正己「本田・東台Ⅰ・Ⅱ遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『本田東台・上前原』（江南町文化財調査報告書第8集）埼玉県大里郡江南町教育委員会 1988
20. 大澤正己「御蔵山中遺跡出土鉄滓と鉄製品の金属学的調査」『御蔵山中遺跡』大宮市遺跡調査会 1989
21. 大澤正己「中山遺跡銅冶工所跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『中山遺跡、水尻遺跡、東京遺跡』（財）国史院日本歴史学研究所文化財センター発掘調査報告書第11集）国史院日本歴史学研究所 1987
22. 大澤正己「折返A遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『折返A遺跡』（いわき市埋蔵文化財調査報告書第54集）財団法人いわき市教育文化事業団 1998
23. 大澤正己「西栗遺跡出土土器関連遺物の金属学的調査」『西栗遺跡』（栃木県埋蔵文化財調査報告書第180集）栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1996
24. 大澤正己「新郷遺跡出土土器関連遺物の金属学的調査」『新郷古墳群・新郷遺跡・下り遺跡』（栃木県埋蔵文化財調査報告書第214集）栃木県教育委員会・栃木県文化振興事業団 1998
25. 福島県南城市教育委員会調査、福島県文化センター寺島文隆氏提供資料、未発表
26. 大澤正己「南山田遺跡出土土器関連遺物・鉄製品の金属学的調査」（財）郡山市埋蔵文化財調査報告書事業市への提出資料 1998.7.10
27. 大澤正己「辰巳城遺跡出土土器関連遺物の金属学的調査」『島根地区遺跡発掘調査報告書3』島根県教育委員会・財団法人島根県文化センター 1991.3
28. 大澤正己「南小泉遺跡祭祀土器出土鉄滓の金属学的調査」『南小泉遺跡第16～18次発掘調査報告書2』（仙台市文化財調査報告書第140集）仙台市教育委員会 1990
29. 大澤正己「山王遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『山王遺跡Ⅰ』（多賀城市文化財調査報告書第45集）多賀城市教育委員会・建設省東北地方建設局 1997.3
30. 大澤正己・鈴木瑞穂「田村・神宮遺跡群（八幡協・辰野遺跡）出土土器関連遺物の金属学的調査」『八幡協遺跡』（田村・神宮地区地区整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書）土浦市教育委員会、編集：土浦市遺跡調査会 準備中
31. 大澤正己「新郷遺跡出土土器関連遺物の金属学的調査」『白井久美子氏依頼』
32. 大澤正己・鈴木瑞穂「安成遺跡出土土器の金属学的調査」『安成遺跡』（大坂府埋蔵文化財報告 1999.6）大坂府教育委員会 2000.3
33. 大澤正己「下城遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『下城遺跡群の研究』別府大学考古学研究所編、提出原稿、刊行未定
34. 大澤正己「古志本郷遺跡出土土器関連遺物の金属学的調査」『古志本郷遺跡Ⅰ』斐伊川放水路建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書 XVII 島根県教育委員会 2003.3
35. 大澤正己「藤津遺跡出土土器の金属学的調査」『藤津丘陵遺跡群～塩田山遺跡・竹ヶ輪遺跡・前尾ノ尾遺跡～（一般国道9号（安東道路）建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅱ 建設省国土交通省事務所 島根県教育委員会 1998.3
36. 大澤正己・鈴木瑞穂 2007「笠見第3遺跡出土土器関連遺物の金属学的調査」『笠見第3遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 14 p217-235
37. 大澤正己 2009「上丹生屋敷山遺跡出土土器の金属学的調査」『丹生地区遺跡群—熊谷郡地帯総合整備事業丹生地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—（本文編）』（富岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第29集）富岡市教育委員会 2009
38. 大澤正己・鈴木瑞穂「五石遺跡出土土器関連遺物の金属学的調査」
39. 大澤正己「樺見山遺跡・杉村遺跡出土土器関連遺物の金属学的調査」『東谷・中島地区遺跡群 10 樺見山遺跡北部・杉村遺跡』（栃木県埋蔵文化財調査報告書第331集）栃木県教育委員会・財団法人とぎ生進学財団文化財部 2010

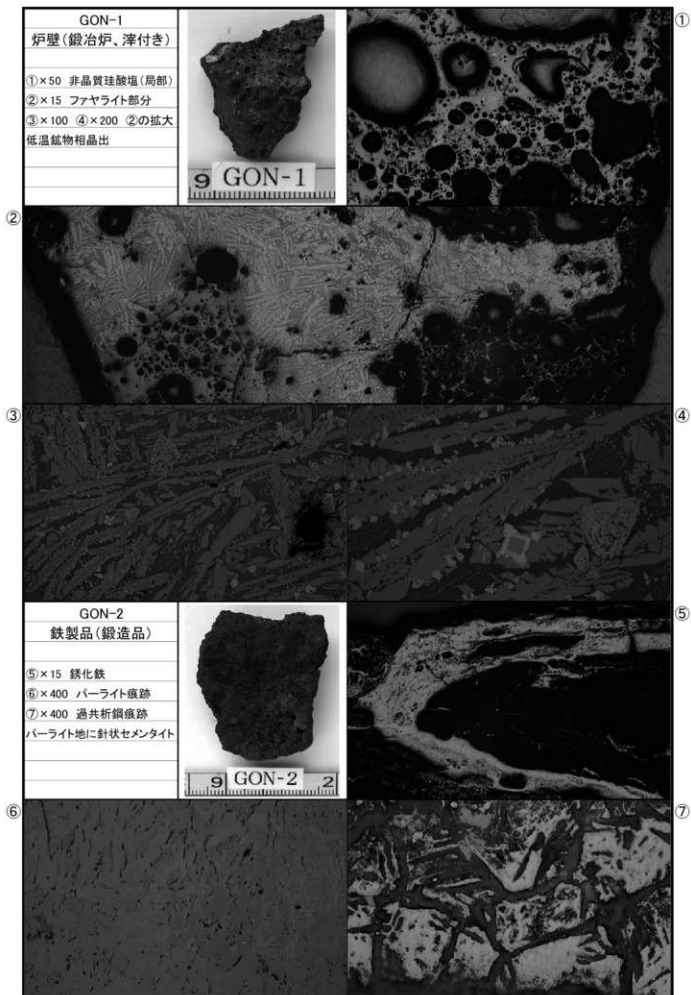


Photo.1 炉壁と鉄製品の顕微鏡写真

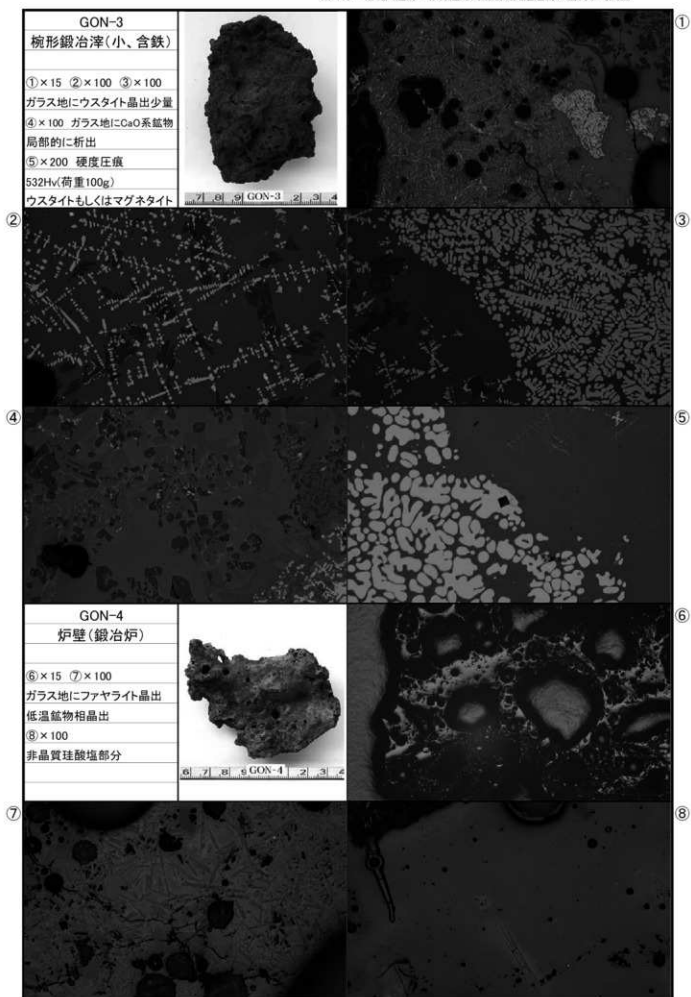


Photo.2 椀形鍛冶滓と炉壁の顕微鏡写真

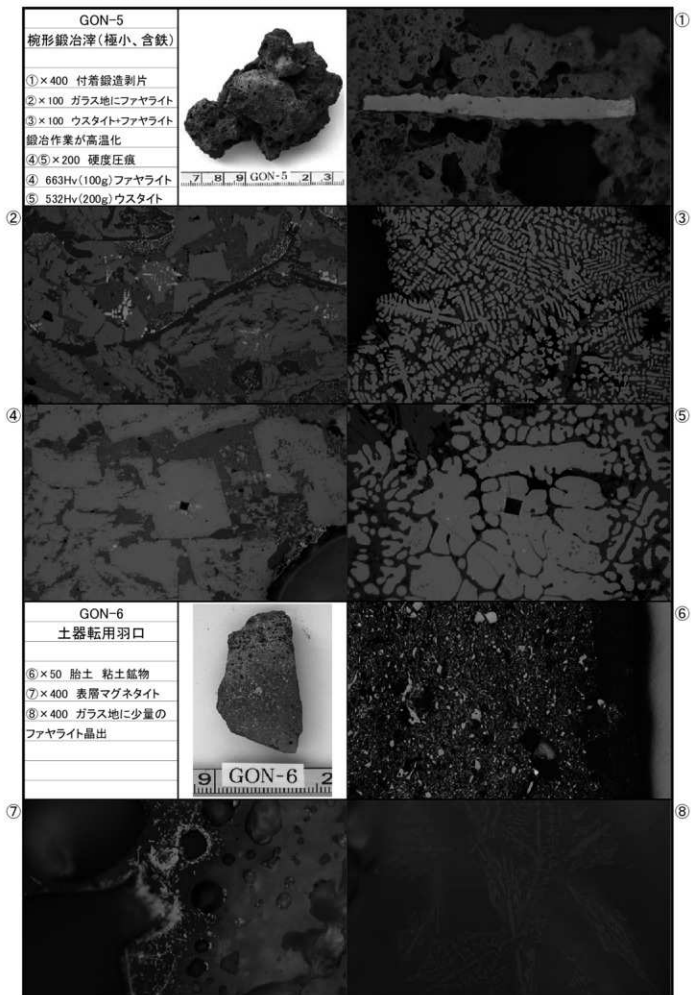


Photo.3 梶形鍛冶滓と羽口の顕微鏡写真

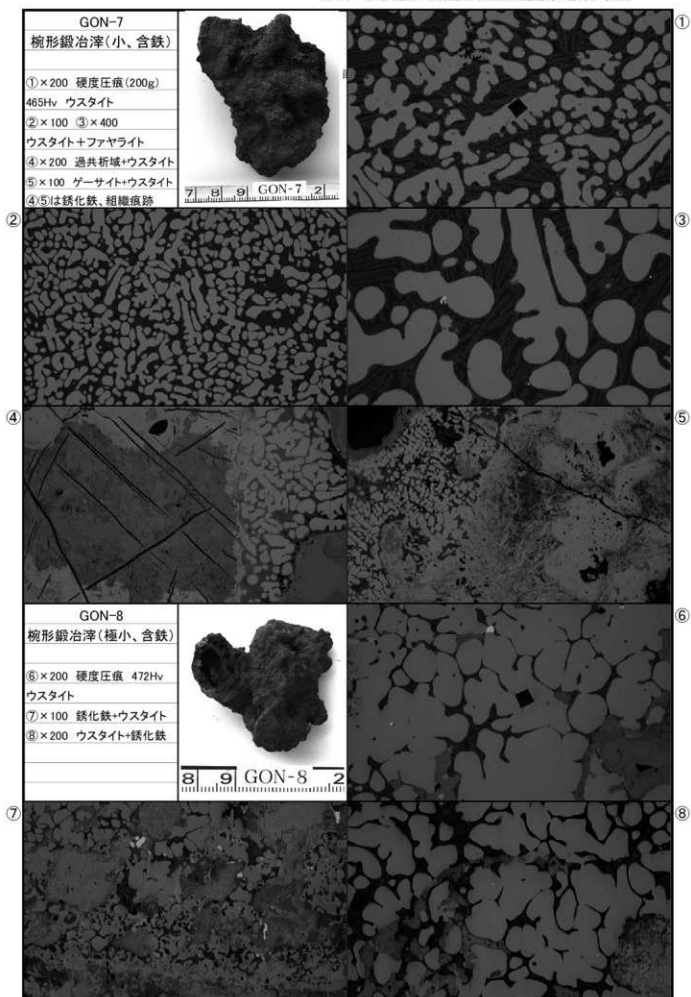


Photo.4 梔形鍛冶滓の顕微鏡写真

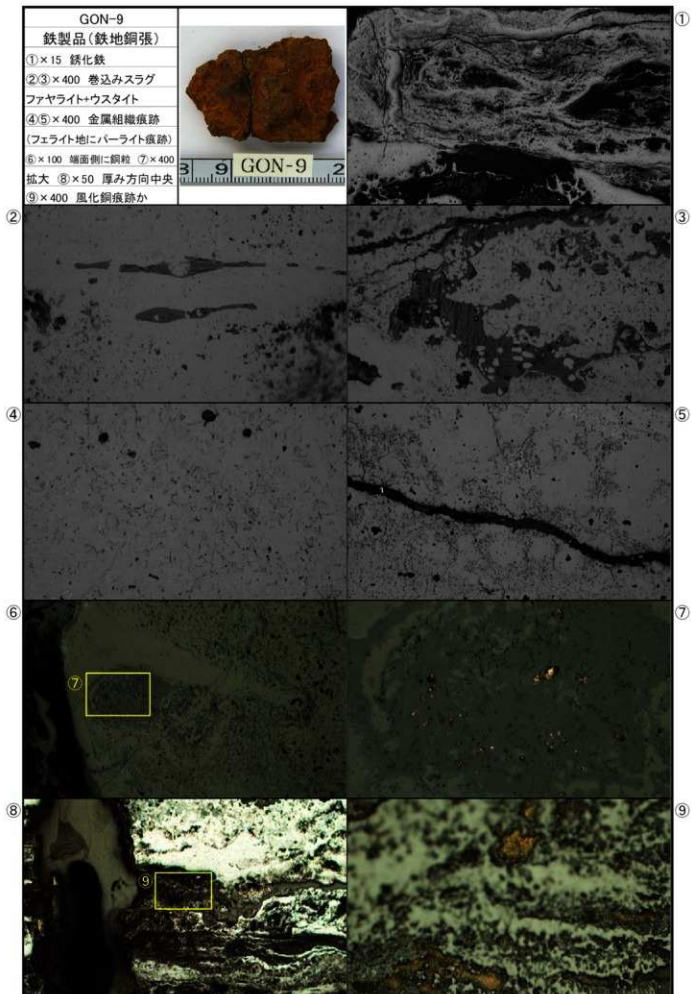


Photo.5 鉄製品(鉄地銅張転用素材)の顕微鏡写真

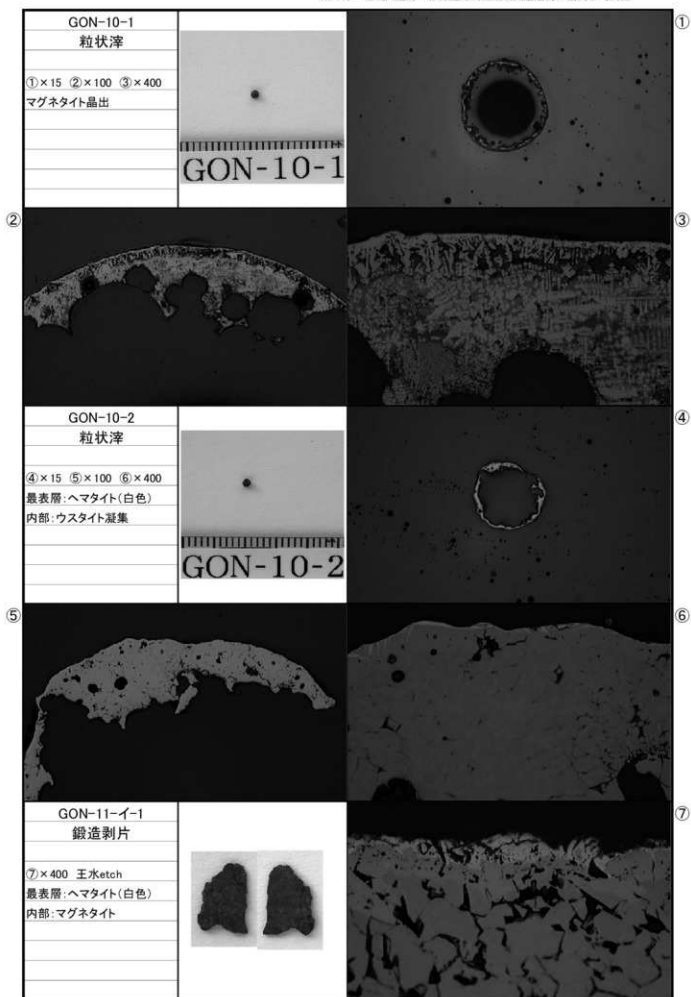


Photo.6 粒状滓と鍛造剥片の顕微鏡写真

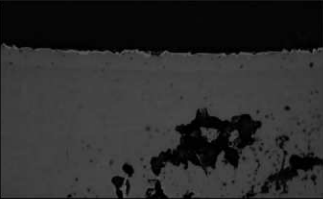
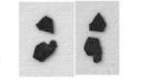
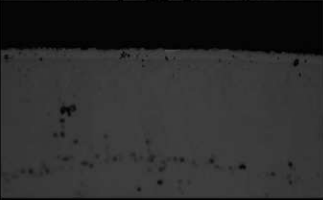
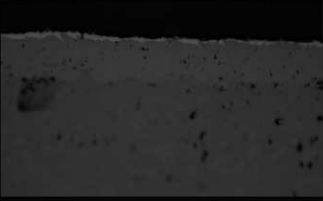
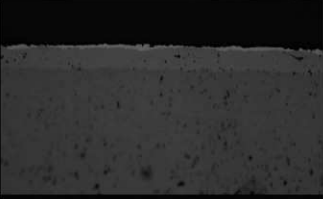
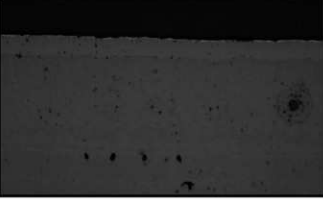
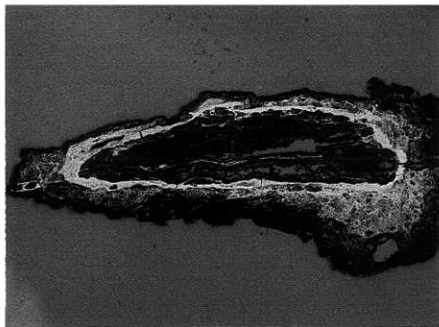
GON-11-イ-2 鍛造剥片 ①×400 王水etch 外層:ヘマタイト 中間層:マグネタイト 内層:ウスタイト(非晶質) (3層分離型皮膜)		 ①
GON-11-イ-3 鍛造剥片 ②×400 王水etch 外層:ヘマタイト 中間層:マグネタイト 内層:ウスタイト(非晶質) (3層分離型皮膜)		 ②
GON-11-ロ-1 鍛造剥片 ③×400 王水etch 外層:ヘマタイト 中間層:マグネタイト 内層:ウスタイト(非晶質) (3層分離型皮膜)		 ③
GON-11-ロ-2 鍛造剥片 ④×400 王水etch 外層:ヘマタイト 中間層:マグネタイト 内層:ウスタイト(非晶質) (3層分離型皮膜)		 ④
GON-11-ロ-3 鍛造剥片 ⑤×400 王水etch 外層:ヘマタイト 中間層:マグネタイト 内層:ウスタイト (3層分離型皮膜)		 ⑤

Photo.7 鍛造剥片の顕微鏡写真

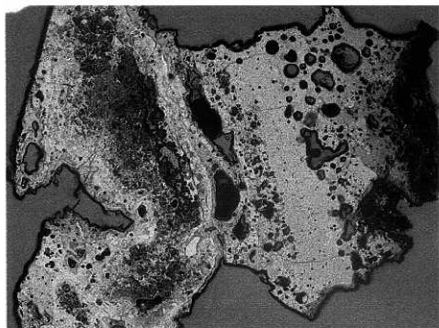


Photo.8 梘形鍛冶滓の顕微鏡写真(杉村遺跡出土)



GON-2 鉄製品

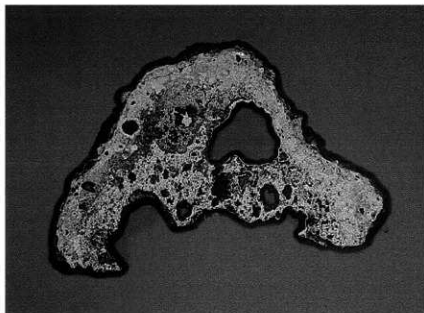
×5



GON-7 椀形鍛冶滓

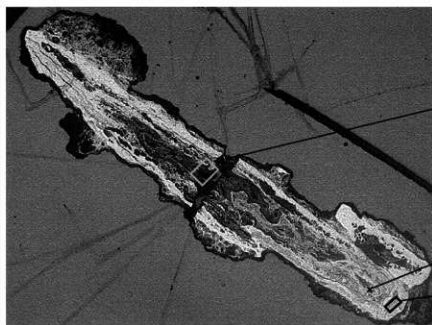
×5

Photo.9 鉄製品、椀形鍛冶滓のマクロ組織



GON-8 梔形鍛冶滓

× 10



GON-9 鉄製品(含銅)

× 5

Photo5⑨
含銅痕跡部分

Photo5②③
非金属介在物部分

Photo5⑦
含銅部分

Photo.10 梔形鍛冶滓、鉄製品(含銅)のマクロ組織

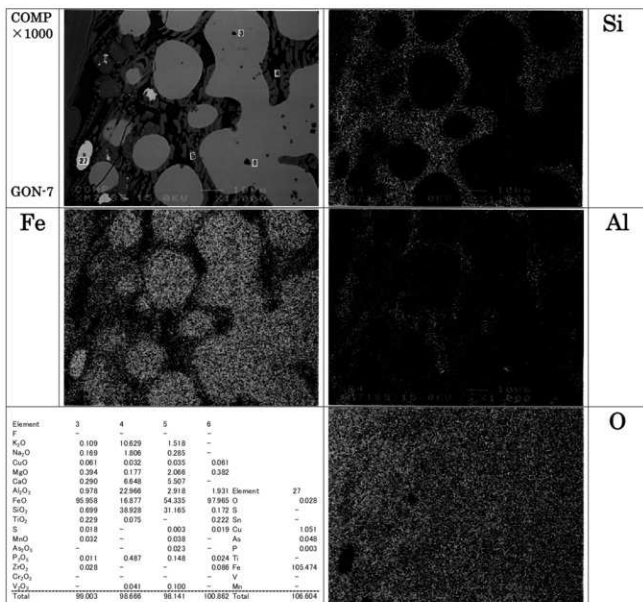


Photo.11 梶形鍛冶滓 (GON-7) の EPMA 調査

COMP ×1000		Cu																																																																																															
GON-9①																																																																																																	
Fe		O																																																																																															
COMP ×1000		Si																																																																																															
GON-9②																																																																																																	
Fe		Al																																																																																															
		O																																																																																															
<table><tr><th>Element</th><th>7</th><th>8</th><th>9</th><th>10</th></tr><tr><td>F</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td></tr><tr><td>K₂O</td><td>-</td><td>0.017</td><td>-</td><td>-</td></tr><tr><td>Na₂O</td><td>-</td><td>0.106</td><td>0.021</td><td>0.054</td></tr><tr><td>CaO</td><td>0.071</td><td>1.105</td><td>0.153</td><td>0.880</td></tr><tr><td>MgO</td><td>0.081</td><td>-</td><td>0.735</td><td>-</td></tr><tr><td>SiO₂</td><td>-</td><td>3.299</td><td>0.616</td><td>0.152</td></tr><tr><td>Al₂O₃</td><td>0.519</td><td>17.222</td><td>1.714</td><td>7.063</td></tr><tr><td>FeO</td><td>99.451</td><td>47.116</td><td>63.153</td><td>65.749</td></tr><tr><td>S</td><td>0.006</td><td>0.114</td><td>0.035</td><td>0.006</td></tr><tr><td>Si</td><td>0.024</td><td>0.388</td><td>0.118</td><td>0.073</td></tr><tr><td>Cu</td><td>88.524</td><td>0.863</td><td>0.440</td><td>0.066</td></tr><tr><td>As</td><td>-</td><td>0.081</td><td>0.008</td><td>0.011</td></tr><tr><td>P</td><td>0.118</td><td>0.022</td><td>0.016</td><td>0.432</td></tr><tr><td>Ti</td><td>0.034</td><td>0.003</td><td>0.249</td><td>0.149</td></tr><tr><td>Fe</td><td>9.455</td><td>59.782</td><td>0.190</td><td>0.060</td></tr><tr><td>V</td><td>-</td><td>-</td><td>0.037</td><td>0.002</td></tr><tr><td>Mn</td><td>-</td><td>-</td><td>0.021</td><td>0.012</td></tr><tr><td>Total</td><td>98.137</td><td>96.251</td><td>101.294</td><td>95.560</td></tr></table>			Element	7	8	9	10	F	-	-	-	-	K ₂ O	-	0.017	-	-	Na ₂ O	-	0.106	0.021	0.054	CaO	0.071	1.105	0.153	0.880	MgO	0.081	-	0.735	-	SiO ₂	-	3.299	0.616	0.152	Al ₂ O ₃	0.519	17.222	1.714	7.063	FeO	99.451	47.116	63.153	65.749	S	0.006	0.114	0.035	0.006	Si	0.024	0.388	0.118	0.073	Cu	88.524	0.863	0.440	0.066	As	-	0.081	0.008	0.011	P	0.118	0.022	0.016	0.432	Ti	0.034	0.003	0.249	0.149	Fe	9.455	59.782	0.190	0.060	V	-	-	0.037	0.002	Mn	-	-	0.021	0.012	Total	98.137	96.251	101.294	95.560
Element	7	8	9	10																																																																																													
F	-	-	-	-																																																																																													
K ₂ O	-	0.017	-	-																																																																																													
Na ₂ O	-	0.106	0.021	0.054																																																																																													
CaO	0.071	1.105	0.153	0.880																																																																																													
MgO	0.081	-	0.735	-																																																																																													
SiO ₂	-	3.299	0.616	0.152																																																																																													
Al ₂ O ₃	0.519	17.222	1.714	7.063																																																																																													
FeO	99.451	47.116	63.153	65.749																																																																																													
S	0.006	0.114	0.035	0.006																																																																																													
Si	0.024	0.388	0.118	0.073																																																																																													
Cu	88.524	0.863	0.440	0.066																																																																																													
As	-	0.081	0.008	0.011																																																																																													
P	0.118	0.022	0.016	0.432																																																																																													
Ti	0.034	0.003	0.249	0.149																																																																																													
Fe	9.455	59.782	0.190	0.060																																																																																													
V	-	-	0.037	0.002																																																																																													
Mn	-	-	0.021	0.012																																																																																													
Total	98.137	96.251	101.294	95.560																																																																																													

Photo.12 鉄製品（含銅）（GON-9）のEPMA調査

第5節 鉄関連遺構・遺物のまとめ

権現山遺跡・および杉村遺跡GN1区における鍛冶関連遺構・遺物についてのまとめを、穴澤義明氏の指導によって作成した(第165表)。古墳時代集落・居館と鍛冶遺構の関係を考える上で貴重な成果が得られた。

第165表-1 権現山遺跡・杉村遺跡の主要要素一覧表1(まとめ表)

主要素	権現山遺跡・杉村遺跡(ごんげんやまいせき・すぎむらいせき)					
調査概要	権現山遺跡:平成7～12年度(1995～2000年度)、杉村遺跡:平成8年度(1996年度) 調査組織:(財)ちぎ生考古文化財団 権現文化財センター					
調査遺構	野方鍛冶遺構2棟					
遺構情報	鍛冶遺構の情報	権現山遺跡 SG1 K SI-33	立地・規模	古墳時代中期中頃から後葉の豪族別荘跡の東側 野方建物/東西5.38m×南北5.18m(4本柱)		
			施設	鍛冶炉1基		
		権現山遺跡 SG10 K SI-36	立地・規模	古墳時代中期の方形雑列遺構(居館)の北側 野方建物/長辺4.4m×短辺2.4m以上		
			施設	鍛冶炉は削平部に所在したと推定 全床石が床面に遺存		
鉄関連遺物出土遺構と遺物	権現山遺跡4区SI-18	80.6g	権現山遺跡SG10 K SI-6	23.0g	杉村遺跡GN1 K SI-3 78.6g	
	権現山遺跡4区SI-30a	10.0g	権現山遺跡SG10 K SI-14	18.4g		
	権現山遺跡4区SI-59	15.8g	権現山遺跡SG10 K SI-30	19.6g		
	権現山遺跡SG1 K SI-3	232.7g	権現山遺跡SG10 K SI-36	11889.6g		
	権現山遺跡SG1 K SI-10	51.1g	権現山遺跡SG10 K SD-41・42	33.6g		
	権現山遺跡SG1 K SI-18	1.0g	権現山遺跡SG10 K SK-77	61.0g		
	権現山遺跡SG1 K SI-33	650.0g	権現山遺跡SG10 K SK-317	17.3g		
	権現山遺跡SG1 K SI-71	448.4g	権現山遺跡SG10 K SE-569	180.7g		
	権現山遺跡SG1 K 居館周辺燬瓦	72.3g	権現山遺跡SG10 K 確認調査TX23-18	99.7g		
	遺物	権現山遺跡SG5 K SI-100	312.6g	※権現山遺跡SG10 K SE-569は中世で、その他の		
権現山遺跡SG5 K SD-42		14.5g	遺構は古墳時代中期から後葉。			
情報	鉄関連遺物全体構成	(権現山遺跡) 全全鉄関連遺物14,268.5g/権現山遺跡全体1,662.6g(中180.7g、小92.74g、極小554.5g)、鍛冶炉102.5g、鉄製品42.8g、半環(鍛冶炉)748.3g、半環(鍛冶炉)または被熱粘土塊18.4g、粘土質炭化物32.7g、専用引口80.6g、(土器)転用引口757.0g、専用または(土器)転用引口23.2g、金床石10,800.0g、粒状土および鍛造削片(産品計測対象外)			(杉村遺跡) 全全鉄関連遺物78.6g/権現山遺跡SG1 K SI-3 78.6g	
		●権現山遺跡 ●焼別 中180.7g、小92.74g、極小554.5g/中:小:極小の比率=10.9%:55.8%:33.3% ●メタル識別 鉄化(△)569.5g、なし1,102.1g/△:なしの比率=33.7%:66.3%			(杉村遺跡) ●焼別 中78.6g/100% ●メタル識別 鉄化(△)72.5g、なし6.1g/△:なし=92.2%:7.8%	
分析	権現山遺跡(含鉄)構成比					
	引口構成	(権現山遺跡) 総数:18点 専用引口/1点80.6g、(土器)転用引口/16点757.0g、専用または(土器)転用引口/1点23.2g				
	鉄製品構成	(権現山遺跡) 鉄製品総数:鉄製品5点 棒状不明/1点2.2g、板状不明/3点29.0g、板状不明(鉄地鍍面入り)/1点11.5g				
	分析点数	●全属学的分析:12点(権現山遺跡11点、杉村遺跡は権現山遺跡1点のみ) ○権現山遺跡(権現山遺跡4点・杉村遺跡1点)、半環(2点)、鉄製品(鍛造品)(2点)、(土器)転用引口(1点)、粒状土、鍛造削片 ○分析項目/マクロ組織・顕微鏡観察・ビッカース硬度測定・EPMA・化学組成分析 ・分析(解析):(株)九州テクノリサーチ(大塚正己) ●中性子放射化分析:4点(権現山遺跡) ○権現山遺跡(2点)、鉄製品(2点) ・分析(解析):東京都市大学工学部(平田昭司)				
工程/遺物種類	鍛造鉄(TiO ₂)	鍛造鉄(TiO ₂)	鍛造鉄鍛冶前(TiO ₂)→鍛造鉄鍛冶後(TiO ₂)		鍛冶加工	
分析資料12点中	()内はTiO ₂ 値。 (-)は分析せず。	— GON-1 半環(—) GON-2 鉄製品(鍛造品)(—) GON-3 権現山遺跡(0.39) — GON-4 半環(—) GON-5 権現山遺跡(0.26) — GON-6 (土器)転用引口(—) GON-9 鉄製品(鉄地鍍面入り)(—) ◆GON-7 権現山遺跡(0.21) GON-8 権現山遺跡(0.10) — GON-10 粒状土(—) — GON-11 鍛造削片(—) GON-12 権現山遺跡(0.23)				
鉄関連遺物の傾向(分析資料3点中)	GON-2 鉄製品(鍛造品)は皮金が半具折損、芯金が通具折損	皮金と芯金で構成が異なる具折品であった				
	GON-7 権現山遺跡(小、含鉄)は針状セメント析出	通具折損を含む				
	GON-9 鉄製品(鉄地鍍面入り)は半具折損か、鍛冶を含む	鍛冶の由来は産品材料による可能性が大				

第165表-2 権現山遺跡・杉村遺跡の主要要素一覧表2(まとめ表)

年代	指定年代	●考古資料：出土土器による年代判定は、権現山遺跡の各遺構が5世紀前半から6世紀後葉、杉村遺跡GN1区SI-3が6世紀後葉、権現山遺跡SG10区SE-569だけは中世。			
保存・活用 区分	遺 構	遺 物 (鋳造銅片と鉄片は集計から除外)			
	全金属関連遺物 総重量 14,347.1g (権現山遺跡 14,268.5g・杉村遺跡 78.6g)				
	A 保存：金属学的分析資料 権現山遺跡9点 (478.6g)・杉村遺跡1点 (32.3g)				
	B 保存：報告書掲載資料 権現山遺跡67点 (13,789.9g)・杉村遺跡2点 (46.3g)				
	C 保存：屋内管理資料 (0g)				
D 保存：野外管理資料 (0g)					
概観 と 評 価 の 基 据 と す	地 域 名	旧市町村名	遺 跡 名	検 出 遺 物	時 期
	小山市関	-	寺野東	聖穴建物5棟で鉄片を出土	4世紀中葉
	真岡市龜山	-	龜山北	聖穴建物甕土に金床石・引口・鉄片・銅片等	4世紀
	小山市山井	-	本郷前	聖穴建物2棟で鋳造銅片出土 (鋳造銅片不詳)	5世紀
	真岡市久下田	芳賀郡二宮町	蟹ヶ久	聖穴遺跡遺構1棟 (鋳造銅片1基)	5世紀前期
	壬生町羽生田	-	新 郷	聖穴遺跡遺構1棟 (鋳造銅片2基)	5世紀前期
	上三川町上神土	-	郷 土	聖穴遺跡遺構1棟 (鋳造銅片2基)	5世紀前期
	宇都宮市東谷町	-	権現山SG1・SG10区	聖穴遺跡遺構2棟 (鋳造銅片2基)	5世紀前期・中葉
	宇都宮市東谷町	-	杉村 (高途遺跡西C)	聖穴遺跡遺構1棟 (鋳造銅片1基以上)	5世紀中葉
	宇都宮市砂田町	-	砂田遺跡23区	聖穴建物SI-3で専用引口と鉄片出土	5世紀中葉
	那珂川町三輪	原須部小田町	三 輪	聖穴建物1棟で高杯転用引口出土	5世紀中葉
	小山市山間	-	西 浜	聖穴遺跡遺構1棟 (鋳造銅片1基、玉工房兼用)	5世紀中葉
	小山市青沢	-	青沢街道間	聖穴遺跡遺構1棟 (鋳造銅片1基)	5世紀後葉
	宇都宮市東谷町	-	立野遺跡5区	聖穴建物4棟で鉄片を出土	6世紀前期～後葉
	上三川町磯間	-	磯間遺跡1区	聖穴建物9棟で鉄片・専用引口を出土	6世紀後葉～7世紀前期
概観 と 評 価 の 基 据 と す	・抽出された鉄関連遺物は権現山遺跡で2基の鋳造遺構、隣接する杉村遺跡の埋蔵報告区から1基の、合計3棟の鋳造遺構である。いずれの遺構も古墳時代中期中葉から後葉の豪族居館2箇所の間近に位置する。				
	・権現山遺跡から出土した鉄関連遺物は全体で14.3kgを測る。内訳は重量順で見ると、金床石の10.8kgが最大で、以下、板形鋳造片が1.7kg、(土器)転用引口と鋳造片の相違が0.8kgずつ、鋳造片が0.01kg、専用引口が0.008kgと続き、20～40gの板で鉄製品や専用または(土器)転用引口に加えて、鋳造土輪等が出土している。				
	・整理方法は、保存活用までを視野に入れたA・B・C・Dの4ランク制票付け方式で行い、全重量14,347g (権現山遺跡 14,268.5g・杉村遺跡 78.6g) の中から、A 保存 (分析資料) を10点 (510.9g)、B 保存 (報告書掲載資料) を69点 (13,836.2g) として、C 保存 (屋内管理資料) とD 保存 (野外管理資料) を0gとした。				
	・分析に用いたA 保存の資料は、全重量 (A～D 保存) 14,347g の中の510.9g (3.56%)、報告書に掲載したB 保存の資料は、全重量 (A～D 保存) の中の13,836.2g (96.44%) にあたる。A・B・C・D 保存の比率は1:27:0:0で約1:27:0:0となる。				
概観 と 評 価 の 基 据 と す	・権現山遺跡の2基の鋳造遺構から出土した鉄関連遺物は、中形から極小形の板形鋳造片や鋳造片の相違に加えて、大形の金床石や(土器)転用引口から構成されており、鋳造遺構上に伴う資料と判断される。これは金属学的な分析結果とも整合する。				
	・引口は古墳時代中期が高杯転用であるのに対して、後期前期の権現山遺跡4区SI-18のみ専用引口1点が出土している。両者の変遷は従来の関東地方の引口に対する研究成果ともほぼ一致する。(なお、後期中期のSG1区SI-7出土の引口も専用の可能性あり)				
	・権現山遺跡の鋳造遺構2棟から出土した鉄製品は5点である。このうち、外観観察により鉄地鍍銀とした鉄製品は金属学的な分析により、全内面に鍍銀が内包されていることが確認されるため、高鉄鍍銀素材に鉄地鍍銀の鉄製品が用いられた可能性が高まっている。在地豪族の保有物を再利用したものかどうかについては注目される。				
	・鉄地鍍銀 (金鍍銀) 製品が出土した鋳造遺構には、千葉県土佐矢越遺跡・大塚森森遺跡がある。板鍍銀と鋳造遺構が共存する千葉県郷土遺跡や、屋敷で金鍍銀を行う郡原黒三ツツ1遺跡でも鉄地鍍銀金具が出土しており、首長層と関わる鋳造遺跡へ高鉄が流通した事例といえる。				
概観 と 評 価 の 基 据 と す	・権現山遺跡・杉村遺跡で鋳造関連遺物を出土した遺構の時期は、出土土器から古墳時代中期 (5世紀末) から後期 (6世紀後葉) に属するものと判断される。鋳造遺構3基に因しては権現山遺跡が古く、杉村遺跡の埋蔵報告区が新しい時期の遺構と見られる。				
	・第286図でも示している通り、古墳時代中期から後期に属する27箇所以上の遺構で鉄関連遺物を出土しており、鋳造作業が継続的に行われたことがわかる。権現山遺跡・杉村遺跡に関する鉄製品の在り方と鋳造受容の実態を踏まえては第293～295図を参照されたい。				
	・権現山遺跡SG10区の開戸からは1点ではあるが鋳造片が出土しており、中世の集落における鋳造の存在が伺える。				
	・権現山遺跡と杉村遺跡は、遺跡名こそ異なるものの古墳時代中期中葉から後期後葉にかけての豪族居館2箇所を含む一連の大集落である。このうち、鋳造遺跡SG1区SI-33は北側中央の居館の東側に接し、SG10区SI-36は南側の居館の北側に位置している。両遺跡で検出された鉄関連遺物を出土した建物跡は計27箇所を数え、古代東国での鉄製品の在り方と鋳造受容の実態を踏まえては第293～295図を参照されたい。(権現山遺跡は、本報告以外に今後報告予定の部分や未調査範囲が2/3残されており、全体では1,000軒近い集落となる可能性をもつ)				
まとめ	まとめ	・板木製高杯の中央部は、大形古墳の穴で4世紀から5世紀に、一般庶民や石製模造品製作集落で鋳造遺跡・鋳造関連資料が分散しつつ認められる。板木製中央部の宇都宮市東谷町上三川町羽生田は、大形古墳・板形居館にある権現山遺跡のような大規模集落で5世紀に複数の鋳造遺構があり、6世紀にも続いて鋳造関連遺物が出土することから鉄関連加工を継続的にこなす状況が認められる。			
(作表：穴澤義典・内山敏行)					

第12章 まとめ

第1節 旧石器・縄文・弥生時代

12.1.1. 旧石器時代

水晶製の両面調整尖頭器が、権現山遺跡 SG1 区で古墳時代竪穴建物 SI-69 に 1 点混入していた(第 35 図)。本来の出土層は不明だが、第 3 章第 3 節の標準土層 II ～ IV 層間に包含されていたことが想定され、Nt-S (七本桜軽石) と Nt- I (今市軽石) の示す 1.4 ～ 1.5 万年 cal BP 頃から、As-YP (浅間板鼻黄色軽石) の示す 1.5 ～ 1.65 万年 cal BP 頃に相当する可能性がある。

東谷・中島地区付近は、宝木段丘面に立地する西荆部西原遺跡を除くと、最上位の田原ローム層だけが載る低段丘に相当するため、旧石器時代後半の遺跡が若干見られる程度である。権現山遺跡西半の北関東自動車道路調査 A 区で As-YP 層相当の遺物集中地点が 2 箇所ある(谷中他 2001)。

12.1.2. 縄文時代

権現山遺跡の縄文時代遺構は、SG1 区で前期黒浜式期の土坑 1 基 (SG1 区 SK-125) があり、また SG10 区で晩期中葉大洞 C2 式期の竪穴住居 1 棟 (SG10 区 SI-63) と縄文時代の可能性を持つ土坑 6 基 (SG10 区 SK-219・265・307・443・697・699) がある。SG1 区 SK-125 は本報告書の SG1 区で報告した(第 10 章第 1 節)。SG10 区の各遺構は今後刊行する権現山遺跡南半部の報告書で掲載する。

以上の他に、時期不明の土坑である権現山遺跡 4 区 SK-128・134・142 は重複関係からみて古墳時代中期以前の土坑で、縄文時代まで遡る可能性もある(第 179 図)。特に 4 区 SK-128 は他の遺構に比べて覆土が非常に硬く、縄文草創期に降下した Nt-S (七本桜軽石) と Nt- I (今市軽石) の粒も含んでいるので、比較的古い時代に掘られたものかもしれない。ただし、確実な縄文草創期の遺構・遺物は権現山遺跡・杉村遺跡ではみられない。

縄文早期 権現山遺跡では鬚糸文系土器(井草・大丸・夏島式土器と捺痕文土器)が目立ち、沈線文系(三戸式・田戸下層式・田戸上層式・出流原式)・条痕文系土器や早期末の縄文条痕土器も出土した(第 36・37 図)。沈線文系土器のうちでは田戸下層式と出流原式がやや多い。石器では鍬形鎌・片刃石器・礫器が早期の可能性を持つ(第 45 図 6・15、第 46 図 29～第 47 図 38)。

杉村遺跡の今回報告した GN1 区では、早期の遺物は条痕文系土器 1 片と石器 1 点だけである(第 12 図 1・2)。北関東自動車道路調査区で稲荷原式土器・スタンプ形石器と住居又は土坑 1 基、沈線文(主に田戸下層式)・条痕文系土器がある(藤田・安藤 2000, pp.31-34,38)。

縄文前期 権現山遺跡では黒浜式期の土坑が 1 基あり(SG1 区 SK-125; 第 192 図)、遺構外に黒浜、諸磯 a・b、浮島・興津式と前期末の土器がある(第 37・38 図)。

縄文中期 権現山遺跡では五領ヶ台式、阿玉台 I ～ IV 式、加曾利 EI ～ EII 式土器が出土した(第 38・39 図)。

縄文後期 権現山遺跡では堀之内 1・2 式、加曾利 B 式、曾谷式、後期安行式土器が出土した(第 40 図)。杉村遺跡では安行 2 式が少量ある(第 12 図 3～7)。

縄文晩期 次回報告予定の権現山遺跡南部に大洞 C2 式期の竪穴が 1 棟あり(SG10 区 SI-63)、遺構外遺物に大洞 B-C・C2・A 式土器が少量ある(第 41 図)。

12.1.3. 弥生時代

弥生前～中期 権現山遺跡では弥生前期後葉～中期前葉の大洞系土器と条痕文系深鉢形甕が目立つ(第

42・43図)。権現山遺跡南部にある古墳時代竪穴建物 SG5 区 SI-116 に、まとまって混入している (p.88)。この付近に弥生時代の遺構または遺物集中地点が存在していて、SG5 区 SI-116 の埋土中に流入したと見られる。条痕文や燃素文を施す弥生土器の裏が主体で、壺と思われるものも少量含む。裏は深鉢形で、条痕の中には燃素文の原体を用いて施したものを含むかもしれない。

権現山遺跡では中期中葉の流出原型～中期後葉の土器もあり、在来の重四角文・貼付口縁・燃素文の土器の他に、中部高地型櫛描文 (第 42 図 25・26) や東北南部系平行沈線文 (第 42 図 44～53) の土器も少量ある。中期後半の土器では、植物を原体にしたオオバコ系擬縄文 (第 43 図 99・100) やカナムグラ擬縄文 (第 42 図 41) が認められた。オオバコ系擬縄文は、下野市小金井出土品に確認されている (藤田典夫氏御教示)。近隣では、埼玉県北島遺跡 (吉田 2003, pp.504, 図版 178)・坂戸市木曾免遺跡 (篠田 2008, pp.190, 193, 図版 80) の報告例がある (宅間清公氏御教示)。

弥生時代後期 杉村遺跡に弥生後期二軒屋式期の土坑が 1 基あり (GN1 区 SK-57: 第 13 図)、後期土器が少量ある (第 14 図)。権現山遺跡では弥生後期の二軒屋式少量と樽式 1 片がある (第 44 図)。以上の他にアメリカ式石畿も 1 点あるが、時期を決めることは難しい (第 45 図 13)。

第2節 古墳時代

12.2.1. 古墳時代～古代の土器変遷

東谷・中島地区周辺では、権現山遺跡の東に所在する磯岡遺跡で、土器器杯を基準とする 1～5 期の時期区分がまず行われた (塚原 1999)。これに続いて杉村遺跡では、藤田 (1999) の土器編年に基いて、古墳中期を「杉村 1～4 期」、古墳後期を「杉村 4 期以降」と区分して、土器と集落の変遷が明らかにされた (藤田・安藤編 2000)。今回報告した杉村 GN1 区の南側に続く北関東自動車道路調査区の遺構を対象とした分析作業である。

今回報告地区から西に連続する権現山・百目鬼遺跡では 1～VIII 期の土器編年 (谷中・大島編 2001) が示された。これを基礎とし、時期・段階区分の数字を共通させて、各遺跡で編年を行っている。北方にある立野遺跡では 1～9 段階 (内山 2005)、その東にある中島笹塚遺跡ではそれに続けて 12 段階 (奈良時代後葉) までを設定した (内山 2008)。これらと同一基準により、今回調査した権現山遺跡北部・杉村遺跡においても 1～10 段階を設定した (第 290～292 図)。1 段階古相は古墳時代前期末または中期初め、1 段階新相～4 段階は古墳中期、5～7 段階は古墳後期、8～9 段階は古墳終末期、10 段階は奈良時代前葉に相当する。古墳時代中期は古市・舌舌島古墳群に列島最大規模の首長墳が築造される時期として定義し、特定地域の土器様相や横穴式石室導入期を指標とする立場とはならない。中期の下限は、剣や短甲の副葬が終了する TK47 型式並行期である。また、前方後円墳の築造終了後を古墳時代終末期とする。Hr-FA テフラの降下期は 4 段階末～5 段階初頭である。

遺物・重複関係・火山灰などから各段階に位置づけられる遺構を第 167 表に示す。また、古墳時代中・後期須恵器の田辺編年 (田辺 1966・1981)、終末期の飛鳥編年 (奈良国立文化財研究所 1978)、奈良時代の益子窯跡群・新治窯跡群の須恵器編年 (津野 1997・赤井 1998) との対応を示した。

以下に、各段階の標識的な一括遺物を出土した遺構を列挙する。段階区分は立野遺跡・中島笹塚遺跡と共通する。また、権現山・百目鬼遺跡の北関東自動車道路調査区 (谷中・大島編 2001)・杉村遺跡の北関東自動車道路調査区 (藤田・安藤編 2000)・磯岡遺跡 (塚原 1999) の各編年、藤田編年 (1999)、須恵器編年との対応を示す。

[1 段階古相] 権現山百目鬼 1 期・杉村 1 期 (古墳前期末～中期初頭、4 世紀末)

…今回報告地区では該当資料なし。

第167表 権現山遺跡北部と杉村遺跡 GN1 区における古墳時代・古代・中世遺構と時期区分

	土師器	須恵器	杉村 GN1 区	権現山 2 区	権現山 4 区		権現山 SG1 区	
					窆穴建物以外	窆穴建物	窆穴以外と特殊遺構	窆穴建物
古墳 中期	1 段階						(SK-94?)	
	2 段階	TK73・216	SI-1		SI-22,25,27,130 (SI-27 は 2 段階新相)		SI-33 (窆穴遺古遺構、 右欄にも表示)	SI-67,33,40,85 (SI-67 は 2 段階新相)
	2～3 段階連続	TK216・208			SD-143		棺蓋 外部溝 SD-95	
	3 段階	TK208	SI-2	SK-94	(SK-137?) 円筒形 SK-64,97,100, 114, (102?)	SI-6,16,20,29,32, (87)	棺内土坑 SK-104	SI-1,5,8b,12,13,66,69 (SI-13 は 3 段階新相)
	4 段階	TK23・47			SK-65,71,79,87,94, 105,129, (82?) 円筒形 SK-52,95,98, 104,116,129,133 方形周溝 SK-23	SI-4,5,8,10,13,14,28, (77) (SI-4,5,8,10 は 4 段階古 相 / SI-13,14,28 は新相)		SI-3,8a,70,84 (SI-3,8a は 4 段階古相 / SI-70,84 は 4 段階新相)
	詳細時期不明 (2～4 段階)		SK-53		SK-96,96,120,123, (157?) 円筒形 SK-48,49,53, 58,60,75,77,79 (P-107?)	SI-54 (4 段階以前) SI-92 (火地が平なので 3 段階以前?)	SK-42,171 (SK-67,8,145,150,67) 円筒形 SK-47,55, (114?)	SI-86 (4 段階以前で 2 段階新相?) SI-126 (SI-136 より新) SI-136 (5 段階以前で 1～3 段階新相?)
古墳 後期	5 段階	MT15・TK10	SI-5 (5 段階新相)		SK-63 (SK-93?) 円筒形 SK-113, (85?)	SI-1,2,7,9,11,18,21,26, 29,74 (SI-2,7,9,18,74 は 5 段 階古相 / SI-21,26,59 は 5 段階新相)	円筒形 SK-54	SI-2,10,17, (34?), 62, 71,88,89,179 (SI-2,10,17,89,179 は 5 段階古相 / SI-62,71, 88 は 5 段階新相)
	6 段階	TK43	SI-3		(SK-81?) ,84	SI-3,30b,31,33, (76?)		SI-1,18,32,127,174
	7 段階	TK209	SI-4		(SK-109?) 円筒形 SK-117?)	SI-12,19,30a		SI-14,90
	詳細時期不明 (5～7 段階)				(SK-62?) 円筒形 SK-45	SI-103 (5～6 段階) 円筒形 SK-53,56, (91 ～ 93?)		SI-35 (SI-2 と 34 を切 るので 5 段階以降)
古墳 終末 期	8 段階	飛鳥 I 新・II		SI-1a,1b,1c,98, 99a,99b SB-3, (4,121, 122?)		SI-15,17,24, (34?)		SI-87
	9 段階	飛鳥 III・IV						
	詳細時期不明 (8～9 段階)						(墓室 SK-128?)	
奈良	10 段階	飛鳥 V 皇子部東 4 号室 新治一丁目遺	SI-6					
	11～12 段階							
古代	詳細時期不明						(溝 SD-31?)	
中世				SE-63			区画溝 SD-37,45 井戸 SE-169 土坑 SK-137,172	窆穴遺構 SI-155,296

〔1 段階新相〕 藤田 1 期 (古墳中期前葉)

…今回報告地区では該当資料なし。2 段階の溝 (SD-95) に切られる権現山 SG1 区 SK-94 が、1 段階に該当する可能性もある。

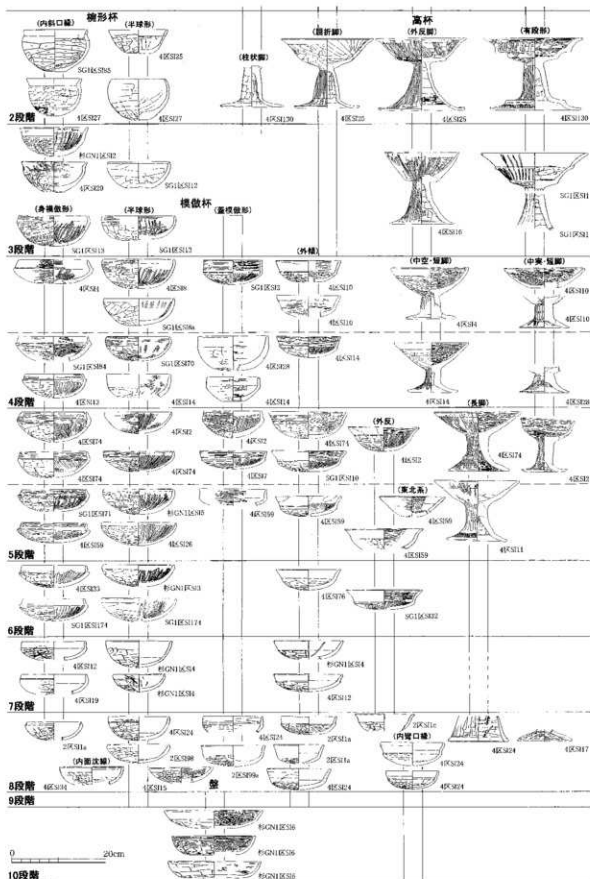
〔2 段階〕 権現山百目鬼 II 期・藤田 II 期・TK73～216 型式期 (古墳中期中葉、5 世紀前葉)

…権現山 4 区 SI-25,〔権現山 4 区 SI-27 は 2 段階新相〕

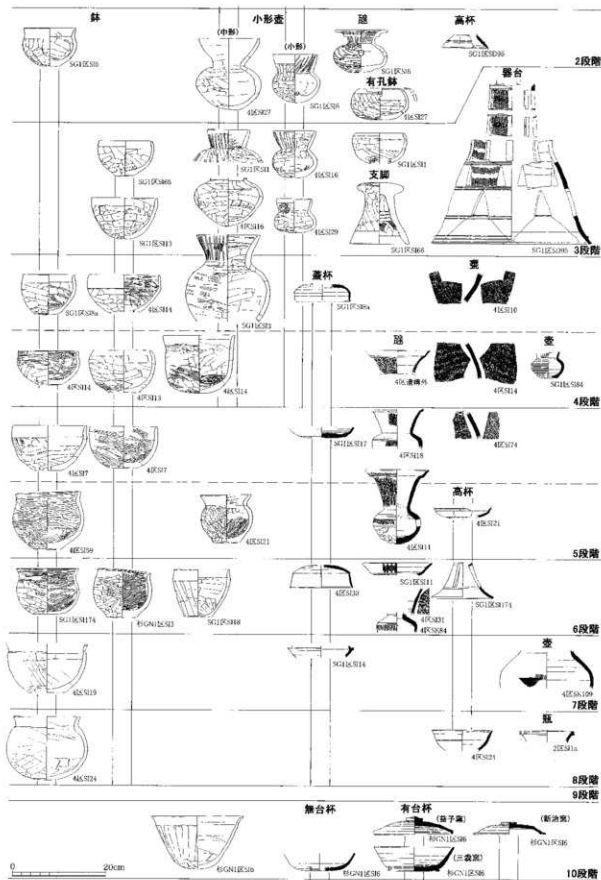
〔3 段階〕 権現山百目鬼 III 期・杉村 2 期・藤田 III 期・TK208 型式期 (古墳中期後葉、5 世紀中葉)

…権現山 4 区 SI-16,〔権現山 4 区 SI-13 は 3 段階新相〕

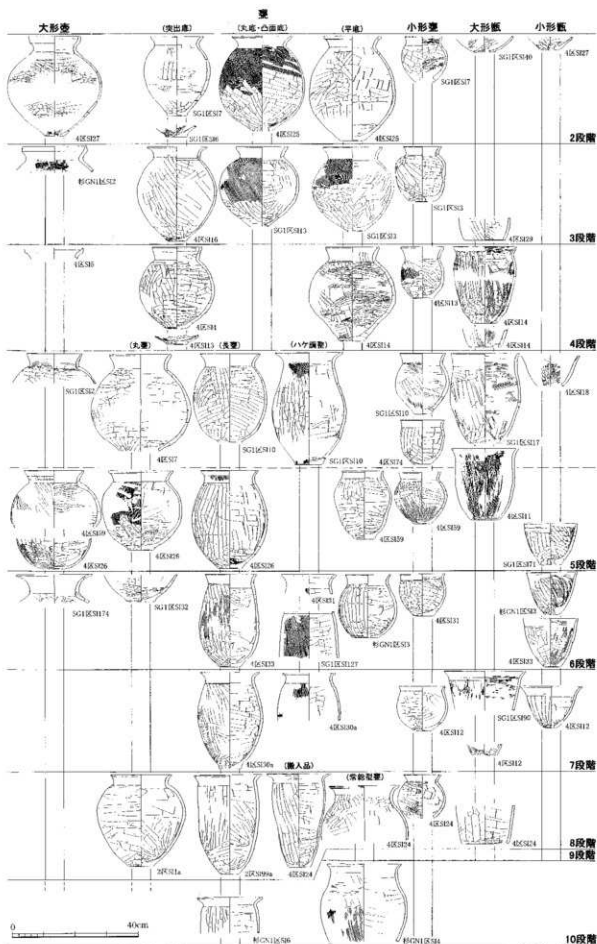
〔4 段階〕 権現山百目鬼 IV 期・杉村 3～4 期・藤田 IV～V 期・磯岡 1 期・TK23～TK47 型式期 (古墳中期末、5 世紀後葉～6 世紀初頭)



第290図 権現山遺跡北部・杉村遺跡 GN1 区出土土器の変遷 (1) 土師器杯・高杯



第291図 権現山遺跡北部・杉村遺跡GN1区出土土器の変遷(2) 土師器鉢・小形壺と須恵器



第 292 図 権現山遺跡北部・杉村遺跡 GN1 区出土土器の変遷 (3) 土師器大形壺・壺・瓶

…権現山SG1区SI-8a〔4段階古相〕、権現山4区SI-14〔4段階新相〕

〔5段階〕権現山百目鬼V期・杉村4期以降120住・MT15～TK10型式期（古墳後期前～中葉、6世紀前～中葉）

…権現山4区SI-2、権現山4区SI-74、権現山SG1区SI-10、権現山SG1区SI-17〔5段階古相〕

杉村GN1区SI-5、権現山4区SI-26、権現山4区SI-59、権現山SG1区SI-71〔5段階新相〕

〔6段階〕権現山百目鬼VI期・杉村4期以降133住・磯岡2期・TK43型式期（古墳後期後葉、6世紀後葉）

…杉村GN1区SI-3、権現山4区SI-31、権現山4区SI-33、権現山SG1区SI-174

〔7段階〕権現山百目鬼VII期・杉村4期以降112住・磯岡3期・TK209型式期（古墳後期末、6世紀末～7世紀初頭）

…権現山4区SI-12、権現山4区SI-30a

〔8段階〕権現山百目鬼VIII期・磯岡4期・飛鳥I新相～II期（古墳終末期前半、7世紀前～中葉）

…権現山2区SI-1a・98・99a、権現山4区SI-24

〔9段階〕杉村4期以降13,104住・磯岡5期・飛鳥III～IV期（古墳終末期後半、7世紀後葉）

…今回報告地区では該当資料なし。

〔10段階〕杉村4期以降106,138住・益子窯跡群原東4号窯段階・新治窯跡群一丁田窯段階・飛鳥V・平城I期（古墳終末期末～奈良時代初頭、7世紀末～8世紀前葉）

…杉村GN1区SI-6

遺構を各段階に位置付ける操作を行った時の注意点を、以下に記しておく。権現山遺跡の4区SD-143とSG1区SD-95は、遺物の時期幅から「2～3段階継続」の遺構として扱う。3段階（TK208型式並行期）のSG1区SI-12・13は、同一段階の中で竪穴建物跡が重複している。SG1区SI-13が3段階新相で、中島笹塚12号墳周溝内埋葬に伴う土器（4段階古相）がこれに後続する。

今回は4段階と5段階は資料数が多いので、前段階や次段階に近い型式の増減を手がかりに、各段階を新古に細別できる場合がある。4段階では深身模倣杯や短脚中実高杯の極小化、5段階では口縁外反杯の減少と杯身模倣杯・長脚中空高杯の増加が、それぞれ新段階の指標となる。しかし、遺物数が少ない場合や、新古の両相が共存する一括遺物では細別の判断が難しい。

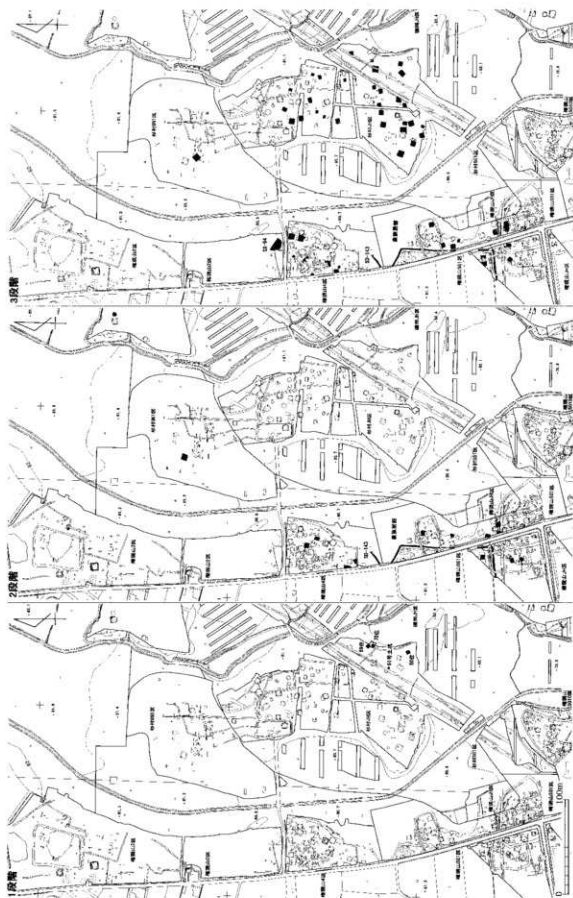
12.2.2. 古墳時代の集落変遷（第293～295図）

集落成立期 1段階古相は、古墳時代前期末または中期初めに該当する。この段階には、杉村遺跡の北関東自動車道路調査区（JH区）で、竪穴建物が3棟営まれた。北方600mにある立野遺跡5区では、SI-14だけがこの段階に相当する。

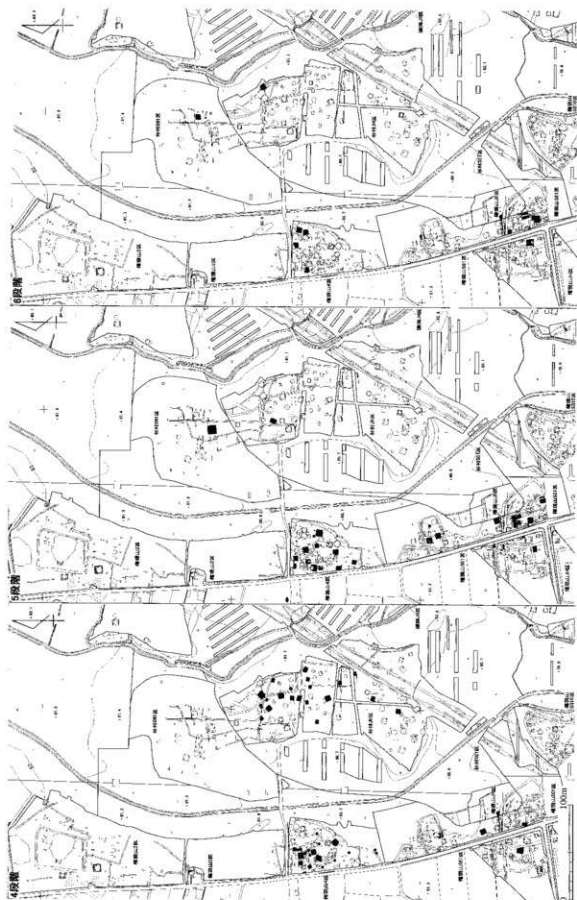
この後、2段階に権現山遺跡・立野遺跡の集落が大規模化するまでの中間期を「1段階新相」と呼んでおく。杉村遺跡北関東自動車道路調査区70号住居跡がこの段階に相当する可能性も残るが、現状の資料では短い空白期があると思われる。土器器編年では藤田I期・梁木II期に該当する（藤田1999・梁木1998）。

居館の存続時期 権現山遺跡の4区SD-143とSG1区SD-95は、2～3段階に継続する遺構と判断した。4区SD-143は、SG1区豪族居館の北側10～25m付近に所在する溝である。SD-95はSG1区豪族居館の外郭溝で、北関東自動車道路調査区（JH区）の調査成果では3段階と考えられる（谷中・大島編2001.III-p.300）。しかし、居館の成立期は2段階新相＝TK216型式期頃になる（第194図1・2・9）。居館から流入したとみられる筒形土台（第194図10～12）の破片を出土したSG1区SI-69や、居館外郭溝SD-95の東に接するSG1区SI-5が3段階なので、居館の廃絶期は3段階の中にあると推定される。

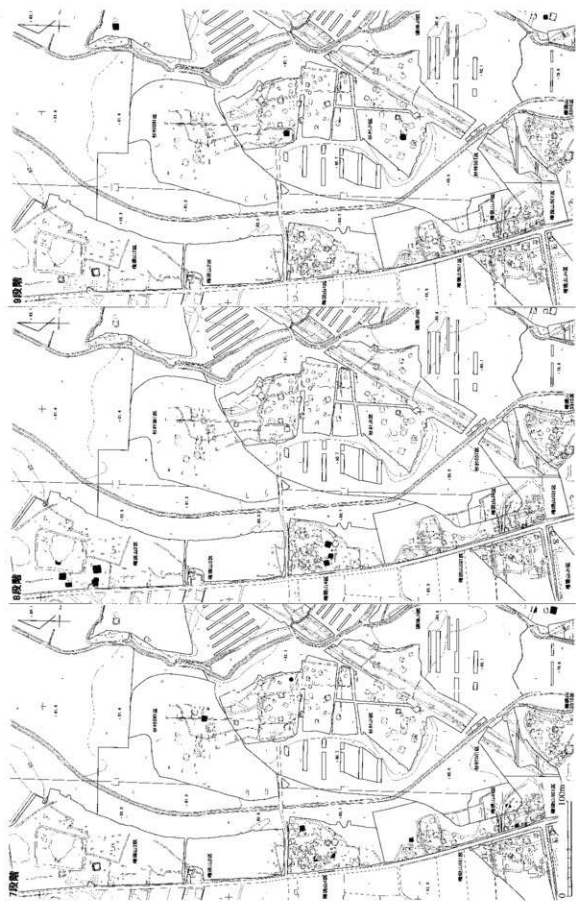
居館周辺の手工業生産 SG1区居館の東側には、竪穴鍛冶遺構であるSG1区SI-33が存在する（第286図）。これは2段階の遺構であるが、2段階古相か新相かは判別できない。2段階古相であれば居館出現直前期の



第293図 樟現山道跡北部・杉村道跡の変遷(1) 古墳中期



第294図 権理山遺跡北部・杉村遺跡の変遷(2) 古墳中期末～後期後葉



第295図 埴原山遺跡北部・杉村遺跡の変遷(3) 古墳後期末～終末期

遺構で、居館造営に伴って退去したことになる。2段階新相であれば居館継続期の前半に並行し、首長層に附属する鍛冶工人の作業場と考えることもできる。SI-33の遺構型式は、集落内の鍛冶遺構に多くみられる森戸類型、つまり住居兼作業場である(内山1998,p.524)。

居館継続期の後半である3段階には、開析谷の東対岸にある杉村遺跡南半部の集落が大規模化する(33軒)。3段階の杉村遺跡南半部は、SG1区の居館と盛期が重なり、首長層との関わりを持った集落と考えられる。また、専用品が高い手工業作業場としての竪穴建物を含む。杉村遺跡南半部では長方形竪穴建物の比率が高く、長方形鍛冶遺構(北関東自動車道路調査区113号)や、未焼成土師器を出土した長方形建物(北関東自動車道路調査区92号)も認められる。113号鍛冶遺構(第286図)は専用品が高い中田類型の竪穴遺構で、首長層との関わりを持つ場合がしばしば認められる(内山1998,p.526)。

居館衰退後の状況 居館の次段階である4段階になると杉村遺跡の集落も縮小をはじめ(19軒)、後期には同時期に1～2棟の竪穴しか見られなくなる。これと入れ替わるように、長方形建物を多く含む磯岡遺跡1期の集落が、杉村遺跡の東対岸に現れる(塚原1999,p.436;津野2005,p.246)。大きな傾向としては杉村遺跡から東側の磯岡遺跡への移動が推定される。

権現山遺跡では、居館の次段階である4～5段階になると、もと居館周辺であった4区とSG1区に竪穴建物が増える。居館の移転後、一般成員の居住区に利用したのであるうか。6段階から建物が減り、8段階で集落が終わる。古墳中・後期に地域最大の集落だった権現山遺跡から、東側台地上の磯岡・西荆部西原・西赤堀遺跡へ、古墳後期後半～終末期には地域の中心が移動する。耳環を出土した権現山SG1区SK-128は墓域の可能性があるので、古墳終末期に小規模な墓域として用いたことを示すのかもしれない。

12.2.3 古墳時代集落・居館の各遺構

竪穴建物の炉 火処に炉を使う段階の竪穴建物跡は、大半が1箇所だけの炉を持つ。権現山4区SI-20・25と権現山SG1区SI-1・69は2～3箇所の炉を持つ。権現山SG1区SI-33は住居兼作業場の鍛冶遺構で、ここにある炉2基は中央の1基が鍛冶炉、東の1基が日常生活(調理・暖房・照明)用の炉と考えられる。炉の位置は、竪穴床面の中央よりも東側と北側に寄るものが多い。それ以外の位置に炉がある建物は、中央3例(権現山4区SI-10・20とSG1区SI-66)・西2例(権現山4区SI-25・29)・南1例(権現山4区SI-25)がある。権現山4区SI-10は東壁にカマド、中央に炉がある。4区SI-20は北・東・中央に計3基の炉を持つ。4区SI-25は長方形で炉を2基持つ。権現山4区SI-29は東に入口を持つ異例の建物で、通常の位置関係(南入口・北炉)から90度回転した配置(東入口・西炉)になっている。権現山SG1区SI-66は炉を片側に寄せられない小形建物である。

カマドの採用 権現山遺跡におけるカマドの出現時期は3段階で、土器編年および重複関係からみて3段階新相と考えた権現山SG1区SI-13の1例である。これ以外は、3段階以前の火処は炉である。3段階のSG1区SI-8bは炉、4段階の権現山SG1区SI-8aはカマドを東壁に持ち、SI-8bからSI-8aに建物を拡張する際にカマドを採用したことがわかる。4段階以後は大半の建物がカマドを採用し、一部の建物に炉が残存する。4段階新相の権現山SG1区SI-84が炉を持ち、また、4段階古相の4区SI-10が炉とカマドを両方持つ。

杉村遺跡GN1区でも2段階の杉村GN1区SI-1が炉で、3段階の杉村GN1区SI-2も火処不明だが炉の可能性を持つ。これより新しい杉村GN1区SI-5(5段階)・SI-3(6段階)・SI-4(7段階)は北壁にカマドを持つ。杉村遺跡GN1区の南側に続く北関東自動車道路調査区でみると、今回編年の3段階に対応する杉村2期にはカマドがみられず(32棟)、4段階古相(杉村3期)にカマドを採用する竪穴建物が少数現れて(19棟中の2棟)、4段階新相(杉村4期)の建物は2棟ともカマドを持つ(藤田・安藤編2000,p.411)。

カマドの位置 竪穴建物にカマドを設置する方位には、東側と北側の2種がある。炉を持つ権現山4区SI-29を除くと入口が判明する建物はすべて南側に入口を持つので、東側カマドの建物は、建物内に入って

第168表 権現山遺跡北部と杉村遺跡GN1区におけるカマドの位置

時期	3段階	4段階	5段階	6段階	7段階	8段階
東側 (4区) (SG1区)	1例 (SI13)	6例 (SI4,10,28) (SI3,8a,70)	2例 (SI2) (SI179)	0例	1例 (SI12)	0例
北側	0例	3例	17例	9例	4例	9例

(カッコ内は建物番号)

右手にカマドを設置した構造である。東側カマドは少数派で、3～5段階に多い傾向がある(第168表)。5段階以後は北側にカマドを作ることが主流になる。

円筒形土坑と集落 古墳時代集落の中で、円筒形土坑が集中する場所が認められる。今回報告した地区では、権現山遺跡4区全域に31基、同遺跡SG1区に18基(南部10基・北部8基)、合計49基の円筒形土坑が認められた。周辺の遺跡・調査区も含めて円筒形土坑の分布を第296図に示す。権現山遺跡4区全域、同遺跡SG1区南部・北部、同遺跡SG10区北部、杉村遺跡北関東自動車道路調査区(図中表記はJH区)中部・南部に円筒形土坑がそれぞれ群在している。また、権現山遺跡のSG1区から西に隣接する北関東自動車道路調査A区(谷中・大島2001)でも、SK-070,071,102,106,109,220,501の計7基が円筒形土坑である(第296図では左下にJH区と表記し、図幅内で記入できたのは居館跡の南側にある1基のみ)。第296図の図幅外でも、磯岡遺跡(1区SK-94と5区)、立野遺跡(5区・宇都宮市調査A区)、砂田遺跡(10・12・13区)などの各集落に円筒形土坑群を確認できる。この集計は、直径1m以上で壁が垂直に近く底面が平坦な古墳時代の円筒形土坑を選び出したものである。

遺物や火山灰から時期を推定できる円筒形土坑の数を権現山遺跡2区・4区・SG1区で集計し、各段階の竪穴建物数と比較した(第169表上段)。各調査区の竪穴建物が最も多い3～5段階に、円筒形土坑も多く作られている。細別時期のわからない古墳時代の円筒形土坑が多数(33基)あることを考えると、3～5段階には竪穴の数(3～5段階合計41棟)と近い数の円筒形土坑が作られたことを推定できる。

杉村遺跡では、竪穴建物の数に対して円筒形土坑の数がやや少ない。今回報告した杉村GN1区の南に隣接する北関東自動車道路調査区に15基の円筒形土坑群がある(藤田・安藤2000, pp.265-276; 4.6, 7.14, 1.6, 17.26, 34.61, 81.82, 83.87, 90, 119号土坑)。遺物やテフラ粒から時期を推定すると3～4段階が中心と見られる(第169表中段)。これに対して、古墳時代の竪穴建物はGN1区を含めて計72棟あり、そのうち3～4段階の竪穴建物は55棟である。

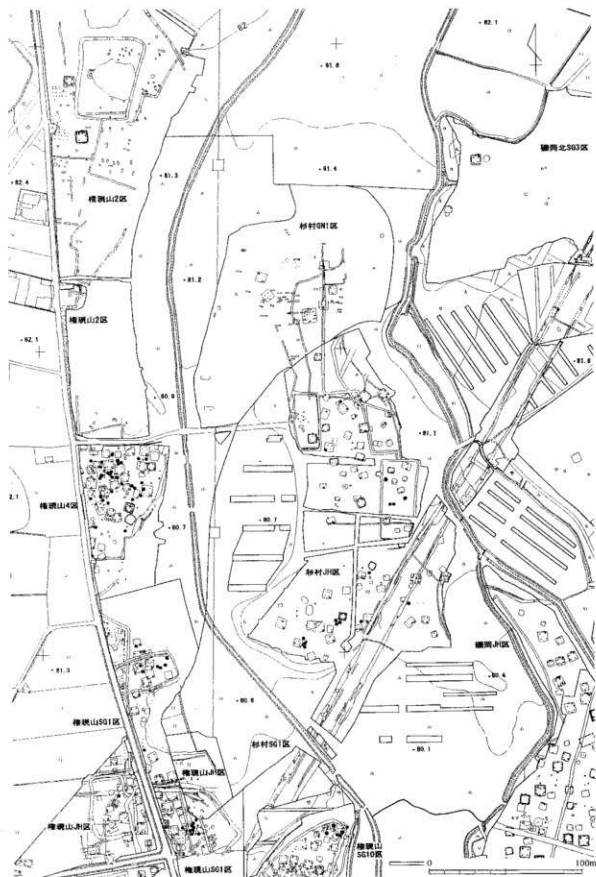
北側に所在する立野遺跡5区では、竪穴建物の数に対して円筒形土坑の数が多い(第169表下段)。古墳時代の竪穴建物跡72棟に対して円筒形土坑が97基認められた。4段階では竪穴建物1棟に対して2～3基、5段階には竪穴建物1棟に対して4基程度の円筒形土坑が作られていたと推定されている(内山2005, p.748)。

円筒形土坑の性格と居館 円筒形土坑は、古墳時代中～後期の屋外貯蔵施設と考えられている(竹澤他1977, p.81; 日高他1980, p.294; 白石2004, p.371; 内山2005, p.745)。居館の周辺において、同時期の各集落が貯蔵施設群を持つ事実が重要である。権現山遺跡SG1区で確認された古墳中期(2～3段階)の居館内における貯蔵施設(クラ)の規模や有無は今のところ不明であるが、地域最高首長の居館内で管理してい

第169表 各調査区の古墳時代集落における竪穴建物と円筒形土坑

段階区分	1段階	2段階	3段階	4段階	5段階	6段階	7段階	8段階	9段階	時期不明
権現山遺跡2区・4区・SG1区 合計竪穴84棟・円筒形土坑49基										
2,4,SG1区竪穴数	0	9	12	11	18+1?	9+1?	5	10+1?	0	7
円筒形土坑数	0	0	4+1?	7	2+1?	0	1?	0	0	33
杉村遺跡GN1区および北関東自動車道路調査区合計 合計竪穴72棟・円筒形土坑15基										
杉村遺跡竪穴数	3	1	34	21	2	2	2	0	2	5
円筒形土坑数	1	0	4	4	2	0	0	0	0	9
立野遺跡5区 合計竪穴72棟・円筒形土坑97基										
5区竪穴数	1	13	7+1?	10	12	12+2?	11	2	0	1
円筒形土坑数	0	2?	1?	6+2?	16+1?	2+1?	0	0	0	66

※「?」を付けたものは所属時期が確定ではない遺構の数。各段階の建物および土坑番号は第167表に示した。



第 296 図 権現山遺跡北部・杉村遺跡の円筒形土坑

た以外に、各集落が動産を穴蔵で管理していたと見てよい。東対岸に群集墳を形成した中間層が立野遺跡5区・2000年度確認調査区・宇都宮市調査A区（第7図）の大形竪穴に居住したことが、円筒形土坑の密度が立野遺跡5区で特に高いことと関連する可能性が高い。

SG1区居館の時期・性格 中間層（都出1993a,p.324）や在地小権力層（坂1998→再録2008,p.85）の屋敷地ではなく、いわゆる「豪族居館」に相当する大規模な居館である。溝内辺長95m・大形建物SB-106が10.6×8.7mで、三ツ寺I遺跡（内辺長86m・大形建物11.6×13.4m、下城他1988）や原之城遺跡（内辺105×165m・大形建物10.7×9.0m、中澤1988）に近い。これらの大形建物について祭殿・神殿説の可否が議論されている（丸山他2000,pp.208-209,216-218）。

北関東自動車道路調査A区（第193図左下）で居館の区画内南東部に入る掘立柱建物SB-228・230が2段階の竪穴建物跡SI-229を切るので、SG1区の居館は3段階（TK-208型式並行期）頃に機能していたと考えられている（橋本・谷中2001,p.300）。今回報告の遺物からみると、外郭溝SD-95は2段階から3段階までの幅があるので、居館の成立期は2段階に遡るであろう。出土須恵器からみて、TK-216～TK-208型式期に存続した居館と考えられる。北関東自動車道路調査区の遺構は、竪穴建物SI-229が居館継続期の前半、掘立柱建物SB-228・230が後半期に関わる可能性を持つ。

周辺首長墳との対応関係を見ると（第7図）、中期初めの可能性もある東谷双子塚古墳（墳長73m）や、TK-73型式期（秋元・今平1998,pp.51,63）とされる墳長100mの笹塚古墳よりは新しい時期になる。笹塚古墳の次世代首長墳である鶴舞塚古墳（円墳・径53m）か、松の塚古墳（円墳・径48m）の被葬者に対応する居館と考えられている（橋本・谷中2001,p.301）。

SG1区居館の継続期の前半が、笹塚古墳の埋葬時期と重なる可能性もある。TK-216型式期の宇都宮市塚山古墳（宇都宮大学1995）と同種の埴輪が、笹塚古墳の墳丘調査で出土して（宇都宮市教委2007）、笹塚古墳がTK-216型式期に下がる可能性が浮上してきたからである。また、笹塚古墳では本遺跡3段階に相当する土師器も採集されているので（秋元・今平1998）、複数回の祭祀や埋葬が考えられる。笹塚古墳の調査成果が整理・公表されれば解決に向かう問題であろう。

12.2.4. 古墳時代の出土遺物

注意をひく出土遺物のうちいくつかについて触れておく。

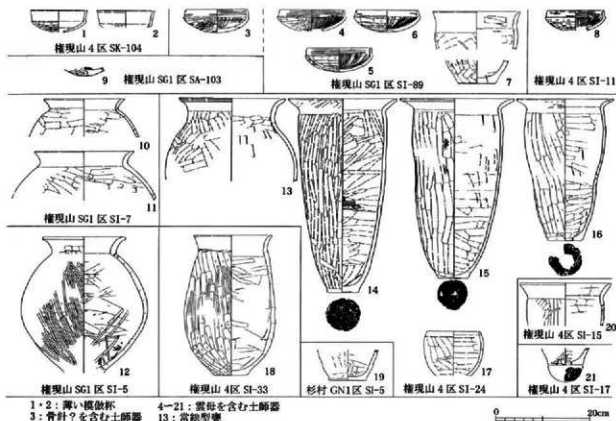
〔土師器〕

他地域産の土師器 4区SK-98・104では群馬・埼玉県域に見られる薄い模倣杯を含む（第297図1・2）。骨針（白色針状物質）を含む可能性のある土師器は、確実ではないがSG1区SI-89の杯に1点ある（3）。土器胎土中の骨針は、栃木・茨城県の八溝山地、埼玉県比企丘陵、群馬県藤岡周辺などで認められる。権現山2区では金色に発色した黒雲母を含む土師器がSI-99b以外の竪穴5棟にある（SI-1a-14・15/SI-1b-1/SI-1c-2/SI-98-6/SI-99a-13・14・16）。2区以外でも黒・金色雲母を含む土師器がある（第297図4～21）。ただし4・5・6・8は黒雲母と白雲母の両方を含み、9・13・15は白雲母だけを含む。白雲母混入土器が茨城県西部、黒・金色雲母混入土器は茨城県域（北部?）の製品と考えられる。

〔須恵器〕

須恵器筒形器台 居館の外郭溝である権現山SG1区SD-95およびその周辺（SG1区SI-69・居館区画内・居館周辺撹乱溝）で出土した筒形器台は、居館で使用した同一個体の破片と推定される（第194図・第298図13）。筒部透窓は段ごとに交互配置（千鳥に配置）し、一般的な直列配置（第298図2・4・6・9）とは異なる。

筒部の長方形透窓を交互配置する筒形器台は12～16などにみられる。また、脚部の三角形透窓の交互配置は香川県川上古墳（4）、脚下部が三角透で脚上部が長方形透になる組み合わせは福岡県羽根古墳（2）・



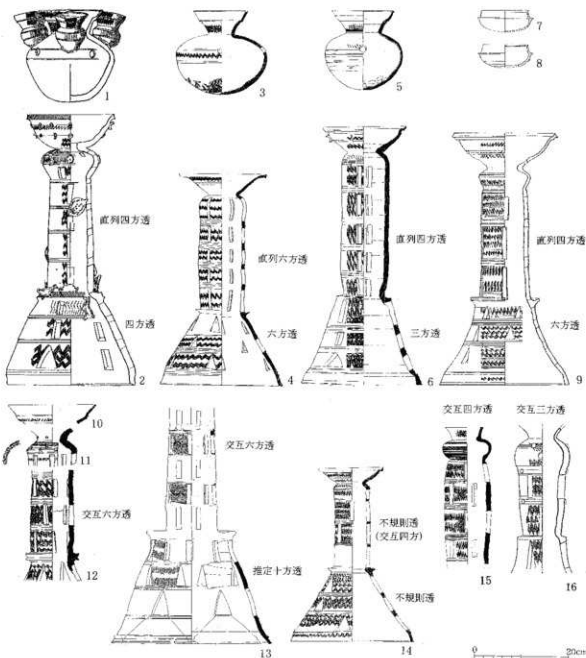
第297図 権現山遺跡北部・杉村遺跡の他地域産土師器（権現山2区を除く）

島根県金崎1号墳（6）などにある。

鈎線形に彎曲する脚台部（2・4）が古く、直線的に開く脚台部（6・9）へ変遷する（高橋・小林 1990, p.38）。古い段階の筒部交互配置透窓は窓数が多いので筒部が弱くなるが、直列配置を避けることで強度を維持している（12・13）。東上野芝（12）と権現山SG1区（13）が六方透、玉里権現山（14）が四方向前後の不規則配置、TK43-1号窯（15）が四方透、岩戸山古墳（16 および樋口 1958）が三方透である。一方、筒部直列配置透窓は四方向が多い（2・6・9）。器台上端は壺状の形が退化する傾向を持つが、新しい段階でも壺形に作ることもある（9・15）。文様帯の区画は、二条一組の凸線が退化して凹線化する（高橋 1991, pp.111-112）。筒部直列透窓の器台は6で区画が凹線化する。筒部交互透窓の器台は直線状脚の段階でも凸線で各段を区画する傾向があり（13・14）、後期に凹線化する（15・16）。筒部交互透と筒部直列透が製作集団（窯跡群・地区・支群）の系譜差に関連する可能性を示している。

脚台部と受部上端の形を重視して機械的に配列すると、2 羽根戸→4 川上→13 権現山SG1区→6 金崎→14 玉里権現山→9 長原2号墳となる。筒部交互透の器台は東上野芝（筒部六方透）・権現山SG1区（筒部六方透・脚台部内彎微弱）→玉里権現山（筒部不規則四方透・脚台部直線的）の順序が考えられる。また、筒部直列透の器台は羽根戸（四方透・脚台部内彎）・川上（六方透・脚台部内彎弱）→金崎1号墳（筒部四方透・脚台部直線的）→長原2号墳（筒部四方透・脚台部外反）の順序になる。羽根戸・川上はTK-208 型式古相、東上野芝・権現山SG1区・金崎1号墳がTK-208 型式、玉里権現山・長原2号墳がTK-23 型式におおよそ相当する。

北関東産須恵器 権現山4区SI-11の甕は頸部外面に雑な波状文を施すMT-15 型式並行期の製品で、関東産と見られる（第291図5段階）。藤野一氏の御教示によると群馬県伊勢崎市恵下古墳の3点の甕のうち1点が類似（東京国立博物館編 1997, PL.26-7）、群馬県藤岡窯産の可能性があるという。これと同様に雑な波状文は東方にある磯岡遺跡1区SI-161でも認められる（塚原 1999, p.349）。



1・2 福岡県福岡市羽根戸古墳 (小田 1964)
 3・4 香川県さぬき市川上古墳 (高橋 1991)
 5・6 島根県松江市金崎 1 号墳 (高橋 1991)
 7-9 大阪府大阪市長原 2 号墳 (藤沢 1978)

10-12 大阪府堺市東上野芝遺跡 SK-005 (随 11 1982)
 13 栃木県宇都宮市権現山遺跡 SG1 区 SD-96 および周辺出土
 14 茨城県小笠玉市玉里権現山古墳 (柳下 2000)
 15 大阪府堺市陶器窯跡群 TK43-1 号窯 (野上編 1980)
 16 福岡県八女市岩戸山古墳 (小田・真野 1970)

第 298 図 権現山遺跡 SG1 区居館の筒形器台と類例

権現山 4 区 SI-21 では底面にカキメを施す無蓋高杯破片があり (第 291 図 5 段階)、群馬県太田金山遺産とみられる (藤野一之氏御教示)。中期末の 4 区 SI-28 に混入した後期～終末期の壺瓶類破片も、口縁端に波状文を描くもので群馬県域産の可能性があり (第 145 図 12)、口縁部が同形の瓶類は太田市入宿 III 遺跡 (酒井編 2007,p.92)、口縁端部波状文の壺は高崎市綿貫観音山古墳 (徳江編 1999) にある。

権現山 4 区遺構外出土の脚端が長い須恵器高杯 (第 181 図 2) は、群馬県荒砥北三木堂 II 遺跡 2 区 30・41 号住居跡 (小島 2008,pp.223,265) や埼玉県後張遺跡 32 号住居跡 (横川・小川編 1983,p.79) に例がある。群馬県域で創出された形態と考えられている (酒井・藤野他 2009, pp.265-266)。



第299図 補修痕・亀裂のある土師器

[手工業生産関連遺物]

鍛冶関連遺物については前章で触れたので、それ以外のものについて触れる。

補修痕土師器と不良品土師器 焼成前に生じた亀裂を補修した痕跡のある土師器や、焼成時に亀裂が生じた土師器などを第299図に示した。権現山4区 SI-10・12・15・16とSD-143、権現山SG1区 SI-17・84、杉村GN1区 SI-4にある。権現山SG1区 SI-1の杯(2)も、その可能性がある。

焼成前の補修とは異なるが、権現山4区 SI-15の杯(2)は、炭素吸着処理した杯の口縁部が磨耗した後に漆仕上げで補修したものかもしれない。

権現山4区 SI-12の杯(6)や権現山4区 SI-16の甕(53)もヘラミガキ補修痕がある。権現山SG1区 SI-17の杯(4)は杯内面底部中央に粘土を貼ってからヘラミガキし、権現山SG1区 SI-84の杯(3)は、体部外面に焼成前に粘土を貼る。杉村GN1区 SI-4の杯(8)は杯内面体部を粗いナデで補修している。

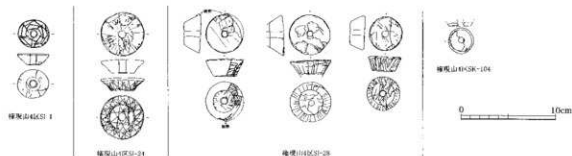
複数出土した遺構は権現山4区 SI-10で、脚外面に粘土を貼った高杯(35)と内面をミガキ補修した甕(41)があり、杯(13)も底面中央の密な1方向ヘラミガキで焼成前に生じた亀裂を補修した可能性がある。権現山4区 SI-10には焼成粘土塊も多いので、土師器製作に関わる建物であろうか。

権現山4区 SD-143では、甕(5)の肩部内面にある粘土貼付が補修痕かもしれない。同じくSD-143の高杯(4)に補修痕はないが、図示した口縁部の亀裂が焼成時(?)に生じている。

焼粘土塊 焼成された粘土塊を出土した竅穴建物は多いが、1点や2点だけ出土する場合が多い。まとまった数を出土しているのは権現山4区ではSI-10(17点)とSI-11(10点)、権現山SG1区ではSI-3(10点)、SI-7(5点)、SI-8(26点)、SI-13(7点)がある。権現山4区 SI-10には補修した痕跡のある土師器も多いので、土師器製作に関わる建物であろうか。

稲粃痕 権現山4区 SI-4の3の胎土中や8の外面に見られるような稲粃痕は、4区ではSI-12の鉢、SI-14の杯・壺・甕、SI-16・27の高杯、SI-59の粗製鉢にも見られ、SG1区 SI-5・69・84などにもある。表面だけでなく断面や内面にも見られるので、土器成形後に付いた圧痕というよりも、胎土中に混和されていた粃の痕跡と考えられる。

紡錘車 権現山遺跡では4区に石製紡錘車が目立つ。4区 SI-1・24・28とSK-104で計6点出土した(第300図)。4区 SI-28は火災にあった建物で、被熱した紡錘車が床面で3点出土し、うち1点が有文紡錘車



第300図 権現山遺跡4区出土の紡錘車

である。2区やSG1区では紡錘車が出土していない。

刻線で文様を描く紡錘車は、4区SI-1・24・28に1点ずつある。有文の紡錘車は、次回報告予定分の権現山遺跡でSG10区SI-36にもあり、また北関東自動車道路調査区のA区SI-472・493（谷中・大島編2001）と県道宮崎岡線調査2区のSI-08（篠原・亀田2009）にもある。

周辺の遺跡では、宇都宮市砂田遺跡1区SI-3（藤田・田代2002）と、6区SI-1・23区SI-2（津野・篠原・今平2007）、同市立野遺跡5区SI-41（内山2005）、同市中原遺跡1地点（寺内他1939）、上三川町五雲遺跡SI-22（篠原浩2009）・鹿沼市下台原南遺跡5号住居跡（山越・植木1995）に有文の紡錘車がある。また、佐野市ゴロノミヤ遺跡3次SI-8（出居他2007）にもみられる。

〔石製品〕

石製模造品 権現山遺跡4区ではSI-4・16・24・29とSK-98と遺構外（第181図）、権現山遺跡SG1区ではSI-5・7・8・10・32（?）・174と低地（第273図）に石製模造品がある。権現山遺跡2・3区と杉村遺跡GN1区では石製模造品が出土していない。模造品の材質は、滑石と粘板岩がある。

（滑石製品）4区SI-4の有孔円板・剣形品と破損品は、研磨が行き届かない剥離痕を表裏面に多く残し、また側面を横方向に研磨する、新しい段階の遺物である（第107図）。4区SI-16の剣形品2点は側面を斜方向、有孔円板は側面を横方向（両面に直交する方向）に研磨する（第128図）。4区SI-24の第138図81は古墳中期の滑石製模造品（鎌か剣、または刀子）の混入遺物。4区SI-29に剣形品が1点ある（第147図）。4区SK-98は古墳中期末頃の円筒形土坑で、側面を斜方向に研磨する滑石製模造品細片が1点ある（図示なし、p.306参照）。4区遺構外の有孔円板と白玉も滑石製品である（第181図）。

SG1区では、SI-7の有孔円板（第211図）・SI-5の剣形品と有孔円板（第208図）・SG1区SI-8の勾玉（第214図）の順に、仕上げが非常に粗雑化してゆく。SG1区SI-32の滑石破片は、古墳中期の滑石製品素材（?）が被熱して後期前葉の建物に流入したものであろうか（第226図）。SG1区東側低地部の第273図5は両面穿孔の可能性がある破片で、6は剣形品。

（粘板岩製模造品・粘板岩製砥石）権現山SG1区SI-10・174に粘板岩製の石製模造品がある。また、粘板岩質の破片（石製模造品または砥石）が権現山4区SI-9・12・22にあり、粘板岩質の砥石破片（?）が権現山4区SI-14・24にある。

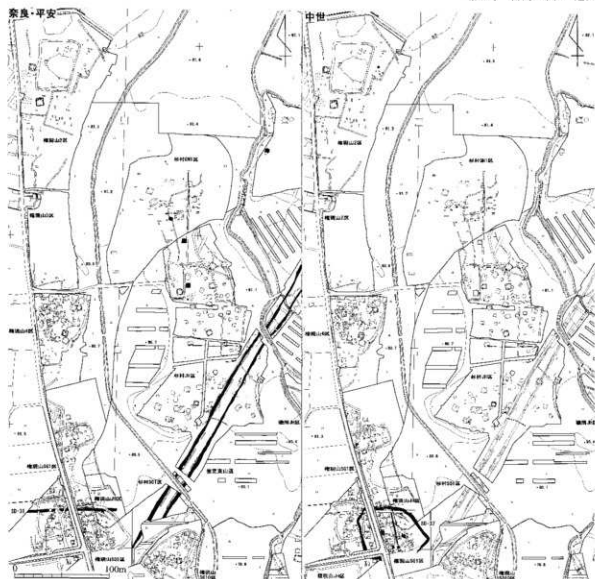
4区SI-9の第114図8は石製模造品の素材かもしれない粘板岩剥片だが、加工の有無は不明。4区SI-12の第121図14は粘板岩製の砥石または石製模造品の破片。4区SI-14の第125図39と4区SI-24の第138図80は粘板岩の砥石破片（?）。4区SI-22では図示できなかった粘板岩の小破片（長18mm・厚さ1mm・重さ0.5g）が1点あり、砥石破片かもしれない。石製模造品が退化した有孔剥片がSG1区SI-10とSI-174にある（第216・245図）。

白玉・管玉 権現山遺跡4区SI-7の滑石製管玉は丁寧に研磨した両面穿孔品で、滑石製白玉15点は表裏面を研磨せず側面研磨痕をよく残す片面穿孔品（第112図）。権現山4区遺構外に滑石製白玉があり（第181図）、4区SI-19にも白玉があったが紛失した。滑石製から粘板岩製に変化した白玉は、権現山遺跡4区SI-59とSG1区SI-34および杉村遺跡GN1区SI-5にある。

第3節 古代・中世・近世

古代の集落・溝・道路遺構（第301図左） 奈良時代初め（前節の土器変遷における10段階）には、杉村遺跡のGN1区SI-6から北関東自動車道路調査区（JH区）にかけて3棟の竪穴建物がある。

奈良時代以降の少数または単独建物は、周辺遺跡でも見られる。次回報告する権現山遺跡南半部のSG10区（旧称は杉村X区：とちぎ理文2000, p.32）で9世紀代の1棟がある。北側にある立野遺跡5区でも奈

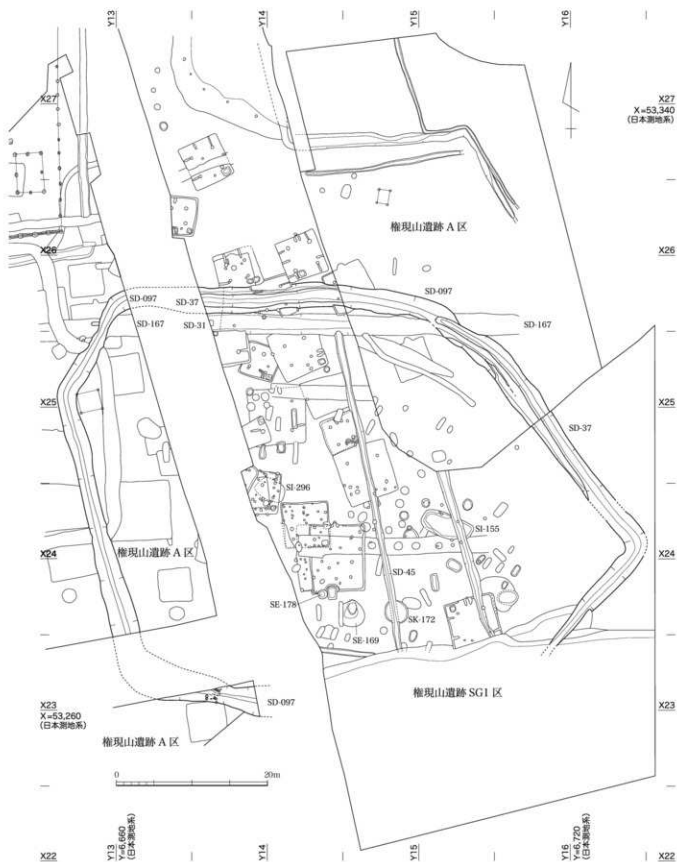


第301図 権現山道跡北部・杉村道跡の変遷(4) 奈良・平安時代と中世

良時代末頃の単独建物があって、「炭」の墨書土器を出土しているので炭焼き小屋?の可能性もある(内山2005)。北東にある磯岡北道跡SG3区とSG4区にも、8世紀および9世紀代(?)の単独の竪穴建物がある(藤田2003)。東側の磯岡道跡1区と5区でも9世紀代の竪穴・掘立柱建物が少数あり、特殊遺物として漆紙文書の具注暦(塚原編1999, pp.442-445)と円面硯・獣脚・鉄鉢形土器(津野2005, p.103, 112, 117, 294)が見られる。

権現山道跡では、SG1区から北関東自動車道路調査区(JH区)にかけて溝SD-31が東西に延びる(第301図左図の左下部および第253図、幅2~2.8m、深さ50~60cm、北関東自動車道路調査区での名称はA区SD-167)。時期を決められる遺物がないが、1108年に降下したAs-Bテフラの濃集が埋土最上層付近に見られるので(p.474)、12世紀以前に遡る古代の溝と考えられる。周囲に竪穴建物など古代の遺構がないので、性格は明らかでない。北側にある立野道跡でも、周囲に建物などが見られない古代の大溝(4・7・8区)と、その溝に降りる通路遺構(2区)がある(内山2005, pp.748-749)。中島寺塚道跡8区では奈良時代の溝を通過する道路状遺構がある(内山2008, pp.394-402)。また、権現山道跡・杉村道跡で今回報告した部分の南東側を、南西から北東へ延びる古代道路遺構があり、東山道と推定されている(藤田2003)。

中世の溝・井戸・竪穴遺構 権現山道跡SG1区の中世遺構群は、SG1区SD-37の白磁口禿皿や有台こね



第 302 図 権現山遺跡 SG1 区 SD-37 と北関東自動車道路調査 A 区 (1/500)

鉢 (第254・259図)とSK-137・SE-169のこね鉢から、13世紀後半～14世紀前半頃と考えられる。区画溝であるSG1区SD-37で不整五角形に囲んだ中に、竪穴遺構2基 (SI-155・296)、井戸1本 (SE-169)、土坑1基 (SK-172)が所在する (第301図右図の左下と第302図)。また、SD-37の区画内を分割する溝SD-45が南北にのびる。SD-45がSK-172を切るの、SD-37の区画内にある遺構群にも時期差があることがわかる。この区画内にある井戸SE-169から「急急如律令」の呪符木簡が出土した (第257図)。これらの他に、時期不明の井戸2本 (SD-37区画内のSE-178と、北方のSE-113: 第262図)や区画内の柱穴状土坑群 (第269～272図)も中世遺構を含む疑いがある。区画溝の内部を溝で分割する13～14世紀頃の屋敷地は下野市三ノ谷東遺跡 (山口・小森 1990)に例があり、畑地および屋敷地を区画する溝と解釈されている (斎藤 2000,p.198; 斎藤 2001,p.65)。

北へ400m以上離れた、権現山遺跡2区にも中世の井戸が1本だけ認められた (第77図)。有台の東海産こね鉢を伴い、13世紀前半頃と思われる。ただし、周辺の中世遺構が明らかでない。

【参考文献】

第2章 (遺跡の環境)と自然科学分析結果 (7章,9章,14図,10章,6・12・21図,11章)の文献は各章節の文末に示した。それ以外の参考文献を以下に示す。

- 秋元陽光・今平利幸 1998 「宇都宮市東谷塚遺跡出土の遺物」『鎌考古』第13号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮 pp.41-64。
浅野成樹 2005 「関東」『全国シンポジウム 中世遺跡の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』同シンポジウム実行委員会 八王子, pp.259-282。
阿部万寿 2001 「遠部第3類土器の系譜と変遷」『縄文時代』12 縄文時代文化研究会 所収 pp.89-117。
阿部万寿 2009 「出土形式土器の研究」『野州考古学論叢』中世紀男学生遺跡論叢」中世紀男学生遺跡論叢刊行会 宇都宮 pp.17-40。
荒川正夫 1998 「中世前期の出土遺物」『大久保山』VI 早稲田大学本庄校地文化財調査室 本庄 pp.257-269。
安藤泰弘編 1996 「西条遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告書第178集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
安藤泰弘編 2001 「宇都宮の須恵器製造の地」『研究紀要』9 (財)とちぎ生業学文化財調査会・栃木県埋蔵文化財調査報告書第215集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
石井克己・梅沢重昭 1994 「星井森遺跡」日本の古代遺跡を巡る4 出社新聞社 東京
出社 博・藤田清信・有山祥雄 2007 「ゴロノミヤ遺跡Ⅱ」佐野市文化財調査報告書第7集 佐野市教育委員会
伊藤 龍雄 1979 「岡邑」IV 大府市文化財調査報告書第31輯 大府市教育委員会 PL.55.155。
植野浩三 2002 「TK73型式の再評価」『田沼町三先生古墳記念論文集』田沼町三先生古墳記念の会 京都 pp.227-240。
津津知克 2003 「南河内と宇治郡の遺跡」『奈良大学山梨文化財研究所研究報告』第11集 石和 (山梨県立博物館) pp.29-48。
内山敏行 1997 「律制成立期の須恵器の系譜」栃木県・「東国」の須恵器～関東地方における歴史時代須恵器の系譜～」古代生産史研究会 主編 (栃木県下都賀郡) pp.87-101。
内山敏行 1998 「新宮古墳群・新野遺跡・下り遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告書第214集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
内山敏行 2005 「東谷・中島地区遺跡群Ⅴ 立野遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告書第290集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生業学文化財調査会
内山敏行 2006 「東谷・中島地区遺跡群Ⅶ 磯岡北古墳群」栃木県埋蔵文化財調査報告書第299集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生業学文化財調査会
宇都宮市教育委員会 2007 「笹塚古墳」『栃木県埋蔵文化財センターだより やまかい』2007年10月号 栃木県教育委員会, p.6。
宇都宮大学考古学研究会編 1995 「塚山古墳群の発掘調査報告」『鎌考古』第9号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮
宇野隆夫 1992 「食部計量」『日本歴史民俗博物館研究報告』第40集 佐賀 pp.215-232。
大和久重平 1972 「佐 57 号墳発掘調査報告書」小山市教育委員会・(株)小山カントリー倶楽部
岡田 圭 2003 「裾衣型かたな型土器の用途について」『筑波大

- 学史学・考古学研究』第14号 筑波大学歴史・人類学系 つくば, pp.85-100。
小田富士雄 1964 「福岡県羽戸の装飾器台と鑑」『九州考古学』22 九州考古学会 福岡 pp.6-8。
小田富士雄・真野和夫 1970 「八女古墳群発見の須恵器集成」『中尾谷遺跡群』八女古墳群調査報告Ⅱ 八女古墳群調査団 福岡 pp.28-37。
勝見一晶 2005 「磯岡北遺跡」宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第53集 埋蔵文化財発掘調査支援協同組合、宇都宮市教育委員会
亀田幸久 2007 「西条遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告書第304集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生業学文化財調査会
久保智三・大島和子・斎藤 均 1979 「権現山北遺跡」宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第5集 宇都宮市教育委員会
合田恵美子 2007 「峰高前遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告書第308集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生業学文化財調査会
小島敦子編 2008 「荒坂北三本堂Ⅱ遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査報告書第421集 渋川
斎藤 弘 2000 「栃木県下の中世伊集路遺跡と堀立柱建物」『東北方地方における中世伊集路の諸問題』福島県考古学会中世部会平成12年度研究ミニマール いわき, pp.197-232。
斎藤 弘 2001 「栃木県下の中世伊集路遺跡の展開、堀立柱建物の検討から」『佐野考古』20 佐野考古会 佐野, pp.61-68。
酒井清治編 2007 「群馬・金山丘陵遺跡群」I 駒澤大学考古学研究所
酒井清治・藤野一之・三原理編 2009 「群馬・金山丘陵遺跡群」II 駒澤大学考古学研究所
佐野大和 1963 「火打館」日光二荒神社神主編『日光男体山』角川書店, pp.217-224, 図版44。
稲田泰輔 2008 「宇曾免遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第352集 熊谷
篠原浩志・杉浦昭博・篠原祐一・磯貝厚 2000 「成願寺遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告書第239集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
篠原浩志編 2009 「五堂遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告書第322集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生業学文化財調査会
篠原祐一・亀田幸久 2009 「権現山遺跡・東谷北浦遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告書第318集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生業学文化財調査会
下城 正・友屋和雄他 1988 「三ツ寺Ⅰ遺跡」上越市博物館埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 群馬県埋蔵文化財調査事業団 北城
白石真理 2004 「武田西端遺跡 古墳時代」(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告書第29集 ひたちなか市教育委員会
高岡正之・橋本道朗 1988 「木更屋の基礎的研究」『研究紀要』5 栃木県立博物館 宇都宮 pp.27-82。
高橋照彦 1991 「須恵器」小林謙一・花谷浩編 1991 「川上・丸井古墳群発掘調査報告」長尾町教育委員会 (香川県大川郡) pp.40-47, 110-121。
高橋敏・小林昭彦 1990 「九州須恵器研究の課題」『山古墳出土須恵器の再検討』『古代文化』42 (4) 古代学協会 京都

pp.28-43.

竹家謙・山ノ井清人・石川均 1977 『上敷道跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第19集 栃木県教育委員会
田辺昭三 1966 『陶器古墳』 1 平安学考古学クラブ 京都

田辺昭三 1981 『須恵器の分布』 角川書店 東京
原孝一編 1999 『東谷・中島地区道跡群 No.1 磯岡道跡 (1区)』 栃木県埋蔵文化財調査報告第229集 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団

郡山地区 1993a 『古墳時代の須恵器』 岩波講座 日本通史 第2巻 古代 1 岩波書店 東京 pp.311-330.
郡山地区 1993b 『古墳時代首長の政治拠点』 『論衡考古学』 天山舎 東京 (再録 2005 『前方後円墳と社会』 培風館 pp.627-652)
常川秀夫・熊倉直子・大宮宣亮・石川均 1979 『塚山古墳群』 栃木県埋蔵文化財調査報告第32集 栃木県教育委員会

津野 仁 1997 『栃木県の須恵器編年』 『東国の須恵器—関東地方における歴史時代須恵器の系譜—』 古代生産史研究会 壬生 (栃木県下都賀郡) pp.84-86.

津野 仁 2005 『東谷・中島地区道跡群 6 磯岡道跡 (2〜7区)』 栃木県埋蔵文化財調査報告第292集 栃木県教育委員会・(財) とちぎ生涯学習文化財団

津野 仁・藤原浩志・今平昌子 2007 『東谷・中島地区道跡群 8 砂田道跡 (4〜6・18・19・23・24区)』 栃木県埋蔵文化財調査報告第305集 栃木県教育委員会・(財) とちぎ生涯学習文化財団

鶴見良雄 1999 『火打具を考える』 『茨城県考古学協会誌』 第11号 茨城県考古学協会 水戸 pp.47-76.

鶴見良雄 2005 『“土器”の文化・人・社会—小考—』 関東および山梨県出土土器の文化から中世への形質変化— 大宮宣亮・佐藤純文・林行雄・金谷 1999 『古墳時代の考古学』 慶友社 東京 pp.666-679.
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2006b 『砂田道跡群 3区』 『栃木県埋蔵文化財センターだより やまかどう』 No.41 栃木県教育委員会 p.5.

寺内武夫・藤崎寛之助 1939 『下野中世道跡調査概報—第二回—』 『考古学』 10 (11) 東京考古学会 大阪 pp.537-555.
東京国立博物館編 1997 『東京国立博物館所蔵 須恵器集成Ⅱ (東日本編)』 便利堂 京都 pp.39-40.PL.26.

徳川秀夫 1999 『藤原朝山古墳Ⅱ 石室・遺物編』 群馬県埋蔵文化財調査報告第2集 群馬県教育委員会
中澤良治 1988 『原之城道跡群埋蔵文化財調査報告書』 伊勢崎市教育委員会

中野敏久 1994 『赤羽・中野「生産地」における編年について』 『全国シンポジウム「中世前時代をとおして」資料集』 日本福祉大学知多平島総合研究所 美浜 (愛知知多郡) pp.7-181.

中村信博 2002 『天矢峰』 茂木町埋蔵文化財調査報告書第2集 茂木町教育委員会 (栃木県芳賀郡)
中村信博 2009 『仁王地跡群埋蔵文化財調査報告書』 市川町教育委員会 (栃木県芳賀郡)

中村 浩編 1978 『陶器Ⅲ 大坂府文化財調査報告書第30集 大坂府教育委員会』 pp.32-56.

中村 浩 2001 『和泉陶器出土須恵器の型式編年』 芙蓉書房出版 東京
中山 晋・白野向宏・岩崎浩・仲山英樹・鎌木理広 1988 『郭内道跡・松香道跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告書第94集 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団

奈良国立文化財研究所編 1978 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ 藤原宮西方官衙地区の調査』 奈良国立文化財研究所学報第31冊 藤原宮上跡編 1980 『陶器Ⅲ 大坂府文化財調査報告書第33集 大坂府教育委員会』 pp.106-107.270.PL.41.105.

栃木県埋蔵文化財調査報告書 2001 『東谷古墳群』 和見山道跡・百日鬼道跡・権現山道跡・百日鬼道跡 栃木県埋蔵文化財調査報告第257集 栃木県教育委員会・(財) とちぎ生涯学習文化財団 pp.295-301.

上生朗治・越智敏・富川努 2008 『中世塚道跡 (A区)』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第63集 宇都宮市教育委員会

上生朗治・宮田和男・越智敏・大塚雅之 2007a 『西部原原道跡』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第59集 宇都宮市教育委員会

上生朗治・宮田和男・越智敏・大塚雅之 2007b 『砂田姥道跡』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第60集 宇都宮市教育委員会
坂 靖 1998 『古墳時代の階層別に見る土器』 『古代学研究』 141 大阪 pp.22-35 (再録 2008 『古墳時代の道跡学』 雄山閣 東京 pp.78-91.)

藤川隆雄 1958 『須恵器』 『世界陶磁全集』 1 日本古代陶 河出

書房 東京 pp.192-206.

樋口吉文 1982 『上野芝道跡発掘調査報告』 『堺市文化財調査報告』 第10集 堺市教育委員会 pp.1-94.

日高努・山内鈴夫 1979 『佐平林道跡 (VI区)』 『母畑地区道跡発掘調査報告』 III 福島県文化財調査報告書第74集 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター pp.13-52.

深谷賢・梁本誠・田熊清彦 2003 『上神上・茂原宮道跡』 上三川町埋蔵文化財調査報告書第27集・宇都宮市埋蔵文化財調査報告第47集 上三川町教育委員会・宇都宮市教育委員会

深谷賢・高野浩之・戸部孝一・平岡和夫 2004 『磯岡道跡』 上三川町埋蔵文化財調査報告書第29集 宇都宮市教育委員会・上三川町教育委員会・山武考古学研究所

藤沢真依 1978 『古墳』 『長原』 (財) 大阪文化財センター pp.115-139.

藤田直也 2003 『東谷・中島地区道跡群 3 推定東山道開通地区』 栃木県埋蔵文化財調査報告書第274集 栃木県教育委員会・(財) とちぎ生涯学習文化財団

藤田直也・田代隆 2002 『東谷・中島地区道跡群 2 砂田道跡 (1区・2区・3区)』 栃木県埋蔵文化財調査報告書第265集 栃木県教育委員会・(財) とちぎ生涯学習文化財団

藤田典夫 1999 『栃木県における5世紀の土器編年』 『東国土器研究』 第5号 東国土器研究会 藤沢 pp.65-78.

藤田典夫・安藤英次郎 2000 『杉村・磯岡・磯岡北』 栃木県埋蔵文化財調査報告書第241集 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団

堀江門也・中村浩 1978 『鶴上郡新田出土遺物』 『陶器』 III 大坂府文化財調査報告書第30集 大坂府教育委員会 pp.253-258.

丸山 茂・櫻村寛之・藤原浩一他 2000 『付録「神社建築を考える」研究会記録』 『埋蔵文化財発掘技術者特別研習 信仰関連道跡調査課程』 奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター 奈良 pp.172-219.

谷中 隆 1994 『大宮美智子編 2001 『権現山道跡・百日鬼道跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告書第257集 栃木県教育委員会・(財) とちぎ生涯学習文化財団

梁本 誠・近岡明雄・木村光男・手塚英男 1983 『鶴上公園道跡Ⅰ—昭和57年度発掘調査概報—』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告第9集 宇都宮市教育委員会

梁本 誠 1984 『鶴上塚古墳』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告第13集 宇都宮市教育委員会

柳下恵理子 2000 『須恵器』 小林三郎編 『玉里村権現山古墳発掘調査報告書』 玉里村教育委員会 pp.51-52.PL.14.

山口耕一 1994 『北関東地域における茨城産須恵器について (上) —外面同心内凹目目を有する須恵器を中心に—』 『研究紀要』 第2号 (財) 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター pp.109-130.

山口耕一編 1999 『多功原原道跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告書第222集 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化財振興事業団

山口耕一・小倉哲也 1990 『独立柱建物・櫓跡』 『三ノ谷東・谷野北道跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第112集 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団 pp.214-237.287-308.

山越 茂・植木茂雄 1995 『柿の内道跡・下台原原道跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第162集 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団

山本神夫 1995 『中世前期の貿易陶磁器』 『概説 中世の土器・陶磁器』 真岡社 京都 pp.470-484.

横川好富・小川良祐 1983 『後室』 図版編Ⅱ 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第26集 大宮

横田賢次郎・森田隆 1978 『大宰府出土の輸入中国陶磁器について』 『九州歴史資料館研究論叢』 4 太宰府 pp.1-26.

吉田 隆 2003 『北島道跡』 VI 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第352集 熊谷

- 558 -

写真図版



GN1 区全景 (南上空から)



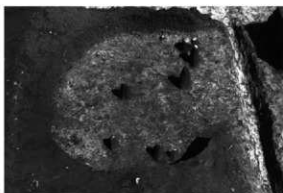
GN1 区全景 (東上空から)



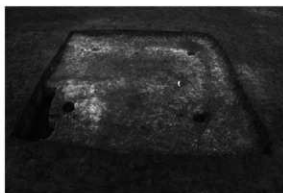
GN1区全景(西上空から)



GN1区全景(北東上空から)



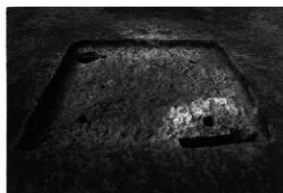
GN1 区 SK-57 遺物出土状況 (南から)



GN1 区 SI-1 全景 (東から)



GN1 区 SI-1 遺物出土状況 (南から)



GN1 区 SI-1 掘方 (南から)



GN1 区 SI-1 炉 (東から)



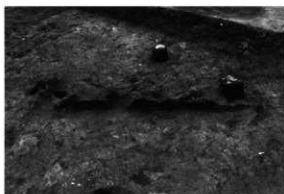
GN1 区 SI-1 貯蔵穴 P5 遺物出土状況 (南から)



GN1 区 SI-2 遺物出土状況 (南東から)



GN1 区 SI-2 掘方 (南東から)



GN1 区 SI-2 北東部焼土確認状況 (南から)



GN1 区 SI-2 貯蔵穴 P5 遺物出土状況 (南東から)



GN1 区 SI-3 遺物出土状況 (南から)



GN1 区 SI-3 掘方 (南から)



GN1 区 SI-3 カマド西側土層断面 (南西から)



GN1 区 SI-3 カマド南北土層断面 (南東から)



GN1 区 SI-3 カマド遺物出土状況 (西から)



GN1 区 SI-3 カマド遺物出土状況 (東から)



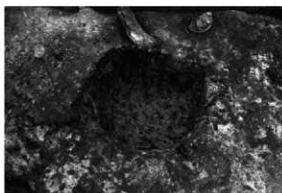
GN1 区 SI-3 カマド遺物出土状況 (南東から)



GN1 区 SI-3 南貯蔵穴 P5 上層遺物出土状況 (南から)



GN1 区 SI-3 南貯蔵穴 P5 下層遺物出土状況 (南から)



GN1 区 SI-3 北西貯蔵穴 P6 (南から)



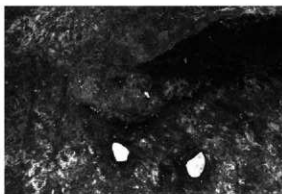
GN1 区 SI-4 遺物出土状況 (南から)



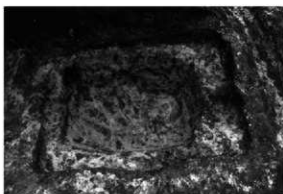
GN1 区 SI-4 掘方 (南から)



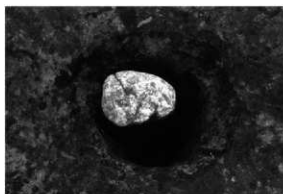
GN1 区 SI-4 北西部遺物流入状況 (南西から)



GN1 区 SI-4 カマド (南から)



GN1 区 SI-4 北西貯蔵穴 P6 (南から)



GN1 区 SI-4 北西柱穴石出土状況 (南から)



GN1 区 SI-4 南貯蔵穴 P5 (南から)



GN1 区 SI-5 全景 (南から)



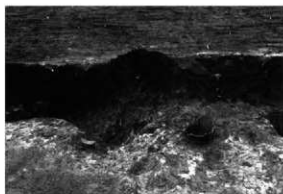
GN1 区 SI-5 遺物出土状況 (南から、遺物盗難前)



GN1 区 SI-5 掘方 (南から)



GN1 区 SI-5 カマド遺物出土状況 (南から)



GN1 区 SI-5 カマド掘方 (南から)



GN1 区 SI-5 カマド・貯蔵穴 (南東から)



GN1 区 SI-5 北貯蔵穴 P5 遺物出土状況 (南上から)



GN1 区 SI-5 南貯蔵穴 P6 遺物出土状況 (南上から)



GN1 区 SI-5 北東柱穴周辺 遺物出土状況 (西から)



GN1 区 SI-5 盗難により紛失した遺物 (左から中央北東部、中央南部、カマド西より出土)



GN1 区 SI-5 カマド南東部の遺物 (西から) 左上は盗難で紛失



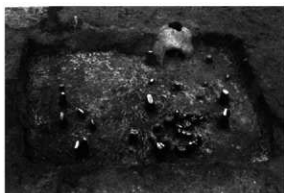
GN1 区 SK-53 遺物出土状況 (南から)



GN1 区 SK-53 全景 (南東から)



GN1 区 SI-6 全景 (南から)



GN1 区 SI-6 遺物出土状況 (南から)



GN1 区 SI-6 掘方 (南から)



GN1 区 SI-6 カマド上部断面 (南東から)



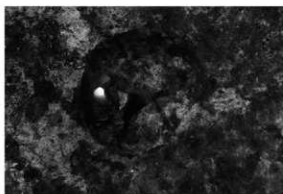
GN1 区 SI-6 カマド全景 (南から)



GN1 区 SI-6 南部遺物出土状況 (南から)



GN1 区 SI-6 南西部遺物出土状況 (南から)



GN1 区 SI-6 P2 (南東から)



GN1 区 SD-8 (南から)



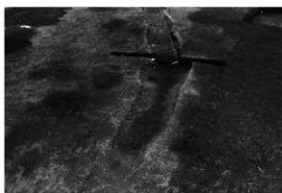
GN1 区 SD-8 土層断面 (南東から)



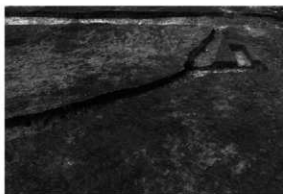
GN1 区 SD-8 土層断面 (南から)



GN1 区 SD-24 (南南西から)



GN1 区 SD-24 土層断面 (南東から、右は SI-6)



GN1 区 SD-64・SK-45 (南から)



GN1 区 SK-9・10・14～19 (南から)



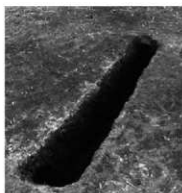
GN1 区 SK-9 (南西から)



GN1 区 SK-13 土層断面 (南から)



GN1 区 SK-17 (西から)



GN1 区 SK-14 土層断面 (南西から)



GN1 区 SK-16 土層断面 (南西から)



GN1 区 SK-19 (東から)



GN1 区 SK-18・19 (南西から)



GN1 区 SK-20 土層断面 (南西から)



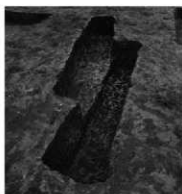
GN1 区 SK-23 (北東から)



GN1 区 中央部土坑群 (南から)



GN1 区 SK-29・30・31 (西から)



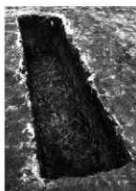
GN1 区 SK-25(手前)・26 (西から)



GN1 区 SK-27(手前)・32(奥) 東から)



GN1 区 SK-28 (東から)



GN1 区 SK-33 (東から)



GN1 区 SK-42~44 (南から)



GN1 区 SK-50 土層断面 (南から)



GN1 区 SK-60 (南から)



GN1 区 SK-61 (南から)



GN1 区 SK-62 (南から)



GN1 区 SK-63 (南から)



GN1 区 南西部低地 (北東から)



2区全景(北上空から)



2区全景(南上空から)



2区全景(東上空から)



2区北半部(西上空から)



2区 SI-1 a 期全景(南から)



2区 SI-1 a 期遺物出土状況(南から)



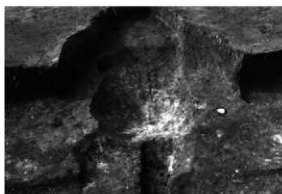
2区 SI-1 a 期南部遺物出土状況(南から)



2区 SI-1 a 期南側貯蔵穴(南から)



2区 SI-1 a 期カマド (南から)



2区 SI-1 a 期カマド掘方 (南から)



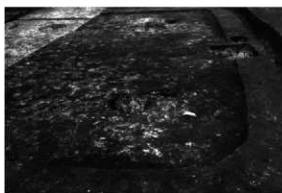
2区 SI-1 a 期カマド周辺遺物出土状況 (南から)



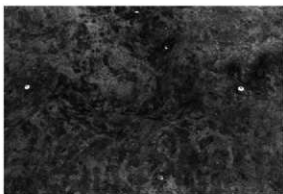
2区 SI-1 a 期カマド周辺掘方 (南から)



2区 SI-1 b 期全景および遺物出土状況 (南から)



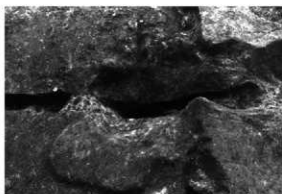
2区 SI-1 a 期掘方およびb期南西部 (西から)



2区 SI-1 b 期カマド掘方 (南から)



2区 SI-1 b 期カマド全景 (南から)



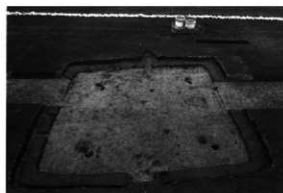
2区 SI-1 b 期カマド上部 (東から)



2区 SI-1 b 期東部周溝 (南から)



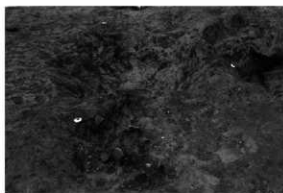
2区 SI-1 b 期東部周溝土層断面 (北から)



2区 SI-1 c 期掘方 (南から)



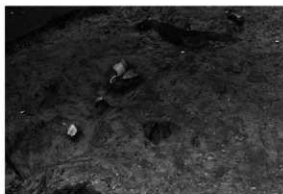
2区 SI-1 c 期北西部貯蔵穴 P17・P18 (南から、左上は b 期と a 期の貯蔵穴)



2区 SI-1 c 期カマド掘方 (東から)



2区 SI-1 c 期カマド (北から)



2区 SI-1 c 期カマドおよび貯蔵穴 (南西から)



2区 SI-98 遺物出土状況 (南から)



2区 SI-98 全景 (南から)



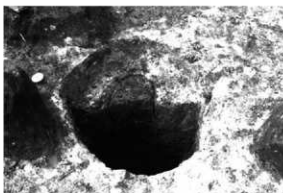
2区 SI-98 掘方 (南から)



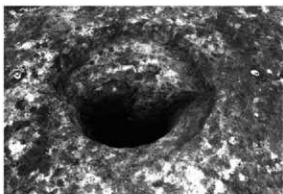
2区 SI-98 カマド全景 (南から)



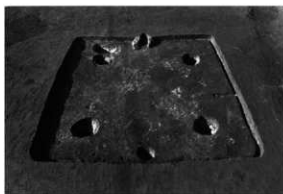
2区 SI-98 カマド掘方 (南から)



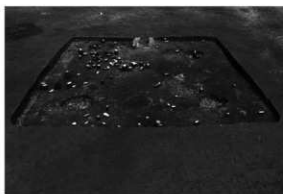
2区 SI-98 P1 土層断面 (南から)



2区 SI-98 P2 土層断面 (南から)



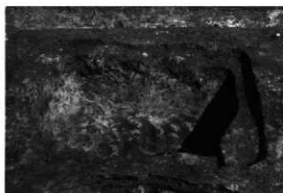
2区 SI-99 a 期全景 (南から)



2区 SI-99 a 期遺物出土状況 (南から)



2区 SI-99 a 期貯蔵穴 (北から)



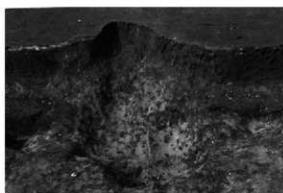
2区 SI-99 a 期貯蔵穴 (南から)



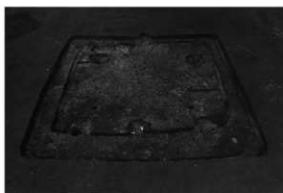
2区 SI-99 a 期カマド (南から)



2区 SI-99 a 期カマド左袖土層断面 (南から)



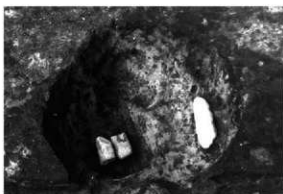
2区 SI-99 a 期カマド掘方 (南から)



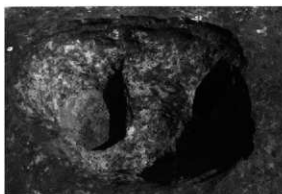
2区 SI-99 a 期掘方および b 期全景 (南から)



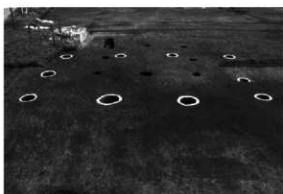
2区 SI-99 b 期掘方 (南から)



2区 SI-99 b 期 P11 遺物出土状況 (南から)



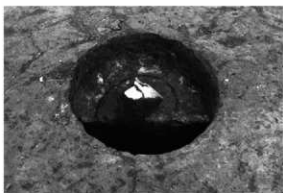
2区 SI-99 a 期 P1 (南から)



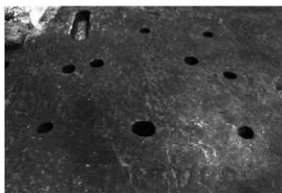
2区 SB-3 全景 (南から)



2区 SB-3 P8 土層断面 (南東から)



2区 SB-3 P10 遺物出土状況 (南東から)



2区 SB-4 (南西から)



2区 SB-121 (南から)



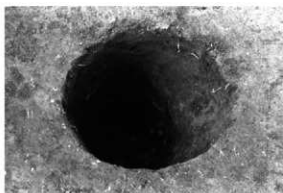
2区 SB-121(奥)・122(手前) (東から)



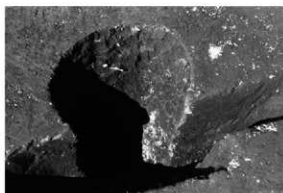
2区 SB-122 (南から)



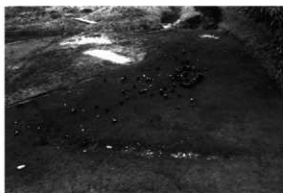
2区 P-127 (南から)



2区 P-128 (南から)



2区 P-134 (南から)



2区 SX-94 全景および遺物出土状況 (西上から)



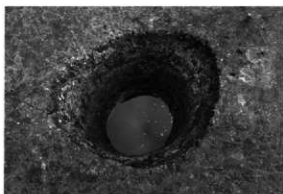
2区 SX-94 遺物出土状況 (南から)



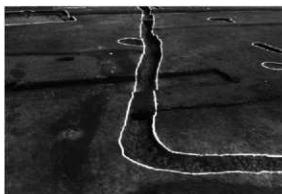
2区 SX-94 遺物出土状況 (南西から)



2区 SX-94 遺物出土状況 (東から)



2区 SE-63 (南から)



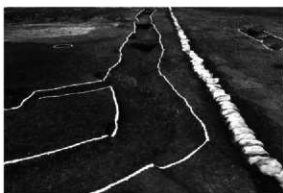
2区 SD-5a 南西部 (南から)



2区 SD-5a 南部 (西から)



2区 SD-5a(右)・5b(左奥) (西から)



2区 SD-5b 東部 (南から)



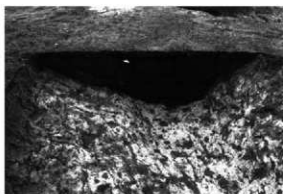
2区 SD-5b 北東部 (東から)



2区 SD-5b 北部土層断面 (南から)



2区 SD-51 (南西から)



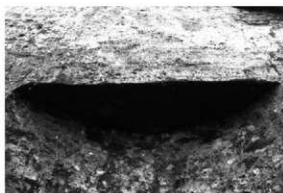
2区 SD-51 中央部土層断面 (北東から)



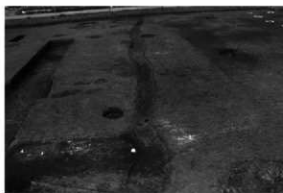
2区 SD-118 全景 (西から)



2区 SD-118 中央部土層断面 (東から)



2区 SD-118 東部土層断面 (東から)



2区 SD-2 (東から)



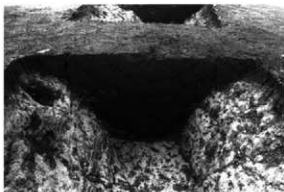
2区 SD-44 (南から)



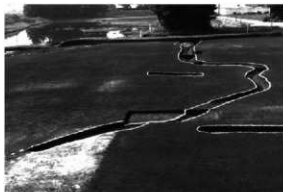
2区 SD-68 全景 (北西から)



2区 SD-68 南部土層断面 (東から)



2区 SD-68 北部土層断面(東から)



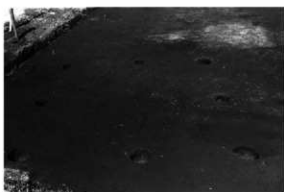
2区 SD-75 (北から)



2区 SD-78 (南から)



2区 SD-120 (南から)



2区 SB-126 (南から)



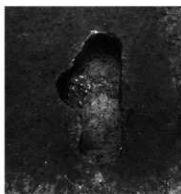
2区 SE-46 (南から)



2区 SE-73 (南東から)



2区 SE-88 土層断面(南東から)



2区 SK-6 (南から、天井部崩落后)



2区 SK-7 (南から)



2区 SK-8 (南から)



2区 SK-9 (南から)



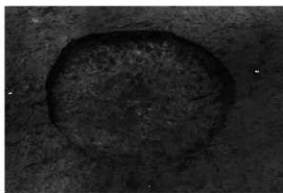
2区 SK-10 (南から)



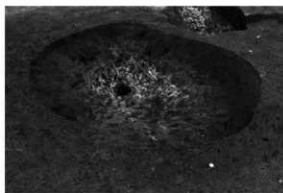
2区 SK-12 (南から)



2区 SK-13 (南から)



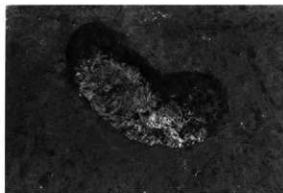
2区 SK-11 (東から)



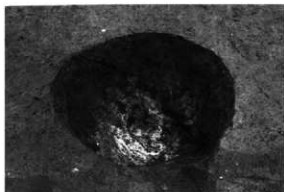
2区 SK-14 (南から)



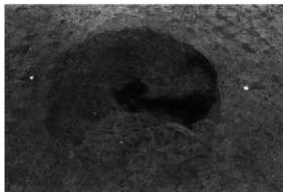
2区 SK-15 (南から)



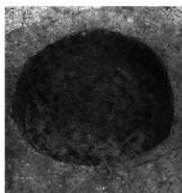
2区 SK-16 (南から)



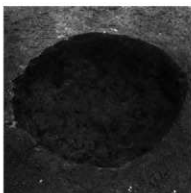
2区 SK-17 (南から)



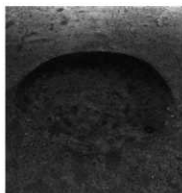
2区 SK-18 (南から)



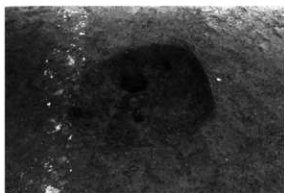
2区 SK-19 (南から)



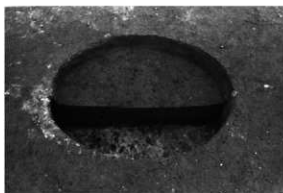
2区 SK-20 (南から)



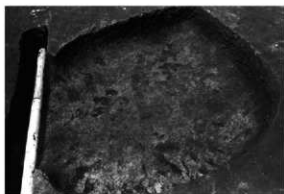
2区 SK-21 (南から)



2区 SK-22 (南から)



2区 SK-23 (南から)



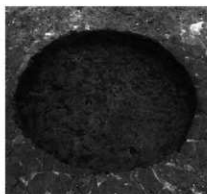
2区 SK-24 (南から)



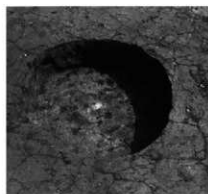
2区 SK-25 (南から)



2区 SK-26 (南から)



2区 SK-27 (南から)



2区 SK-28 (南から)



2区 SK-29 (南から)



2区 SK-30 (南から)



2区 SK-30・31 (南から)



2区 SK-32 (南から)



2区 SK-33 全景 (南から)



2区 SK-33 土層断面 (北東から)



2区 SK-34 (東から)



2区 SK-35 (南から)



2区 SK-36 (東から)



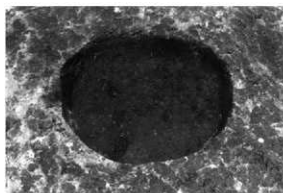
2区 SK-37 (東から)



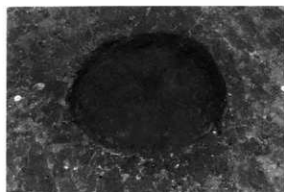
2区 SK-38 (南から)



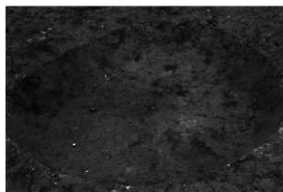
2区 SK-39 (南から)



2区 SK-40 (南から)



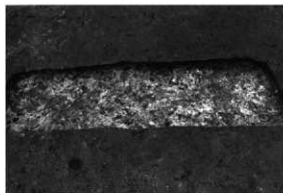
2区 SK-41 (南から)



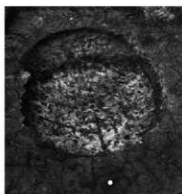
2区 SK-42 (南から)



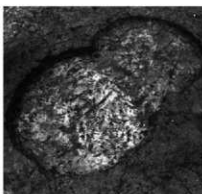
2区 SK-43 (南から)



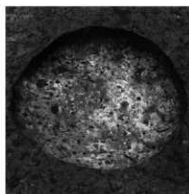
2区 SK-45 (南から)



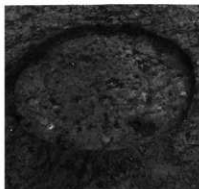
2区 SK-47・48 (西から)



2区 SK-49・50 (南から)



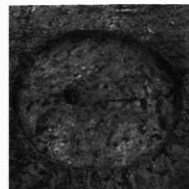
2区 SK-52 (南から)



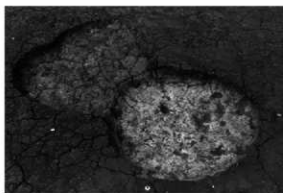
2区 SK-53 (南から)



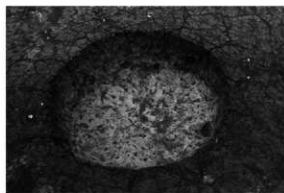
2区 SK-54 (南から)



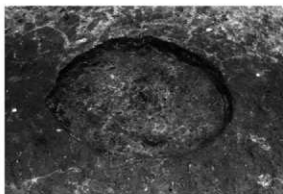
2区 SK-55 (南から)



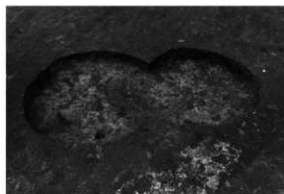
2区 SK-56・57・58 (南から)



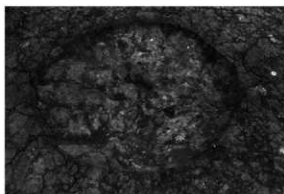
2区 SK-59 (南から)



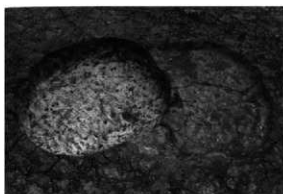
2区 SK-60 (南から)



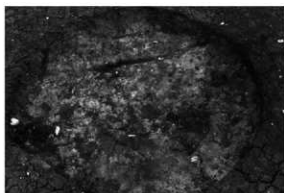
2区 SK-61・62 (南から)



2区 SK-64 (南から)



2区 SK-65・66 (南西から)



2区 SK-67 (南から)



2区 SK-70 (西から)



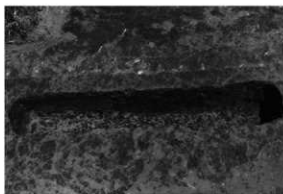
2区 SK-71・72 (南から)



2区 SK-74 (南から)



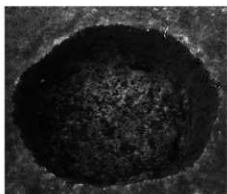
2区 SK-76・77 (西から)



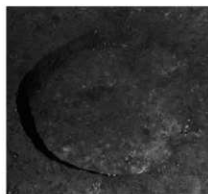
2区 SK-80 (南から)



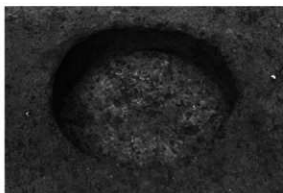
2区 SK-96 (東から)



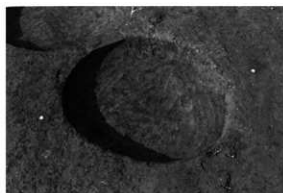
2区 SK-97 (南から)



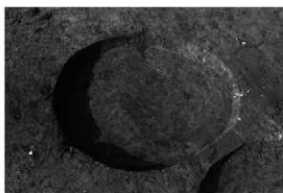
2区 SK-100 (南から)



2区 SK-102 (南から)



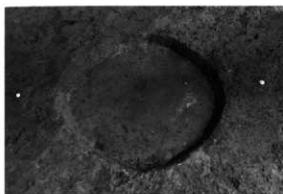
2区 SK-103 (南から)



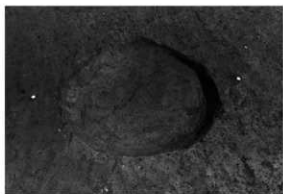
2区 SK-104 (南から)



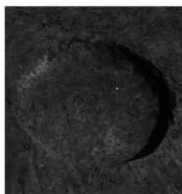
2区 SK-103・104 (北東から)



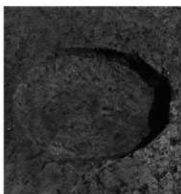
2区 SK-105 (南から)



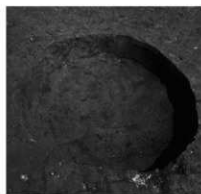
2区 SK-106 (南から)



2区 SK-107 (南から)



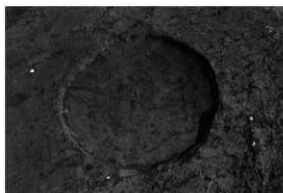
2区 SK-108 (南から)



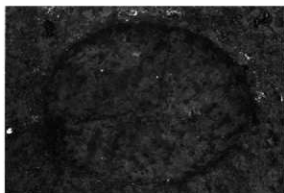
2区 SK-109 (南から)



2区 SK-110-111 (南から)



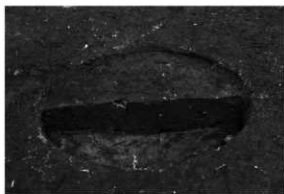
2区 SK-112 (南から)



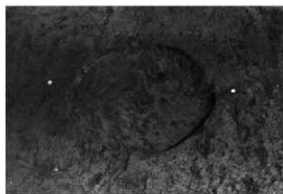
2区 SK-113 (南から)



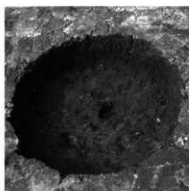
2区 SK-114 (南から)



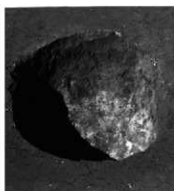
2区 SK-116 (南から)



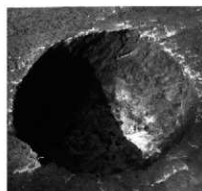
2区 SK-117 (南から)



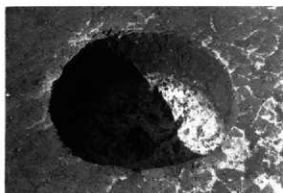
2区 SK-119 (南から)



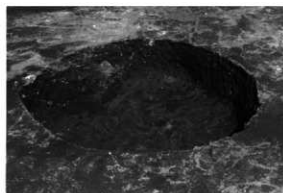
2区 SK-123 (南から)



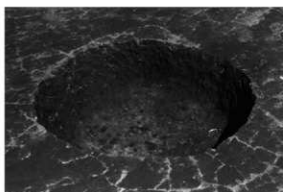
2区 SK-124 (南から)



2区 SK-125 (南から)



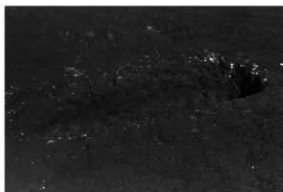
2区 SK-129 (南から)



2区 SK-130 (南から)



2区 SK-131 (南から)



2区 SK-132 (南から)



2区 SK-133 (南から)



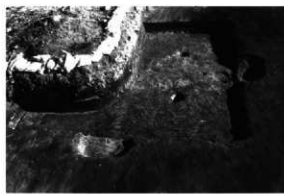
4区全景(北上空から)



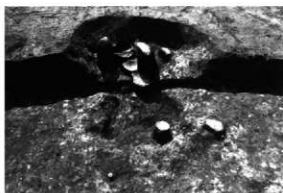
4区全景(東上空から)



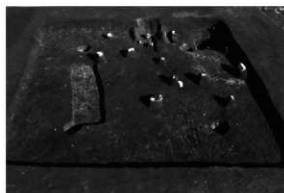
4区 SI-1 遺物出土状況(南から)



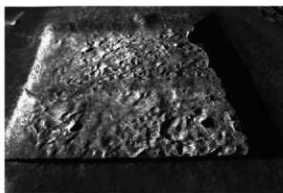
4区 SI-1 掘方(西から)



4区 SI-1 P3 遺物出土状況(北から)



4区 SI-2 遺物出土状況(西から)



4区 SI-2 掘方(西から)



4区 SI-2 カマド遺物出土状況(西から)



4区 SI-2 東側遺物出土状況(西から)



4区 SI-2 南側遺物出土状況(北から)



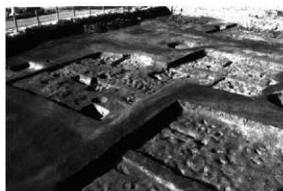
4区 SI-2 貯蔵穴(南から)



4区 SI-3(手前)・4(奥) 遺物出土状況(南から)



4区 SI-3 遺物出土状況(南から)



4区 SI-3(左)・4(右) 掘方(南東から、手前はSI-11)



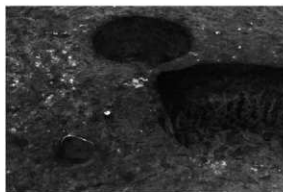
4区 SI-3 カマド遺物出土状況(南から)



4区 SI-3 カマドおよび土層断面(南から)



4区 SI-3 北東部遺物出土状況および土層断面(南東から)



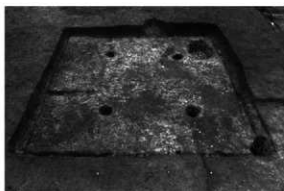
4区 SI-3 南東部 杯(1)出土状況(南から)



4区 SI-3 南東柱穴 P4 土層断面 (南から)



4区 SI-4 遺物出土状況 (南から)



4区 SI-4 掘方 (西から)



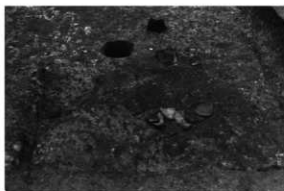
4区 SI-4 カマド遺物出土状況 (西から)



4区 SI-4 甕 (5) と貯蔵穴の関係 (西から)



4区 SI-4 北東部遺物出土状況 (東から)



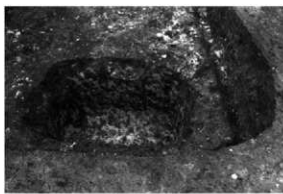
4区 SI-4 北西部遺物出土状況 (北から)



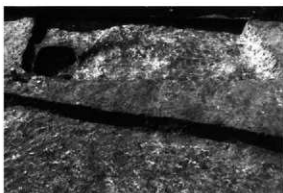
4区 SI-5 遺物出土状況 (南から)



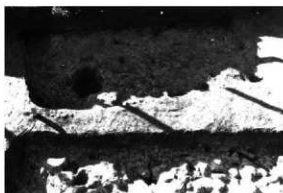
4区 SI-5 掘方(南から)



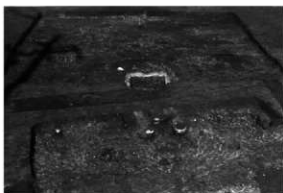
4区 SI-5 貯蔵穴(南から)



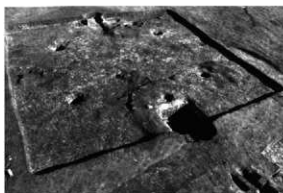
4区 SI-6 全景(東から、手前は SI-7)



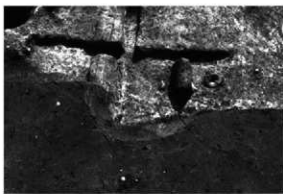
4区 SI-6 掘方(東から)



4区 SI-7 遺物出土状況(南から、手前は SI-9)



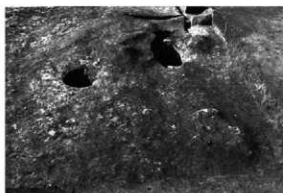
4区 SI-7 全景(南西から)



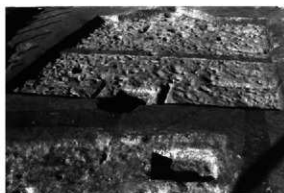
4区 SI-7 カマド(北から)



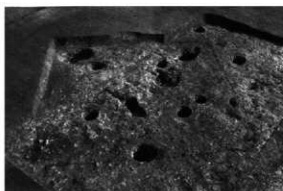
4区 SI-7 貯蔵穴 P5 と入口ピット P7(北から)



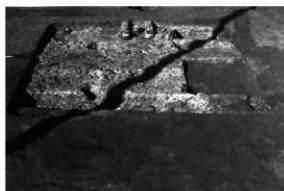
4区 SI-7 北東部焼土(東から)



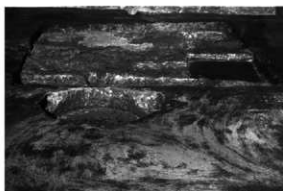
4区 SI-7・8(奥) 掘方(南から、手前は SI-9)



4区 SI-8 全景(南西から)



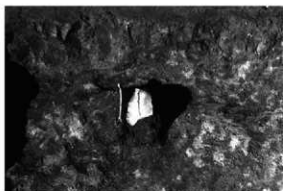
4区 SI-9 遺物出土状況(南から)



4区 SI-9 掘方(南から、手前は SK-104)



4区 SI-9 カマド遺物出土状況(南から)



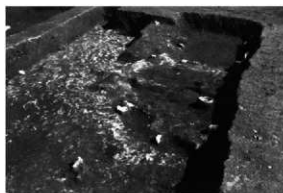
4区 SI-9 北西部遺物出土状況(南から)



4区 SI-10 遺物出土状況(南から)



4区 SI-10 FA テフラ上面の遺物出土状況 (南から)



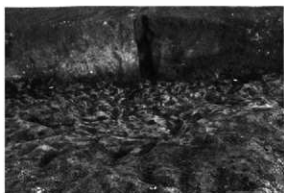
4区 SI-10 南東部 FA テフラ上面の遺物 (南西から)



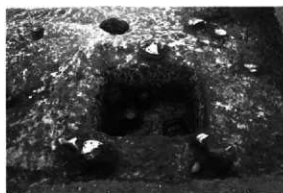
4区 SI-10 掘方 (南から)



4区 SI-10 カマド遺物出土状況 (西から)



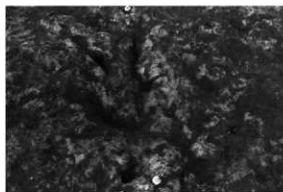
4区 SI-10 カマド掘方 (西から)



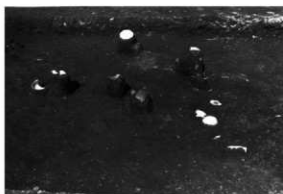
4区 SI-10 貯蔵穴および遺物出土状況 (南から)



4区 SI-10 南部盛土 (南から)



4区 SI-10 炉 (南から)



4区 SI-10 北西部FA テフラ上面の遺物 (南から)



4区 SI-10 南西主柱穴と遺物 (西から)



4区 SI-11 遺物出土状況 (南から、手前はSK-48)



4区 SI-11 掘方 (東から、円筒形土坑はSK-49)



4区 SI-11 カマド (南から)



4区 SI-11 貯蔵穴 (粘土入) (北から)



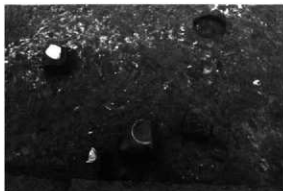
4区 SI-11 北東部遺物出土状況 (南から)



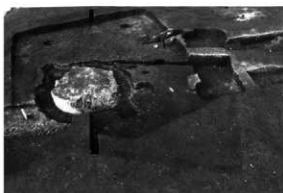
4区 SI-11 北西部遺物出土状況 (南から)



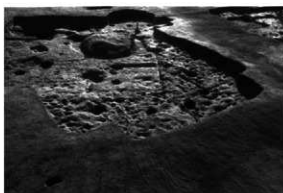
4区 SI-11 西部遺物出土状況(東から)



4区 SI-11 南部遺物出土状況(南から)



4区 SI-12(奥)・13(手前) 全景(南から)



4区 SI-12・54(手前)・13(奥) 掘方(北東から)



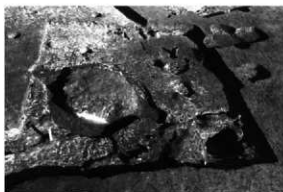
4区 SI-12・13・54 掘方(南西から)



4区 SI-12 カマド遺物出土状態(西から)



4区 SI-12 カマド遺物出土状態(南から)



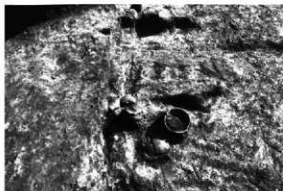
4区 SI-13 遺物出土状況(南西から)



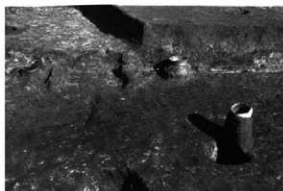
4区 SI-13 遺物出土状況(北東から)



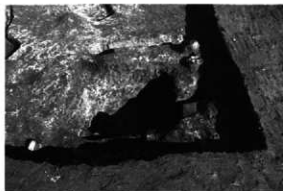
4区 SI-13 掘方(南東から)



4区 SI-13 カマド遺物出土状況(西から)



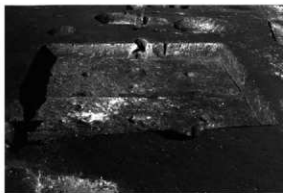
4区 SI-13 カマド遺物出土状況(南から)



4区 SI-13 新貯蔵穴 P4(南西から)



4区 SI-14 遺物出土状況(南から)



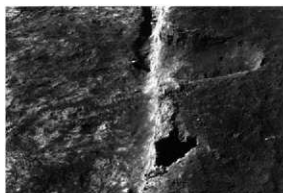
4区 SI-14 掘方(南から)



4区 SI-14 カマド遺物出土状況(北から)



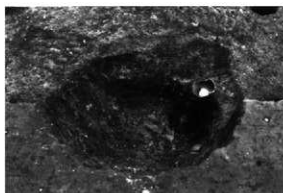
4区 SI-14 カマド遺物出土状況(南から)



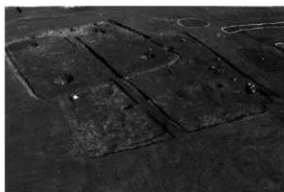
4区 SI-14 カマド掘方(東から)



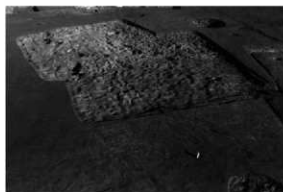
4区 SI-14 カマド全景(南から)



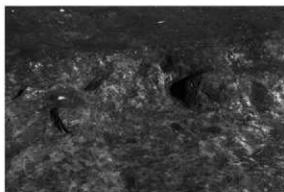
4区 SI-14 貯蔵穴(南から)



4区 SI-15(奥)・16(手前) 全景(南西から)



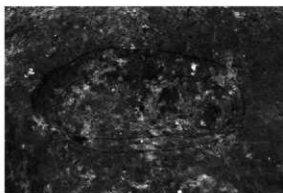
4区 SI-15(奥)・16(手前) 掘方(南西から)



4区 SI-15 カマド全景(南から)



4区 SI-16 貯蔵穴遺物出土状況(東から)



4区 SI-16 炉 (南から)



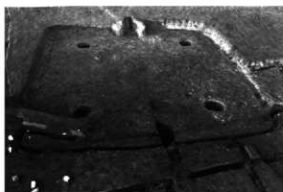
4区 SI-16 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)



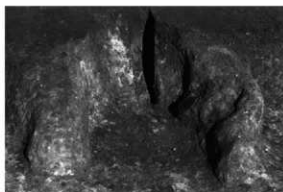
4区 SI-16 南東部 高杯 (9) 出土状況 (南から)



4区 SI-16 東部 小形壺 (20) 出土状況 (南から)



4区 SI-17 全景 (南から)



4区 SI-17 カマド (南から)



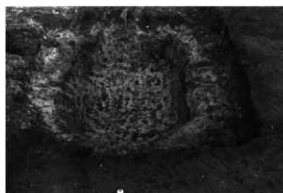
4区 SI-17・18・19 掘方 (南東から)



4区 SI-18 全景 (南から)



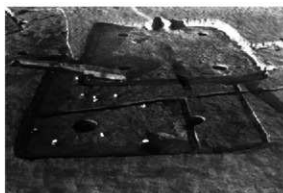
4区 SI-18 カマド (南から)



4区 SI-18 貯蔵穴 (東から)



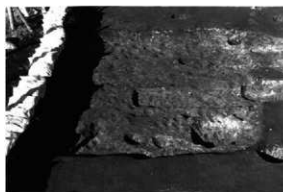
4区 SI-18 遺物 (15・16) 出土状況 (南から)



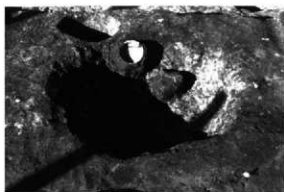
4区 SI-17(奥)・19(手前) 全景 (南東から)



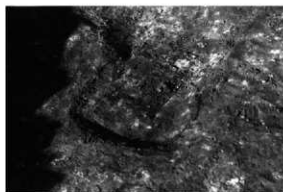
4区 SI-20 全景 (南東から)



4区 SI-20 掘方 (南から)



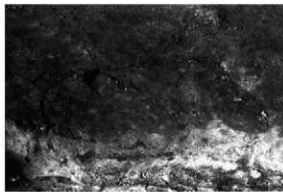
4区 SI-20 貯蔵穴 (南から)



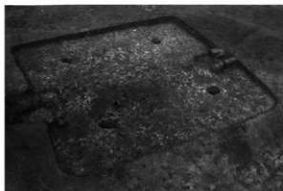
4区 SI-20 炉1 (南から)



4区 SI-20 炉2 (南東から)



4区 SI-20 炉3 (南から)



4区 SI-21 遺物出土状況 (南東から)



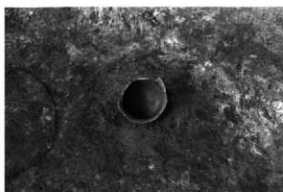
4区 SI-21 カマド (南から)



4区 SI-21 南部遺物出土状況 (北東から)



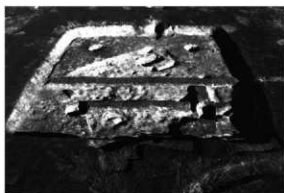
4区 SI-21 張出ビット P5 (北から)



4区 SI-22 遺物 (5) 出土状況 (北東から)



4区 SI-24 遺物出土状況 (南から)



4区 SI-24-76 全景 (南から)



4区 SI-24 カマド遺物出土状況 (南から)



4区 SI-24 カマド遺物出土状況 (北から)



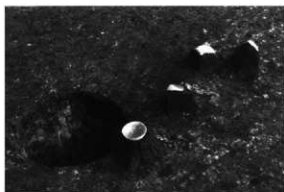
4区 SI-24 西部遺物出土状況 (南から)



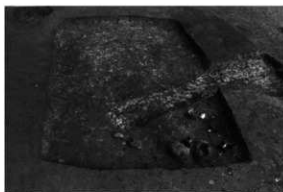
4区 SI-24 北東部遺物出土状況 (北から)



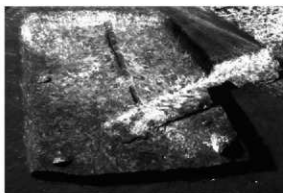
4区 SI-24 南東部遺物出土状況 (北から)



4区 SI-24 南西部遺物出土状況 (南西から)



4区 SI-25 遺物出土状況 (南西から)



4区 SI-25 掘方(南西から)



4区 SI-25 南東部遺物出土状況(南東から)



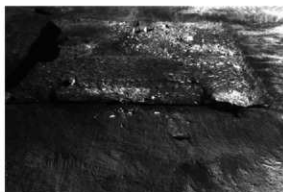
4区 SI-25 南東部遺物出土状況(北西から)



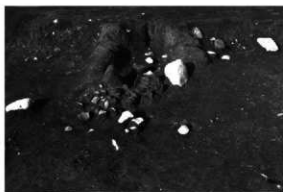
4区 SI-25 貯蔵穴周辺(南から)



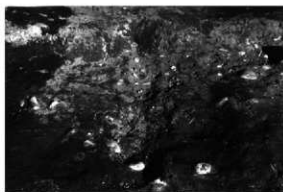
4区 SI-26 遺物出土状況(南から)



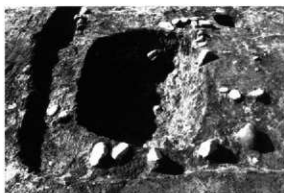
4区 SI-26 掘方(南から)



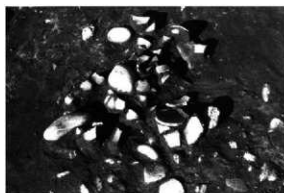
4区 SI-26 カマド遺物出土状況(南から)



4区 SI-26 カマド掘方(南から)



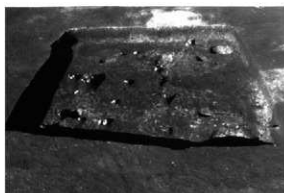
4区 SI-26 貯蔵穴 (東から)



4区 SI-26 甕(10)出土状況 (南から)



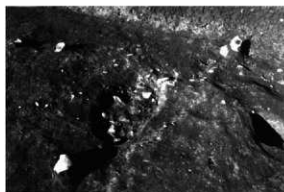
4区 SI-26 西北部石出土状況 (南東から)



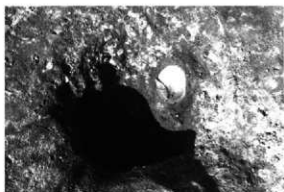
4区 SI-27 遺物出土状況 (南から)



4区 SI-27 掘方 (南から)



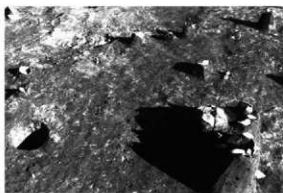
4区 SI-27 炉周辺遺物出土状況 (南東から)



4区 SI-27 西北部貯蔵穴 P7 (南東から)



4区 SI-27 南東部貯蔵穴 P6 (南から)



4区 SI-27 北西部遺物出土状況(西から)



4区 SI-27 南西部遺物出土状況(西から)



4区 SI-28 遺物出土状況(西から)



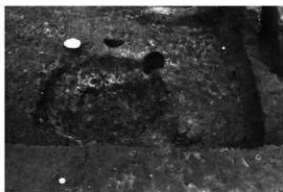
4区 SI-28 掘方(東から)



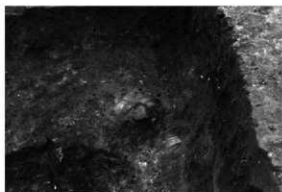
4区 SI-28 カマド遺物出土状況(西から)



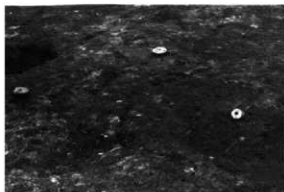
4区 SI-28 カマド掘方(西から)



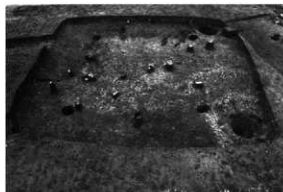
4区 SI-28 貯蔵穴(南から)



4区 SI-28 南東部 窠(10)出土状況(西から)



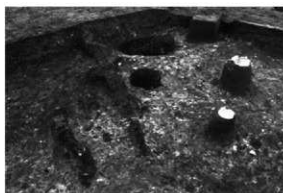
4区 SI-28 紡錘車 (13～15) 出土状況 (南から)



4区 SI-29 全景および遺物出土状況 (南から)



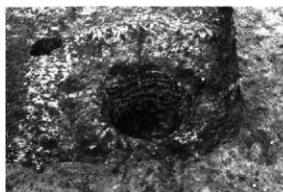
4区 SI-29 掘方 (南から)



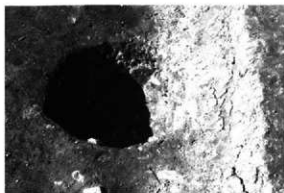
4区 SI-29 北東部遺物出土状況 (南西から)



4区 SI-29 北東部貯蔵穴 P5 (南から)



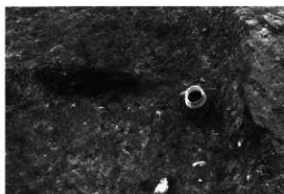
4区 SI-29 南東部貯蔵穴 P6 (南から)



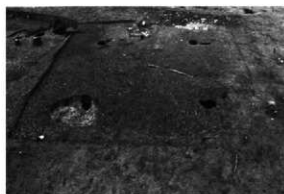
4区 SI-29 北部貯蔵穴 P7 (東から)



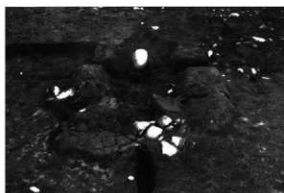
4区 SI-29 炉 (南から)



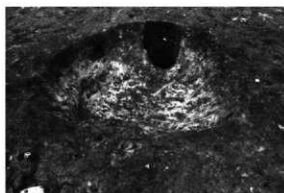
4区 SI-29 小形壺(8)と炭化材出土状況(東から)



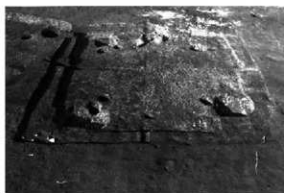
4区 SI-30 a 期遺物出土状況(南から)



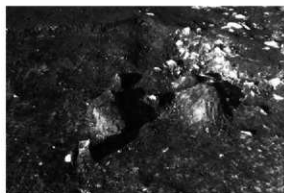
4区 SI-30 a 期カマド遺物出土状況(南から)



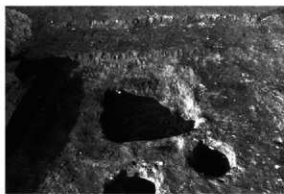
4区 SI-30 a 期貯蔵穴 P5(南から)



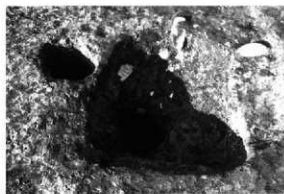
4区 SI-30 a 期掘方・b 期全景(南から)



4区 SI-30 b 期カマド(南から)



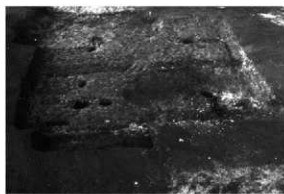
4区 SI-30 b 期北西部貯蔵穴 P12(南から)



4区 SI-30 b 期南東部貯蔵穴 P11(南から)



4区 SI-31 遺物出土状況 (南から)



4区 SI-31 掘方 (南から)



4区 SI-31 南東部遺物出土状況 (東から)



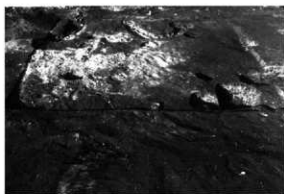
4区 SI-31 南東部遺物出土状況 (北から)



4区 SI-31 北部小形竪穴(13)出土状況 (東から)



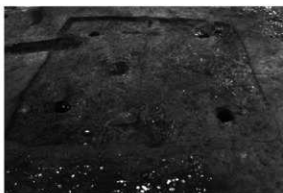
4区 SI-32 掘方 (東から)



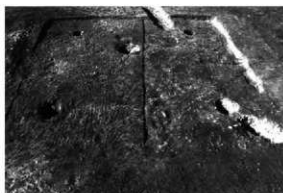
4区 SI-32 全景および遺物出土状況 (南から)



4区 SI-32 新旧貯蔵穴 P5・P6 土層断面 (南から)



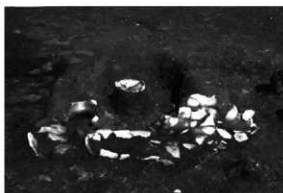
4区 SI-33 遺物出土状況 (南から)



4区 SI-33 掘方 (東から)



4区 SI-33 カマド遺物出土状況 (北から)



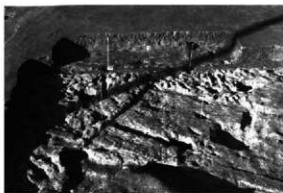
4区 SI-33 カマド遺物出土状況 (南から)



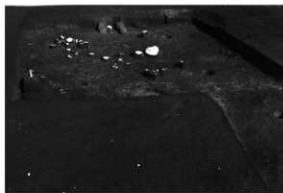
4区 SI-34 掘方 (南から)



4区 SI-34(奥)・SK-35(手前) (南から)



4区 SI-54 全景 (南から、手前は SI-12・13)



4区 SI-59 遺物出土状況 (南から、右手前は SI-27)



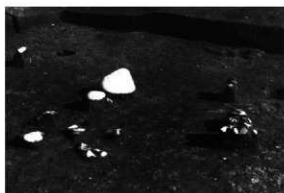
4区 SI-59 掘方(南から)



4区 SI-59 カマド(南から)



4区 SI-59 南西部遺物出土状況(東から)



4区 SI-59 南部遺物出土状況(南西から)



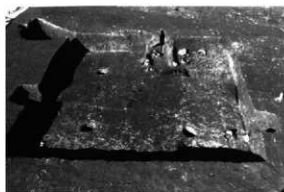
4区 SI-59 北西部遺物出土状況(西から)



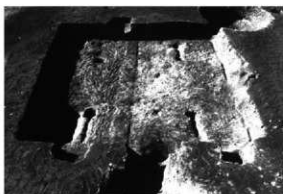
4区 SI-59 南部盛土(北から)



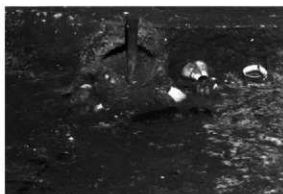
4区 SI-59 カマドおよび竃(41)出土状況(南東から)



4区 SI-74 遺物出土状況(南から)



4区 SI-74 掘方(東から)



4区 SI-74 カマド遺物出土状況(南から)



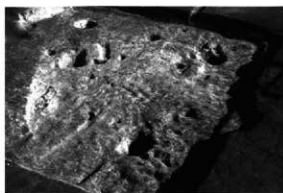
4区 SI-74 カマド遺物出土状況(南東から)



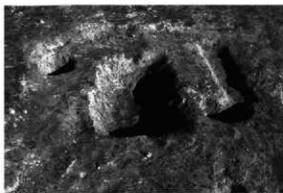
4区 SI-74 カマド掘方(南から)



4区 SI-76 全景(南東から)



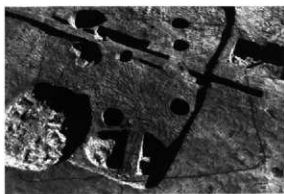
4区 SI-76 掘方(南西から)



4区 SI-76 貯蔵穴(西から)



4区 SI-92 遺物出土状況(南東から、右は SI-3・4)



4区 SI-92 遺物出土状況(北西から、左はSI-3)



4区 SI-103 全景(南から)



4区 SI-103 カマド掘方(南から)



4区 SI-130 全景(南から)



4区 SI-130 掘方(南東から)



4区 SI-130 貯蔵穴土層断面および遺物出土状況(東から)



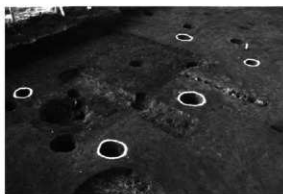
4区 SI-130 貯蔵穴内遺物出土状況(南東から)



4区 SI-62(南東から)



4区 SB-62 (南東から、人物入)



4区 SB-63 (南東から)



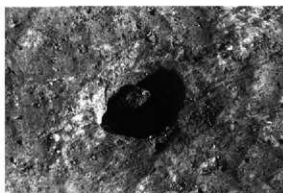
4区 SD-143 (南西から)



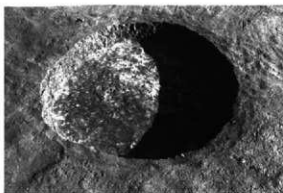
4区 SD-143 (南から)



4区 SX-23 遺物出土状況 (南西から)



4区 P-107 遺物出土状況 (南西から)



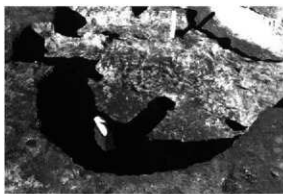
4区 SK-37 (北西から)



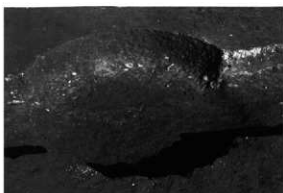
4区 SK-45 (南から)



4区 SK-48 (北から)



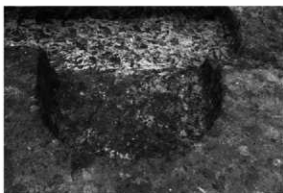
4区 SK-52 (南から)



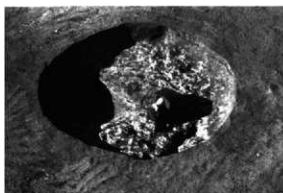
4区 SK-53 (南西から)



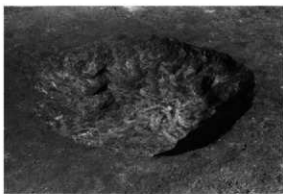
4区 SK-58 (南東から)



4区 SK-60 (南から)



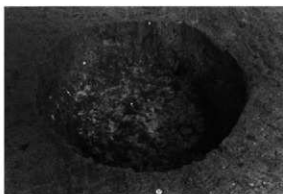
4区 SK-64 (南東から)



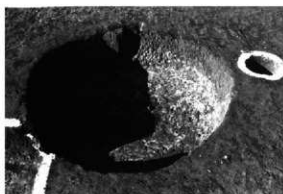
4区 SK-65 (南から)



4区 SK-71 (南東から)



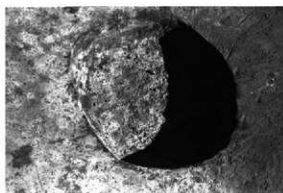
4区 SK-75 (南から)



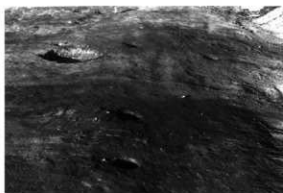
4区 SK-77 (東から)



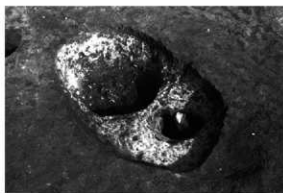
4区 SK-79 (北から)



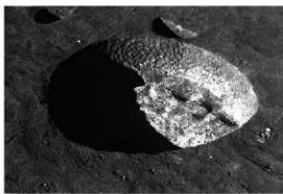
4区 SK-82 (東から)



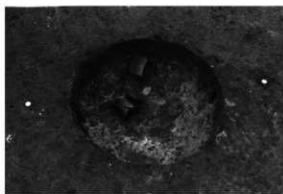
4区 SK-82(左) (南から、中央は手前からP-148・149・150)



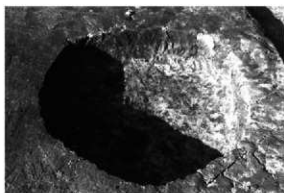
4区 SK-84 (南東から)



4区 SK-85 (南東から)



4区 SK-86 遺物出土状況 (南から)



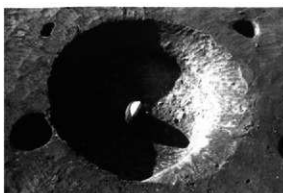
4区 SK-87 (南から)



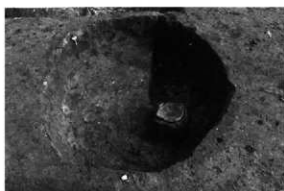
4区 SK-94 (東から)



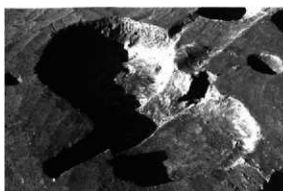
4区 SK-94 土層断面 (東から)



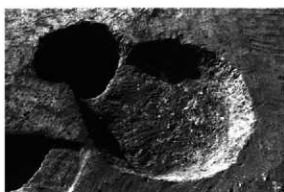
4区 SK-95 (東から)



4区 SK-96 遺物出土状況 (西から)



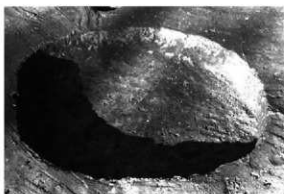
4区 SK-97(左)・137(右) (南東から)



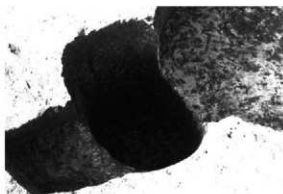
4区 SK-98(右)・99(左) (東から)



4区 SK-99 (南東から)



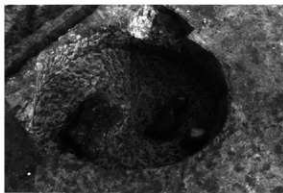
4区 SK-100 (南から)



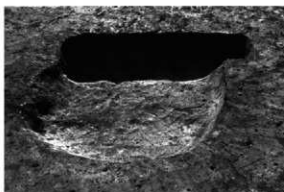
4区 SK-101 (南東から)



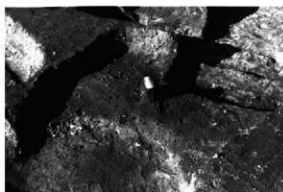
4区 SK-102 (東から)



4区 SK-104 (南西から)



4区 SK-105 (北から)



4区 SK-109 (南東から)



4区 SK-113 (南から)



4区 SK-120 (東から)



4区 SK-123 遺物出土状況 (南東から)



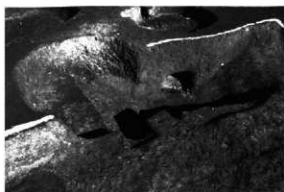
4区 SK-123 遺物出土状況 (北から)



4区 SK-125 土層断面 (東から)



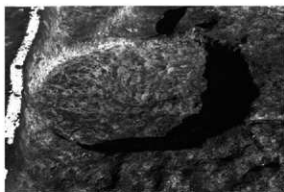
4区 SK-127 (南から)



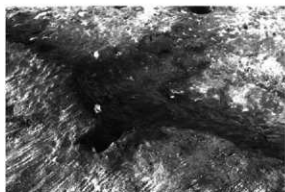
4区 SK-129 (南西から)



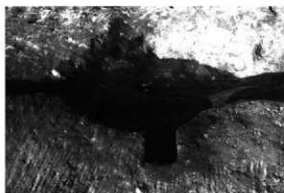
4区 SK-129 (南から)



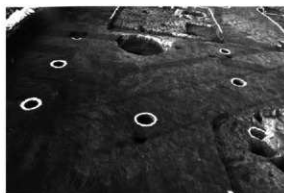
4区 SK-133 (南から)



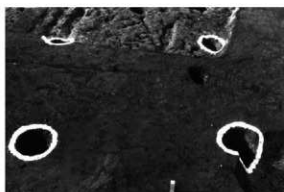
4区 SK-135 (南東から)



4区 SK-135 (南から)



4区 SB-132 (南から)



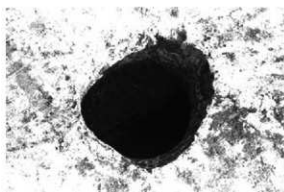
4区 SB-153 (東から)



4区 SB-153 (南から)



4区 SB-155 (南から)



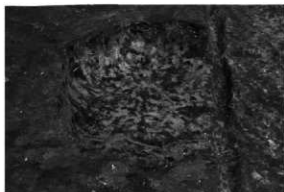
4区 SE-72 (南西から)



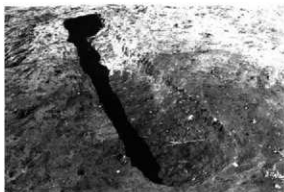
4区 SE-72 土層断面 (南から)



4区 SE-73 土層断面 (北から)



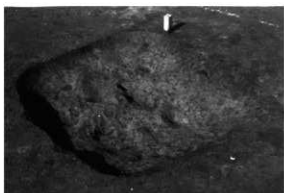
4区 SK-36 (南から)



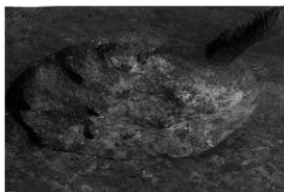
4区 SK-50 (南東から)



4区 SK-51 (南東から)



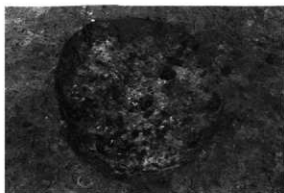
4区 SK-68 (南東から)



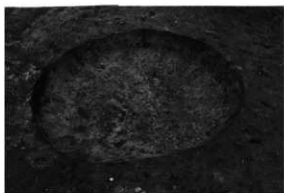
4区 SK-69 (南東から)



4区 SK-70 (南から)



4区 SK-80 (南から)



4区 SK-83 (西から)



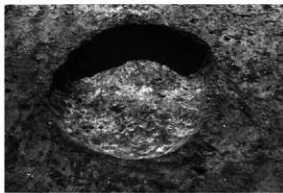
4区 SK-88 (南西から)



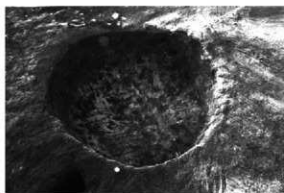
4区 SK-89 (南東から)



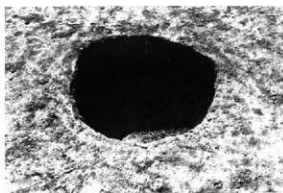
4区 SK-91 (東から)



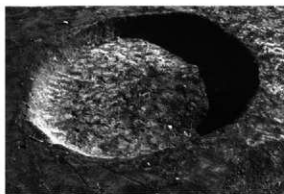
4区 SK-106 (北から)



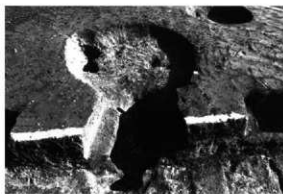
4区 SK-111 (東から)



4区 SK-112 (北から)



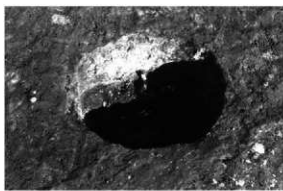
4区 SK-118 (西から)



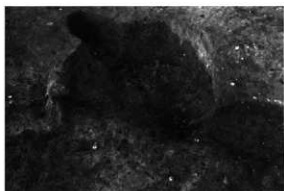
4区 SK-119 (西から、手前はSK-142)



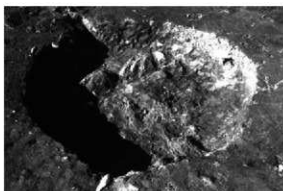
4区 SK-121 (南東から)



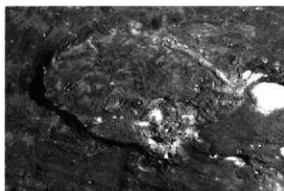
4区 SK-122 (南から)



4区 SK-128(手前)・134(奥) (南から)



4区 SK-146 (南東から)



4区 SK-147 (南東から)



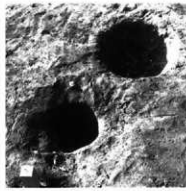
4区 P-150 (東から)



4区 P-149 (東から)



4区 P-148 (南から)



4区 P-151(手前)・152(奥) (東から)



SG1区全景(東上空から)



SG1区全景(南上空から)



SG1区全景(南東上空から)



SG1区全景(北上空から)



SG1区豪族居館跡全景(東上空から) 左側は北関東自動車道路調査区



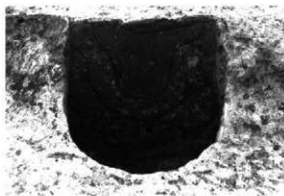
SG1区豪族居館跡全景(北東から)



SG1区豪族居館跡北部(北から)



SG1区SB-106(北から)



SG1区SB-106 柱穴P11土層断面(東から)



SG1 区豪族居館跡全景 (北から)



SG1 区 SB-106 周辺 柱配置復原 (北から)



SG1 区 SB-106 付近 (南西から)



SG1 区 SB-106 付近 (東から)



SG1 区 SA-103-S-129-SD-95 (南から)



SG1 区 SA-103-S-129 柱配置復原 (南から)



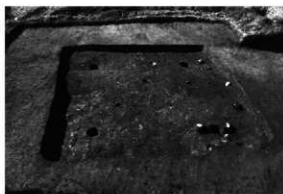
SG1 区 SA-103-SA-132 柱配置復原 (北西から)



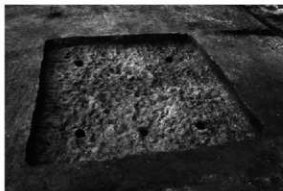
SG1 区 SA-103-SB-106 調査風景 (南東から)



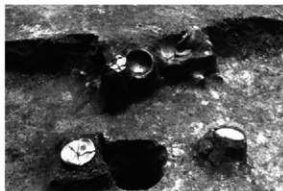
SG1 区 SK-125 遺物出土状況 (南から)



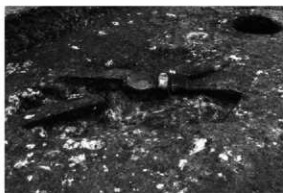
SG1 区 SI-1 遺物出土状況 (南から)



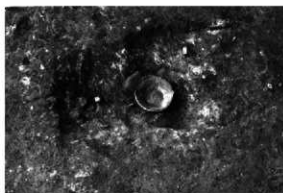
SG1 区 SI-1 掘方 (南から)



SG1 区 SI-1 南東部遺物出土状況 (北から)



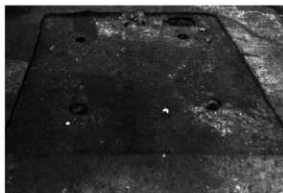
SG1 区 SI-1 炉 1 土層断面 (南から)



SG1 区 SI-1 炉 2 (南から)



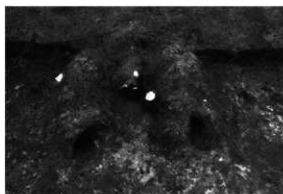
SG1 区 SI-1 炉 2 土層断面 (南から)



SG1 区 SI-2 遺物出土状況 (南から)



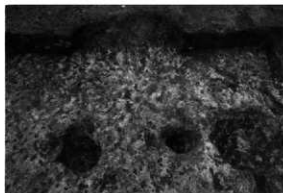
SG1 区 SI-2 掘方 (南から)



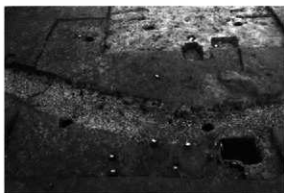
SG1 区 SI-2 カマド遺物出土状況 (南から)



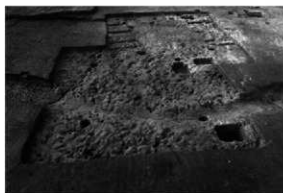
SG1 区 SI-2 カマド (南西から)



SG1 区 SI-2 カマド掘方 (南から)



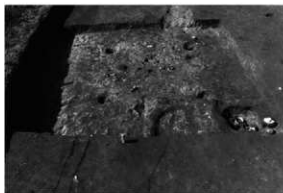
SG1 区 SI-3 遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-3 掘方 (南から)



SG1 区 SI-3 カマド (南から)



SG1 区 SI-5 遺物出土状況 (南から)



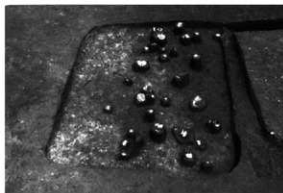
SG1 区 SI-5 掘方 (西から)



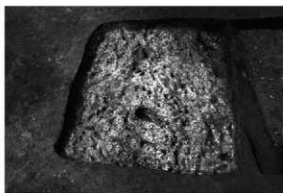
SG1 区 SI-5 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)



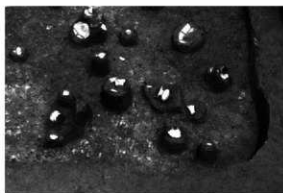
SG1 区 SI-6 全景 (南から)



SG1 区 SI-6 遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-6 掘方 (南から)



SG1 区 SI-6 南東部遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-6 北部遺物出土状況 (西から)



SG1 区 SI-6 竈出土状況 (東から)



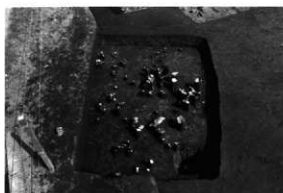
SG1 区 SI-6 小形壺 出土状況 (北西から)



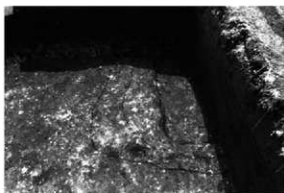
SG1 区 SI-7 全景 (東から)



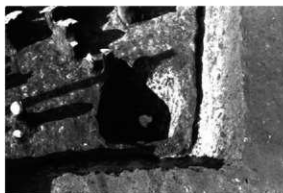
SG1 区 SI-7 掘方 (東から)



SG1 区 SI-7 遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-7 南西部馬蹄形盛土 (北から)



SG1 区 SI-7 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-7 貯蔵穴西側の出土遺物 (西から)



SG1 区 SI-7 北東柱穴小形甕 出土状況 (北東から)



SG1 区 SI-7 東部遺物出土状況 (北から)



SG1 区 SI-8 a 期全景 (西から)



SG1 区 SI-8 a 期遺物出土状況 (北から)



SG1 区 SI-8 a 期・b 期掘方 (西から)



SG1 区 SI-8 a 期カマド遺物出土状況 (西から)



SG1 区 SI-8 a 期貯蔵穴 (右)・b 期貯蔵穴 (左) (南から)



SG1 区 SI-10 遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-10 掘方 (南から)



SG1 区 SI-10 カマド遺物出土状況 (南から)



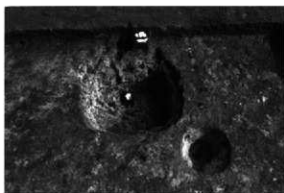
SG1 区 SI-10 北東部遺物出土状況 (南西から)



SG1 区 SI-10 カマド周辺遺物出土状況 (南東から)



SG1 区 SI-10 カマド支脚残存状況 (南から)



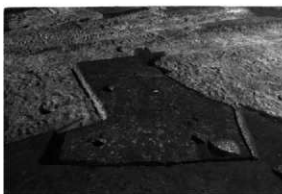
SG1 区 SI-10 貯蔵穴遺物出土状況 (北から)



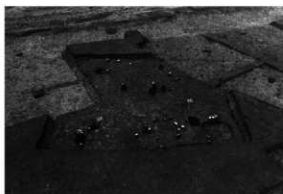
SG1 区 SI-11 遺物出土状況 (南から)



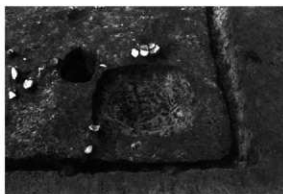
SG1 区 SI-11 掘方 (南から)



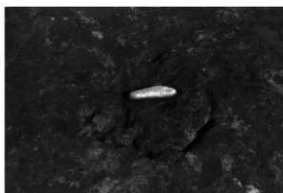
SG1 区 SI-12 全景 (南西から)



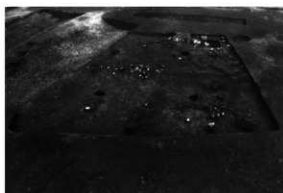
SG1 区 SI-12 遺物出土状況 (南西から)



SG1 区 SI-12 貯蔵穴 (南から)



SG1 区 SI-12 炉 (南西から)



SG1 区 SI-13 遺物出土状況 (西から)



SG1 区 SI-13 盛土土層断面 (東から)



SG1 区 SI-13 南東部遺物出土状況 (西から)



SG1 区 SI-13 カマド遺物出土状況 (西から)



SG1 区 SI-13 石敷部遺物出土状況 (南東から)



SG1 区 SI-13 石敷部遺物出土状況 (北から)



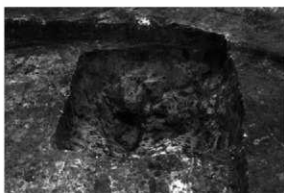
SG1 区 SI-14 遺物出土状況 (東から)



SG1 区 SI-14 全景 (南から)



SG1 区 SI-14 貯蔵穴土層断面 (南から)



SG1 区 SI-14 貯蔵穴 (南から)



SG1 区 SI-17 全景 (南から)



SG1 区 SI-17 遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-17 掘方 (南から)



SG1 区 SI-17 編物石出土状況 (南から)



SG1 区 SI-17 貯蔵穴遺物出土状況 (北から)



SG1 区 SI-17 カマドおよび攪乱 (南から)



SG1 区 SI-18 遺物出土状況 (南から、奥は SI-17)



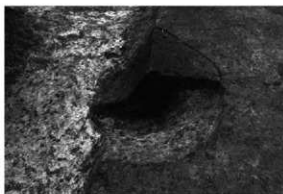
SG1 区 SI-18 掘方 (南から)



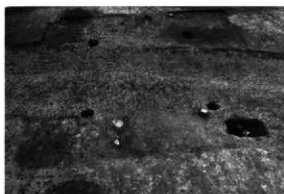
SG1 区 SI-18 カマド (東から)



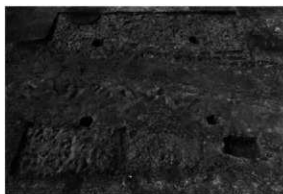
SG1 区 SI-18 カマド (南から)



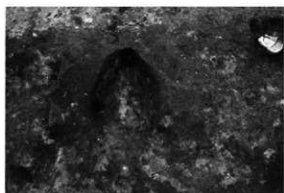
SG1 区 SI-18 張出ビット P5 土層断面 (南から)



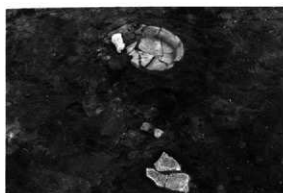
SG1 区 SI-32 遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-32 掘方 (南から)



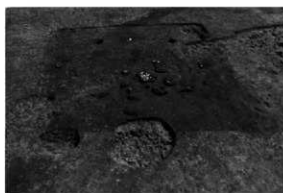
SG1 区 SI-32 カマド痕跡 (南から)



SG1 区 SI-32 南部遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-32 貯蔵穴 P5 土層断面 (南から)



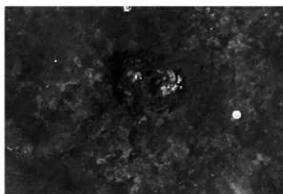
SG1 区 SI-33 遺物出土状況 (西から)



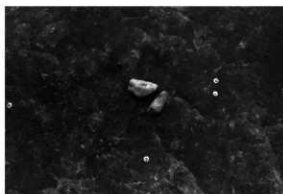
SG1 区 SI-33 掘方 (西から)



SG1 区 SI-33 遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-33 炉 1 (鍛冶炉、西から)



SG1 区 SI-33 炉 2 (東から)



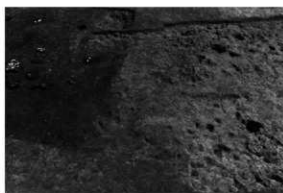
SG1 区 SI-33 鍛冶炉土層断面 (東から)



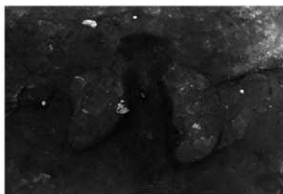
SG1 区 SI-34 全景 (西から、左は SI-33・右は SI-35)



SG1 区 SI-34 遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-34 掘方 (西から)



SG1 区 SI-34 カマド (南から)



SG1 区 SI-34 北東部遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-35 全景 (南から)



SG1 区 SI-35 掘方 (南から)



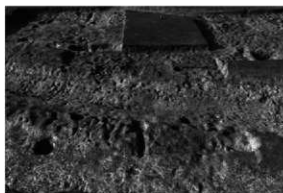
SG1 区 SI-35 カマド (西から)



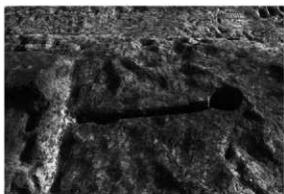
SG1 区 SI-35 南東入口部 (西から)



SG1 区 SI-40 遺物出土状況 (南から、手前は SD-31・37)



SG1 区 SI-40 掘方 (南から)



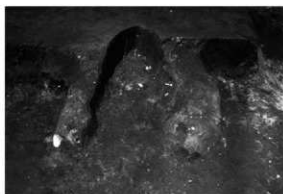
SG1 区 SI-40 北東部間仕切り溝 (北から)



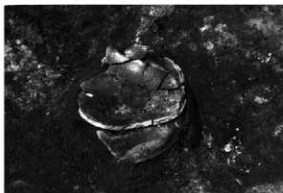
SG1 区 SI-62 遺物出土状況 (南から)



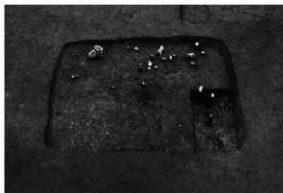
SG1 区 SI-62 掘方 (南から)



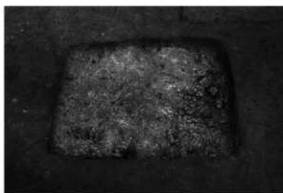
SG1 区 SI-62 カマド (南東から)



SG1 区 SI-62 遺物出土状況 (南東から)



SG1 区 SI-66 遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-66 掘方 (南から)



SG1 区 SI-66 貯蔵穴遺物出土状況 (東から)



SG1 区 SI-66 北部遺物出土状況 (南東から)



SG1 区 SI-66 北部遺物出土状況 (南西から)



SG1 区 SI-66 炉土層断面 (南東から)



SG1 区 SI-69 全景 (南から)



SG1 区 SI-69 遺物出土状況 (南東から)



SG1 区 SI-69 掘方 (南から)



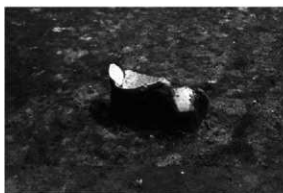
SG1 区 SI-69 南西部遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-70 遺物出土状況 (東から)



SG1 区 SI-70 掘方 (南から)



SG1 区 SI-70 北西部遺物出土状況 (西から)



SG1 区 SI-70 貯蔵穴 (北西から)



SG1 区 SI-71 遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-71 掘方 (南から)



SG1 区 SI-71 カマド土層断面 (東から)



SG1 区 SI-71 カマド遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-71 カマド西側遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-71 掘出ビット P5 遺物出土状況 (東から)



SG1 区 SI-84 遺物出土状況 (東から)



SG1 区 SI-84 遺物出土状況 (南から)



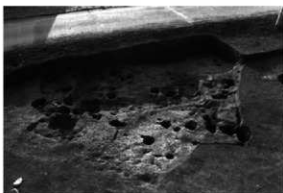
SG1 区 SI-84 土層断面 (南西から)



SG1 区 SI-85 全景および遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-85 貯蔵穴遺物出土状況 (南東から)



SG1 区 SI-86(中央)・87(右奥) 掘方(東から、周囲はSI-84)



SG1 区 SI-88 遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-88 掘方 (南から)



SG1 区 SI-88 東部遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-88 北部遺物出土状況 (南西から)



SG1 区 SI-89 遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-89 掘方 (南から)



SG1 区 SI-89 カマド西側の遺物 (北西から)



SG1 区 SI-89 カマド西側の遺物 (南から)



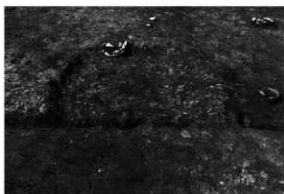
SG1 区 SI-89 カマド (南から)



SG1 区 SI-89 東半とSK-128(黒色部) (南から)



SG1 区 SI-89 南西隅と貯蔵穴 (南から)



SG1 区 SI-89 南部盛土 (南から)



SG1 区 SI-89 カマド西側の2枚重ねた杯 (西から)



SG1 区 SI-90 遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-90 掘方 (南から)



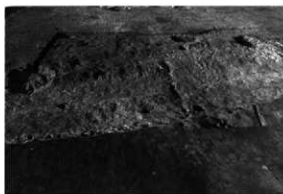
SG1 区 SI-90 カマド (南から)



SG1 区 SI-90 南東隅と貯蔵穴 (南から)



SG1 区 SI-126 全景 (南から)



SG1 区 SI-126 掘方 (南から)



SG1 区 SI-127 遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-127 掘方 (南から)



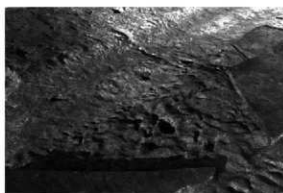
SG1 区 SI-127 杯出土状況 (南東から)



SG1 区 SI-127 北西柱穴遺物出土状況 (南東から)



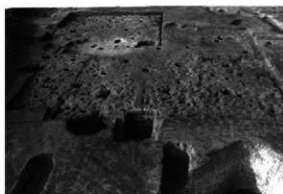
SG1 区 SI-136 遺物出土状況 (南西から)



SG1 区 SI-136 掘方 (南から)



SG1 区 SI-174 遺物出土状況 (西から)



SG1 区 SI-174 掘方 (南から)



SG1 区 SI-174 カマド (南から)



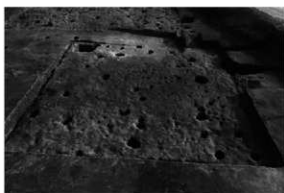
SG1 区 SI-174 張出ビット P5 遺物出土状況 (北東から)



SG1 区 SI-174(手前)・179(奥) 遺物出土状況 (南から)



SG1 区 SI-179 遺物出土状況 (西から)



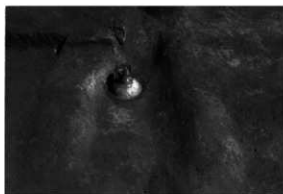
SG1 区 SI-179 掘方 (北から)



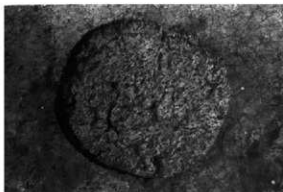
SG1 区 SI-179 カマド遺物出土状況 (西から)



SG1 区 SI-179 カマド遺物出土状況 (西から)



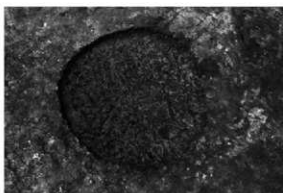
SG1 区 SI-179 カマド支脚出土状況 (西から)



SG1 区 SK-53 (南東から)



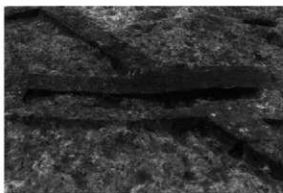
SG1 区 SK-55 (東から)



SG1 区 SK-56 (東から)



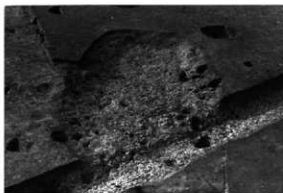
SG1 区 SK-104 遺物出土状況 (東から)



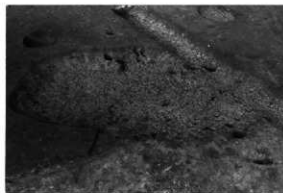
SG1 区 SK-128 土層断面 (南東から)



SG1 区 SK-128 耳環出土状況 (南から、周囲は SI-89)



SG1 区 SI-155 遺物出土状況 (東から)



SG1 区 SI-155 遺物出土状況 (南から)



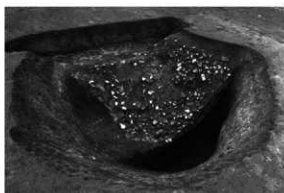
SG1区 SI-155 土層断面 (南西から)



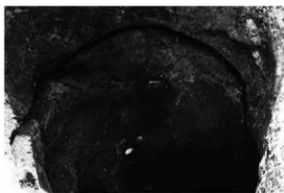
SG1区 SE-169 (南から、左は SK-167)



SG1区 SE-169 土層断面 (南東から)



SG1区 SE-169 石流入状況 (南東から)



SG1区 SE-169 遺物出土状況 (北から)



SG1区 SE-169 木製品と竹の出土状況 (北から)



SG1区 SD-31 土層断面 (東から)



SG1区 SD-31・37 (東から)



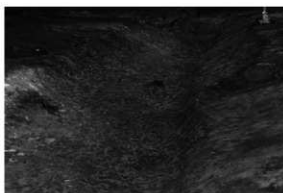
SG1 区 SD-31・37 (西から)



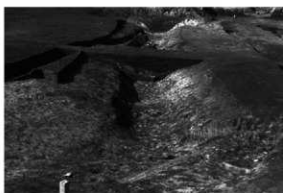
SG1 区 SD-31・37 土層断面 (南東から)



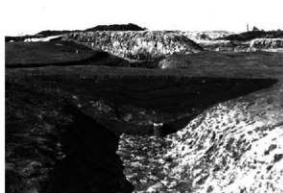
SG1 区 SD-31・37 土層断面 (北東から)



SG1 区 SD-37 (南から)



SG1 区 SD-37 (南から)



SG1 区 SD-37 土層断面 (南から)



SG1 区 SD-45・SK-172 遺物出土状況 (南東から)



SG1 区 SD-45 (南から、手前はSK-172)



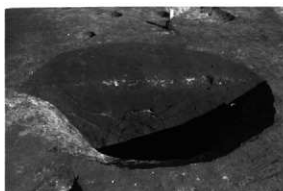
SG1区 SD-45 B-B' 土層断面 (南から)



SG1区 SX-131 西側土坑 (北東から、右上は SI-12 柱穴)



SG1区 SX-131 東側土坑 (南東から)



SG1区 SE-113 土層断面 (南から)



SG1区 SE-178 土層断面 (南から)



SG1区 SD-65 (南から、周囲は SI-62)



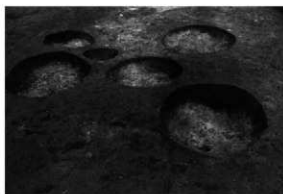
SG1区 SD-175 (東から、奥は SK-176)



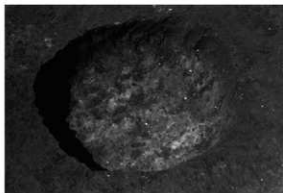
SG1区 SD-175 土層断面 (東から、右は SK-176)



SG1 区 SK-21 (南西から)



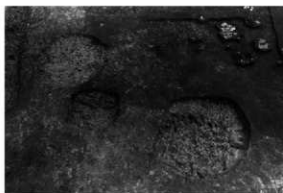
SG1 区 SK-23 ~ 28 (北から)



SG1 区 SK-29 (南から)



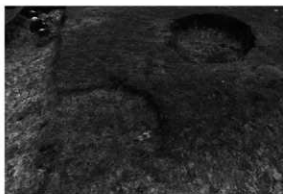
SG1 区 SK-30 (南から)



SG1 区 SK-73(左)・74(中央)・75(右) (西から)



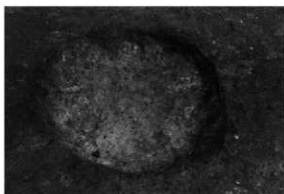
SG1 区 SK-77 (南から)



SG1 区 SK-78(奥)・79(手前) (南から)



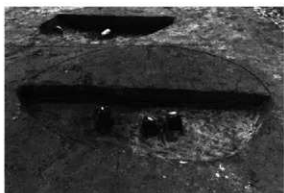
SG1 区 SK-81(奥)・82(手前) (南から)



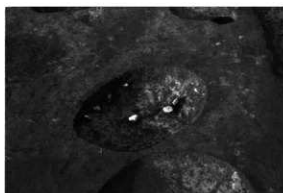
SG1区 SK-105 (南から)



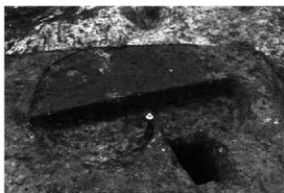
SG1区 SK-140 土層断面 (南から)



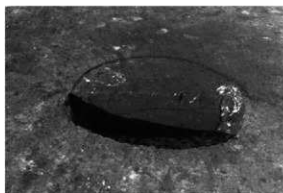
SG1区 SK-141(手前)・142(奥) 土層断面 (南から)



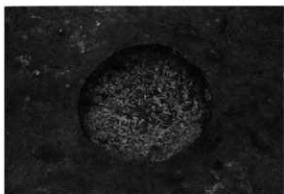
SG1区 SK-142 (南から)



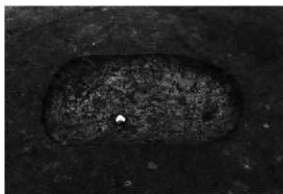
SG1区 SK-143 土層断面 (南から、奥は SI-18)



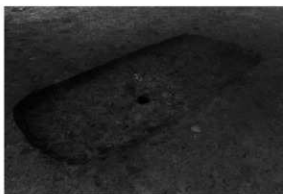
SG1区 SK-151 土層断面 (南から)



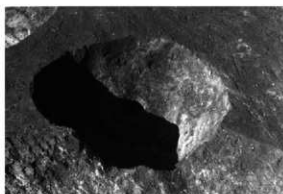
SG1区 SK-152 (南から)



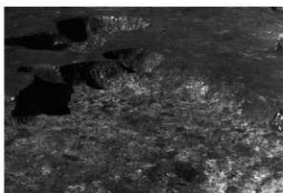
SG1区 SK-154 (南から)



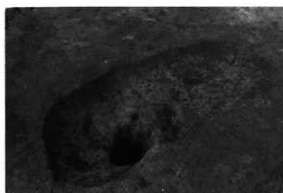
SG1 区 SK-156 (南から)



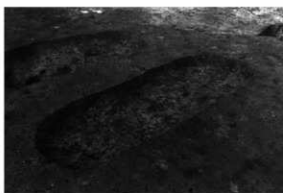
SG1 区 SK-157 (南から)



SG1 区 SK-158 (南から、奥は SK-146・147・157)



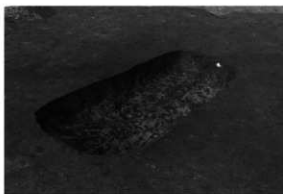
SG1 区 P-160a・SK-160b (南から)



SG1 区 SK-161 (南から)



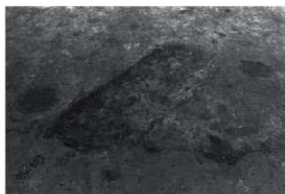
SG1 区 SK-162 (南から)



SG1 区 SK-163 (南から)



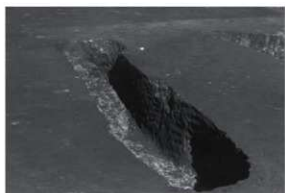
SG1 区 SK-164 (南から)



SG1区 SK-165 (南から)



SG1区 SK-166 (南から)



SG1区 SK-167 (南西から)



SG1区 SK-168 (南西から、左は SK-183・右は SK-173)



SG1区 SK-181 (南から)



SG1区 SK-182 (南から)



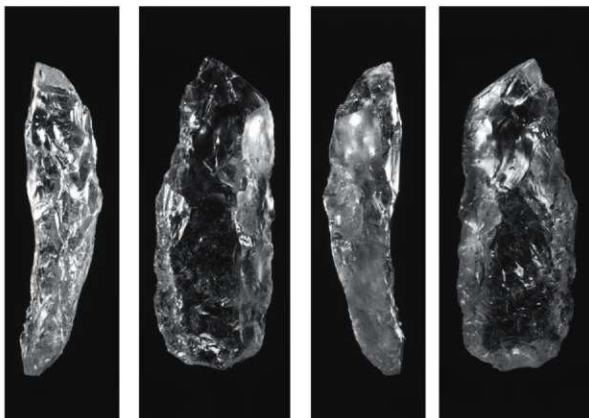
SG1区 SK-183 (南西から)



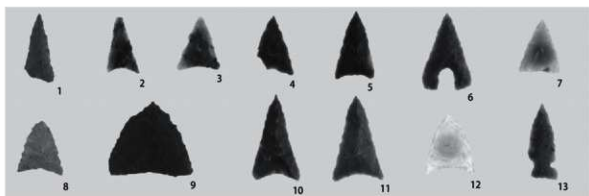
SG1区 SK-185(右)・186(左)・187(奥) (南から)



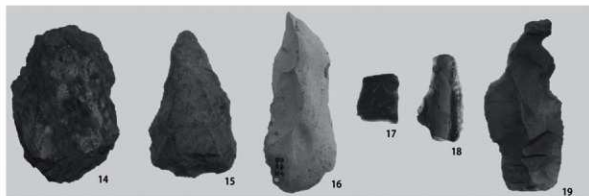
SG1区 SK-187 (南から)



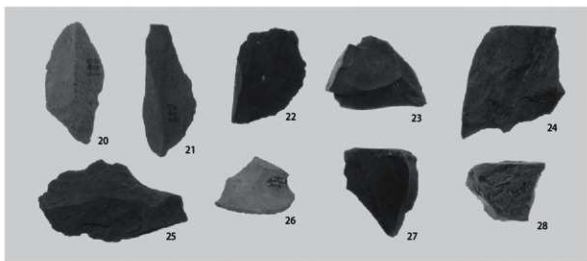
権現山遺跡 SG1 区出土の旧石器（尖頭器）原寸の約 1.7 倍大



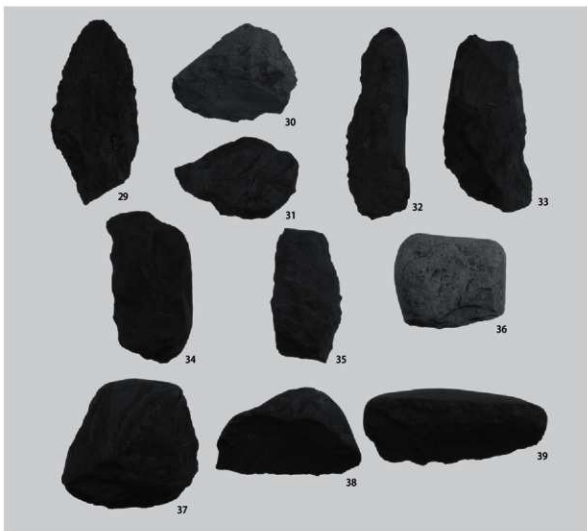
権現山遺跡各地区出土の石鏃



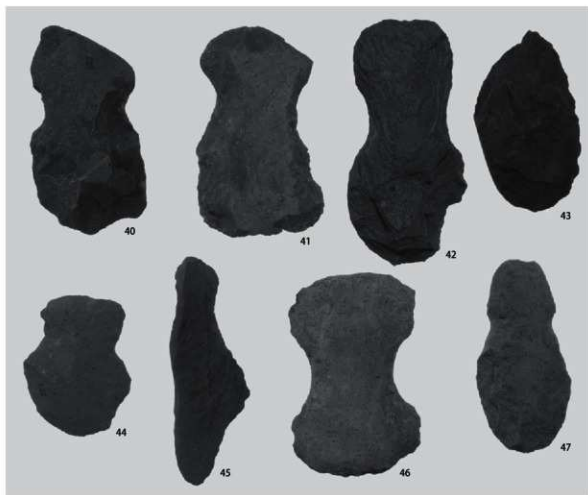
権現山遺跡各地区出土の片刃石器・スクレイパー



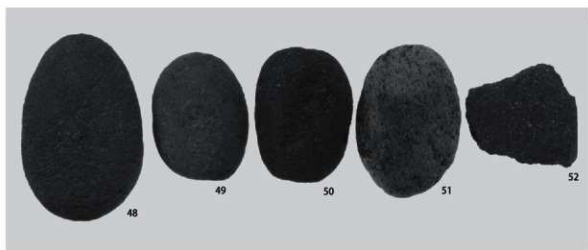
権現山遺跡各地区出土の剥片・石核



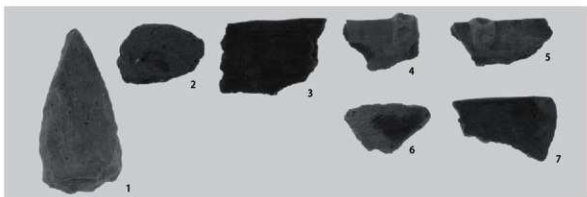
権現山遺跡各地区出土の礫器



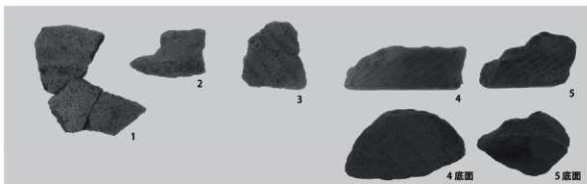
権現山遺跡各地区出土の打製石斧



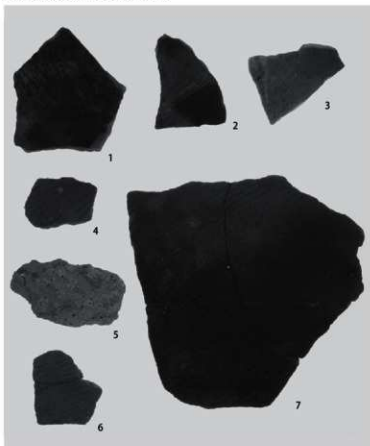
権現山遺跡各地区出土の磨石・石皿



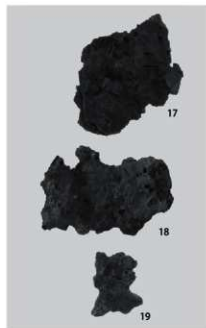
GN1区 遺構外出土の縄文土器・石器



GN1区 遺構外出土の弥生土器



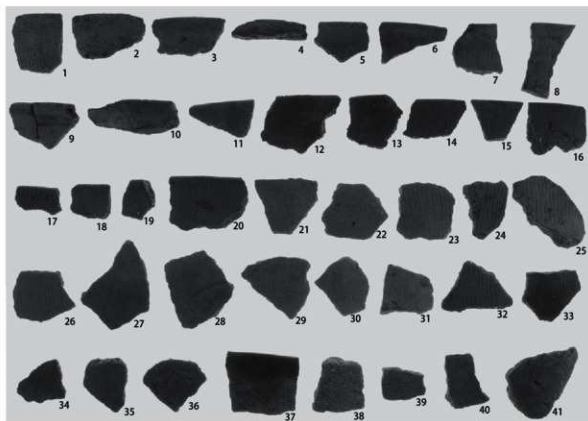
GN1区 SK-57 弥生土器



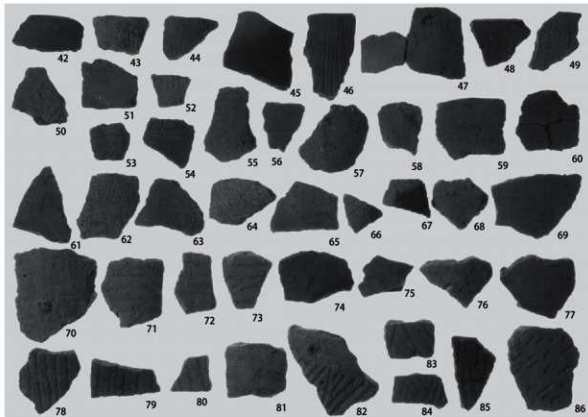
GN1区 SI-3 鉄滓



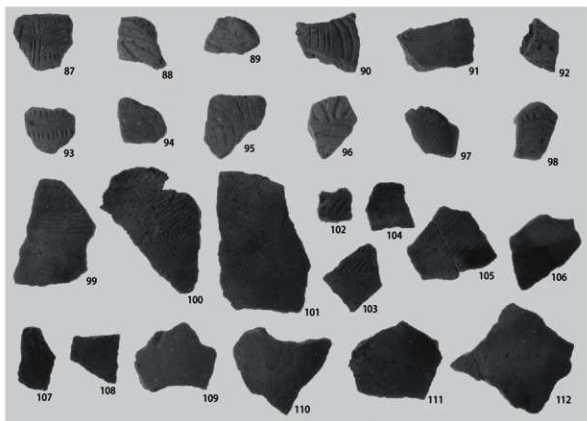
GN1区 SI-5 鉄鐵 (右はX線写真)



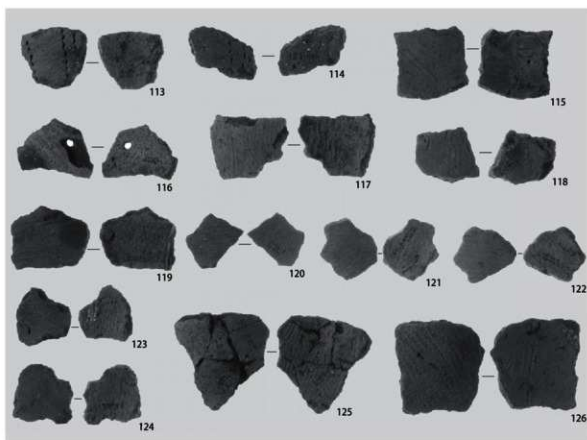
縄文土器 第1群～第2群1類



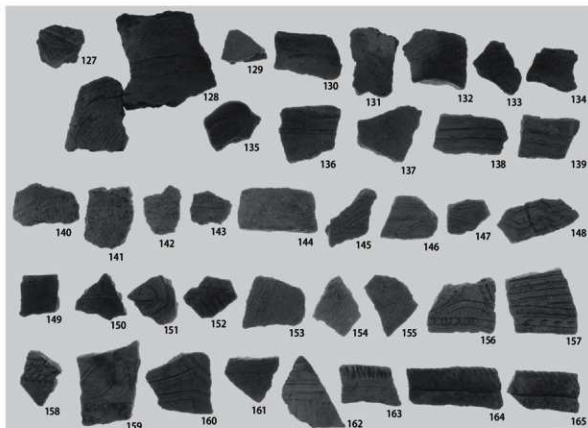
縄文土器 第2群2類1種～3種



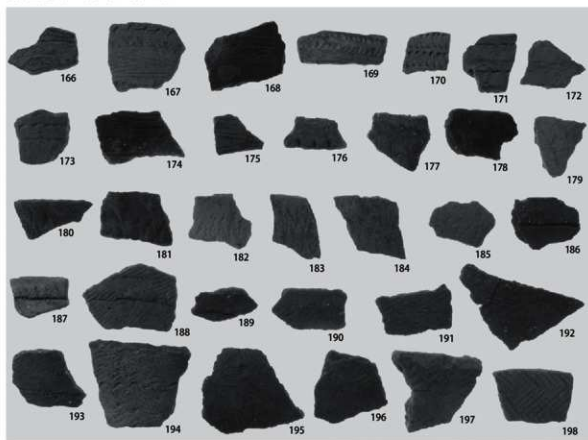
縄文土器 第2群2類4種～第2群4類



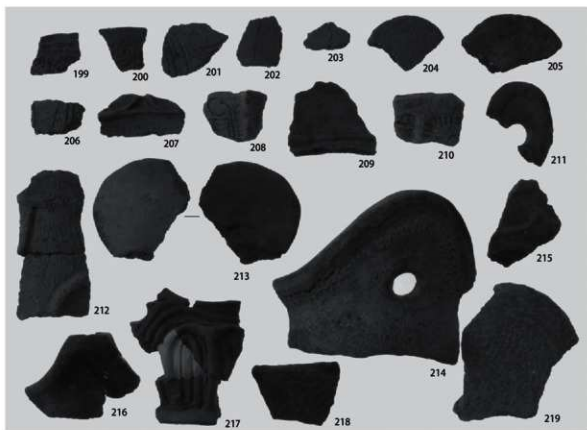
縄文土器 第3群～第4群1類



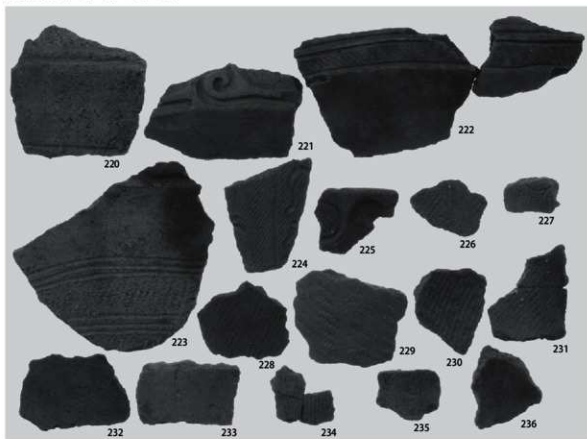
縄文土器 第5群～第7群5類



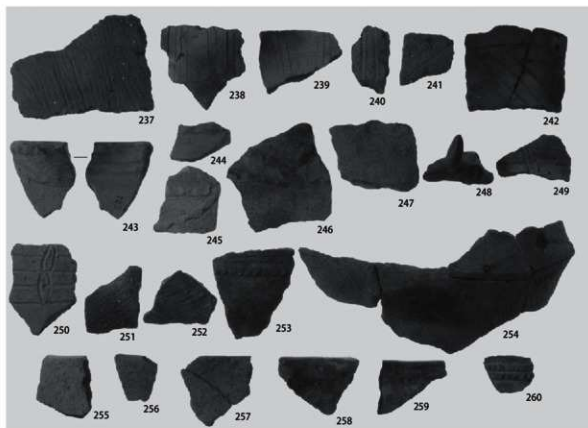
縄文土器 第7群6類～第8群



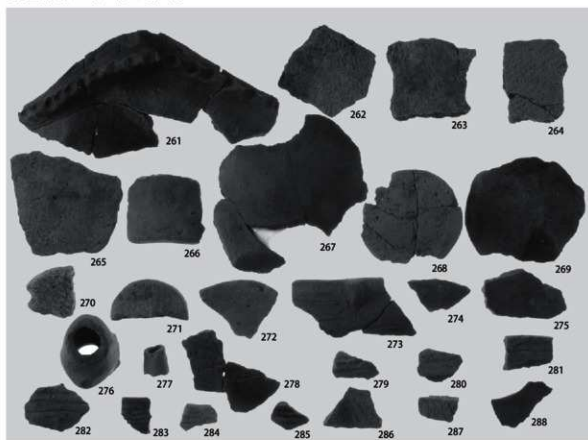
縄文土器 第9群～第11群2類



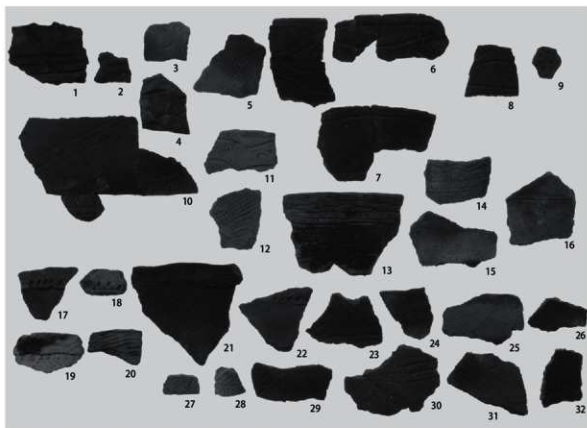
縄文土器 第11群3類～7類



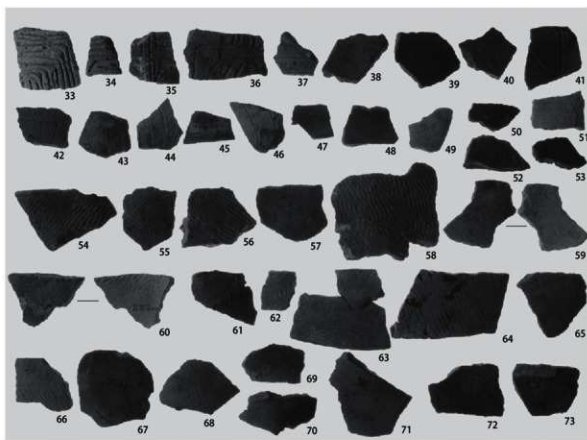
縄文土器 第12群～第13群7類



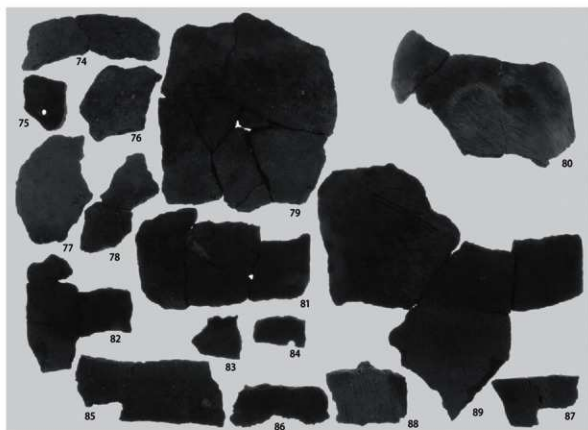
縄文土器 第13群8類～15類



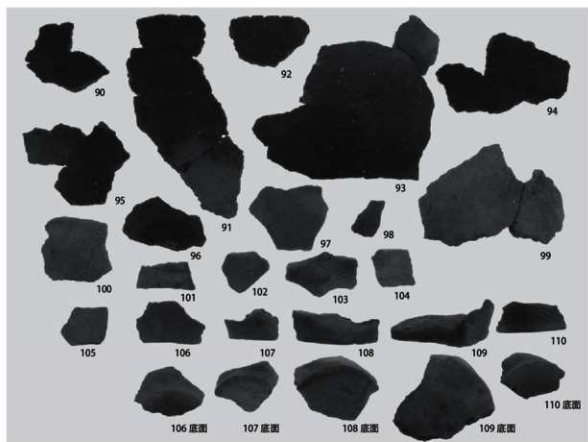
弥生土器 第1群～第5群



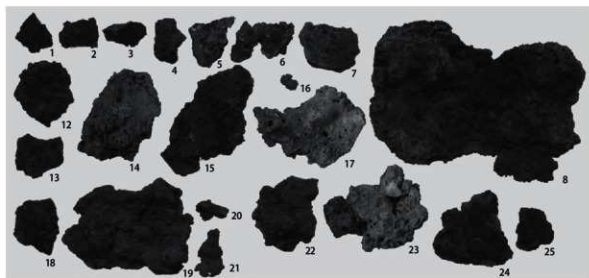
弥生土器 第6群～第9群2類



弥生土器 第9群2類～3類



弥生土器 第9群4類～第11群



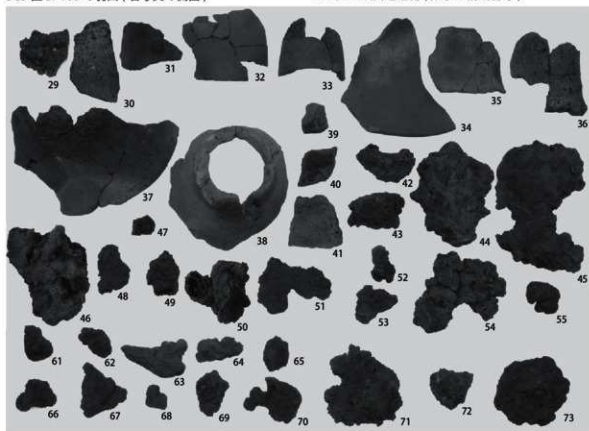
SG1 区の鉄関連遺物 (数字は構成番号)



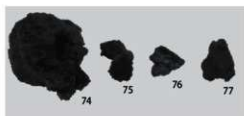
SG5 区 SI-100 の羽口 (右写真の側面)



SG5 区の鉄関連遺物 (数字は構成番号)



SG10 区の鉄関連遺物 (数字は構成番号)



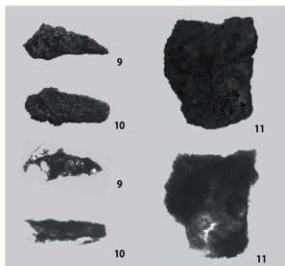
4区の鉄関連遺物(数字は構成番号)



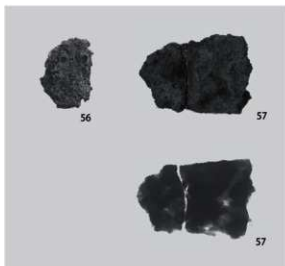
SG10区の中世鉄滓



GN1区の鉄関連遺物(数字は構成番号)



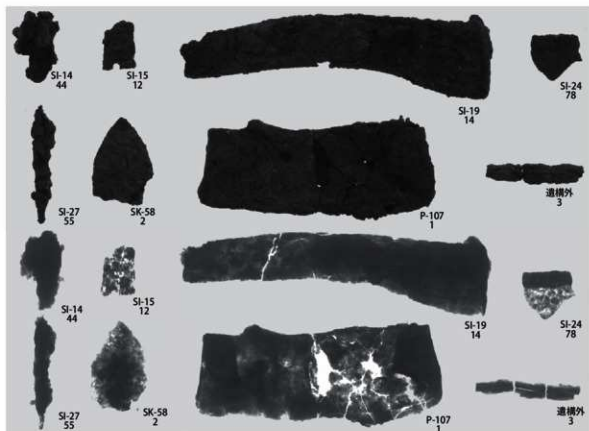
SG1区の鉄製品(下段はX線写真)



SG10区の鉄製品(下段はX線写真)



SG10区 SI-36 金床石(構成番号60)



4区の鉄製品(下段はX線写真)



SG1区の金属製品(右はX線写真) SD-37の8は中世遺物



GN1区 SI-2-1



GN1区 SI-3-7



GN1区 SI-3-11



GN1区 SI-2-11・12



GN1区 SI-3-8



GN1区 SI-3-13



GN1区 SI-3-1



GN1区 SI-3-9



GN1区 SI-3-14



GN1区 SI-3-4



GN1区 SI-3-10



GN1区 SI-3-16



GN1区 SI-3-5



GN1区 SI-3-6



GN1区 SI-4-3



GN1 区 SI-4-8



GN1 区 SI-5-14



GN1 区 SI-6-2 上面



GN1 区 SI-5-1



GN1 区 SI-5-16



GN1 区 SI-6-2



GN1 区 SI-5-2



GN1 区 SI-5-20



GN1 区 SI-6-6



GN1 区 SI-5-3



GN1 区 SI-5-20



GN1 区 SI-6-7



GN1 区 SI-5-5



GN1 区 SI-5-26



GN1 区 SI-6-9



GN1 区 SI-5-10



GN1 区 SI-5-28



GN1 区 SI-6-16



GN1 区 SI-5-11



GN1 区 SI-5-30



GN1 区 SD-24-1



2区 SI-1a-1



2区 SI-1a-1 底面



2区 SI-1a-10



2区 SI-1a-15



2区 SI-1a-15 底面



2区 SI-1a-3



2区 SI-1a-11



2区 SI-98-3



2区 SI-1a-4



2区 SI-98-3 底面



2区 SI-1a-6



2区 SI-1a-14



2区 SI-98-6



2区 SI-1a-8



2区 SI-1a-14 底面



2区 SI-98-6 底面



2区 SI-1a-24-25



2区 SI-1a-14 底面



2区 SI-98-6 底面



2区 SI-99a-1 内面



2区 SI-99a-4



2区 SX-94-1



2区 SI-99a-1



2区 SI-99a-5 内面



2区 SX-94-2



2区 SI-99a-2 内面



2区 SI-99a-5



2区 SX-94-10



2区 SI-99a-2



2区 SI-99a-6 内面



2区 SX-94-17



2区 SI-99a-3 内面



2区 SI-99a-6



2区 SX-94-18



2区 SI-99a-3



2区 SI-99a-12



2区遺構外-1



2区 SI-99a-4 内面



2区 SI-99a-12



2区 SD-51-1



4区 SI-1-1



4区 SI-2-10



4区 SI-4-9



4区 SI-1-12 上面



4区 SI-2-11



4区 SI-1-12 下面



4区 SI-2-24-1・2



4区 SI-4-11 ~ 13



4区 SI-2-1



4区 SI-3-1



4区 SI-6-1



4区 SI-2-2



4区 SI-4-1



4区 SI-7-2



4区 SI-2-3



4区 SI-4-5



4区 SI-7-3



4区 SI-2-7



4区 SI-4-5



4区 SI-7-15





4区 SI-11-9



4区 SI-12-1



4区 SI-13-2



4区 SI-11-11



4区 SI-12-1 底面



4区 SI-13-3



4区 SI-11-13



4区 SI-12-2



4区 SI-13-5



4区 SI-11-21



4区 SI-12-2 底面



4区 SI-13-14



4区 SI-11-28



4区 SI-12-3



4区 SI-13-15



4区 SI-11-37



4区 SI-13-1



4区 SI-13-16



4区 SI-14-1



4区 SI-14-27



4区 SI-16-8



4区 SI-14-2



4区 SI-14-33



4区 SI-16-10



4区 SI-14-5



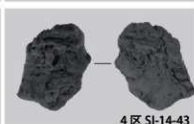
4区 SI-14-33



4区 SI-16-18



4区 SI-14-15



4区 SI-14-43



4区 SI-16-20



4区 SI-14-19



4区 SI-15-1



4区 SI-16-21



4区 SI-14-23



4区 SI-15-2



4区 SI-16-22



4区 SI-14-26



4区 SI-16-6



4区 SI-16-22



4区 SI-16-26 ~ 28



4区 SI-17-11



4区 SI-21-4



4区 SI-24-5



4区 SI-24-11



4区 SI-18-15



4区 SI-21-5



4区 SI-24-13



4区 SI-18-17



4区 SI-22-2



4区 SI-20-1



4区 SI-24-1



4区 SI-24-29



4区 SI-20-2



4区 SI-24-3



4区 SI-21-2



4区 SI-24-4



4区 SI-24-30



4区 SI-24-77 上面



4区 SI-24-77 下面



4区 SI-24-81



4区 SI-25-1



4区 SI-25-5



4区 SI-25-7



4区 SI-25-9



4区 SI-25-13



4区 SI-25-15



4区 SI-26-1



4区 SI-26-8



4区 SI-26-7



4区 SI-26-9



4区 SI-26-10



4区 SI-27-1



4区 SI-27-6



4区 SI-27-10



4区 SI-27-49



4区 SI-29-1



4区 SI-27-11



4区 SI-28-13 上面



4区 SI-29-2



4区 SI-27-12



4区 SI-28-13 下面



4区 SI-29-8



4区 SI-27-21



4区 SI-28-14 上面



4区 SI-29-9



4区 SI-27-23



4区 SI-28-14 下面



4区 SI-29-13



4区 SI-27-29



4区 SI-28-15 上面



4区 SI-29-13



4区 SI-27-41



4区 SI-28-15 下面



4区 SI-29-22



4区 SI-30a-2



4区 SI-32-1



4区 SI-59-2



4区 SI-33-3



4区 SI-59-3



4区 SI-31-2



4区 SI-33-5



4区 SI-59-4



4区 SI-31-5



4区 SI-59-5



4区 SI-31-15



4区 SI-33-7



4区 SI-59-7



4区 SI-31-16



4区 SI-59-12



4区 SI-31-21



4区 SI-33-11



4区 SI-59-14



4区 SI-59-15



4区 SI-59-41



4区 SI-74-1



4区 SI-59-19



4区 SI-59-44



4区 SI-74-2



4区 SI-59-25



4区 SI-59-44



4区 SI-74-3



4区 SI-59-26



4区 SI-59-50



4区 SI-74-4



4区 SI-59-34



4区 SI-59-50



4区 SI-74-5



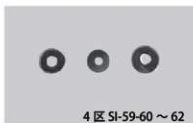
4区 SI-59-40



4区 SI-59-59



4区 SI-74-6



4区 SI-59-60 ~ 62



4区 SI-74-7



4区 SI-74-8



4区 SI-130-4



4区 SK-84-4



4区 SI-74-11



4区 SI-130-5



4区 SE-72-1



4区 SI-74-12



4区 SX-23-1



4区遺構外-1



4区 SI-74-14



4区 SD-143-4



4区遺構外-2



4区 SD-143-5 内面



4区遺構外-4



4区 SI-74-17



4区 SD-143-5



4区遺構外-5



4区 SI-76-1



4区 SK-104-4



SG1区 SK-125-1



SG1区 SI-1-5



SG1区 SI-5-18・19



SG1区 SI-1-6



SG1区 SI-6-3



SG1区 SD-95-10 ~ 12



SG1区 SI-1-10



SG1区 SI-6-5



SG1区 SI-3-4



SG1区 SI-6-6



SG1区 居館周辺攪乱-1



SG1区 SI-5-1



SG1区 SI-6-10



SG1区 SI-1-2



SG1区 SI-5-5



SG1区 SI-6-15



SG1区 SI-1-4



SG1区 SI-5-12 ~ 15



SG1区 SI-7-39 肩部



SG1 区 SI-7-44・45



SG1 区 SI-8a・b-3



SG1 区 SI-10-14



SG1 区 SI-13-12



SG1 区 SI-13-15



SG1 区 SI-8a・b-23



SG1 区 SI-12-6



SG1 区 SI-17-1



SG1 区 SI-8a・b-24～27



SG1 区 SI-13-1



SG1 区 SI-18-8



SG1 区 SI-10-13



SG1 区 SI-13-4



SG1 区 SI-32-2



SG1 区 SI-13-5



SG1 区 SI-32-8



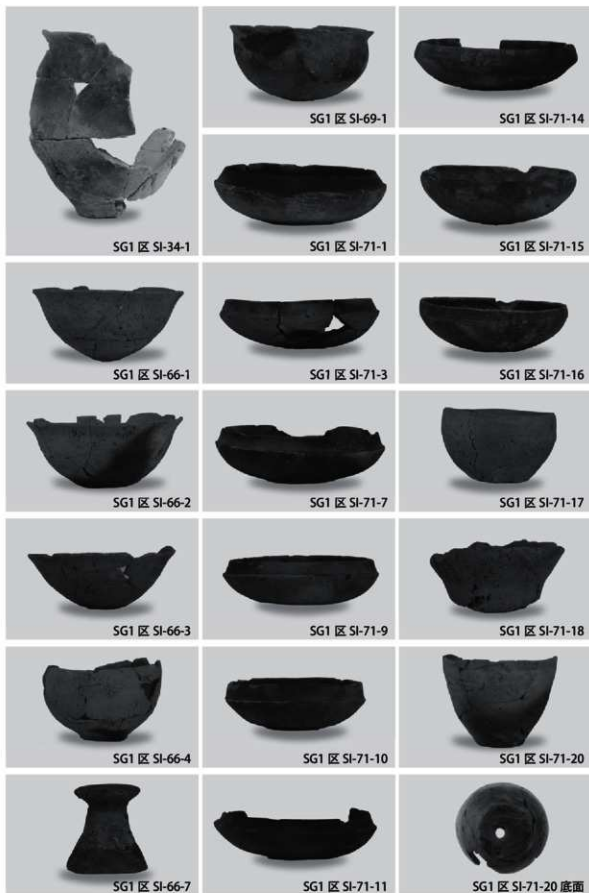
SG1 区 SI-10-20



SG1 区 SI-13-11



SG1 区 SI-34-7・8





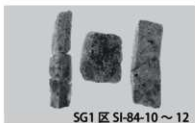
SG1 区 SI-71-30



SG1 区 SI-89-8



SG1 区 SI-174-9



SG1 区 SI-84-10 ~ 12



SG1 区 SI-89-14



SG1 区 SI-174-12



SG1 区 SI-85-1



SG1 区 SI-89-19



SG1 区 SI-174-30



SG1 区 SI-89-2



SG1 区 SI-127-1



SG1 区 SI-174-31



SG1 区 SI-89-4



SG1 区 SI-174-1



SG1 区 SI-179-1



SG1 区 SI-89-7



SG1 区 SI-174-1



SG1 区 SI-179-4



SG1 区 SI-179-4 底面



SG1 区 SD-37-7



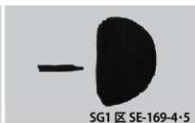
SG1 区 SE-169-3



SG1 区 SK-104-2



SG1 区 SD-37-9



SG1 区 SE-169-4・5



SG1 区古墳時代の遺構外-6



SG1 区 SI-155-1



SG1 区 SE-169-6



SG1 区古墳時代の遺構外-7



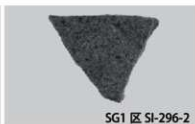
SG1 区 SI-296-1



SG1 区 SK-172-1



SG1 区古墳時代の遺構外-8



SG1 区 SI-296-2



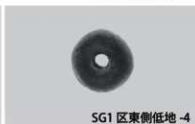
SG1 区東側低地-3



SG1 区 SD-37-2



SG1 区 SE-169-1



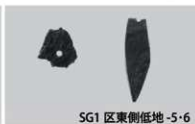
SG1 区東側低地-4



SG1 区 SD-37-6



SG1 区 SE-169-2



SG1 区東側低地-5・6



右上部：SG1区 1997年9月30日撮影

右下部：北関東自動車道路調査A区 1997年10月2日撮影

右下端：北関東自動車道路調査A区 1997年5月29日撮影

報告書抄録

ふりがな	とうや・なかじまきくいせきぐん 10 こんげんやまいせきほふ・すぎむらいせき
書名	東谷・中島地区遺跡群 10 権現山遺跡北部 (2～4区・SG1区)・杉村遺跡 (GN1区)
副書名	都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	10
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第331集
編著者名	内山敏行 (編)、後藤信祐・谷中隆・亀田幸久・内山敏行・大澤正己・穴澤義功
編集機関	財団法人とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL 0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 財団法人とちぎ生涯学習文化財団
発行年月日	西暦 2010年3月24日 (平成22年3月24日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 道跡番号	北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
こんげんやま 権現山	とちぎけん、うつのみややし、とうやまち 栃木県宇都宮市東谷町 あきたての・あびさすくら 字立野・字杉村、 すなまふあまふら・あびさすくら 砂田町字吉原・字原田	09201 455	36度 29分 1秒 (世界測地系)	139度 54分 17秒 (SG1区) (世界測地系)	2区 19970508 ～ 19971008 3区 19980529 ～ 19980609 4区 19990913 ～ 19991227 SG1区 19960412 ～ 19970328	24,300 2,400 4,300 7,800	東谷・中島 土地区画整 理事業に伴 う事前調査
すぎむら 杉村	とちぎけん、うつのみややし、すなまふ 栃木県宇都宮市砂田町 あきたての・あびさすくら・あびさすくら 字原田・字上谷田・字吉原、 かわらうら・かみのかやまち 河内郡上三川町 おおむら・あびさすくら 大字磯岡字コムナセゴ	09201 223	36度 29分 15秒 (GN1区) (世界測地系)	139度 54分 20秒 (GN1区) (世界測地系)	GN1区 19960410 ～ 19961024	18,400	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
権現山 (2区・4区・ SG1区)	集落	旧石器	土坑1 (前期)	尖頭器 縄文土器、石鏃、片刃石器、スクレイパー、石鏃、剥片、 石核、礫器、打製石斧、磨石 (凹石)、石胆	早期～晩期の土器出土
	弥生		弥生土器・アモリ方式石鏃	弥生土器、須恵器、焼酎土甕、石製品 (段造品・管玉、 白土・初瀬・粘板瓦割片)、土玉 (丸玉・貫玉)、 耳環、鉄斧・鎌・鏃・方形板瓦片、編物石、砥石、 台石、餅石、鉄斧、石鏃	前期末・中期・後期 居館の周囲の集落 墓場?も1基あり
	古墳		外郭溝1・堀1・横列1・掘立柱建物1・ 不明遺構1・柱状土坑61	土師器、須恵器	方形区画溝と堀に囲まれた 内部に掘立柱建物
	居館	古墳	道路遺構1 (明透報告済)、溝1		道路遺構は推定東山道
	集落	古代 中世	外郭溝2・井戸2・溝2・土坑2	白磁、常滑産陶器、在地産こね鉢、灰付木簡、火打 釜、曲物箱	13～14世紀中心、 区画溝内に外郭遺構と井戸
		近世	溝4		
	時期不明		掘立柱建物4、井戸1、溝14、集落 土坑1、土坑190、柱状土坑121		
杉村 (GN1区)	集落	縄文	土坑1 (後期)	縄文土器、片刃石器 (打製石斧)	早期～晩期の土器片出土
	弥生		弥生土器		後期の土器片出土
	古墳		外郭建物5、土坑1	土師器、須恵器、鉄鏃、鉄斧	
	奈良		外郭建物1	土師器、須恵器	
	時期不明		溝3、土坑45		

要約	田川の東岸で、開所谷をはさんだ西側に権現山遺跡、東側に杉村遺跡が所在。権現山遺跡の旧石器は水晶製尖頭器1点。黒沢期の土坑と燃糸文 (井草・大丸・夏島・標痕文)・沈線文 (三戸・田戸下層・田戸上層・出流原)・条痕文・黒沢・諸磯a・b・浮島・興津・前期末・五領ヶ台・阿玉台1～IV・加曽貝EI～II・堀之内1～2・加曽貝B1～3・曾谷・安行1・大洞BC～A式土器が出土。弥生土器は前期末・中期・後期 (二軒屋式・樽式)。古墳時代中期の居館は長98mの東辺の中央～北部を調査。古墳中期～終末期の集落は、中期の畿治遺構2棟を含む206棟を調査し、北半部84棟を今回報告した。耳環を1対出した土坑 (墓場?)も所在する。中世は不整五角形の区画溝内に竪穴遺構2、井戸1、土坑1、溝1が所在する。 杉村遺跡は、縄文時代は早期条痕文系と後期安行2式土器、弥生時代は後期二軒屋式期の土坑を報告。古墳時代は前期2棟と後期3棟を調査し、古墳前期末～終末期集落 (合計72棟)の北縁部にあたる。奈良時代初めの竪穴建物1棟も調査。
----	--

東谷・中島地区遺跡群埋蔵文化財調査報告書一覧

- | | | |
|---|---------------------|--------------------|
| 1 「磯岡遺跡 (1区)」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第 229 集 | 1999 (平成 11) 年 3 月 |
| 2 「砂田遺跡 (1区・2区・3区)」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第 265 集 | 2002 (平成 14) 年 3 月 |
| 3 「推定東山道関連地区 (権現山遺跡 SG1 区 杉村遺跡 SG1 区 磯岡北遺跡 SG3 区・SG4 区・SG6 区・SG7 区・SG8 区・SG11 区・SG13 区・SG14 区 西刑部西原遺跡 2 区・6 区・7 区)」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第 274 集 | 2003 (平成 15) 年 3 月 |
| 4 「琴平塚古墳群 (西刑部西原遺跡 1・2・6 区)」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第 283 集 | 2004 (平成 16) 年 3 月 |
| 5 「立野遺跡」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第 290 集 | 2005 (平成 17) 年 3 月 |
| 6 「磯岡遺跡 (2～7 区)」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第 292 集 | 2005 (平成 17) 年 6 月 |
| 7 「磯岡北古墳群 (磯岡北遺跡 SG12 区・SG16～18 区)」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第 299 集 | 2006 (平成 18) 年 9 月 |
| 8 「砂田遺跡 (4～6・18・19・23・24 区)」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第 305 集 | 2007 (平成 19) 年 3 月 |
| 9 「中島笹塚古墳群・中島笹塚遺跡 (1～8 区)」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第 311 集 | 2008 (平成 20) 年 3 月 |
| 10 「権現山遺跡北部 (2～4 区・SG1 区)・杉村遺跡 (GN1 区)」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第 331 集 | 2010 (平成 22) 年 3 月 |

栃木県埋蔵文化財調査報告第 331 集

東谷・中島地区遺跡群 10

権現山遺跡北部 (2～4 区・SG1 区)・杉村遺跡 (GN1 区)

(第2分冊)

—都市再生機構による東谷・中島土地画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

発行 栃 木 県 教 育 委 員 会

宇都宮市塩田1-1-20

TEL 028 (623) 3425

財団法人とちぎ生涯学習文化財団

宇都宮市本町1-8

TEL 028 (643) 1011

平成 22 年 3 月 24 日発行

編集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団

埋蔵文化財センター

下野市紫474番地

TEL 0285 (44) 8441

印刷 株式会社 泰明グラフィクス
